

享樂剎那に蒸気幻想譚

大菊寿老太

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

20世紀初頭の少し違う歴史を歩んだヨーロッパ。

その洋上に浮かぶ島、ウルベスにある異常発達した蒸気機関の産物である超機関アークロジー、アーカム。

物語は実力行使請負業を生業とする男、サイファー。

類い希な美を持つ少女、フレデリカ。

二人が出会ったとき、物語を紡ぐ解析機関は歯車を唸らせる。

——これは享樂の話。

——これは刹那の話。

——偽史に存在せし寓話で。

——《彼方なるもの》の光景の一つ。

——一でもなければ、全でもない。

——0へと向かう幻想譚。

小説家になろう、カクヨム、でもマルチ投稿いたします。

あちらの方が縦読みがしやすいかと。後書きと前書きがないので。

目次

日常粉碎カタストロフィ

始まりは没落で幕を切り | 1

展開は事件の二オイを帯びて | 18

戦闘は蹂躪のように | 37

見舞いはふれあいを伴って | 60

想いは同衾で芽生えて | 81

教鞭を取るものは来訪を予期して

100 | 120

酒宴は血生臭さにあふれて | 120

戦いの前夜は和やかに射撃練習をして

150 | 150

戦を誓いし乙女は黄金を手に入れ

182

終焉、日常と孤独を巻き添えにして

213

人類昇華セラフィムプロジェクト

下層、怪物は這い上がりて笑う

243

寒空、羽ばたく象徴は汚されて

267

硝煙、守り手の住処を満たして

292

魔域、悩める乙女は次元を手繰る者に

迎えられ

悪人、黄金の瞳は夢界を捉え | 346

319

紫電、天よりの御使いを貫き	—	377	621
狂気、忌々しい女は突然に	—	402	進撃、彼の帰還を一途に求め
想起、心の闇は弾け飛んで	—	428	Kiss 風と共に歩むものは、もう
殲滅、覚悟と勇気をいただいで	—	456	いない
勇猛、鋼鉄の町を銃火に包み	—	488	蒸気伏魔都市マドネスプリンス
血戦、死の舞踏を鋼と共に	—	515	Flight 大英帝国へは空を渡り
無限、老碩学の夢は万象を産み落とし	—	539	Happiness 殴り込みには黄
て	—	566	金の二挺を
魔戦、正気の薄氷を打ち砕き	—	593	Action 伏魔の領域は地の底に
逃避、決意を支えるのは新たな力	—	593	Stampede 死も恐れぬ自由の
対決、魔戦は黒き幻想を目覚めさせ	—	778	男

		Match	霧中より赫き三眼は出で	802
		Holiday	硝煙臭いファッション・ショー	832
		Dream	眞実は可憐な唇より紡がれる	857
		Hug	蛮勇二人、死闘はここに決す	881
		Weapon	兵器王のお誘い	907
		Crack	狂える者は呼び出して待つ	930
		Fall	地下と地上に蠢くもの	1099
		Slash	貴公子の薄氷は溶けかけ	1075
		Smokin	銃弾と共に駆け抜けて	1052
		Attack	空振りに終わらない	1026
		Reach	内緒の話は中華麵を嗜んで	999
		Tag	刃鎖で紡げ、奇妙な二人	976
		Escape	這い上がる不死身の男	952

W e a k e n i n g 少女は無力な

り、鋼鉄は獣たちを追い詰め ー

1124

A w a k e n i n g 激化する戦い

1149

C r u s h 力を以て淑女よ巨人を討

1174

て

日常粉碎カタストロフィ 始まりは没落で幕を切り

——僕には寄り添うことも出来はしない

——近付くだけで傷つけてしまう

——だけど、お前を守ってやるくらいのことなら

——それぐらいなら、望んでも、いいだろう？

フレデリカ・エインズワースという女は少しばかり前に天涯孤独の身となった。数日ほど前に祖父が病で他界した。両親とは、あちらの方から縁を切られたも同然の仲で、その原因が自分でも良く分からない自分にある何かというだけであった。

加えて祖父には借金があった。自営業のレストランを切り盛りする上で、やむなく借りた分の利息が大きかったらしい。”区画”と自宅兼店舗を手放してようやくやく返せる金額だった。

これだけ聞くとメロドラマの主人公のようだが、その代わりに彼女は語る言葉が存在しないほどに見目麗しい人間だった。腰に届く長さの色素の薄い金髪は天上の美姫が金と銀から直接紡いだようで、曇りなく透き通る万年雪を固めた病的に白い肌、やや大

きめなアーモンド型をした黄金の左目とアイオライトの右目から成る虹彩異色は神秘的な印象を与える。それらを数千分の一ミクロン単位でのバランスで並べるのに、全知全能の神は二週間以上も腐心したに違いない。ただ見た目だけなら十代後半にやつと見える程度で、身長は一六〇センチと少し。実際は飲酒も喫煙も出来る年齢なのに。

この二〇世紀初頭の大西洋上に浮かぶ島、ウルベスに存在する超機関アークロジ、アークムは神に見捨てられたといわれるほどに治安が悪い。現行犯を押さえられなければ問題ない、という意識が人々の根底に根付いているのだ。

フレデリカの住まう第十二層の第二十四区画はさほど酷くはないが、敏感な人間であれば渦巻く悪意を感じ取れる。誰もが生物の三大欲求と金銭欲に名誉欲、その他諸々に忠実に生きているのだ。他人を食い物にして。

あらかたの商売道具や金銭的な価値があるインテリアを売り払って、ガラガラになった店内はシツクなアイボリーの壁紙のおかげで、未だに落ち着いた雰囲気を保っていた。

カウンターだけは残っていたから、長い夜を過ごすためにグラスとワインを置いた。朱唇が透き通った器に触れて、その隙間から真紅の液体が流れ込んでいく。芳醇な香りと深いコクがフレデリカを満たしていく。

少しクラリときてグラスを置いたのと、店の入り口からドサツと音が聞こえたのは同

時だった。

何かヘタ打ったギャングかチンピラの類が負傷して、この店で行き倒れたのだろうか。そんな突拍子もない推測が事実となるのも、このアーカムの常識のようなものだ。

護身用にトリガープルを数キロほど軽くしたレミントン・ダブル・デリンジャーを取り出した。射撃訓練は幾度となく、居住区の護身術セミナーで受けている。おまけにアーカムだけではなくウルベスの技術は、蒸気機関や科学の本場であるイギリス本土を超えるオーバーテクノロジーの面がある。

その産物である四十一口径のリムファイア型炸裂徹甲弾が二発、フレデリカの指がケツを叩くのを待っている。厚さ八ミリの鋼鉄の板さえ貫通し、内側からピンポン球ほどの穴を開ける爆発を起こす。

おそるおそる黒檀で出来た分厚い扉を開けて、デリンジャーの引き金を激発寸前で止めるという高等技術を行った。安全性には欠けるが、その分即座に弾を撃てる。

六段ほどの石段の横に、そいつはいた。

とてつもなく大きな男だった。身長は二メートルは確実に超えている。

「よお」

顔見知りの人間に話しかけるような、砕けた口調と言葉に引き金にかけた中指の力がゆるんだ。体軀から低く野太い声を予想していたが、すつきりとした落ち着きのある声

だった。

「あの……………誰でしょう、か？」

「ああ……………僕は実力行使請負業なんて、物騒な商売をやつてる。名前は恨みを買ひすぎるせいで教えられん。それでアンタ、ここの人かい？」

「そ、そう……………です、けど」

生来の人見知りが災いして、しどろもどろに言葉が出ない。それに拍車をかけるのが男の風体だった。簡単に言えばガンマン気取りやレンジャーかぶれと揶揄される、そういう格好であった。

灰色のテンガロンハット、やや色褪せたジーンズ、白のシャツプスにゴツイ黒のブーツ、灰色のロングコートが非情に目立った。前を開けているロングコートからは皮のベストとガンベルトが覗いており、鈍い輝きを持った何かが見えたが見えないことにした。そういう血生臭いものを好むような趣味は持ち合わせていないのだから。

おまけに男はフレデリカの苦手なタイプであった。というより異性という存在があまり得意ではなく、どちらかというと女性同士の友情がほとんどであった。一応言つてはおくが、フレデリカは同性愛者ではない。

目の前の男は、女に甘言睦言を囁いてからかうタイプだ。幼少期には何度も泣かされたために、初対面でも、このタイプなのかを見極める慧眼を持っていた。

精悍な二枚目半の男といえればそれだけだが、橙に近い赤が混じった茶髪は肩甲骨のあたりまで伸び、銀灰色の瞳がフレデリカのオッドアイに映る。鼻梁のラインも整っており、眉も柳眉といふべき形の良さだ。おまけに、この手の男裏で生きる男にありがちな目つきの悪さがない。顔と体から推測した年齢は二十代か三十代そこそこというあたりか。

「勝手に行き倒れていて悪いけど、少し匿ってくれないか？」

突然の申し出に面食らった。祖父を失って悲しみからようやく立ち直ったばかりで、両親からは絶縁状に近い手紙を受け取ったというのに、未だに慣れない男——それもこれほどの二枚目半の巨漢——に凶々しいと蹴つ飛ばしたくなる頼みをされた。

だが——不思議と放っておけず、男を無理矢理に立たせると、

「ここに隠れていてください」

今は使われていない、レストランに使う食材の保存庫に連れて行った。やや狭苦しいところかもしれないが、この保存庫はこう やって使うことを前提として作っていたことを、亡き祖父は笑いながら豪語していた。

そしてフレデリカは調理台の下にデリンジャーを二挺携えて、店中の明かりを消して息を殺した。

十分ほどしたところであろうか。外が騒がしくなってきた、複数の男の声が聞こえてきた。出てこい、と叫びながら虚空に発砲している。

心臓の音が大きくなっていき、息が荒くなっているのを感じた。これほどに綱渡りなのは勘弁願いたい。

「ヤツめ、よくもボスを殺りやがったな！」

「おまけに仲間もほとんど皆殺しだ！　ボスの奥さんに子供まで殺つちまうなんて、アイツは人間じゃねえ！」

「落ち着いて探せ、アイツに最新の四十五口径ライフルをブチ込んだんだ。絶対に傷を負っているはずだ」

「そうだよな、だがヤツは自分を狙った人間は、確実に殺す人間だ。もしかしたら、どこかで俺たちの隙をうかがって……………」

「なら探せ、クズ共！」

ドデカイ銃声が闇夜に響き渡った。拳銃が出せる音ではない。確実にライフルか散弾銃であろう。

バタバタとした大きな足音が店の周りを、しらみつぶしに探し回っていく。どこかでフェンスを蹴り倒す音が聞こえた。どうにも彼らは気が立っているらしい。

五分後、覚悟していた事態が起こった。

乱暴に店の扉が叩かれる。黒檀製の頑丈な扉が、壊れそうなほどに激しく揺さぶられている。

おい、と仲間を呼ぶ声がした。二人掛かりか三人掛かりの体当たりで、ぶち破ろうという心積もりなのか。

激烈な体当たりではなかった。銃声とともにドアがボロ切れのように吹っ飛んだ。ずいぶんと強力な弾薬を使っているらしく、威力の余波が五メートルも離れたカウンターにヒビを入れた。

「——っ！」

デリンジャーを握る手に力がこもった。

長い沈黙が続いている。足音一つしない現状に、妙な恐怖があった。足音を殺すということなんて、このアーカムでは一週間で猫も杓子も身に付ける。

男たちは未だに店の仲を探しているのだろうか。

足音で察することは出来ないから、かすかに聞こえている息遣いで推測する。

店に男たちが押し入って、そろそろ三〇分が経とうとしていた。

「もう良いだろう。次を探すぞ」

胸をなで下ろして、のろのろとカウンターから這い出たときだった。

「ハイ！ 可愛い仔猫キティが隠れていたあ」

レバーアクション式のライフルが、フレデリカのこめかみに突きつけられた。

「いませえ！ もしかしたらサイファアの野郎を匿っているのかもしれない」

サイファーとは食料保存庫に隠した、あの大男のことだろうか。

デリンジャーを奪われて、無理矢理腕を引つ張られると、床の上に押し倒された。薄桃色のネグリジエはあっけなく引き裂かれてしまい、その下にあつた下着が露わになつてしまう。

顔に衝撃が走つた。思い切り殴られたらしい。唇が切れたのか、血の味がした。

「オイ、二メートルぐらいある、デケエ男を見なかつたか？」

フレデリカは沈黙で返した。

「答えろオ！」

ライフルの銃床で殴られた。

痛みが過ぎるあまり、泣くことも悲しみも、全てが封じられたようであつた。

引き金の用心鉄を延長したレバーを動かして、男は銃弾を装填した。着込んでいる茶色のベストに、フルサイズのライフル弾を収めた箱型弾倉がいくつもあつた。

オイ、とだけ言うと、後ろで控えていた男たちが一斉にベルトを外し始めた。

「輪姦まわしてから、聞くことにするか」

緊張がフレデリカの身に走つて、慌てて両足を閉じた。陰火の炎を燃やす男たちが、股を広げようと躍起になる中、思わず涙が溢れてきた。

——なんで、なんで、こうなるの。

世の理不尽さと運命の数奇さに齒噛みする。

フレデリカの両膝にかけられた手が、最後の抵抗を陥落させようとしたときだった。

——ズブリ

目の前で腰を振ることしか頭がない、野獣と化した男の胸から生えているのは、鈍く輝く細身で片刃の湾曲した刀身。

その根本から向こう側、男の背後に立つ存在。

刃が抜けたかと思いきや、剣が首を一閃した。すぐに首は落ちずに朱い線だけが残ったまま、男は硬直したようになっていたが、朱線から鮮血が噴き出たかと思えば、フレデリカの腹に首が落ちて、全身が朱く染まった。

「サイファー……」

ライフルに茶色のベストを着た男が、振り向きつつ絶叫した。

ロングコートにテンガロンハットといういでたちからは似つかわしくない、極東の島国である日本が生み出した最高峰の刃物というカテゴリに分類される、日本刀という武器を持っていた。刃渡りは一五〇センチを下らない、野太刀と分類される大きさであった。

銀色に輝く鍔と、赤銅の柄頭の彫金を見れば、この刀を打った職人の魂といえるものが伝わってくる。それはズボンのベルトにある黒塗りの鞘も同じで、どういうわけか東

洋の龍を象った彫刻を施し、表面は鉄拵えであった。

芸術品と実用品を兼ね備えた、極東の英知をまざまざと、この刃の全員が見せつけられていた。

「流石に見ちゃいられねえぞ」

その銀灰色の双眸は、鮮血にまみれたフレデリカに向いている。

「悪いね、危ない目に逢わせちゃまって。いつか埋め合わせをさせてもらうからな」

さて、と呟くとサイファーは男の方を見た。

踏み込んだ男たちは一人減って四人となっていたが、闘志だけは消えていない。むしろ強まっているように見える。

ライフルを持つていた男はともかく、残りの男たちもウェブリー・リボルバー、コルトM1860、ボーチャード・ピストルを抜いた。特にM1860を持つていた男は撃鉄を起こしながら抜いたらしく、あとは引き金を引くだけだった。

——銃声はなかった。

金属薬莖をえるように改造された、四四口径のリボルバーが地面に落ちたときに、暴発も同然に発射されてカウンターを穿った。

早撃ちの体勢を維持したまま立ち尽くす男の首から、鋭く尖った刃が突き出ていた。脊髄反射も考慮して刃を寝せて刺し貫いたのは、見事な手腕というべきだろう。

剣を払って首を切りながら刃を抜くと、払いの線上に立っていた男に銃火が見舞われた。刀を握っている右手とは逆の左手に、えらく攻撃的な意匠の自動拳銃が握られていた。白銀に輝くガンシルバーのそれは数年前にコルト社が開発したというM1911をベースに改造したのだろうか、いや原形はほとんど留めていない。アーカムの先端技術が生み出したスパイク付きの銃口抑制器を取り付け、全長は六〇センチに迫るほどだが、この大男が使うには妥当な大きさに思えてくる。

銃火を見舞われた男は頭を跡形もなく吹き飛ばされ、あたりに鮮血と脳漿を撒き散らして絶命していった。巨銃の排莖口から出てきたのは、紛れもないライフル用の四五―七〇ガバメントである。が、全長六四ミリに迫る大型ライフル用弾薬がひどくマツチしているように感じられた。遊底の後退は薬莖の長いライフル弾のためか、普通の自動拳銃とは比べものにならないほど長かった。

雄叫びと共に別の男が持つウエブリー・リボルバーが火を噴いた。四五口径の弾丸はサイファアの心臓へ一直線のはずだったが、長すぎるといえる日本刀が一瞬だけ霞むと、振り抜かれた位置で止まっていた。足下には斜めに切られた銃弾が落ちている。

もう一度、刃が振り抜かれて、銀色に輝き精妙なエングレーブを刻んだりリボルバーが、射手の手ごと床の弾丸に寄り添うように落ちていく。

それが地面に落ちる前に、射手の上半身と下半身は泣き別れた挙げ句、上半身は首ま

で銃弾によつて奪われた。四体が乱切りにされて、血の海に沈んでいる。「こつちを見ろオ！」

サイファアの大柄な体軀がクルリと回つた。

「ガキを人質に取つた。さあ、どうする？」

「……………ガキじゃないと思つぜ」

「どうするつて聞いてんだ！ こつちはよオ！」

ボーチャード・ピストルの男がやたらと高い声でわめき散らす。そのたびに腕に力が込められるのか、首のあたりを腕で押さえられたフレデリカは苦しそうに呼吸している。

気付くとサイファアの後頭部にもライフルが突きつけられていた。

チエック・メイト

「王 手だ」

「あそこで人質取つてるヤツより、君は幾分かマシかもね」

飄々とした態度にボーチャード・ピストルの男が怒りを露わに、フレデリカの髪を掴むや、銃把で殴りつけた。

三発も殴られた彼女の顔には、最悪の場合は痣の一つは残るだろう。

「待つてろ」

サイファアの身体が一気に沈んだ。

「すぐに終わる」

言い終わったときには状況は帰結していた。

やったことは迅速の一言につきる。足払いでもやるように、日本刀の一閃で男の胸を両断したかと思えば、その勢いを利用した間髪入れずにボーチャード・ピストルを持った男の眉間を吹っ飛ばし、この世からもおさらばさせてしまった。

それだけのことであったが、ボーチャード・ピストルの男が脊髄反射で引き金を引けばアウトだ。それを成し遂げたのだから、サイファアの速さは人間では捉えられぬ領域になるのであろう。最速であろう反射行動さえ超えるほどに。

そんな圧倒的で荒唐無稽な存在が、フレデリカにはたまらなく頼もしい存在に映った。

鞘に長い刀を納めて、膝を超える丈のコートのどこかに拳銃を収めると、サイファアがフレデリカのもとにしゃがみこんだ。

「大丈夫か？　って僕が聞けることじゃないか。ほとんど僕のせいだ」

「……いえ、私が断つていれば良かったんです」

「いや、男というものは自分のケツは自分で拭くべきだったんだ。それなのに他人に頼るなんてどうかしてたよ」

人一倍大きなサイファアの手が、腕が、力強くフレデリカを抱え上げる。

突然のことに戸惑っていたが、

「腰が抜けて立てないんだろ」

事実を指摘されて沈黙した。鮮血を全身に浴び、首が落ちる様を見たせいか、知らない間に腰が抜けていた。感覚的には下半身が痺れて冷え切ったように感じている。

「お望みの場所まで運んでやる」

「そ、そこまでしてくれなくても……………」

「床を這い回りながら動き回るなんて、みっともない姿は英国淑女にあるまじき振る舞いじゃないか？」

そう言われてフレデリカは沈黙した。色々と生き汚いアーカムの女というより、彼女自身はお淑やかな英国淑女の振る舞いをしている。なにしろ生まれはウルベスではなく、超機関都市ロンドンなのだから。

午後のティー・タイムを楽しみ、決してアーカムの風俗には染まってないと、自分の基準では信じている。

あの二挺拳銃はどこに仕舞ったのであろうか、そんなことを考えてフレデリカは抱えられている事実を紛らわせる。意識してしまつたら恥ずかしさで取り乱す。自分の男への耐性の無さは、痛いほどに把握している。

「……………あんまり見ないで下さい」

ふと見上げてみるとサイファアと目が合った。

こうなってしまうと変に意識してしまう。恋愛関係の経験が未熟だと、自意識過剰のようにより性に対して敏感になるといふが、今のフレデリカはまさしくそうだった。

「男の人は……………苦手なんです」

「そうかい、僕はネグリジエが破けているのが、恥ずかしいからだと思つたよ」

——ネグリジエ、破けている？

——破けている……………。

——破けている!?

「お……………お、お」

言葉が羞恥で出てこない。

サイファアの言った通りに、お気に入りだった薄桃色のネグリジエは破けており、フレデリカの胸元を晒している。凄惨なサイファアによる殺戮のインパクトで忘れていたが、フレデリカは輪姦一歩手前だった。

あられもない姿を晒すという、気持ちと振る舞いは英国淑女のフレデリカにとって、非常に耐え難く恥ずべき事実であつた。

「お？」

精悍な顔と巨軀にそぐわない、小首を傾げて聞くと、サイファアのそれが引き金

となつた。

「……お、おろして、グスツ………下さ、い」

泣いた。色々と限界に達していたのが、一気に涙という形で表に出たのだろう。

「……僕も泣きたくなつてきた」

「というより……見て、いたんですか？ 私の、胸」

「顔と背丈に見合わず、ずいぶんとデカいなと思つたガフツ！」

乾いた音がした。フレデリカの左手が風を切つて振り抜かれ、サイファーの頬に赤い手形を残した。多人数を圧倒できる彼でも見切れず、何をされたのか分からぬ速さであつた。

「………最低」

引き裂かれているネグリジエの胸元を押さえて、半目で自分を抱えている彼を睨んだ。男にそれを拒否する術も権利もないのは、火を見るよりも明らかだ。自業自得のいたたまれない気持ちはどうするべきか。兎にも角にも彼女を運んでやらなければ。

「ご、ごめんなさい。それで、どこまで運べばいい？」

「寝室の……前まで、お願いします」

「了解しましたよ、レディ」

黙々と何も言わずに運んでくれた。もしかすると胸に関することも、緊張を解くため

の冗談のようなものかもしれないが、生憎とだが乙女心と常識を初めとする色々なものが分かっていない。はつきり言っておりがた迷惑である。

ベッドだけが残された寢室の前で、フレデリカは床に足を着けた。凄惨な現場はサイファーが責任持って元通りにしておくと言った。数日後には売り払って借金の返済に充てるのだから、その申し出は非常にありがたい。計算上ではギリギリなのだから、少しでも物件としての価値が下がるのは避けておきたい。

遠ざかっていくゴツいブーツの音を聞きながら、フレデリカは布団の中に潜り込んだ。この暖かな感触とも、もうすぐお別れだ。祖父のおかげで大学に通うことは出来た上に、優秀な頭脳もあつたから飛び級に飛び級を重ねて卒業できた。このウルベスでも知名度が高いのは、ここアーカムのミスカトニツク大学でフレデリカは機関学と医学を修了し、考古学の教授とも懇意だったため考古学にも明るい。

ならばウルベスからおさらばして、イギリス本土で研究職に就くのがいいのかもしれない。自分をこの島に捨てた両親の鼻も明かせるし、もしかするとあちらの方から頭を下げてくるかもしれない。少々、研究職というものは男尊女卑に傾向があるが、それは苔むした古い考えだと今なら一蹴される。

ただ、今日知り合ったサイファーという男のことが、どういいうわけか頭から離れなかったが、無理矢理に振り払って眠りについた。

展開は事件の二オイを帯びて

朝になって着替えてから昨夜の現場に向かつて、そしてフレデリカは目を剥いた。男たちの脳漿に血液がこびり付いた痕も、ぶち破られたドアも、所々にあつた弾痕も、何もかもが元通りであつた。たつたの一晚でだ。なんとなく常識外れなところはあつたが、ここまではだと苦笑するしかない。しかし、心のどこかでありがたく思うのが、ちやつかりしていると感じてしまう。

今日から四区画先のアパルトメントで暮らすことになるため、黒い皮で覆われた金属製のキャスター付きトランクを引きながら外に出て行く。トランクの中は衣食住の住以外の要素を詰め込まれており、少し重く感じてしまう。

ウルベスでは珍しくもない白と黒のツートン・カラーをした丈の長いブレザー、そして膝丈のスカートに施された青い薔薇の模様が目を引く外出着は、フレデリカのお気に入りである。イギリス本土に行くとなれば、それほど着る機会はないと思うし、もう少し華やかで明るい色を選ばないといけないだろう。だが今履いている茶色の皮で出来た脹ら脛を覆い隠す編み上げブーツくらいなら、履いて表を歩いても譲歩してくれるとフレデリカは思うのであつた。

あらかじめ呼んでおいた蒸気自動車^{ガール}が白い蒸気を車体後部から生えでる、真鍮色をしたラツパ状のマフラーから吹き上げつつ、フレデリカの前で止まった。

数式機関式か、と内心で呟いた。イギリスの領土が植民地としているウルベスは百年先のテクノロジーを有していると言われる。フレデリカが昨夜に撃つことなく終わったデリンジャーの炸裂徹甲弾もそうだが、最大のオーバーテクノロジーといえるのが数式機関だ。

ウルベスが発見されたのは十八世紀末のことで、そこから発掘された緑鉱石には、物の情報を数式として顕現させるという効果があり、同じく発掘された赫鉱石からは緑鉱石で顕現させた数式を現実のものとしてフィードバックする効果があった。

例えば緑鉱石で病人の情報を数式として顕現させて、病氣や怪我を示す数式を解いて元通りにし、赫鉱石でそれを現実の肉体にフィードバックさせることで治療するという使い方があれば、フレデリカの持っているデリンジャーのように弾丸に爆発の数式を書き込んで炸裂弾へと変える。まさしく万能の力といってよかった。

数式機関とは、これら二つの鉱石の力を持って作られた蒸気機関に変わる、新たな時代の幕開けといえる動力源なのだ。同じ大きさの蒸気機関と比べても数千倍近い出力を誇り、なおかつ燃料は比較にならないほど少なく、そして煤煙はほとんど出さない。

これを基礎原理を作り上げたのが数学王と呼ばれるドイツの数学者ダフィット・N・

ヒルベルトで、その特許をイギリスは破格の値段で買い上げた。この超機関アークロジであるアークムのライフラインを賄っているのは、ヒルベルト自信が作り上げた超高性能数式機関『ヒルベルト・メカニズム』一つのみであることは、機関学の最初に習う初歩の中の初歩である。

その時代の最先端を動力とするガーニーに乗り込むと、軽快な唸りを上げて走り出した。前時代の車ではこうはならない。きつと途中でエンストの一つや二つはするだろう。一応なのだがウルベスは植民地なのだから。

目的のアパルトメントが見えてきた。祖父が残り、借金の返済に売り払った店に比べれば、ぐつと小綺麗な建物であった。オフホワイトの外壁は汚れてない上に、青い屋根が琴線に触れる。見た目からして好みであった。これで内装も一級品なら言うことはほとんどない。あるとすれば、ここを設計した人間と、ここを格安物件にした不動産屋、そして紹介してくれた友人に感謝を告げたい。

大家に挨拶をして、数日前に運び込んだ家財道具が調えられている、自分の部屋である三階の三〇一号室の鍵を受け取ると、安普請なのを色を塗って誤魔化した階段を上った。そして鍵を使って部屋に入れば、新居独特のようなニオイがした。

三部屋にバスとキッチンに、最近の先端技術の賜物である水洗トイレまであった。本当に仮住まいにはもったいなさすぎる。イギリス本土に戻って職がなく、ウルベスにと

んぼ返りするとなったときに備えて、ここをキープしておくのもアリかもしれない。

一人暮らし分の家財道具はシンプルで、機関式冷蔵庫を動力パイプに接続すれば、重苦しい音を立てて動き出した。一世紀前までは食料の保存は氷冷蔵庫が主流だったのに、今では真鍮の外装を持つ鉄の箱が腐敗を遠ざける。二〇世紀万歳、とでも叫びたくなるが、そんなことをすれば奇人の烙印を押されるのは明白だ。

クローゼットに衣服を仕舞い込んで、朝食と昼食はどこかで済ませる心積もりのフレデリカは、メモ帳に買い物リストをしたためる。夕食は自炊するつもりで、その腕は声を大にして上手いと言える自信がある。なにしろレストランを経営していた祖父にしろごかれ、切り傷を量産しながら玄人の腕前を得たのだ。その腕はクリームシチューを作るつもりのようだ。

日傘を片手に外出すると、向かいのアパルトメントが目映った。あちらの家賃は桁一つ分違うために断念したが、それだけの価値があると分かる。出入りする人間の服装が上流階級だと一目瞭然の上に、近くでウィンチェスター・ライフルを構えた警備がいる。

流石は上流階級ですね、そう呟いてから歩き出した。アークロジューとは言え石畳の地面はイギリス本土と変わらず趣があり、その下に鋼の板と機関が埋め込まれているなんて、考えられる人間は初見ではない。

そのまま二区画先にあつた商店街に辿り着いて、必要なものを買つていく。この時、主に見た目のせいで過剰なまでのサービスを受け、ガーニーを頼む羽目になつた。そのガーニー代も厚意で無償というのだから、多い荷物に少ない出費とローリスク・ハイリターンという理想的な結果に終わった。

朝食はサンドイッチで簡単に済ませた。フレデリカはデイナーを重んじるタイプであり、朝と昼は満腹にはしない。空腹というものは最高の調味料であり、あらゆるものを美味しくいただくには、飢えているという前提が必要なのだ。

本日二回目となるガーニーに揺られて、アパルトメントに着いて、冷蔵庫に買ったものを詰め込み終わると、時計の短針は十一の位置を通り過ぎ、長針は六の位置に差し掛かろうとしていた。少々手間取りすぎたと感じ、買い物の際に聞き込んだおいたレストランへと急いだ。

徒歩でも充分に行ける距離にあつたため、平素より駆け足で行けば間に合わないことはなかつた。と言つても予約を入れていたわけでもないし、そもそもカジュアルな店なのだから、そういったものは必要ない。ただ十二時には席に着いていたいという、個人的な感情からくるタイムリミットだ。

頼んだものは小振りのミートパイとサラダだけ。

一般にイギリス料理はマズいと言われるが、食事というものに頓着せず、美食趣味の

ない人間にとってはありがたいものだ。味付けというものは個人個人の好みで行うというのも、手間暇かける美食へのアンチテーゼになるのではないか。

フレデリカは少々特殊で、合理的に美味しいものを、という考えを持っている。あっさりとした済ませるイギリス料理と外国のキメラとも言えるべき思想は、料理の完成が手早い癖して美味というものだ。祖父が飲食業であったために、美味しい料理がもたらす効果も知っているのだ。

だから朝と昼を慎ましくして、夕食は豪勢にするのがフレデリカ流なのだ。

「ごちそうさまでした」

支払いを済ませたフレデリカは公衆電話から、アパルトメントを紹介してくれた人間とは、別の友人に電話をかける。大学時代からの知り合いで、人見知りのきらいがある彼女にとって心強い存在だった。

『もしもし、どちら様でしょうか?』

「ヘンリエッタですか? 私、フレデリカです」

『久しぶりじゃないか! 元気だったかい? 私は変わらないよ』

「新居に引っ越したばかりですけど、私も元気ですよ」

『それで何の用なんだい?』

フレデリカはここまでのいきさつを話した。祖父が亡くなったこと、今までの住まい

を祖父の借金返済のために手放したこと、仮住まいのアパートメントに住んでいるが、収入を得る手段がないので困っていることを告げる。ヘンリエッタの相槌は次第に落ち込んでいき、その辛さというものを共有できているらしかった。

『フレデリカ、君さえ良ければ私の職場の事務をおすすめするよ。女の子が一人で暮らす分の給料はあるし、仕事もそんなにキツくない。むしろ楽な方だし、うちのボスは話の分かる人だから、少しくらいは融通を利かせてくれるかも』

「助かります」

『私の方からフレデリカを推薦しておくから、また改めて連絡しよう。家の電話番号を教えてくださいませんか?』

「はい、電話番号は——」

その後ヘンリエッタは話がまとまり次第、もう一度連絡すると語った。交友関係は少ない方であったが、狭く深く付き合っていたために、毒にも薬にもならないようなこととはせず、真摯に力となってくれる人間がほとんどだ。

こういう友人の存在はありがたいと感じる。ここ最近では人情だけで生きているような気がするから、後で何かお返しでもしよう。そう思っただけで生きているようなチューの仕込みを始める。作り方は切った材料を炒めて煮込むだけだが、煮込む時間などにこだわりがある。並の飲食店で提供されるものより、美味しいと言い張れる自信は

ある。そんな出来に仕上がった。

少し時間をおいておくと、心なしが美味しく感じるのが不思議であった。カレーはスパイスなどが複雑に作用して、時間をおくほどに熟成が進んでいくという理屈は理解している。だがシチューにそういう要素があるのだろうか。

「誰か一緒だと、もっと美味しいんですけどね」

その呟きは黄昏の空に溶けて消える。

夜も更けてから食べた、クリームシチューは非常に美味しくできたが、それを共感してくれる人間がいないことに、涙が出そうになる。少し前までは祖父がいたのだが。

——まるで、あの時のように、孤独に打ちひしがれて。

ただ一人、枕を濡らして眠りについた。



翌日の朝は酷いものだった。

瞼が二目と見られないほどに、赤く腫れ上がっている。それほどに自分は泣いていたのだろうか。胸中に留めた呟きを声に出しても、悲しいことに答えてくれる人間はいない。

にわかに電話のベルが鳴った。もしかするとヘンリエッタかもしれない。期待を込めて受話器を取ると、そのまま膝を付いて、へたり込んだ。記憶の奥底に封じ込めていた、聞きたくもない女の声が出た。

『お久しぶりね、フレデリカ』

「……………なんで」

『大変みたいね、お葬式に引越し。辛いんじゃないかって?』

「あなたに、案じられなくなつて、私は平気です。何の用ですか、ベアトリクス」

ベアトリクス・ブルツェンスカ・フォーレンシルト。大学時代のフレデリカに大きなトラウマを植え付けた、もっとも会いたくなかった人間だ。電話で声を聞くことさえ、躊躇われるほどに。

彼女は一言で言い表すならサディストだ。ただ、その嗜好を満たす方法に、恋人関係の男女を弄んで破局させるといふものを選んだのだった。餌食となつたカップルは百に迫るほどで、当然のことながら被害者の抵抗があつたが、そこはやり口の見せ場であつた。

破局させたカップルの男を、自分の手駒として使う。それも平凡な男ではなく、ボクシングといった格闘技を修めていたり、新聞社や警察にコネを持つなど、力のある男たちで万全の布陣を築いていた。これで正攻法も暴力も恐れることはないのだ。

フレデリカは大学時代にベアトリクスに立ち向かった。きつかけは友人が餌食となったことだ。彼女も男たちの布陣の裏をかい、握った証拠や証言を保持し続け、一時的だが停学に追い込むことができた。

だが報復としてベアトリクスの配下から暴行を受けた。幸いと言っているのか純潔を失うのは免れたが、肉体の痛みと共にトラウマとして刻みつけられている。一時期、それは悪夢として、フラッシュバックとして、ありありと望みもしないのに思い出される。一ヶ月も休学したが、その後一念発起して飛び級に飛び級を重ねてのスピード卒業を果たした。ただし、その理由はベアトリクスの記憶を大学を去ることで葬りたいという一心であった。

その押さえ込んでいた、風化させようとしていた、忌々しい記憶の根元が、今になってフレデリカに語りかけている。

『ひどいわあ、ちょっと懐かしくなつて、声を聞きたかっただけよ』

「私は、あなたの声なんて、聞きたくありません」

強く告げて、受話器を下ろした。若干ヒビが入ったことから、相当な力で叩きつけたのであろう。

心臓を鷲掴みにされている感覚が、鈍痛のように身を苛んで、息を吸っても肺に入っていないような錯覚に陥る。

過呼吸でも煩った呼吸で必死に息を吸う。電話をしたときから、声を聞いたときから始まった頭痛が酷くなって、目眩さえ感じるようになった。

長らく封じ込めていた、あの時のことが、脳裏をよぎった。

ベアトリクスは上流階級の人間だったのか、従えている男たちは中流か上流の人間で、全員が品の良い笑みの似合う男たちだった。

そんな彼らが下卑た笑いを浮かべて、フレデリカの体を弄んでいく。衣服は引き裂かれて、裸同然のあられもない姿に、男たちは爆笑の感想を漏らしたのだった。そして好きだけ痛めつける。殴る蹴るだけでは飽きたらず、角材を持ち出して叩きつけた。

唇が切れて前歯が三本もなくなつた。耳、鼻、口から出血し、右瞼は開かないほど腫れ上がった。全治六か月の重傷だった。

ヘンリエッタが現場に駆けつけなかったら、命も純血も身も心も、何もかも好きなようにされて元の生活には戻れなかつただろう。

だが怪我也重いものだったが、心の傷はもつと重かつた。大きすぎ、深すぎる、一生をかけて付き合うような傷が、その頃まで無垢といえる心に刻みつけられ、言葉も食事も睡眠さえも忘れた。

ただ何十枚ものレポートを書き続けて、ただ機械のように過ごす日々だった。この頃から飛び級で卒業する、という考えを持っていたのだろうか。その甲斐があつてなの

か、講師陣に可愛がられていたフレデリカの変貌ぶりに心痛めたのか、二十二歳という若さで卒業した。させてもらった、という表現が正しいのだろう。問題はあったかもしれないが、中退という経歴で終わらせられないほどに、フレデリカ・エインズワースという少女は優秀であったのだ。

それから一年かけてギリギリのレベルで、人並みの心に戻せるよう、ベアトリクスのことを忘れる努力をした。

そして二十三歳のフレデリカは、今になって思い出してしまった、かつての忌々しい思い出に苦しめられている。

「なんで……………こうなるの……………」

壁にもたれ掛かるように座り込んで、深呼吸して息を整える。

涙は止まらず、臉を乗り越えて、頬に筋を作つて流れる。

着ていたベージュのスカートに落ちて染みを作るが、フレデリカがそれに気付くことはないのだ。とめどなく溢れる悲しみの滴を、どうすることも出来ず、ただ垂れ流すほかなかった。

「誰か……………助けて」

応える声はない。

あるわけがないのだ。

両親からの冷遇を受けた頃から、最終的に孤独になる予感をフレデリカは感じていた。

だが運命の悪戯では済まないと思うほど、坂道を転げ落ちるように周りから人がいなくなっていく。数少ない友人さえ失うと、自分はどうなってしまうのか。考えても詮無きことに、その優秀な頭脳を傾けていく。泥沼にはまろうとしていたところに、チャイムの音が破った。

「……………どちらさまですか？」

十中八九聞こえていないと思うくらい、応じたフレデリカの声は弱々しいものだ。

よろよろとした足取りで、安普請なのを表面の処理で誤魔化したドアに手をかける。

それつきりだった。ほんの少しドアを開けたところで、彼女の意識は闇へと落ちていった。



華々しい人々の活気に満ちあふれる通りから、人一人通れるぐらいの路地に足を踏み入れれば、そこはアーカムの裏だ。公然と無許可で銃器を携帯し、人を食い物にする人間がのうのうと息をする世界だ。

ブリキで出来たゴミ箱が倒れていたり、捨てられたペットの死骸でヒドいニオイがある。普通の人間なら口から粗相してしまうだろう。

そこを一人の男が歩いていった。かなり大きな男だ、身長は二メートルを下らないのは確かだ。男の名前はサイファー・アンダーソンといった。フレデリカの店に現れた男である。

悪臭の中でも彼は眉一つ動かさずに、確固たる何かを持って歩みを進めている。角を一つ曲がると開けた正方形の広場に出たが、家々に囲まれているせいか日が差さず薄暗い。面積は二〇〇平方メートル以上はあるかもしれない。

「待ってたぜ」

広場にはバラックのような小屋が三つほど並んでいたが、その中でも大きな小屋の壁に一人の男が寄りかかっていた。短く刈り上げた黒髪に、鍛え上げられた一九〇センチ近い体軀から見て、何らかの格闘技か何かを修めているのだろうか。

「マーカス・クルーガーだったか。イギリス本土じゃ、ボクシングの表試合に出られないぐらいのパワー溢れるヤツだとか」

「そうさ、俺が少しでも小突いたなら、ソイツはこの世からオサラバしちまうんだ。今じゃ一介の用心棒さ」

肩を竦めてから、ボクシングにおける最速攻撃であるジャブを放った。その拳速で生

み出された空気の渦は、三メートルも離れたサイファーにまで届くとテンガロンハットを吹き飛ばした。

舞い上がった帽子を掴むと、少しおどけたように、

「ヒューー！　噂以上だな」

「アンタに恨みはないんだが、俺の店の常連がな、アンタを少し痛めつけてやってくと、な」

「もしかして女か？」

何も言わずにマーカスは一気に距離を詰めた。思った以上に速い。数秒もかかっていないだろう。

渾身のストレートがサイファーへと向かう。見事なまでに心臓の真上をヒットした。ただ小突いただけで人を殺める彼が、全力で急所を打つとどうなるかなど、想像も付かない。

だがマーカスの表情は暗い。あるべき感触が、胸骨と肋骨を粉碎し、心臓を破裂させる感触が伝わってこないのだから。

「そら、その程度かよ」

サイファーの挑発に乗った彼は右手の指を揃えて、彼の脇腹へと突き刺すように打ち込んだ。極東の島国に伝わるカラテという格闘技の技、貫手というものだ。

だがサイファーは倒れない。それどころかニヤリと不適な笑みを浮かべて見せた。

「今は丸腰——というより君が指定したんだが——だからコイツで勘弁してやる」

マーカスの眼前に分厚いブーツの底が迫った、かと思ったときには身体がガーニーに跳ね飛ばされたように舞い上がると、広場を飛び越えて、その向こうの路地の壁にぶつかった。

体が起きあがらないこと以前に、完膚なきまでに叩きのめされたことを自覚した。それと格の違いというものを。

「悪いね、僕は真正の超人だからな。君程度じゃ暇つぶしにもならないんだよ」

「だろうな、パワーが桁違いだ。あんなに吹っ飛ばされるなんて、夢にも思わなかった」
「貴重な体験だったろ？」

明らかに煽りの意を含んだサイファーの笑みに、マーカスは舌打ちを漏らしたが悔しさは余りない。中途半端にやられるよりも、清々しく一発で吹っ飛ばされたせいなのか。

痛む身体に鞭打って起き上がった。骨は折れていないし、脊髄を損傷したわけでもない。以前にガーニーに跳ねられたが、特に大きな怪我はなかったのだ。今回の一撃はそれ以上だったが、別に問題は無い。

「それでさ、僕を痛めつけてと頼んだ淫売はどこのだいっただ？」

一瞬ムツとなつたが、目くじらを立てられるようなことをしたのだから、ここは素直に応じるべきだろうと考え、マーカスは口を開いた。

「ベアトリクス・ブルツェンスカ・フォーレンシルトだ」

「ははーん、前に危うく一夜を共にするところだった、あの阿婆擦れか。じゃんじゃん酒を持つてきて、僕を酔わせようとする魂胆が読み読みだったが、経験が違つたな」

「いつか後ろから刺されるぞ」

「それでどうこうというレベルじゃあないんだ」

「まさか………ナイフが刺さらなかったりするの？」

恐ろしい期待をしてサイファーに問いかける。

返つてきたのは予想の斜め上であつた。

「ナイフの方が折れるんでな」

そう言つてからサイファーは手を振ると、大通りへと戻つていく。

そこに一人の女が立っていた。やや茶色のかかったボブカットにエメラルド色の瞳、なかなかに見目麗しい二十代に足を踏み入れたばかりの女だ。身長は一七〇センチそこそこか。もしかすると少しばかり低いかもしれない。体型はスレンダーで、その源がしなやかに鍛えられた筋肉によるものだと分かる。

茶色のショートブーツに黒のパンツスタイルで、白のブラウスの上から灰色のベスト

を着ている。その佇まいは男装に思えてくる。なまじエメラルド色の瞳は切れ長で、下手すると美形の男にも見えてくる。

「探しましたよ、何の用事であんな所に？」

「果たし合いだよ、主にボクシングめいた喧嘩だったが」

「なるほど………無事ですか？」

「ンあ？ それは相手が、つて意味合い？」

「どちらも、という意味合いだよ」

「そりゃあ、ありがたいけどさ。でも敬語が外れているよ」

ハツとなつて口元を押さえた女に、好色な笑みをサイファーは向けた。こうやって女性をからかう趣味があるのかもしれない。フレデリカの慧眼は正しいと証明された瞬間だ。

頬を紅潮させて睨むが、その原因である彼はどこ吹く風と全く気にしていない。女は薦めたのは、やつぱり間違いかな」と呟いてから、サイファーの方を向いた。

「そんなことよりも、実は私事なんだが、マズいことが起こったんだ」

「それってヤバイのか？」

「ああ、前に事務員として紹介した、私の友達がさらわれた可能性がある」

「よーし、救出だ」

にわかに歩調を速めたサイファーに、女は小走り気味に追い付こうとする。これも身長差が為す弊害なのかもしれない。

「ちよ、ちよつと待つてくれないか!? 普通なら『金にならない』だの『自分で解決しろ』と返すアナタが、一体全体どういう風の吹き回しなんだ」

「まともな理由だぜ? まず第一に君の友人フレリカ・エインズワースは大学を飛び級で卒業した超インテリの高学歴。第二に僕もお前さんも事務仕事が得意じゃない。要するに優秀な人材のためなら、一肌脱いでも不思議じゃないだろう? というよりヘンリエッタ、お前さんは僕をどういう人間だと思ってる?」

「キングオブ利己主義」

「お前さん減俸二ヶ月な」

女——ヘンリエッタは横暴だ、と騒ぎ立てているが、やはりサイファーにとつてはどこ吹く風に過ぎない。

「とりあえず現場に行くか。ヘンリエッタ、案内を頼む」

戦闘は蹂躪のように

荒事屋——ウルバスでは珍しくない、イギリス本土では裏稼業の職業だ。マフィアやギャングの鉄砲玉として、酒場や風俗店の用心棒として、はたまた秘密結社の戦闘員として、戦いに関わることならピンからキリまでの連中だ。

実力行使請負業『Call of Cthulfu』も言葉は変えてあるが、本質的にはほとんど同じだ。たまには探偵まがいのことや、一般人が便利屋として仕事を頼むときもあるが、基本的には荒事がメインなのだ。

従業員はたったの二人。社長であるサイファー・アンダーソンとヘンリエッタ・ウエントワースであり、二人は新たな社員となるであろう人物であるフレデリカ・エインズワースのアパルトメントに来ていた。

「もぬけの殻で、争った形跡はないな」

しゃがみ込んで玄関を検分しているサイファーの目は鋭い。誘拐犯の痕跡を探ろうと、隅から隅まで目を光らせている。が、目に見える痕跡はないが、鼻につくニオイがあった。甘いニオイだ。

「クロロフォルムでも嗅がせたかな？」

彼の推測は来客を装ってフレデリカを玄関に呼び、ドアの隙間から彼女に向けてクロロフォルムを吹き付けた、というものであった。争った形跡がないこと、漂う甘いニオイから導き出された推理だ。クロロフォルムは気化すると甘いニオイがするのだ。霧吹きか何かで吹き付けたとなれば、普通よりも気化しやすい。

そのまま部屋の中に進んでいく。未だに梱包が解かれていない荷物があることから、引越したばかりとサイファーは睨む。

「ヘンリエッタ、状況を確認すると、お前さんは僕に直接会わせるために呼ぼうと思い、電話をかけたが繋がらず、不審なニオイを感じて、このアパルトメントに行ったら中には誰もいなかった。そうだったな？」

「ああ、鍵は開いたままだった。あの子は鍵を掛け忘れるような子じゃないよ」

ふむ、と顎に手を当てて考え込むと、部屋の中を歩き回る。

だが何も事件に結びつくものはなかったのか、銀色のシガーケースから葉巻を一本取り出して火を着ける。吐き出された紫煙が、奇妙な形を描いて漂った。

「僕は誘拐の線が濃いと思う。玄関に人間じや、ほとんど分からねえレベルだが、気化したクロロフォルムのニオイがした。となると犯人の動機が気になる。恨みを抱いていた人間がいたのか、はたまた身代金目的の誘拐なのか………心当たりはあるかい、ヘンリエッタ？」

「そうだな………大学時代まで遡るが、ベアトリクスという女性がフレデリカを恨んでいたよ」

「なんだと？」

マーカス・クルーガーをけしかけた、ベアトリクス・ブルツェンスカ・フォーレンシルトとでもいうのか。フレデリカの店に転がり込む数日前に、バーで独り酒していたところを誘われたが、袖にしてやった。

すべての男は自分の手のひらの上で転がせられる、というどす黒い考えが見え見えで、なんとなくあしらっていたが、ベアトリクスも手慣れたものでホテルの前まで行かされることになった。そして、これ見よがしにドレスの胸元を開けての誘惑に及んだが、「他の男のキスマークだらけの胸に、興味なんてモンは欠片もねえ」とバツサリ切り捨てた。

「もしかしてベアトリクス・ブルツェンスカ・フォーレンシルトってヤツか？」

「———!? 知っているのか？」

「ん、さっきの決闘で相手方をけしかけたのさ。多分、少し前にホテルに誘われたのを断ったせいだろうな。ブツ壊してえくらいいには、イイ女だと思ったな、見た目だけだが」「ありえない話じゃないな。彼女はあまねくすべての男は自分の思い通りになると、本気で思っているような人間だからな」

「……………冗談じゃねえな」

それから部屋を出て、フレデリカの足取りを探るために聞き込みを始める。手っ取り早いのは近隣住民から聞き出すのが一番だが、相手が何らかの方法で口止めをしている可能性もある。

場合によつては金がかかるが、信頼できる情報屋にでも頼んで、足取りを掴んでもらうことも念頭に入れておかねばならない。それだけ人攫いの類は面倒だが、有能な人材のためには仕方ないだろう。

三時間かけて聞き込みを続けたが、誰もが知らぬ存ぜぬを決め込んでいる。やはり口止めされているらしい。

「ブルツェンスカ……フォーレンシルト………ああ、なるほど、ドイツの大貴族様だったか」

フォーレンシルト大公家。かのビスマルクとも親交があるという、由緒正しき貴族であり、イギリス政府も彼らについては無視できないだけの實力があるらしい。おそらくベアトリクスは、その令嬢なのだろう。

ヘンリエッタの話からして実家の恩恵は受けていないだろうが、社交界に顔が利くのだろう。彼女単独でも充分に生きていけるだけの人脈があるのかもしれない。それが表裏問わずなら、たいていの人間なら何も出来ずに泣き寝入りコース直行だろう。

ただ、ここはアーカム。オイタが過ぎる世間知らずのお嬢様は、何もかもむしり取られて物乞いコース直行だ。

サイファアの目が凶悪な光を宿し、口元には不適な笑みが浮かぶ。

「ヘンリエッタ、今回のヤツは大物だ。心してかかれ。働き次第じゃ、減俸二ヶ月は無しにしてやらんでもない」

「全力を尽くさせていただきます」

「あとは……………ンオ？」

薄暗い裏路地に続く、建物と建物の間。小国一つ分くらいあるアーカムだが、裏路地の入り組み具合は常軌を逸している。公共事業で作られたのではなく、ならず者やマフィアが際限なく作り続けた結果だ。

その入り口に独りの男が立っている。金髪を後ろで束ねた、碧眼の美男子だ。濃紺のインバネスコートを着込んで、光を宿さぬ瞳で二人を見ていた。

普通ではない、身の上も、おそらくは身体も。発達した機関技術は、数式機関限定なら肉体に埋め込んで、筋力や神経の強化、数多の特殊能力を得る術となる。二人を見ていた男も、そういう存在なのかもしれない。

「ヘンリエッタ、追うぞ、着いてこい」

「な……………ま、待って！ 待ってくれ！」

サイファーが駆け出した途端、金髪の男も裏路地へと消えていった。

あわててヘンリエッタが後を追おうとした時には、サイファーとの距離は三メートル近く離されていた。体格以上の健脚としか言いようのない速さだ。

対する金髪の男も全く距離を縮められていない。やはり機関技術で身体強化を施しているようだ。そうでもしなければ、たちまちサイファーに捕まってフクロにされるのがオチだ。

「待てやテメエコラア！ 逃げてんじゃねエぞオ！ おとなしくボコられやがれエー！」

「極東のマフィアのようだ……………」

「オイ、ヘンリエッタよお足止めの一つや二つ、すぐにやれエー！」

返答する気概さええないのか、ヘンリエッタが腕を払うように振ると、そこから銀色の何かが飛んでいった。刃渡り十センチほどのスローイングダガーで、それは男の膝関節に突き刺さる。もんどり打って正面に、金髪の男は転んだ。

それを待っていたような絶妙なタイミングで、サイファーは大きく跳躍すると、金髪の男に馬乗りになると、顔面を中心に殴り始めた。所謂タコ殴りというものだ。身長二メートルを上回る、体格も相応に良い男にやられるなど、同情を禁じ得ない上に合掌するしかない。

五分も経つと金髪の男がぐったりし始めた。ヘンリエッタは止めに入りつつ、男が五

分も保ったことに、ある意味で驚きを禁じ得ない状態だ。並大抵の人間は一発だけで、泣くわ垂れ流すで大騒ぎだ。それだけサイファアの拳はダメージを抑えつつ、より大きな苦痛を与えるように出来ているのか、などと思ってしまう。実際に間違っていないのが恐ろしいところだ。

「オイ、お前さんは何で僕らを見ていた？ 何で僕らがお前さんの方を見たら逃げた？ 僕は読心術なんて心得てねえし、ペーカー街の探偵でもねえから、お前さんが話してくれなきゃ、何一つとして分からねえんだ」

男の返答は沈黙だった。

「ナメてんのかテメエコラア！ 簧巻きにして海放り込んだるぞオー！」

サイファアの剛拳が腹部にクリーンヒットした。内臓が破けたのか、血と嘔吐物のブレンドが噴水めいて口から吐き出される。男は瀕死だったが、サイファアの追求は勢い衰えることなく容赦ない。

「なあ、何でもいいんだあ、何か話せや。女でも、金でも、酒でも、あるいは機関改造にかかった費用のことでいい。だがなあ、話さなきゃ、十秒ごとに一発は殴る」

そして十秒のカウントダウンを始める。

男の口は鉄だ。万力のごとく閉じきって、聞く気配はない。

——カウントが0になった。

灰色のコートからデカい植木バサミを取り出した。そんなものを、何故持っていたかは野暮というものか。

開いた刃を左手首のあたりにあてがうと、何の躊躇いもなくハサミを閉じた。鮮血が噴き出して、裏路地の地面と壁に赤い世界地図を作る。

見も世もない絶叫が、裏路地に響き渡った。

「勘違いすんなよオ、一発は殴る、僕はそう言ったが殴る限定じゃないからね。僕のサ
デイスティック・レパトリーに則って、お前さんの口を割るだけだ」

ヒツ、と男の口から悲鳴が漏れた。

その原因が何なのか、十中八九はサイファアの浮かべる嗜虐精神の為せる、凶悪な笑みだろう。笑みとは本来は野獣が獲物を前にした、そういう状況の表情に浮かべるものに近い、つまること攻撃的な表情なのだ。

サイファアはまさしく原初の笑みを浮かべてみせたのだ。一切の不純物的感情の籠もらぬ、純粋な殺気だけの笑いを。

カウントダウンを始めた——と思わせておいて、カウントを十から三まで一気に端折った。金髪の男は面食らった顔をして、口をパクパクさせている。

——カウントが0になった。

長い、長いナイフが姿を現した。木目のような模様が刀身にあることから、おそらく

ダマスカス鋼で作られているのだろう。刃渡り四〇センチは確実にある、分厚く黒っぽい刃のボウイナイフであった。

順手に持っていたのを、鮮やかな手並みでクルリと回し、逆手に持ち替える。

それを男の右手の指めがけて、一気に突き立てた。人差し指、中指、薬指がまとめて宙を舞い、それぞれの切断面から黒血が滲み出てくる。

理性など微塵もない、獣そのものの悲鳴を上げて、男は身をよじった。転げたくても、サイフアーに押さえられているせいで、それさえも叶わないらしい。

おまけのつもりなのだろうか、男の右側頭部に向けてナイフが閃いた。血にまみれて薄汚れた金髪と、男の右耳が切り離されている。常軌を逸した残忍さだと、もはや沈黙するしかない。

男はようやく理解した。

情報を聞き出せるか、聞き出せないか。それは些細な問題に変わっており、今はどれだけ男を痛めつけるかに、全ての思考のベクトルを向けている。脳の血液が凍っていくような錯覚を、彼は感じていた。

「次は鼻を削いで、右目をくり抜いてカタワにしてやるか」

逆手に握っていたボウイナイフを順手に持ち替えると、高々と振り上げる。ややくすんだ色合いの刃が、ギラリと光を跳ね返した。

「やめろ！ やめろ！ やめてくれえ！ あのフレデリカつて子は、第四港湾の倉庫に閉じこめてある！ だからナイフを下ろしてくれ！」

「それはホントのことか？」

「そうだよ！ そうだよ！ 嘘なんて言うわけないだろお！ だからナイフを下ろしてくれ！」

「ご協力、感謝痛み入るね」

サイファーはナイフを下ろした。

——男の眉間に。

一度だけ身体を痙攣させて、男は事切れてしまった。

「言ったとおりに振り」下ろして」あげたけど、何か文句の一つや二つあるのかい？」

「草葉の陰で舌噛み切ってるんじゃないか？」

「ヘンリエッタ、死者は二度は死なんよ」

「あなたなら二度三度殺しそうだが」

「買いかぶりすぎだ。それと僕は死を二度三度与える趣味はないから、一発で未練ごと殺る」

なんとも酷く殺伐とした内容の会話だ。それでも二人からすれば、まだ序の口と言えるほどだ。血だまりに沈む金髪の男は、死体故に口なしだが、もしも喋る口があったな

ら罵詈雑言の雨霰だろう。

壁の染みが赤黒くなった頃には、二人の姿は消え失せていた。



酷い頭痛がした。

眠気が尾を引いているし、なんとなく吐き気のようなものも感じる。体を起こそうと思ったが、上手くいかずに身体が転がってしまった。

冷たい倉庫の床に、フレデリカは両手を後ろ手に縛られて、無造作に転がされていた。どうやら誘拐されたらしい、と彼女の聡明な頭脳は感づいた。

壁を上手く使って何とか、寄りかかるように体を起こすことが出来た。だが両足も縛られているようで、立ち上がるのは望むべくもないだろう。

白のブラウス、紺のベスト、ベージュのスカートは、ここに転がされる前の服装のままであった。身体に違和感もなければ、服を脱がされた形跡も見当たらない。どうやら意識を失っている間に不貞を働かれてはいないらしい、そうフレデリカは結論づけると明かりもない室内で溜め息をついた。

バタバタと頭上で複数の足音がするのを、聞き逃すわけがない。そこから自分がある

建物は二階以上で、自分の身は明かりもないことから地下室だと察した。

「ベアトリクス……………ですかね」

下人として濃厚な線がある、自らのトラウマである女の名を呟いた。

助けは来ないものと割り切つてはいたが、数少ない望みを捨てきれずにはいられない。もしもベアトリクスなら、数年前よりも酷いことをされるのは明らかだ。

きつと輪姦に次ぐ輪姦の末に、犯されていない場所などないぐらいのボロ雑巾にされて、どこかの娼館にでも売り飛ばされるのだろう。確かベアトリクスの手下の男には、高級娼館のオーナーまでいたはずだ。

——そうなつたら、お客さんには困らないかもしれないですね。

自嘲も込めた呟きが虚しく壁に響いた。

自分の見た目がどれほどのものか、フレデリカは自覚しているが、可能性の濃厚な未来で生かされることになるのは、正直言つてゴメンなのだ。

「ヘンリエッタ……………来て欲しいな」

思い浮かぶのは腕っ節の強い、女傑という言葉がこの上なく似合う麗人。大学卒業後は荒事屋の道を志したと聞いたが、実際はどうなのだろうか。案外まともな職業に就いているのかもしれない。実情を知つた彼女がどんな反応をするかは、少し後の話になるだろう。

蹴破るように部屋のドアが開けられた。本当に蹴破つてあけたらしく、足をハイキックのまま上げた状態で筋肉隆々の、幾重もの髪の毛の房を持ったヘアスタイル——ドレッドヘア——をした身長二メートル近い黒人の男がいた。チノパンを履き、素肌の上から軽鎧を身に付けている。

その脇から絶対に会いたくなかった彼女が現れた。紛れもないアリア人の顔立ちで、長い金髪を丁寧に巻いている。碧眼がフレデリカを見下ろし、赤と桃色で彩られた、フリルたっぷりのドレスはデコルテのデザインによつて胸元が強調されている。身長は一七〇センチを超えるだろうか。

彼女こそベアトリクス・ブルツェンスカ・フォーレンシルトであつた。その瞳の光があまねく全ての男は好きに出来る、という傲慢な意志を如実に物語っている。そして唯一噛みついてきたフレデリカに対する、激しく燃え上がる憎悪の炎も。

「会いたかつたわ、フレデリカ」

「……………私は会いたくなかつたですよ」

ベアトリクスが目配せすると、新たに二人の男が現れたかと思いきや、脇からフレデリカを抱え上げて、無理矢理立たせた。

次の瞬間、黒人の男が裂帛の気合いを発して放つた正拳突きで、まるで枯れ枝のように吹っ飛ばされた。唇が切れたというレベルに留まらず、前歯も奥歯も吹っ飛んだ。壁

に叩きつけられて、肺の中の空気が無理矢理押し出された。

「う、ぐうっ」

床に落ちると意識が闇に沈んでいく感覚がしたが、冷たい感触によつて引き戻された。冷たい水をかけられたようで、服に染み込んだ水が、低い地下室の気温が、体温を容赦なく奪っていく。

ヘアトリクスが髪を掴んで、フレデリカの顔を引き上げさせた。恐ろしいまでに怒りに歪んだ顔をしている。どれほどに鬱屈した感情を持てば、これほどの表情が出来るのか、などと思つてしまふ形相であつた。

「あなた……自分の立場をわかつているの！　ねえ！　どうなのよ！」

揺さぶられる度に色々な所が痛む。

もう一度立たせられると、今度は顎を蹴りで打ち抜かれた。壁ではなく天井にぶつかった。ある意味でレアな経験かもしれないが、この状況ではブラックジョークにもなりはしない。

たった一発ずつの正拳と蹴りで、目も当てられぬほど変形したフレデリカの顔を見て、ヘアトリクスは清々しいまでの高笑いをする。

「そうよ………そうよ！　そうよ！　そうよ！　そうよ！　その顔なのよ！　もっと苦しめてあげるわ！　さあ、やりなさい！」

黒人は何も言わず、フツと息を吐きながら、脇腹へと蹴りを放った。繊維質の野菜を何本か束ねてへし折ったような、聞きたくもない骨折の音がフレデリカの左腕からした。

「ひ……うっ！」

苦鳴が漏れたのをベアトリクスは聞き逃さない。立たせている男に命じて、ブラウスとベストをひん剥くと、どこから取り出したのか茶色をした乗馬用の鞭を取り出して、それを病的に白く細いフレデリカの肢体に向けて振るつたのだ。

鞭は容易に音速を超える武器であり、それはベアトリクスの臂力でも成し遂げられることだった。何度も鞭が肌の上で弾け、その度に絹を裂く悲鳴が漏れた

鞭の音が数十回を回った頃には、フレデリカは床の上に倒れ、ベアトリクスは息が上がつている。二種類の吐息が混ざり合って、部屋の中へと溶けていく。

「少しは気が紛れたわ。後はあなた達の好きになさい」

そう言い捨てると、黒人と二人の男がズボンに手をかけた。

それと同時に憔悴しきった男も、部屋の中に飛び込んできた。走ってきたのか相当に息が荒い。

三人は興奮めといわんばかりの表情で、飛び込んできた男の方を睨みつけた。エサを突然お預けにされた犬にも似た、そんな表情から長い間ご無沙汰だったのだろう。

「変な女が突然やってきて、滅茶苦茶暴れ回ってやがる！俺たちじや手に負えねえ！」
「へえ……………もしかして、この女？」

二本の指で挟んでいる写真はヘンリエッタが移っているものだ。男は千切れんばかりに首を縦に振る。その様は滑稽さに溢れており、黒人が口元を吊り上げた。

「機関銃を使いなさい。アレはそのために用意させたのだから。フレデリカを連れてきなさい。目の前で蜂の巣にされるのを、見せつけてあげましょう」

顎で二人の男に命じると、足の縄を切らせて立たせた。黒人が後ろからフレデリカの背中を小突きつつ、早く歩くように急かしている。

歩き続けて一分もしない内に、倉庫の一階に辿り着いた。

荷物が何もなかったためか広く感じられるであろう空間は、スローイングダガーが身体中に刺さっていたり、どこかしらの骨を折られて苦悶する、男たちで埋め尽くされており、どうにも狭苦しく感じる。

「フレデリカを返してもらおうか」

毅然とした物言いのでヘンリエッタは告げた。

それをベアトリクスは鼻で笑った。無駄だと、馬鹿馬鹿しいと、愚かだと、目が語っている。

エメラルドの双眸に怒りの炎が宿り、三本のスローイングダガーが握られた。

大学時代から護身用として使っているものだと、フレデリカを初めとする数々の友人は知っている。それが銃弾以上の速さを持っているのも。

「やっぱり来たわね、そんな気はしていたもの。だから、こんなものを用意したわ」

男たちが運んできたのは、奈落のように大きな銃口を六つも持ったガトリング機関銃だ。毎分二四〇〇発もの連射スピードは、未だにイギリス軍が正式採用を続けているだけの火力がある。

対するは弾丸以上の速さがあるとはいえ、一度に投げられるのは両手を使っても八本までのスローイングダガー。

勝敗は火を見るよりも明らかだ。

ヘンリエッタは沈黙するしかない。ガトリング機関銃が一つなら銃弾の嵐をかいくぐれるが、二つにもなると厳しい。五発以上の被弾は目算に入れないと、相手するなんて思考に至らない。

「まったく……フレデリカは知り合いの娼館に送るとして……あなたはこの女たちと同じ末路を辿ってもらおうかしら？」

ベアトリクスは背後には、鋼鉄の箱がある。きれいな立方体で、高さも縦横も五メートルくらいか。どういうわけか荒事屋を志していたヘンリエッタの嗅覚は、並の鉄火場も足元に及ばぬほどに濃い血のニオイを感じ取っていた。

取り巻きの男に命じさせて、その中身が明らかになると、理由がすぐに分かった。

——死体だ。

無造作に女の死体が積み上げられている。どれもが手足のどこかが欠けていたり、顔が分からないほどに殴られていたり、グズグズに腐乱していたりするが、共通しているのは股間の痛み具合だ。とてもじゃないが直視に耐えうるものじゃない。

「私の可愛い子たちの性欲のはけ口よ。みんなして力が強いから、五体不満足になっちゃうのはしょうがないのよ。おまけにとびつきり苦しいみたいだし」

口元に手を当てて、ベアトリクスはフフと微笑んだ。

悪魔だ。

悪魔の所行という言葉が、実にしっくりくる。

「こっちは私に逆らった子たち。死んだ後は肉屋にも卸せないから、見せしめで死体はとつてあるの」

女たちの死体を収めた鉄箱の隣にある、同じ大きさの鉄箱を開けようとした、そのときだった。

「オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」

大砲を百発ぐらいまとめて撃つたような、とても声とは思えない声が出たかと思えば、鉄箱を吹っ飛ばして彼が現れた。

テンガロンハット、膝以上の丈を誇るロングコート、シャツプスにゴツイブーツという風体は、ローンレンジャーとでも言うべき、空気を放っている。

鉄箱が落ちたことで舞い上げられた風が、橙に近い色の髪をなびかせる。鈍い光を宿す銀灰色の瞳が、ベアトリクスを睨みつけた。

「こんガキヤア、マジでブチ殺し犯すぞオ、このドグサレアマア！ 覚悟出来てんだろオなア、イ〇ポ野郎共オ！」

現れたのはサイファア・アンダーソンだが、ラ行発音がドエライレベルの巻き舌だ。根底に英語が根付いているせいで、何か新種の言語のようにも感じる。まるでラ行巻き舌で話すような人間が、流暢な英語発音を身に付けると出来上がる、そう思わざるを得ない。逆も微妙に可能性があるが。

これは極東のマフィアである『ゴクドー』や『ヤクザ』と呼ばれる無法者特有のものだが、なぜサイファアがそれを話せるのか。そして何故英語で実践したのかは、全くもって謎としか言いようがない。

便宜的に名称を付けるなら『Yakuza English』とか『Gokudo English』と言うべきか。

「二人残らず蜂の巣だア、覚悟しろやアマチャン共オ！」

どこから調達してきたのか、あるいはベアトリクスが予備として用意しておいたの

か、全く同じガトリング機関銃を片手で撃ちまくっている。システム全体と弾薬を含めれば六〇キロは下らないが、現に撃ちまくることに成功しているあたり、このサイファーという男は只者ではない。

その隙にフレデリカの脇を固める二人の男に、今までの最高速でダガーを投擲した。眉間と喉に命中し、男たちは後ろにひっくり返った。

「とりあえず命は無事みたいだね」

「ヘンリ、エツタ……………ですか？」

「今、うちの上司が彼らの気を引いているから、その隙に逃げるよ」

そしてサイファーの方を見て——即座にフレデリカへと戻った。高笑いしながらRとLの発音をしつちやかめつつやかにしつつ叫ぶ上司や、男たちが死々累々である光景など見なかった。正確には見なかったことにした、だが。

ベアトリクスは右往左往しているのか、こちらには気づいていない。

連れ出すのは簡単だった。あとはサイファーを回収するだけだが、怒り心頭の彼は動く者がいなくなるまで撃ちまくっているだろう。

さて、どうするか——と考えた矢先に何かが鼻先を掠めた。バク転の要領で避けると、カウンターにスローイングダガーを投げた。

だが恐るべきことにダガーは握りつぶされた。ヘンリエツタの前方に黒人の男が

立っていた。フレデリカを数発でボロボロにした、見るからに武術の達人という佇まいである。

「厄介そうな相手だな」

獣じみた絶叫を上げて、黒人がつかみかかってきた。

側方宙返りで華麗に回避すると、スローイングダガーを逆手に持って、躊躇いもなく首に突き刺した。

傷口から空気が入ったのか、血の泡を吹きつつも、拳を固めて正拳突きを繰り出す。当たれば弾丸を食らうよりも、大きいダメージを受けるのが何いしれる一撃だ。

それを手の動きと、腰の回転で受け流すと、喉にもう一本のスローイングダガーを突き刺す。刀身には縦線のようなものが刻まれており、数秒後に眩い光を放つと黒人は氷漬けになっていた。

「ヘンリエッタ……………これは？」

「ケルト神話系を調べる中で身に着けた、ルーン魔術だよ。あのナイフに氷を意味する

『イス』を刻んでおいた」

「……………すごい」

「驚かないのかい？」

科学とは違う超常現象をフレデリカは『すごい』と感想を漏らし、恐れる様子は皆無

だ。

このルーン魔術はミスカトニツク大学在籍時に、ケルト神話と北歐神話を研究する中で、魔術の秘法に触れたせいで使えるようになった。

まだ詳しい原理は分かかっていないが、少なくとも命を糧とするような悪趣味なものではない。

「Call of Cthulfu」に就職してからは、主戦力とするために、必死になつて腕を磨いた。ルーン魔術はルーン文字の解釈の仕方でも、かなり効果が変わってくるために、その辺は苦労したものだ。

だが仕事で使う度にアーカムの人間でさえ、悲鳴を上げて逃げてしまうのがほとんどだった。

「ちよつとビツクリしましたけど、ヘンリエッタが使うなら怖くありません」

「すごい子だよ、フレデリカは」

ふとサイファアの方を見るとベアトリクスを残して、全員蜂の巣であつた。

ガトリング機関銃の弾薬帯は百発近くも残っており、銃口を彼女の方に向けると、一気にハンドルを回し始めた。

弾丸はベアトリクスにギリギリ当たらないレベルの寸止めで、彼女の周りに全弾撃ち込まれている。コンクリートの床が弾丸で砕け、細かい粒子となつてドレスを汚してい

るが、それ以上に涙と鼻水で顔がぐちゃぐちゃであった。

それでも溜飲が下らないのか、フレデリカの店でも使った白銀の拳銃を左手に、それと同じ形をした漆黒の拳銃を右手に構え、ガトリング機関銃顔負けの連射をお見舞いした。

さすがに許容範囲を超えたのか、何も言わずにパタリと気絶してしまった。

ヘンリエッタとフレデリカの元に戻ったサイファーは、

「ちよつとはスツキリした」

と言うとフレデリカの方を見た。

「また会ったな」

「はい、ありがとう、ごさい……」

今度はフレデリカも限界を超えたらしい。あ、とだけ声を漏らすと、一気に崩れ落ちてしまった。

見舞いはふれあいを伴つて

綺麗な天井だ。

目覚めたフレデリカが初っ端から抱いた感想だ。記憶を整理する前に、自分の左横でリングとナイフを持って、皮むきに苦戦中のサイファーが映る。テンガロンハットとロングコートは脱いでおり、汚れていない白いシャツとブルージーンズに、白い革製のシャツプスだ。

面白いことにフレデリカが目覚めたことにも気づかず、時折「痛い」とか「いてえ」と呻いているのが、妙に笑いを誘う。ナイフで幾度も手を切っているらしい。

倉庫での活躍が嘘のようで、リングの皮むき一つ出来ない人間くさい不器用さと、荒事となったときの超然とした活躍のギャップに、人つて本当に不思議だ。と改めて認識する。

ンオ、と声を上げてサイファーが気付いた。体を起こそうとするフレデリカを止めると、左腕を指さした。

包帯とギプスでガチガチに固められている。黒人の男によつて与えられた傷の一つだ。その後因果応報という言葉を思い出させるように、ヘンリエッタによつて冷たい

彫像にされた男。傷は今までで一番重いように感じる。大学時代は骨折までいかなかったが、全身打撲なのは共通項であった。

「意識を失ってから、今日で二日目だ。腹は減ってないか？　今リングを剥いてんだけど、なかなか難しいな」

手つきを見てみると初心者にありがちな、刃物を動かして切ろうとしているわけではない。リングを動かして剥こうとしてはいるが、皮が短く落ちたり、手を切ったりしている。本当に皮むきが苦手らしい。これは真正のものだ。

「あ……できたら、お願いしま……あー」

思わず顔に手を当てた。身体が吹っ飛ぶほどに殴られ、蹴られたのだから、きつと酷いことになっているはずだ。それを異性に見られるのは、どうしても避けたかったが、眼前に手鏡を差し出されて、思わず目を剥いてしまった。

「傷の治りが随分早いって、医者も驚いていたよ。左手のギプスは三日もあれば治るって、そういう診断だ」

思わずハツとなって、サイファーから顔を背けた。

涙が目尻に浮かんだ。安堵ではない。恐れからくるものだ。秘密にしていたことがバレてしまった、という恐れからの。

大学時代に初めて受けた暴行以来、フレデリカの治癒速度は異常であった。というよ

り再生能力の域に達していると言った方が正確だ。

何しろ折れた歯が元通りになっているのだから、この事に気づいた当初はバレないよ
うに必死だった。

恐れる理由は両親の冷遇を思い出すからだ。フレデリカの両親は、彼女を何か化け物
でも見るような目で、左右で色の違う双眸と目が合わないように、そうやって接してき
た。きつと知られてしまったら、その人間も同じような反応を返すだろう。

どういうわけか、自分を二度救った彼に、この事は知られたくなかった。

サイファーから放たれる言葉に、戦々恐々としてっていると、何も言わずに彼は紺色のハ
ンカチを持つて涙を拭った。

「何も泣くこたあないだろ。考えようによっちゃあ、医者いらすじゃねえか。お前さん、
顔形は綺麗だし、可愛いって太鼓判押せるぐらいだから、もつと笑えばいい」

「でも」

「いいから笑え。極東には笑う角には福来る、なんて諺があるんだ。早起きは三文の得
と併用すれば、幸せが五割り増しになる」

「眉唾では？」

「極東にいるマフィアの友人の受け売りだ。騙されたと思ってやればいい。そもそも再
生能力なんざ、僕だって持つてる」

サイファアの言っていることは真実なのか、それとも励ますための方便か。

「だいたい、あんな弾丸の嵐で一発も食らわねえわけねえだろ」

「確かに言われてみれば、そうですけど……」

「だからな、あまり気にするんじゃないからさ」

そう言うってからリングの皮むきに戻る。さんざん手を切っているのに、血が一滴も付いていないのも、おそらくは再生能力の影響なのだろうか。

だが、再生能力が励ましの嘘であっても、フレデリカにとつては嬉しいものであった。ここ最近辛いことが連続したせいか、人の優しさが心身に染み渡るのだろう。

だから口が滑ったのかもしれない。

「優しい人なんですな、あなたは」

「ンだとオ!? もう一度言ってみろオ!」

「え、ええ、えええ!」

「二度と僕に優しいと言うんじゃないぞオ?」

先ほどまで不敵と穏和のブレンドのような笑みを浮かべていたのが、一瞬にして烈火のごとき怒りの表情へ変わった。

何とも変わりやすい表情は、フレデリカの脳裏に百面相という言葉を浮かべたが、瞬時にサイファアの地雷をいつ踏んだのか思い出そうとする。だが知り合って二回目に

会う相手の地雷など、さすがの彼女でも導き出すにはハードルが高すぎた。

だが理由は斜め上どころか、垂直上昇ものだった。

「こつちはやり方が残虐非道なことで通してんだから、優しいとか噂が立つたらナメられちまうよ……………」

そつぽを向いて愚痴った言葉が、あまりにも意外な理由の吐露に、フレデリカの琴線に触れたらしい。

「……………フフツ」

「何笑ってんだア!? って笑った顔メチャクチャ可愛いな…………」

「ちよつと…………可愛い理由だと思つてしまつて、すいません」

サイファーは沈黙した。というより微動だにしないという有様で、ナイフが手から落つこちだが、拾おうとする気配がない。まるで氷漬けにでもされたようだ。

そこにヘンリエッタが現れた。と同時に部屋の状況に、面食らつてしまつている。

ここでサイファーが解凍された。

「ヘンリエッタ…………この子、絶対大物になるわ。断言できるぜ……………」

「へ? いったい何のことだい?」

「僕に優しいどころか、可愛いまで言いやがるなんて……………あーもー、なんかむず痒くなつてきた」

「照れて……………いるんですか?」

一瞬だけ光どころか、時間概念さえ超越したような、気づいたらこっちを見ていたというレベルの速さで、フレデリカの方を向いて、

「悪いかよオゴリア!」

「ひっ」

「うわっ」

古今東西、驚いて飛び上がるようなことはあっても、怒鳴り声で人間を物理的に飛び上がらせるなど、百年に一度あるかどうか、そのレベルだった。

頭をかきむしると、橙色に近い髪が乱れていく。サイファアの髪はテンガロンハットとロングコートで分からなかったが、肩甲骨に届くぐらいには長い。

「身長二メートル超えの男が照れるなんて、一体誰得なんだか」

肩をすくめてヘンリエッタが眩くと、恨みたつぷりの視線をサイファアは向けた。

「減給すんぞ」

「申し訳ありませんでした」

「よろしい」

茶番めいたやりとりだが、気心知れているが故に出来ることだろう。

だがフレデリカは心配になって、ヘンリエッタの袖を引くと、

「アレは七割冗談だよ」

と小声で返したが、残りの三割は本気なのか。

言わずに飲み込んでおいたのは野暮なのを感じたのが四割、残りは突っ込んではいけないようなものを感じたからか。二つとも同じような気がしたが、気にせず放っておくことにする。

「さて茶番は終いだ。まずは自己紹介から、僕はサイファー・アンダーソン。実力行使請負業『Call of Cthulfu』の社長だ」

「はじめまして、フレデリカ・エインズワースといいます」

「次に状況を説明すると、あの倉庫で君はブツ倒れたから、かかりつけの医者の方に運び込んで、処置してもらった後、僕の家に運び込ませてもらった。何か質問は？」

質問は一つあった。

「なぜ、あなたの家に？」

「荒事屋は方々から恨みを買っているからな。病院とかで、こういう話は出来ねえんだ。誰が聞いているか分からねえし、医者だって金欲しさに患者の情報を売るからな」

サイファアの言ったことはメチャクチャなようで、アーカムなら誰もが心得ていることだ。他人をホイホイ信用しようものなら、骨の髄までしゃぶり尽くされて、何も残らない。

「んでもって、君には身の振り方を考えて欲しい」

人差し指を立てて、巨漢が迫った。銀灰色の瞳が、心の奥底まで射抜くようで、だが目を逸らしたくても出来ない。

ぞつとするような声で、ぴしやりと告げた。

「二つは僕らの元で事務員及び雑用として働く。待遇は全力で良くしよう。働きによつちや昇給も考えるし、衣食住には困らないようにする。だが荒事屋に関わるということになるから、命を狙われることは覚悟しておけ」

次に人差し指をそのままに、中指を立てた。その時までが、もどかしく感じて不快感にも似た、落ち着かない感覚が渦巻いた。

サイファアの表情は穏やかなもので、口元に笑みまで浮かんでる。それも戦闘の際に浮かべる不敵なものではない、相手の緊張を解きほぐそうとするものであった。

「もう一つは僕が斡旋したレストランのウェイトレスとして、今までの日常通りに暮らしていく。こつちも衣食住には困らないようにするし、店長も良い人間だからな。僕としては、こつちをオススメするぜ」

腕組みをしてサイファアがフレデリカを見据える。

ヘンリエッタも何とも言い難い顔をして、彼女を拒むような意志が見て取れる。

二人ともフレデリカを自分達の世界に引き込みたくないのだろう。日の当たる場所

を歩いて欲しい、そう目が訴えている。

「それでは……………ウエイトレスの方向で考えさせてもらいます」

「そう……………なら良いさ。これも人生の選択だよ」

一瞬だけ逃した魚は大きいという状況に浮かべるような顔をしたが、あまり気にした様子はない。ヘンリエッタも安堵の表情をしている。フレデリカは争いの世界には、弱すぎて、優しすぎた。銃を持たせても威嚇射撃さえ、ままならないのだから。

「何かあったら、コレに連絡しろ」

手渡されたのは電話番号の書かれたメモ。

震える右手で受け取ってから、これからのことを考えると目が回りそうだ。

きつとベアトリクスは諦めていない。その確信が胸の内に鈍痛となつて、ぐるぐる
と、巡り巡つて気分を静めていく。

近い内に再度の襲撃を受けようものなら、きつと心は砕け散つてしまう。大学時代に受けた不可逆の傷は、きつとフレデリカが考えてるよりも、ずっと深いのだから。

「もしかしたら、また、お世話になるかもしれません」

「だろうな。あの女がアレで諦めるようなタマじゃねえ。もしそうだったら、今回のことだつて起こらなかつたはずだ」

「……………なんで」

心の奥底に秘めていた、やりきれない思いが、堰を切つて溢れ出そうとしている。止められない。止められるわけがない。

一度でも起こつた激流は、水が無くなるまで止まることを知らないのだから。

それは今のフレデリカも同じことだった。

「……なんで、私ばかり……こんな目に遭うの？ 普通に、暮らしていた……だけなのに」

感情の激流が渦を巻いて、涙とともに止めどなく流れ出ていく。

口を押さえても嗚咽が隙間から漏れ出て、布団に数センチほどのシミがぼつぼつと出来上がっていく。

止められない。止まらない。枯れるまで、出続けるだけなのだから。

俯いたまま、自由に動く右手で布団を握りしめる。

そこに温もりが覆い被さつて、じんわりとした温もりを伝えてきた。

「誰だつて、一度はそう思うときがある。お前さんみたく、自分の境遇だったり、他のヤツらだと生まれとか、性別でも『なんで自分が』という風に悩む。でも、それは天災のようなもんだ。やってきたら巻き込まれるしかない。変えようがないのさ」

「それじゃ……私は、どうした、ら、いいんですか……？」

「泣けばいい、胸ぐらいなら貸してやる」

「それじゃ……もつと寄ってください」

何も言わずにサイファーは椅子から身を乗り出し、フレデリカに身を寄せた。

豪壮な筋肉を包み隠す、純白のシャツに淡い金色が埋まった。

部屋中に嗚咽と鳴き声が響いていた。



本日二度目の起床をフレデリカは迎えた。

目覚めて早々にサイファーが言った「泣けばいい」の一言がフラッシュバックして、顔に熱が集まる感覚を覚えた。

十中八九、泣き疲れて、そのまま寝入ってしまったのだろう。心のつかえは取れたかもしれないが、何か大事なものを捨てたようで、いたたまれない気持ちになった。

のろのろと起きあがってベッドから抜け出すと、ガクツとよろめいた。丸一日は眠りっぱなしだったそうで、不用意に歩き出せばバランスを崩すのも自明の理であろう。左腕が自由でないのも追加事項か。

ベッドのすぐ側に愛用の編み上げブーツが置いてあった。衣服は倉庫にいたときのものから、グレーがかかったネグリジエに変えられている。

窓の外をのぞき込むと、日は完全に沈んでおり、夜の帳が降りたばかりであった。

ブーツを履いて壁に手を着きつつ、足取りをしつかりと保つように歩いていく。足腰が立たないばかりというのに、ルームシューズの一つもないのは恨みたいが、ここは他人の家である上に、置いてもらってただけ有り難いと思うべきだろう。

リビングのドアを開けると妙なニオイがした。微妙に違う部分はあるけど、これは煙草のニオイだ。祖父も吸っていたから、特有のニオイには敏感に反応するものだ。フレデリカ自身、吸わない人間であるからか。

三人掛けぐらいの大きなソファアームに座っていたサイファーが、葉巻片手にこちらを向いた。体が大きなせいから、ソファアームが二人掛けに思えてくる。

「ソア、別に寝ても良かったんだけど」

「なんか……目が冴えてしまつて」

「そうだろうな、あんなことがあつたんだ。眠れなくなるのも納得だ。おまけに丸一日寝込んでいたしな。腹は減つてないか？」

「あ……その、空いてはいますけど」

「なら食いに行こう。着替えはヘンリエツタが、お前さんの家から持つてきた。寝てた部屋においてあつたはずだが」

「わ、分かりました」

部屋に戻ってみれば、黒檀であろうチェストの上に膨らみきった紙袋が鎮座している。本当にお世話になってばかり、と思つて中を覗く。

普段着として買ったブルーのドレス。パフスリーブで中流階級の身が着るには妥当なデザインと価格、そして逆V字に切られたスカートから、裾にレースをあしらつて青薔薇の模様を施した中着のスカートが覗くデザインがお気に入りであつた。

いそいそと着込んで、ブラウスに赤のリボンタイを締める。

部屋の姿見で確認してみると、人前には出れる格好だつた。少し瞼が腫れているのが気がかりだったが、帽子か何かで目元を隠しておけば問題ないと判断した。

あとは最近になつて寒くなつてきたので、防寒としてショールを巻いておけば大丈夫であろう。幸いにもショールも紙袋の中に入つていた。ヘンリエッタのチョイスに心から感謝した。

リビングに戻つてみるとサイファアの姿はない。ソファアに座つていた、彼の大きな姿に面食らつて、細かい部分が分からないリビングだが、派手な内装だつた。

壁紙が茶色で幾何学模様のようにだつたり、ゴツイ角が生えた牛に見える動物の骨が飾つてあつたり、壁に拳銃やらウインチェスター・ライフルが鎮座している。こんな空間で落ち着ける人間はサイファアだけだろう。

「戻れるかな……?」

呟いたのは不安からなる一言。

きつと非常識とも言える内装を見てしまったせいで、また溜め込んでいたものが堰を切ったのか。

ウエイトレスとして当面は生きていくことを決めたが、個人の選択だけで日常に戻れる日は来るのか。どのみち命を狙われるのなら、荒事屋の片棒を担いだ方がマシなのかもしれない。

だけどフレデリカの根本的な部分、魂というべきものが戦いを拒む。その板挟みになって、彼女は道を決めあぐねた。最終的には杞憂な問題だと一蹴して、ソファーに座ってサイファーを待った。

「待たせたな」

振り向いて——そして固まった。

「ンン、変か？」

「いえ、似合っています、とつても」

グレーのスリーピースに、深緑色をしたダブルブレストのコートを羽織っていたサイファーは、荒事屋だとは思えないほどの品性があった。

コートと同じ色のソフト帽をかぶって、割と長い髪は髪紐で束ねている。それだけでも十分に様変わりするものだった。

「お手をどうぞで」

差し出された、白い手袋に包まれた、大きな手を差し出されて。どうすればいいのか、フレデリカは迷いに迷ったが、手を取りやすいように屈んでくれてもいる、サイファアの厚意に甘えることにした。

体格差は大きかったが、エスコートは手慣れていた。歩調を彼女に合わせて、半歩先を行つてくれる。あらかじめ呼んでおいたのか、止まっていたガーニーのドアも開けてくれた。

並んで座つた車内で、フレデリカは訳も分からず、妙に緊張してしまつている。右隣に座つているサイファアの存在が気になつて、横目でチラチラ見てしまつたが、気づく様子はない。もしくは気づいていいる上で何も言わないのか。

「ディナーは期待してくれていい」

「おいしいところ、なんですか？」

「ンナー、隠れた名店と言うべきか。ヘンリエッタから聞いたが、あの元々の家はレストランだったそうだな」

「借金さえなかつたら、私が二代目だったんですけど」

「料理が出来るのか？」

「人並み以上には」

「言ったな？ 今度作ってもらおうか」

「希望はありますか？」

微笑んで問いかけると、サイファーは腕を組んで唸ってしまった。

彼もフレデリカの祖父と同じように、味にはうるさい人間かもしれない。

「カレーかな。しばらく食べていないんでな」

「得意料理の一つです」

「期待して良いかい？」

「お眼鏡に叶うか分かりませんが、不味くならない保証はします」

意外と俗っぽい答えに、思わず笑みがこぼれた。

サイファーが食べるのだったら、大鍋に五人前ぐらいは作っておかないと、体格相応の胃袋を満たすことは叶わないかもしれない。もしかすると、それ以上だろう。

そうこうしている内に、そのダイナーを食べる店に着いたらしい。ダイナーを彷彿とさせる簡素な作りだが、それが気にならないだけの気品と落ち着きのある内装だ。

訪れている客も全員が正装しているあたり、それなりに地位のある人間が、お忍びという形で来るのだろう。少しばかりの庶民的な雰囲気、来客の肩の力を抜いているのだろう。

「（注）注文は？」

品のいい装いのウエイターが、席に着いた二人の元にやってくる。

「ン、セーケイグヤーシユにテルテット・パプリカ」

「私はフーゼレークとテルテット・カーポスタで」

「かしこまりました」

恭しくお辞儀をしてウエイターは消えていった。

周りの客は語らいつつ、料理に舌鼓を打っている。一緒に食事をするにも、気心知れた人間の方が変な気遣いをしなくて良い。

ただ惜しむべきは目の前に座っているのは、知り合い以上友人未満の巨漢で、優しくしてはくれるものの、フレデリカにとっては取っ付きづらい人間だ。冗談は問題なく通じるだろうが。

「緊張してる?」

ほんの少し小首を傾げて、サイファーが銀灰色の双眸で見つめながら、問いかけた。

「はい、ほんの少し、ですが」

「まあ、料理を待つ間の話にも困りそうだ。共通の話題があるかどうか」

「話題はアナタが振ってください」

ガーニーの中でも同じように、腕を組んで唸った。

「貧弱なボキヤブラリーを先に謝ろう。大学でどんなことを学んだ?」

サイファーなりの気遣いか、ベアトリクスのことを思い出させないように、なるべく大学のことを聞かないように努めて、他の話題を探ろうとしたのか。

だが彼の脳内のボキャブラリーは、他の話題を探るには貧弱すぎたか。

「そうですね……機関学と医学の二つでした。あとは考古学の教授とは仲良くやってみましたね」

「ほほう、ミスカトニツク大学って図書館があつたら？ 割と入り浸っていたりしたのか？」

「両手の指で数える程度でしたけど、一度だけ考古学の教授がナコト写本のレプリカを見せてくれました」

サイファーの目が、ほんの少しだけ見開かれた。

ナコト写本。

名状しがたき外法の理、外の次元宇宙、届かぬ高次元領域の、冒瀆的叡智の数々を記した魔導書と言っているいい代物。ミスカトニツク大学に写しの一つがあるといわれていたが、そのレプリカをフレデリカは見ていたのだ。

「平気だったのか？」

「その……引き込まれるような感覚はありませんでしたけど、噂に聞くほど辛いものでもありませんでしたよ？」

「なんか嫌な感じがするね、それが仮に本物だとしたら、ナコト写本の内にいるものに魅入られていたかもだよ」

「そ、そんなこと言わないでください！ 不安になって眠れないじゃないですか」

「不安になって眠れないとか、あまりにも可愛すぎるんですけど」

「……………からかつてます？」

鉛のように空気が重く、ずしりとサイファーにのしかかってくる。

彼が口を開いたのは一分後のことであつた。

「……………七割は、な」

「からかつていたんですね？」

「……………はい」

「まったく、もう！」

頬を膨らませて怒りを露わにする様は、元から幼く見えるフレデリカを、さらに年下に見せる。動きや立ち振る舞いの所作が、完成された淑女として出来上がっているからか、そのギャップは大きい。

それ故かサイファーも素直な感想が、意識せずに口から飛び出した。

「ホントに二十歳超えてんのかね？」

「……………どうせ童顔ですよ」

「世の中を探せば、それが良いという人間もいるよ」

「アナタも、そういう人間なんですか？」

「若ければ若いほど、女は瑞々しく僕に耐えてくれる」

フレデリカは彼の言っていることが、だいたいは理解できたが、反応を返す気にはなれなかった。

そういう意味合いを含めた、猥談めいたものは願い下げなのだから。



電球も、緊急の機関灯もない、いくつもの壁のようなもの——本棚が並んだ空間で、女のものと思しき影が蠢いている。

どことなく彼女はやつれてるようで、目だけがぎらついている。まるで幽鬼そのものと言える、元の淑女たる姿など微塵も残っていない。

ただ一冊の本を探して、影は右往左往とするばかりだ。

どこかの扉が開いた。

初老の男が右手に電気式のカンテラを持って、影の元へと歩いていく。

「君は!？」

男の顔が驚愕の一角に染め上げられ、女の目には危険すぎる光が宿った。

乾いた破裂音、花火にも間違えられる、死をもたらす音。

それは男の胸を穿ち、着ていた白いシャツに赤いシミを作り出した。そこを押さえ、女に手を伸ばしたものの、何も出来ずに力尽きて、倒れた。

FNのM1900の銃口から硝煙が立ち上っているのを、女は吹き消しもせず、動かなくなつた男の身体をまさぐつて、鍵束を探り当てた。

女が闇に消えていく。

戻ってきた彼女の手には、一冊の本が握られていた。

想いは同衾で芽生えて

妙な温もりに包まれて、まどろみの中から目覚めたフレデリカは、温もりの源を意識した瞬間に赤面した。

腕の中だ。

サイファアの腕の中にいた。

フレデリカの目の前に白いシャツに覆われた、彼の逞しい胸板がある。

彼女の服は昨日に食事に行ったままで、シワになっていているか、どうか、気にする余裕は皆無だ。そこそこに値の張る品であったことを、思い出せる余裕も、また然りだ。

今の彼女は背中と腰に手を回されて、がっちり抱きしめられている。異性の腕の中にあることなど、初めての経験か、思考が全く回らないのだ。

身長差があるので顔と顔が至近距離にいるという事態は免れたが、もしそうなったら声もなく睡眠とは別方向で、フレデリカの意識は闇に落ちていっただろう。胸板に顔を埋めている現状が、気絶せずに済んでいる最大の幸運と言うべきか。

んん、と唸り声が聞こえてきたかと思えば、銀灰色の双眸が見下ろしてきた。サイファアの方は、さして慌てる様子もない。異性との同衾はおろか、ベッドインから一夜

を過ごすなんてことも慣れているのか。

「おはようさん、とりあえず昨日は大変だったな」

フレデリカは何も言えずに、顔に血が集まっていくのを感じた。耳まで真っ赤になったのを、サイファーは腰に回してある右手を頬に添えた。

何をするのか分からないが故の恐ろしさか、両目をつむって歯を食いしばる。身体は小刻みに震えて、思考はホワイトアウトしたように真っ白になっている。

「ナチュラルな動機で、しなだれかかられたのは、僕の人生でもないんだよな」

「しなだれ……かかった？」

薄目を開けて、恐る恐るといったフレデリカに、サイファーは笑って返した。

「ああ、昨日のダイナーもどきから帰った後、僕とお前さんで一杯やっただろ？」

「はい……確かに、アナタと飲みましたね」

「酒が入ってるから、分かんないのかな？」

「いえ、覚えていますが、全部、覚えていますから」

——だから私は、昨日の記憶を引っ張り上げる。お酒のせいで、混沌とした記憶の泉から。



帰ってきてから、私はサイファーと顔を合わせづらかった。彼の言った『可愛い』という言葉が渦巻いて、妙な気分させられる。多分、相手によっては『綺麗』に変わるのかも。

定番の口説き文句なのだろうか。その言葉を何人の女性に向けてきたのか、私にも、ヘンリエッタにも分からないのだけれど。

でも、言葉では言い表せない、なんとなくの部分で、むず痒い感じがしてならない。理由はないけれど、はつきりと分かる、この感じ。

今までに味わったことがない。

今まで経験したことがない。

そして、生まれて初めての感覚。

胸のあたりを苛むように締め付けられるという、こんな感じで形容できる。

恋愛小説では、決まると言っているほどにある、恋する女に起こる現象が、私に起こっているのか。

否定したいけど。

強く、否定したいけど。

——でもサイファー自身はイヤじゃない。

成人女性に分類される程度の人生だけど、それでも彼が本質的に優しい人だって、よく観察すれば分かると思う。

それを隠そうとして、非道い人間の仮面を被っている、不器用だけど優しい人。本当に非道い人なら、泣いてしまった私に胸は貸さないもの。

思わず泣きついてしまったけど、誰も咎めないでしょうし、それぐらいのことは許されても良いと思う。そうじゃなかったら、きっと世界は生きづらくて息が詰まると思う。

今サイファアはリビングのテーブルに、グラスと酒瓶を広げて、機関式冷蔵庫から氷の入った器を出している。ボトルのデザインからして高級品だ。クリスタルガラスで作ったボトルに、裸婦のレリーフを施しているなんて。少々アレとしか言いようがないけど、男性にとっては嬉しいものなのかもしれない。

お酒好きな人なのだろうか。そうだったら私とは話が合わない。あの独特の芳香を放つ液体に、私の身体は脆弱すぎる。簡単に言ってしまうえば、私は下戸だった。一杯だけでも飲めれば良い方で、二杯目になると翌朝は確実に二日酔いになる。ヘンリエッタから貰って、一本だけ飲んだクラレットは美味しいと思えたけど。

「フレデリカ、一杯どうだ？」

その申し出は無碍には断れないような感じがして、高級酒というエサにも釣られてし

まった。安酒の恐ろしさは身を以て知ってる。二日酔いどころか三日酔いだっただもの。自分でも意志が弱い部分があると自覚してはいるけど、思わず首を縦に振って快諾してしまった。

真紅の液体に満たされたグラスを、彼は手渡してくれた。赤ワインを飲むのは初めて——というよりワインを飲んだのはクラレット以来だった。

「いただきます」

「なかなか、一人で飲むばかりじゃ、なんか味気なくつてね」

「隣、いいでしょうか？」

「ああ、好きな椅子に座ればいい」

座ったのはいいけれど、隣にいる彼の存在が大きくて、目の前にあるグラスをどうすればいいのか、分かってはいるはずなのに、どうしようもなくつて。そう、こんなに近い距離にいるのを初めて、初めて、私は意識している。

透明の器に満たされた赤い液体。それだけなのに見たこともないような高級感を放って、私の唇が触れるのを待っている。そんな気がしてならない。あくまでも気がするだけだが。

ほんの一口だけ含んで、月並みな表現——芳醇な香りと濃厚な味わい——が良く似合っている、普通の感性なら味わって飲むようなものを、あの人は一気に飲み干して二

杯目を注いでいる。

金回りがいいのだろうか。あれだけの力を持っているのなら、仕事だつて望んでもいいのに舞い込んでくる、そんな忙しい生活をしているのかもしれない。

ツمامィが欲しいな、と彼は呟いて二杯目も空にしてしまった。本当にピツチの早いんだ、きつと恐ろしいくらいに、お酒に強いのもかもしれない。おつまみには詳しくないから変なもの作れないし、ここの台所を使うのも気が引けた。台所を聖域としている人だっている。私のおじいちゃんがそうだったもの。

私のおじいちゃん。今までで心から私を受け入れて、ここまで育ててくれた偉大な人。一生忘れることはできない、忘れるなんてことは、おじいちゃんに失礼だから。

「疲れてる？ 一口しか飲んでないみたいだが」

「……色々と、ありすぎましたから」

「ああ、ありすぎた。君の年では耐えきれないほどに」

「……私、二十歳超えています」

お決まりの反応を彼はした。私の実年齢を聞いた人間は、もれなくぼかんと口を開けて啞然とする。ティーンエイジャーに間違えられる、そんな顔を羨ましく思う人間もいるとヘンリエッタは言うけれど、たまに飲みたいと思ったときにお酒がなかなか買えないのは不便だと思う。

その都度、私は望む人間には与えられず望まない人間に与えられている。そんなことを思ってしまうのだ。与えられるものが容姿や才能ならいいけど、運命まで与えられてしまうのは少しだけ違うと感じる。

予定説を掲げているカルヴァン派も、天国に行けることを信じて努力せよということを書いてあるのだから、あらかじめ決まっているなんて努力を否定するに等しいもの。私がここで飲んでいるというのも決められていた、なんてことになったら、せつかくのお酒の味も分からなくなってしまう。

「世の中、わからないもんだねえ」

「私もこうやって晩酌をするなんて、思いもよりませんでした」

「事實は小説より奇なり、とは誰の言葉だったか」

「バイロン、だったはずですよ」

「そいつに限らずだが、こうやって後世に残る名言や格言の類を言える人間って、いったいどんな頭脳をしているのか。どういう人生を送れば、そんな言葉が出てくるのか。僕はいつも疑問に思うんだよ」

「私は、その“何か”は同じものが一つとしてないから、こうやって残るのだと思います。私たちは“何か”に気付けるほど生きてないのか、あつても気付かずに通り過ぎてしまった、そういうことなのでしょう」

「全ては経験、か。僕らもまだまだだということかな」

「私も弱いですから」

そう、私は弱い。

情けないほどに脆弱だ。

本当に強い人間ならベアトリクスの特だつて、その取り巻きに囲まれたつて、何らかの手段で切り抜かれる。

それなのに私には自分の力も周りの力も、足りなさすぎて小さすぎる。風前の灯火と言つていいほどに、世の中の不条理に対して無力だ。

だから——だから。

サイファー・アンダーソンという名の、強く、不器用だけど優しさを持っている彼が、たまらないほどに眩しくて、その都度、自分が情けなくなってくる。

だから——だから。

すがりつきたくなつた。情けない人間が決まつてやるように、頼るのではない、一方的な依存めいて、しなだれかかっていた。

気付かない間に私の精神は、人が持つ代用手段のない温もりを欲していたらしい。

膝に置かれていた、グラスを持つている手とは逆の、大きな左手に身体を預けていた。

どんな顔をしているのか、一方的にすがりついて、彼の反応が返ってくるのが、たま

らなく恐ろしいものに感じてしまう。

けれども、けれども。

左手を通して伝わってくる温もりは、私の固まってしまったもの全てを、溶かして、ほぐしていくようで、いつまでもこうしていたかった。

悪い女だと胸中で愚痴ってしまうけど、同時に弱い女でもあるから、自覚してしまっているけれど。だから支えてくれる、依存の対象とも言うべき人間が必要だけど、でも共依存の関係はごめんこうむる、そういうズルくてワガママで卑怯な女。それがフレデリカ・エインズワースという女の本質かもしれない。

だがそう思ってしまうと不思議と彼に預ける身体は、さらにサイファーを求めてしまう。

だから——反応できなかった。

「辛かったんだろ？」

頭に置かれた、大きな手の温もりに。

「頼りたいときは、遠慮せずに頼ればいい」

違う。

違う。

全然違う。

これは頼っているのではないの。独りよがりで自分勝手に一方的な依存。

だから、あなたの手が私の頭に置かれて良い理由ではないの。むしろ忌避されるべき、唾棄されるべき、孤独を埋めるだけの行動なのに。

なぜ、なぜ、なんで。

あなたはそんなに、私に優しくするの？

やめて、やめて、その優しさが私の心を焦がして、蝕むような鈍痛を植え付けるから。だから、お願いだから手をどけて欲しいの。

「違うんです……違うんで、す……違うん……で、す。頼って……いるんじゃ、ないんです。だから、優しく………しないで、ください、い」

涙と嗚咽が悲しみによって絡められて、震える声での吐露となって、私の口からこぼれ出て行く。

顔を上げられない。どんな顔をしているのか、それを知りたくないから。アナタが困った顔をしているのか、それとも憐れみなのか、いや違う。本当は見るということ自体ができないから。

「……っ、今だけ、私の……そばに、いてください」

「今だけでいいのか？」

ずっと。

そう言いかけて慌てて口をつぐんだけど、もしかしたら見透かされているのかもしれない。ヘンリエッタや他も友達が言うには、今ぐらい感情が高ぶっていると、人一倍いろんなものが出てくる、そういう人間らしいから。

彼とずっといられば、きつとそれほどに楽なのか。溺れてしまうには、この人はちようど良い人なのだと思う。

ぶつきらばうだけど優しくて。

きつとピンチの時には、すぐに駆けつけてくれる。

そしてどこまでも頼りなる、それほどに強い人。

「そばにいても……いいん、ですか？　こんな私、でも」

「気が済むまで、愛想が尽きるまで、その時がくるまで、ずっといればいい」

「ありがとう……ごさい、ます」

その時になって、私はようやくサイファアの顔を見た。

困った顔をしているわけでも、哀れみの表情でもなかった。私に向けられているまなざしの正体は、気遣いだった。

しがみつくように、いつの間にか腕を回していたけれど、彼は嫌がる様子も見せないで、私の身体を抱き寄せた。

温かい。

暖かい。

そして——熱い。

サイファーが触れている部分が熱くて、それがじんわりと全身に広がっていつて、心地よさと恥ずかしさに近い何かに挟まれて、回している腕に力が入る。

もつと身体で、心で、魂で、彼の全てを感じたい。私を受け入れる、そう言ってくれた彼を。

俗っぽい言い方をするのなら、私はチョロい女とでも言われるのだろう。いや、十中八九、その烙印を押される。でも、彼に向ける想いが一過性のものか、未永く続いていく真実のものかは、まだ分からないから。

だから、今はそばにいて見極めるの。この想いは胸に封じて、彼を見続けるために。「今日一晩中、寂しくないようにしてやる」

「やっぱり、アナタは優しいです」

返ってきたのは、照れ隠しの大声ではなかった。

「お前さんなら、優しくしてやってもいいかもな」

その言葉がどういうわけか、たまらないほどに嬉しくて。顔にどんどん熱が集まっていく感覚が、はつきりと分かるくらいに強くなっていつて。

全てはお酒のせいなのだろうか。と思ってしまうけど、実際はお酒はただのきつか

けにしかすぎなくて、晩酌に付き合ってから抱いた想いの全ては、私の内に眠っていただけなのかも。

「そろそろ一日の終わりにしようか？」

「そうですね……私も、眠たくなってきました」

襲ってきた睡魔に臉をこすって、思わずあくびが出そうになる。すんでのところで止めたけど、私の睡眠時間は子供並だから結構な時間になる。もう少しだけ彼にすがっていたかったけど、それも終わりにしないとサイファーに悪い。

手を引かれるままに連れて行かれたのは、黒檀の重そうな扉。Bedroomと真鍮のような金属のプレートがある。

ベッド、寝所、言い換える言葉はいくつもあるけれど、二十歳を超えた男女が、同じベッドの上ですることが、少しでもそういうことを知っていれば、すぐに出てくる。

悔しいことに私はその方面の話題に弱いから、そういう状況になってしまったら、ひっくり返って気絶してしまう自信がある。妙な自信だけでも。

煙草のニオイがするサイファーのベッドルームに、私は連れてこられて、抱え上げられたかと思えば、抱きしめられたまま横たわる。

「おやすみ、フレデリカ」

何度も聞いていたくなる、甘い声で就寝の言葉に、

「おやすみなさい……」

私も同じように返して、その日のことは終わったのだ。

これは純粋に床を共にしているだけで、その………情交に及ぶというわけではない。そんなことを思い浮かべてしまうのは、きつと色々なことが、暴力的で陰惨な、このアーカムに渦巻く悪意の為すものを短期間に受けすぎたから。

それから私は、彼の腕の中で目を閉じる。

人生で初めてだと思う——まだ分からない恋物語の始まりを、感じて。

それが良いことなのか、どうなのかは分からない。

この私の想いだって、恋心とか、恋慕に分類できる感情や想いなのかも、よく分からない。

でも——悪い気だけは、しなかった。



——思い出した、というよりは思い出してしまったと言った方が良いかも知れない。恥ずかしくて、顔から火が出そうになるというか、全てはお酒のせいだ。

紅潮させた顔をサイファアの胸板に埋めて、慌てて離れた。それを見たサイファアは頬をゆるめて、穏やかに微笑んだ。

花も恥じらう「可愛い」と「綺麗」の二つが同居する、十七歳という見た目は、フレデリカが元から持ち合わせている外見の美しさも相まって、相当な破壊力を生んでいる。

そんな彼女が羞恥に頬を染めているのは、眼福以外の何物でもないのだろう。

「とりあえず起きようか。じゃないと、一日が始まらない」

「そ、そうですね、あ、朝ご飯はどうしましょうか？」

「作ってくれるのか？」

「料理は人並み以上、そう昨日言ったはずですけど」

「そうだったな、じゃあ頼むよ」

脱兎のごとく早足で去っていったフレデリカを目で追ったが、にわかに顎に手を当てたサイファーは思い出したかのように、ぽつりと呟いた。

「……………料理なんてやってなかったな」

それすなわち、まともな食材など入っておらず、酒類にツマミとなる出来合いの総菜。

二本ほどのバゲットと調味料に、数個ほどの卵があるだけだった。あとは飲みかけの牛乳があったはずだ。

キッチンに向かっていたであろうフレデリカは、きつとどんな反応をしているのか、考えるとそれはそれで楽しいような気もするが、これでは人を苦しめて楽しむ悪癖

が丸出しも同然だ。

きつと「信じられない」とでも言っているのだろう。戦闘能力はアーカムでもトップクラスだと自負しているサイファーだが、その家事能力は最底辺の領域なのだから、料理技術など望むべくもないために、冷蔵庫には食材がほとんど入っていない。

我が家の管理は実力行使請負業で稼いだ金で人間の一生では使いきれないだけあるのだから、それで雇った家政婦に掃除や選択をさせていた。

「さて、海坊主のところは開いているかな？」

行きつけの喫茶店でモーニングセットをいただくこうかと、リビングを訪れると砂糖の甘い匂いがした。いや砂糖だけではない、牛乳の要素もあるだろう。優しい甘さという表現がしっくりきた。

「あの……あるだけの材料で、フレンチトーストのようなものを作ってみたんですけど……？」

「さしずめフレンチバゲット、かな？」

バゲット一本分を斜めに切ったものに、フレンチトーストのようにして焼き上げたのだろう。ご丁寧にごコーヒーと紅茶まで用意してあるあたり、気が利いていると言えた。

椅子に座ってバゲットを一つ口に運んで。

今までに味わったことのない、優しくも薄すぎない甘さに衝撃を覚える。

——なんだ、コレ？

——なんだ、コレ？

——バゲットはこんなウマイモンだったか？

瞬く間にフレンチバゲットを平らげると、フレデリカの方に向き直った。用意されていたコーヒを一気に飲み干して、

「コレ、メチャクチャうまかったわ」

「ありあわせのもので作っただけだったんですけど、お気に召していただけたなら、とても嬉しいです」

「もつと食いてえな、たくさん、色んなものを」

はにかんだように笑った。

ありあわせで作ったものでも、喜びの感想を貰ったことに、フレデリカも笑みがこぼれる。

「あなたが望むだけ作りますよ。そうやって喜んでもらえば、私は嬉しいんです」

「なんか……………同棲するみたいだな」

同棲、と呟いてから数秒後、爆発したようにフレデリカは耳まで真っ赤になった。何を考えたのかは言及しない。主に彼女の名誉のために

「昨日もプロポーズめいた言葉も聞いたし、清楚で純粹に見えても、実際のところは大胆

なのかな?」

「あ、あれはお酒のせいで……………」

「本当は本心から出たんだろう?」

「ち、ちち違いま…………つ!」

「あーあ、真つ赤になつちやつて」

「一体、誰のせいだと思ってるんですか!」

「耳年増なお前さんだろう? 同棲という言葉だけで何を考えたのやら」

「う〜! う〜!」

このサイファーという男、女性をからかって楽しむあたり、実にド級のサディストである。ド級の称されるあたりに、その趣味の悪さが凄まじいのが分かる。

「しばらく出かけるから、留守番を頼む」

「帰るのは、いつになるんですか?」

「午後には帰ってくる。この家にあるものは好きに使っていい。ソファの間には護身用の拳銃が隠してあるから、いざという時には躊躇うことなく使え」

「え? そ、そんなものが」

「あと、この金は好きにしろ。冷蔵庫に入れる食材を買ってもいいし、お前さんの良識のままに使ってくれ」

渡されたものを見て、思わずひっくり返りそうになった。五ポンド紙幣が五枚、一ポンド紙幣が十枚、十シリング紙幣が三〇枚もある。計四五枚の女王陛下が、フレデリカの細腕にある。

これほど大量の女王陛下の束など、フレデリカは生まれて初めて手にした。その重みに例えようもない、何かの貴金属めいた重圧のようなものを感じた。割と貧乏性な部分もあるのだから、大金を渡されても持て余すのがオチだ。

気がつけばサイファーは、いつものロングコートにテンガロンハット、ジーンズに足の大部分を覆っているシャツプスという、ガンマンめいた出で立ちに変わっている。

「いつてらっしやい」

玄関に歩き出した背中に、金鈴を転がしたような声が届いて、思わず振り向いた。

昨日の外出着の上からエプロンを着たフレデリカが、微笑を浮かべて手を振っていた。

「いつてきます」

ドアの蝶番が軋んだ。

教鞭を取るものは来訪を予期して

風が吹き抜けていく。

正確には僅かな風も遮られることなく、さほど広くない店内の隅から隅まで吹き抜ける。そういう意味である。つまりは閑古鳥が大合唱ということだ。

その閑散とした店内に、単独で閑古鳥の大合唱をお通夜に変えた、それほどの質量を持った男が現れた。ロングコートのガンマン気取り。そういう男だった。

すん、と男の鼻が動いた。首が左右に動いて、刃のごとく磨かれた眼光を、誰もいない店内に振りまいていく。それがカウンターに止まった瞬間、彼の右手が閃いた。

空を切つて飛んだボウイナイフは、浅黒い長く太い指に挟み取られ、男の手に弧を描いて投げ返される。

「腕、落ちちやいないようだな」

「アンタは衰えたように感じたが」

「肩を見てから言いやがれ」

現れた浅黒いスキンヘッドの大男は、言われたとおり自分の肩を見た。

一本、よく見ないと分からないほどの、耐久性という言葉とは無縁なほど細い針が刺

さつていた。

「それ、毒針だったら南無三してたぞ」

「搦め手か……正々堂々は前時代的になつたらしい」

「手段は選ばないのが、最近の流行らしいね」

「なら引退するべきじゃねえか？　最近になつて女囲つてんだろ、サイファー？」

「誰から聞いた？　この海坊主。出所次第じゃタダでは済まさねえ」

この浅黒いスキンヘッドの大男の名はフランク・アーミティッジという、元荒事屋にして喫茶店「アルカンシエル」の店主である。店名を示しているのか料理の皿の縁には、円形の虹が描かれている。

その皿を拭くのはギャルソンの制服をはちきれんばかりに押し上げる、豪壮な筋肉。身長は一九〇センチを下らない。それほどに大きな男だが、サイファーには及ばない。

そんな彼がポップな趣味にあふれる虹の模様の皿を吹いているのは、一種のシチュールギャグのように感じられる。彼にとっては普通に仕事をしているだけなのだ。

カウンターの席にサイファーが座ると、間髪入れずにミルクと砂糖を多分に入れたカフェオレが出てくる。

「ヘンリエッタ、だよ」

「ヤロウ、減給四ヶ月に延長だクソが」

「野郎は流石にヒドいぜ」

「ああ？ アイツにや絶対にサオがぶら下がってらア」

「ココで言うようなことじゃねえな。それで囲っているのは、一体どんな女だ？」

サイファーはテンガロンハットの鍔を引っ張り、目を伏せた。カフェオレを一気飲みしたのが、より怪しさを加速させる。

そこにフランクは言いたくない、面白そうな話題を感じ取ったらしい。

「別に言いたくないのなら、言わなくてもいいが、近い内に一緒に飲もうじゃねえか
……………お前の家だな」

「分かったよ、言うから……………十七ぐらいに見える二十三の超絶金髪美少女。顔なんかスツゲエぞ、クレオパトラに楊貴妃に西施も、自分の顔を醜いと思って首吊るレベルの美少女だからな。危うく襲いかけた」

「はあ……………そういう趣味だったのか。スタイルはどうなんだ？」

「胸はデカいけど、腰回りは細いな。あとミスカトニツク大学飛び級卒業の才女。あとメシがウマイ」

「最優良物件じゃねえか、クツソウらやましいぜ」

「わっはっはっは、僕は勝ち組だぜ」

「もげろ、勃たなくなれ」

「残念ながら実力行使請負業と並行して、僕のムスコは生涯現役だぜ」

下品な話題でひとしきり談笑した後は、フランクは神妙な顔をして切り出す。苦虫を千匹ほどまとめて嘔み潰した、そんな顔をしている。

「また派手に暴れたみてえだな」

「わかるか？」

「使われていなかった倉庫が蜂の巣になって、その中でフォーレンシルト大名家の御令嬢がワンワン泣いてるんだ。俺が知る中じゃ、そんなことする鬼畜外道はお前だけだ」

「照れちゃうぜ、褒め言葉が上手いな」

「こっからマジメな話だ………大名家のお偉いさん方、草の根分けて探してるんだ、お前をな」

「戦争だな、下手すると」

「俺はお前が勝つのに十ポンド賭けても良い」

「ありがとうさん」

「それと、もう一つ」

人差し指を立てて、今日の朝刊を投げた。

ぼすん、なんて間の抜けた音を立てて落ちた新聞。その一面の片隅に、その記事はあった。

「ミスカトニツク大学考古学教授が殺害される、か」

「お前のことに、御令嬢が気付いたのかも知れねえ。教授の遺体を発見した警備の話じゃ、奴さん、うわごとみてえに『ナコト写本が………ナコト写本が………』そう言っていたらしい」

「おし決めた！ 即刻ヤつちまうか」

意気揚々と席を立つて歩き出したサイファアを、フランクは必死になって止めようと、肩を掴んだ。

二メートル近い浅黒い肌の男が、天井いっばいに宙を舞った。サイファアの体術が炸裂し、重力を無視したような動きであった。

「ぐえっ………ジュードーか？」

「外れ、合気道だよ」

「アイキドー？ 何が違うんだ？」

「合気道で投げられると、今みたいになる」

足の裏を見てから起きあがると、その場でフランクは飛んだり、片足を軸にして回ったりしている。サイファアに投げを掛けられたときに、まるで地面がなくなつたように感じられた。気付いたら宙を舞っていたというよりも、地面の方が彼を投げ出したようにも。

一生かけても解けそうにない問題だ、と苦笑する。

「それで、どうやってフォーレンシルト大公家を相手するつもりだ？ 奴さん方、最新鋭の機関改造兵に機動鎧どころか、四脚重機関戦車に航空要塞まで私兵として持っているぞ」

「いつも通り、あくまでもいつも通りにやるさ。だからさ………止めないでくれると嬉しいね」

そう言いながらサイファアは懐に手を伸ばすと、愛用の巨大な拳銃を抜いた。どんな荒事屋も使いたがらないような、彼のみが扱える黒白の二挺は、アルカンシエルのドアを真つ直ぐ照準している。

「隠れてないで、出てくればいい」

「いるな、こりゃ………」

返答は言葉ではなく、多種多様な弾丸の応酬で行われた。散弾、ライフル弾、拳銃弾とバラエティーに富んだ銃弾は、瞬く間にアルカンシエルを破壊していく。

二人の巨漢は揃ってカウンターの向こうに隠れ、破壊の応酬をやり過ぎた。このようないっせいで逢うことを前提としていたのか、アルカンシエルのカウンターは防弾仕様であった。

「ブツ殺してやらア！ ペンペン草も残してやらねエー！」

身に二挺だけを帯びてカウンターから驚異的な跳躍力で、アルカンシエルの建物自体をブチ抜いて、サイファアは飛び出した。

飛び上がった彼は五メートルも上空にいた。

火線が上へ上へと移動していき、サイファアを捉えんとする。

そこに規格外の二挺が機関銃以上の火力を以て、アルカンシエルを蜂の巣にした十五人ほどの武装した男たちに、報復の弾雨を降り注がせた。

生身でサイファアを侮っていた者たちは、何も出来ずに着弾と同時に血と粘塊に変わる。原形を留めることは誰一人としていない。全てが臓物と脳漿を辺り一帯にぶちまけたのだ。

知覚強化系の数式機関を埋め込んでいたと思われる、機関改造人間たちは鈍重に思える金属部品を露出した姿から想像もつかない速さで、音速の数倍に迫る弾雨から逃れる。

スネイルマガジンを装備したボーチャード・ピストルを構える者、縦横共に五〇センチはある箱型弾倉を備えたベルトリンク式のブローニング機関銃を携えた者、右腕そのものをガトリング機関銃に改造した者。彼らの数は十五から八人ほどに減ってはいたが、それは強者をより分けるふりであった。

無数の銃口がぐるりとサイファアを囲み、少しでも動けば幾千もの銃弾が彼を貫くの

は確定的だ。だが黒白の巨銃も男たちを睨みつけている。

ためらいなくサイファーは引き金を引いた。

二人が倒れて、残りが彼を討たんと各々の銃を以て、死の弾嵐を巻き起こす。

弾丸は撃ち込まれた瞬間に体積を数倍に広げる拡張弾や、砕けて体内で四散する特殊弾の類がほとんどで、サイファーの体は筋肉繊維一本分に至るまでズタズタにされた。

それでも原形を留めるどころか、意識さえはつきりしている彼は、不敵に笑みを浮かべる。

見よ、その巨軀がゆつくりと起きあがっていく。

首を鳴らしてから、怖じ気付いた者もいる男たちを、睨むわけでもなく見ていく。

右手を前に掲げて、人差し指を曲げては戻す。手招きでもするかのように。

「来いよ、Smali Dick粗チン野郎」

左手に収まっている白銀の巨銃が、天地を揺るがすような咆哮を上げる。

放たれた銃弾は一人の男の右側頭部に着弾し、その衝撃で顔の右半分を粘塊に変えて吹っ飛ばす。

反撃の弾丸はサイファーを傷つけるには小さすぎた。

かすり傷さえ、皮膚に痕を残すことさえ不可能であった。

今の彼は珍しく本気を出していた。が、たったそれだけ、ただそれだけのことで、男

たちには塵殺を受け入れるだけの運命しかなかった。

銃を仕舞った彼の右手の周りが、水面の波紋のように歪んで、たわんで、景色を不明瞭にして、そこから日本刀が抜き放たれた。

すでに抜き身の状態であつた虚空より取り出した長物に、男たちはようやく戦慄一色となつて恐慌に染まつていく。

「こいつ……………異能者か？」

「いや……………変異使い？」

「まさか……………グリム・クリーチャー幻想生物？」

銃口は自ずと無意識の内に、下へ、下へと向いていき、完全に銃口の延長線が地面と垂直になる。

諦めとも、絶望とも、飾る言葉はいくらでもあるのだろうが、抵抗する意志は完全に失つてしまった。そう欠片一つ残すことなく、抗うことを男たちは自ら放り捨てたのだ。

サイファーは男たちを満たすものを感じ取り、口角を異様なまでに吊り上げる。笑みだ。凶悪さを前面に押し出したとしか言えない、見た者全てが卒倒しかねない喜びの表情だが、常に不適な光を宿す瞳は真逆だった。

「拍子抜けだなあ。足搔け、死に物狂いで這いつくばって、死中に活を求め続けろ。銃を

握った以上、同業のみならず、市井に生きる者にも、同じものを向けられる覚悟は済ませたはずだぜ？」

また巨銃を握る。それだけではない。彼の双眸は赤く、紅く、何よりも赫く染まつていき、炎のごとく揺らいで移ろう。

—— あれは、何だ。

男たちの誰かが口にした言葉は、紛れもない全員の総意たる疑問で、目の前で起きている事象への否定で。

なんとなく、なんとなくの範囲で彼の影が形を変え、それから——それから、後に残ったのは常識外れの破壊の痕。ただ暴れ回っただけではない、縦横無尽に走った刀傷、子供の頭ほどある弾痕の数々、一メートル近くも挟り込まれた石畳、ドロドロに溶解したモルタル。どれを取っても異常としか言いようがない。

男たちの死体は何処にいつてしまったのか、それとも“かたち”の全てを消し飛ばされてしまったのか。

いずれにせよ——人の形をしたものには出来る所行ではない。それが出来るのは怪外の怪物か、アーカムの伝承にある名状しがたい生物のみか。

「拍子抜けだよ。少しは出来ると思っていたんだが」

「お前のお眼鏡にかなう人間は、ここ数年は現れねえと思うぜ」

「どうせ群れている時点で、おととい来やがれってモンだ」

「一匹狼が少ねえのさ。牙を保ってるヤツに的を絞れば、もつと少なくなる。皆、狼は怖いからな」

「だからこそ、だよ。生き残ってる狼は化け物が化け物と呼ぶレベルだからね」

「お前もその一人、というわけか？」

サイファーは答えない。

ただ、ただ顔だけが物悲しく哀愁というものが漂っている。そんな風に思えるのだ。何か思うところがあるのだろうか、それを察するにはフランクは付き合いが短すぎた。

「狼は孤独さ。いつ、いかなる時でも、誰もそばにいない」

「だから女を囲ったのか？」

「同居と言え、同居と」

ギニーやポンド硬貨のオンパレードを叩きつける。さすがに踏み込んで欲しくない領域に、片足を突っ込んでしまった。そんな反応をした。

まるで初恋をからかわれた少年。まさしく、そんな表現がよく似合った。

フランクを初めとするサイファーの知己にとつては、珍しいといえる瞬間。この常に余裕を保ってる巨漢に似つかわしくない、そんな瞬間だった。

「ツリはいらねえ、とっておけ。邪魔したな」

「今度はその子も連れてこい。一杯だけならタダにしてやる」
「考えとくよ」

それだけ。ただ、それだけを言つてサイファーは歸つていった。

ドアの残骸。それについたベルが澄み渡つた音を、惨劇の跡地に響かせる。

——カラン、コロン。

——カラン、コロン。

——カラン、コロン。



すすり泣き。

声を悲壮なほど押さえつけた嗚咽と、空気からでさえ伝わってくる悲しみの念。それほどの感情にフレデリカ叩き落とした元凶は、彼女に手の内にあつた。

それは新聞。家主であるサイファーが毎日とつている朝刊で、一面の記事にそれはあつた。

ミスカトニック大学の考古学教授が殺害される。その教授はフレデリカと個人的に親交があり、考古学を個人的に教えていた人間だつた。

悲しんでばかりのフレデリカではなかった。知りたくなかった。探偵を気取るわけはないが、恩師の死の真相というものを。なぜ殺されなければいけないのかを。

涙を拭つて、立ち上がった。サイファーと食事に出かけたときに着たドレスの色違い——黒を貴重としたものに替えて、バッグに貰った女王陛下の束を入れ、ソファーの間に手を入れれば、冷たい鋼の感触。

FNのM1900。この拳銃を始めて見る人間は銃身が二つあるように感じるだろう。実際は下が銃口なのだが。三二口径の護身用でなら十分すぎる、その程度の威力をフレデリカは用意に扱える。住んでいた区画の護身セミナーは、本当に役に立つ。

ただ、M1900だけではなく、ボーチャード・ピストルやらレマツト・リボルバーまであったのは驚きだった。

外出する旨の書き置きを残して、ドアをくぐれば、薄い煤煙の雲を突き抜ける陽光が、真上から差し込んでくる。少しか、息がしやすい日であった。

ミスカトニツク大学はサイファーの自宅から、結構な距離があったため、タクシーを捕まえた。高出力の数式機関のガーニーは、数キロに及ぶ道のりを数分で駆け抜けていった。

アポイントメントを忘れていたな、と今更になつて気づくが、今となつては過ぎ去つてしまったことだ。ダメであれば日を改めるまで、機関学の教授と会えないかと受付

に聞いた。

予想とは違って快く迎え入れてくれたことに、フレデリカは教授への認識を改めつつあった。あの気難しそうな、憂いのある表情と、全てを見通したような目の輝き。あらゆるものへの期待と歓喜に満ちたサイファアの目とは違う、学者の瞳であった。

鋼鉄の扉。案内もなしにたどり着いた場所だが、ここに教授が入るとフレデリカは知っている。

「レオ教授、いらつしやいますか？」

その呼び名は教授が許したものの。敬語を外さないフレデリカの最大の譲歩からのもの。取っ手に手をかけただけで、ピストンが駆動し、歯車が唸りを上げる。

「君が来るのは分かっていたよ。大体は察しがついていたからね、君が来たら通すように言っておいた」

座面と背もたれだけが革製で、残りは機関を搭載した機械仕掛けの椅子に座るのは、初老の男。今、この瞬間でも世界の真理を探究し、伺いしれぬ思考を巡らせる紳士。そういう表現がよく似合う男で、白のスリーピースが不思議と似合う。

彼の名はチャールズ・バベツジ。階差機関の父にして、蒸気機関の性能上昇に大きく貢献した男。白髪混じりの口ひげを整え、穏和に笑ってみせる姿は紳士そのもの。

「かけたまえ、今、給仕装置で淹れた紅茶が出来る」

「あ、お氣遣い、ありがとうございます」

「私も久しぶりに君と話がしたかった」

カムリンクと歯車、蒸気圧ピストンで構成された、赤銅の輝きを持つ機械の腕が、ティーカップと砂糖壺にミルクの入ったポットを乗せたトレーを運んできた。バベツジ謹製の給仕装置である。初見の人間は、これで度胆を抜かれる。

「残念だったよ、彼は聡明で、老いて尚、探求の心と好奇心を忘れなかった。私も見習うほかに」

「なぜ、教授は殺されたのでしょうか？」

「君が卒業してから、彼は本物のナコト写本を発見した——ほんの数ページ分だったがね。その記述を読んでから、彼は少しばかり狂ったのかな。その数ページ分を仕舞い込んで、門外不出にしてしまったのだよ」

「あの教授が……それだけ恐ろしい内容だったのでしょうか」

「恐らくは、君の考えている通りだ。ナコト写本は数ページだけでも、専門家の心を抉り取る、この世の条理を否定する知識に満ちている。それが奪われたとなつては、半端に知識を持つ者にとつては何よりも恐ろしいのだろうね」

半端に知識を持つ者は、半端であるが故に対策を知らずに恐れを為す。例外はありふれていれど、大抵のものには対策が存在する。

フレデリカはナコト写本やネクロノミコンといった、外宇宙の叡智をしたためた古文書には詳しくない。だが殺された教授は機関と同じものと言っていた。扱いを間違えば惨劇を招くが、正しい志をもってすれば人類の益となる。そう、豪語していた彼は、もういない。いないのだ。

「ナコト写本……………探さないと、何が起こるか……………!」

「君には、それが出来る人脈があるはずだ。自分を信じて行きたまえ」

「はい! ありがとうございます」

揚々としてフレデリカが去った後、バベッジは一言。

「目覚めは近いな。鬼が出るか、蛇が出るか。東洋の諺だったろうか」

タクシーで行きと同じ時間で帰ると、聞き慣れない迎えの言葉が耳朵を打った。

「おかえり、フレデリカ。どこに行ってたんだ?」

「あの……………ミスカトニツク大学に」

「ははあん、さては探偵気取りで調べに行ったのかな?」

「……………はい、ダメだったでしょうか?」

「いいや、僕も調べようとしたんだけど、何かあったのか?」

「それがナコト写本の本物が奪われていたらしくて、嚴重に保管されていたのを、犯人は奪ったそうで」

「ん、僕も出先でカチコミかけられてね。癪だから相手方を調べたら、あのベアトリクスだった。どうやら実家とヨリを戻したみたいで、僕にリベンジを企んでやがる」

非常に不安だ。

フォーレンシルト大公家の権力は、噂話程度で耳にしているが、にわかには信じがたい話でいっぱいだった。

彼女に楯突いた人間は、いつの間にか行方不明となっている。娼館に売り飛ばされている。アーカム下層で物言わぬ姿となつて見つかった。逸話は探せば、いくらでも見つかるであろう。

「大丈夫……なんですか?」

「親の臍齧り娘なんざ、小指の先でチョイだ」

「無理は、しないでください。あなたに何かあると……私は悲しいんです。私には、あなたしかいないから……」

「安心しろ。人より死にやすいけど、兵器や改造頼りのヤツに後れをとつたことはない」
「約束………して下さい」

フレデリカは小指をたてて、サイファアに差し出した。

華奢で白魚のようにか細い指に、無骨で皮膚が硬化した太い指が絡む。

「指切りをお望みなんで、結構子供っぽいのな」

「でも意地でも約束を守ろうと思えませんか？　こうやって繋ぎ止めておかないと、あなたは離れていきそうで」

「繋がれるのは趣味じゃない。でも何も言わずに行ってしまうこともない。だからさ、安心するといい」

「誓って下さい」

空いた手を胸に当てて、サイファーは誓う。

目の前にいる小指だけでつながれた少女。その側から離れないことを。

その誓いがフレデリカの心に染み渡る。じわり、じわりと解かしていく。温もり、暖かみが染み渡って、体を回っていく。

「この僕、サイファー・アンダーソンはフレデリカ・エインズワースのそばからいなくなりません」

「ありがとうございます……とつても、嬉しいですよ」

「そうだ、嬉しさを積み重ねて、笑え。君の笑った顔は、僕の人生の中で一番キレイだ」
「……………歯が浮きますよ」

「事実を言っているだけ。フレデリカ、お前さんはキレイだよ。そして可愛い」

頬が赤くなる。どことなく色つぼく、扇情的な表情のまま、フレデリカは何も言わなくなった。羞恥の余りに、口を開かなくなったのだろう。

本当にウブだ。サイファーはそう思わざるを得ない。少なくとも容姿を褒めただけで、赤面する女は初めてだ。思い直してみると、付き合った女性は娼館出身だったり、過激な服装で応対する売春黙認の酒場で知り合ったのがほとんどだった。

彼女らと体だけの付き合いと割り切って、つかの間の蜜月を過ごすのは悪くなかった。ただ、心の距離が遠いだけで。

だがフレデリカは真逆だ。体の距離は遠く、心の距離を縮めていつている。今までになかった、まっとうな付き合い方。物欲と情欲で繋ぎ止めるのではなく、心と精神を通じて時間を共有して繋ぎ止める。

「フレデリカ」

「サイファーさん？ どうしました？」

小首を傾げて聞く仕草が、この上なく愛らしい。今すぐにも手に入れたと思う、可憐なる一輪の華奢な花。

今すぐに抱きしめたい。今すぐに桜色の唇を奪いたい。その先さえも、我が手に納めたい。

今までに味わったことのない、妙な高ぶり。性的な興奮という言葉で片づけるには、あまりに複雑すぎる劣情をサイファーは必死に押さえる。

ほんの少しだけ身を任せれば、瞬く間にフレデリカの肢体をねじ伏せ、余すことなく

肉の味を味わえるというのに、それをしない理由も分かっていない。いや、分かっているが、やらない。

きっと彼女は自分と添い遂げてくれる。不可能といえるような、そんな願望が本当のこと、現実になる。確信もない思いのために、彼は自制する。

——どうやら、僕は。

——フレデリカのこと。

——好きなのかも、しれない。

その思いが真実か、それとも一過性の幻想か、サイファーは計りかねていたのだった。

酒宴は血生臭さにあふれて

アルカンシエル。フランスの言葉で虹を意味する。

早朝の襲撃の痕跡は無い。いかなる手段を使ったのかは誰も知らない。全壊から一日で直っていることなど、さして珍しくはないことだ。ここはそういう店なのだから、それを不思議に思うのはアーカムに住んで間もないか、外部の人間だけだ。

そこに集うのは泥臭く、いぶし銀どころか錆びた鉄にも劣る、幾多の修羅場をくぐってきた腕つききの荒事屋ばかり。

なにしろアフリカ系の店主が元荒事屋なのだから、訪れる知り合いも荒事屋か、彼らに関わる職業がほとんどだ。

いつしかアルカンシエルは、荒事屋たちが集う情報交換の場であり、盛り場であり、仕事の斡旋の場となっていた。店主のフランク・アーミティツジは黙って、今日も皿を拭き、至福のひとつを提供する。

そこに早朝から訪れ、またも現れた男がいた。一度目と同じ服装で、その時にはいなかった男を引きずりながら。男の顔はひどく変形し、四肢はねじ曲がっている。

「サイファー、ソイツはどうしたんだ？」

「僕のことを嗅ぎ回っていたから、少しお話しただけだよ」

「お話し」

「そ、お話し」

「拷問の間違いじゃねえのか？」

「それは世界常識で、アーカムの常識じゃないよ」

「もつともだな、特に下層はヒドいもんだ」

アーカム下層。

暴力と享楽に溢れたアーカムでも、弱肉強食を地で行き、死がありふれている魔境とも言うべき最悪の場所。

生半可な機関改造では瞬く間に全身を解体され、まだ使える埋め込んだ数式機関を摘出され、残った血肉は下層民の腹に収まる。

フランクもサイファーも、なるべく行きたくない場所だ。

サイファーが拷問めいたお話しで済ませるなら、下層民は色々な過程を飛ばして日々の糧とする。物理的に、胃袋に納めたり、僅かなシリリングに替えたり、と。

「ま、その常識のおかげで、僕らにとっては天国だ」

「暴力振るおうが、荒事屋なら許される世の中、いいんだろうか？」

「気にするな、今を楽しんでこそアーカムの民だ」

「イギリス本土の奴ら、それを享樂主義者エビキュリアンと呼ぶ」

「享樂主義者、結構じゃないか」

「それで、ソイツから情報は掴めたか？」

「フランクは震えるだけの男を指差す。」

「ここに連れてきたのだから、何かしらの情報はあつたのであろう。そうでなければ、叩きのめされた男が気の毒にも程がある。」

「ただサイファアーのことだ。何の理由もなしに、口を嚙む男を気が済むまで痛めつけただけかもしれない。彼なら、やりかねないのだ。」

「ミスカトニツク大学で教授を射殺して、ナコト写本を盗んだ下手人なら分かった。コイツはミスカトニツク大学で警備の仕事をやっていたが、金を握らされて、下手人を招き入れたらしい」

「まさか……ベアトリクスか？」

「その通り、だよ。奴さん、専行が考古学だったらしい。なら後輩からナコト写本のことを聞いていても、全く不思議じゃあない。人脈は相当深いからな。だがナコト写本でナニをする気だろうね？」

「リベンジだな。十中八九」

「モテる男はつらいぜ、泣けるぜ。カフェオレ一杯、いただきますか」

昼下がりのアルカンシエルは十数人ほどの荒事屋の喧噪に包まれ、早朝の閑散とした空気が嘘のようだ。この時間から酒を飲む者もいれば、ランチに興じる者と、それぞれの楽しみ方を満喫している。

その中で、たった一人で茶色の芳香を放つ、ほのかな甘みと苦み、そしてまろやかさを味わう巨漢は、瞳に憤りをたたえろ。

自分のお気に入りと言っているのか、想いを抱いていると言っているのか、説明する言葉がサイファーでは思い浮かばない。そんな複雑な感情を抱いている、あの美しき少女を、どこまでも苦しめるベアトリクス。

殴り殺す。

——足りない。

四肢を撃ち抜く。

——足りない。

四肢を切り落とし、乳房を削ぎ落とす。

——足りない。

この店にいる連中に声をかけて、輪姦する。

——足りない。

塵殺する。

——到底、足りはしない。

気づかぬ内にカフェオレが空になっていた。

店中の視線がサイファーに集まっている。込められている畏怖の感情に気付かないわけがなく、フランクでさえカウンターの下に手を伸ばしている。手には愛用としている放熱用のゴツいリブを取り付け、スラム・ファイアの機能を持った八ヶージ散弾銃が握られているであろう。

肩を竦めつつ、フランクが溜め息混じりに口を開く。

「少し抑えてくれ。お前の本気の殺気を浴びたら、下手するとショック死するぜ」

「悪い」

「それだけ大事に想っているのか？ 最近困った女を」

「ほっとけ。少なくともお前さんに冷やかされる覚えはないよ」

「会わせろ。一回だけでいい」

「ダメだ」

「俺とお前の仲だろうか？」

「……………近い内に飲もうや。ベアトリクスの居場所の情報と引き替えに」

「交渉成立だな。フォーレンシルトの連中とやり合うときは言え。俺も加勢する」

その申し出にサイファーは嗜虐的に微笑む。ニヤリとした笑みは、微笑みにあるはず

の快さが皆無だ。十中八九、ひどいことを考えているのだろう。

「たくさん呼べ。祭りは盛大な方が良い」

この場で暴虐の限りを尽くす、破壊と混沌の宴の開始が、この瞬間に約束された。

日がな力を振るう機会に餓え、抑圧された獣性を募らせる荒事屋。単身で軍隊の一個師団に匹敵するだけの者もいれば、常人より多少は出来る程度と、ピンからキリまで開きは多い。

それでも驚異には違いない。過剰すぎるまでの暴力の技術と、根絶やしにするべき衝動の固まりが渦巻いている。それがアーカムだ。二〇世紀の世に生まれし、最悪の魔境なのだ。

その証拠にアルカンシエルにいる荒事屋のほとんどが色めき立ち、店内に実在しない熱気が渦巻いていく。気温が十度は増したように感じた。

「さあて。真つ青な空を夢想して、地上に目も暮れぬ大貴族様には、汚れた土と泥水にまみれてもらおうかね」

サイファーは笑う。

その表情は微笑みから、完全な笑みとなっている。

狂笑とも言うべき、そんな笑み。フランクは目を逸らすしかない。

直視に耐えうるものではないから。それを数秒も見れば、脳神経が灼き切れるよ

うな、確かな実感を感じたのだ。事実、そのあとに三日三晩もの間に渡って頭痛に悩まされた。

完全にフォーレンシルト家は狙われている。

内に秘める想いを向ける相手を苦しめた、その私怨の延長線上にあるような理由で、彼は多くの荒事屋を使つて波乱を巻き起こそうとしている。

何度でも言おう。理由はそれだけだ。

——そう、それだけ。

——ただ、それだけなのだ。

それだけの理由で強大な力を持つ大貴族に、刃向かおうというのだ。

無謀であるといえる。

蛮勇ともいえる。

本来であれば糾弾されるべき行いだ。

しかし、それは彼を思いとどまらせる理由になり得ない。

彼の力は甚大すぎる。策も、異能も、法も、倫理も、何もかもを吹き飛ばしかねない。

そう、彼の力の前に、あらゆるものは意義を喪失する。

「居場所が割れたら言つてくれ。飛んでくる」

「……………本当に飛んでくるなよ？」

「気分次第だね、それは」

「享樂主義者め、つて褒め言葉だな」

「アーカム限定だがな」

席を立つと背中を見せたまま、手を振ってサイファーは帰っていく。

吹き抜けていく風に、彼の橙色の髪が靡いて、ふわりと漂っていった。



——ギユイン、ギユイン。

——ウイン、ウイン、ウイン。

——ギリ、ギリ、ギリ、ギリ。

ピストンが動作を繰り返し、リンクカムとベアリングの間接が動き、歯車が唸りを上げて高速回転。それに混ざるのは純粹数式機関——緑鉱石と赫鉱石が生み出す、既存の物理にある熱でも光でも電気でもない、謎のエネルギーを発する——がブウウウンと獣の唸りにも似た、そんな音を立てる。

音の集合体が聞こえてくるのは三メートルほどの人型。鋼鉄の鎧に覆われた、重厚なる人型の鉄塊から聞こえてくるのだ。

元は人間だったのだろうか、呼吸でもするように身じろぎをしたり、T字の目出し部分がある細長い兜を指で搔いたりしていた。

脳機関さえ超小型にして歯車式計算機など足元に及ばぬ、それほどの情報処理機関に大半を置き換えている。彼には戦い以外に出来ることはない。彼に出来るのは、腰にある長剣を振るつて、各部に仕込まれた火器を以て、この世ならぬ惨劇を生み出すのみ。

上層守護用機関兵士。一部の富裕層の生活を、文化の営みを守るために生み出された、狂気なる技術の結晶。その落とし子にして、被害者であった。彼に本来の生身の部分など、魂以外に存在しないのだから。

それと引き替えに得たのは、数百キロに及ぶ重量の長剣を片手で一呼吸に三度は振り、現役で使われているカノン砲を無効化できる軀。そして容赦と手加減を省かれ、高度な計算で相手の動きを予測する戦闘用の頭脳。左手には最新式の軍艦さえ、五発で沈める旋条式迫撃砲が仕込まれている。

意志のない彼の主人は、その肩に乗つて、鮮血で描かれた円形と直線の図形の上。そこで苦しみ抜く男たちに嗜虐の笑みを向ける。

それは冒流的知識を持つて行われる、外法の顕現を行う儀式。

呼び出すは知能を与えられたが故に、その主人たる種族に反旗を翻した、頑強なる黒き不定の存在。この世にいてはならぬ、この世への否定。その外法の理は、この世の物

理法則など意に介さない。

主人の女の腕が彼に絡み付く。

妖艶に、淫靡さを帯びて、冷たい鋼に巻き付いた。

か細い指が、兜の目出しを部分をなぞって、撫で回す。

「順調、そう極めて順調よ」

膨れ上がる。膨らんでいく。大きくなる。

成長していく黒い粘塊の生物は、男たちを飲み込んでいって、その速さを加速させていく。

冒流的としか言いようのない。一目見るだけで尋常には戻れない。それほどの光景を見て、女は平静を保っているように見える。

だが彼女はすでに狂っていた。憎悪に身を焦がしたが故に、儀式を執り行う前から発狂していたのだ。

それでも悪しき感情の炎が消えることはなく。

彼への、サイファーへの憎悪を燃料に、強く、より強く燃え盛っていく。

「さあ、アナタの番よ」

女は鎧の彼から飛び降りると、その背中を押した。

白銀の鎧、黒く焼かれた脚甲に覆われた、機械仕掛けの足が陣へと踏み出されていく。

黒い不定形の固まりが、血管とも、植物の葉脈にも思える、奇怪な形を作り出しながら、金属の身体を侵す。

白銀の鎧は黒く染まり、鉄の強靱さだけを残して、堅さを喪失して粘塊へと変わっていく。そう、黒く、黒く、染め上げられていく。柔らかく、柔らかく、作り替えられていく。

鎧の腕が粘塊に沈んだとき、女も取り込もうと黒い触手が伸びた。

女は微笑んで——それを受け入れた。

仮足が女を引き込んだ。



帰宅して早々に香辛料のニオイが漂ってきた。

寄り道に寄り道を重ねていたせいで、帰る頃には太陽はなくなつて月が浮かんでいる。それもベアトリクスとフォーレンシルト大公家の情報を探っていたせいであつた。

カレー特有のものであると理解したとき、彼の内に住まう、もう一人のサイファー・アンダーソンは小躍りした。こつちの彼は表よりも素直でストレート故に、ひねくれる時など欠片も存在しない。そもそも表にはでない心中のことだから、察することが出来る

のは当人だけだ。

聞き慣れた女の声と、最近になって住まわせた女の声。そして太い男の声が聞こえてきたあたりで、思い切り複雑な表情をした。嬉しさとやるせなさの混ぜもの、喜ばしくもないものであった。

リビングに出た瞬間に銀色の閃光が飛び、それはサイファーへと突き刺さった——
—ように見えたが、手投げナイフは前歯で噛み啜えられて止められていた。

「なんだってんだよ、ヘンリエッタ？」

「フレデリカに手を出してはいないな？」

「出してるわけないだろ。ロリコンの気はないと自負してるよ、そ、僕は真つ当だから」
「どの口が言うんだ」

手投げナイフを投げつけた不屈きな麗人、ヘンリエッタは少しだけ肩を竦めた。

サイファーは真つ当ではない。色々なところで滅茶苦茶で、しつちやかめつちやかで、支離滅裂な男なのだ。要約するとキチガイ。溢れ出る力のままに、大雑把に、大味に、享楽刹那に生きる。彼はそういう男のだった。

そんな彼でも成人に達していい女性に手を出す。そんな趣味は持ち合わせていないらしい。それより上なら三桁は余裕でいるが。

ふとフレデリカの方を見ると、彼女は不服そうな、口惜しいような、実に残念そうな

顔をしている。だが、すぐに立ち直ったように顔を上げて、目の前の鍋をかき回し始めた。

この今時の思考回路を持ち合わせているだろう、この二十歳を超えているくせに十代後半の姿をした、見た目だけなら十分に少女の女が何を考えているのか。サイファーには理解できない永遠の命題だ。そもそも女心というものを欠片も理解したことがあったか。

彼は自分の内に数日前から渦巻くようになった、懸想にも似た想いを見極める必要があるのを自覚している。今までのように、その場の勢いで甘言で誘って、そして手に入っても彼女が傷つく。何となくだが分かるのだ。彼女は聡明で、今までの女にはいないほどに賢いのだから。

「どうした？ えらく顔が冴えてねえ」

「自分の新たな性癖に気付きそうになって、半ば自己嫌悪なんだよ」
「らしくねえ」

夕食前にもかかわらずスタウトを飲み干す、浅黒い毛のない頭の男。フランクは最近になってアーカムで新しく発明された、石油由来の化学繊維製のベストにチノパンであつた。

飲食店の店主としての顔はなく、サイファーの友人としての顔だ。

傍らにいるヘンリエッタも頬が桃色。一杯ぐらいは付き合つたのかもしれないが、フレデリカだけは変わらぬ白い顔。どうやら素面らしい。

「できましたよ。いっぱい作つたので、たくさん食べてください」

「おおー！」

いつものようにソファアールにドシンと音を立てて座つた、二メートルを超える巨軀が思ひ切り乗り出された。

ヨークシャー・プディング、ミートパイ、スパゲティ・ナポリタン、鴨のソテー、キャベツとレタスにトマトとオリーブのサラダ、そしてメインを飾る大鍋のカレー。あまり知られていないことだがイギリス人はカレーを好む。というよりカレーは世界規模で込まれることの多い料理だと、サイファールは経験で知っている。

フランクからスタウトの注がれたグラスを渡され、ヨークシャー・プディングにカレーを乗せて一口で食べる。気づかぬ内にウマイと叫んでいた。三人がクスクス笑つて、彼の方を見ていた。

「悪いか？」

ドスの利いた声だ。

泣く子も黙るところか、舌を噛みきる。そう断言できるほどに恐ろしいものであつた。それを無意識で出してしまふあたり、どこかしら壊れているのではなからうか。

それでもヘンリエッタとフランクは気にした素振りもない。慣れているのだ。この程度の殺気は。鉄火場にいる彼の殺気は、この比ではないのだ。

「いいや」

「美味しいものを美味しいと言っても、悪く思う人間はいないよ」

「そうだな。スマン、悪かったよ」

「ああ、ちよつと声が大きすぎただけなんだ」

「なんか引つかかる物言いだなア？ ん？」

彼は笑っている。口角が上がって、目尻が下がっている。だが目が笑っていない。銀灰色の双眸には、笑顔では絶対にあり得ないような危険すぎる光が宿っていたのだから。

それをこの場にいる人間の中で、一番小さな手が止めた。一番大きなサイファアの手を握って、その手を両手で包み込んで。

「その……ことあるごとに喧嘩をするのは、私はいけないと思います」

一瞬だけ、ほんの僅かに一瞬だけ、不服そうな顔を見るとスタウトを一气飲みました。整った歯列が覗く口を、でかでかと開けてサイファアは息を吐いた。

「そりやそうだな。でも、まあ、七割は冗談だよ」

「聞くのが怖いけれど………残りの三割は？」

「二度とナメた口をきけないようにしてやろうかと思う、そんな感じの本気だよ」

「本気なんですか!」

「悪いかな?」

先ほどとは違う声。爽やかな声だった。声に見合う程度に微笑んでいるが、目がどう見ても笑っていないのだ。その笑っていない目に残りの三割を強く感じてしまう。

「でも……私の前でそういうことは、冗談でもやめてください」

「本気ならいいのかな?」

「ほ、ほほ本気なんて、もつとダメです! ゆ、許しませんから!」

「そんなに顔真つ赤にして怒るもんじゃねえよ。可愛いじゃねえか」

「……………からかっています?」

じつとりとした半開きの目で見据えた。マニアでニツチな層であれば、両手を上げて喜ぶだろう。

「うん」

サイファーは躊躇いもなしに首を縦に振った。気持ちよいと思えるほどに、潔く認め
た。

「……………あつ」

フレデリカの顔が茹で蛸になっていく。面白いくらいに真つ赤だ。と思っっているや、

クラレットのボトルを握るや、グラスになみなみと注いで一気に飲み干した。酒の赤も混じって、頭を揺らして倒れ込んだ。

ヘンリエッタが慌てて抱き止めた。フレデリカの目は虚ろで、口が半開きなのはどうにも淫狼に見える。意識しなくても、男性であれば、そう見えてしまう。悲しいかな、男の性であった。

虹彩異色の虚ろな双眸が、じつとサイファーを見る。

思わず身構えてしまった。相手はアーカムの一区画を仕切るギャングの親玉でも、泣く子も黙る上層守護騎士でもないのに。

「……………あなたの、せいなんですから、ねえ？」

「はっ？」

間拔けな声が出た。それはサイファーから。

艶めかしい声が出た。それはフレデリカから。

フランクとヘンリエッタは何も言わない。どうやら傍観に徹することにしたらしい。それがサイファーにとって、面白くないことを生み出すのだ。

「あなたが、私をからかうから、お酒に逃げちゃったじゃないですかあ」

「とりあえず水飲むか？」

「いりません！」

「うおっ」

巨体がソファアの上に倒れ込んだ。それをやったのが一六〇センチに満たない、か細く、繊細という表現の似合う、そんな少女とはには信じがたい。だが事実だ。

「……バグしてください」

「お前さんは何を言ってるんだ」

「一緒に寝た日みたいなのに、ギョツとしてください」

「聞き捨てならないことを聞いた気がするが？」

「笑顔で見逃してください」

ヘンリエッタから冷やややか極まりない視線が飛んできた上に、腰のあたりにフレデリカが馬乗りの現状は、いささか処理しきれない。

おまけに腰の上、本当に言ってしまうえば股間の上にフレデリカが陣取っているのは、非常にマズい事態だ。性欲を起因とする男性の生理現象が起こるものなら、酒で暴走状態の彼女が何をしでかすかは、未知数なのだから。

「バグしてくれないなら、いつそのこと、私から……」

華奢でありながら、豊満なものを胸に二つ付けた身体が、ベッドにでも飛び込むように倒れ込んできた。否が応でも感じてしまうのは女性特有の芳香と、押し付けられる柔らかな肉の感触。実に甘美としか言いようがない。

これで何も感じなければ男として失格だ。あるいはゲイの烙印を押されかねない。

「んん、あなたが懲りるか、私が満足するまで、放す気、ないですよ」

「放してくれ、放してください、放せ」

「ダメです。そんなこと言うなら……………」

おもむろに黄金とアイオライトの双眸が、シャツ一枚で隔てられた胸板に埋まる。香りと柔らかさ、それらに加えて息遣いまで追加された。

「どうですかあ？ ドキドキしますか？」

「……………する」

消え入りそうな声だったが、確かに彼は言った。

そう確かに言った。それをフレデリカが聞き逃すわけはなかった。

そのか細い白魚めいた指先が、シャツ一枚隔てた胸板を滑る。

「ムラムラして、しますか？」

危うく首を縦に振りかけた。

振っていたら、確実に何かが終わっていた。絶対に。

それは社会的地位かもしれないし、それは彼の自信の人格かもしれない。

前者はともかくとして、後者に関しては救いようがないと、サイファーは自覚している。

これで危うくなるのは、はつきり言ってしまったえば性癖の面だ。

少女性愛の烙印を押されてしまったら、きつと死にたくなってしまう。

しかし、だがしかし。

目の前にいる少女の見た目を持つ女。その瞳は見た目相応の輝きでありながら、年相応の色を宿していた。

そこから互いの胸が接している部分に視線を移す。メロンを彷彿とさせる二つの柔らかで、それでいながら形をはつきりと保っている肉の果実。

服を押し上げる膨らみが、サイファアの胸板で形が変えられている。

それと同時に否が応でも感じざるを得ない柔らかい感触。男であれば一生に一度は味わいたいと考える、甘美な肉の感触がサイファアの胸板に伝わっている。

「答えて下さい。潔く、迷いなく、酔いを醒ますくらいに、はつきりと答えて下さい」
「そうだな……………」

酒によって朱に染まった頬に、恥じらいの紅が加わっている。

もしかすると、もう酔いが醒めてきたのか。酔いやすく醒めやすい、フレデリカはそういう人間かもしれない。

銀灰色の双眸に、黄金とアイオライトの虹彩異色が移る。

サイファアの唇が動く。

それはフレデリカの頬へ、そつと口付けてから。

「異性として刺激されるね、襲いたいくらい」

「……………は、いっ？」

一から百まで疑問のみの「はい？」は小首を傾げる動作も添えて、サイファーとフラックとヘンリエッタの耳朶を打った。

か細く白い人差し指が唇に添えられたのを皮切りに、端正白皙の美貌はクラレットを起因としない羞恥の赤に染まっていった。

「も、ももももう！　ね、寝ます！」

「一緒に寝るか？」

「い、一緒に、ね、寝るなんて、そんなこと、す、するわ、わわわわわう！」

追い打ちの言葉に張り倒されたように。

一種、滑稽とも言える動き。犬のように「わう！」と言つて盛大に尻餅をついた。

そのまま振り返りもせず転がるように去つていった。

嗜好次第では愛らしく思えてくるような。お淑やかさとは無縁の振る舞い、と言うよりは醜態だが。

その一部始終を温かい目と、微笑みを浮かべて見送つたフレデリカ以外の三人は向き直つて表情を固くする。

今までのどんちゃん騒ぎはどこへやら。

そんな感想を禁じ得ない。

「なんでお前さん方は僕んちにいるの？ まあ、合鍵は渡してあるけど」

「ベアトリクスの居場所が掴めた。第十二層の二十三区画で目撃情報があった」

「かと言って、おいそれとは踏み込めないんだ。フォーレンシルトの私兵が、あの一帯を

駐屯地グリム・クリーチャーにしている。おまけに……………幻想生物をナコト写本で呼び出した」

幻想生物。

このウルベスが入植されたのを皮切りに現れた、御伽噺の存在、冒涇の神話の存在、人知の及ばぬ存在をひつくるめた呼称だ。

幻想生物の戦闘力は大型の機関兵器に匹敵する。

そんな彼らが人に領域に手を出してくることは、結構な割合であることだ。

そういった事件があればイギリス本国の外向政府組織であるアーカム統治局の、治安管理部あたりから討伐か撃退の任が出る。

報酬を出すのは政府という公共機関であるために、荒事屋にとつては実入りも相当に良い。少なくともギャングの抗争や、殺し屋まがいの仕事、破壊工作よりはずっと良いのだ。

それを呼び出したということは、並の荒事屋であれば塵殺できるだけの力を得たとい

う証拠なのだ。

御せるか、御せないかは、ほんの些細な問題なのだ。

そこにいるだけで、重火器で武装した荒事屋数十人を超える驚異なのだ。そういう存在なのだ。幻想生物、とは。

「第十二層の荒事屋に声かけろ。フォーレンシルトと幻想生物の二つと戦争だ、とでも言っておけば来る奴は来る」

「こりや久し振りにデカい事件になりそうだ」

「一般人の避難誘導、都市修復機構の使用申請、終わった後のことも考えないと」

「ヘンリエッタ、東洋の諺だと、未来のことと言うと鬼が笑うそうだ」

「そりや来年のことだろ。あと後片づけのことを考えるのは大事なことだぞ」

「それもそうだな。言い出しっぺの法則だ。ヘンリエッタに一任しよう。特別手当もつけておいてやるからさ」

「なら解散するべきだろうな。今日のところは」

ヘンリエッタが立ち上がる。

「俺もそうするとしよう。ヘンリエッタ、送っていくぜ」

「やるねえ、送り狼」

「殺すぞ」

はにかんだ冗談混じりの言葉をサイファーに向けて、二人そろって帰って行った。その後ろ姿はどう見ても深い仲の男女に見えなくもない。もしかすると本当にそうなるのかも、などとサイファーは思ってしまった。

妄想がすぎたな。頭を振って数十秒前まで思い浮かべていたことを、忘却の彼方へと追放した。あのまま続けていれば精神衛生上良くないものが生まれたかもしれない。

「あの二人じゃ見かけは美女と野獣だけど、中身で考えるとどっちも野獣だよな」

一人、ソファーの真ん中でうんうんと頷いて、軽くシャワーを浴びる。

一日を終えるために眠りにつくには、シャワーを浴びたり、湯を張った浴槽に浸かるなど、何かしらで身体の汚れや汗を疲れと一緒に流したいのだ。

サイファー・アンダーソンの日常的一幕である。

それを終えてから頭の水気をとって、寝室へと向かったのだが。

「おいおい、どういうことですかねえ……………」

キングサイズのベッド、その真ん中が人がいるように膨らんでいる。布団からは淡い金髪が覗いている。

さらにクローゼットを開けてみると、先ほどまで見ていた女物のドレスが整って収められている。

英国淑女を心掛けているにしては変な部分が抜けている、と胸中で愚痴りながら布団

に手をかけた。

「フレデリカ……………まったく」

ゆつたりと布団をめぐってみる。そして一瞬で戻した。

いつもの自分なら、じっくり見つめている。

そういう光景があつたのにも関わらず、目を離してしまうとは自分らしくないと、戒めになっていない戒めをする。

どうにもフレデリカと出会ってから、どうにも調子が狂って仕方がない。

「下着とフルスリップだけ……………しかもズロースじゃなく、パンティとはハイレベルにもほどがある」

体を丸めて眠っている、その体の曲線に下着のラインが浮き出ている。そのために分かってしまった上に、本音を言うならじっくりと見ておきたいほどの美貌だ。

しかも浮き出たラインから察するに、最近になってアーカムで流行りだした布面積が
少ないもの。

お淑やかな彼女はイギリス本国で広く着用されている、無難なズロースだと思つて
いたために意表を突かれた形になった。

「一思いに襲つてやろうかね……………？」

そう言っておきながら優しく彼女の体を揺する。

ん、と声を漏らした。

やや艶っぽい色を含んだ、そんな声だった。

こういった部分を見てしまうと、フレデリカも見た目とは違って喫煙も飲酒も許された大人だと改めて思ってしまう。

「あれ？　なんで、サイファーさんが私の部屋に……？」

寝ぼけ眼を擦りながら、とろんとした瞳がサイファーを見つめる。

ほんの少し甘言をささやいてしまえばベッドインまで漕ぎ着けられる。

そう思ってしまうほどに無防備だった。

ため息をついてからサイファーは告げた。

「ここは僕の部屋なんだけど？」

「え？」

はっとした様子でキョロキョロと自分のいるベッドと、その周りの家具や調度品を認めたととき、あわてて這い出てきた。

その様が寝室に向かったときの再臨であった。

慌てているときは見た目相応なのがサイファーにとっては愛らしいところだった。

「ま、話があるからちようど良かったけど、さ」

「お話、ですか？」

「そ、お話だよ」

巨体がベッドに座り込んだ。そのせいで盛大にスプリングが軋む。

大きな手が隣を叩いた。それだけでもスプリングは軋む。

フレデリカが叩かれた場所に座る。ベッドが沈むだけしか変化はない。

金とアイオライトの虹彩異色が、銀灰色の双眸を映す。

行儀良く両手は重ねて膝の上。足もそろえて。実に模範的な座り方であった。

きつと誰もが羨み、そして真似するであろう、それほどに様になって美しい座り方。

対する彼は豪快さを表すかのような、足を広げた座り方。しかし不思議と違和感というものはなく、むしろ自然であるかのように思えてくる。

「前にウエイトレスの仕事を紹介しただろ？」

「次の職場のことですよ？ 何から何までお世話になってしまって、迷惑ですよ」

「いいよ、僕がやりたくてやっているんだから。そのことなんだが、今日ウチに来たフランクって黒人が、職場の店主なんだ。悪いやつじゃない……………まあ、やんちゃしてた時はあったけど、仲良くしてやってくれ。少なくとも話は通じるヤツだ」

「……………それだけでは、ないですよ？」

こちらを見上げる真剣な瞳に誤魔化せないと察した。

かつて自分のそばに寄り添っていた女たちもそうだ。

荒事屋でもなくせに、やたらと勘がいい。隠し事の一つや二つ、それも命の危険があるような仕事のことなどは、すぐにバレる。

そうしてお決まりのセリフを吐く。

”行かないで”、”一人にしないで”。

決まってそうなのだ。戦いの場でのみ生きる実感を得ていると言っても、全くの過言でも言葉遊びでもないサイファーにとって、正直にはつきりと言つてしまえば非常に煩わしい。

「ベアトリクスと、その実家の私兵連中とケリをつける。この第十二層のほとんどが戦場になるから、荒事屋仲間が避難を呼びかけたら、おとなしく従え。命が惜しいならな」

——さあ、なんて言うかな？

ほくそ笑んだ彼の顔は、すぐに面食らったようになる。

「……………止めても行くんでしよう？　なら私は見送るだけです」

「あ……………その、なんだ。お前さん……………」

その先を止めるように触れた指。

フレデリカの人差し指がサイファーの唇を押さえる。

諭すように。その先はいらないと言うように。分かっていると示すように。

唇を押さえる指は、そう主張している。

「心配してない、と言ったら嘘なんです」

「だったら……………」

「でも、信じていますから。必ず帰ってくる、そう信じていますから。だから信じて、私は背中を押すだけです」

きつと彼女はお決まりのセリフを言いたいのだ。

だがそれを押さえつける。

口を真一文字にして。

閉口するのだ。彼を信じるために。

「悪くないね。そうやって女から信頼されるのも」

「信じることも、一つの愛情ですよ」

「愛情?」

からかうような笑みをサイファーが浮かべたのを見て、しまったと思った。

こうなってしまうと顔が見れなくなるまで、きつと弄り倒してくるのだろう。短い間でも分かった、彼の一面の一つであった。

「あの、あなたが思い浮かべているのとは違います。私が言っているのは友達の間、つまりは親愛といえるもので……」

「それだったら言い直す必要はないんじゃないか?」

「言っておかないと、またあなたは私をからかいます」

「だって弄り概のある、珍しい娘だもの」

「わざとやつてますか？」

「うん、だって可愛いもの」

何も言うことなく、ため息だけ。

そして半目になって見つめてきた。

「いつか痛い目見ますよ」

「注意しておくよ、優秀な才女の貴重な忠告だからな。さて、そろそろ部屋に戻って寝るといい」

それをフレデリカは良しとしなかった。

ぐいっとサイファアの袖を引いた。

何を言いたいのかも分かった。何を望んでいるのかも。

それは両手の指では数え切れないほどの、女との付き合いが為し得た。

「僕でいいの？」

「私は言いましたよ？」

——信じていますから、と。

戦いの前夜は和やかに射撃練習をして

何度目の同衾だったか。

寝起きの頭でサイファーは昨夜のことを思い返す。

特に何かあったというわけではないが、今回のただの同衾は躊躇なく抱きついてきたような気がするのだ。

人肌が恋しいのか。

おそらくはサイファーを信じる決断を定めるために、昨夜の一晩だけでも一緒にいようという考えがあったのだろう。

ただ、ぴつたりと体をくつつけられたのには参った。

ソファアアの上で押し倒されて、押しつけられたのとは違う。当たっていたのは胸板の部分であり、息づかいも感じたがシチュエーションが違う。

ベッドの上で男女が一緒に寝るなど、ましてや成人をすでに迎えたばかりであれば、そういうことを欠片でも考えてしまう。

悲しいかな、これが男の性サガなのだ。

異性と床を共にすれば、あまねく男はティーン・エイジャーに逆戻りするのだ。

つまりは一日中、劣情にうかされて眠りが浅かった。

おかげで上下の脛がややもすればランデブーする。

だが一睡も出来ていなかろうが、彼のバイタリティーに何ら変わりはない。それでも眠ってしまいたいと思ってしまうのは、昨夜の酒が抜けきっていないせいなのか、それとも劣情を押しえ込むことに神経を使いすぎたせいか。

ここはフレデリカの名誉のために前者とすることにした。あんな幼気な少女にも等しい女のせいにするなど、自分のプライドが許しはしない。

こういった寝不足や、財布の金が羽生えて飛んでいくのは、女性と楽しい一時を楽しめた代償だと考えれば納得できる。

少なくとも頭は、脳は。

だが身体は抗議を叫んだ——寝かせろ、と。

身長に合わせたせいでキングサイズになってしまったベッドの上で、三回も転がっては唸り、また三回転がっては唸り、それを四回も繰り返してから決断を下した——あと二時間だけ、眠っておこう。

そう決めた後に夢の世界へ旅立つのには一分とかからなかった。

それから、どれだけの時間がかかったのか、サイファーは目を覚ました。ベッドのそばに立つ気配を感じたために。おおよそフレデリカだろうと思って目を開けると案の

定だった。

「起こしていいか、少し迷いました」

「なんでだ？」

「あんまり気持ちよく眠っていたので、起こしたら悪い気がしたんです」

「そんな顔してたのか」

「そう言われると……顔だけではなくて、呼吸とか姿勢にも現れていたと思います。全体で熟睡していたのを表現していたんだと思います」

「一種の才能かな」

「少し珍しすぎる気もしますけど」

苦笑しながらフレデリカも同意の意を返した。

間抜け面をさらして眠ったことは幾度となくある。

ほとんどの場合は一夜を共にし、情交を交わした女たちが見てきたもの。言うなれば特権のようなものだ。サイファーでも行為の後には疲れるのだから。

それを見られたのは、なんとなくだが、気恥ずかしいものがある。

自分が一番無防備なところは見せたくないかった。

アーカムが寝首を搔くことが珍しくない危険な場所ということとは関係なく、単なるプライドの問題であった。男というものは常に格好付けてなければならぬという持論

に基づいている。その程度のプライドだ。

おまけに気恥ずかしいことには気恥ずかしいが、見られても悪い気はあまりしない。知り合つて一ヶ月も経っていないというのに、ずいぶんと親しくなつたことに苦笑してしまふ。

彼女がいなくなつてしまふのは、五年以上もの間いた存在がなくなつてしまふのに近い。なぜ、これほどに存在が大きくなつてしまつたのかを、サイファーは知らない。

本当は目を向けていないだけだ。

本当は目を逸らしているだけだ。

顔を、背けているだけなのだ。

「どうしたんですか？」

小首を傾げて問いかけるフレデリカの顔。

それは常に薄くかかる灰色の雲さえ貫く、日輪よりもなお、輝いて見える。

「なんでもないよ。ただ、お前さんは本当に良い子だと思つただけだね」

「そんなことばかり言つていたら、齒が浮いて、気障な人だつて思われますよ」

「それも悪くない」

もう、と頬を膨らませて呆れ半分、怒り半分。

のろのろと起きあがる彼を見つつも、それは全く変わっていない。

「荒事屋だつて客商売ですから、気障な人つて思われたら、お客さんが減るかもしれないませんよ。」

「それは困るな。あ、着替える。僕の裸を見たいなら、ここにいても良いけど？」
なにも言わずに真つ赤になって駆け出した。

おもむろにシャツをめくつて、少々擦れたジーンズの前を開けて下げようとしたのだから。

フレデリカの目に映つたのは、たくましく割れた腹筋だけ。

寝間着代わりのシャツをめくつたせいで見えた、女では得ることが困難なもの。

昨晩はあれに身体をくつつけて、無防備に熟睡していたのかと考えると、ただでさえ熱くなつて顔にさらに熱が集まつてくる。

——こんなに意識したのは、初めて。

——こんなに顔が熱くなるのも、初めて。

——恋という存在を意識し始めたのも、全部初めて。

初めての感覚が身を焼くように熱くする。

大学時代はベアトリクスを振り払うことに専念し、単位と自分の研究だった新型数式機関の論文と試作品の作成に打ち込んでいた。

色恋など知るはずもない。

知りたくもなかった。

ややもすれば、ベアトリクスと同格に成り下がってしまう。そんな気が、なんとなく、なんとなくだが、確かにしたのだ。

——こんなに始めてのことがあつたら、調子狂って変になりそう。

朝食として仕込んだスープを加熱して、プディングと付け合わせの肉と野菜の具。そしてオレンジの果汁を隠し味に入れたフレンチトーストの用意ができる。なんとなく野菜が足りないような気がして、特製ドレッシングを絡めたサラダも用意しておいた。

時同じくして欠伸と共に、やたらと高い上背の男が、ぬうつと現れた。

サイファーはきつちり着替えたのだろう。

ただ、いつも着込んでいるコートにテンガロンハット、シャツプスとジーンズという組み合わせからコートとテンガロンハットがないだけ。

それだけなのにフレデリカには、ひどく新鮮に思えたのだ。

おもむろにサラダを食べたとき、サイファーの表情が変わった。

「あ……………あの？」

思わず止めようとしても、その言葉は届かない。

それほどにがつついてサラダを咀嚼していく。

フレデリカの予想を大幅に上回る早さで、大盛のサラダがなくなっていく。

器を空にしてから、一息ついた。

「これ、スツゴく旨かったわ」

「……見ても、わかるくらいでしたよ？」

「そうだろうな。だけど止まらなかつた。ドレッシングがスゴかつた」

「お祖父ちゃん秘伝のレシピですから」

口元に手を当て、微笑む仕草。

それ一つで希代の画家が、彫刻家が、芸術家が、数十年もの月日の末に書き上げた作品に思える。

そう思えるほどに、フレデリカは可憐だった。

この微笑みを崩すものを許したくはなかつた。

この微笑みを崩すものを生かしたくはなかつた。

だから彼は決めたのだ。

フォーレンシルト大公家相手に戦争をやろう、と。

すべては彼女に笑顔のために、殊勝なる彼女のために、彼は力を振るおうと決めたのだ。

「また作ってくれないか？ 今度はカレーも一緒に、な」

「はい！ それぐらいなら、おやすいご用です」

「その”それぐらい”だって、僕は出来ないんだけど」

左手に温もりが触れた。

そつと触れたフレデリカの左手が、腕を上つていく。

くりくりのアーモンド型をした左右で色の違う、アイオライトと黄金の目は、サイファーを偉大な英雄でも見るような憧憬の意を込めて見つめている。

なぜかむず痒い気持ちになった。

「その分、あなたは強いです」

「そうかい？」

「初志貫徹、決めたことは曲げない、強い意志がなければできないことです」

「天上天下唯我独尊、の方が正しいと思うけど」

「ヘンリエッタは、きつとそう言うでしょうね」

「違う。だが否定することだって出来そうにない」

左手が男の手の甲に戻つて、力強く握つた。

彼女の顔に微笑みは、すでになくなっていく。

真一文字に結んだ口から何を紡ぐ？

真一文字に結んだ口から何を放つ？

真一文字に結んだ口から何を話す？

サイファアの頭を占めていた数々のものが、それだけのことに塗り替えられて、塗りつぶされて、それだけに興味が行った。

「たとえ冗談でも、そういうのはやめて下さい」

疑問——たった一つのそれが、男の頭を占める。

なぜ、フレデリカはそう言ったのか。

理由があるとすれば、それはたった一つの簡単なこと。

見返りなく自らの意志で他人を思いやれる人間、それだけだ。

アーカムでは絶滅危惧種だ。ここは利己主義者たちが集う、エゴイズムのゴミだめだ。誰もが自分だけしか見ることができない。自分だけしか思うことができない。

望まれなければ、利害がなければ、下心がなければ、仕事でなければ、誰もやらない手を、差し伸べることはないのだ。

「そうやって尖っていないで下さい。周りを傷つけるだけではすまないんです。傷つける人がいなくなれば、その尖った心は自分に向くんです」

「……………自分自身、そういう経験があつたからか？」

銀灰色の双眸に映る、虹彩異色のアイオライトと黄金が揺らぐ。それは瞼によつて隠され、開いたのは口だった。

「……………私を想ってくれたのは、祖父とヘンリエッタだけでした。」

私は両親の顔を知らないんです。無論、どういう人間で、優しい人だったのか、ひどい人だったのかも。孤児だったんです。物心ついたときから教会の孤児院で暮らしてました。私を引き取って、育ててくれた義理の両親は私を想っていなかったんです。衣食住は満足に与えられませんでしたし、欲しいものは買ってくれました。ですけど、それだけだったんです。私は子供のできない二人が、幸せな家族という願望を作るために道具だったんです。だから不自由はなかったけど、驍の一つも怒られたこともなかったんです。

そういったものは、たまにやってくる祖父がしてくれました。社会でどう生きるか。義務と権利と責任。学校では教えてくれないことを、両親に変わって教えてくれたんです」

「瞼が開いた。

その下の鮮やかな青と金の像は、揺らいで形を変える。

瞳になみなみと溜められて決壊寸前の様相を見せる、大粒の涙がそうさせるのだ。

今にも頬を伝ってこぼれそうで、それをフレデリカは意志の力で留めていた。

だから嗚咽は混じらなかつた。

「でも私の世界は狭すぎたんです。暴力を用いない、満たすだけの虐待は、祖父の教える世界だけで世の中の酸いも甘いも知っていたつもりになつただけでした

そんなときにベアトリクスとの一件があつたんです。それ以来、在学中は誰も寄せ付けずに過ごしました。あのヘンリエッタでも、誰も近づけずに、単位を得るための論文に打ち込みました。誰にも興味を抱きませんでした。話もしたくなかつたんです。

………人という存在が、怖かつたんです。関わりたくないとおもつて俯いた。

誰もが一度は通る道なのかもしれない。

それでもなお、歩み寄る道を選ぶのか、他人への興味を失うのかは、当人次第なのだ。どうやらフレデリカは後者に堕ちかけていた。踏みとどまれたのは周りの人間のおかげなのだろう。ヘンリエッタが奔走する様は容易に想像できる。

その甲斐あつて彼女はここにいる。

「一生、人と関わりたくないと思うときなんぞ、二十年生きていれば一回はある。いけなと思う必要はないよ。そういうのは胸の内に誰だつて隠している」

「………あなたもあるんですか？」

「あんまり。そう思ったヤツはこの世から退場願つたからね。そういつた現実には辛さを感じない代わりに、僕の手はその分血まみれ」

でも、そう言つて区切つた。

葉巻を啜えて火をつけた。初めて会つたときのように、奇妙なかたちを煙は描いた。

「でも、そういったものとも、自分に危害を加えるヤツとも、毅然として立ち向かわないとならない。戦わないとならない。それを諦めた先にあるのは、負け犬人生だけさ」
「それでは、あなたが傷つくだけです。戦い続けてばかりでは、ただ目先の問題を無理矢理かき消しているだけ」

「そうだろうな。僕の生き方は真つ当な大人としては五重ペケだよ」

変えようと思つたことは一度もない。

戦いに次ぐ戦いの果て、このアーカムに流れ着いたときに就いた暴力実力行使請負業を売る仕事。

これ以外の仕事に就いて生計を立てるなど、彼も人生観から永久追放済みであつた。
「だから一緒にいる必要なんてない」

「それは聞けません」

どうにも理解できないことが一つ。

なぜフレデリカが自分を慕っているのか。

このアーカムという特異なる街がなければ、社会不適合者の烙印を押される。そんな自分をなぜ慕うのか、サイファーにはわからない。

——それは聞けません。

きつぱりと言い切つてのけたフレデリカの瞳。

月に二、三度は見ることができる青空よりも澄み切つた虹彩異色がじつと見つめた。

「約束、反故にする気はないんです」

「あの指切りかい？ あれは僕がお前さんの前からいなくなると言っただけだ。お前さんが僕の前から去ってはいけない理由にはならない」

「あの約束は二人揃ってこそ、成り立つものだと、私は思っていたんですけど。どうやら私の恥ずかしい勘違いだったようです」

「——死が二人を分かつまで」

「そこまで重くはしない、そういうつもりですけど？」

「そうだな。ただ一緒にいるくらいで丁度良い」

無骨で大きな手と、繊細で小さな手が、触れ合つて握りあう。

目と目が合つて、思わず笑みがこぼれた。

——こんなに笑つたのは、いつぶりだったか。

彼の心中で吐き出された呟き。

シニカルだ。彼の笑みに対して、他人が漏らす感想はいつだって、その決まりきつたセリフだ。ヘンリエッタも、一度だけ、そう言った。

それに当てはまらないのは、目の前の彼女だけ。サイファアを慕い、彼に憧憬ともしみともとれる、そんな眼差しを注ぐ彼女だけだった。

「お前さんは、どうしたい？」

「もう、逃げません」

はつきりと告げた決意に、行動で答えた。

フレデリカの手を引いて、階段下の物置のドアを開ける。

少しだけすえた臭いがした。家の広さに比例して、狭いはずの階段下の物置は存外に広かった。

理由は足下にあった。

鉄の蓋。おそらくは地下への入り口であろう。

金属の擦れ合う音は皆無だった。要はそれだけ使っていて、それだけ油を差して動作を滑らかにしているのだらう。

奈落の底に行くための、打ち付けられた鉄の梯子に息を呑んだ。

「どうする？ 先でいいか？ 後にするか？」

少し考え込んでから、

「あなたの後について行きます」

「そうかい。落ちそうになつたら言え。受け止めてやる」

「ありがとうございます。でも見上げるなんて真似、しないでくださいよっ。」

スカートを掴まんで持ち上げた。

今日の服装は純白のフリル付きエプロンが眩しい、青空を思わせる色合いのエプロン

ドレスで、膝下丈のスカートであった。履いているのは、外出するときの革製編み上げブーツだ。見る目ある者が見れば、それはアーカムの軍用品に負けず劣らずの上層高水準品であると見抜けただろう。

——本当にアーカムというか、この空気が煤けて、空の曇ったご時世に似合わない綺麗な娘だ。

サイファアの抱いた感想は、彼の内にもみ留められ、彼のみが知る事項だ。彼が望まない限り、誰かが知ることはない。

彼が先に行つて、彼女が後についていく。

そこそこな高さを下りて、結構な時間が経つた頃にブーツ越しの感触が変わつた。鉄板の床だつた。

ゴウン、ゴウン。一家庭に必要なライフラインを供給するための無骨で太いパイプが、天井を縦横無尽に走っている。

電灯が辺りを照らす。

新大陸で発明王とも呼ばれた男の特許は、ガス灯とは違う光を振り撒いた。

「わあ……………」

青く光る合金の扉だ。それは金庫と同じダイヤル方式で閉ざされている。近くに鍵穴もある。

三メートルは確実にある大きさに圧倒され、思わず声が漏れた。独力では確実に開かないと思うほどに、目の前の扉は豪壮で分厚く感じられた。

「待ってろ、今開ける」

ガチャと音がした。鍵を持っていたのだろう。

分厚い扉を難なく開けた先にあつたのは、壁いっぱいには掛けられ、天井から鎖で吊された古今東西の銃器。

祖父と共に住んでいたときに受けた護身術教室で、あらゆる銃器について特徴と取り扱いを教えられた。だから分かるものもあつた。

「あ、アーカム45……」

「知ってるのか？ 結構値が張ったけどね」

それはアーカムで作られたM1911クローン。ライセンスというものなど関係無しに、この街ではあらゆる銃のコピー品が作られる。おまけに主流は無煙火薬なのだから、イギリス本国に比べれば武器の性能に大きな差が出るのだ。

アーカム45は45ACPの代わりに、自動拳銃用に長さは変えずリムレスに手直した45ALP《Automatic Long Pistol》を使う。薬莖の長さが増えたおかげで握りにくいのが、装薬が多く詰められるだけあつて威力は折り紙付きだ。

鈍色に光る防錆処理のされたスライドが光る。銃身長は六インチは確実にある。元から大きめの拳銃なのだから、コピー品もそれなりに大きいのは避けられない。

「拳銃は使える?」

「護身術教室で一通り。役に立ったことは、あまりないんですけど」

「そうだな……………僕も引き金を引くより拳を飛ばす。ヘンリエッタは己の五体とナイフだけだ」

「らしいと言えば、らしいと思います」

「ウン、ありや女傑だ」

アーカム45が繊細な手の内に握られた。

ズシリとくる二キログラム超の重量を持って余さず、手の延長として操りそうだった。45口径回転式拳銃の代表格であるピースメーカーと同じ——いや、装薬が進化しているのだから、実際はもっと上なのだろうが——威力の鉄塊が頼もしかった。

珍しくも野蛮な思考に嫌気がさして、アーカム45を元に戻そうとして、

「欲しいのなら、あげるよ」

「も、もらえませんよ! 値が張った品なんでしょう!」

「いいよ、一生の友とする得物を探し続けて買ったものだから。今はずっと使う得物があるから問題ないんだ」

「あの大きな黒と銀の銃ですか？」

「アレか？ アレは………普通の仕事の時に使うやつ。本当の得物はここに仕舞ってあるのさ。と言つても盗んだところで、人類には使えない代物さ」

「その黒い箱でしようか？」

「察しがいいね、正解だよ」

弾薬の収められた鉄箱で作られた道は十字で、その真ん中に黒い革のケースがある。非常に大きなものだ。一メートルは優にあつた。

留め金が小気味よい音を立てて解放されると、サイファーはガバツと勢い良く開けた。

そこにあつたものに思わずフレデリカは息を呑んだ。

「お前の力を借りたい。頼むぜ、相棒」

儀式のように巨銃をとつて額に当てた。

灰色に染まった巨銃は六〇センチを超えるだろう。

いや、超えて当然といわんばかりの巨銃だ。ニツケルめつきとは一線を画する輝きを放つ、恐ろしく巨大なりボルバーだった。銃身上部に放熱用のベンチレイテッドリブに、銃身下部と左右に反動抑制のベビーウエイトを取り付け、銃口にはゴツイマズルブレーキが取り付けられている。

銃身だけで十五インチを超え、巨大な輪胴には七〇口径以上もの巨弾を収められそう
だ。

それでもサイファーにとっては、ようやく大きいという程度であった。

その特級の凶器が、ランク付け不可と言える男の手に握られている。彼の何をランク
付けするか。どれをとつてもランク付け不可のようだが、家事能力とジョークのセンス
は底辺だろう。

それを観賞用の模型銃でも扱うようにガンスピンスさせてから、輪胴を右にスイングア
ウトした。そして弾丸を一発ずつ込めていく。その数は六発を通り越して、二十四発に
まで達した。

目の前で繰り広げられた質量保存の法則を超越した現象に、フレデリカは度肝を抜か
れて口をパクパクさせた。

サイファーの声が上から降ってきた。

「その銃はお前さんにやる。どの道、フォーレンシルトの連中と確実に戦争だ。持って
おいて損はないよ」

「……………やっぱり、戦うんですか？」

「ン、それは確実なことだ。最初っからの予定だったんだよ。あのベアトリクスって淫
売のガキが、自分のやったことを悔い改めようが、悔い改めまいが、どの道にしたって

血は流れるのは必定なんだよ」

——僕が、そう決めたのだからね。

「——ッ」

喉の奥で声漏れそうになったのを、必死で飲み込んだ。

なにを言おうとしたのか。わからない。

恐らくはアーカムの外、フレデリカの価値観の六割を占めているイギリス本国の常識に則ったもの。

この悪逆にして背徳なるアーカムでは、子供の落書きよりも意味を成さぬもの。ならアーカムの掟とは何だ？ アーカムの法律とは何だ？

それは個人の裁量だ。

それは一人一人が決めることだ。

誰かがイギリス本国の法律に従っていけば、誰かがハムラビ法典を地で行くのだ。あるいは宗教的なものに則って行動するのだ。

絶対法規は存在しない。それも誰もが納得できるようなものなど、絶対に存在しないと、このアーカムは声高に叫ぶのだ。

故に世界常識の生命尊重、他人への思いやり、そうあるべきとされる美徳の数々は意味を持たない。

揺らがない信念に基づく力こそが絶対。信念だけでは無意味。力だけでも無意味。その二つを持ち合わせる人間は誰だ？ それ実行使請負業者サイファー・アンダーソンか!?

「それは私を守るため、ですか?」

「……………そうだ。お前さんには死んでほしくない。ベアトリクスの狙いは、十中八九お前さんだからな。約束は保護にしない主義だ」

——だから目の前から、いなくなるような事態にはしない。

銃を仕舞いながら呟いた。

その言葉をフレデリカは聞き逃さなかった。

頬が熱くなり、胸が高鳴りを覚える。きつと間抜けな顔をしているに違いないと、ぐるりぐるりと回りつつある思考の中で思う。

まるで白銀の鎧に身を包んだ騎士が、剣を掲げて誓う主君を守る宣誓だ。

実際は煤けた灰色のコートを着たガンマン被れで、誓う相手は両親に捨てられた惨めな女。立場の方から考えても、サイファーの方が上なのだろう。

「車、出す」

「え、どこへ?」

「サイファー・アンダーソン先生のパーフェクト射撃教室。ま、お前さんの腕を見たいだ

「けだけど」

いくつかの銃を革のトランクに仕舞って、梯子を上って地上に出る。

彼について行くと、気付けば車のガレージだった。

整備用の工具を壁に並びにぶら下げ、数式機関の整備について書かれた本が鉄製のキャビネットに平積みされていた。

ガレージにはガーニーが鎮座している。最新式のモダンなデザインをした、灰ずくめの車。幌の屋根ではなく、車体と同じ軽量高強度を誇る合金製の屋根だった。

幌の屋根ならブローニング自動小銃あたりの火器で弾雨を降らせれば、搭乗員は抵抗する間もなく皆殺しにできる。それを防ぐためだろう。

ガーニーは抵抗なく、振動もほとんど感じさせずに走り出した。さすがは最新式だ。純粹蒸気機関だと悲惨なほど振動がひどい。イギリス本国は純粹蒸気機関が主流なのだから、同情を禁じ得ない。

ハンドルを握るサイファーが口を開いた。

「人を撃つたことは？」

「……………ありません」

「そうだろうな。それが普通なんだから、恥じることはない。護身術なんてものは使わずに済む方が、一番良いことなんだよ」

「サイフアーさん、は？」

「三桁は確実として……………流れ弾を含めたら四桁かも。本国の方にいたとき、あのリボルバーでレジスタンスの大陸移民たちを老若男女平等に、しこたま撃つたよ」

目を少しだけ細めた。

僅かながら、本当に僅かながら、眉間に皺。

思い出したくないのだろうか。

アメリカ独立戦争で、アーカムに流通するオーバーテクノロジーで大陸移民を蹂躪した大英帝国イギリス。

アメリカを後押しする各国の支援など鼻先で笑い飛ばすほどに、相手のアメリカ側さえ精神崩壊の末に笑みをこぼさせた火力に折られたアメリカ人。

それでも独立を諦めぬ彼らを殺した過去。

不適な笑みが良く似合う顔に、眉間に皺を寄せる何かがあったのか。

「それだけが生きる実感を得る、ただ一つの方法だったのさ。その時の僕にとってみれば、金儲けより、娯楽作品より、ウマイ飯を食うより、高級娼婦を抱くより、何よりも代え難い楽しみだった。戦いで己を解放する感覚に溺れちまった。だから、この街でしか生きていけない。この二代目ソドムとゴモラに、ね」

シニカルな笑みだ。己に対する嘲笑も込められているのか、どこか悲しげだ。どこか

寂しげだ。そして——どこか諦めているようだ。

もしかすると——もしかすると、だ。

サイファー・アンダーソンという今までに見たことがないほど、単純で奔放で力強く
私の強い男。たかだか二十五年に満たないフレデリカの人生でも、彼ほどの男はいな
い。

そんな彼でも、自分ではどうしようもないものを抱え、それから自分を救ってくれる
存在を待っているのだろうか。

「恋をしたことは………あるんですか？」

「するより、された方がダントツだ。どうにも僕の危険なニオイにホイホイされる女が、
なんでアーカムにはいつばいいんだ？ しかも胸とケツがメロンでも入れてるみた
いにデカいのが相場だ。娼婦でもないのに真っ白なくらい肌塗ってやがるし
………スマン、愚痴っちまった」

「いいえ、愚痴は聞いてても苦痛じゃないですから。もしかして………私のことも、そ
う思っていたりは……？」

「胸以外、お前さんは当てはまっていないよ。あと料理できる娘は、フレデリカが初めて
だから」

きよとんとフレデリカが目を丸くした。

何か信じられないものを見たようで、サイファアの顔をじっと見つめていた。
おずおずと桜色の唇を開く。

「料理の出来ない女の人って、本当にいたんですね」

「フレデリカの中だと都市伝説だったりするの？」

「両親もお爺ちゃんも前時代的な人で、女性は料理が出来て当たり前。ですから私も無理矢理にでも好きになるくらい、包丁を握られましたし、身の回りもそういう人たちがばかりで」

「ヘンリエツタも自炊するよな。結構おいしいものを作るし」

「私が教えたんです」

マジか、と今度はサイファアが目を丸くした。

「……………これから、ひどいことになるというのに、私たちだけ、なんででしょうか、その……蚊帳の外で他愛もない話をして」

「それがいいんだよ、フレデリカ。戦いのもたらず高揚感に慣れてくると、そいつをもっと強く感じようとかバカをやるようになる。これを一年も続けていれば死体になるか、シリアスキラーが戦闘狂の出来上がりだ。つまるところ、戦士には日常の癒しが欠かせない。それが欠けると日常と非日常がアベコベになる」

「だったら、もっと色々な話がしたいです。サイファアさんの話も、私にとっては、とて

も面白いので」

「バカな男の、バカな日常だぞ?」

少しだけ虹彩異色の目を伏せた。

サイファアの視線がフレデリカの方に、一瞬だけ向くと、少しだけ口角を上げて前方に戻る。美少女が憂いを帯びて目を伏せる様は、彼の琴線に触れたらしい。

一方でフレデリカはぎゅつと唇を噛み締めた。サイファアの態度が原因ではない。彼をそういう態度を隠す術を心得ているし、彼女はサイファアを見てはいないのだから。

ならば原因は何だ? 思い出したくもないことか?

右手を胸の前に当てて、ゆっくりと語り始める。

「サイファアさんはアーカムを二代目ソドムとゴモラと言いました。私もここでしか生きていけないと、そう思ってしまったんです。イギリス本国にいた頃は両親から、何の興味も示されず、ただ衣食住を満たされるだけで、二人はいつも私を人を見るような目ではない目で見るんです。

そういう私も本国での生活が苦しくなって、いつも肌が泡立つような、そういう感覚を覚えるようになりました。自分がいるべきはここじゃない。そんな甘えにも似た考えがグルグル回って、耐えきれなくなってお爺ちゃんを頼ってアーカムに来たんです」

エプロンドレスからパフスリーブの袖が目を引く、黒のドレスに着替えていた。少しだけ大胆に胸元を開けたデコルテをぎゅつと握る。

「でも、やっぱり逃げるだけじゃダメなんですね。逃げて、それを埋め合わせるように辛いことがあつて。だから、あなたを慕ってしまうのでしょうか？ 立ち向かうだけの強さがあれば、あなたにも頼ることはなかったと思うんです」

サイファーは答えず、ブレーキを踏んだ。

サイドブレーキも引いて完全に駐車状態だ。

「着いたぞ」

開けた空き地だ。人や建物でごった返しているのが普通のアーコロジーでは、あまり見ない場所だ。

そう思っていたのだが、あるものを見たときに”ここはそのための空き地だ”と納得した。ズタ袋を人型にしたものを十字架にした板切れに、イエス・キリストよろしく張り付けにしている。少しだけ鼻を突くニオイがした。

この五〇〇メートル四方の空き地は射撃場だ。流れ弾対策に四方をモルタルと鉄板の合わせ技で囲い、立ち位置を示すラインまで引いてある。

ガーニーのトランクからいくつかの革のトランクを出した。おそらくは全てガンケースだ。

「さっきの話だけど」

トランクを並べつつ、サイファーは言った。

「お前さんが戦うことを望むなら、いつだって力になってやる。今まで逃げてきたツケが回っているなら、その十倍立ち向かえば採算がとれるんじゃないかな？ 一人で出来ることなんか、たかが知れてるからね。だからヘンリエッタでもいいから頼れ。いつだって力になってやる」

「……………ありがとうございます。とても、嬉しくて。その、なんかむず痒い感じがしますね」

「安心しろ。僕もクサイセリフを吐いたせいで、お前さんと同じようなもんだ」

さて、と言ってサイファーはアーカム45をフレデリカに渡す。ご丁寧に本体と弾倉は別々にしてあるあたりが、彼なりの心遣いということか。

「さ、お前さんの腕前。見せてもらおうかな？ 的は好きに撃つていい」

——わかりました。

弾倉を込めて、遊底を引いた。割と力がある作業を、フレデリカは難なくこなす。

両足を開き、拳銃を構える様は違和感の欠片もない。身に纏っている服が、アーカム流行のスタイルであるデコルテを開け、逆V字に開いたスカートから中着のスカートを覗かせる。アーカムの淑女”のスタイルであっても。

銃声一発。

45ALPは的の頭部を撃ち抜いた。

その刹那にそこから赤い液体が飛び出た。十メートル先にあっても分かるが、やや粘っこく、少し赤黒いのは血以外の何者でもない。

「さ、ささサイファーさん!? あ、あれは一体!?!」

「ン、ズタ袋を寄せ集めて人型にして、中に肉屋で手に入れた家畜の内臓とか、バラした奴らの血肉とか詰めたヤツ。死体も有効活用しないとね」

「その発送はいりませんよ……初めての人は心臓に悪いです」

「ベアトリクスのヤツはダルマにして、直接ここの的にしてやるさ」

「あの………手足は?」

撃鉄をデコックして元に戻し、サイファーの顔を見上げて固まった。

口角が思い切り吊り上がった、とんでもなく邪悪な笑みだ。

——絶対にロクでもないこと考えてる!

付き合いの浅いフレデリカでも直感で分かる。

質問をしたのは自分だが、もう少し先を考えるべきだった。

耳を覆いたくなるようなことが、その口から飛び出すのだろう。

「そういうのが好きな好事家に売るのさ。」コレクシヨン”のためなら連中は金に糸目

をつけないからね。綺麗なヤツは毛の一本まで、女王様の束でやりとりされる。

ちなみに売った”商品”だけど、例えば手の場合は握ってみたり、指を咥えてみたり、用を足した後にその手でケツを拭いたり、夜はベッドの上で自分の………」

「も、もも、もういいです。聞いた私がバカでした。だからその話をやめてください」
グロテスクと性的倒錯の合わせ技。

未だに幼気な部分を残すフレデリカには、あまりにもハードルが高すぎた。

きつと最後まで聞いてしまえば羞恥で赤くなって、グロテスクさに青くなってを繰り返すだろう。

「それはいいさ。しかし、思った以上に腕がいい。違う銃にしてみるか」

フレデリカに渡されたのはブローニング自動小銃。

天才銃工ジョン・ブローニングが作り上げた、トンプソン短機関銃と同郷の銃だ。今となつては軍隊やアーカムの荒事屋に好まれる人気の代物だ。

機関部^{レシーバー}を観察した後に、セレクターを操作して単射に切り替えると、的へと向けた。か細い指が引き金に掛かって——引き絞られた。

乾いた重厚な銃声が響いた。フルサイズのライフル弾である三〇—〇六弾は、拳銃弾とは威力も反動も比べものにならない。

なのにフレデリカは、それを抑えた挙げ句、的の脳天を撃ち抜いてのけた。包丁も重

いと言つて落としそうなのに。

「やっぱり上手い」

素直な感想を漏らした。だがフレデリカの心中は複雑なのか、ひきつったようにはにかんだ。

「銃の腕をほめられましても……………」

「ヘンリエッタより抜群に上手い。誇れることじゃないけどさ、こういうときの技の覚えはいざという時に役に立つ」

「……………それでも役に立つことはなかったんですけど、ね」

「守つてやるとも」

「え？」

素つ頓狂な顔をした。

目の前に狙撃弾でも撃ち込まれたような、そんな顔をした。

その顔にサイファーもつられた。

同じような表情の二人が、そこだけ時間が止まったようになっていた。

「おまえが撃てなければ、代わりに僕が撃つてやるよ。人を撃つたり、傷つけるのが僕の取り柄だからね」

ブローニング自動小銃の安全装置をかけた。

「これは少し、身に余ります」

弾倉を抜いて、薬室から抜弾し、サイファーに返した。

その所作の鮮やかさと、その美しさに少し呆けた。

どうにも美しいものは人を骨抜きにする。それはサイファー・アンダーソンでも例外ではなく、それをやれるのはフレデリカ・エインズワースだけだった。

感動が冷めやらぬ内に、フレデリカは微笑みながら言ったのだ。

「守ってくれるんですよね？」

花も恥じらう、輝くような微笑みを向けたのだった。

「もちろん、お前との約束なら守ってやる」

浮かべたこともない柔らかな笑みを浮かべ、齒の浮くセリフを言った。

戦を誓いし乙女は黄金を手に入れ

第十二層の第二十二区画。通称「売春区画」とさえ言われる、娼婦も男娼もピンからキリまでいる場所だ。

ネオンと呼ばれる気体を詰めた電灯を煌びやかな電飾とする技術は、パリ生まれアカム育ちのジョルジュなる男の手によって生み出された。

それはマンハッタンを南北に走るブロードウェイも同じだが、華やかさと煌びやかな印象に加えて、性の目覚めも知らぬ少年さえ分かる淫靡さがある。

昼間でも軽減はされていない。

アカムの男女はあらゆる面で奔放だ。無論、性の方向でだつて奔放だ。昼間から五度六度と励むことは何ら珍しくもなんともない。

その中に女が一人——ヘンリエッタ・ウエントワースだ——が通りを歩いている。はつきり言つて浮いている。

周りには腕を組んで歩く男女のカップル——時折、女同士や男同士もいる——だらけの通りに、たった一人だけの女だ。

声かける連中はいない。

女や男を漁る場所ではない。情事のための場所なのだから、出会いを求めるといのはお門違いというものだ。

ブーツを履いた足が止まった。蹴りの威力を上げるために、踵と爪先に軽合金を仕込んだ代物だ。ただ、それは威力を上げる保障のようなもので、そんなものがなくとも彼女の蹴りは内臓破裂を容易に引き起こす。

ヘンリエッタの視線の先には揃いの制服に身を包んだ男たちがいる。

彼らがフォーレンシルトの私兵だった。世界各国から集められた選りすぐりの精鋭だが、それがアーカムで何の意味を持つというのか。この暴虐に染まりし街で、人の理から外れた者たちに。

「やあ」

すっぱりさっぱり。

久しぶりにあった知り合いに声でもかけるようだった。

知り合いというのがミソだ。別に親しくも何ともない、ただ存在を知っているというだけなのだから。

「お楽しみ中のところ失礼するが………死んでもらう」

これもすっぱりさっぱり。

ソレだけに突き放している感が半端ではない。無理もない話だ。どの道、彼らには死

んでもらう予定だったのだから。

周りに人はいない。私兵たちの後ろは誰一人としていない。邪魔なのだ。

彼らの目の前には銃火器で武装した荒事屋たち。彼らは第十二層を縄張りにする荒くれであり、荒事屋の中では中段くらいの存在だ。サイファーに声をかけられた結果だった。

日々の糧を稼ぐのにカタギのやり方では苦勞する。だから暴力を売り物にして荒事屋になる。第十二層どこかアーカムでもトップクラスの荒事屋であり『実力行使請負業』を名乗るサイファーは、自分やヘンリエッタでなくとも片づけられる仕事は彼らに仲介するのだ。

生身の私兵たちは雑兵と見なされた。

だから彼らがあてがわれた。

幾多もの銃口が私兵たちを照準し、その数だけ敵意と殺意がある。

ヘンリエッタが立ち去ったのを合図に引き金が引き絞られた。

数秒と経たずにももの全員がぼろ雑巾に等しくなる。その原因が弾丸の質と量にある。反動と引き換えに大型車両一台を横転させるパワーがある超重量高速弾や、獲物の体内で四倍近くまで体積を増やす拡張弾。

通りが血の海になったとき、控えていた掃除屋がわらわらと押し寄せる。

シミだらけのエプロンと新品の不織布マスクをして、肉片や遺留品を別々の袋に火バサミで入れ、血は統一規格の洗剤で洗い落とす。掃除屋それぞれの特製だと、違う業者同士のとくに混ざり合った洗剤から化学反応で有毒気体が発生することがあるからだ。売春区画こと第二十二区画を出たヘンリエッタは数本のナイフを握る。彼女の仕事は特別製の私兵の相手だ。

目の前にいる。時代遅れの騎士鎧をまとったような、二メートル五〇センチ近い男たちが五人。

機関兵士だ。彼らはヘンリエッタに気付いたらしい。どこからか長剣を抜いて居合いのように腰だめにした。

次の瞬間、石畳を高速で滑り始めた。

背中の噴射口から蒸気と炉の燃焼ガスを噴射しているのだ。ただそれでは不十分なので、足の裏には直径十五センチの鉄球による球体車輪を三つトライアングルよろしく仕込んである。

それが地面と擦れ合い、足と地面の間から火花を出しつつの高速戦闘を可能にする。

五〇メートル離れていた距離を一秒も経たずに詰めた。

腰だめの長剣を真横に一閃。ヘンリエッタの首の位置だ。

ヘンリエッタはすでに飛んでいた。手に三本ずつ手投げナイフを持つと、機関兵士に

向けて投擲した。

機関兵士の弱点たる関節部分に突き刺さるや、淡い光を放つて燃え上がった。火炎のルーンを刻んであつたのだ。

関節を焼き切られてしまえば機関兵士と言えど動けない。動けなければ好きなように料理できる。ヘンリエッタぐらいの実力があれば。

ヘンリエッタがシャツの右袖をまくる。前腕部分を一周する入れ墨が五つ。書かれているのは文字だった。ルーンも混ざっているが英語や楔型文字もある。中には見たこともない文字も。

五つの入れ墨の輪を掴むと、エメラルドの双眸が光った。

膝を折つて動けなくなった機関兵士の頭部に、回し蹴りを一撃。それだけなのに兜はひしゃげた。現時点で最大級の威力を持つ三〇—〇六スプリングフィールド弾を意に介さず、柄付き手榴弾でようやくという強度なのに。

その核となったのは五つの入れ墨の輪。それはあらゆる魔術流派をこつちや煮にした身体強化術式なのだ。その効果の方針は一つで『少ない反動で最大の効果を』故に機関兵士の頭を破壊できる。

「さあ、一二の舞となるのは誰だ?」

人差し指をクイと曲げては伸ばす。

挑発だ。乗れば御の字と考えているのか。

兵士たちは買った。長剣を上段に構えた。

ヘンリエッタの口が三日月に歪む。そのエメラルドの瞳は好機に爛々として、全身が震えている。

喜んでいる。彼女の内に眠る気高き雌の豹が、久方振りの骨のある獲物に喜んでい

る。
遠くで獣の雄叫びが聞こえた。高い猫科の猛獣を彷彿とさせた。

大上段に掲げられた機関兵士の長剣が、唸る機関の雄叫びを上げて振り下ろされた。石畳を一メートルも挟り込む一閃。当たれば真つ二つではなく粗挽きになる。

それを紙一重で避けるとは、ヘンリエッタの胆力には恐ろしいものがある。

鋭さではなく重量による切断を要とした刃はなまくらだ。だから足場に出来る。だから跳躍できる。

ヘンリエッタは一瞬のうちに機関兵士の兜を蹴り碎いた。

それだけには留まらずに全身を覆う機関鎧さえ胸部の半ばまで碎いて。体をしならせて跳ね飛び、食い込んだ足を抜いて地面に着地するや、辺り一帯無人となった家々の並べバラダめがけて飛んだ。

ヘンリエッタがいたところは火の海となった。およそ市街戦で使うべきではない焼

夷弾だ。石畳さえガラス化し、巻き込まれたものは蒸発する。

機関兵士の左手には多用途砲がある。徹甲弾から広範囲榴弾に焼夷弾まで。それに焼夷弾を装填して撃った。本来ならば機動兵器の類に使うべきなのに。

ペランダの手すりに乗ったヘンリエッタは、そのまま屋根へと飛んだ。高さは五メートル近いにも関わらず一息で飛んだ。そして屋上で膝を着いた。

「インターバル……もう来たのか」

身体強化術式は術を施せばずっと保つわけではなく、効果が切れれば数分のインターバルが存在する。今まさにインターバルの時が来て、ヘンリエッタの超人的膂力は失われた。

ならば使えるのはルーン文字を刻印したナイフだ。

機関兵士の関節を焼き切るほどの熱量を放つ、ケンのルーン文字を刻んだナイフは七本ある。正直言つてかなり心もとない。

ならば。左腕を見た。

鈍色に防具が光っている。鎧のガントレットだ。小指を動かすと、ルーン文字を刻んだ隠し刃が飛び出した。

刻まれているのはユルのルーン。イチイの木を意味するそれにまとりつくのは死の意味。わずか皮膚を数インチに満たない程度で切るだけで、この世の条理の内にある

存在は絶命するのだ。

機関兵士が屋上まで一気に跳躍してきた。超常的膂力を誇る機関兵士ならばこそ出来る、彼らのみの十八番芸だ。

着地にあわせて長剣を振り下ろした。

屋根に使われたモルタルと鉄筋が、破片となって飛び散る。

いずれも彼女に当たりはしなかった。身体強化術式なくとも重機関銃掃射さえ避けきつてみせるヘンリエッタが、この程度の一撃に破片の稚拙な散弾が当たるわけがないのだから。

ほんの僅かに存在する、人間が察知できる最小の体感時間の間に、ヘンリエッタは機関兵士の脇を駆け抜けていた。

隠し刃が鎧を切り裂き、内部機構さえ達している。

ルーンが力を発揮したのか、機関兵士は力なく倒れ伏す。

残りは三人。

いつからだだったか。こうして獲物を前にすると無意識に笑みがこぼれる。殺りたくてたまらなくなってくる。

雌豹が牙をむいた。

インターバルは終わったが、身体強化術式はいらない。今の彼女は獲物を狩る猛獣な

のだ。

機関兵士の左腕が歪に変わる。歯車とピストンの機械部品なのに、歪だと思つてしまふのは、それが人型をしているものの腕だからか。

今や左腕はカノン砲に変わった。

視線が交錯した。ナイフを一本だけヘンリエッタは持つて、機関兵士に澱んだ目を向ける——殺意で澱みきつた瞳を。

リミッターの外れる。そんな音がした。

こうなつてしまつたら、もう止められない。

しゅう、と息を吐いた。

機関兵士の目の前にヘンリエッタがいた。次の瞬間、瞬く間に肩車でもするように陣取ると、新体操に似た動きで首をねじ切つた。

機関兵士たちに動揺が走つた。

兜の鉄仮面——表情など存在しない。なのに動揺の色が確実に存在していた。残る二体を歯牙にかけようとした。

風に乗つて声が聞こえる。いや、鳴き声だ。

——てけり・り、てけり・り。

それは精神をすり減らす異形の声だ。

それは精神をすり減らす異界の声だ。

それは精神をすり減らす異次元の声だ。

人ならざる不定形の怪物が生み出せる冒瀆の鳴き声。

ヘンリエッタは雌豹から女へと戻った。無理もないことだ。その声を聞いて闘志を保てる者は、この地上に誰も居はしない。

それは決まりきったことだからだ。

それが当たり前のことだからだ。

条理は、常識は、運命は、この地上のいかなる手段でも覆すことは不可能なのだから。

機関兵士二体の背後から現れた。半液状の身体はあらゆる物理を通しはしない。熱であつても、冷気であつても、電気であつても、質量であつても無駄であろう。

天鷲^{ビロード}絨のカーテンのように身を翻して、機関兵士二体をあっさりと包み込む。そこから彼らのシルエツトが消えるまで、わずか数秒もかかつてはいなかった。

「シヨゴス……………」

いつの間にか呟いた。その幻想生物の名を。

自らを作り出したものに反旗を翻した、狂気と冒瀆の申し子。

——てけり・り、てけり・り！

ヘンリエッタにシヨゴスの敵意が向けられる。

すう、と息を吸い込んだ。自分を鼓舞して立ち上がる。後ろに飛び退いた。

ヘンリエッタがいたところを黒色の半液物質が襲う。モルタルと鉄筋の建物は触れあつた部分から侵食され、空気の重みにも耐えられずに崩れた。

シヨゴスの力だ。

万物を衰弱させ、脆弱にさせ、抵抗を奪う力だ。

瓦礫の欠片も残りはしない。ただ、砂のように変質して、風に乗って消えるだけの固体に変わる。

——てけり・りりりり！

シヨゴスの身体が薄く伸ばされる。万物を腐らせて断ち切る刃だ。

触れたそばから屋根の上という地面は切り裂かれ、そこから砂へと崩れていく。

ヘンリエッタは必死になって避けた。

崩れる屋根に立つのは諦め、石畳の地面へと飛び降りようとした。

足が竦んだ。まるで初めて戦いに赴いたときのように、その肝心の一步が全く踏み出せない。胸元に何かが詰まっているようで、全身が硬直して自分の意志というものが、んじがらめにされている。

本気でそう思ってしまうそうで、それが事実であつて自分のみを襲っている。幻想生

物との対峙では避けては通れないことだ。心が折れるのは。

今までで踏んできた場数など、大嵐の中の蠟燭の灯ほど、不確かで、呆気なく、そして頼りなさすぎる。

息をすうと吸い込んだ。肺腑に新鮮な空気が入った。

——飛べる。

だから飛んだ。自分の足が着いている、この崩れかけの屋根を蹴って。シヨゴスが体を伸ばそうと、その念塊に等しき身体では遅すぎる。

地面に立った。盤石とした石畳の地面に。

「はあっ………いやっばり慣れないな、いや慣れる方がおかしいのか」

どっと冷や汗が落ちてくる。石畳に汗が落ちてシミを作る。おびただしい量としか言えない。精神のダメージは肉体に対して尋常ではない影響を及ぼした。

それだけ幻想生物は条理から逸脱している。

人が忘れ去った神代の時代、そこに存在していた奇跡の名残に。はてはこの世ならぬ外法の生命を人々は認められない。

だが彼らは存在している。

故に現実と願望にズレが出来て、精神が傷つく。この世ならぬものに人の心というものは、いつそ哀れみさえ覚えるほどに脆弱なのだ。

「アレに対抗できるのはサイファーだけなんだ………！」

来ない男のことで歯を食いしばる。もどかしさに満ち満ちて、自分の無力感に歯噛みするのだ。

ヘンリエッタではシヨゴスを倒すのに遠すぎる。筋力や知能という面ではなく、存在そのものの違いがそうさせている。

だがサイファーは違う。

唯一、彼らを塵殺出来るのだ——幻想生物を！

砲と聞きまがう腹の底に響く銃声と、龍の息吹を思わせる蒼い火線が伸びる。

黒い粘液の身体が千々に弾け飛ぶ。

その銃火の元凶はサイファーだ。テンガロンハットを片手で押さえて、橙色に違い合いの髪と灰の外套を風になびかせている。

そう、そこに立っていた。サイファー・アンダーソンが。

「遅いぞ。危うく死ぬところだった」

「憎まれ口きいてるあたりからして、本当は結構余裕だったんだろ？」

「ああ」

「殺すぞ」

黒い粘塊の腕が伸びる。

ヘンリエッタが恐れて避けたそれを、サイファーは羽虫でも払うように切り払う。その手には太刀が握られている。

刀をくるりと回して八双に構える。

身の丈二メートルを超えた巨漢が、刃渡り五尺もの大業物を構える姿は、そのシルエットの大きさに拍車をかける。

「ここに来る途中でフレデリカをフランクに預けた。僕のガーニーに乗っているはずだから、がんばって合流してくれ」

「わかった」

「あとシヨゴスは水道管を通して十二層中にいる。何かを探しているようだが、十中八九フレデリカだろ」

「……………もしかしなくても、かなり重要なことを任せているのか?」

「その通りだとも
Exac'tly」

「全速力で合流する!」

次の瞬間ヘンリエッタが消えた。

サイファーは目の前で五メートルまで大きくなったシヨゴスを睨む。

太刀を一閃。たった一閃でシヨゴスはうねる動きを止め、路地いっばいに粘液の身体をだらしなく広げた。

彼の一闪はシヨゴスの生命の根幹を砕いたのだ。一体どういった方法を用いたのか。それを知る術を持つとするならば、それはこの世のものではないのだ。

そうでなくてはシヨゴスは打ち倒せない。

そうでなくしてシヨゴスが打ち倒せるものか。

「こりや後始末が大変そうだ」

振り返った先には更なるシヨゴスの群れがいる。

また砲と聞き違う銃声が鳴る。彼の握る鈍色の巨銃は奈落のごとき銃口を向ける。

その口径が七〇口径という砲にも迫る代物だとすれば、大抵の人間であれば恐れをなす。

「うざつてえなあ。だからほかの誰かがそう思う前に——」

——僕が、殺してやる。

三日月が顔にできた。見るもの全てを畏怖させる、狂相の笑みだった。

それはシヨゴスにさえ効いた。ゆつくりと粘液の身体を後退させる。顔があれば立派におびえた表情を見せてくれるに違いない。

サイファーに容赦はない。それが”彼ら”なら、なおさらなのだ。

「自分のいる世界に帰るんだな。コウモリの僕が言えた義理じゃあないが」

引き金を引けばシヨゴスの肉体が四散する。

彼の銃がいかに巨大で、規格外の威力を有していたとしても、銃である以上は外法の理を身に内包するシヨゴスに効くわけがない。

だが歴史を紐解けば根拠の一つと思われる事項がある。

一八五四年の四月十四日にあったリンカーン暗殺事件だ。アメリカ独立と奴隷解放を掲げたリンカーンは、それを快く思わぬ大英帝国の上層部が送り込んだ刺客によつて暗殺された。

使われたのはデリンジャーだ。このご時世に出回っているような爆薬を仕込んだり、標的の体内でいくつもの欠片に弾け飛ぶような代物ではない。威力もたかが知れている。

だが暗殺は成功した。暗殺者の念はリンカーンへの強い殺意で占められていたはずだ。それが銃弾に盤石の力を与えた。弾丸にも念は宿るのだ。

サイファアの撃った巨銃から放たれた九〇〇グレインもの巨弾には、彼の本質となるものの力が宿っている。故にシヨゴスの粘液の肉体は四散したのだ。

「こうなると僕の独走だよ。いつも困ってるんだ。せめて十分は保つてくれるとありがたいんだけどさ、どうもそれさえ叶うことはないらしいね」

嘆息して、またシヨゴスの身体が散った。



一台のガーニーが鉄火場から遠ざかっていく。

そのハンドルを握るのは黒人の男——フランク・アーミティツジで、不安そうな面もちで後ろを見続けるのはフレデリカ・エインズワース。

サイファアの指示で戦場からなるべく離れるようにと言われた。二人とも。フランクは頭でも心でも理解してしまっている。

サイファアのいる領域というものに、自分たちの入る余地などないことに。それこそ感情の一片たりとて、何の意味さえ持たせないほど。

それでもフレデリカは気を遣わずにはいられない。

深手など無縁そうな彼が傷つくような気がして、そういう予感が胸を満たすのだ。

だが護身にと渡されたアーカム45とブローニングM1910自動拳銃では雀の涙以下でしかない。あの巨銃の足下にさえ及びはしないのだから。

「サイファアが気になるのか？」

凶星だ。

ずっと胸につつかえていたみたいで、すつきりしない。この一瞬の感情にも等しい葛藤が付け入る余地など皆無だが。

「下手な心配は無用だ。アイツがやられたことは今まで起きたことがない」

「……それでも、あれだけの幻想生物を相手にできるんでしょうか」

「今まで負けなしだ。幻想生物相手でもな」

今まで後ろを向いていたのを、前を見ようと振り向いたときだった。

フロントガラスに黒が迫った。眼前いっぱいには広がる粘液状の黒がガーニーに襲いかかる。

「きゃっ!」

「うおおっ!」

フランクが慌ててハンドルを切った。

タイヤが地面との摩擦を失い、防弾装甲の役目を果たす鋼の車体は横転した。派手に火花を上げながら、石畳を滑ってガス灯を四本も薙ぎ倒して止まった。

助手席の方を地面にして横転したガーニーで、フレデリカはスカートの裾をめぐる。

白磁のごとき肌色の太腿がちらと覗いたかと思えば、そこには二本の革バンドが一周し、アーカム45を収めたホルスターがあった。

拳銃を抜いて、運転席側を登って脱出する。フランクはすでに脱出していた。

ガーニーから飛び降りて拳銃を構える流れは洗練されている。アーカムの護身術はピンからキリまで存在し、上等なクラスになると反射行動での護身行動さえ可能にす

る。フレデリカが受けたのはピンの方だった。

フレデリカの視界にあったのは、蓋の外れた下水マンホール。そこからガーニーを横転させた元凶が出てきたのか。

ガーニーに目を向ければ、前面部が朽ち果てたようになくなっていた。

人力ではあり得ることのない破壊痕に身を震わせた。

フランクは自分の得物を構えている。

ウインチェスター社製のを改造した安定した作動性のポンプアクション式の散弾銃だ。人間なら挽き肉になる八ケージ九粒弾から、射程と精度を優先したスラッグ弾まで、あらゆる弾丸が撃てる。

銃身上部には放熱用のゴツイベンチレイテッドリブが取り付けられている。

元・荒事屋の勤が銃口を頭上に向けさせた。

引き金を引いた。銃口抑制器を取り付けた銃口から、V字にマズルフラッシュが飛んだ。

即座にフォアエンドを前後する。引き金を引いたままの操作はスラムファイア機構を作動させ、第二弾を発射させた。

「上だ！ ヤツは上から来た！」

近くのアパルトメントの水道管、その上階に上水道を引くための水道管からシヨゴス

は湧き出た。

ほぼ粘液に等しい身体が柔軟に姿を変える。

——てけり・り、りりり！

フランクは膝を着きそうになる。

彼らの声を聞いた者の運命だ。この人が紡いだ条理に溢れる世に、異界の存在がいるだけでも肌が粟立つ。声など聞こうものなら耐えられるものなど一般人には存在しない。

シヨゴスの黒い肉体が蛸足のごとく変じ、フランクに向けて振るわれた。

物理的威力もさることながら、その肉体に纏う異界の法則という名の呪いが致命的だ。この世のものは呆気なく犯されて、滅び去ってしまう。

フランクはすんでのとところで屈んだ。

黒い致死の仮足が頭上を横切る。

その根本へとフランクは一発のスラッグ弾を撃ち込んだ。

スラッグ弾はただの鉛弾ではない。閃光と爆音が響いたかと思えば、蛸足めいた仮足に大人の頭ほどの穴が空いた。

緑鉱石と赫鉱石による数式技術が生み出した八ケージ榴弾だ。弾が大きい分、施せる数式も多い。威力は伊達ではなかった。

しかしシヨゴスは異界の理に身を置く者。この三次元上の変化などダメージにはほど遠い。

その穴が瞬く間に塞がっていくのに、フランクは舌打ち一つして歯噛みした。

そして軽い銃声が響く。散弾銃を基準に考えればの話だが。それは大口徑拳銃によるものだ。

フレデリカがアーカム45を撃つたのだ。

だが普通のM1911より強化されているとはいえ、拳銃ではシヨゴスを倒しうることなど出来はしない。

聡明なフレデリカの頭脳はそれを踏まえた上で撃つた。彼女の狙いはシヨゴスが出ている水道管近くにある、破壊されたガス灯だ。

牽制の銃弾にカモフラージュされた一発の弾丸が、ガス灯の金属基礎に命中。一筋の火花が走った。

爆轟が耳を突き抜けた。

熱波がフレデリカの頬を焼く。

その隙に二人揃って駆け出した。アーカム45、ウインチェスター社製カスタムショットガン、それぞれの得物に再装填しながら走る。

「意外に健脚だな」

フランクの声に遊底を引き終えたフレデリカが顔を上げる。

距離は二歩、三歩の距離だ。

元荒事屋のフランクの肉体は無手でも人を殺傷しうるほどに、それほどに屈強だ。相應に足も速い。

なのにフレデリカは息を乱した様子もなく、ちゃんと後に続いている。

「自覚は、ないんですけど」

「なんか運動でもやっていたか？」

「最近、怠っていたんですけど、毎朝ジョギングをやっていた時が……」

「大した足だ」

背後から迫る漆黒の仮足を散弾銃で打ち払った。

フレデリカが上方への威嚇射撃で自分たちの存在を知らせれば、道行くものは避けていく。避けていく人間も元からないのだが。

「きゃっっ！」

「うおおおおっ!?!」

前方の石畳の道を突き破ってシヨゴスが現れた。

そのまま触れるだけで死を与える粘液の身体で、二人まとめて包み込もうと身を広げた。

銀色の何かが空を切る。

いかなる魔術が施されていたのか、シヨゴスの浸食さえものともせず、その肉体に銀色に輝く手投げナイフが突き刺さった。

青白い轟炎が粘液を舐めていく。

それでも異界の不定形生命体は、その質量の一切を損なうことなく生きている。

「二人とも、時間稼ぎは済んだ。距離を離せ」

「ヘンリエッタ！ サイファアさんは!?!」

「一人でシヨゴスたちを相手にしてる。片づけるのに十分もかかりそうにない。すぐに合流できる」

「そりや僥倖だ、さっさとここから……」

言葉は途切れた。

ヘンリエッタとフランクが膝を折って倒れ込む。

明らかに場の空気が変わる。どろりと半液状に変わった、と思い込んでしまうほどに重苦しい。そして現世の存在を許さないほどに変質していく。

フレデリカだけが無事だった。

シヨゴスを目の前にしても揺らぐことのなかった心。

自分でも少しだけおかしいと思っていた。それどころか、あの異形に何か変な感情を

抱きつつあった。彼らの住まう世界こそ、自分の行く場所だと思ってしまった。

それが崩れていく。

自分のどこかが綻んで、悲鳴を上げていく。

軋む音がする。

さざめく音がする。

割れていく音が、響いていく。

その音がするのはどこからだ？ 地面でもない、周りの建物でもない、もつと大きな

ものからしている。

空気から響いているようだった。しかし、空気は何の変化もない。

——変化があるのは空間そのもの。

——感情のスカラーで変異したシヨゴスによるもの。

フレデリカに誰かが告げる。

思わず押さえた、右目を。右目の神経網を伝って告げたのだと、彼女は直感する。で

あれば、フレデリカに言葉を継げたのは黄金の右目か。

——変異型シヨゴス、十秒で三次元への優位顕現を実行。

——現状における自力での状況打破は不可。

——逃走、及び《彼方なるもの》の遺伝子情報の解放による肉体の最適化を提案。

——抵抗であれば後者を選択。デメリットとして肉体変異のリスク有。右目が伝えたのは事実か。

いや、フレデリカの決断は決まっている。

もう逃げないと決めた。決めたのだ。

もう守られるだけの自分ではない。

もう守られるだけの自分ではないけない。

フレデリカ・エインズワースという女は、何一つとして決めることのできない女ではないのだ！

だから望む。立ち向かうことを選択する。そのためならば、化け物になってもかまわない。

二度と傷つくのは嫌だ。氣遣われて、たくさん迷惑をかけた。

だから一人でも大丈夫なだけの力を。力を欲する！

——肉体最適化の意志を確認。

——変異に三分の猶予が必要。準備態勢に入ります。

その時だ。地面が波打った。石畳が粘土細工じみてうねりうねって、形を変えていく。

黒い液体が一気に噴き出していく。霧状になって、挿り鉢状に落ち窪んでいく石畳の

地面、その中央へと集っていき、一つの形を作っていく。

それは女、ずっと見ていたくなる美しい女の形を作り、それでもなお黒い液体の集合は止まらずに質量と体積を増加させていく。

女の下半身は異形と化した。怪物スキュラと言えばピンと来るだろうか。

多くの人間が結合箇所も曖昧になって、くつつきあつて、ひしめき合つて、憎悪と呪いを意味なき言葉に乗せて放つ。

その中に三体の機関兵士がいる。黒い粘液で作られたのにも関わらず、その身体は金属光沢を保っている。

女の部分が上体を起こした。

フレデリカと、目が合った。

「ベアトリクス……」

女の名をいった。

ベアトリクス・ブルツェンスカ・フォーレンシルト。

「会いたかったわ……」

ぞつとする声だ。

空気を伝わって響く声ではない。その声を聞いただけで気を失いそうになるのを、必死になってこらえた。

黒い粘液は色形を自由自在に変え、ベアトリクスの形を完全に再現した。上体に何も着ていない、多くの男を虜にしてきた肢体は黒髪によって隠されている。

シヨゴスへと変異したせいも、彼女の身体はあり得ぬ色香を帯びている。

あらゆる男はその唇に吸い付き、堪能したいと願うだろう。

あらゆる男は肢体を隠す髪を退けて、その下の裸体を拝み、隠微なる肉の味を堪能したいと願うだろう。

例え触れるだけでも死に至ると分かっている。

例え勢力尽き果てた老人であつても、性の目覚めも知らぬ少年も、うら若き恋に恋する少女だつて、例外になることなど決してあり得ない。

美の集結点と言つても過言ではない、ベアトリクスの肉体を一瞥した。

「なんで、ここまでのことを……?」

腹の底から言葉を絞り出すように、その言葉だけが出てきた。月並みな質問だと言われれば、ぐうの音も出ない。

ベアトリクスの眉が上がる。

その美しさは瞬く間に消え失せて、底知れぬ憤怒がほとんどを占めた。

「あなたが私の邪魔をしたからよ! どこまでも目障りであざとい子! 厚かましくつて、すぐにでも殺してやりたいわ!」

「一体、いつ、私があなたの邪魔をしたというんですか!？」

「そうねえ……気づいてないようだから、この際丁寧^{ニジヤウ}に教えてあげる。あなた大学で私たちの評判は知っていた? 知るわけないわよねえ? だって私のおかげで休学になつていたんだから……大学^{ダイク}の男共はいつつもフレデリカ!フレデリカ!フレデリカ!フレデリカ!ほんつつつとに嫌になるわ! あまねく全ての男たちは私にひざまづいて、忠誠を誓つていれば、私が相応の愛で応えてあげるわ。なのに見る目のない男たちはアナタばかり見てる。私を見る男は誰一人だつていないの! 私の家ばかり見てる! 全く羨ましすぎて笑えてくるわ! アナタは存在そのものを見てくれて、そして愛してもらえるんだもの! まあ、ヘンリエッタにご執心な同性愛者だつたら話は別だけど。……アナタは殺すコトす殺してやるわ! それが私が昇華^{サヴァアト}するために必要な儀式なのよ」

フレデリカの瞳に宿るは憐憫と憐れみ、そして侮蔑。
「かなしいひと」

淡々と続ける。

ベアトリクス・ブルツェンスカ・フォーレンシルトを否定していく。

「自分自身を見てもらえない理由はたつた一つだけ。私だつて持つていているか分からないけど、これだけは言える——あなたそのものを見る価値なんてないから。全て

のものが思い通りになるとしか思っていない、それだけの無価値な人。それがベアトリクスという女の価値なんですよ」

空間ごと全てが弾け飛んだ。

その衝撃にフレデリカも、離れた場所にいたヘンリエッタとフランクも紙屑みたいに吹っ飛ばされた。

ベアトリクスの慟哭だった。

非常なる現実の刃が脆い自尊心を打ち砕いた。それも跡形もなく。

「私に価値がないだど?! ふざけるな! 私は美しいの! 何よりも! あなたなんて、あなたなんてええええええ!」

「それが答え。あなたと私を分けた、あなたが否定し続けた、たった一つの答え」
むくりと起き上がった。

瞳に決意を燃やして、フレデリカがいた。

人差し指で、はつきりとベアトリクスを指差した。

「私も会いたかったんです——もう逃げないために、あなたを乗り越えます」

——最適化を実行。

肉体を裏返され、神経が新しく張り巡らされていく。

そう錯覚してしまうほどの激痛に、その場で倒れ込んだ。

右目から大量の情報が入り込んでいき、左目が火を噴いたように熱い。右目が見せるのは冒流の記録。この世に生きる全てを否定し、異界の者たちが紡ぐ冒流と狂気の怪物賛歌。

ただ、自分が自分になっていく。根拠もない、その感覚にだけ身を委ねた。

——もう、にげない。

——もう、まもられない。

——戦うんだ、戦うんだ、自分の力で。

痛みが引いていく。

起き上がったフレデリカにベアトリクスは明らかな恐怖を抱いている。

自分とは対極の美があったのだから。

そう、誰も触れようと思わない繊細な美しさ。天上に住まう神々も、彼女の造形は不

可能だ。全にして一、一にして全なる存在のみが成し得る美しさを携えて。

左手にはアーカム45、右手は無手か。

——状況確認。現時点武装では状況打破は不可能。

——緊急権能によって《彼方なるもの》のスカラーを使用

——肉体最適化は成功。肉体に一切の変調はなし。

いや、光が集っていく。玉虫色の光が球体となって、細く集まっていき束ねられて

いった。

レイピア細剣と化し、玉虫色に輝く光剣を向けた。

「いきますよ」

黄金へと変わった左目、黄金の双眸から放たれた眼差しがベアトリクスを射抜いたの
であった。

終焉、日常と孤独を巻き添えにして

触手が躍り掛かった。

総数にして三〇本近い数だ。しかも一本一本が大人では両手も回せないほど太い。

空気を唸らせて打ち付けられた。

石畳が弾け飛ぶ。それが幾重にも重なって、不可避の包囲網となる。砕けた石畳と砂埃がもうもうと立ち込め、フレデリカの姿を覆い隠した。

光が一閃する。

立ち込める砂埃も、シヨゴスの触手もまとめて。

フレデリカの右手に発現した光剣がなぎ払う。

それは黒き流動の肉体を傷つけ、不可逆の傷となつて苛んでいく。ベアトリクスからは見も世もない苦鳴が響く。

その余波で空間が軋み、ひび割れていくのを、フレデリカの黄金が捉える。きらめく輝きが紡ぐのは《彼方なるもの》のみが使用を許された冒流の方程式。

世の不可逆をまやかしと嘲笑い、世を狂わせる狂気なりし黄金の方程式。その力は砕かれんとしていた空間も、そこにあった全てを粉碎から救い上げる。

「何なのよつ、アナタは！」

「あなたに傷つけられた、フレデリカ・エインズワースですよ」

嗚呼、ここに虫も殺せぬ乙女フレデリカは死んだ。

嗚呼、ここにいるのは戦を誓った乙女フレデリカであった。

左手の銃口が跳ね上がる。通常の45ACPよりもマン・ストッピングパワーと貫通力に優れる、アーカム45の弾丸はベアトリクスを撃ち抜いた。

効果がないと分かっているにもかかわらず引き続けた。

それは干渉を成し遂げるための時間稼ぎだ。右目からしか伝えられなかった、不可視の情報は双眸となつてから事細かに伝えられる。

——目標は取り込んだ数式機関より、11次元レベル高エネルギーを用いての砲撃を画策。効果範囲は半径252メートルに対消滅現象を強制発生。連鎖反応によつてウルベスと近海の地形変形を危惧

——対処は砲撃の実行前に数式機関の破壊を提案。内包数式は軍事用半永久レベル。防御壁により近代兵器での破壊は不可。《彼方なるもの》のスカラーを利用しての破壊を提案。数式機関は目標上体と下半身の結合部。

すうと息を吸う。

生まれ変わったように何もかもが違う身体。それに力がみなぎっていき、何でもやれ

るような気がする。

右手に意識を集中させていけば、それに呼応するように光刃が伸びる。およそ二メートル近い、ちよつとした槍にまで。

ベアトリクスに向けて、地面を蹴った。

紡いだ方程式が現実となつて干渉し、異界の理ことわりを麻痺させる。シヨゴスの肉体は流動性を失つて固まり、硬質で脆弱に変わつていった。

その力の根元がシヨゴスと同じであり、シヨゴスが足元に及ばぬほどの高位の力であることを黄金の双眸が告げる。

フレデリカは、その力を以てベアトリクスに決意の刃を下ろす。

——忌まわしき過去と決別する一閃を！

光刃はすんなりと入つて、僅かな抵抗だけを伝えた。

ベアトリクスが目を見開いた。その白磁の肌が黒く変色していき、黒い粘液を吐いた。少しだけ血の臭いがして、あとから耐えられないほどの腐臭がした。

常人では数秒と保たない腐臭に、眉も寄せずに光刃を捻り込んだ。

はつきりとベアトリクスが身体を痙攣させたのを感じた。

どう、と背中から地面に倒れて動かなくなつた。

黒く変じた肉体はひび割れて、元が人間であるということを忘れさせていく。あの美

貌は永久に失われたのだ。存在さえ許されぬ異界の美は。

その原因となったのは異界へと傾いた、類い希なる美貌の少女。成人を過ぎて尚、その身に少女の香りを色濃く残しているフレデリカ・エインスワースであった。

「フレデリカ……………」

恐れを孕んだ声が背筋を冷やす。

その声はフレデリカの大切な友の声。ヘンリエッタ・ウイントワースが豹のごときしなやかな体を、小猫のごとく震わせていた。

それは隣にいたフランクも同じ運命をたどっている。

幻想生物に抱く恐怖をフレデリカに向けている。

「あ……………っ！ その、私、どうしてもやらなくちゃいけないって、そう思っつて。ベアトリクスのは、私自身の手で決着を着けるべきだと、そう思っつて……………」

「そんなことはない。フレデリカ、君は……………」

「僕と同じなのか、つて聞きたいのか？」

ヘンリエッタの続きをハスキーな声が続けた。それが聞こえたのはフレデリカの背後、その上から振つてきた。

見上げた瞬間、灰色の双眸と目が合った。

「サイファー、さん」

「お前さんの決意にはくるものがあるね。確かに辛い過去というものは自分自身の力で乗り越えてナンボだ。だが、そのために平穩無事に過ごせたであろう人生を棒に振ったか」

「それは……」

「わかっているはずだ。お前さんに潜んでいた力は、シヨゴスと根元を同じくする、異なる理の世界に存在すると」

「私は……いてはいけなかった？ アレは、そういう存在だから」

だから育ての両親に捨てられたのか。内に潜んでいた、黄金の右目が宿していた力を二人は知っていて、それに恐れを為したからか。

祖父の死だって、自分の力が遠からず関わっていたのか。

ならば、力の矛先は大切なヘンリエッタに向く可能性だつてある。

この先に出会うであろう、人生の伴侶にも。

目の前の彼にだって。それだけは、嫌だった。

だったら、自分は去るべきだ。この力が誰かを傷つける前に。

この力は忌み嫌われるべきもの。あの呪いを粘液にして固めたような、この世を冒流するシヨゴスと同じなのだから。

「そんなもの分かるわけがない。ただ、生きていたいと願うか、死にたいと願うか、たつ

たそれだけ単純明快な問題だ」

「でも、私がいたから……」

いつの間にか、彼の巨軀は屈んでいた。

0 になった二人の身長差、そしてサイファーの人差し指が唇を押さえた。

頬が赤く染まったのに、苦笑した。シニカルさがない、そんな微笑みだ。

「お前さんが何を考えているのか、僕に知る術はないよ。だが、フレデリカがいなかったら、君の知るとおりの人生を歩んでいる人はいなかった。でも正しいわけでもないし、悪いわけでもない。すべては、どういう望みをもって、何をしたいか。ここが肝心なのさ」

「その……私は、もう逃げたくないんです！ だから……」

「おっと、話はここまでだ、お嬢さん。嫉妬に狂った魔女がお目覚めらしい」

空気の重みが増していく。

ベアトリクスが猛威を振るっていた時の残り香ともいうべき、そんなものが残っているというのに。

そして漂ってくる甘ったるい空気。それを放っているのは復活を果たした美貌だ。

ベアトリクス・ブルツェンスカ・フォーレンシルトが立っていた。その身と一体化させていた、シヨゴスも一緒になって。

「燃え上がりそうな、イイ男。いっつつも、アナタは私が欲しいものを手に入れてる」
「やあ、はじめまして。そしてさようなら。アーカムの空気は気に入ってくれたようだが、単純に貢ぎ続けるだけの男なんてのは一握りだ。ほとんどは僕と同じ穴の貉なのさ」

戦艦搭載のカノン砲が炸裂したのか。そう思ってしまうほどの轟音が響き渡る。

それが何度も。回数にして、およそ十五回以上も。

サイファアの手握られた規格外のリボルバーの仕業だ。銃身上部のベンチレイテッドリブは白熱し、マズルブレーキからは硝煙が視界を遮ってしまうほど立ちこめている。

規格外のリボルバー、その輪胴に収められていたのは象撃銃や重機関銃も凌ぐ七〇口径もの巨弾。なんらかの力か念が込められていたのか、ベアトリクスの下半身を構成するスキュラジみて変体したシヨゴスものけぞった。

輪胴をスイング・アウトして、六発も入れれば御の字な大きさのシリンドーから二十四発もの薬莖を排莖した。銃自体のことを考えてなのか、エジエクターロッドをきちんと押し込んでの排莖であった。

「効いたか？ 他のシヨゴス共と同じくらい感じたか？ 復活のために水道管から十二

層全体にいたシヨゴスを集めたか。賢明な判断だが、残念なことに無意味だ」

「私に手を出して……タダで済むと思ってるの!？」

「立場が危うくなったら家の力か、なかなか月に並みなことをやってくれる」

ふふ、と含み笑いが漏れた。

瞬く間に凶相の笑みへと変貌した。ベアトリクススの背筋に絶対零度の息吹が吹き付けられたはずだ。そうでなければ、怒りに染まった顔が恐怖で蒼白となるわけがない。

チチ、と撃鉄が起きていく。ダブルアクションは新大陸の「S & W」なる銃器製造社のリボルバーの主流だが、引き金の重さが命中精度の大きな加工につながっている。ガク引きと呼ばれるジャーキングも起こりやすい。

だが規格外のリボルバーは微動だにせず、その奈落の底を思わせる銃口をベアトリクスに向けていた。

「そんなチンケなものを通じるかよ。僕を並のタフガイと思わない方がいい。お前に百人の味方がいたら、百人殺してお前さんも殺す。千人いたら千人殺す。僕はそういう男だ。フォーレンシルト家を皆殺しするのだから、やぶさかじやないって思えてくるくらいにはね」

それはベアトリクスだけに留まらない。

いつの間にか彼女の背後にいたフォーレンシルト家の私兵たちにも、平等に向けられた言葉だった。

根拠もない確信があつた。

——この男ならやりかねない。

——この男は自分たちでは殺せない。

この場にいる全員が石化した。恐怖によって。

「う……うわぎやあああつあああッ!!」

一人の私兵が狂乱して逃走を始めた。

「馬鹿が」

七〇口径の巨弾が私兵の背中に撃ち込まれた。

そのままライフリングによって与えられた回転運動によって、内臓も肋骨も脊椎もねじ切られ、心臓の真上から大人の頭大の穴をあけて抜けた。

即死した私兵が狂乱を伝染させる。血だまりの中に沈み、弾け飛んだ血と肉片を五メートル先にまで散らせた死体は、同じ姿となった自分たちを想起させたのだ。

踵を返して敗走を始めたのは七人、その全てが五体のどこかを失って絶命する。

ある者は頭だった。揃いの制帽は跡形もなくなり、顎の下半分だけを残し、上半分は血飛沫となって消し飛んだ。

ある者は腹部だった。胃も腸も弾丸によってねじ切られ、わずかな肉片だけを残して何もかも撒き散らした。

ある者は右腕だった。ボルトアクション式の小銃を握ったままの腕が、天高く弾け飛んでいく。恐るべきは右腕という致命にはならない箇所にも関わらず、彼は着弾とほぼ同時に絶命した。弾丸のエネルギ―は場所に関わらず全身の体機能に揺さぶりをかけ、相手を確実にショック死させたのだ。

「さて、お次は誰だ？」

酷薄な笑みを見た。

彼へと伸ばそうとした手が進まない。石と化したように硬直して、フレデリカの纖手は数インチも進みはしなかった。

——ほんとうに、サイファー、さん？

胸に浮かび上がった疑念は、ぎりりと胸の奥を締め付けていくようである。それが、とても耐え難く、だからこそ手をもっと伸ばす。

——あれは、嘘だったんですか？

記憶を辿る。記憶を辿っていく。彼との暖かな記憶を。

——私に胸を貸してくれたサイファーあなも。

——縫ってきた私に伝えてくれたサイファーあなも。

——あの優しかったあなたは、全部嘘で。

——今のあなたが、本当のあなたなんですか？

胸中でつつかえて、口から出てこない問いかけに、無論答える者はいない。

1対1から、1が圧倒的優位を保つ1対多の血生臭い本場の戦いの前では、その問いかけも意味を為さぬほどにフレデリカは無力だ。

歯噛みした。力を得て調子に乗っていた自分が愚かしくて、頬を一発では足りないくらい張ってやりたかった。

——この瞳が一体、何だっているの。

——問いかけの一つもできないなんて。

——だったら、意味なんてない。

——私自身の力で何もできていないのと変わらない！

「サイファー、さん！」

軋んだ声が絞り出される。

「わかってる。もう終いにするとも」

空気が濁った。どろりと粘性を帯びたように重苦しく、流動性を失ったようになる。

サイファーの外套に変化は起きた。灰色が暗く、黒く、暗黒に染まっていく。彼の内から胎動しているのだ。全てを浸食することを許された闇が、彼の内から這い出てきたのだ。

外套を染め上げた闇は脈動する。

外套を侵し抜いた闇は鼓動する。

外套を変質させた闇は歓喜する。

闇が吼えた。それはどこへ向けた咆哮か。さぎめきながら、この世ならぬ発声器官を生み出し、この世を冒瀆する悪罵の限りを吐き出していく。

『つ!!』

人語で書き表せぬ雄叫びは脆弱な兵士の心を瞬く間に砕き、仲間たる二人の荒事屋も恐怖の糸と針で縫いつける。

フレデリカの心さえ悲鳴を上げた。耐えられぬほどに濃く、深く、闇は色づき、蠢いては這い回る。

それが腕となつてサイファアの身体中から、亀裂を作つて顕現した。剛健な男の腕、繊細な女の腕、無垢な子供の腕、萎びた老人の腕、鋭い爪を生やした人ならぬものの腕。あらゆる腕が幾重にも伸びて空を行き来する。

「終わるべき時が来た。幕引きは我が闇をもつて」
腕が伸びた。

「さあ、砕き尽くそう」

十数本もの腕がベアトリクスを貫く。

幾多もの腕が躍り掛かつて、五指を開いた掌で押しつぶす。

望むもの全てを冒流し、望むもの全てを陵辱する黒き腕かいなを避けることなど不可能だ。全てを否定するのならば時の縛りさえ否定し、確実に相手を砕く力だ。

彼が望みし、腕の標的はシヨゴス。死の呪いを粘液状の肉体にたつぷりと孕んだ、許されざる存在。それを砕くのも根元を同じくする、黒き冒流者の黒き腕であった。

「シヨゴス。失われた幻想の生命、流動せし反逆の奴隷。生みの親に抗い、滅ぼすだけでは飽きたらず、人の愚かな情念に便乗して人界に介入するとはな」

——なんと、浅ましい。浅ましすぎる。

酷薄な笑みは決別の合図となつて。

外套がさざめきが一気に激しくなる。闇の冒流は佳境に差し掛かり、その流動的な変化に拍車がかかつていく。

空気の重みが最高潮になった、と誰もが思い始める。それが引き金となつたのか私兵の一人が狂乱のあまり、腰だめに構えたルイス軽機関銃を乱射する。

三〇—〇六スプリングフィールド弾の破壊力は歩兵用弾薬カートリッジでは、三本の指に入るほど強力で軍も採用する優等生だ。人間一人など容易に命を奪つてしまう。

だがサイファー・アンダーソンの前では、滑稽なほど、愚かしいほど、いつそ哀れみさえ抱くほどに、なんとも無力であった。波紋さえ銃弾は闇の固まりと化した彼に与えることはない。

「死に疾走する蛮勇には、無謀の愚かしさを教え込んでやる。ちつぽけな命一つで済む破格の授業料に感謝して碎かれろ」

闇のさざめきが腕とは違うものを作り出した。いや、真似たとでも言うべきなのか。口だった。サイファアの右肩から腰へと垂直に亀裂が走って、そこが豪壮な牙が生え揃う大口へと変わる。奥から新たな腕が這い出るように、いくつも生え出てきた。

その腕にはびっしりと亀裂。ばっくりと割れて口へと変わる。いや、いくつかは目だ。赤く、紅く、赫く染まった瞳孔の瞳だ。

サイファアの銀灰色の瞳と、異形の瞳がそれぞれ狙いを定めた。

がちゃん、と歯が閉じた。白歯がぶつかり合う音と、ほんの僅かにトマトでも握りつぶしたような音がする。一人の私兵が首から上を食いちぎられていた。

首なし死体を作った口はサイファアから生えでて、奇怪な声を上げて笑った。やけに大きく、やけに白い白歯が禍々しすぎた。

別の口が三人まとめて喰らう。牙の生えた口だった。たった一噛みで胴体が三人とも同じようになくなっていく。

「——っ!!」

それは異形の声だったのか、恐怖に心碎けた私兵の声だったのか、本当の異形に恐怖したベアトリクス声だったのかはわからない。

「さよならだ。その程度の幻想は、僕が潰し砕いて消してやる」

腕が覆い被さる。シヨゴスが押し潰されていく。

口が噛み合わされる。シヨゴスが咀嚼されていく。

心酔き女だけが無事で、異界の液体生物だけが為すすべもなく砕かれていく。

その時、フレデリカは確かに聞いた。

——タスケテ……ヤメ、テ。

——マダ、クダカレタクナイ、シニタクナイ。

悲痛な断末魔の主は本能的に分かった。

なぜフレデリカに声を届けたのか。もしかすると黄金の双眸が伝えたのか。

止めてくれると期待したのか。自分を砕きつくさんと腕を振るい、牙をもって噛み砕く彼を。

黒き力はシヨゴスを半分も砕いた。これ以上の破壊は再生さえ許されないのか、弱々しく触手をフレデリカへと伸ばしていく。

ぎゅつと唇を噛んで。

「来ないで」

目尻から何かが流れるのを感じながら、触手を払いのけた。きつと目があれば絶望したに違いない、半分となったシヨゴスは次の瞬間には砕き尽くされた。

嘲笑を聞いた気がする。

黒き呪いの粘液を砕いた彼が、誰かに向けたように笑っているような気がした。笑い声など耳には届いていないのに、それを見たような気がした。

「フレデリカ」

名前を呼んだ彼がいる。サイファー・アンダーソン。屈んでフレデリカの顔をのぞき込んでいた。いつの間にかへたり込んでいたらしい。

手を取って、そつと両手で握りしめる。

純粹な笑みだけを浮かべて、それをフレデリカに向けている。

普通の体だった。シヨゴスを砕いたときのような、闇に身体を明け渡した状態ではない。フレデリカに優しさをくれたサイファーだった。

「悪かったな。ずつとそばについていてやれば、一番よかつたんだが。フレデリカがこうなってしまったのも、僕に責任の一端がある」

手が伸びて、頬を包んだ。親指の先には黄金へと変じた双眸がある。

銀灰色の瞳と目が合った。優しげな光の真偽は見定める術はないが、フレデリカは紛れもない本物の想いから来るものだと思じた。

そうでなくては作れない笑顔だと思つたためだ。あれほどの惨劇と蹂躪を作れるのなら、人一倍の慈しみと優しさがなければ表情には出ない。

そうフレデリカは思ったのだ。

「恨んでくれてもかまわないよ。僕も随分と甘くなったらしい。関わる人間がロクな目にあうこともわかっていたのに、フレデリカみたいな綺麗な子が慕ってくれたんだから。だからフレデリカに非はない。全部、僕の責任なんだからな」

そう言つて手を離そうとした。左手が離れた、だから残つた右手に両手を添えた。

面食らつたサイファーにフレデリカが言った。

「私が決めたことなんです。恨むことなんてないですよ。そもそも、あなたがいなかったら私もヘンリエッタも生きていなかつたかもしれないです。だから感謝しているんです。あなたとの暮らしはワントーン明るかつたので」

そして頬を朱に染めて、俯きがちに問い掛ける。

「私つて、そんなに綺麗なんでしょうか？」

「無自覚ほど怖いモンはない………僕が今まで見てきた中で一番綺麗だな。実年齢より年下に見えるのも良い」

完全に俯いてしまった。小声で「恥ずかしい」と呟いたのが聞こえた。ヤバイ、かわい。そう内心で呟いてしまう。

一方のフレデリカだつて内心は大騒ぎだつた。

——き、綺麗？ 確かにそう言いましたよね？

——言ったんだ。私に対して綺麗って。

——本当に恥ずかしい、顔が熱くなって、本当に恥ずかしい！

首をぶんぶんと振ってしまっている自覚がないのか、顔の熱と恥ずかしさに浮かされるまま振っている。呆然とした様子でサイファーが見つめていることにも気づいていない様子だ。

それが笑顔になって声を出して笑い出した。それでようやく我に返って、そっぽを向いてしまった。

あれだけたくさんいたフォーレンシルトの私兵はどこかへ消え失せていた。

ヘンリエッタとフランクも駆け寄ってきた。

終わりを少しずつ噛みしめていた。ヘンリエッタが力強くハグをしてくれた。フランクも遠くから笑っていた。

笑いあっている。こんなに笑ったのは久し振りで、全員が安堵に包まれて、終わらせたくはないすてきな一時であった。

フレデリカの表情が曇った。

幽鬼のごとく黒髪の彼女が立ち上がったのを見た。手には護身用の拳銃。気づいたのは自分だけ。

ヘンリエッタに向けて狂気的笑みを浮かべているのを見て、いてもたってもいられな

なくなった。思い切りヘンリエッタを押しつけて。

——銃声が、一発。



そこはどこだったか。見上げるほどに高い摩天楼であったが、存在しているという一点が確実に欠如しているように感じられた。重機関群による全自動化が施されているであろう建物から、彼は十重二十重に展開されている数多の電気式光学映像装置からの映像をモニターに出力している。

モニターの数はあまりにも多い。少なく見積もっても五メートルはある天井、その壁一面をモニターが独占している。映像は全てアーカム第十二層のものだけだった。

「今日も《彼方なるもの》の景色が一つ消えたな」

彼の座る椅子と机は床ごと、金属の骨組みといくつものピストン、電気刺激で自在に収縮する柔軟可動機構アクチュエーターで人の手のように動く。椅子の傍らには人形のような、整えられすぎた顔立ちの女が一人。

スラヴ系と思わしき顔立ちをモダンなスーツとタイトスカートで揃え、銀髪をアップにしてまとめた女だった。少しだけ足を交差して立ち、座する彼のそばに女は常に控え

ているのだ。

「大数式と方程式は解析機関に反応を伝えていませんが、そう言いきるのは根拠あつてのことでしょうか？」

押し殺した笑いが響く。

このモニター以外の光がない部屋で、男の声はやけに響く。モニターの光景への歓喜と、女への侮蔑ともとれる感情が見て取れた。それほどわかりやすい笑いであつた。

男が立ち上がった。女の顎をつかむ。僅かに身じろぎしながらも、この後いかなる運命が待ち受けようとも微動だにしないほどの冷徹な表情は一切崩さない。

「脳に至るまで数式機関に置き換えたお前にわかるまいよ。人類は未だに無限よりも巨大なものを認識できず、0よりも無いものという存在を見いだせてはいない。だが生身だからこそ、世にぎわめきというものは閉鎖空間でも観測できるものだ」

「……………私はいつでも主の秘書あるじですのぞ」

女の目が少しだけ光つた。

彼には分かる。有線を使わない無線ワイヤレスの情報送受信が始まったのだと。一日に二回は行われることだ。その後は決まって部下からの報告と、計画遂行のための作戦が提案される。

女が口を開いた。

「フォーレンシルト家の処分は済んだそうです。あとホーランド博士が第十二層での実験を申請しています。主は博士の実験に三ヶ月も保留のみを言い渡しておりますが、今回も保留ということでしょうか？」

ふうむと唸って唸って。顎に手を添えて理的に悩んでいるようだが、その瞳には新しい玩具を与えられた子供のように色めき立っている。

男が首を振った。縦に。

女の目の光は変わらず無機質そのもので、じつと男の目を見据えていたが、顎の手を解いて踵を返した。

「主の決定が人類の未来を定めることを願って」

「人類の繁栄は我が手にあり、か……お前が何を考えているか、私にはわからん。条理を超えた技術を提供しておきながら姿をくらませた異形の碩学め。せいぜい、いつもの椅子に座っていられるように足掻いているんだな。勝つのはいつだって人間だ、人間でなくてはならないのだから」

五指を開いた手を頭上に。スチールの天井のその向こう、果て無き空を男は見据えているのだ。

「我が友、ヒルベルトよ。お前の領域に私は手をかけてみせるぞ」



体がひどく重くて、起きあがるのにえらく難儀した。

ひどく頭が痛くて目の前の光景を理解するのに時間がかかった。最初はここが寝室であることを理解し、ここが誰の部屋であるのかを理解した瞬間にベッドから飛び起きた。

「サイファアさんの、部屋……」

フレデリカには大きすぎるキングサイズの黒いベッドは、あの大きな彼のもの。この大きさは彼にこそふさわしいとフレデリカは思う。実のところ、このベッドを何回も使っているが、自分に分不相応だと感じている。

あのあとに何が起こったのか。

頑張つて思い出そうとしてもモヤがかかったようになって、なかなか具体的な記憶が顔を出してはくれない。

もしかすると思ひ出したくもないことが起きたのか。人間は頭部への強い衝撃や、精神的なショックで記憶喪失になるといふ話を聞いたことがある。

後者はおそらく精神の保護を目的として一時的にでも脳が記憶を消してしまうのか、現実から目を背けたいあまりに記憶から意志が消し去ってしまうのか。

傍らにお気に入りの、いつもの編み上げブーツが置いてあった。

それを履こうと思つて、ブーツの方を向いて止まった。

黄金の双眸と目が合った。そこには姿見サイズの鏡がおいてあった。

アイオライトの輝きを放っていた右目も、眩い黄金の輝きへと変じている。自分は普通を捨てたという思いが、胸に重くのしかかつて潰れてしまいそうだった。パチンと弾けてしまうのかもしれない。

癖のない金髪も、シミ一つない雪のように白い肌も、顔のパーツで大きく変わった点は見られない。ただ右目が黄金に変わっただけなのに、目の色一つ変わるだけで根本的な何かが違つてしまったように感じてしまう。

パフスリーブの黒いドレスのまま寝かされていたらしい。発育が良すぎると自分でも思う、それほどの大きさの胸がデコルテを押し上げて谷間を作つて覗いている。やはり、これも変わつてはいない。

「……………フレデリカ!」

後ろから声をかけられた。

切羽詰まったような、少し嬉しさも混じつたような、そんな声だった。サイファーがドアを開けて立っていた。

テンガロンハットとコートを脱いだだけの、シャツとジーンズにシャツプスのスタイ

ル。ただ右脇にホルスターを吊して、そこにM1860アーミーの金属葉莖使用のコンバージョンを入れていた。

肩胛骨のあたりまでギリギリ届く、ほとんど橙色に近い赤毛とも茶髪とも言える髪も、少しだけ乱れているように見えた。

「あ……………その、私」

「終わった、全部終わったから心配するんじゃない」

サイファーが歩み寄った。少し小走りだったような気もする。

そうか、もう終わったのか。フレデリカの心に安堵が訪れたとき、記憶が一気に白くスパークした。

引き金を引いた感触。

頭上を飛んだ衝撃と熱波。

吹き飛んだ女の顔。

ほとばしる鮮血と脳漿。

記憶が確かに甦った。——甦ってしまったのだ。

「うわああああああああああああ!!」

絶叫した。

後悔と罪悪感を燃料にして、喉が潰れるまで叫び続ける勢いだった。

全てを思い出した。

自分とサイファアの銃弾がベアトリクスを殺したのだと。

ヘンリエッタの身体を押しつけて、無我夢中でアーカム45を抜いて、三発もフレデリカは頭部と胸部めがけて発砲した。同時に頭上でサイファアのリボルバーが炸裂した。

二発が胸部に撃ち込まれ、残りの一発とサイファアの巨弾が頭を吹き飛ばした。広がっていく血だまりの中に沈む死体に、フレデリカは弾倉内の残りを撃ち込んで^{マガジン・チェンジ}弾倉交換しようとした。

銃が上からひったくられたのを覚えている。

腹の底から耐え難い苦痛とこみ上げる感覚がして、耐えきれなくなって何もかもをぶちまけた記憶がある。口の中が酸っぱくなって、大量に唾液が溢れ出し、腹からこみ上げる感覚がした。

叫びをやめて口を押さえた。ベッドの上で吐き散らすわけにはいかない。

膝に何かが乗せられた気がする。

ブリキのバケツだった。結構な大きさがある。

サイファアが背中をさすってくれていた。

「無理しなくていい。あんまり、我慢しすぎるようなもんでもないし、お前さんの苦しみ

とベッドを天秤かければ、ベッド一つ惜しくはない」

いてもたってもいられなくなつて、バケツに顔をつつこんで吐き散らした。逆流した胃液が鼻からも出て、ひどく苦しかった。

背中をさすつてもらつたおかげで、吐きやすかつた。一人だったら何回も咳き込んで苦しみ続けていたと思う。

異性の前で嘔吐するなど一生の汚点になりそうだが、そんなことよりも初めて自分の手を血に染めてしまったこと、人を殺めてしまったことが身体中を巡り巡っている。

「わ、私、ひ、人を……殺して」

「ああ」

「ヘンリエッタが危なかつたから、む、無我夢中で、銃で」

「助かつた、と言つていたよ」

「あんなに、あんなに簡単に………人が死んで」

震えだした身体を止めるように、そつと両手を握りしめた。

この感覚を覚えているような気がした。

あの瞬間だ。初めて人を殺めてしまったとき、銃をひつたくつた腕が自分の両手を包み込んでくれた。あの腕はサイファーのものだと直感した。

「人は死ぬ。ヘンリエッタもフランクも、絶対に死ぬ。殺されることもあれば、病気に倒

れることもあれば、天寿を全うできる人間もいる。そこは必然だ」

「ひ、人を殺して」

「お前が撃たなかつたらヘンリエッタが死んでいたかもしれない。その後でお前さんも殺す気だったかも知れん。誰かやらなければ、誰かが泣くことになるんだ。お前さんの心が泣きそうになつたら言え。胸くらいは貸してやる」

涙とその他諸々の体液で台無しになつた顔を上げた。

胸をあけておいてくれていた。促されるままに顔を埋めて、一気に感情が噴き出した。

「こ、殺してしま、って」

「ああ」

「もう戻れ、ない。元の生活なんて、もう、できない。手、手が、汚れて」

「全部、フレデリカ次第だ」

そのままいつまで泣いていたのか。

時間感覚が完全に狂ってしまったているが、寢室の時計は午後の七時を指し示している。随分な時間、眠って、泣いていたらしい。

涙を拭って、鼻をかんで、サイファーから水をもらって飲み干した。ずいぶんとみつともない姿を晒したことに、今更になって気づいて赤面した。このところ弱みをサイ

ファーに晒して、支えてもらって、それが続いている。

「すいません。本当に、支えてもらってばかりで」

「気にするなよ。男冥利に尽きることばかりで、フレデリカみたいな娘^こだったら大歓迎なんだよ。綺麗な娘に頼られるっていうのは、その娘が余程の難物じゃない限り嬉しいことなのさ」

「また、綺麗って言いましたね？」

「うん、だって綺麗なんだから仕方ないだろう？」

また俯いてしまった。うんやはり可愛い。こうやってフレデリカをからかう行為が、自分にだけ許された一種の特権のようにさえ思えてくる。

おまけに自分を拒否しない。

闇を解き放った後の彼を人々は嫌悪する。石を持って追うような真似はない。本能的に自分たちの意志で排除できるような存在ではないと、生物的な本能が警鐘を鳴らすのだ。

一種の災害のようなものとして扱われる。

グリム・クリーチャー
幻想生物さえ無事では済まさない人型の天災として。

だがフレデリカは見てしまったのにも関わらず、普通通りに接してくれた。フランクとヘンリエッタは慣れているために平気だが、初見の人間がする反応ではなかった。

極めつけにこちらも受け入れ態勢をとったとは言え、そのまま素直に縋り付いて泣き明かしたのは予想外であった。そういったことは少しでも減ると思っただけだが、逆に依存とも言えるべき縋りが増したように感じてしまう。

「私は『もう逃げない』と、そう決めたんです。ですけど、少しだけ怖くなったんです。強い心で立ち向かうことと強い力で戦うことは似てるようで違って、私に必要なのは前者だったんです」

フレデリカの独白にサイファーは答ええない。

何か思うところでもあるのか、表情が決して明るくはない。どちらかといえば眉間に僅かながら皺があるし、目も細めている。

「だから……教えてください。この力との向き合い方を」

「なぜ、僕なんだ」

「自分が一番わかっていると思いますよ?」

「やっぱりわかっちゃうのか。確かに僕の力は根元をお前さんの力と同じくする、そういう力なんだ。森羅万象全てを否定して打ち砕くことを許された、黒き腕あぎとと顎あぎと。幻想生物を打ち砕ける、黒きものダーク・ワンがもたらした永遠幻想遺物ファンタズマゴリア。知り合いの魔術にも傾倒した碩学くずれが、僕の力をそう言っていたよ」

諦念が含まれていた。

らしくない表情だ。そうフレデリカは思ってしまう。彼とて常に不敵に笑っているわけではないのに、陰のある暗い顔は似合わないと感じてしまう。

「この力を狙ってくる奴は多い。その手先も妙な力を使ったり、全身を精密機械に置き換えて数式機関を埋め込んでいたりする。お前さんも近い内にそうなる。だから自分の身は自分で守れるようにしてやる」

「それじゃ……………」

「これから、よろしく頼む。僕の背中を預けられるぐらいには、育ててやるよ。多分、辛いこともあるとは思うけど、何もしないままよりは良いはずだ」

「……………はい！」

そつと繋いだ手から伝わる温もりに、少しだけ二人の心が綻んだかもしれない。

「晚メシ、どつか食いに行くか？ メシ作れそうにないだろ」

「時間かかりますけど、今からで良いなら作りますよ？」

「ああ……………頼んでいい？」

「何が食べたいですか？」

「カレー。ビーフの入った」

「はい」

——多分、きつと、もう一人じゃない。

人類昇華セラフイムプロジェクト

下層、怪物は這い上がりて笑う

そこは底であつた。

魑魅魍魎の跋扈するアーカム下層という名の地獄は、人ならざるものが蠢き回る魔の領域。

真夜中ともなれば、その魔性は一気に加速する。

日の光を嫌うものが好機と感じて這い出て、月光を求めるものが身に青白い光をいっぱいに浴びる。

アーカムという人工都市に組み込まれているだけあつて、一応は階層間蒸気機関車も通つてはいる。

そこから一人の男が降りてきた。眼前で下層の魔性が早くも牙を剥いている。照明もない暗黒に蠢く影が。

中層か上層あたりから降りてきたであろう中年の男を、人型の何かが数十も集まつて取り囲んでいる。全員が禿頭の男といえるような風貌だが、ぼろの腰巻きしか身につけず、腕は直径五〇センチはくだらない。

階層間蒸気機関車も、中層を抜けて下層に入れば車掌は消え失せて、機関車は全自動化によって下層から中層へと戻り、有人運転で運行される。

そんな階層間蒸気機関車が停まる駅も廃墟同然で、奇怪な人型の生き物に囲まれた男は駅を出た矢先に現在の不運に見回れた。

現代企業制服の袖が震える。ウィンチエスター社製レバーアクション小銃M94を短縮化したものを、男は如何なる方法を用いたかは伺い知れないが袖に仕込んでいた。

「下層名物の食人者か。二元は人間だといっても、底まで変わり果てると憐れみも躊躇いも出てこねえな」

銃が吼えた。

大型自動拳銃でもライフルには勝てないのが常識で、三〇口径のライフル弾は食人者の脳漿をあたりにぶちまけるはずだった。

ガチンと妙な音がした。

男の目が見開かれた。食人者は弾丸を噛み啜えて止めたのだ。音速の数倍に迫るライフル弾を、どれだけの神経速度があれば噛み啜えて止められるのだろうか。

ここはアーカム。それも語るもはばかられる下層。

たった一挺の小銃では太刀打ちできないのは、もはや必然と言つていいほどの運命であつた。

男の運命は決まりきっていた。

ウーツ鋼も噛み砕く牙と、大型機関も素手で解体する豪腕にかかって、僅かな時間を満たす糧となる。

そのはずであった。

食人者が一匹、血霧を噴き出して縦に裂けた。

次々と、ぴゅうん、と独特の音がすると食人者が二つにされていく。

お次はライフル弾と思わしき銃声だが、象も倒せると謳った五〇口径だと轟音が雄弁に物語る。着弾した場所が小さな爆発となって食人者を吹き飛ばす。それは六人に登った。

銃声が連発をやめると、大量のナイフが飛び交い、それを投げた人間が食人者の間を駆け抜けている。目には見えない。それほどの速さだ。二〇匹近くがバラバラになった。

最後の一匹は二発の弾丸が同時に撃ち込まれて倒れた。弾丸は両目を綺麗に貫通し、内部で炸裂して脳漿をぶちまけた。

「大丈夫か？」

ぶつきらぼうな男の声だった。

ずいぶんとパンクな風体だ、と漏らす。

現れた男は髪をぼさぼさにし、上半身は裸のままで黒いダスターコートガントレットを羽織つていた。袖に腕は通しておらず、腕に金属板を無骨に叩いて成形した装甲をつけている。

中年男は一息ついてスーツの襟を正す。

「助かった。人に会う予定だったんだ。斑鳩重臣いかるがしげおみという男なんだが……」

「そこだ。その建物の影から一部始終を見ていたぞ」

「なんだと!？」

中年男が素早く振り向くが、底には誰もいない。

誰も住まぬまま廃墟となり倒壊したアパルトメントが、在りし日の姿さえ留めぬ残骸を日も射さぬ下層で晒しているだけだ。

思わず呆気にとられていると反対から声が出た。老獪さがにじみ出ている、老人の男であった。卑屈な笑みが混じっているのが、なんともこちらの心を巧みに煽る。

一九〇に迫る瘦躯が金色の目だけをやたら爛々と輝かせて、男を射殺さんばかりに視線で磔にしている。多種多様な民族の特長が浮き彫りになった、そんな顔のおかげで人種の特定は雲をつかむ話だ。その目が物語るのは殺生を生業とする老人の家業であった。

「儂が斑鳩重臣だ。驚かせてすまん」

「下層で腕利きかつ話の通じる殺し屋。この条件にぴったりだったのがアンタだった。」

依頼は一つ。サイファア・アンダーソンとフレデリカ・エインズワースの相手を頼む、と博士は言っていた」

カツカツカツ、と老獺に重臣は笑った。

瞳に明らかな歓喜の光が宿り、口の端が吊り上がった。

「随分なビッグネームと並んで依頼されるとは、そのフレデリカ・エインズワースという人間は相当な期待の新人らしい」

「第十二層じゃサイファア・アンダーソンの名を知らないものはいないらしいが、博士がソイツが実験のじやまになる可能性が濃厚だから足止めだけでも出来る人員を、金に糸目はつけんから雇え。ということらしいが、実際はどうだ？」

「報酬も何よりだが、儂にとつて重要なのは久しぶりに下層から這い上がれる機会が出来ることじゃなあ。下層の空気はひどく汚れとつて。だから変異生物なんてものが出てくるんじゃないやあ」

重臣の視線は食人者たちに注がれている。

下層の劣悪な環境と、アーカムの魔力とも言ふべき何かが作用しあつて、自然では生まれるはずのない生物が発見される時がある。

食人者も元は人間であるが、食うもの一つに困る下層の環境が、彼らを食人者へと変異させるのだ。

中年男はもう一度だけ斑鳩重臣をじっくりと見つめた。

濃紺の着流しに包まれた肉体に変異は見られない。

下層の人間はほとんどが魔人と言っている。肉体にどこかが変異しているのが常だ。傍目には変異していないように見えるのであれば、その変異は内部がほとんどだ。

内臓機能が変異しているために、三メートルに及ぶ口吻を用いて蒸気自動車を一呑みにして数分で消化する人間もいる。

その中でも脳が変異している存在が一番危険だ。常人では紙の上でしか認識できない波動関数や物理現象を数式として捉え、それに己の認識を干渉させて条理を超えた超常現象を意のままにする。彼らは総称して”数式使い”と呼ばれた。

目の前の老人もそうなのか、と中年男は思った。

しかし、いくら数式使いといえど簡単に有名なるわけではない。変異が確認されている下層ならではの存在である上に、中層と上層に住まう人々は劣悪すぎる過酷な下層のことなどに興味などない。

にもかかわらず中層の情報屋に名を挙げられるほどの腕前を持つとは、中年男はとにかく信じがたい思いでいっぱいであった。こんな老境真っ直中と言っている老人が。

「それで儂を雇うのか、雇わんのか、さっさと決めておくれ。年寄りには、待たせるものじゃあない」

「どんな手品を使うのか、それを決めてからにさせてほしい」

「食人者を屠った時と、貴様と会ったときに片鱗は見せたんだが、儂が使うのはコレだ」
 今までどこにあつたのか、全長にして一五〇センチ近い、ゴツく太い銃身にマズルブ
 レーキを取り付けた五〇口径ものライフルを取り出した。

ボルトアクションでもなければ、元込めのマスケットでもない。アーカムでつい最近
 になって統治局で採用され始めたという最新の自動式だ。反動によつて各部を作動さ
 せるのではなく、弾丸の撃発で生じる燃焼ガスで機関部を作動させるという構造だ。銃
 身を完全に固定できるために精度も比較にならない。

マツエラス
 M V ファイアーアームズなる会社が本格的に小銃に取り込んで開発を進めている。
 最近では大型自動拳銃にも取り入れたものを開発しているらしい。

ストック
 銃床にいたるまで リコイルカウンター 反動消去機構を組み込んだ長物の巨銃は、M V 社製の
アンチマテリアル・ライフル 対装甲大口徑小銃 M 3 エクスキューションナーであつた。箱型弾倉ボックス・マガジンに五発の五〇口径ラ
 イフル弾を装填する。

「化け物を使うような銃だな」

「下層の人間を、上の人間は化け物扱いしている。ならば、これだけの銃を扱つたとして
 も不思議では無かろう?」

「突き刺さってくる言葉だな。その言葉の通りだよ。俺たちは下層の人間を自分たちと

同じ”人類”と思えない。残念ながら世の中は自分たちに目も向けず、ひたすら他に潔癖と完璧を求めるようになってきている」

「だから僕は下層に堕ちた。後悔などないが、このまま名も知られずに死ぬのは惜しくなつてな。貴様の依頼は都合が良かった」

「引き受ける気があるのか？」

「無論だ。そろそろ仕事と人生から引退できる歳だからこそ、死に花を咲かせるに相応しい相手だった」

老獪な怪物が喚起に震えた。

対する中年男も震えていた。目の前の恐ろしい何かに命令を下せる、そういう立場になつたことを。気分は世界を滅ぼすほどの新兵器を開発した学者のようだった。

下層から見える月は赫い下弦であつた。笑みのような。



第十二層。『Have a Heaven Time』は第二十二区画にあつた。どういう店なのか、アーカムに住まうものなら行つてなくともわかる。売春区画にあるのだから、店の目的もわかる。清濁合わせた風俗店だ。

五階建てもの大きな煉瓦造りの店舗を維持できていることから、人気のある店であることは確実だ。入り口からすぐのエントランスはコトを済ませたアベックが出て行くのが絶えない。

その客室から一人の男が出た。

茶色のダスターコートを羽織っている大男であった。二メートルは確実にある。橙色の髪を後ろで束ね、両手をズボンのポケットに突っ込んでいる。

不満そうな表情ではなかった。どちらかといえば満ち足りているようだが、ほんの少しだけやり場のない感情が見えているようだった。

廊下は一本道であった。絵画に陶器に彫刻がずらつと並べられていたり、壁に掛けられていた。芸術品の真偽は分からないとしても、この廊下に繋がっている男が出た部屋が特別なのは明白だ。

この廊下が繋がっているのは部屋とエントランスまで直行の電気式昇降機だけだ。男は部屋の方を一瞥してから、コートの襟の匂いを嗅いだ。

女の香水と情交の残り香が漂った。

コレを悟られるわけには行かない。一ヶ月も前に起こった大きな事件以来、側に置いている彼女には。おかげで外食だらけの生活が随分と家庭的になったが、その分だけ劣情と性欲の処理方法が限られてくる。

たまには三人ぐらい一気に相手して、ガス抜きするぐらいがちょうどいい。

エントランスに出て早々に、下世話な笑みが男の視界に入った。モノクルをかけた、身なりのいい細身の男だ。四〇代ほどだが、その鳶色の目に宿る光はもつと齡を重ねなければ持ちえない。

「今夜はご満足いただけましたか？」

「いつも来る度に好みの女を三人も用意してるって、どういうやり方だ？ 読心術とか使えたりするのか」

「経験ですよ。表情少しでも見えてしまえば、そこからその日をどう過ごしてきたかが分かるものです。朝は自分から起きたのか誰かに起こしてもらえたのか。朝食は外で食べたのか作ってもらったのか。そんなことも分かれば抱きたい女のタイプも、手に取るように分かるのです」

「肝が冷えそうだ」

「今の貴方は……………私がご用意した三人に満足しているようですが、何か別の問題があるせいで自己嫌悪に陥っている。そう見受けられました」

「……………肝が冷えた」

「一ヶ月前から側に置いてある女のせいでしょうか？」

「なに寝言ほざいてんだブツ殺すぞ」

モノクルの男——名をジェイムスという娼館の支配人——は両手を挙げた。万国共通の降参の合図だ。

「ええ、ええ、そういうことしておきましょう」

「わかったならいい」

男が入り口に差し掛かったときだ。

各階へと繋がる一般客用の昇降機から轟音が響く。見ればぶ厚い鋼鉄の扉は見る影もなく、内側から怪力でぶち破られたようになっていた。

だが更に異様なのは扉の跡地から鋼鉄の腕が生え出ていることだ。並の女であれば握りつぶせるほどの、とてつもない大きさの腕が中華系のスリットの入ったドレスを着た女を握りしめている。

女は瀕死であった。もって数分というあたりで、目と鼻と口から血を流し、眼球は反転して白目を剥き、身体はこまめに痙攣している。鋼鉄の腕が内臓を一気に握りつぶしたことによるショックであった。

すすり泣きがする。地を這うような低い声で、恥も知見もかなくなり捨てた嗚咽まで交じっている。

「俺はいつか、お前を嫁にするつもりで通っていたんだよ。それなのに、それなのにいい、俺を捨てやがってえ。お前に貢ぐ金を稼ぐために、身体中を弄くり回したの

にいい」

昇降機の入り口を無理矢理押し広げながら、四メートルはあろう異様な巨漢が現れた。全身に数式機関改造を施したのか、身体中の所々から金属部品が露出している。

女を握る腕には蒸気圧ピストンが三本も据え付けられ、男に怪力を与えているに違いない。腕だけを機械に置き換えるのは生身に多大な負担をかけるから、全身の骨格も併せてスチール製に置き換えているはずだ。

早い話、鋼鉄のパンチを打ちたければ、鋼鉄の肉体が必要になる。不便極まりないように思えるが、出力は一〇〇〇馬力を優に超える。

野菜を握りつぶす音に似た、耳を塞ぎたくなるような音がした。女の身体は完全にひしゃげてしまっている。

ジェイムスが手を一振りした。

「お客様、ここは紳士の礼節を心得る人間が集う場所。野蛮なお客様はご退場願っております」

それが合図となって揃いのスーツを着込んだ守衛がやってくる。ブローニング自動小銃が小さく見えるほどの巨漢ぞろいだが、四メートルもの改造人間の前では子供と大人に見えてくる。

一斉に発砲する。

三〇—〇六スプリングフィールド弾は歩兵が扱えるライフル用弾丸では三本の指に入る。それでも生身の部分を撃ち抜くが、機械部品の箇所では弾丸は弾かれる。

「俺は、かなしいいいい！ 邪魔すんなあああ！」

機械の豪腕が派手に蒸気を噴射して振るわれる。

唸りを挙げる鉄の巨腕は守衛を五人もまとめて吹き飛ばすことなど容易だ。加えて腕に搭載された出力増強用の蒸気機関のスチームが、守衛の視界を遮って迅速な照準を困難にする。

突如広いエントランスを蒸気で満たしながら、行き場を失った劇場のまま暴れ狂う改造人間は、砲と聞き違う轟音によつて永久の静寂となる。何かが改造人間の胸部を吹き飛ばして、ほぼ瀕死に追いやったのだ。

その音の元凶はジェイムスの知己と思わしき大男の手にあった。

新大陸の銃器製造企業S & Wのダブルアクションリボルバーの意匠を僅かに含みながら、一線を画する肉厚のフレームと銃身は異様なほど堅牢であると伺える。大型のマズルブレイキとバレルウイトを備えた銃身には『Howler in the moon』の刻印があった。

「男の嫉妬ほど醜いモンはないと思わないか？」

「ええ、全くもって同感ですな」

大男の手にある巨銃、そこから放たれた七〇口径もの巨弾は生身も機械部品もライフリングによって与えられた、螺旋状の回転運動によってねじ切られ、背中のほとんどを吹き飛ばして抜けた。

そのままエントランスの一角にクレーターを作つて止まった。

改造人間の男は瀕死であつた。いかんせん、主要な臓器も機械部品も全て、たつた一発の銃弾で破壊されたのだから。

それでも男は身を起こそうとして——一発の弾丸が遮つてしまった。残っていた顔は右半分が銃撃で吹っ飛ばされた。

「大丈夫ですか!?!」

硝煙の立ち上るM Z社製大型自動拳銃を片手に保持した美しい女が駆け込んできた。見た目は十代後半か二十代前半くらい、腰まで届く煌めく金髪。相当スタイルの良い身体で、たわわに実つた胸の果実がデコルテを押し上げている。黄金の双眸には焦燥が見て取れた。

一六〇センチを少しだけ超える肢体は中流階級が着るような、質素すぎず華美すぎない黒をメインに据えたモノトーンカラーのドレスだった。動きづらは微塵もない膝下丈のスカートから覗く足は濃い茶色のストッキングに包まれ、革製編み上げブーツを履いている。

M2アナイアレイターは弾丸の反動ではなく、装薬の炸裂で生じる燃焼ガスで機構を動作させる。その構造上、銃身を完全に固定できるように精度は高い。燃焼ガスは逃がさねばならないが、マズル近くから方向を調整して放出するために反動抑制に一役買っている。

口径は十ミリの40MVP弾を使用する。45ALP弾よりも三割もパワーがある弾丸だが、この少女にも見える美しき女は扱いこなしているらしい。装弾数は銃把内部の弾倉に十二発込めることが出来る。充分な火ファイアリング・パワー力を持つ。

「……………なんでいる？」

「家の鍵が開いてなかったの。また合鍵で出ていたんですね？」

「自分の鍵をなくした」

「なら門から交換しないと。最近は何騒ですから」

「オーケイ。ジェイソン、キンキンに冷えたビールをくれ。現実が辛すぎて、僕はひっくり返っちまいそうだ」

「サイファーさん、今までどれぐらい飲んでます？」

サイファーさん、と呼ばれた大男は嫌な顔になっていた。妻に悪事がバレた夫の顔に似ていたのは、単なる偶然なのだろうか。大男も美女も結婚してない身というのに。

気まずそうに頭を掻いた。

「スピリットの瓶、六本しか空けてない」

「六本も空けたんですね？」

「……………ああ」

両手を上に、視線は真上に。お助けください、の合図であった。

「飲みすぎです。早く帰りましょう」

「手厳しいな」

完全に降参であった。

そのまま手を引かれて大男は退散した。背後からの「またのお越しを」という支配人の声に、舌打ち一つで返して。

彼を知る人間がいたら笑うに違いない。

——コイツがサイファー・アンダーソンか。

そう、第十二層で知らぬ者はいないとまで言われる、超凄腕の『実力行使請負業』を名乗る男だ。そんな彼が少女にさえ見える立派な成人女性、フレデリカ・エインズワースにいいようにされている。

キツイジョークだ。そう言う人間もいるだろう。

このフレデリカ・エインズワースという女も、生物的本質で言えばサイファー・アンダーソンと同じ部類に入る。

人であるかもしれないし、化け物かもしれない。

どっちつかずとも言える蝙蝠だ。

あのフォーレンシルトとの一件から、早一ヶ月が過ぎた。

フレデリカの生活は一変した。

かつて日課であったジョギングは本格的なランニングとなり、ヘンリエッタから格闘術の手ほどきを受けて、射撃場で拳銃から散弾銃まで一千発近く撃ち込む。

一度の激情に身を任せたツケだと思い、必死になって一ヶ月。今なら何が来ても大丈夫だと思える。

それはサイファーも同じことだ。

フレデリカが彼の家で寝起きして、炊事洗濯掃除をこなす。さすがに広い家をフレデリカだけに任せるわけにはいかないから、自ずと掃除や洗濯物を干すくらいは手伝うようになる。外食三昧で酒飲んで寝る自堕落な日々は終焉を迎えた。起床の際は類い希な美少女の顔がモーニング・コールをしてくれる。

でも少しだけ良くないような気がするの、二人の関係性が確固たる地位を確立してないからか。

サイファーはフレデリカを居候と見ているし、フレデリカはサイファーを何の分類に入れていいか決めあぐねている。少なくとも友人以上の大切な人間だと彼女は思っ

いるようだが。

「あそこに行ったのは仕事で？」

不意の問いだった。

できれば娼館にいたことは聞かないで欲しかった。

「ま、まあな」

「お客さんじゃありませんよね？」

「そ……そうだ！　最近ああいった手合いのヤツが無許可で可愛い子をお持ち帰りするもんだから腕のいい用心棒が必要なんだ。誰だってお楽しみの中の最後に銃声なんて聞きたくない。今夜の僕はお楽しみタイムが終わった後——あがつ」

「……………次はバレないように行ってください」

「正直言つてすまんかったと思つている」

「いいんです。あなたは男の人ですから、その……ええつと、溜まるのはわかりますから。発散しないと苦しいんですよね？」

こんな幼気な雰囲気振りまく、見目美しく若い彼女にこんなこと言わせてるとは、サイファーは自分が随分と情けなく感じてしまった。言葉の内容に興奮しているのが、余計に拍車をかけるがガス抜きした後では後の祭りだ。

「私は……えつと、うう、お手伝いは出来ませんが、発散の邪魔はしませんし、否定もし

ませんから。だから、せめて気付かれないように行つてください」

「手伝うとか、そういう言葉はたとえ話でも言わない方がいい。男つて、それで変なコト考えるから、さ」

「……………男の人つて、どうしようもないですね」

沈黙。

実に耐え難い時間だ。男の醜い部分というものを見せられてしまつては、何を言つていいのかフレデリカにはわからない。

サイファーも下手なことを口走れば、新しい生活が始まつて一ヶ月しか経つてないフレデリカの精神にとどめを刺すことが分らないわけではない。

こうなれば自宅にさつさと帰つてしまふに限る。

一日経てば、少しは歩み寄りようもあるはずだ。

二人の歩調が少しずつ早まっていき、ある酒場の前で止まつた。

遠方からアーカム統治局の治安維持部保安課課長アープ氏の演説が聞こえる。なんでも最新装備を導入した新しい部隊を、アーカムの治安維持に当たらせるらしい。フレデリカはぼんやりと、それに意識を半分だけ傾けて聞いていた。

サイファーの意識は前方に向けられていた。

酔つ払いと思わしき中年が倒れている。衣服に乱れはないことから、物盗りには逢つ

てないようだ。

早めに起こしてやった方がお互いのためだと思って、サイファーが声をかけようと歩み寄る。

「ウ……………ウウ……………」

呻き声を上げて酔っ払いが起き上がった。

あわせてサイファーも一歩だけ後ずさる。酔っ払いから酒とは違う臭いがした。菓物の類だと思われるが、ヘロインともマリファナとも違う。嗅いだことはないが、麻薬だと分かる。

「フレデリカ、銃を構えとけ。ヤクをキメてる」

MZ社製大型自動拳銃とアーカム45を両手にした。

荒事屋にとって二挺拳銃は珍しくないし、サイファーだって有り合わせの銃器を両手に持つて暴れまわる。

フレデリカは一ヶ月前まで出来なかつた技術だが、半月で実践で使えるほど昇華させている。

「おい、自分の名前はわかるか？ 落ち着いて深呼吸しろ。おとなしくするんだ」

答えを待つ前に飛び退いた。

巨体がアクロバットに三メートルも飛ぶ。

酔っ払いの皮膚を突き破って、筋肉繊維を剥き出しにしたような醜悪な腕が生え出ている。長さは二メートル近く、七本もある指先には鋭い刃物めいた鉤爪があった。

酒場の前を言いようのない芳香が満たしていく。

天上の園が放つ香り、とも言うべき芳香は二人の嗅覚を刺激して、脳神経系を侵し、精神を蝕んでいく。

フレデリカは頭を強く振って、芳香の侵食を振り払った。危うく墮ちかけるところだったが、ギリギリで間に合ったらしい。

サイファーは変わりない。この程度の揺さぶりでもうにかなるほどヤワでないということか。

酒場にいたのであろうたぐさんの人間が、ふらふらとした足取りで人ならざる姿へと変じた酔っ払いに歩み寄っていく。

酔っ払いは皮を脱ぎ捨てるように、醜悪な怪物へと変わる。ほとんど不定形の肉のよう、びっしりと牙を生やした大口まである。三メートル近い巨体の中心あたりから、清廉潔白といえる白い鳥類の翼を生やしていた。それは翼だけなら天使のようで、

怪物の意図をサイファーは察した。フレデリカも、また。

誘われてきた人間を見た瞬間、怪物は涎を垂らし始めたのだから。

巨銃が吼える。『Howler in the Moon』の名を冠した規格外の回

転式拳銃は、装弾数の半分、実に十二発もの機関砲弾に匹敵する七〇口径の弾丸を撃ち込んだ。

着弾の衝撃で大人の頭ほどの穴がいくつも空き、ほぼ半液状と書いていい肉体が四散していく。出血はない。

フレデリカも四〇口径と四五口径を雨霰と撃つ。

装弾数に差はあるものの、M2を撃ちつつ牽制し、その間にアーカム45の弾倉交換マグ・チェンジを行っている。それが機関銃並の連射を支えているのだ。

「ちよつと派手にいくか」

サイファアの巨銃を暗黒が染め上げる。

アイアン・サイトに奇怪な怪物の姿を認めて、引き金を引く。

チエック・メイト
「決まりだ」

七〇口径もの機関砲弾めいた弾丸は光を吸い込みつつ、怪物に着弾した瞬間に半液状の肉体を吸い込み始める。

渦を描くように吸い込まれた怪物は、その醜い身体に相応しくない翼の羽根一枚も残さずに消え去った。周りは依然と変わらぬ石畳の道と静けさを取り戻す。

我に返った酒場の客は、自分たちを救った人間の姿を見ることはなかった。



そこは第十二層のどこだったか。

薄暗い部屋だ。じめじめとした不快なほどの強い湿気が立ちこめ、灯りは出力の小さな裸電球だけがモルタル造りの一室にあるだけだ。地下室であった。

折り重なるように部屋いっぱい女たちが倒れている。

老若問わず様々な人種が集められて、あられもない姿に虚ろな目をして力ない。すえた臭いは濃密な情交の名残香か。

少なくとも見積もっても十数人はいる女たちを相手したのは、たった一人の男だ。筋骨隆々といつていい一九〇センチはある偉丈夫だったが、それだけの精力があるとは思えない。

この強い性臭に満たされた一室には、家具がたった一つだけ。

その上には白い石膏じみた固形物が一つ。大きさは煉瓦大くらいはあるか。

その一角を男はアイスピックで崩す。薄く板状に崩れた欠片を粉々に砕き、さらにカミソリで粒子を細かく刻んでいく。ひとつまみくらいの白い粉の山ができる。

男は大きく息を吸う。

ゆつくりと吐き出した。

鼻に金属の管を挿して、粉の山を一気に吸い込んだ。

もんどりうって後ろに転んだ。足が役目を放棄したように、ふらりと力なく。

その目は赤く爛々と輝いて、男の口は意に反して冒瀆の言葉を吐き出し始める。

——イア、イア、イア

そして男だけが残った。

寒空、羽ばたく象徴は汚されて

中層もだいたい冷え込んできた。だから洗濯物が乾くのが遅くなる。この時期になるとフレデリカの頭を悩ませる事項の一つだ。

「……………くしゅん！」

灰色の寒空になってきたアーカムは、どの層からでも空を拝むことができる。下層は空気がきれいなときにしか見えないらしいが。

買いい物で膨らんだ紙袋を抱えて、フレデリカは寒空の下を歩いていく。息は白んでいないが、やっぱり寒い。

特にサイファアの仕事を手伝ったりしない時は、天気に応じた服装をする。紺色のスカートにブラウスと、その上から厚手のコートを羽織って手袋までした。

それでも、やっぱり寒いのだ。

そろそろ雪が降ってもおかしくない時期に差し掛かっているし、市場に並ぶものも冬に旬を迎えるものが多くなっている。

「迎え、頼んだ方がよかったですでしょうか？」

なんとなく呟いてみた。返す返事はない。

それでも雪が降っていないだけマシだ、と思うことにして家路を急ぐことにする。道行く人々も寒さに追われるよう、少しだけ早足な気がしないでもない。

風が吹いた。金髪が巻き上げられて、一瞬だけ視界が遮られる。鼻腔にほんのりと甘い香りがした。

目の前に美があつた。

まさしく美の化身。神はフレデリカの造形に二週間を費やしたのだろうか、目の前の美丈夫には一年かけて柳眉と鼻梁を彫り上げただけに違いない。

腰まで届くほどの銀髪を優雅に風へ流して、切れ長で凍てつくほどのアイス・ブルーの瞳をフレデリカに向けているのだ。

漆黒のロング丈ミリタリーコートとシャツとストラックスまで黒づくめ。しかし彼にはこの上なく似合っているとしか思えない服装だ。

「ふうむ……」

顎に手を当てて、値踏みするように美丈夫はフレデリカに視線を注いでいる。

「失礼を承知でお伺いします。生まれてから、ずっとその顔でしょうか？」

「……はい」

「貴方の瞳は天然の金色？」

「はい、でも左目は訳ありですが」

「お化粧は？」

「今は……してません」

ずいぶんと突っ込んだ質問だ。フレデリカの顔に閃いて、これでもかと言わんばかりに矢継ぎ早。少しだけ言葉が詰まってしまいが、何とか答えていく。

美丈夫が微笑んだ時、世界の全てが静止したと”瞳”が伝えてきた。

「よろしい………整形の手間が省けます」

空気の弾ける音がした。それとピンと張るような音もして、抱えていた紙袋が一寸刻みになる。

ほぼ反射的な行動でM2を抜いていた。

しかし、目の前に美丈夫はいない。まるで初めからいなかったように、幻のごとく消え失せていた。

「……………あれ？」

なんとなく胸の開放感を覚え、手をやった。

下着がなかった。というより、ずり落ちていた。背中のホックが外れているのだ。

一応、周りに人がいないか確認する。

倒れている人々しかいないことに、今更になって気づいた。無理もないことだ。あの美貌に耐えうる精神の持ち主など、荒事屋を探し回ってもいない。

美貌に耐えうるのは美貌だ。だからこそフレデリカは無事だったのか。

紙袋の中身は食料品だ。地面に落ちてしまっている。汚れているもの以外は拾い上げて、予備の紙袋を広げてものを仕舞い込む。

そしてブラウスの前を少しだけ開けて、下着を探った。

ホックは外れたわけではなかった。切られていた。

あの美丈夫は相当な悪趣味だと、フレデリカはカテゴライズする。初対面の女性に顔に関する質問を矢継ぎ早に浴びせ、手段不明のやり方で下着を切っていくなど尋常ではない。

もしかしたら物陰から羞恥に染まる姿を見ているかもしれない。想像するだけでふつふつと怒りが燃えてくる。

そうこうしている内にサイファアの家に着いた。

一ヶ月前からほとんど自宅同然で、生活は同棲といっている。でも慣れてしまったし、食事メニューを考えるときは当たり前のようにサイファアの好みも考えるようになった。

サイファアはフレデリカの手料理が好きだ。

特にカレーが大好物らしい。機嫌が悪くても、カレーを食べた後はご機嫌になる。シチューでもいい。やっぱり食べたあとはご機嫌だ。

最近は何に一回はカレーだったから、シチューにしようと思って材料を買ってきた。だが、あの状態じみた美丈夫のせいで玉ねぎを初めとした数々の材料が、地面に落ちてダメになってしまった。

とはいえ今日一日分くらいの量はあるから、作れないことはない。

食材がダメになってしまった件は謝れば許してくれるだろう。あの美丈夫が無事ですむ保証はないかもしれないが。食い物の恨みは実に恐ろしく、サイファーの場合は未代まで祟る。慈悲はないのだ。

冷蔵庫という文明の利器に無事だったものをいれ、下ごしらえでもしようと思ったときだ。

「フレデリカ、帰ってたのか」

「はい、つい先ほど」

「急ぎの用事が入った。着替えて一緒に来てくれると助かる」

「大丈夫ですけど……晩御飯はどうしましょうか？」

「外で済ませてしまおう。無視できない、昔の知己でな。今日の予定は全部キャンセルになった」

二階にいたのだろうか。足音はしなかった。

仕事の時に着る灰色のダスターコートにテンガロンハット、白のシャツプスにブルー

ジーンズでガンベルトを巻いたサイフアールがいた。

やはり背はとても高い。本人曰く二メートルはとづくに超えているそうだから、目を見て話をするのも苦勞する。フレデリカの身長は一六〇センチ足らずなのだから。

「花屋のベンジャミン・アルバーティンを覚えてるか？」

「あの薔薇しか置いてない？」

「そのアルバーティンだが病院送りにされたらしい。シヨバ代の支払いをやらなかったわけじゃないんだが」

「マメな人ですから。なんでもカルカツサのボスの情婦イロに手を出したと聞いたんです
が」

「ヤツにそんなクソ度胸があるわけない。視界に納めるだけでパンツの中にデカいもんこしらえる。そもそもヤツのテクニクは最悪だって、知り合いの娼館の支配人は言っていた。足のマッサージは超絶技巧らしいが」

「もしかして情婦をマッサージしたとか、そういうわけじゃないです、よね？」
しんと間が空いて、舞い降りる沈黙。

指を一本、その人差し指を点に向けてフレデリカは固まった。

まるで――

「お前さん何言ってるんだ」

言葉通りの顔をしたサイファーによって。

でも予測は立ててている。返す言葉は決まっていた。

「私がアルバーティンさんにマツサージされたら？」

少し意地悪く小首を傾げてみた。

見る見る内に表情が険しくなっていく。それはフレデリカの予想を遙かに上回っていて、少しやりすぎたと後悔してしまった。

ちよつとぐらいからかうつもりで、自分を引き合いに出した冗談だった。時には『可愛い』とか『綺麗』と言ってくるサイファーへのお返しのもりだったのに。

きつと、また何言つてんだと言うに決まつてると、そう思っていたのに。サイファー

は――

「自分の店の屋上から逆さ吊りにして、それから放してやる。ヤツの店が入ってるビルは四階建てだったから、痛い目見せるには十分だろうな」

「本当に、そうするんですか？」

「ハハッ、冗談だよ」

やられた。

からかうつもりだったのに、いつの間にか立場が逆転している。

この辺は人生経験の差というべきか。

「アルバーティンのヤツ、少し前から薬物に手を出してたらしい。病院送りになった理由も、そこにあるかもな。今日の用事だって、その件に少しだけ関わってくる」

「その薬物の件で重要な人間に会うんですか？」

「多分、普通に暮らしていると会うことはない人間だよ」

おどけた物言いだ。

またフレデリカをからかうつもりらしい。

もしかしたら相當な重要人物と会うのだろうか。着替えろと言われたが、下手な格好はしてられない。サイファー曰くドレスコードはないらしいが。

荒事屋の仕事を手伝う上で、サイファーからもらった防弾防刃仕様の黒いドレス。黒だけではなく所々に白や灰色がワンポイントで入って、普通に普段着としても使える。

それでも拳銃弾では衝撃さえ殺してしまうし、ライフル弾でも貫通しない。

サイファーの用事ということだから、そのワンピースベースの黒いドレスを着た。デコレの開いたデザインが気になるが、サイファーもヘンリエッタも似合っていると言ってくれた。

鉄板を叩き上げて作ったような装甲服や、動きやすさを優先しすぎてホットパンツにチューブトップだけ。そんな格好が多い荒事屋たちに比べれば、フレデリカの周りは割と着込んでいる。サイファーはケレン味も優先しているかもしれないが。

「会う人はご友人ですか？」

「昔一緒になってバカやった腐れ縁。今じゃデカイ椅子に座っているらしいが」

「……なんとなく、嫌な予感がします」

「人聞きの悪い。僕に比べればずいぶんとマシでマトモな真面目人間だよ」

人聞きの悪い、の辺りで眉根を寄せたからサイファーの言ったことは本当らしい。

ガーニーに乗り込んでエンジンをかけた辺りから、フレデリカは眠り始めてしまった。



嘆き悲しむ声があった。男の声だ。

彼は医師だった。慈善医院で多くの患者を救い、周囲の人間から多大な信頼を寄せられていた。

恨まれる覚えなど皆無だったはずなのに。

医師は医院の床から両足を浮かせて、そこに固定されていた。床に突き刺さった何かによつて磔にされているのだ。

慈善医院の象徴、神の象徴たる十字架に医師は張り付けられていた。まだ三〇代後半

から四〇代になっていない。なのに髪は真つ白に染まって、目は落ち窪むほどに裏れきっている。

無理もない。

今まで救ってきた患者全てが軀となっている故に。

首から上だけが原形を留めており、それ以外は全てかき混ぜたように肉片となつて広がっている。リノリウムの床はおびただしい血の面積を拡大させつつあつた。

「ああ……一体、なぜこんなことを？」

「前夜祭だよ。もしかしたら、最後の劇場になるかもしれない」

すげなく言つた男は実に精悍ないい男だ。

ブラウングレーの短髪。同じ色の目は瞳孔が開ききつている。狂気に染まった目であつた。年は三十代くらいか。

カッターシャツに黒いスラックスだけ。ラフな格好だが、それが逆に爽やかさを強調している。だが白いカッターシャツも血染めでは台無しだ。

「それにしても人は簡単に死ぬ。ああ死ぬのさ。このカミソリ一本でも」

「……何を言っている？」

「生かすよりも殺す方が遙かに簡単だ。だから医者という世界の構造に反した職業者は殺したくなる。いやもう殺したんだけど」

「正気か……ッ」

「いや自分の声に正直なだけだ。自分に目を背けた日から、普通という異常に染まりきっていく」

少し大振りの西洋カミソリを手足の延長のように、くるりと振り回す。

医師は痛感した。この男こそアーカムの住人に相応しすぎるあまり、このアーカムでさえも受け入れられない存在だと。

「弱者も然りだな。たとえば老人、いや老害というべきか」

老婆の首を医師の前に投げた。

「子供もそうだ」

年端もいかぬ少女の首。脊椎までくつついていた。

「醜く肥え太って、きれいな女に嫉妬の炎を燃やす女も」

頬をそぎ落とした中年女の首だ。

「世界は殺すべきもので溢れている。だから俺が裁定を下し、世界を屠殺して過ごしやすくする。いや、そうしないといけないんだ。まともなヤツは無駄を省くべきだといっているんだからな」

「貴様こそ……ッ、殺されるべきだ」

「俺を恨むのはお門違いというヤツだ。死刑執行人が死刑を執行したって、彼は恨まれ

ずバックにいる国に矛先を向ける。だとしたら、恨むべきは俺を産み落とした世界の方だよ。ここだったら恨みで人が殺せる。ならば恨みの強さ次第じゃ世界も殺せるはずだ。がんばって恨むことだ」

大仰に翼のように、両手を広げた。

医院の扉は開け放たれている。そこから数羽の白い鳩が舞い込んできた。そのまま医師を張り付けた十字架に飛んでいこうとしたときだった。

西洋カミソリが一閃する。

医師の首に朱線が一筋、そこから血霧が噴出する。赤い飛沫が白い鳩を、赤黒く染め上げていった。

「平和は脆い。いや、出来上がっているものが脆いのか」

その白き翼を鮮血に染め、水分を吸って重くなつた翼は鳩を地面に縛り付ける。鳩が衰弱死する頃には、男の姿は消えていた。

凄惨な医師の死体だけが残っていた。



目を覚ました。

眠っていたことを急いでフレデリカは謝ったが、サイファーは笑って済ませてくれた。

「むしろ話の途中で居眠りする心配がなくなっただと思えば、それはそれで良かったと思えばいい」

その言葉に心から救われたようになる。

仕事に支障さえなければ、大抵のことにはサイファーは突っ込まない。多少の失敗程度なら自分で巻き返してしまうし、そのことについても『次は気をつけろよ』ぐらいで済ませてしまう。

本人曰く『強く言うことが苦手』らしい。

全く変なものが苦手だな、と失礼なことを思ってしまった。これを突っ込んでしまつたらさすがに不機嫌になるか、あるいは怒り出すかもしれない。

「僕も会うのは久しぶりなんだ。多分、五ヶ月は会ってない」

「会ってなかったんですか？ 数少ないご友人なんでしょう？」

「……………なんか引つかかる部分があったが。まあ、おいそれと会えるような立場じゃないんだ。休日返上しないと仕事が終わらない職場で、総務と現場の両方を回してる。僕なんぞより、よっぽどアーカムのためになつてる男さ」

「ええと、口が過ぎましたごめんなさい」

「いいさ、どうせ事実なんだから」

それつきりガーニーのハンドルを握ったまま、そっぽ向いてしまった。

こういう子供っぽいところがあるから憎めない。未だ二十代前半の身でありながら、フレデリカは母性本能に近い感情を持つてしまった。

身長がとても高い、二メートル以上は確実にあるのに。顔だつて青年ともいえるし、もうちよつと上にも見える。シニカルな微笑みを見ると、とても良く似合う。

なのに、ちよつとだけ子供っぽい。

自分の隣でハンドルを握っているサイファアは、年以上の余裕でガーニーを駆る。運転にかなり慣れていようだ。

だが先ほどの会話のせいで、ふてくされてしまった表情が、すぐ子供っぽい。

——なんだか、眺めていて飽きません。

いつの間にか見入っていたらしい。

葉巻に火をつけて、ぷうつと吹かして。ガーニーが止まったかと思つたら、銀灰色の双眸と目が合った。

「吹き出物でもあつた？」

「普通は……『何かついてる?』と聞くのでは?」

「いくらアーカムでも煤煙はある。この時代、いい男でいるためには吹き出物一つ見過

「ごせない」

「いい男、ですか」

「そう。強い男でいるためには『いい男』であるという前提が必要だ。身体も、心も、自分のちっぽけな男の矜持プライドを守ろうと思えば、激流に揉まれたって崩れなくなる。そうしたらしい男の完成だ」

「……………見た目は、結構かつこいい方だと思いますよ。あとは…………」

「中身が難あり。そう言われるよ」

「うう……………すみません」

「別に謝らなくていい。多分、僕がいい男になるにはノアの大洪水を生き残る必要があるらしい」

シニカルな笑みにフレデリカは何を見たのか。

それはサイファーに最も似つかわしくない。そう彼女が思ってしまったもの。

——諦め、悔恨。

世界の全てを我が物に出来そうな、そんな彼から感じ取ってしまった。この傍若無人な男が、唯一諦めたものとは。ノアの大洪水と例えた原因は、一体何なのか。

ただ、瞳にわずかにあつた。確かに宿っていた。

——希望。

その希望も何なのか、伺い知る術をフレデリカは持たなかった。その無力さが歯噛みさせる。こういう時に自分は何もできず、かける言葉さえ持たないことに。

「どうした？」

気遣いの優しい声が出たとき、ガーニーは停まっていた。蒸気機関も停止して、車内はたった一つの声だけ残して静寂であった。

すすり泣き。嗚咽。フレデリカの唇から漏れて。

「な、んでも……ありません、から」

「……どうして、泣いてる」

「なんでもありません！」

震える声で叫んで、顔を両手でぐちゃぐちゃにして。

きつと鏡を見たら、みつともなさすぎる自分が映るだろう。せつかくめかし込んできたというのに、その甲斐さえ自分の手で台無しにして。

不甲斐なさが加速して、涙がもつと溢れて。

——やっぱり、弱いままで、何も出来ないまま。

——私は何も変わってない。恩のある人に、何も出来てない。

「私は……何も、返せて、いない」

「そのままでもいい」

「……………え？」

異性には見せられない、きつと瞼が腫れてしまった顔でサイファーを見上げた。フフツ、と不器用に顔を歪めて苦笑い。

そして大きな手が金髪の上へ、そつと乗せられて、引っかかりもなく撫で回される。慰撫とも言うべきものであつた。

「焦らなくていいから、できることだけやつてくれ。僕はフレデリカみたいな娘と知り合つて暮らしたりするのは初めてだから、何気ないことでもビツクリするし元氣になつたりする」

「……………それだけ？」

「たつたそれだけでも、元氣はもらつてるよ」

「やつぱり……………あなたは優しい人ですね」

「……………お前さん限定だぜ」

こつそり呟いたのをフレデリカははつきり聞いた。

きつと一ヶ月前までは確実に、素で優しくしてくれていたのだろう。その度に『優しい』とフレデリカが言えば、ツンとふてくされていた。

それがフレデリカのみにはベクトルが向けられて、それをはつきり言葉にして言つた。

——いいや、サイファーさんのことですから、きつとからかつてるだけです。ホント、

そういうところは子供っぽい。

——だから今回も素で優しくしてるだけ。

——そう、きつと。きつとそのはずです！

——だから、顔が熱くなる理由なんて、ないんです！

泣き腫らしたのは別の赤み頬に出て、そして同じように別の熱が。

それらを振り払うようにブンブンと頭を振って、なるべくサイファーの方は見ないように努める。多分、一目でも顔を見たり、目があったりしたら、もつと酷いことになりそうだから。

「なんか……おもしろいなあ」

そんなサイファーのぼやきさえ聞こえてない。

涙を拭って、ナチュラル方向の化粧を直すまでほんの十分。ほぼ必要ない化粧は腫れた瞼を隠すだけで、あとは元の素材で十分すぎた。

ほんの少しヨロヨロとした足取りで、フレデリカは降りた。

しつかりした足取りでサイファーも降りた。

レンガの塀が最初に目に付いた。ぐるりと資格に一周して、物々しい雰囲気醸している。その奥の方に目的の建物はあった。

フレデリカはその鉄筋とモルタルで出来た、物々しい建物を知っていた。いや、アー

カムに住まうものであれば知らない者はいない。唯一の統治機構にして、最大の保安組織。

アーカム統治局。

裏の人間が何よりも恐れる、法無き魔都にある唯一の法の番人。方法、手段を問わぬ故に大英帝国のもっとも汚れた、そして最強の暴力機関。

その正門をサイファーは堂々と通る。

もちろん脇にはM V社製自動小銃を携えた保安官がいたが、全く気にした様子もなく、当たり前のように通っていた。

「保安課はどこだ？」

眼鏡の女性が迎える受付は右方向を指さした。

一言も発さずに対応したのが、どこか後ろ暗いところ感じさせて不安を煽る。

指さした先にある階段を上り、保安課のオフィスを突っ切っていく。職員たちは二人などいないように扱い、部外者の彼らに視線一つくれることもない。しかし、何人かはフレデリカの方を見て酔ったような状態になっていたが。

「ひさしぶりだな。ワイアット」

「急に呼んですまん、サイファー」

四十代後半の男だった。白髪の混じった目つきの悪い男だが、悪人にはとても思えな

かった。きつと荒いやり方でも、悪や不義というものを徹底的に憎める正義の心を持っている。

親しげに話す二人に付き合ひの長い知己なのだ、そうフレデリカは思った。

「そこにかけてくれ」

応接用のソファアに座ると、男は自己紹介を始める。

「はじめまして、アーカム統治局治安維持部保安課課長、ワイアット・アープだ」

「フレデリカ・エインズワースです」

握手を求められ、きつちりと応じた。

フレデリカと完全に目があつたのに、酔つたような状態になつてないのは、それほど精神的な強度があるのか。

続いてサイファーの方を向き直つて、神妙な面もちになる。どこか苦々しげで、どうにもならない状況に歯噛みしている。そう思わせた。

「来てくれて本当に助かった。東洋の諺で言えば『猫の手も借りたい』そんな状況だ」

「統治局もそろそろ終わりだな」

「嘘から出た真になる、そんな感じだな。これを知っているか？」

折り畳まれた薬包紙を差し出した。中には白い粉がある。アーカムに住まう者であれば子供であっても、それが確実に麻薬であると分かる。

外界では芥子からとれる阿片が主流だが、アーカムでは科学的に生み出された気化合成麻薬にアドレナリン誘発物質まで存在している。快感・興奮作用は阿片の比ではないだけあって、それだけ墜ちやすい。

どの時代であっても薬物は法の番人を悩ませるものらしい。

「……ヤバそうだな」

「医薬品では……ありませんよね？ 嗅いだことのない臭いがします」

フレデリカの言うとおり、確かに柑橘系に似た激しい臭いがする。至近距離で吸い込めば、粘膜をやられるだろう。

「わかるのか？」

「ほんの少しだけ。医学を少しだけ、かじってるだけです。大学の恩師に応急処置を学ぶついでで教わったんです」

「お嬢さんの言うとおり、この薬からは未知の元素が二つ、塩基は四つ、酸は二つ確認された。ミスカトニック大学の研究員がそう言ったんだ。間違いなど万に一つも存在しない。イギリス本土の科学者や碩学も同じ見解を出すはずだ」

それを聞いたサイファアの銀灰色の瞳、それに宿る光に鋭さが加わった。どこか剣呑で、どこか忌々しげな空気をにじみ出して。

こんな表情を見るのはフレデリカにとって初めてであった。ベアトリクスを屠った

時とは違う、でも似たような何かがある。

「これはコカの類のように鼻から吸うんだが、乱用者と目を付けていた人間がことごとく行方不明になっている。何の痕跡も残さずにな。それに薬品の調査結果ともう一つの事項も相まって、お前の出番だと思つたんだ」

「もう一つの事項、だど？」

「……………この薬を調査した研究員なんだが、三日後に精神に異常を来して発狂、そして白衣やズボンをロープ代わりにして自殺した。殺人に見せかけた痕跡は一切見られなかった」

「きつと、そいつは耐えきれなかった。死に救いを求めたんだらうよ。知ってしまったがために、知らなければ良かったと嘆いて首吊つてキューさ。気持ちは分からんでもないが」

口調はおどけていたが、表情は未だに剣呑なままだ。

事態の深刻さをしっかりとわかつているのか、おそらくは頭の中では出所や売人の心当たりを片っ端から漁っているに違いない。

公的機関と裏の人間の癒着、とも言える光景だがサイファーがそれだけマズいと思う状況なのか。メンツや世間体などをかなぐり捨てる必要性があるほどに。

「僕は下層あたりが怪しいとにらんでる」

「あのなんでもありの魔窟か。だが”なんでもあり”なだけに逆に怪しくない。さすがのお前でもリスクが高すぎる」

「デリンジャーのところを拠点にさせてもらおうよ」

「なら少しは安心か」

その時だった。

扉が蹴破られたかと思うほど、激しく跳ね飛ばされるように開いた。汗だくの保安課の職員が、ウインチェスターのポンプアクション散弾銃を抱え、肩で息をしている。

「何事だ！」

「侵入者です！ 正門前で食い止めている状況ですが、突破されるのも時間の問題です！」

「人数は？」

「……一人です」

想像を絶する回答が返った。

天下のアーカム統治局保安課、そこを単身で攻め入る者がいるとは。無謀も通り越して、もはや呆れさせ感じてくる。

だが職員の焦燥ぶりから窮地に陥っていることは確かかようだ。

「この部屋にも武器の備えはあるか？ 手を貸すぞ」

「百人力だ。オートリボルバーを三挺貸しておこう。スピードローダーもあわせて三つずつ」

机の引き出しからウェブリー&フォスベリーの自動回転式拳銃を渡す。口径は四十五口径だが、シリンダーの溝に沿って反動利用式の自動機構が作動することで、撃鉄を自動的に倒してのシングルアクションによる連発が可能だ。

サイファーが武器の貸与を求めた背景には、彼の持つ規格外の巨大リボルバーでは室内戦も予想されるこの戦場では適していないと考えたのだろう。

フレデリカも持っている武器はMV社製の自動拳銃とアーカム45だ。少なくとも規格外の威力を有しているわけではない。

ワイアットはS&Wの中折れ式リボルバーのM3スコフィールド。そして十インチ以上もの銃身を持ったSAA。スリングベルトをたすきに掛けたウィンチェスターM1912を、銃床をソードオフしたものを持っていた。

錚々たる重装備だ。

並のゴロツキにギャングでは、視界に入っただけで逃げ出すであろう。

「下層から這い上がってきた魔人かもね」

シニカルな笑みが一番高い位置で煌めいた。

「腕の見せ所だな。最近はずデスクワークばかりでウズウズしていた」

頭一つ分以上低い位置で意気込む声。

「大丈夫……………いつも通りにできる」

一番低い位置で自分に言い聞かせる女の声。

三者三様。

だが悲観的ではなかった。生き残って、いつもの日々に戻れることがすでに決まっているように。

激戦は前提なのは周知であった。

当たり前のように三人は踏み出していった。

硝煙、守り手の住処を満たして

保安課の部署を出た早々に、銃を持ったならず者が歓迎する。拳銃から短機関銃、自動小銃とバラエティに富んだ銃口が向けられる。

保安課の扉が水平に回転しながら迫る。

サイファーが力任せに外し、剛腕をもってブン投げたのだ。

フレデリカとワイアットが身を隠す時間稼ぎのつもりだったが、重量物の扉が飛んだことで怯んだ隙について、二人の銃が瞬く間に撃ち倒してしまった。

「敵は一人だと聞いていたんだがな。もしかして一人の方は陽動か？」

「可能性としては十分に濃厚です。前後左右に注意を払いながら、排除していくのが最善かと」

「なかなか分かっているお嬢さんだ。俺も賛成だよ」

「フレデリカが前方、僕が左右で、ワイアットは後ろで」

「それでいきましよう」

「異論はない」

SAAに再装填を素早く済ませ、さらにウインチェスターのフォアエンドも引いた。

チューブマガジンを延長した統治局保安課特別仕様だから、火力は一般的なものの比にならない。

フレデリカも両手の拳銃を再装填しようだ。

そのまま彼女を戦闘にしたまま、三人は進行を始める。

長い廊下だ。左右に会議室に資料室、その他諸々の下手への扉がいくつもある。

その中程まで来たとき、四方八方の扉が一斉に跳ね開けられた。

わらわらと武装した男たちがなだれ込んできたのを、三人は示し合わせたわけでもないのに流れるような動きで葬っていく。

ワイアットのSAAが吠える。

引き金を引き切ったまま、ハンマーを手のひらで叩くように撃つフアニング・ショット仰ぎ撃ちで六人を瞬く間に倒す。

「全員逃げろ！ 重機関銃だ！」

サイファアが叫びを上げるほどの脅威に、フレデリカもワイアットも全く同時に視線を向けた。

水冷式の巨大なバレルジャケットを装備したブローニング重機関銃が、廊下の奥に鎮座している。

機関部から伸びる弾薬帯の長さは三メートル近い。三〇—〇六スプリングフィール

ド弾の猛連射を想像し、全員が近くの扉を盾に逃げた。
鉛玉の大嵐だ。

射手は狂乱の雄叫びを上げながら、銃身の加熱など思考の片隅にも存在していない、それぐらい狂ったように撃ちまくる。

「全員生きてるか？」

サイファアの問いに弱々しい答えが二つ。

鉛詰めのミートパイに誰もなることはなかったらしい。

規格外の巨大リボルバーをどこにしまっていたのか。不自然な浮き彫りもないコートの内から、六〇〇ミリ以上のマットシルバーな灰色の巨銃が現れる。

重厚なウエイトに刻印された『Howler in the Moon』の文字は、名が体を表すように月まで届く咆哮のごとき銃声を放つことの現れか。

「統治局、ブチ抜くつもりか？」

「火力が足らん。オートリボルバーじゃ相手になると思う？」

「散弾銃もここからだと届かな……………あ」

ワイアットに間拔けな声を出させた原因。

フレデリカが動いた。

実力行使請負業の仕事を手伝う上であつらえた、モノトーンの落ち着いたドレス。そ

の膝下丈のスカートが、回避も兼ねた回転運動によつて翻る。

舞踊と見間違ふほどの動きが静止する。

狂乱の盲射さえ止まった。射手は頬を朱に染めて見惚れていたのだ。

二種の拳銃を双手に構え、半目で射手を射抜く。

見えない手が吹き飛ばしたように、呆気ないほど脅威は撃ち抜かれた。

「……………ふう」

ほつと胸をなで下ろす。

その動作一つ一つの所作さえ、戦いの場というのに呆れるほど美しい。

戦場に咲いた華であつた。モノトーンで際立てられた、黄金の一輪。

「よくやつた。綺麗な動きだったよ」

「大したことじゃないですよ」

「アレは使えそうか？」

ワイアットがブローニング重機関銃を指さしたときには、サイファーは固定銃座に手をかけていた。

金属の引き千切れる特有の音。耳障りなそれを立てながら、弾薬帯を引きずりながら歩き始めた。

「おお、来た来た。まとめて蜂の巣にしてやるか」

突き当たりを曲がれば、三〇人近い武装した男たちがやってきた。

それにサイファーは重機関銃の掃射を以て応える。

三人を追い込むはずであった大火力を奪われたことに、男たちの顔には色濃い驚愕の表情が一樣に浮かんでいた。

逃げることも忘れて狂乱した。容赦ない銃火が降り注ぎ、次々と男たちを絶命させていく。

腕を吹っ飛ばされた者、腸をねじ切られた者、頭蓋をすつ飛ばされた者。種類を問わない数々の死体が並び、血溜まりと肉片で廊下は埋め尽くされた。

オートリボルバーを二挺、両手の肘を曲げて銃口を上にして構える。そのまま悪臭を放つ血の海を平然と歩んでいく。

「一人でノコノコ出てきやがった！」

「撃て！　ぶっ殺せ！」

男たちの喚きに銃弾を以て応えた。

弱装とはいえ大口径のリボルバー拳銃弾は、対人では充分な威力を示す。自動拳銃とは違って、自動装填機構による反動軽減の恩恵はないが、サイファーの膂力では些細な問題であった。

瞬く間に弾倉内の弾丸十二発での、ワンショット・ワンキルだったが再装填の問題が

立ちはだかる。

サイファアの目の前にはブローニング自動小銃を構えた男。彼の目は最大の間を見
たせいか、濁りきつた目で表情は鬼気迫る狩人であった。

その時、六発の四五口径弾を収めたスピードローダーが二つ宙を舞った。

すかさずオートリボルバーを中折れする。フレイク・オープンいかなる技を使ったのか、スピードロー
ダーから弾丸が滑り落ちた。

レンコンの如く空いた六つの装填孔に弾丸がすべて、吸い込まれたかのように、見え
ない手で引つ張られたように、綺麗に収まった。そして中折れのヒンジが回転する。

——装填完了。

かかった時間、実に二秒。

人間離れた曲芸を用いた再装填は、目の前の男がブローニング自動小銃を取り落と
すほど度肝を抜いたらしい。

「は……？　な、あ………んん？」

間拔けな声まで上げて。

撃鉄の起きる音を聞いて、ようやく男は我に返った。その時には何もかもが手遅れで
あつたが。

連続した六連発が撃ち込まれた。その内、四発が頭蓋を跡形もなく撃ち飛ばし、二発

は両肺を綺麗に撃ち抜いていた。

(そのまま、そのままだ。こっちは見ないでくれよ)

銃身を切り詰めた上下二連散弾銃を持った小男が、ゆつくりと左後方から忍び寄っていた。

装填されているのは口径十ケージに、長さが五インチ近い自作の散弾だ。対人相手にぶつ放せば、はらわたも何もかもズタボロになって確実に即死だ。

無意識に口角が上がる。

この大男をしとめた後に待っている栄転で。

だからこそ、気付けなかったのだ。

——バネ仕掛けのように跳ね上がった左腕に。

息を呑む暇さえなく撃ち込まれた六連発に小男は絶命した。サイファーは小男の方など一目と見ていないのに、弾丸は全て一五〇センチ足らずの矮躯に撃ち込まれていた。

小男の手を離れて、宙を舞った散弾銃が足下に落ちる。

「おつ、すげえ銃だな」

「ソードオフ・ショットガンでしょうね」

フレデリカの声が追いついた。

遅れてウインチェスターM1912の銃声もした。それから間隔の空いた三連発は、S&WのM3スコフィールドによるダブルアクションによる発砲か。

「弾が違法製造のハンドメイドだ。威力は考えたくもない」

「ああ、口径も長さも規格外品だ……これTNTが炸薬に混じってる」

サイファアの嗅覚は散弾に封入された、爆薬のにおいを察知したらしい。

「正気の沙汰で作られたとは……とても思えません」

あろうことか爆薬まで混入された散弾。それを二発装填したソードオフ・シヨットガンを、サイファアは左手で肩に預けるように持った。

「使う気ですか………その銃」

「こんな化け物じみた代物、滅多にお目にかかれないよ」

「自分の得物をもう一回見直してみろ」

ワイアットとフレデリカの脳裏にあったのは、サイファアの持つ規格外の巨大リボルバーだ。

全長六〇センチは優に超える代物であるが、二メートルを超える背丈の彼にとつては少し大きいという程度だが。

それでもソードオフ・シヨットガンが霞むほど、常識はずれの代物であった。それは彼の右手に握られていた。

サイファーは規格外の怪物銃を両手に携え、のっしのっしと歩き始めた。ロングコートの裾が揺れてるし、身長二メートル超えは伊達ではなかった。

とにかくダイナミックだ。

「どうした？ さっさと行くぞ」

距離は開きつつあるのに小さくならない後ろ姿に、出会ったばかりの二人は同じように微妙な空気であった。

「敵さん、きつと皆殺しになっちまうな」

「笑いながら虐殺していきそうな気が……」

容易に想像できる。

——逝きさらせ！ 愚民ども！ アーハッハッハッハ！

築き上げられるであろう屍の山を想像して、背筋の凍る錯覚を覚えた。

敵に情けはかけないが、せめて苦しまずに一撃で楽にしてやろうと思ったのであった。幸い、二人とも銃の腕には覚えがあるのだ。

急所を三発以内で撃ち抜いて絶命させるなど、片手撃ちでも容易いことだから。

「止まれ。奴さん、エントランスに戦力を集結させてやがる」

「……濃い殺気です」

「のこのこと出ていけば即蜂の巣だな」

全員集結。

凄惨な殺戮が行われたのだろう。折り重なるように職員の死体があったが、腕利きは未だに応戦しているらしい。

さらなる情報を得ようとフレデリカが身を乗り出そうとすると、足先に堅い感触があった。

MV社が次世代の歩兵小銃として売り出した、M4エクスターミネイターであった。三〇—〇六スプリングファイルド弾を使っておきながら、反動消去用のカウンタージェイトを仕込んだ新式のガス圧作動方式のおかげで反動は四割近く抑えられている。

イタリア人デザイナーによる銃床ストックと銃把グリップを一体化させたサムホールストックを取り入れたり、四発装填できるポンプアクション散弾銃を銃身下部に装備するなど新しい試みも取り入れられている。

新設計の複列三〇連弾倉だけではなく、ブローニング自動小銃の二〇連弾倉も共有できると至れり尽くせり。

全長は九五〇ミリ。重量は六キロ。

それを色白の織手が拾い上げた。ずしりとくる重さであったが、その重さが戦場における信頼性の具現のようであった。このアーカムでは軽量高威力の武器が好まれるというのに、妙なところにフレデリカは前時代的なこだわりを持っていたのであった。

「準備はいいか？」

上から降ってきた聞き慣れた声に、明朗快活に返した。

「はい、いつでも」

「いい返事だ」

エントランスの天井、そこに吊されていたシャンデリアに向けてリボルバーと散弾銃を一発ずつ、サイファーは撃ち込んだ。

着弾の衝撃は手榴弾の爆発に等しい。

砕け散ったガラスの破片が、鋭い薄刃の雨霰と化して周囲に降り注いだ。たまらず、飛び出してくる者がいた。要はあぶり出しであった。

そこにワイアットの右手にあるS A Aが追い討ちする。

撃鉄を叩くように撃つ仰ぎ撃ちが炸裂した。

フレデリカも側転しながら飛び出すと、拾い上げたM4の掃射を浴びせる。加えて引き金を引ききつたまま、フォアエンドを前後させてのスラムファイアも放つ。

ワイアットもウインチェスターでのスラムファイアを浴びせた。

「ミンチよりひでえな」

「このメンツなら当然の結果だろう」

ワイアットが肩を竦める。

第十二層において知らぬ者はいない『実力行使請負業』と、アーカム統治局保安課課長ワイアット・アープの敵が無事で済むはずがないのだから。

そしてフレデリカの実力もまた、無視できないくらいには洗練されている。未だ荒削りの領域は脱していないが。

「まだいます。気をつけてください！」

M4エクスターミネーターの連射を弾倉交換まで済ませて続ける。

フレデリカは手に入れて間もないライフルを、あつという間に扱いこなしている。

殊勝に大勢を相手取る彼女に微笑み一つ。そしてサイファーは大仰に右手を横に、五指を広げた。その先で暗黒が広がり、蠢いてから、あるものを吐き出したように出した。

赤銅に燃えて輝き、紫の柄紐で飾られ銀色の鍔が光る。それは日本刀の柄以外の何者でもない。それを一気に引き抜いた。

優美に浅く弧を描く五尺もの長大な刃は、確実に野太刀や大太刀に分類されるであろう長物であるが、身長二メートルを超えるサイファーには、むしろぴたりとさえ思えてしまう。

「ちよつと派手に行くか」

言うが早い。

左手に握るリボルバーを一発。ほぼ同時に銃口の先七メートル前にいた男が見る影

もなく爆散する。

次の瞬間には四メートル離れた男の背後をとり、間も空けずに日本刀で胸を刺し貫く。そのままがく男を刺したまま持ち上げ、臂力に任せて腕を振った。

勢いで刃の刺さっている箇所から二つになった死体が、二人の男をなぎ倒したかと思えば、リボルバーを上下二連式散弾銃に持ち替えて発砲した。放たれたバラ弾は耳をつんざく爆音とともに散らばって、二人の男を挽き肉に変えて止めを刺す。

「次はお前さんだ」

びしりと人差し指で指し示したとき、その先にいた男は縫い止められた錯覚を覚えたに違いない。

灰色のダスターコートが翼のごとく翻って、サイファアの巨体が天井いっぱい飛び上がった。奈落の底を思わせるほどに大きい銃口と、瞳孔さえ見開かれた男の目があったとき、雷鳴が響きわたる。

熟柿めいて爆散した男の上半身を一瞥して、二発目の上下二連式散弾銃の轟砲を放った。TNTという爆薬を装薬にされた散弾は、掠るだけでも皮膚を大きく抉り込んだ。直撃などしようものなら体内で暴れ狂って、灼熱の苦しみを与える。

四人もまとめて吹き飛んだ。

サイファアは笑みを以て返す。三日月のごとく口の端を吊り上げた、鮫のような笑み

を。

そこに一陣の銀線が走った。

サイファアの頬に朱線が走り、血潮が迸る。

「本命のお出ましかな？」

上下二連式散弾銃を放り捨てて、リボルバーに持ち直した。

その暗い銃口が元凶に向けられる。

ブラウン・グレーの短髪、瞳孔まで開ききつた狂気の三白眼。カッターシャツとスラックスという簡素な出で立ちで、その手には理髪店に使われるようなカミソリを握っている。

それを手足の延長のように、くるりくるくる、と振り回す。その刃には赤い雫があつた。

「手応えが一線を画している。その男なぞより、よつぽど斬り応えがある。だが殺したくはない」

「ワオ、熱烈だあ。でも不思議と全く嬉しくない。そもそも斬り応えがあるのに殺したくないとは、禅問答もここまでできたか」

「貴様のような人間は、那由多の時が過ぎようと切り刻みたい。飽きることなく指先から腸まで、はらわたひたすら細かく一寸刻みより小さく、衝動が尽きるまで斬り続けたい。顔の

皮を剥がして、その下の筋を一本ずつ切り離しに掛かりたい。お前の存在が強く駆り立てるんだ」

「返しに困るんだが……熱意も狂気も一級品だが、僕には相手をそんな洒落たやり方でぶつ殺せる技術もなければ趣味でもない。お前さんのようなトチ狂いぬいた男は、願望のままに生きて叶う前に夢やぶれて死ぬ。必要なのは、いかに効率のいい死体量産機になるか」だ。だが願望を押し通せる「一握り」がたまにいる。お前さんに、その一握りの資格があるか見てやるよ」

七連発の七〇口径もの巨弾が洗礼となる。

ほんの小手調べのつもりで、サイファーは発砲した。だが巨弾であっても弾丸程度の質量が七つだけで、空気がひどく渦巻いて乱れていく。

脆弱な薄刃の西洋カミソリが巨弾に差し込まれる。

人斬りにさえ耐えきれそうにない薄刃が、巨弾を切り裂く絶技を成した。それを七回も繰り返す。巨弾は破片だけでも壁や床に着弾した途端、小規模だが爆発を起こす。そのまま男が地面を蹴った。

遠くから見ていた生き残りの職員は証言する。腕利きの保安課職員だ。

「断言していい。私は瞬きなど一度もしなかったが、あの男は確かに消えたんだ」

比喩抜きで弾丸よりも速く、男はサイファーの首筋にカミソリを振りかぶろうとす

る。

そこを重厚な重みと存在感を放つ、マツトシルバーの銃身が止めた。反対の手に握られた大太刀が胴を両断せんと横殴りに振るわれた。

男は身をにわか捻るや、カミソリと接する銃身に刃を食い込ませ、それを支点にしてサイファアの頭上へと飛び上がったのだ。

唐竹割一閃。

頭蓋を真つ二つにせんと、無骨さと頑丈さを補って余りあるだけの鋭さでカミソリが襲いかかる。

「ぬおっー！」

「おおっとー！」

カミソリは空を切った。

単純に腕を振るっただけで、男を吹き飛ばす。サイファアの剛力は見ただ目以上のなか、目方にして七〇キロ近い男をぶん投げたのだ。

「……ちよつと興奮してきた。まさか死者と戦える日が来るとは。こういう数奇さがあるから、人生ってやめらんないな」

「まさか……」

「アーロン・コスミンスキー。頭のイッチまった床屋で、二年くらい前に切り裂きジャツ

クの容疑者として疑われていたが、被害者の中にアルバニア・ファミリアの情婦がいた。たまたま近くでカミソリを撫で回していたお前さんは、鉄砲玉十三人のマシンガンに気づかずカミソリを見つめたまんま蜂の巣になった。僕も誰でもお前さんの死に様に大笑いし……………」

嘲りは中断された。

狂気の理髪師が放った、信じられない凶器によつて。

身の丈を優に超える大きな鋏。理容に使えるような代物ではなく、結構な角度で弧を描く刃は骨まで容易く断ち切るだろう。

鋏の刃が合わせられた位置はサイファアの首があつた位置。

「俺の、最期を笑うな」

「だったら、そのデカくて大層な鋏で僕の口を切り刻んでみる」

左手に携えた巨大リボルバーを挑発の意を込めて、上下にサイファアは振った。

鋏の取っ手、その片方を持ってアロンが振れば、断頭台の刃と遜色ない凶器が展開する。刃が合わさってしまえば、間にいた者は刎頸の運命を辿るのだ。

そこにいかなる射撃法を用いたのか、刃の左と下から七〇口径もの巨弾が合わせて十発も殺到した。大鋏があらぬ方へと振られ、エントランスの支柱に突き刺さった。

「もらつたー！」

轟突。

そう言っただろう。

大気を切り裂き、真空を生み出した突きを。穿たれた大気の虚は相手を引き寄せ、間合いという概念を喪失させる。

狂気の理髪師を動かす心臓は貫かれた。

同時にカミソリも翻り、サイファアの首を易々と切り裂く。だが噴き出たのは赤き血潮ではなく、光をどこまでも吸い込むようなタールめいた液体。闇が液体となればこうなるのかもしれない。

「動く死者よりも貴様は化け物だ。この世にいてはならん。ただ存在しているだけで世界の理に反している。生き物に流れるべきは熱くたぎる血潮であるべきだ。貴様に流れているのは森羅万象を呑み込む暗黒」

「ああ。安っぽい動く死体には出来ないことも出来る。こんな風にな」

床に滴となっていた闇が渦巻いて、一気に直径三メートル程まで広がる。

大気がそこに向かって一気に吸い込まれていく。

ただ吸い寄せられているのは大気と狂気の理髪師アロン・コスミンスキーだけ。莫大なる闇の引力に引かれ続け、アロンの表情は歪んでいく。

「生命を吸られる気分はどうだ？」

「かくなる……上はっ！」

物理的な引力を発生させていただけではなく、闇の渦は対象の気力精力生命力さえ吸い込んでいた。アローンの肌が色を失い、蒼白になっているのが物語っている。

いつ手元に引き寄せたのか、エントランスの支柱に突き刺さったはずの大鋏をサイファーに向けて放った。

いかなる投擲法を用いたのか、一直線に巨大な凶器が向かっていく。大の大人一人程度であれば難なく吸い寄せる引力を切り裂いているかのように。

連続した金属音。

甲高い衝突音。

大鋏は床に突き刺さった。少し離れた場所でひしゃげた弾頭が床に落ちた。大型ライフル弾である三〇—〇六スプリングフィールド弾が。

「次は両膝です」

「なら俺は両腕をもらおうか」

M4エクスタミーネイターの銃口からは色濃い硝煙が立ちのぼる。

ワイアットも長銃身のSAAを構えている。

フレデリカは教えれば大抵の銃火器を扱いこなせる才能があるし、ワイアットの早撃ちは六発全弾撃つても銃声は一発分しか聞こえないほど速い。

つまるところアーロン・コスミンスキーは詰みだ。

ほくそ笑んだサイファーを狂気の理髪師は睨む。

すべて、すべて、無駄なことだ。

そうあざ笑っているかのような、彼に向けて。

「ここでお前さんが死のうが、大元は痛くもかゆくもないらしい。だからすっぱり切り捨てさせてもらおうか」

ズツと耳障りな音。

アーロンはこみ上げる何かを吐き出した。赤い生命の飛沫を。

心臓の上を再度長大な日本刀が貫いている。緩やかに弧を描く刃は背中を突き破り、刃先から血潮を滴らせている。

刃を引き抜きながらサイファーの巨体は三メートル近くも飛び退いた。

それを皮切りに無数の銃弾が撃ち込まれる。

フレデリカとワイアットだけではない。保安課職員もいつの間にか集まって、各々の得物で熱烈な銃弾の歓迎をする。

襲いかかるのは拳銃弾、ライフル弾、散弾、スラッグ弾。保安課に採用されているものは、異常性を日毎に増してゆくアーカムの犯罪に対応できる特別製だ。数式技術で弾丸が爆発したり、人体の内部で効率的に碎け散るものがほとんどだ。

後に残ったのは原形を留めない肉片と、周囲に散った血潮だけ。

そこに人がいたと言つても信じられない光景だ。

「こんな惨状になつたが問題なかつたか？」

「話の通じる相手ではない。逮捕するにしても抵抗した時点で同じだ。どのみち蜂の巣のボロクズになる運命だつた。上にはうまく報告しておくよ」

ワイアットはやれやれといった風だ。

この男が悪人と狂人の類を強く憎んでいるのは、サイファーともう一人の友人であれば周知の事実だ。

出会つた頃から二人とも世界の未来を憂い、彼らなりのやり方で良くしようと努力していた。サイファーは二人では出来ないことをやる、一種の便利屋であつたが不満は微塵もなかつた。

未来のために日進月歩する若者に期待していたのだ。

だがワイアットは苛烈すぎるやり口が災いして、アーカムに左遷されてしまった。もう一人も集まる人間の稼業ゆえに、政治の道へ進むことを断念した。

利害、体面、感情、理屈、絡み合う複雑な事情に折り合いを付けなければ、生きていけない人間社会のままならなさや歯がゆさを痛感する。

「生きづらいものだね。フレデリカもそうは思わないか？」

「どうなんでしょうか……きつと全体の都合に合わせて、自分を変えて、なおかつアイデンティティを見失わない人間が成功できる人間だと思います」

「初志貫徹、鋼の意志と精神を持つ人間か。僕はお前さんの中で、そういう人間に入っているのかな？」

「もし入っていたら、この街にはいませんよ」

思わず笑みをサイファーはこぼした。

自嘲を多分に含んだ、シニカルな笑みであった。

「なかなか言うじやないか。最近になって口が回るようになったな。誰のせいだろうね」

「気を悪くしたのなら謝ります。でも出会えたから問題ないんです。私もそういう類の人間には入ってませんから、アーカムのよく似合う女なんですよ」

「そうだな……本土の空気には合わないことは確かかも」

やや気恥ずかしそうに、手を組んで。

フレデリカは少しだけ頬を紅潮させて。

「それに私たち二人とも、そういう人間だったから、こうして出会えたんだと思います」

「……そうだな。僕も出会えて良かったと思ってる」

「……………え？」

意表を突かれた。そんな呆然とした顔になっている。

ちよつとした冗談半分での言葉だったのに。

サイファーは少しだけ神妙な面もちで、雰囲気は真剣そのもので言った。

「二期一会、だよ」

「あー、お二人さん。入りづらい雰囲気を作らないでくれ。サイファー、いつからそんな台詞を吐けるようになった？」

「すまんすまんワイアット。ここがお前さんの仕事場なのを忘れてた」

「なんだか、こう……むずがゆくなる気分だ。お前等が話し込んでるのは。昔はそんなに積極的ではなかっただろう」

「最近、バクチと同じことを今更になって、やってみようと思つてな。待つているだけじゃいられなくなるんだ」

「……………下手に格好付けるより、本心を吐き出すことをオススメする」

「ハードル高いなあ…………」

勘弁してくれ、と表情だけで読みとれる笑いだった。どんな時でも余裕を保っていたらしい彼は、なるべく笑顔でいようとす。

しかし隠し事が下手なのか、それとも欠片ほどの可能性だが根が正直なのか。どちらにせよ笑顔に感情が出やすい。

そして——ほとんどシニカルに笑っている。

「あの、お二人は一体何の話を……?」

『男の話だ』

ワイアットとサイファーの声がかぶった。

なんとなく突き放されているようで不服だ。

「そう言うんでしたら、良いんです。男同士の話に、私はお邪魔虫なんでしょう?」

「悪かった。だが男同士の話は往々にして、女の耳には耐え難いよ」

「そ、そうですよね……と、東洋には衆道という考え方が……お二人とも、仲は、良
さそうですし」

「待て、その男同士じゃない」

「野郎のカマを掘る趣味はないからな」

二人とも揃ってかぶりを振った。

フレデリカが東洋の同性愛風習を知っていることなど、すこぶるどうでもよかった。

同性愛者に見られることが、たまらなく耐え難かった。

——いつの時代も、その素質はあるらしい。



すっかり暗くなった夜道を歩く影が二つ。

一つは身長二メートルを超える男——サイファー。

もう一人は一六〇センチに満たない少女と言つていい女——フレデリカ。

揃い——と言つていいかは微妙だが——の意匠がある灰色を基調とした衣服は二人の仕事着であつた。

「すっかり遅くなつたな」

「あの後、後始末まで結局のこと手伝つてしまいましたから」

「撃つだけ撃つて、そのまんまは寝覚めが悪い。ちよつと、やりすぎた節もあるし」

バツが悪そうにテンガロンハットの上から頭をかいた。

やはり得意分野は荒事だ。繊細な力加減や細やかな機微がものを言う家事が苦手なのにも、彼の不器用さが現れている。

保安課での後始末もフレデリカの方が戦力になっていた。このあたりは掃除の経験が生きているのだろう。サイファーも別な意味の掃除なら、比べものにならないほどの経験があるのだが。

「二つ、聞いてもいいでしょうか？」

ふと切り出された。

傍らを歩くフレデリカに目を向ければ、白皙の頬を朱に染め、やや俯き気味であった。戸惑いなのか、別の感情か。言い出しづらそうだったが、意を決して桜色の唇が開いた。

「あのときの『出会えて良かった』という言葉。あれは本当ですか？」

サイファーは立ち止まって、顎に手を当てて、考え込んでるように見える。

もしかしたらフリで『冗談だ』と言うのかもしれない。

天の邪鬼な面があるのか、女性をからかって楽しむ趣味があるのか。どちらにせよ、ろくでもない。

「本心、かな」

「……………え、ええ、本心ですか？」

「嘘じゃないことぐらい、わかるだろ」

「真剣な顔、していましたから。笑っていても本心が顔に出てるんです」

「もう、そこまでわかっちゃってるのか……僕もまだまだかな」

「本当は……………嘘は苦手では？」

そこでサイファーはちよつとだけ困った顔をした。

ううむ、と唸って逡巡して。

その様子にしまったと思った。なにか突いてはいけない、彼の秘密というべきか、デ

リケートな部分に踏み込んでしまったのか。

だが怒ることはなかった。困ったように笑って、照れくさそうに口を開いた。

「鋭いなあ……女の勘ってヤツか。実を言うと嘘はつかれるのも、つくのも苦手だ。

まあ、職業柄ポーカーフェイスは必須だから、仕方なくやることもあるけど」

「だったら……信じていいんでしょうか？」

「あれは暫って本心だよ」

思わず頬が熱くなる。

——確かに、確かにサイファーさんは嫌いではないけど。

——でも、こんなに恥ずかしくなるのは、違う気がする。

——すごくモヤモヤして、変だ。

「遅くなつたしな……外で食つていくか？」

「そ……そそそうですね！ いいと思います！」

フレデリカの前に差し出された手。

優しさをたたえた笑みをサイファーは浮かべた。

「お手をどうぞで」

「……………はい！」

その手をフレデリカはしっかりと握つたのであった。

魔域、悩める乙女は次元を手繰る者に迎えられ

日差しが差し込んできて、フレデリカは微睡んだ

柔らかな朝の温もりに包まれながら、少々気だるげにベッドから起きあがった。

冬の寒さは部屋を容赦なく冷やすだろうが、アークムで広く使われている暖房システムは優秀だ。蒸気機関の余剰熱で温水を作り、張り巡らせたパイプを通して循環させる。アンダーソン邸には暖炉もあるので、快適さはさらに増す。

文明の力、万々歳ということだ。

だからベッドから這いだすのも容易だ。寝不足でもない限りは。

——あ、シャワーでいいから、お風呂入らないと。

昨日は戦いの疲れもあつて、適当なダイナーに入って夕食にした。その後、シャワーも浴びずにドレスだけ脱いで、上下の下着にスリッパのまま寝てしまった。

淑女としては失格とっていい。身だしなみから内面、服装のセンスにマナー以前の問題になる。シンプルな白一色のブラウスと紺色の膝下丈のスカートに着替えて、

朝食の支度を始めることにした。この時間からサイファアは起きていない。声をかければ起きてくるが、放っておくと午前八時を過ぎても寝てる。

まずは身を清めるためにもシャワーを浴びる。

黄金に変じた双眸と目が合った。浴室に据え付けてある姿見に、一種の芸術品ともいえる少女がいた。一六〇センチを少しだけ超える身長でも大きいといえる、オーバー90センチの胸がいやでも目立つ。スマートにくびれ、魅力のラインを描く腰回り。どうにもアンバランスだ。10代の少女と違っていい顔が、男好きするグラマラスな肉体に乗っているのだから。

自分の顔は、鼻屑目に見なくても綺麗だと思う。だからこそ、いやでも陰火の灯る肉欲の対象として見る、まわりつくような視線に晒された。そのたびに辟易して、ずいぶんと傷つけられた。

でもサイファーはそんなことはなかった。シニカルな笑みを浮かべていながら、眼差しは優しげであった。フレデリカのために怒って、その力を振るってくれた。

だからこそ、彼の存在は少しずつ大きくなっていく。

——これじゃ、まるで。

——サイファーさんのこと……

一気に温度調節のレバーを冷水に変える。体が急激に冷えていって、思考も冷静になっただけ。

「うん、きつと一緒にいるから、そうなたっちゃうだけ」

自分に言い聞かせて、早々と着替えて台所に立つ。

いつものようにスープにポーチドエッグ、酸味を効かせたドレッシングをかけたサラダ。あとは調理法が間違いなく茹でているのに、名がベイクトビーンズ、あとはロールパンとブラックプディング。

イギリスの典型的な朝食であるフルブレックファストを手早く調理して、食卓の上に並べていく。

ここで生活する前から得意なことだ。

祖父と暮らしていた頃も、大学時代も、時間が余ることは多かった。だから、その分を家事に回して自活力の向上を図っていた。

やっぱり女性と家事能力というものは切り離せない。不利に働くことなど皆無だろう。身につけておいて損のない能力だ。

「そろそろ起こしたほうがいいかな?」

言ってみた声は空しく響いた。

ため息一つ、それから二階にあるサイファアの自室に向かう。

上等な家だと階段を上がる度に思う。祖父の自宅は年季が入ってることもあって、一歩踏み出すごとに大きくギシギシキキキイと鳴る。

静かなせいか直接声をかけたり、体を揺すったりしない限り起きない。仕事柄ゆえに

命を狙われることもあるはずだが、起こしに行くたびに気持ちよさそうに眠っている。

もしかしたら意識を切り替えているのか、と思うこともある。

意識が戦闘用に切り替わっていたら、背後に立つたら殴り倒されそう。そんな突拍子もないことを考えたこともある。

ドアを開けて、二枚目半だが眠っていないくても端正な顔。それに顔を寄せて、耳打ちでもするように、囁きかけるように、おはようの声をかけた。

「そろそろ起きて下さい」

「……んあ。今、何時だ？」

「もう少しで8時になりますよ」

「……………こうしちゃいられん！ フレデリカも急いで支度してくれ。今日から下層に行く」

ガツン、と物凄い衝撃でぶん殴られたような錯覚に陥った。

急に言われたのと、下層という単語。この二つが強烈なショックを与えた。

——なにも、急に言わなくなつて。

そもそもアーカム下層は超がつく危険地帯だ。

常識というものが薄氷となつて、たやすく砕け散る。ありえない事象が平然と起こり得る、魔界の理に守られているとさえ言われている場所。

ろくに準備も予備知識も入れず、踏み込んでいけば数時間で物言わぬ死体と化す。そこまで言われる魔性の領域だ。

「朝飯はできてる?」

「ええ、準備万端ですよ」

「そいつは楽しみだ。着替えるから出ていった方がいいよー」

間延びした声をかけられて、フレデリカはあわてて飛び出した。

なし崩しの、すがりたくなつて、色々な経緯から一緒にベッドで眠ったことはある。ただ一緒に眠っただけで、変な意味はない。

そのほとんどがサイファーの腕の中にいた。

でも着替えとか裸を見るのとは、それはそれで別問題だ。また違う羞恥心が駆り立てられる。腕の中にいるのは安心感を得ることが出来るが、着替えに裸を見るのは下心だけしか満たされない。

——振り回されてる。

勝手に下層に行くのを決められたのも、いきなり着替えだしてドギマギしているのも。この傍若無人な彼に振り回されているのだ。

だが、フレデリカが思う最も危うい点は。

——それについていけないといけな、と思っている自分がある。

いつから自分の根に入り込んだのか。

いつから日常に欠かせなくなってきたのか。

依存、なのだろうか。彼が、サイファーがいなくては、きつと何かがおかしくなってしまうようなのだ。

おおよそ少し前——大学卒業直前——のフレデリカからしてみれば、まず抱くことになかった複雑な感情。男性に対する強すぎる不信から、雄を遠ざけていたあの頃からすれば、ありえないことだ。

それは——サイファー・アンダーソンがフレデリカの中では特別であることに他ならないのか。

聡明なフレデリカでさえ、異性のことはなに一つとして分からない。男心というものは、数学者フェルマーの最終定理と同じほど、小指の先も分からぬ未知なるものなのだ。「らしくないなあ……………」

ふう、とため息一つ。

冷水を浴びて冷静になったと思っていたが、実際は違っていたらしい。静寂が思考を
行う時間を与え、思考はフレデリカの胸中をかき回す。

すでに食卓でフルブレットファストに舌鼓を打っているサイファーを尻目に、胸のあたりに手を当てて、去来した複雑な感情に思いを巡らせる。

——きっと、私の心を何一つわかってないのかな。

——でも言わない私も、きっと何一つわかってない。

また、ため息が一つ。

振り返ったら、目が、合った。

見慣れたはずの銀灰色の瞳と。

「どうした？」

「い、いえ、なんでもありません」

「……………そうかい」

妙な間があつて、その瞳が見透かしているように感じられた。心臓が跳ねる錯覚

を覚える。

うまく息が吸えなくなつて、つかかえているような感じ。耐え難く、吐き出して楽になりたい苦しみだ。

——依存、しているのかな。

胸中の自覚は出てこなかった。出せるはずもなかった。

迷惑になりそうな気がした。変な苦勞をかけさせてはいけないような気がして。

そのまま何もないうまま二人は朝食を終え、各々の部屋に戻って着替える。ふわりとスカートが翻った。

黒を基調に、灰と白で彩られている、ぴたりの華美さがある。シンプルながらも華がある、フレデリカの好きなデザインだ。これが防弾防刃使用の戦闘用の衣服というのだから、荒事屋たちの需要と、職人たちの供給はよくわからなかった。

下層に行くのも、おそらくは実力行使請負業としての仕事で行くのだろう。朝食の後にサイファーが『ドレスを着ろ』といったのは、そういう意味でもあるのか。サイファーの言うドレスは、この防弾防刃の黒い戦闘服のことなのだから。

そして重要なのは、この二挺。

M2アナイアレイターとアーカム45。

ドレスのスカートにはファツシヨナブルなデザインのカンベルトが巻かれており、そこには二挺を収めるホルスターと弾倉を保持するクリップがある。

蹴りの威力を上げるためなのか、フレキシブルでありながら強靱な皮革で出来たブーツに履き替える。そのまま玄関に降りてみても、サイファーの姿はなかった。

そして足下から音がする。

場所はわかっている。地下の武器庫へはハシゴを降りていかないと辿り着けない。

トランクに大型の散弾銃を収めている、サイファーと目があった。

ウインチェスターM1912だ。銃身と銃床がソードオフされている。散弾の拡散が広がることを考えれば、突っ込んで来る相手には45口径より心強い。

「下層は想像を絶する、魔の領域だ。ちよつとやりすぎるくらい、備えはやっておいた方がいいのさ」

そう言いながらブローニング重機関銃を分解して収める。統治局保安課でまじまじと見せつけられた代物だ。多対一の不利というものを儘く散らしてしまう。

トランクからはイギリス本国で開発途中で、アーカムでは実用化されている短機関銃が二挺。手榴弾にダイナマイトまで収められている。

「私も、何か選んでいった方がいいのでしょうか？」

「それは問題ない。下層にいる知り合いのガンズミスに、専用の銃を拵えてもらったんでな」

「い……………いつの間に」

「かれこれ三週間前から予約はしていたんだ。ただ……………いや、率直に言う。狂つてるヤツだが、腕は確かだ」

「……………狂つてる？」

「曰わく『自称』だがな」

なんだか不安になってきた。

サイファアの表情も、心なしか浮かないような気がする。もしかすると、その銃工のことが苦手なのかもしれない。

「心配しなくても腕は確かなんだ。あのリボルバーを作ったのはヤツで、僕の知る銃工ガンスミスの中で最高の腕を持っている」

確信を持って言い放った。

そこまで言うのであれば、きつと腕はあるのだろう。

あの馬鹿げた大きさと不可思議な装弾数、そして全てを戦慄させる威力を持ったあの銃を作ったのだ。きつとサイファア以外に誰も扱えない、あの魔銃を。

家を出てからの移動は徒歩だった。下層に向かうのであれば、階層間列車を使うのが普通——というより他の方法が存在しない——のだが駅を普通に通り越した。

「道は間違っていないから」

そんな彼の言葉がなかったら、十中八九呼び止めていた。

人通りもまばらな往来を過ぎたあたりで、彼は路地裏に歩みを進めた。泊まりになるから、と一週間分の備えを詰めたトランクを携えて、フレデリカは慌てて追った。

ジメジメとした路地裏の地面に、危険極まりない銃火器弾薬を詰め込んだトランクを置いて、裏口であろう扉にサイファアは手をかけていた。

「開けゴマ」
Open Sesame

扉が瞬く間に黒く染まりきったかと思えば、開け放った瞬間、そこは外に通じていた。薄暗さはあるものの、石畳の地面がわかる明るさは、太陽のみが生み出せる自然光に違いない。

『抜け道』……………ですか？』

「(名答)」

魔の超機関アーコロジーであるアーカムに怪奇は絶えない。

上層やフレデリカの住まう十二層あたりの中層は大人しいものだが、下層近くともなれば“人ならざるもの”の目撃例や、スベクター悪霊に騒ポルターガイスト霊の被害さえある。

そういったものが都市伝説的な扱いを受け、人から人に伝えられるときもあれば、新聞の片隅を賑わせるオカルト記事にもなる。

『抜け道』もその一つだ。大学在学中に聞いたことだが、アーカムの一握りの人間はアーカム中を自在に行き来できる特別な場所を知っている。そんな話であった。

「本当に、あるものなんですね……………」

“ある”というより、適当な扉を『抜け道』に作り替えるのさ。ただ外にでる扉は屋外にあるものもいいし、何かの建物に行きたいときは屋内の扉がいい。扉の向こうの状況が分かるものでもないし、何より目立つものだから、割と使い勝手は良くないんだ」

「……………もしかして、私も使えたりしますか？」

ふうむ、と顎に手を当てて考え込む仕草。

小首を傾げているのが、巨軀には似つかわしくなくて。フレデリカは内心「可愛い」とまで思ってしまった。

「結構コツがいる技だが………教わりたいなら教える。今はちよつと無理だが」

「………できちゃうんですね」

「悲しいことにな」

ベアトリクス的一件以来、普通の人間から離れてしまったのは自覚しているが、こうも目に見える形で突きつけられると心が痛むほどに噛み締められる。

でもヘンリエッタを助けられた。

きっと以前のフレデリカであれば、引き金を引くさえ出来なかつたはずだ。

「さ、早く行くとしよう。目立つ技なんぞな」

「はっ」

そのまま手を引かれて、下層に通じた扉をくぐった。



液体の沸き立つ音。

ごぼり、ごぼり。

天秤の揺れる音。

ゆらり、ゆらり。

歯車が回って軋む音。

キリリ、キリリ。

そこは実験室。人倫と道徳をあざ笑い、そして冒瀆する狂気の場。天井の滑車とロープと鉤には、その毒牙にかかった哀れな人々がいた。

年齢に人種も性別も問わない人々が、少なくとも見積もつても五〇は吊り下げられていて、どれも防腐処理のされた死体だ。

薬品の実験体になった者がいる。

全身の七割近くがグズグズに爛れた者。

目も鼻も口もなくなつて、のっぺりとした顔になった者。

全身の筋肉が異様に膨張した者。

数式機関を埋め込まれた者がいる。

全身を鋼で覆われた、異形の騎士と化した者。

肋骨を飛び出させてでも機関を埋め込まれた者。

鋼の腕を背中に八本も植え付けられた者。

吊り下げられた死体は主の狂気を如実に、そして雄弁に物語っている。口は利けずとも死者は肉体の痕跡で、死した瞬間を知らせるのだ。

「これも失敗作だ」

落ち窪んだ目を爛々と光らせて、老いぼれた狂碩学は齒噛みする。手には注射器、中には赤黒い液体で満たされている。

半ば投げつけるように近くのネズミに注射した。暴挙とも言うべき行いだったのに、液体はネズミの血管を通って全身を駆けめぐる。

”かたち”が崩れていく。

青黒い粘液と化して、ネズミは際限なく広がっていく。

表情を一変させて、フフと微笑んだ。

老獪な笑みが場を黒く染め上げているようだった。

「人間もこれで少しはマシになるだろうに」

狂碩学が狂碩学たる一面がにじみ出ている。

彼に他人がどのように映って、どう認識されているかなど思い及ばぬことだ。世界を7日で作り上げた神も彼を創造したことを悔やみ抜くだろう。

だから彼にとつての「マシンになる」ということが、人類をいかなる方向に導くのか身の毛もよだつことだ。多くの人間は先頭を取る者には人格者を選ぶ。歴史上、狂人と呼ばれた者がその座に収まる時は盤石の引っくり返るような転換点の時だけ。

アーカムは岐路に立たされた。
歴史的にも、生物的にも。



じんわりと湿気を孕んだ風が柔肌をなせて、フレデリカの背筋がぞくりと震えた。

——アーカム下層。

この魔都において一年間の死亡者は50人から100人といわれている。だが、それは中層から上層までのデータだ。十分に多いといえるデータだが、下層の惨状は想像を絶する。

実際の死亡者は90人前後といわれているが、これは死ぬことさえ許されない犠牲者がいることを物語っている。

区画支配者の歪み切った倒錯性癖を満たすために、常識の世には出られないように作り変えられた者がいる。

頭脳が優秀な者は妖技術によつて脳だけにされて搾取される。

変異生物のエサになる者もいる。一思いに食われず、ただの娯楽として食われることさえある。

そんな魔の領域に立っていることが、改めてフレデリカを戦慄させた。

「ついに……来てしまいました」

「無理もない。誰だつて好きで下層に行くヤツはいないんだ。それだけ危険な場所というわけだ」

「でも……ここ、空気がまるで違う。今まで生きてきた全てが根こそぎ否定されているような……ここは、来てはいけない所です」

「初めて来て、そこまで気付ければ御の字さ。中層の腕利きでも余所見したら死ぬところだ。場所によつては空間が歪んでるところもあるし、極稀に時間さえ歪む。常識なんて生易しいものが通用すると思うな。ここが本当のアーカムだ。まずガンスミスのところに向かおう。本命の場所は後だ」

まだ昼にもなっていない、早朝から少し過ぎた時間帯にも関わらず、下層は異様に薄暗い。別に煤煙が濃いわけでもないのに。

まるで光が自ら退いているようで、ここが闇に占拠された領域のように感じられた。そして移動を開始した二人にまわりつくような視線がきた。確実に獲物を見る視線だ。

薄暗がりの石畳、ひしめき合うように建てられた住居の間から、絶えず浴びせられている。風に乗って、その主の体臭が鼻を突く。

「フレデリカ、銃を抜け」

言われる前に二挺は手の中にあつた。

「^{フレデター}食人者が来る。少なくとも15はいるぞ」

奇怪な鳴き声を聞いた。生物が出せるはずのないような、金属が激しく擦り合わすような声だった。

サイファーに向かって踊りかかったのは、禿頭の、異様なほど肥大化した筋肉で武装された、“人だったモノ”。

元の食生活を忘れ、同法を食らうために著しい進化を遂げた元人間。それが^{フレデター}食人者。彼らの食欲は、今サイファーとフレデリカに向けられているのだ！

「僕を食いたきや、もう二回りくらいデカくなってから来い」

食わせろ！

食人者たちの悲願に真つ向から否定を突きつけるように、いつの間にか握られていた

『Howler In The Moon』が轟いた。人を食らうために歪な進化を遂げた強靱な肉体が、七〇口径もの巨弾で見る影もなく破壊された。

さらに3人、弾丸さえ超える速さで襲い掛かった。

フレデリカも動いた。初速も威力も申し分ないM2アナイアレイターを食人者に撃つ。

避けられないことは必定だ。長さを変えることなく45 Long Colt弾をリムレスにした45 ALPよりも、三割ほど効力のある弾丸だ。口径と弾頭重量で劣るのを、弾丸の初速を早くすることで補っている。下手なライフル弾より速いのだ。

それを食人者はわずかに首を傾けて避けた。

驚くことなく第二弾を素早く撃つ。

動揺している隙があるなら、即座に反撃に出る方が建設的だ。

だが食人者は弾丸を噛み啜えて止めたどころか、さらに咀嚼し始めた。

流石に予想外の行動を、食欲で満たされていながらも麻痺していなかった動物的本能は逃さない。

豪拳が唸って、フレデリカに迫りくる。

食人者の脳裏には、目の前の少女と違っていい美しい女を好き放題犯して喰らい尽くすことしかない。

だからこそ気づけなかった。

目の前の四五口径弾に。食人者の獰猛な顔形に、ハッキリと驚愕が浮かんでいた。あつけないほど、あつさりと頭の右半分を吹っ飛ばした。

「やつぱり、一筋縄ではいきませんか」

「ちよつとでも油断すれば死ぬ。さつき吹っ飛ばしたヤツみたいにな」

もうサイファーは話しながら、七匹目の上半身を跡形もなく吹っ飛ばしていた。規格外の巨銃から放たれる砲撃に等しい銃声にも、驚かなくなるくらいには慣れた。

変わってしまった感性に嘆息しながら、フレデリカはもう一匹に拳銃弾の猛射を浴びせる。

人外の瞬発力と神経反応速度故に音速の数倍強がやつとな拳銃弾では、食人者相手では不利極まりない。相手するには、もっと火力と範囲のある火器が必要だ。

「散弾銃をください！」

「受け取れ！」

ソードオフされたウインチェスターM1912がサイファーから投げ渡されたのを、フレデリカはしっかりと捉えていた。

ポンプ部分をしっかりと掴んで、そのまま自分に引き寄せる勢いを利用してポンプする。

初弾装填完了。

グリップを握りながら、そのまま自分の背後かつ斜め上の方向に銃口を向けた。食人者の大口の中にウインチェスターの銃口が突つ込まれていた。

「そんなに大きな口を開けていては、とてもみつともないですよ」

引き金を引いた。爆発でもしたように頭蓋が一気に吹っ飛んだ。

右手にM2アナイアレイター、左手にウインチェスター。

そのまま前進しつつ、発砲する。四五口径は牽制として撃ち、本命の十二ケージのOバックショットが食人者を捉える。ソードオフされているだけあって散弾の広がり方も一線を画している。

だがM1912はポンプアクション故に一発ごとに、フォアエンドを前後させての装填動作が必要になる。

その問題をフレデリカは拳銃を撃ちながら牽制して時間を稼ぎ、その間にフォアエンドを掴んで上下に振ってコッキングする。拳銃のリロードは散弾銃を脇に挟んで、M2とアーカム45をローテーションしながら素早く装填する。

「残りは何匹ですか!？」

「3匹だ。気を抜くなよ」

ソードオフされているだけあって取り回しは格別だが、いかんせん射程と装弾数が犧

牲になっている。

弾切れしたM1912を放り捨て、二挺拳銃に切り替える。機関銃もかくやと言えるほどの連射は正確に食人者の回避を阻み、命中弾を確実に撃ち込んでいく。

それから二分もする頃には食人者は全て倒されていた。

「……が……下層」

「今のヤツらに喰われるようじゃ、ここでは数分と生きていられん。さっきの様子を見る限りじゃ、僕がいなくても一週間は大丈夫そうだがな」

「喜んでいいものなのか、とつても微妙です」

「笑えばいいんじゃないか？ そういうときは」

「………ははは」

乾いた笑いが虚しく漏れた。

普通じゃない、とサイファーと過ごすようになってから思うようになっていたが、それも序の口であった。

人の理を超えた下層の怪物を手にかけて、改めて実感してしまった。ベアトリクスを射殺したときに比べれば浅いが、さらに戻ってこれない領域に踏み込んでしまったらしい。

「……案内人が来たな」

いつの間にいたのか。

サイファアの視線の先に異様な男がいた。背丈は一七〇センチ後半くらいで、ジーンズとブーツだけ履いて、上半身は裸だった。

そして剥き出しの逞しい肉体は、色とりどりの金属光沢が頭まで覆っている。彼は禿頭だった。その姿に反して人当たりの良さそうな顔立ちであった。

「お久しぶりい、何年ぶりだよサイファア」

「変わってないようでも何よりってヤツだ。アイツの使いか？」

「デリンジャーの旦那はアンタに会えるのを心待ちにしてる。早く顔見せて安心させてやれ」

「相変わらずの悪人面なのかなあ？」

「そこだけはいつまでたつても変わっちゃいないよ」

風体の異様さに気圧されることも、訝しむことも恐れることもなければ、何も問題なさそうに男と話し込み始めた。

二人の間柄は親しいのだろう。古くからの知り合いというものだろうか。見た目だけで判断すれば、友人という間柄というには怪しいワイアットもいれば、見た目だけなら同年代のフランクだっている。一概にどうということもできない、そんな微妙な関係の人間がサイファアの周りには多いような気がした。おそらくフレデリカもその中に

入っているのだろう。

そうやって観察していたせいかな、ふと男がフレデリカの方を向いた。顔から瞼まで金属光沢を放っているのに、瞳はきちんと水晶体もあるような眼であった。いや、どこか違和感がある。上等のビスクドールにでも使うような宝石や大理石に似た冷たさがある。それでいて柔和な笑みを浮かべてフレデリカを見つめていた。

「自己紹介が遅れたな。俺はDMと呼ばれている。ちよつとワケありだな。本名は名字から名前まで忘れてしまった。DMは俺の手品からついた異名でな、ちよつと見せてやるよ」

そういつてDMは足元にあるネズミのような生物——胴体は限りなく近かったが、足が六本、尻尾が二本で額にも目があった——を掴み上げると手刀でも叩き込むように反対の手を振るった。

ネズミモドキがぐしゃりと落ちて、そのまま石畳の上でもがいている。起き上がれないのも無理はない。

小さくか弱い命は真つ二つであった。断面図のように、骨格から内臓に至るまで形を損なうこともはみ出ることもなく、半分にされたままネズミは生きている。血潮を送り出して、そして流れ込む心臓も半分になって内部を露出させながら鼓動している。

「この下層ネズミは生物学的にも医学的にもきちんと生きている。血液は問題なく循環

し、脳味噌は植物状態でもなければ死んでもいない。ちゃんと自分の状況を判断していられるくらい正常に活動している」

「でも、ま、真つ二つになつて」

「そう見えるだけだ」

サイファーが割つて入つて解説する。

「血管一つずつ、それも把握できない幾千幾万もの毛細血管に至るまで空間と次元を歪めて開けた『通路』とも言ふべきもので繋がっている。これを解いちまえば下層ネズミは真つ二つになつて死ぬ。DMと呼ばれてる理由は次元と空間を操れる次 Dimension Man 元人間だからなのさ」

これもアーカム下層の脅威とも、神秘ともいふべき存在であつた。

イギリス本土の碩学を招集して協議したとしても、その数割も理解できるか怪しい次元や空間の概念を本能的に理解し、人知を超える魔技ともいえる御業を自己紹介がてらに行える。神の力とも言つていいのかもしれないが、それが表に出ないのがアーカム下層の恐ろしさなのかもしれない。

そうだとすれば——アーカムには次元と空間を指先一つで動かす力以上の恐怖があるのかもしれない。

それは森羅万象を自在に操る全能者の力だろうか。それとも森羅万象を自在に砕き

尽くす絶対なる破壊者の力だろうか。どちらにせよ現世には受け入れられない、最悪の力だろう。

ハイリスク・ハイリターンでは済まない分の悪い賭けに出る者など、アーカムの住人達を除いてはいなくなってしまうのかもれない。だからこそ内での争いは絶えることはなくても、外部からの侵略者ともいべき存在は滅多にいないのだろう。ベアトリクス是件は滅多にない貴重なケースの一つとしてカテゴライズされ、ほんの一時の間だけアーカム・タイムズを飾るだけ。

気分の良いくない奇跡を目の当たりにして、一時の間言葉を失っていたが温もりを持った固い感触が肩を叩いたことでフレデリカは我に返った。

「あんまり長い間口をぼかんと開けて固まられてもな」

「そ、その、なんか凄すぎて。なんと行っていいのか、わからなくなってしまった」

「僕は妥当な反応だと思っただけだ」

「サイファー、お前の時は俺が驚かされたがねえ。特製の次元防御を貫通して砕かれた上で、腹を長い刀でぶっ刺されたからな」

なんか凄いことを聞いた気がする。

というより聞きたくなかった。最初は殺し合うような仲だったのか。どうも、この二人だと掘れば掘るだけ、物凄い過去のエピソードが出てくるのではあるまいか。

「貴重な初体験だったじゃないか。あと長い刀じゃなくて、いい加減きちんと野太刀と言ってくれよ。何回僕に言い直しを要求させれば気が済むんだ？」

「諦めるまで続ける。それに長い刀と言った方が楽だ」

「アレにはすごい思い入れがあるんだ。もう少し日本文化を学べ」

そのまま日本の料理はうまい、トーフは素晴らしいツマミだ、ヨシワラは一回でいいから行け、と話し込みだした。サイファーは相当日本文化に傾倒しているらしく、DMもタジタジになりながら相槌を打っていた。

そうやって話し込む二人の姿は、何よりも男臭かった。

主義やこだわりの違いから、見ている女としては下らなくても、男たちにとっては沽券に関わる問題なのだろう。ただ童心に帰って横道に逸れ抜いた二人の熱弁に、やれやれとなつてしていると不意に双眸が告げた。

——突発的な空間歪曲を観測。

——安全のため自動防御を任意発動。

急に視点が反転した。

内臓を一気にひっぺ替えされるような、急激な酩酊感とも高揚感とも言えない感覚で

あった。そのまま視点はフレデリカを中心に回り始めたようで、そのまま景色は色とりどりの絵の具を掻き混ぜたように極彩色が暴力となつて襲う。

双眸の急な激痛に目を閉じたとき、意識もまた闇に閉ざされたのであった。

悪人、黄金の瞳は夢界を捉え

目を開けたら銀灰色の双眸と目が合った。そして足はブラブラと宙をぶら下がっている。俗に言う横抱き、お姫様抱っこというものであった。白馬の王子様ではなく、サイファーの場合は腕利きの無法者ガンマンと言った方がいいのかもしれないが。周りは別の住宅街で、相変わらず暗かった。どうやら袋小路にいるらしい。

「気が付いたか？ DMの空間移動だ。あの野郎は断りもせずにかますから心臓に悪いんだ。フレデリカはなんか凄いいことになっているし」

瞳が刺されたように、焼け付いたように痛んでいる。そつと触れるとぬるりとした感触がした。

赤い、紅い、赫い、血だ。

大粒の涙のように鮮血が双眸から流れ出ている。

荒事屋稼業を手伝い初めてから怪我はそこそこにあったが、覚えもないのに眼からの出血という異様な負傷は初めてだった。

意識を失う直前に双眸に痛みが走った覚えはある。”瞳”の通告に『自動防御』というものを発動するという内容もあったことも。それが眼球からの出血にどう繋がって

いるのかフレデリカには知る由もないことだった。

「すいません。はやく拭^{ぬぐ}ってしまおうので」

「なんか体調の変化があるなら言え。無理して倒れられても、僕としても心配するし困る」

出血はすぐに止まった。

白いハンカチが一枚ダメになる量だったが、御の字と思うことにした。

体調は問題ない。元来、病気の類とは無縁だし、月のものの負担だって軽い方だし、今は来ていない。その分、精神的な部分がかかなり脆い、なんてことを思ったことは幾度もあるのだが。人間というものは、どこかしらの部分でバランスをとっているらしい。

「DM、ウチの可愛いフレデリカがかかなり悲惨なことになったけど、何か釈明や言い訳の類はないのかな？」

「ふつうは謝罪を求めるのが筋と思うんだが、そこんところはどうかなんだよ」

「謝罪したって事実が変わるわけでもないだろうに。僕の言いたいこと……というよりやりたいことはわかるだろう？」

「全力で遠慮……オブウツ！」

サイファーの鉄拳がDMの顎に炸裂した。

並の格闘家より重いと断言できる拳が綺麗に入ってる。しかも、割かしマジな力加減

で腰が入っている。常人だったら脳震盪を起こして二日は目を覚まさない。そもそもかなり身長差があるのに、それを補えるだけ姿勢を低くする技術は何かしらの格闘技を匂わせる。

さんざん推測予測を立てたが、じゃれあいの力加減じゃなかった。少なくともフレデリカの基準では。

それでも数歩よろけただけのDMを見て、いつもこんな感じか、と納得できた。

男の世界というものは、多分、いつまでも理解できないと改めて思った。

「悪かったな、お嬢さん。いつもの感覚でやっちゃった」

「いえ、もう済んだことなので。気にしないでください」

ほう、とDMは嘆息する。

そのままサイファアの肩を叩いて、少し離れた場所でフレデリカに背を向けるように立って、聞こえないような小声で囁いた。

「アンタにはもつたいなさすぎる女だな……………ゴヘブウツ！」

「ちよつと黙っていようか。その手の話題で、僕がどれだけ冷やかしにからかいを受けたか、わからないわけじゃないだろう？」

「ちよつと礼節を欠いたようだな」

「親しき仲にも礼儀あり、だ。覚えておきなよ」

「その諺、そっくりそのまま返してやるよ」

最後、二人はニヤツと笑い合う。どこかしら狂気の混ざった清々しい笑顔だった。

サイファーがフレデリカの方に向き直った時には、DMは文字通りにフェードアウトしていた。全身が透き通っていき、最終的には消え失せてしまっていた。

どこか菌痒そうな表情も、彼女の方を見る時には普通に戻っている。いや、実力行使請負業としてのポーカーフェイスである不適そうな笑みが少しだけ混じっているのは、何かしらの隠したい事柄でもあるのだろうか。

多分、聞いてみようものなら面白いほど不機嫌になるだろうし、そこまでして聞き出したいことでもない。きっと男だけが分かり得る世界かもしれないし、アーカム下層の恐ろしい事情についてもかもしれない。

「悪いな、二人だけで話し込んで」

「大丈夫ですよ。見ているだけで楽しませてもらいましたから」

「楽しんでた？」

「はい。お二人の仲というものが、はつきりわかるくらいに」

「そうなんだよ。憎めないやつだな」

テンガロンハットを直しながら、やれやれといった体であった。

そのまま住宅街の袋小路の中でも目立つ大きさの建物、その扉を乱暴にノックした。

その上には文字が擦り切れた看板があり、かろうじて『Gun Smith』の一文が判別できることから、ここが話の銃工の店なのだろう。

普通なら家主が怒りに任せて飛び出してきそうだが、沈黙が圧政を布いたように気持ちが悪いほど静かであった。サイファーはこともあろうに、並の扉なら木端微塵に出来るような固いブーツと脚力で、思い切り扉を蹴つ飛ばしたのだ。

思わず小規模な地震でも起きたのかと言わんばかりの揺れが起きたが、家主が飛び出してくるようなことはなかった。それどころか扉には傷一つとして存在しなかった。

「こりやダメだな」

完全に諦めたような表情だった。いつもは、さらに踏み込んでいくのに、少しだけ諦めが早すぎる気がしないでもない。

しかし、お手上げなのは変わらないのだろう。扉から踵をすでに返してしまっていた。

「完全に引き籠もっちゃまってる。こうなると僕にもお手上げだ」

「お手上げ？」

「見せてやる」

そう言つて取り出したのは愛用の巨銃だ。反動抑制のバレルウエイトを兼ねた、異様なほど太く重厚な銃身には『Howler In The Moon』の刻印が彫られ

ている。口径は七〇口径と規格外だが、サイファーは軽々と片手で取り扱って運用してのける。

その巨銃をマホガニーであろう扉に向けて撃ったのだ。

腹の底に達し、五臓六腑を震わせる轟砲が咆哮したのだ。

普通であれば木の扉など爆散したように、撃ち碎かれるだろう。

だが、それでも扉は壊れなかった。まるで巨銃の咆哮などなかったかのように、平然と無傷で健在していた。

「こうやって引き籠もっているのは、まだ完成してないからだな。あとでもう一回来よう」

「引き籠もってる?」

「ああ、作業に集中したいが為に、外界と遮断するどころか、ドアと外壁に窓で隔てて自宅を『一つの世界』として独立させる絶対防御を使うなんて、普通の発想じゃない。狂人の発想を、神の御業で叶える男なんだよ」

頭を抱えなくなった。

今まで以上に一線を画するほど規格外だ。ブツ飛び抜いている。

言葉の綾、比喩隠喩直喩、物の例え。

そのどれにも当てはまらない、言葉通りの事実とフレデリカの直感と金色の双眸が告

げる。

裏付けるようにフレデリカの視界は常人とは違っていた。何の変哲もないモルタルと煉瓦で作られた二階建てを、怪しく蠢く玉虫色に光る半透明の膜が覆っている。有機的でもなければ、無機質でもなければ、物質でさええない。おそらくは非物質ではあるが、エネルギーではない。何かしらの方法によつて作られた概念に近い何かだと双眸は告げていた。

それが建物を『一つの世界』として成り立たせる、概念的な境界線なのだろう。

境界線を砕くということになると、本質的には世界を一つ砕くのと同じことになるのだろう。いかに規格外の威力を示すサイファーのリボルバーであっても、通常弾を使う限り永遠に破る時は訪れない。

現状、銃工の店に入るには主が開けてくれるのを、待つしかなかった。

「お前さんの得物を取りに行きたかつたんだが、無駄足になつちまつた。格好悪いツたらありやしない。すまん」

目に見えて意気消沈した様子だった。

おそらくは身の安全も考えての事だったのだろうか。中層までなら余裕で通じるアーカム45とM2アナイアレイターの二挺も、この下層では無用の長物と言っている。下層で広く出回っている非合法的妖技術を用いた四連発ペッパーボックス・ピスト

ルの方が有用性がある。

オーダーメイドで作られた専用の銃であれば言わずもがな。

通用する武器に、扱いこなす技量があれば負けることは基本的でない。命を落とすことだって。

「いえ、気にしていませんから。そうなると次はどこに行くのでしょうか？」

「久しぶりに会う友人のところに、お願いを聞いてあげて、それを叶えてあげる」

「素敵ですね。それにしても血生臭そうな気がしますけど」

「今更になって言うことでもないだろう？」

いつものように不敵に笑った。

そこをクラクションの音が割って入る。高級そうな多人数が乗れるタイプの蒸気自動車だ。車体の色は黒で、昼間とは思えない暗さのせいでライトを点けている。

運転手は初老の男だ。仕立ての良い燕尾服を着込んで、モノクルをかけて、白髪交じりの髪はオールバックにしてまとめていた。

「サイファー・アンダーソン様、主デリンジャーがお待ちになつております。そちらの女性はいかがいたしましたでしょうか？」

「仕事上の大事なパートナーだ。連れていく」

「左様ですか。ではこちらのお車にどうぞ」

ドアを開けて招いてくれた。

所作の一つ一つに至るまで完璧な執事だ。もしかしたら相当裕福な人間かもしれない。まっとうな方法で収入を得ているのかは、ずいぶんと怪しい所だが。もしかしたら執事も裏の顔は殺し屋だったりするのかもしれない。

「二応、私はあなたのパートナーなんですネ」

「ん？ フレデリカが嫌なら変えるけど、それ以外に妥当な表現がなくてだな。僕のボキャブラリーというものは、思った以上に貧弱なのかもな」

「嫌ではないんです。ただ後ろをついていくだけだと思っていたのが、実はパートナーとして見てくれていたことが、少しだけ嬉しくて……ごめんなさい、変な話をして」
目を伏せて、口を真一文字に閉じたフレデリカを見て、そっとサイファーは耳も手で囁くように言う。

「いつそのことプライベートのパートナーになってみる？」

ボン、と音がして湯気が出る勢いで赤面した。耳も首も、開いたデコルテから覗く鎖骨の辺りまで赤くなった。

効果あり、と内心ほくそ笑む。

言葉も出ないほどの衝撃だったらしい。サイファーの方を見たまま、プルプルと震えるだけだった。顔から脂汗が出ているし、手も汗で濡れてふやけているだろう。

もつと追い打ちしてやろう、とサイファアの内で悪魔が囁いた。

「なんだ嫌なのか」

「そ……その、嫌なわけではなくて……でも！ プライベートなパートナーになるには、ちよつと時期尚早と言いますか、もつと段階を踏んで……うわあ！ 一体、私は何を言つて……」

「そんで最終的には新婚さんみたいに、僕の帰りにはご飯を作つて待つてくれると。あー、でも、これつていつもとあんまり変わらない気がするなあ」

そこでフレデリカの黄金の双眸が涙で潤んだ。

「……………いじわる」

そう言つて貝のように閉口して押し黙つてしまった。

やっぱりからかい甲斐というものがあると楽しい。天邪鬼なのか、そうやって無垢で初心な娘を弄んでいる。ただ踏み越えてはいけない線というものは認識しているし、その辺もわきまえてどぎつい冗談をぶちかましてやるだけ。水商売的な女や、媚びに媚び抜く娼婦連中の相手なら腐るほどしてきたサイファアにとつて、フレデリカのようなタイプは新鮮だ。

「僕の左手の薬指は空いてるけど……フレデリカはどうなのかな？」

「普通はあなたの方から……ま、また私は何を言つて……」

「サイファー様、お戯れもほどに頼みます」

執事の忠告があつて、フレデリカは心の底から助かつたと安堵した。

あのまま続けられていたら精神衛生上、非常によろしくなかつたことは明白だし、朝の考え事思い出してしまふ。冷水のシャワーを浴びて無理矢理にでも振り切つたというのに、思い出してしまつては台無しだ。

——嫌いというわけではないけど。

——好きと聞かれれば、ハッキリとは答えられない。

——なんだか、微妙だな。

友人に会えることが楽しみなのか、それともフレデリカをからかつたのが存外に楽しくて尾を引いてるのか、サイファーの表情は幾分か晴れやかそうだ。フレデリカとしては前者であることを祈りたい。

——でも、知らないことはいっぱいある。

——それはサイファーさんも同じのはずだけど。

——お互いが分かり合えていないのなら、そういうことには、まだ早いのかな。ならば今まで通りに付き合っていくことが最善だろう。

関係の変化は嬉しいことばかりではないし、その必要性もない。だから今は一緒にいるだけという程度の関係に留めておいて、どうするかはゆつくりと考えていけばいいと

決めた。女の勘、というものの存在にはフレデリカは懐疑的であった。

だから人間関係には慎重であった方がいいかもしれない。

今は急ぐ必要なんてないのだから。多分きつと、この先も。

「どうかしたか？」

座高でさえ見上げなければならぬほど高く、灰色のロングコートを纏った偉丈夫。

伊達で格好つけたようなテンガロンハットの鍔から、銀灰色の瞳が見つめてくる。

今自分が何よりも頼れる存在、サイファー・アンダーソン。

「いえ、なんでもありませんよ」

「……具合でも悪いのか？」

「そういうわけでは……ただ、これからもよろしくお願いします」

サイファーは何も言わなかった。

ただ無言でフレデリカの頭に手を伸ばして、無造作に撫で繰り回す。俗に言えば頭なでなでというもので、慰撫ともいうべきものであった。

なんだか複雑だ。嫌ではないけれども、フレデリカにとっては素直に喜べない事情がある。

「あの、私これでも二十歳越えてるんですけど……」

「ああ、ちよつとお前さんが若くて可愛いモンだから……」

「それって遠まわしに私が童顔だと言ってるんですね？ 一杯飲みたいと思ってクラレットを買おうとしたら、十六歳だと思われて一悶着ありましたけど……」

「す、すまん。まさかそんな苦勞をしてるとは思わなかった」

「いいんです、いいんですよ。だいたい年相応の見た目じゃないだけで、なんでこんな苦勞をしなくちゃいけないんですか。見た目で若く見られても交渉事じゃなめられるし、私の年齢で年下に見られるって完全に十代の子供にしか見えないと云ってるも同じですよ。そうやって割を食ってばっかりで、良いことなんてひとつもないんですよ」

思い切り地雷を踏み抜いたらしい。

フレデリカ・エインズワースはハイ・ティーンの少女である！ と言ってもいいくらいに童顔だ。サイファーがもう少し老けた見た目だったら、完全に親子として見られるくらいに。二〇代後半くらいの外見年齢が幸いしてか、どう深く穿って見ても年の離れた兄妹として扱われるだろう。

若く見られる苦勞は理解しているし、ちよつとぐらゐは慰めの言葉もかけてやれるかもしれないが、これも下手したら別の地雷を踏み抜きそうでやめた。案外、一か月近くもいれば、お互いの理解度も深まるかと思っていたが、そうでもないことをサイファーは痛感した。

お互いにわかっていることなど、未だ数多く、衝突がなかったことが不思議だろう。

すべては依存ともいえる二人の関係性ゆえに、フレデリカが何も言わない事だろうか。さすがにサイファーもいきなり下層に行くことになったのは、決して少なくない負担になっただろうという自覚はあるし、生存率を上げるためにも通用する武器を渡すために銃工の下に向かった。

まあ、結果は見ての通りであつたが。悪癖のからかつての遊びも出てしまったわけではあるし。気を許した相手だと癖のように出てしまう、直しようもない悪癖であつた。

ただ久しぶりに会う下層に住む友人は立場が立場なだけに、こつちから会おうと思つても会えないことがほとんどだ。花屋のベンジャミン・アルバーティンが服用したという麻薬の件で、ワイアットの手伝いをしなくてはならない。親しい友人であると同時に、困つた時には黙つて手を貸してくれる男だ。ベアトリクスとの件で暴れた時も揉み消すのに一役買つてくれた。別に表に出ると色々と厄介なだけで、フレデリカのためにやつてあげたのではない。女のためにそこまでやつてやるような柄ではない。

そういうことだから恩は返さなければならぬ。友人関係を保つためにも必要なことだが、ワイアットは報酬も出すといった。断つたが『規定だから』と言われて押し切られてしまった。それだけ切羽詰まるほどの事案だということか。

「到着いたしました」

その声と共にガーニーが鉄格子の正門の前で止まつた。

豪華な屋敷だ。正確な面積はわからないが百人くらい一人一部屋与えて住まわせることなど造作もないだろう。煉瓦とモルタル造りだが使われているのは最高級品なのは間違いなく、薄暗いにもかかわらず育った色取り取りの花が咲く庭には、パツと見ただけで三〇人くらいのスーツを着た警備がいた。

そのまま執事の案内でガーニーを降り、屋敷に通された。

だだっ広いエントランスを通り、広い応接室に通された。調度品は芸術的な者ばかりであったが、それに混じって無骨な自動拳銃や小銃が飾つてあるのを身震いしそうにするのをフレデリカは何とかこらえた。

それから十分ほど待っただろうか。

サイファーは気ままに過ごしていたようだが、フレデリカは人生で一番長い一〇分間を味わつた。口の中は乾くし、出された紅茶の味もわからなかつた。きつと良い茶葉が使われていただろう。

二人の男が入ってきた。一人は若い茶髪の男で、背中に帯びたトンプソン短機関銃を隠そうともしていない。見るからに悪人と分かる凶悪そうな顔つきで、背丈は一七〇センチ後半だった。フレデリカに好色そうな笑みを向けてウインクしていたが、すぐにもう一人の男にブン殴られてよろめいていた。

もう一人が問題だった。

人間として失つてはいけない何かがないような、腹の底まで一気に冷える眼差しをフレデリカに向けた。ハイライトのない瞳と言えはいいだろうか。黒髪の男で女子供が一発で泣くかへたり込みそうな顔つきで、背丈は一八〇センチ前半くらいだ。仕立ての良いスーツを着て、人をブン殴ったばかりなのに切り替え早く優雅に座った。

「久しぶりだな」

「シノギが忙しいと僕と会う暇もないのか？」

「これでも予定を無理やり開けたんだ」

「お前さんもワイアットと同じだな。忙しさのせいで険しくなっているよ」

「ファミリー一つ支えるには、並大抵の苦労じゃあ済まない」

二人は立場が対等らしい。

サイファーは一介の実力行使請負業を名乗る荒事屋で、相手は豪邸に住む男なのに、あくまでも親しげに対等の言葉遣いで話し込んでいる。若干、サイファーの方が立場が上のようにも見えたが。

「君のことは聞いているよ。フレデリカ・エインズワースだったかな。初めまして、ジョン・デリンジャーだ。このデリンジャー・ファミリーを取り仕切る立場で、ここ一帯の商業全ての元締めだ」

「ふ、フレデリカ・エインズワースです！ は、はは初めまして！」

「下層のギヤングにマフィアは、デリンジャーの傘下だよ」とんでもない男だった。

中層も治安が良いか悪いかと言えば、結構悪い方に入る。だが一線を画する下層の荒事や非合法活動にギヤングたちを取り仕切るとは。だから温もりを一切感じない、あのような眼差しになるのかもしれない。

「ひとまずは葉巻でもどうだ」

「おお！ 最近吸ってないんだ」

「彼女に氣遣って、か？」

サイファーは何も言わず、一本葉巻を摘まむ。デリンジャーは何も言わなかったし、無論咎めることもなかった。そのまま差し出された長軸マッチで火をつけると、ぷうつと紫煙を吐いた。デリンジャーも同じように一服する。

若い男の方がフレデリカにも勧めたが、やんわりと断った。喫煙したことは一切ないし、これからすることもないだろう。恩師であるバベツジも『煙草は苦しみを煙に巻いてくれるが、吸い過ぎは自分も煙に巻く』と語っていた。

サイファーが喫煙者なのは知っているが、自宅で吸っているのは稀だった。だいたいは自分の部屋で吸っていたり、外出先で吸っているのだろう。ベッド脇の小さなテーブルにある灰皿に吸殻が有ったり、愛用の灰色のロングコートには煙草の臭いが染み着い

ている。

フレデリカの前で吸うことはほとんどなかったのだ。

優しいのか、天邪鬼なのか、気遣い一つに気付く度にわからなくなってしまう。

「ベンジャミン・アルバーティンのことなんだが」

「深刻そうだな」

「わかるか？」

「眉間のしわが、いつもより多く見えたからね」

困ったようにデリンジャーは頭を掻いた。組織の長たるものであればポーカーフェイスは必須なのかもしれないが、普段は不敵な笑みを浮かべているサイファーには見抜かれていた。別段、そういう能力があるわけではなく、ただ親しみのある友人の異変には目敏く気付いたということだろう。

「あいつは俺の女の一人に手を出した。相当ひどく犯られたらしくてな。行為の内容とベンジャミンへの罵詈雑言を綴った遺書を残して、口に銃を突っ込んだ。四五口径だったのか顔はほとんど残っていないかったよ」

「個人的な感情もあるだろうがメンツも関わってくるな。デカイファミリーのボスが自分の情婦に手を出されてぞんざいにされた挙句、情婦が自殺しちまったとなれば威信にかかわるぞ。早めに報復するなり、手を打つべきだ」

「もう殺し屋は差し向けたよ。俺の女に手を出す前から、ベンジャミンはたくさんの女を囲っていたらしい。噂じゃヤバイ薬をやつてるともな。そこそこの腕利きを差し向けたはずだつたんだが………」

「返り討ちにされた？」

「ずん。」

空気がそんな音を立てて押し掛かった。

首をかしげて聞いたサイファーに対し、若い男が莫大な殺気をぶつける。一人分ならまだいい。それが部屋の取り囲むように少なくとも三〇人分もまとめて、バンと音がしそうな強さでぶつけてきたのだ。

フレデリカはここで、自分がデリンジャー・ファミリーという一つの巨大な怪物の口の中に飛び込んでしまったことに、たつた今気づいたのだ。全身を冷汗が包む。恐怖で叫び出したくなるのを必死になって抑え込む。それは本能的な恐怖だ。

恐れを見せた瞬間に、間違いなく喰われる。

「よせ」

その声で殺気が一斉に鎮火した。

デリンジャーの一喝で、今にも飛び掛かりそうだった若い男は部屋の隅に退いた。

「その様子を見る限り本当らしい」

「精神処置を受けさせておいたのに、自宅で明らかに自殺と分かる状況で死んでいた。ワイアットの頭を悩ませているヤクの件で手伝ってほしいなら、俺の頼みも聞いてくれ。」

「いいさ、ギブ・アンド・テイクだ。僕の専門な気がしてならない」

「ここから一番近い所のホテル、その最上階の“特別なスイート”を取っておいた。しばらくはそこを使ってくれ」

「僕のアレは置いてあるのか」

「案内する」

立ち上がって歩き出した二人に遅れないよう、フレデリカも駆け足気味に追う。サイファーはともかく、デリンジャーも長身の部類に入るせいで歩幅の差は決定的だ。身長が一六〇センチちよつとしかないフレデリカでは追いつくのも大変だが、サイファーは部屋を出てから歩幅を合わせて歩いてくれた。

来た道に戻ってエントランスから外を出て、外の庭を通って着いたのはガレージだった。

多種多様な蒸気自動車ガが選り取り見取りで並んでいる。流線型をした速度を追求したモデル、車内を広くとったフレデリカたちが乗ってきたタイプ、装甲を施しブローニング重機関銃を搭載した戦闘用モデル。まるで見本市と言っているいい四輪車たちの中に、

一つだけ異彩を放つものがあつた。

それは鉄の馬だつた。複雑に絡み合うパイプの中に蒸気機関と思わしきエンジンがあり、タイヤは二つしかない。市民の足として自転車はそこそこにあるが、エンジンを搭載したものは存在しない。乗員の安全性を考えた結果、危険すぎるという理由で動力二輪車の開発はなかつた。だとすれば存在しないはずのものが、目の前にある。

「アインヘリアル社製、蒸気式動力二輪車スレイプニール。最高速で乗りこなせる人間は下層でも珍しい。加えて数式機関式の加速装置まで仕込んであるとは、とんでもない暴れ馬だな」

「こつちの方がガーニーより好きなんだ。フレデリカは後ろに乗つてくれるか？」

もうサイファーは座席に跨っている。

久しぶりの乗るせいだからか、見るからに楽しそうな顔をしている。

フレデリカだと跨るのも一苦勞だし、風で膝下丈のスカートが捲れないように気を付けないがサイファーの後ろに陣取つた。でも少しだけ不安定な気がしてならない。

「あの、あなたに掴まってもいいでしょうか？」

「はい」

快い返事が返ってきたので、背中から抱きしめるように掴まつた。腕を腹に回したとき、大きな体が震えた気がしたがフレデリカは気に留めなかつた。

サイファーは不意に来た背中中の感触に反応してしまった。オーバー九〇センチの爆乳が、思いつきり形が変わるくらい背中に押し付けられている。女性関係が一時期爛れ切つて千人切りなんてレベルでは済まない彼でも、ご無沙汰が長いこと続けば爆乳一つでも身じろぎしてしまう。

「それで、どちらに向かうんですか？」

「あー、さっきの銃工のところさ。多分、もう完成してるんじゃないか？」

なるべく内心の動揺を出さないように、サイファーは落ち着き払つて答える。

ちよつと早すぎるような気がしなくてもないが、そんなことなどお構いなしにサイファーは二輪を発進させた。体格相応の三メートル近いモンスターマシンを器用に駆つて、アーカム下層の薄暗く無音の住宅街を疾走する。

途中、食人者たちの集団と出くわしたが、道の脇に積まれていた木の板と木箱をジャンプ台替わりにして五メートルも飛んで振り切った。

本日二回目の銃工の家の前だ。

フレデリカの双眸はさつきまではあつた障壁が消え失せていることに気付く。おそらくは今度こそ入店できるはずだ。マホガニーと思わしきドアを取り付けられたノックカーで叩く。

何の仕掛けもないのにドアがひとりでに開いた。

サイファーはずかずか入っていったが、フレデリカは恐る恐る歩みを進める。

「ホーレス・カーター！　なんできつきは開けなかった」

「きげんよう私はホーレス・S・L・カーターだ。君がここに来たのは何のようかな？　件の少女だけを寄越せと……言つた覚えがあつたようで全くないな」

言葉では言い表しがたい丸メガネで初老の男が、銃を所狭しと並べた店内にいた。

なにか物凄い違和感をひしひしと感じるのだが、その正体にフレデリカは気付けないままだ。黄金の双眸は彼に何の反応も示していないし、他に変わった点があるとしたら右手が普通よりも二倍以上は長い、絶えず蒸気を噴き出す鋼の腕であつた。

彼こそがサイファーの巨銃を組み上げた男、ホーレス・S・L・カーターであつた。

「おお、実に見目麗しいお嬢さんだ。縞瑠璃の城から家出してきた、とんでもないお転婆姫のようだ。だが君の居場所は別にあるようだから、彼女ではないようだなあ。このお嬢さんの銃はそのケースに置いてある」

ホーレスの鋼鉄の指がカウンターのの上にある金色のケースを指さした。隣には黒いケースが置かれている。

サイファーは動かなかつた。だからフレデリカが動いた。

これから自分が使う得物だから、開ける権利は自分にあるし、義務もまた然りかもしれない。意を決して留め具を外し、蓋を開け放つた。

二挺の銃が鎮座していた。

一つはマウザーC96をベースにしたのだろう。全長は四〇〇ミリ近い。グリップを握り込むと、パズルのピースがかちりと填まるようにしつくりとくる。弾倉は再装填を重視した着脱式で、銃身は放熱を効率的に進め、フルオート射撃による反動を抑えるために肉厚になった上にバレルウエイトも兼ねた放熱ジャケットが装備されている。そこには『All In One』と刻印がされている。

もう一つはコルトM1911がベースであった。こちらも全長が四〇〇ミリ近い。握りやすさを重視したのかシングルカラムだが、装弾数の確保にエクステンド・マガジンを使って対応していた。スライドは激しい動作を考慮してか肉厚強化され、銃口には格闘専用のごついスパイクのついたコンペンセイターが装備されていた。こちらにはスライドに『One In All』と刻印されていた。

黒い革のケースには二挺の弾倉が収められていた。『All In One』と刻印された銃用の着脱式二〇連弾倉と、『One In All』と刻印された方の十二連発弾倉に三〇連と思わしき円筒弾倉ドラム・マガジンまで。正直、ここまでの代物が出来ているとは露ほども思わなかった。

「気に入ったか？」

「少なくとも、お前の銃よりは長く手間暇かけて製造と組み立てと調整をしている」

「この気狂い性差別者め。この借りはきっちり返してやる」
「私のどこが気狂いなんだ」

「……ああ、そうだったな。お前はそういうヤツだったよ」

「デカイ図体でちよこんと両手ホールドアップを上げる。お手上げの合図だった。

今までフレデリカの会ってきたサイファアの知己は、忘れがたいほどに個性的であった。だが目の前の銃工は常軌を逸していた。先ほどまで会っていたジョン・デリンジャーでさえ、まだマシンな方に思えるくらいに。

「手に……すぐよく馴染みます」

「当然だ。お嬢さんの身体に合わせて作ったんだ。だが体の置き差がよくわからなかったのな、さつき来た時に調べ上げさせてもらったよ。身長は一六一センチ、スリーサイズは上から九五、五六、八五だったか。足のサイズは二四センチ。体重は……」

「うわあああああああ！」

いきなり慎重にスリーサイズに足の大きさまで、一気にバラされた。

彼の言ってることから、先ほど来た時に家の中から見ていたのだろうか。いや、あのときフレデリカの黄金の瞳は、家一軒を世界から隔絶し、一つの世界として成り立たせる障壁を捉えていた。これで銃工ホーレスにまつわる謎が、もう一つ増えてしまった。

ただ渦中の本人はサイファアの鉄拳を脳天にもらって、苦悶の表情を浮かべていた

が。

それも気にならなくなるくらい、手に取った二挺はよく馴染む上に軽い。だが金属には疎いフレデリカが指でなぞっただけでも、スライドや銃身の合金が普通とは一線を画するほどの強度を有していることはわかるのだ。

「これは……素材はいつたい何を？ 普通の金属にしては、やけに軽い気がします」

「ズーグ族の住まう魔法の森から出る湧水で鍛えたタングステンとチタンの合金に、主要な機関部にはレン高原から採取した鉱石で作った特製の鋼を使い、グリップパネルの木もレン高原にそびえる木々の中から百メートルを超えるものを選別して一から削り出した。おかげで弾丸は中層や本土の市販品でも、弾頭や装薬の構造を変性させて下層用の威力へと引き上げる。これからの一生でもこれだけのものは二つと造れん。『AlI In One, One In AlI全にして一、一にして全』なる至高の二挺だぞ。まったく女のために重労働させて、三か月は夕映えの都で休ませてもらおうか」

フレデリカの内を未知と混乱が埋め尽くす。

聞いたことのない地名に種族。にもかかわらず感じた既視感が激しく揺さぶつてくる。知らないはずの単語なのに、どこか聞き覚えがある。

「大丈夫か？」

不意に肩を叩かれた。サイファアの大きく、たくましい手だった。

「顔が青いぞ。まさか……カーターの言うことに覚えがあったか？」

「……はい、知らない単語なのに、どこか聞き覚えがあつて……」

「僕も初めてはそうだった。何度も疑つてかかったことがあつたが、カーターのヤツは狂つてゐるからな。たつた五分間の間でも言動や記憶が安定しない。銃を作つてやつた人間なら、きつちり覚えてるんだが」

今になって思い返せば、義理の両親から自分がどうやつて養子になつたのか、その経緯を聞いていゝなかつた。幼少期から祖父に引き取られるまで、いつも気難しげになつてゐる両親の機嫌を損ねないように振る舞つてきた。

それでも愛情は欠片もなかつたし、それどころか関心さえなかつた。

だから、カーターの言葉に既視感を感じた時、今更な話だが出生を知りたくなつてきたのだ。この狂気なる銃工がいかなる人生を送つてきたのか、そこに出生のヒントがある。そう思つたつ時だった。

視界が一瞬で白く染まつた。

フレデリカは銃工の店にいなかつた。彼女は全く別の場所に立っている。

そこは草木の茂る高原。風が吹き抜けては木々に草原を揺らす様は現世と変わらぬが、ここが確実に現実の世界ではないとフレデリカは断言出来た。彼女は一種の視界となつてゐた。人が夢を見ることに近い、何の感情もなく全てを見つめるだけの視界

だった。そのせいか経っているという感覚が信じられないほど希薄で、感じるはずの風も触覚による情報は伝えてこなかった。

ふと空を見上げれば像ほどの巨体に、カバに似た鋭い牙をはやした頭の怪物が飛んでいる。

——あれは、シャンタク鳥。

——ここはレン高原か。

何の疑問もなく『シャンタク鳥』という言葉が出た。あの飛んでいた怪物の名前だと、当然のようにフレデリカは理解していた。

一人の男が百メートルを優に超える巨木を、蒸気を噴き出す鋼の腕の膂力に任せて切り倒していた。見覚えが確実にあったけれど、どういいうわけか名前が出てこない。まるで脳内の情報が混線して、パンクしてしまったようである。

「カーター……さん」

口から言葉が出た時には、銃工の店だった。

「……フレデリカ？」

心配そうに顔を覗き込むサイファーと目が合った。未だに視覚以外の感覚が鈍っている中、宙に浮いたようになっていく意識が戻っていく感覚がした。

「あの……なんか、急に草原の中にいて。その……色々あって」

「その子の目に気を付けろ」

カーターが生身の指で、黄金の双眸を指さしていた。

「それは数多のまやかしの夢を見通し、真実の夢の極点さえ見つけられる黄金の力を宿している。欲しがる人間は多いぞ？ さつきは私の夢と一時的につながってしまったようだがな」

「忠告ありがとう。お前も気を付けるこつた」

そのままフレデリカの手を引いて、店を足早に出た。

蒸気二輪に跨る前に弓にフレデリカが道に、ぺたんこへたり込む形で倒れてしまった。意識はしっかりしているものの、体に力が入らない状態で、口はひたすらに「すいません」とか細く謝罪を繰り返す。

「いいか、気をしっかり持て。ゆっくり息を吸ったら、少し止めて全身を回すようにイメージしろ。回し終わったら、ゆっくりと吐き出すんだ」

「……………はい」

正直言つてしまえば、呼吸する事さえきつい。全身の生命活動を行うための気力が根こそぎ奪われたようで、あらためて覗いてしまった場所が常識の範囲外であったことを痛感した。

おまけに何とも言えない気持ち悪さが全身を駆け巡り、目を開けている事さえ非常に

困難だった。ややもすれば、意識が闇に落ちていくような気がして、そうはさせまいとフレデリカは必死にサイファーから言われたことを行った。息を大きく吸い込んで、止めたら全身に回そうとイメージする。何かが全身を巡っていく感覚がして、不思議なことに脱力感も気持ち悪さも抜けていった。

「立てるか？ ゆっくりでいい」

「な……なんとか」

「少し休めば動けそうだな」

「す、すいません」

「気にするな。いざとなったら僕が全部やる」

任せろ、と言わんばかりの笑顔を向けた。

こうやって人をからかったりせず、時折クールでシニカルに笑う姿は一切の誇張なしに男前と言っていい。フレデリカも十分に好感が持てると思うし、ヘンリエッタはビジネスライクな付き合いだが少しは見直すかもしれない。

やはり人間というものはバランスだ。完璧超人と言えるような人間をフレデリカは知らない。欠点というものは誰だって持っているし、どうしようもないくらい直しようがないものは才能が存在しないのだろう。ただフレデリカは人を相手に引き金を引けるか、その自信がなかったが今はそんなことは全くない。戦いに身を置けるかどうか

心配で、気が気でなかったが結局は順応してしまっている。要はなんでもやってみるこ
とが大事なのかもしれぬ。

だが今回見てしまったものの影響は深すぎた。

しばらくは眠って夢を見るのが怖くなってしまっただろう。そうしてしまつたら、また
あの世界に意識が飛んで行ってしまうかもしれないから。あの世界の風景はどこか綺
麗で懐かしいようで、そして二度と願ひ下げだつた。

「そつういえば何をやるんですか？」

フレデリカは何も知らずに聞いた自分を責めるだろう。

サイファーが不敵な笑みに邪悪さを混ぜた時から。

「デリンジャーの女に手を出した、大馬鹿クソボケ身の程知らずのヤクチュウ花屋をハ
チの巣にした後、死体のケツ穴からジャガイモと人参と玉ねぎが出てくるように取り計
らうのさ」

——どうしよう。

——口がすごく悪いうえに、

——とてもキナ臭い仕事だ。

紫電、天よりの御使いを貫き

結局のこと回復が間に合った。

酩酊感が抜けきっていないのは否めないが、フレデリカは一応の戦鬪行動が可能なくらいには回復していた。どちらかといえば間に合っていない方が良かった。これから起こる血生臭い争いには参加したくないのが正直な気持ちだが、サイファーだけ参加するというのも変な気がするのだ。

これから自分たちが追う麻薬の件と引き換えに受けた仕事だということだから、彼だけが鉄火場に飛び込むのは道理に合わないと思い、半ば義務感に近い感情を抱いて参加する意思をサイファーに伝えた。

驚いた表情で『いいよ』と返ってきたが。

それとデリンジャー・ファミリーに行く車内でのパートナー云々の話も蒸し返されて、またドギマギする羽目になってしまったが。

ただ、『体調と相談しながらでいいし、キャンセルも自由でいい。危険が及ばないくらいにカバーするから』と言ってもらえたのは、少しだけ純粹にうれしかった。天邪鬼なように思えることは多々あっても、優しさを忘れていないのは美点だと思うのだ。

そうして二人は下層でも比較的明るい通りのダイナーにいた。

仕事前の一服ではなく、すでに仕事に入っている。待ち伏せしているのだ。

黒い戦闘用の工夫が凝らされているゴシック調のドレスが一人、コートを着たガンマンは二人いる。ドレスはフレデリカ、ガンマンの片方はサイファーだ。もう一人の男はコールというデリンジャー・ファミリーの戦闘員で、抜き撃ちの速さはファミリーでも下層でもトップクラスである。

ジョン・デリンジャーの傍らにいた若い男も参加している。隠してもいなかっただトンブソン短機関銃を傍らに立てかけて、通りのベンチに座って新聞を読むふりをしていく。彼は名をケリーという。

反対側の路地には煙草を吹かして一服しているふりをした男がいた。変装してはいくが、よく見るとジョン・デリンジャーであることが伺えた。情婦の敵討ちは自分で力をつけるといい、武器を持ち出して現場に出てきたのだ。

これなら悪徳の限りを尽くす下層の荒くれたちも泣いて逃げ出す。

それほどの面子が見つめるのは——一人だけ頬を染めて、なるべく見ないようにしている——一台のガーニーであった。車内の広い箱型の車体が特徴の、中流階級では比較的流通している代物で中層の辺りまで幅広く使われている。

それがサスペンションの限り上下左右にガクンガクンしている。想像力豊かだっ

たり、同じことをやった人間ならわかる。そういう経験が皆無なフレデリカは俯いて、時折横目で見ては、また頬を赤く染めて俯くという流れを繰り返している。

「かれこれ二時間になる。ヤツはそこまで精力があつたっけ？」

なんて頬杖ついて退屈そうなサイファーがぼやけば、

「何が悲しくて他人の情事を車越しに見なけりやならんのだ」

愛用のリボルバーをガンスピンスさせながらコールは愚痴り、

「二時間……二時間は長いんでしょうか？ でも、ここに来たときから車は揺れてて、そうだったら、もっとたくさんやっているわけで。でも一般的な長さって、どのぐらいでしょうか？ 準備とかいろいろ考えたら一時間でしょうか。だったら二人とも疲れ切って……」

頬を真っ赤に染め上げながら、頭をフリフリして暴走状態のフレデリカにサイファーが横から、

「ちなみに言っておくが車の揺れ具合から人数がわかる。確実に女は三人いるね」

「さ、三人!? いったいどうやって!？」

「両手とモノがあれば簡単だぞ」

フレデリカは机に突っ伏した。どうみても頭から湯気が出ている。耳も首も真っ赤なのだから完全に赤面状態なのは確実だ。

ただ両手とモノを使えば確實、ということだけでフレデリカはナニを考えたのか。そこに切り込んでいくような男が、一人この場にいた。

「サイファー、てめえの女はずいぶんとむつつりなんだな？ 一体ナニを想像したんだか」

「コール、次そんなことを言ったら両手の指を全部詰めてやるからな。直せないように二ミリごとに刻んでから豚のエサにする。実際にやつてる光景でも想像したんだろ。恋愛小説に見せかけたドロドロの官能小説をたまに読むことがあるからな」

「む、むむむむむむ、むつつり違う！ それと、な、ななななぜそれを知ってる!？」

「フレデリカ、普段の言葉遣い見失ってるから。小説の件は著者が僕の友達だから、たまに読んだ感想を聞かせてくれということが、ちよくちよくあつてだな。たまたま覚えてるタイトルの本を読んでいたからな」

「マジでむつつりだな」

「実際にそういう話題になると、ほのめかされるだけで真っ赤になるくらい耐性ないんだけどねえ」

ふう、と二人してため息をついた。フレデリカはオーバーヒートでも起こしたように、異常作動で過稼働を起こした蒸気機関のように湯気がもうもうと立ちのぼっている。

「それで小説の内容は覚えているか？」

コールは容赦なかった。

この二人はすでに知己の間柄だ。似たもの同士とでもいえばいいか、それとも類は友を呼ぶというのか、このガンマンも人をからかって弄ぶ悪癖があるらしい。

彼の狙いを察してかサイファーも、

「そうだなー、男二人に女三人でくんずほぐれつで力っ飛ばして、ドロドロでぐつちやぐちやだったなー」

「も、もうやめてくださいー！」

半ば泣きながら懇願した。これ以上やると帰ってからの食生活に影響が出るかもしれないので、ここが潮時と考えてサイファーはガーニーの監視に戻った。コールも察してリボルバーを無言で弄り始めた。

それから十分が経った頃だったか。

デリンジャーの手にはコルトM1900 Under Arkham U A が握られている。スライドがタ

ングステンベースの強化合金製のそれは、アーカム下層の脅威に合わせてさらなる改良と強化の末に中層では拳銃の域ではない威力を持つに至った代物だ。

デリンジャー・ファミリーはこれらの下層用の銃火器が上に行かないように、流通を見張る役目もシノギの一つだった。おかげで中層の統治局保安課もデリンジャー・ファ

ミリーを嗅ぎまわらないようにするという便宜を図っている。

癒着だといえれば糾弾は容易だろうが、下手に凶悪な威力を持つ下層用の銃器が氾濫してしまえばアーカムの全てが下層と同じ魔の領域と化し、さらにはウルベスすべてがそうなってしまう。

そしてイギリス本国もいつかは同じことになる。

このギリギリのバランスを保つために統治局保安課とデリンジャー・ファミリーは協定を成した。この煤煙の大機構に築かれた魔都を人の手が及ぶ範囲に保つために。

デリンジャーが拳銃を抜いたことが合図となった。

コールも愛用のコルトM1860UAの撃鉄を起こした。

ケリーの持つトンプソン短機関銃もアーカムの技術で改造を重ねられた特別製だった。ただ彼の意向で銃床は鉄パイプを曲げて肩当てを作っただけのスケルトン仕様だった。

「フレデリカ、少し力み過ぎだ。せつかくの新しい二挺を暴発させたくないだろう」
もう気持ちを切り替えたのか、マウザーに似た『All In One』のハンマーをコックした。

「……………大丈夫です、いけます」

「無理だけはしてくれるなよ」

サイファアがその言葉と同時にぬいた『Howler In The Moon』が、眼前で雷鳴が炸裂したかのごとき咆哮をあげた。

ガーニーは一発で横転したのを皮切りに、掃射が畳みかけられた。

フレデリカの握る『All In One』も重厚な銃声を連発させ、通常ではありえない威力を示す弾丸を吐き出していく。拳銃弾ではありえないほどガーニーの車体が凹んで、無数の射入孔がまき散らされたようにあけられていく。

それは他の銃とて同じか、少し劣る程度だった。

弾丸の初速は超音速が基本で、弾頭重量はオーバー二五〇グレイン。重量高速弾の雨霰を叩きこまれては、いくらガーニーに防弾装甲を施そうと無駄だ。さらに規格外の威力で猛威を振るうサイファアの『Howler In The Moon』があれば敵なしだ。

掃射はケリーがトンプソンの円筒弾倉ドラム・マガジンをリロードしたのが合図となって止まった。

だが気を抜いたものはいない。

コールは銃のニップルを抜いて銃身と機関部に分けると、そこに装填済みのシリンドアをリロードする。これはコルトM1860に代表される手早いリロードの方法だ。コールはコートの下に同じ銃を三挺、装填済みのシリンドアを十八個も隠し持っているのだ。

デリンジャーもコルトM1900UAをリロードするとレマツト・リボルバーを抜いた。シリンダーを保持する軸が散弾銃の銃身となった複合拳銃だが、その光景が普通のものよりも大きいのは口径が通常の十二ケージであることを物語っている。右手にM1900UA、左手にレマツトを握り込んでいる。

フレデリカも『One In A One』を握っていた。やたら攻撃的なデザインだが、ここでは非常に心強く思える。この二挺は原型も口径も違うが、二挺でそろって一つであり『全にして一、一にして全』だと納得できる。

全員が警戒を解いていなかった。

もうもうと破損した蒸気機関から煤煙を噴き出しながら、横転したガーニーからは人の気配も生の気配も一切感じられないのに。

にわかに車の扉が開く。横転しているので天に向かって開いたのだが、そこから蠱惑的な仕草と艶っぽさを孕んだ美女の腕が出てくる。そして余韻を味わう間もなく、一糸まとわぬ二〇代半ばの裸婦が現れた。腰まで届くブロンドに、グラマラスな体型は非常に男好きするだろう。

デリンジャーに容赦はなかった。

コールに目配せで指示を出す。

以心伝心。ガンマンはファニング・ショットでシリンダーの全弾を撃ち込んだ。

裸婦が仰け反ったが、射入孔はなかった。弾丸は皮膚を貫かず、へしゃげてむなしく地面に落ちたのだ。弾丸の炸裂した箇所には白磁のごとき白い肌に、濃緑色の斑点が浮き出ている。

「生体装甲か。並の攻撃は通さないな」
バイオ・アーミー

それは空から降ってきた超技術。アーカム下層に住まう異形の甲殻生命体ミⅡゴの使用、生体組織と完全に一体化し、使用者の危険を察知して表層に浮き出て防御する。だが真の持ち味は物理的干渉を完全にシャット・アウトすることにある。魔術・妖術の心得がない人間であれば攻めてのほとんどを奪ってしまうのだ。

裸婦がコールに飛び掛かる。

その轟惑的な肢体を存分に使うかのように、ガンマンに向かって抱き着こうとする。コールの長身が後ろに倒れ込むや、裸婦が思い切り吹っ飛んだ。距離にして五メートル近く、綺麗な放物線を描いて横転した車を飛び越える。それでも裸婦は何もなかったように起きあがったあたりから、生体装甲の凄まじさが伺える。

割り込んだサイファアの蹴りは強烈の一言であったが、生体装甲を貫くには足りないらしい。

「生体装甲のほかにも、いじってる部分はあると思う。触れただけで死ぬと思え」
デリンジャーの言葉に全員がうなずいた。

決して物の例えではない。それだけの手段がアーカム下層には存在する。

「試し撃ちですが……効いて!」

『All In One』がフルオートで発射された。およそ毎分一〇〇〇発近い連射であったが、反動を持って余すようなことはない。

超音速——およそ秒速二二〇〇メートル——もの弾丸が胸部と頭部に炸裂した。少量の爆薬が炸裂したように、乾いた音が一つに連なるようにまとまって響き渡る。

左手の『One In All』も撃つ。こちら超音速弾であつても四五口径もの重量弾であるため、裸婦に直撃した瞬間、小型の砲でも直撃したような威力を発揮した。

それでも裸婦は揺るがない。

毛一つとして損なうことなく、しなを作りながら佇んでいた。

「フレデリカ、ここは僕の領域だ」

「す、すいません」

灰色のロングコートの右そでが黒く染まる。鋭く尖った刃が現れたかと思えば、それは生き物のようにしなりながら鞭のごとく迅速であつた。フレデリカは知っている。知己のデリンジャーも知っていた。

自分を語らないサイファーが有する、人ならざるものを砕き、人智を超えるものを凌辱する、破壊の権能であることを。それに狙われたものは与えられる破壊を無力に受け

入れるほかないのだ。

生体装甲と闇の鞭がぶつかり合った。

凄まじい衝撃が周囲に走る。それは人が出せる領域を超えていると確信できる。

生体装甲は一度は絶えた。だが闇の鞭は螺旋を描き、宇宙より来るものが作り上げた盾を貫かんと鎌首をもたげるのだ。

「耐えてみせろ」

挑発もそこそこに放つ。闇が一筋の矛となつて、生体装甲を貫徹した。濃緑色に変じた皮膚を、直径十センチもない闇が穿っている。さらに能動的に動き回るや、裸婦の肢体になど何の価値もないと言わんばかりに様々な箇所を貫く。痛覚を飛ばす何かを受けていたのか、悲鳴の一つもあげずに息絶える。

それでも足らんといわんばかりに闇は裸婦を締め上げて——一気に爆ぜさせた。

何もなかったように女は消えた。残ったのは周囲に飛び散ったおびただしい血と、わずかながらに残った肉片だけ。

「やっぱりミィゴじや一度耐えるくらいのもを作るくらいが限界か」

「まだいますよね？」

「確実にあと二人はいる。ペンジャミンも普通じゃないかもな」

サイファーは野太刀を鞘ごと虚空から抜く。東洋龍の彫像が巻き付いた鞘から、五尺

近い優美な曲線を描く刃が解き放たれる。芸術性と戦闘力が見事に融合したフォルムは、幾万もの生命を斬り捨てた妖しさを刃のぎらつきに秘めている。

「来いアバズレども。まとめてなますにしてやる」

ガーニーから一気に四人もの裸婦が飛び出した。全員が一糸まとわぬグラマーな肉体で、顔かたちはどれも目を見張るほど麗しく艶やかである。

豊満でありながら華奢な肢体からは想像もつかぬ、四メートル近い人外じみた跳躍に、サイファーは野太刀を下段に構える。瞳は獲物を見据えた野獣のごとく獰猛で、真正面から見たものに死の幻影を焼き付けるだろう。

白刃が閃いて、血華が毒々しく咲く。

銀髪の女が下段からの切り上げで股間から頭頂まで、薄紙を裂くように一気に真つ二つになった。大仰でダイナミックな動きから繰り出された一閃は女一人を軽く両断したが、そこを付け込まれぬわけがなかった。

身長一七〇センチは優にある裸婦が、その長身を生かして腹部への前蹴りを見舞う。回し蹴りとは違う実践に即した隙の少ないストイックな技。野太刀の柄頭が足の甲を打って軌道をそらしつつ、女のバランスを崩す。

「吹っ飛べ」

サイファーは野獣の笑みを浮かべていた。

野太刀を握る右手。反対の左手には愛用の規格外に巨大なりボルバー拳銃が握られている。雷鳴に等しい銃声と共に、女の見目麗しい顔も肉付きの良い乳房も跡形もなく根こそぎ吹き飛んだ。饅えたような悪臭を立ちのぼらせ、痙攣している下半身に目もくれずにバネ仕掛けのごとく左腕が跳ね上がる。

——雷鳴が轟いた。

裸婦が迫っていた。そこをサイファーは狙おうとしたのだが、飛び上がりながらの足刀が左手の甲を捉えたのだ。普通であれば武器を取り落す。この裸婦の一撃に至っては手の骨をすべて碎かれるだろう。

だがサイファーは動じなかった。ただ狙いだけが斜め上に逸れて、銃弾は明後日の方向に飛んで行ってしまった。

豊満な胸の谷間に長大な刃が突き入れられる。

ほとんど予備動作はなかったといつていい。実際は見えないほどに行動が迅速すぎただけで、それを物語るように裸婦の表情は変わらない。そのまま前へと倒れ込むように倒れた。表情は最期まで変わらない。

最後の女は半狂乱と化した。

ヒステリックな叫びをあげた瞬間に蠱惑的で美しい肢体が、グロテスクなほど肥大化した。

「改造手術か。ずいぶんと手をかけているらしい」

アーカム下層に流入したイギリス本国の最新医療技術は、下層の特異な環境にあてられ、狂人たちの知恵によつて人が人智を超える手段の一つへと変貌した。それは人工的な進化とさえ形容され、下層民たちが日々を生きるための力として機能している。

「いや、武装娼婦か？ どつちにしても大層なご趣味をされてるようで」

常に傍らに侍らせておき、非常時には戦闘員として機能する娼婦。武装娼婦の可能性も捨てきれなかったが、敵に回れば殺すまでだ。

野太刀を八双に構え直す。二メートルを超える巨体と、五尺近い刃の長さがいやでも強調される。

身の丈二メートルをはるかに超えた巨人と化した女が駆け出した。

拳を握りしめるや、びっしりと血管が浮き出る。鼓膜を破るほどの空気の唸りを生じながら、女なのは顔だけとなった巨人が殴りかかる。

八双に構えた野太刀を地面と水平に構え直す。そこから放たれるのは渾身の力を込めた突きだ。

拳と刀が激突する。

猛烈な勢いが衝撃波に変換されて、あたり一帯にまき散らされる。

拮抗したのはわずかな時間だった。女の肥大しきった肩の筋肉から、野太刀の切っ先

が突き出た。サイファアの一刃は女の拳を串刺しにしたのだ。肉体が肥大化したせい
か、発せられる悲鳴は女口調ながら並の男よりもグツと野太い。

「痛いだろ？ もつと感じさせてやる」

突き刺したままの刀を一気に振り抜いた。女の上半身がずれたかと思えば、黒血が一
気に霧となって噴き出したがコートにもテンガロンハットにも、飛沫は一つとしてか
らなかつた。

「奴さん、別の勢力についたかな？」

「ベンジャミンにそんな胆力があるようには見えんがな」

「だとしたら変わったのさ。お前が出資した恩を忘れて、情婦を黽つて、別の傘下に入れ
るクソ度胸がつくぐらいに」

ベンジャミン・アルバーティンの営む花屋にデリンジャーは出資したことがある。

情婦に買う花はすべて彼の店から購入し、のろけ話が過ぎる時も多々あったが世間話
もする仲ではあった。

だが彼は裏切った。デリンジャーの部下ではない者の殺気が、あたり一帯を取り囲む
ように発せられている。

「どちらでもいい。裏切り者の恩知らずには、死でさえ甘美な報いをくらわせてやる」

「同感だな」

二種類のリボルバーが横転したガーニーを照準する。

レマツト・リボルバーは散弾を発射する準備が出来ている。引き金を引けば出てきた瞬間に、ベンジャミンの頭を跡形もなく吹き飛ばせる。

殺気の塊が動き始める。

ケリーがトンプソンを構え直す。

彼は気配の動きを察し、そこに向けてフルオートで四五口径弾をばら撒く。

血しぶきと共にブローニング自動小銃が飛んだ。遅れて人の倒れる音。

「ボスー、周りはアルバニアンの鉄砲玉で囲まれている」

ケリーは宙を舞った自動小銃の銃床に刻まれていたアルバニア・マフィアの刻印に気付いたのだ。下層の利権をデリンジャー・ファミリーから奪おうと躍起になっている連中で、激しい銃撃戦を繰り広げるほどに険悪なのだ。

周りから銃を持った男たちが現れる。人種も、持っている銃もバラエティに富んでいる。組織に重用されている殺し屋でないことは明白で、即席で殺しのノウハウを叩きこまれた鉄砲玉だろう。

コールの手が震む。瞬時に三発の弾丸を撃つトリプル・ショットのテクニクを応用して、敵を三人セットで射殺する。だが悲しきは彼のリボルバーはサイファアの持つそれとは違い、下層の技術を用いて作ったコルトM1860に過ぎない。

装弾数の少なさと、再装填の時間が長いのはこの場では致命的だ。

アルバニアンの鉄砲玉は、わんさといふのだから。

「コールさん、伏せて！」

フレデリカが飛び込みながら二挺を撃ちまくる。

大量生産のペッパー・ボックス・ピストルで狙っていた男が蜂の巣になったのを、コールは黙って見ているだけだった。

着地と同時に軽やかに前転する。膝立ちの状態で右手の『All In One』を薙ぎ払いながら連射する。

敵の怯みを『One In All』は逃がさない。数か月前の彼女であれば不可能なほど正確で、恐ろしいほど残酷に弾丸を撃ちこんでいる。血潮が逆り、肉片がぶちまけられる様を目の当たりにしてもフレデリカは平静であった。

そこに霞がかかった。

花の香りに近かった。天上の大庭園の芳香ともいふべき香りが周囲に漂い、この場にはいた全員の精神に浸透していく。コールとケリーはすでに昏倒している。アルバニアの鉄砲玉も死体のごとく横たわって、顔には恍惚を浮かべている。

これに近い匂いをフレデリカは嗅いでいた。

サイファーを娼館から連れ帰った日。そこで通った酒場で酔っ払いが変異した、翼だ

けが綺麗だった粘液上の怪物が発していたものと似ている。だが比べ物にならないほど濃厚で、脳の平静に大打撃を与えてくる。

頭を強く振って、フレデリカは頭の霞を払う。

横転したガーニーに誰かが立っていた。それは一七〇センチ前半くらいの美丈夫といつていい男だ。栗毛が腰まで伸びており、端正な顔立ちも考えればきざったらしい印象がついて回る。だが、彼に抱く第一印象は芸術や美術を見るような、『美しい』という感想だけ。それが背中から生える天使のごとき純白の翼のせいかは不明だ。

彼は薄笑いを浮かべながら、眼差しは慈しみをたたえているようにさえ見えた。

「いつ天使に転職した？ シスターをハメたくなつたからか？ きつと今のお前なら貞淑さも何もかもかなぐり捨てて股を開くだろうよ。天使と交われる幸福に身悶えしながらね」

あくまでサイファーは普段の調子を崩さない。

確実にフレデリカと同じ匂いを嗅いでいるにもかかわらず。その程度でどうにかなるほどヤワではないということか。隣に立つテリンジャーも平気そうであった。

「アレは使えそうか？」

「テリンジャーを見下ろす形の目配せに、彼はフンと鼻を鳴らすだけで応じた。

「このために残しておいたんだ。お膳立てを頼むぞ」

「私も……手伝います」

目の前の美丈夫に恐怖が吹き出しそうなのを、フレデリカは必死になってこらえる。「ベンジャミン、お前が何をやって、そうなったのかは聞かないで置く」

人間的な光を宿さない瞳が、人ならざる“何か”に変じたベンジャミン・アルバーティンを射抜く。その恐怖は近くにいただけのフレデリカにも否応なしに伝わる。これが下層に秩序をもたらず者が放つ、感情のあふれるままの殺気なのか。

「お前は確実に殺す。その血肉を以て、彼女の鎮魂と我が怒りを鎮めさせてもらおうか」
わずかながらに天使が身じろいだ。

それでも、天使に変じたベンジャミンは両腕を軽く広げたままの姿勢でいる。そのまま翼が羽ばたくと、彼の身体は重力の縛りから解き放たれた。横転したガーニーから六メートル近く浮いている。

それよりも高みにサイファーは飛んでいた。

降下するときの勢いと、超人的な臂力を合わせて一刀を振り抜いた。

鈍色の軌跡と白い軌跡が交差したとき、黒白は反発し合って爆ぜた。

サイファーが七メートルも離れた民家に吹っ飛ばされて壁を突き破つたのを確認するや、フレデリカは今回の仕事を遂行する上でもらったものを放った。それは黒い卵ともいふべきものであった。ピンの刺さった雷管を抜けば、五秒後に半径十メートルもの

範囲を加害する手榴弾だった。

放物線を描いて飛んだ手榴弾がベンジャミンの頭上に着た瞬間、黒い卵をフレデリカは撃ち抜いた。発射されたのは『One In All』の四五口径の炸裂弾だ。着弾の衝撃でのみ弾頭内部の炸薬を激発させ、通常の大口徑では収まらない破壊力をたたき出す。

炸薬の爆発が手榴弾を誘爆させ、ベンジャミンは爆炎に飲み込まれる。

フレデリカもデリンジャーも飛びのいた。あの爆炎に飲み込まれれば七〇〇〇度もの高熱と、数万もの爆圧をくらってあの世行きなのだから。人間の領域から脱したフレデリカなら耐え切れるかもしれないが、ここで試す理由は存在しない。

おそらくガーニーは木端微塵になっただろう。

少しずつ晴れてきた煙ごしの景色に、用を成さなくなった車はなかったのだから。

あったのは白い羽毛で出来た繭。ベンジャミンは翼で自分の身体を包み、手榴弾の高熱と高圧の暴力を難なく凌ぎ切ったのだ。

「この程度か？」

ベンジャミンが初めて口を開く。いやに響く、いつでも聞いていたくなる声であった。

「この程度なら私だけで下層を塗り替えられそうだな。あの博士には感謝してもしきれ

ない」

「あの器も度胸もタマも小さい花屋が、ずいぶん大口をたたくじゃないか」

民家の瓦礫を勢いよく吹き飛ばして、サイファーが立ち上がる。コート汚れを払いながら、もう一方の手には規格外の大きさを誇る、あのリボルバーが握られてベンジャミンを照準している。

「あー、一応言っておこうか。デリンジャーは手前デメエの情婦イロを潰された上に、天使の皮をかぶったお前がさらに女と激しくやっっていることに、もう怒りが有頂天になっちまってる」

言うが早いか、雷鳴が轟いた。

それも一発だけではなく、十数回にも及んだ。拳銃としては規格外の象狩り用ライフル弾や重機関砲弾に等しい弾丸が、脳天と胸部にめがけて十発以上も撃ち込まれようとしている。

飛来する弾丸は絶対の破壊をもたらそうとしていた。

「へえ」

思わず嘆息する。

サイファーの一刀をも弾いた何かが、十発以上に及ぶ巨弾を幾重にも切り裂いて無力化した。

それは長く鞭のように伸びた羽の一枚。全体に何らかの力場を帯びながら、恐ろしいほどの柔軟性に反した精密性で迅速に動き回る。動きが一気に霞んだかと思えば、動き回る羽は十数枚にまで増えた。

細身の剣のごとく鋭く、鞭のごとき迅速で柔軟な動き。人の手として扱い得れる武器として世に送り出した暁には、その武器のためだけに向こう百年の安寧を約束される武道さえ発足するだろう。それが大嵐と化してサイファーに迫りくる。

石畳を削り、立ち込める砂煙から迫る殺人羽を黒い何かが弾く。

改造された娼婦を屠った、あの黒い鞭だ。物質ではない、存在しない何かで構成された森羅万象を砕く権能の顕現。サイファー・アンダーソンが『実行使請負業』を名乗ることができる、その力の一端であった。

灰色のロングコートは袖から裾、襟に至るまで同じく黒に染まっている。

そこから羽と同じ本数だけ“力”が展開している。

競り合いは熾烈を極めていた。弾丸など比べるまでもない、亜光速にまで迫る攻防をデリンジャーは右手を伸ばしたまま、じつと“機会”を窺うだけであった。

一方のフレデリカは双眸の異様な反応を感じていた。ぶつかつた瞬間だけが、かろうじて見えていたはずなのに、競り合いの全てが手に取るように分かり始めてきたのだ。ベンジャミンの手繰る白き羽が単調に速度と柔軟性と鋭さに任せたものに対して、サイ

フアーの黒い鞭は縦横無尽に同等の動きをしながらもフェイントを織り交ぜながらベンジャミンを押ししている。

そして七〇口径という規格外の巨銃が、六発しか入らないように見えて実は二十四発という火力を有したシリンドラーを黒く染め上げて、ベンジャミンの眉間を照準しているのだ。そのプレッシャーは天使と化してから薄笑いだった彼が、表情を焦燥に変えて冷や汗を流していることから言わずもがなであった。

「どうした？ 動きが単調だぞ」

「……ほざけ。お前もデリンジャーも殺^{バラ}して、あの娘をいただくでしょう。初心そうなうえに、あのデカい乳だ。男なら垂涎ものだろうよ。半殺しにしてから、目の前でじつくり翳^ハってやる」

「そうか………欲をかき過ぎたよ。おかげで最後に残っていた情けを捨てられそうだ」

その言葉が引き金だった。

轟音が炸裂する。その回数は六回。

七〇口径もの機関砲弾に等しい弾丸は黒く染まった状態で発射され、ただでさえ規格外の威力をもたらす巨弾の威力を跳ね上げる。熾烈な競り合いを繰り広げる黒と白の間を絶妙にかいくぐり、ベンジャミンの背中から生え出る翼に着弾する。手榴弾以上の

爆発が起こり、終わった後には翼を碎かれ、徹底的に肉体の表層を焼き尽くされたような肉塊が。

「特級の弾丸だ。絶対に外すなよ」

「それほど老練はしてないつもりだがな」

リボルバーを握る右手、反対の左手は親指を立てた状態で止まっていた。サムズアツプではなく、コイントスの要領で”あるもの”を放っていたのだ。

右手を伸ばすデリンジャー。その左手はどす黒く瘴気さえ放つ七〇口径の弾丸を、二本指で挟み取っていた。その弾丸をあらゆることか右手に押し付けるや、服さえ通り抜けて右手は弾丸を吸い込んでいったのだ。

肉体が複雑に変化していく。着込んでいたコートもシャツも押し破って、右手はグロテスクな筋肉繊維の赤を覗かせながら、まるで大型の兵器のごとく形態を転換しているのだ。

それはデリンジャーが下層に秩序をもたらすと決めた時に施したものだ。

いまだ独立戦争の敗北以来、大英帝国バグス・ブリタニカの支配を覆さんと暗躍するレジスタンス。彼らが研究する電磁技術と下層の非合法生体改造技術を融合させた生まれた、蒸気文明の現代でさえも成しえない破壊力を誇る魔砲。

その原理は電磁誘導によるローレンツ力。生体砲身には内部に細胞と完全に融合し

た伝導率と耐熱・耐摩耗に優れた金属のレールが上下に配置され、弾帯はそこを亜光速で駆け抜ける。

そして、いま。生体砲身は盛大に紫電を放ちながら、破壊の権能を込められた弾丸を撃ちださんと唸る。

その魔砲の名は——超電磁砲！
レールガン

「耐えてみせろ」

紫電は白光と化して、辺り一面を染め上げていった。

狂気、忌々しい女は突然に

焼け焦げた石畳にはなにもいなかった。羽の一枚も残さずに、ベンジャミン・アルバーティンはこの世から消滅するに至った。あれだけ圧倒的な存在感を放っておきながら、サイファーとデリンジャーに一矢報いることなく死んだ。

ここはアーカム下層。誰にでも死は平等なのだ。

だからこそ、気を抜けば誰かの手によって死ぬかもしれない。もしくは彼のように死体さえ残らないのかもしれない。

「おい大丈夫か」

「いえ……ちよつと感傷的になって」

「……………ここではよくあることの一つだ。深く考えないほうがいい」

そう言ったデリンジャーの右手は元の生身に戻っていた。あのグロテスクな筋肉繊維を露出した生体砲身は見る影もない。

フレデリカは横顔を見上げることしかできなかったが、人間的な光を宿さない黒瞳にわずかな感情が見えたような気がしたのだ。

サイファーはわかっていた。デリンジャーとベンジャミンは決して悪い仲ではな

かった。だから、己の手で処断することの辛さや諸々が、今の彼に少しはジョン・デリンジャー一個人に戻らせているのだろう。

「飲むというのなら朝まで付き合つてやるけど？」

「自分たちの仕事もあるというのに、余計なお世話だ。そんなに気かけられるほど、俺も弱くはない」

「……やはり“人”は前に進めるんだな」

「俺たちはどこまで行つても人間でしかない。たつた一回の人生を止まつて生きるわけにはいかないんだ。お前には、少しだけわからないのかもしれないが」

サイファーは閉口していた。

ただ、少しだけもの悲しげで、いつもの笑みもなかった。フレデリカもあまり見ない顔で、いつもの日常で見てもしまったら突つ込まずにはいられないかもしれない。

けれども答えることはないだろう。

サイファーは自分の過去を語りたがらない。自分がいつ生まれて、『実力行使請負業』を営むまでの道程を、常に隠している。そして聞き出す人間を煙に巻くために、葉巻を吹かしているように思えるのだ。

フレデリカとて大学時代の酷い思い出は好んで話したくはない。思い出すだけでも嫌な気分になる上に、余計な同情を故意に買っているようで好かなかった。

だからこそ二人は一緒にいるのかもしれない。
当然のように引き合ったのかもしれない。

共通項があるから引き合ったのかもしれない。

いつかはサイファーも話してくれるのだろうか。その時には辛さを分かち合つて、ときには傷を舐め合うのかもしれない。

舐め合いは良くないかもしれないが、一人でいるよりはマシなのかもしれない。分かち合えることなく、吐き出すこともできずに抱え込んでいては、いつかは碎けて壊れてしまう。

「フレデリカ、人生というものはやり直せるものだと思うか？」

多くの人間は否と答えるだろう。

やり直せる時を、いつも人は気付かずに逃して、手遅れになっているのだから。

「正直、何とも言えません。私もまだ二〇年とちよつとしか人生を歩んでいませんから」
すこし酷な質問だったか、と内心で悔やんだサイファーだった。

だが続けられた言葉はいい意味で裏切つてくれた。誰も知らぬ彼の心中にかかる暗雲。そこに差し込む一筋の光のように。

「だから経験したことしかわかりませんし、ちよつと先のことともわかりません。だからこそ知らないことには一步を踏み出そうと思うんです。やっつてから後悔したほうが、何

もしないで後悔するずっといいはずですから」

「……そうだな。うまくいくかどうかより、やってみるこのほうが大事だよな。まったく月日は残酷だな」

ずいぶんと年寄り臭いセリフだと言わずにはいられなかったが、突っ込んではいけなような気がして喉まで出かけたのを呑み込んだ。

サイファーはフレデリカに対して滅多に怒らない。フェミニズムの表れとも解釈できるが、人並み以上に力が強く、喧嘩っ早い節がある彼であれば怒りに任せて手を上げることでもあったのかもしれない。自制を己に課しているのだろう。

フレデリカも聞き分け良く暮らしていたため、怒りを買うことはなかった。

その分だけ敵に怒鳴り散らすこともあるが。

「サイファー、ベンジャミンはなぜあんなったと思う？」

「家探しすれば済む話だろ。場所は調べてあるのか？」

「もちろんだ。できれば、俺も行きたかったとこだが……少し仲間がやられ過ぎた」

未だにケリーとコールは目を覚まさず、石畳の地面に突っ伏したままだった。

アルバニアンの鉄砲玉が幾人も倒れる、この凄惨な現場に置いておくのは躊躇われる。だからデリンジャーは身を引いて、後の家探しをサイファーとフレデリカに託すこととした。仇討ちという一番の目標は自分の手で果たしたのだから。

二メートルを超す巨躯が路地に隠したスレイプニルを引つ張ってくるのを見つめながら、気づかれぬように呟いていた。

「お前もちゃんと進んでいろよ」

蒸気二輪に跨った彼の後ろに座る、見目麗しい金髪金眼の彼女の姿。デリンジャーが最後にサイファーと会った時からしてみれば、考えてもいないことであつた。あの頃の彼はデリンジャーと“もう一人”以外を信用せず、女がしなを作つて誘惑しようものなら真つ先にブン殴つていた。

「デリンジャー、何か言つたか？」

聞き耳目敏く、呟きは聞かれていたのか。おそらく内容まではわからなかつたのだろうが。

「昔を思い出したただけだ。場所はこの先の第四区画の آپルトメント。第二級危険区域だ。そつちの御嬢さんは気を付けることだ」

「はい、いろいろとありがとうございました」

ご丁寧に二輪から降りて、ペこりとお辞儀をした。そういつた所作は育ちの良さを伺わせるようで、澄ましていれば深窓の令嬢に見えなくもない。自分たちのような生まれつきの無法者では決して持ち得ることのない、一種の才能ともいえるものだ。

——サイファーのヤツには、本当にもつたないぐらいだな。

もう一度、二輪に座り直し、走り去っていく二人を、デリンジャーはただ見つめるだけだった。

そのままコールの脇腹をつま先で蹴る。

「ぐうえ」

カエルを潰したような呻きを漏らし、ガンマンはのろのと立ち上がったが、目の焦点が合わずに泳いでいる。放たれた香りの後遺症か、強い酩酊状態にあるらしい。

「平気か？」

「大丈夫です………と胸を張って言えればいいんですけど、立って歩くのもままならない感じです。前にサイファーさんに酒に付き合わされて、スピリタスを一瓶飲んだ時と同じですわ」

「ケリーもそうだろうな。直接のケンカは、お前に劣る。なんでもそつなくこなせる、側近向けの男だ」

コールと同じように脇腹を蹴ってみたが、唸るだけで意識を取り戻すことさええない。死んではいけないのだから治療の仕方はあるだろうし、ケリー一人だけであれば担いで運んでいける。近くにはガーニーを停めてあるのだから。

「あの二人、うまくやっていきますかね？」

「わからん。傍から見れば、かなり凸凹した二人だからな」

「普通そうでしょう。年の離れた義理の兄妹といったほうが自然です」

「いや、凸凹だからこそ、ぴったりとはまるのかもしれん」

「そういうもんですかねえ。男と女は古今東西ややこしいものだと思うんですがねえ」

「古今東西で言うのなら、男はいつまでも単純で、女は複雑だ。だが例外というものはいつの時代にもいるものだ。あの二人みたいにな」

「デリンジャーはどことなく達観したようで、コールは半分呆れたような表情だ。表情の差は人生経験の差だった。コールは若手ながら実力者であるために重用されたが、こういった場面では人生経験の乏しさというものが埋められない差となる。」

しかも大抵が荒事の場合に放り込まれてばかりで、休みは急速に費やしてきた。女と付き合ったことは多くはない。だから海千山千のデリンジャーでは完全に一歩どころか何十歩も譲ってしまう。

「生きることって大変ですね」

「今になって気付いたか。これから嫌というほど経験することになる」
力なくコールは笑った。

デリンジャーは静かに笑った。



第四区画はどれほど危険なのか。

変異生物がうようよいるだけなら他の区画と変わらない。問題はそれが徒党を組み、一つの群れとなり高度な連携で追い詰めてくる点だ。

特に注意するべきは変異した巨大蠅だ。体長一メートル四〇センチと小柄な子供並だが、膂力は大人を三人も抱えて三〇〇メートルも上空まで飛べる飛行能力と、二〇メートルもの射程がある強酸と三〇〇〇種もの細菌が混ざり合った体液は恐るべき武器だ。

それらが遊撃的に飛び回っては体液をまき散らし、隙を見ては犠牲者を抱え上げて上空から投げ落とす。下層での死者を増やす大きな要因の一つだ。

アインヘリヤル社製蒸気二輪スレイプニルが駆け抜けていっては、規格外に巨大なリボルバーと二挺が変異生物相手に弾丸をばら撒いている。サイファーとフレデリカが発砲すれば変異生物が一匹また一匹と砕け散る。

「フレデリカ、三時の方向だ！」

「十一時の方向からも三匹来ています！」

フレデリカの右手にある『All In One』がほとんど途切れていないほどの連射を放つ。

サイファアの『Howler In The Moon』も銃口から巨弾と雷鳴を放つ。

ここに来るまでかなりの弾丸を消費した。二輪上での射撃は非常不安定故に命中精度が著しく下がるが、サイファアは経験と腕前で見事に補っている。だがフレデリカの命中率は芳しくないうえに、変異生物の数が非常に多い。

サイファアが野太刀を抜いた。

「フレデリカ、しっかり掴まっている」

そのまま二輪をスピンターンさせた。刃の延長線上にあった変異生物に輝線が走る。

そこが境界となつて一気にずれていき、血しぶきが霧となつて噴き出した。血だまりの中に上半身に臓物が沈む。

それでもスピンターンは止まらなかった。

四〇連発もの円筒弾倉を二挺に叩き込んだフレデリカが両手を広げるや、引き金を引いた。マウザーC96をベースとした『All In One』はまだしも、ガバメントベースの『One In All』でさえフルオートで弾丸を吐き出している。

二挺とも機関拳銃だったのだ。ただ『One In All』は重量高速弾ゆえの反

動からフルオート射撃を避けていただけだ。元々、狙いすまして使えるように設計されており、合わせて作動機構も銃身を固定できる構造に改造されている。フルオート機能は火力増強の意味合いが強いのだ。

「やつら怯んだみたいだ。今のうちに突破する」

しつかり掴まってる、と言って急発進させた。

車体重量五〇〇キログラムもの蒸気二輪は砲弾となつて変異生物を蹴散らしていく。人間であれば重量と時速二〇〇キロもの速さで挽肉となる。頑丈といえど生身という大前提があるから、変異生物も同じ末路を辿る。

二人が目的のアパルトメントに着いたのは十分後の事だった。

アパルトメントは一般的な鉄筋とモルタル造りで、周辺は死んだように静かだ。人も変異生物も植物さえなかった。住居というよりは廃棄されて間もない廃墟といったほうが、まだ納得できる。その証拠に建物の中からも気配は一切なかった。

窓も明かりがついているところは一つもない。そこから人ならざるものが潜んでいても不思議ではなかった。

「こりや住んでるのはユーレイかもな」

「やめてくださいよ……きつと、だれも住んでないんじや……?」

「かもしれないな。確かヤツの部屋は……あつた」

錆びついて崩れ落ちそうな階段を上り、その奥にあった部屋。番号は二一〇。

そこをサイファーは蹴破った。蝶番から一気に吹っ飛び、対面の壁にめり込んだ。

妙な臭いがした。饅えた臭いとよく似ているが、どこか淫猥で官能的に思える臭い。

「見ろ」

古びてボロボロの床や壁を気にすることなく、サイファーはずかずかと入ってゆく。視線の先にあつたのは折り重なるように倒れた女たち。全員が一糸まとわぬ姿で、目、鼻、耳、口から血を流している。

そしてぼつんと置いてあるテーブルの上には、白い石にも似た煉瓦サイズの何かが置いてあつた。

「全員が急性中毒を起こして死んだみたいだな」

「薬はテーブルの上にあるものでしょうか」

「多分、吸いたい量だけ砕いて鼻から吸引するんだろう。そう考えると………少し不自然だ」

煉瓦大に固められた薬物は角を少し砕かれた程度、これだけの量で死亡するほどの急性中毒を起こすとは考えにくい。よほど強力な薬物なのかと推測できる。

「ちよつと味見してみるか」

おもむろに砕かれた粉末を一掬いするや、舌先でペロツと舐めたのだ。

「え、いいいきなり!? 大丈夫ですか」

サイファーは無言だった。口を接着されたように、石化したように、押し黙って何も言わない。

心配のあまり胸に手を置いた——肩を叩くには身長差がありすぎる——その時、おもむろに仰向けに倒れていったのだ。あまりにも抵抗なく倒れていき、身長二メートル、体重百キロを超す彼が倒れた時には地震にも思える揺れが襲った。

舞い上がる埃が目を刺したが、そんなことなど些細なことであった。

フレデリカは必死になってサイファーの体を揺する。

「い、いや、おきて、起きてくださいー!」

一分かけて揺すり続けた時だったか。

む、と唸ったかと思えば飛び上がったように起きあがった。

「どれぐらい寝てた?」

「一分くらい……です」

「この薬、合わない人間だったら一さじでお陀仏だ。僕だから死ななかつたものの」

さらつと戦慄を禁じえないようなことを言つてのけたかと思えば、元凶の塊である白い薬物を黒く変質させた右手で掴む。

今日見るのは二回目だ。万物を砕きつくし、この世から抹消する彼の権能だ。きつ

と、この力もサイファー・アンダーソンの過去に関わってくる、というよりは出生にまで及ぶ重要な秘密なのだろう。これも誰も踏み込んだことない秘密なのだろう。

右手の黒は薬物を侵食していったかと思えば、瞬く間に煉瓦大の薬物ははらはらと黒い欠片を生じさせながら崩壊していき、残った欠片も風に吹かれたように消え去って行った。

「それ……大事な証拠になりますよね？」

おずおずと聞いた。

目の前で証拠隠滅とっていい、いや、まんま証拠隠滅の行為が行われたとなつては聞かずにいられない。

「持つて帰るにはリスクが高すぎる。僕も引っくり返るような物質で出来ているとなれば、ただの“人間”じゃ処理できない問題だ。ここからは僕の領域だな」

「それほど危険なものなんですか？」

「ちよつと粉末を吸い込んだだけでも、並の人間なら意識不明だ。だがベンジャミンのヤツは合う体質だったんだ。きつと肉体を作り変える改造薬なんだろうよ」

「なんてこと……これが上に流れたら」

「大混乱だが、デリンジャーが食い止めてくれるとは思う。この薬物はタチの悪い賭けのようなモンだから、上に出回っても死人が増えるだけだ。適合する人間は、非常に稀

だろうな」

リビングを調べるのはやめて、もう一つの部屋に入った。

シンプルな私室だった。ベッドとチェストと机だけ。壁紙も張り替えないうままだったのか、所々ボロボロで剥がれかかっている。

机には薄汚れた革表紙の本が一冊だけ、異様な雰囲気を放ちながらぼつんと置いてあった。

「人の皮だな」

ひよいと本を拾い上げてサイファーが聞き捨てならないことを口にした。

氷の針を刺しこまれたように背筋が凍っていくのをフレデリカは感じた。本が放つ異様な雰囲気の原因。その一つは人の皮を剥して鞣し、革表紙として作ったことだった。

さらにページをめくっていき、さらに戦慄の言葉を口にする。

「風の中を歩むもの、怪異の導き手……内容も気になるが、インクは血だな」

「い、いやあああああああああああああああああ!!」

絶叫した。

冒流を叩きつけられて、下層の空気で疲弊していた精神に止めの一押しが入ったのだ。

フレデリカの心は冒瀆的事实を拒絶した。

人の命を傷く手折つて、狂気の知識を迸るままに書き綴つた書物に『あつてはならぬ』と叫ぶ。

「こゝ、こんなことが……あつていいはずない。どうして……これを作つて」

「書き記された神を敬い、そして喜んでもらおう。そういう魂胆のもとに作られているのさ。古今東西、人類史が始まったときから、彼の神を崇める連中はなにも変わらない、変わつてないよ」

自嘲するように。

嫌悪するように。

シニカルに笑つた彼の目は、笑みではなかつた。どこまでも冷たい光を宿して、狂気を綴つた者たちを嘲笑しているように感じられる。足元の影がわずかに蠢いたように見えた。

「信仰もこゝまでくれば筋金入りだ。崇められる神様はきつとウキウキ気分だろうよ」

「これで……喜ぶ神は」

「邪なる、現世を冒瀆する蕃神さ。彼の神たちは、この世界をとびつきりの甘い汁がたっぷり満たされた器としか思つてないらしい。手を変え、品を変え。為政者に家なき子まで狂わせて、狂信を集める。いつの時代も、神様は信仰が大好きだからな」

「……………手段を全く選んでなくても、まったく気にしないというんですか」

「神話を紐解けば、神様には結構なろくでなしは少なくない。ギリシア神話のゼウスあたりなんかはいい例じゃないか？　それが、この世界の事情など全く関係ない別次元の蕃神とくれば尚更というものだ」

あくまでも知識として言っているようでありながら、サイファーの語り口には本当に神に会ったかのような真実味というものが感じられすぎた。

フレデリカも出会った時から普通じゃないと思つてはいた。だが『神と実際に会つた』となつては眉唾が過ぎるような気がしないでもないが、いつかは本当に起こり得ることの一つだと思つてしまふ。

そして、同じくらしいの衝撃的なことが近いうちに起こる。根拠のない直感でしかないが、狂気の書を目にした時から晴れぬ暗雲となつて心を曇らせる。

思わず俯いてしまったが、それが幸運を運んだらしい。

——酒場「Catherine Tramel」と書かれたマッチの箱。

拾い上げただけで箱から濃厚な香水のにおいがした。娼婦たちが漂わせていそうな、やたらに甘つたるい香りであった。だんだん頭が痛くなつてくる。中身は空だった。

おそらくは広告としての役割だったのだろう。それにしてもマッチ箱の数は尋常ではなかつた。

ずっと気に留めなかったからか、折り重なった女たちの死体や狂気の本のせいで目につかなかつたせいなのか。とにかく注意するとデスクに、チェストに、色々なところに落ちている。

「サイファーさん、このマッチがいたるところに落ちています」

「……………常連だった、と思つても変な気がするな。名前から判断すれば女と酒が飲める店のようだが、あのベンジャミンに女が必要かと言われればおかしき気もする。あの天使みたいなナリと匂いにやられる女はいるはずだ」

それから少し考え込んで、

「そういえばバックについてる組織がわかんねえ店だったな。でかしたぞ、こりや大きな手掛かりかもしれねえ」

獲物を見つけた獣のようにサイファーは笑っていた。

酒場で出会った怪物、ワイアットを悩ませる麻薬、ベンジャミン・アルバーティンという三つの点が繋がり、『Catherine Trameel』という酒場で一つになろうとしていた。

アパルトメントから一台の蒸気二輪が飛び出した。



デリンジャーによってあてがわれたホテルは、アーカム上層部のロイヤルスイートと大差ないと言つていい。

一流の教育を受けたボーイによって通された部屋は、豪奢でありながら踏み込みやすい寛容な雰囲気醸し出していた。調度品一つをとつても煌びやかでありながら派手すぎず、一日の疲れを癒すもよし、恋人と睦み合うも良しの一級品だった。

ソファアーに巨体が沈んだ。

備え付けの電話をサイファアーはダイヤルする。

三度の呼び出し音の後に出たのはデリンジャーであった。

「デリンジャー、『Catherine Trameil』という酒場について、お前さんはどれだけ知っている?」

「俺もちょうどそのことを伝えようと思つていたところだ。掴んだことを話したいのである、部屋で待つていてくれるか?」

「そうか。じゃあ、ちよつとゆつくり来てくれ。僕もフレデリカも少し疲れた」

『フフツ……今のうちに休んでおけよ』

どこか意地の悪い笑いと共にデリンジャーは電話を切った。

受話器を握ったまま固まっていた。簡易のベッドにも使えそうなくらい大きいソファアールが、至って普通のサイズに見えるくらいに巨体が微動だにしない。

何か嫌なもの心の心当たりがあるようだ。それもとびつきりの。

「デリンジャーめ……意趣返しか、それともただの嫌がらせか？」

「見るからに嫌そうですね、なにかあつたんですか？」

「デリンジャーのそばにいた、トンプソン短機関銃を持つてたやつを覚えてるか？ あ

いつは若手なんだが、異例の早さで出世しているんだ」

見た感じでは頭の回転はよさそうだが、教養はなさそうだった。サイファールがデリンジャーに利いた軽口に怒っていたが、それはデリンジャーを慕う彼の思いの表れなのだろう。

組織で上に上り詰めるためには上に立つ人間に気に入られることが近道だ。彼もそうやって上り詰めていったのだろうが、気に入られても使える人間かどうかが重要だ。役立たずに慕われても傍迷惑というものだ。

「あいつは根無し草の二流ギャングだったが、ヤツの女が徹底的にしごき上げたおかげで今の地位にぼりつめた。デリンジャーはそいつを僕の下に送ったんだ。なんでもやる女なんだが……いかんせん僕はちよつと苦手だ」

「……………なぜ？」

間が空いたのは躊躇ったから。

突つ込みずらかった。サイファアの目はハイライトが消えて、完全に死んでいた。一体どれだけの事をされたのか大いに気になるが、聞いたら今度こそ止めを刺すことになるのは予想がついた。だが聞かずにはいられなかった。

「初対面で上半身裸にされた。怒りさえ吹っ飛んだわ」

「私も……同じ目に、遭うんでしょうか？」

何も答えなかった。

何か答えてほしかった。

沈黙がこれから起こるであろう、ある意味で恐ろしいことを雄弁に物語っているようだった。

「気を付けろ。アイツのお気に入りは、フレデリカみたいな可愛い女の子だから」

「余計なことを言わないでください！ ただでさえ、この上なく恐ろしい予感がしているんですから！」

「三年もあれば慣れる」

半ば諦めたような表情で、いつもの笑みが完全に消えている。不屈というより、屈するということ自体が無縁に思える彼であっても、それは戦いときだけらしい。

こういった場では一人の人間だ。

仕事を終えればお酒で一杯することもある。

一息つくときには葉巻を吸うこともある。

好き嫌いはないが、食い合わせのこだわりがある。

そして——普通に苦手な人間だっているのだ。

「フレデリカ、冷蔵庫にスピリタスはあるか？ ストレートで一杯頼む」

「あの……前々から思っていたんですけど、スピリタスはストレートで飲むものじゃありませんよね？ あと入っていたのはロマネ・コンティでした」

「なにそれすごい」

思わず立ち上がって自ら栓を抜こうとした時、部屋の呼び鈴が水を差した。

応対しようとするサイファアを制して、フレデリカが出ることにした。最高級ワインを楽しんでもらったほうが、彼もこれから先が楽になるに違いない。その苦手な人間にも提供してやれば、会話の潤滑剤になることも期待できる。

少しだけほくそ笑みながらドアを開けると、そこに長身の美女が立っていた。

身長は一七〇センチを越えていることは確かで、ブルネットを腰まで伸ばしている。肉感的な豊満さはないが、見せるためのスレンダーなスタイルをぴっちりとしたスーツとミニ丈のタイトスカートに包んでいる。その上から毛皮のロングコートで羽織って

いた。

「あら……サイファアはいる？」

「では、ただいま呼んできません」

「ありがと、可愛い綺麗なお嬢さん」

ルージュを塗った唇が照明を反射して光った。

呼びに行こうとしてフレデリカは振り返ったが、あやうくサイファアの胸元に激突しそうになった。

物凄い形相の彼と目が合いそうになって、思わず逸らしてしまう。もう、とにかく、言葉が貧弱といつていいぐらいに『物凄い』表情をしていて、パツと見てわかるぐらいの拒絶がありありと浮かんでいる。

「なんで来た？」

普段の声は体格に見合わず割と高めだ。なのに今はやたらとどすの利いた、野太く低い声で脅してもかけている。そういうように捉えられる。

「なんで、つて命令に決まつてるじゃない。デリンジャーの」

「なぜ、テメエなんだ」

「適任を考えてごらんないな？ 私以外に務まる人間がいると思う」

「何の適任だ、コラ」

「その辺も含めて、あなたたちの知りたいことと合わせて教えてあげる」

盛大にサイファーは舌打ちして、渋々、本当に渋々彼女を部屋へと招き入れる。その時に横目でフレデリカにウインクしていった。

応接室のソファーにサイファーは先に掛けるように促す。だがコートだけ脱いだ彼女は座らず、不審に思いながらも座ったサイファーの巨体にしなだれかかるように座ったのだ。顔に青筋が浮かんだのを、フレデリカははつきりと見てしまった。

「なんで僕の隣に座るんだ？」

「フーン、体型は最後に会った時と全く変わってないわね。でも血流の流れが悪そうに見えるのは、精神的な要因かしら？ きつとあなたのことだからアルコールの濃いお酒を飲んで、好きでもない相手を一晚中好きにしてるんでしようけど、それは心には悪手で……………」

「黙れや。なんでそこまで言われなけりゃいかんだ」

「二つだけアドバイスするなら、近くににいるからとタカをくくらずに、相手が『いつまでも一緒に居たい』と思わせるだけの努力をしないと。アーカムを代表する淑女からのアドバイスは貴重よ？」

「は？ 誰が淑女だよ、腐れ売春婦の間違いだろ？ フレデリカのほうがよっぽど育ちのいい淑女だ」

「……………サオぶった切って殺してやる」

今度は女のほうがドスの利いた声になった。

どこに隠し持っていたのか、ポンプアクション式のソードオフ・ショットガンを股間に突き付けている。男の悪夢だ。例外なく股間を押さええて蹲り、息子の命乞いを恥もプライドも捨ててやるのだろう。

「……………何してる。僕は普通に事実を言ったまでなんだがなあ？　そういえばケリーは何番目の男だったっけ？　僕とベタベタしていたら、きつと血の涙を流すんじゃないか？」

「……………月夜ばかりと思うなよ」

「たとえ新月でも何食わぬ顔」

ショットガンが股間から離れた瞬間に、思わずフレデリカは胸を撫で下ろした。

こんなところで血みどろの大参事になるのは願い下げだ。ソードオフ・ショットガンの程度でサイファーがどうにかなると思っているわけではないが、古今東西の男は股間の息子を何よりも大事にし、大きさと固さに量まで比べて優劣をつける。きつと大丈夫だとしても弾を算段で挽肉にされるのは気分が良くないはずだ。

「まあいいわ。あなたたちも『Catherine Tramelle』に行き着いたのなら、利害は一致していると言つていいわね。近いうちにアルバニアンとそこで取引があ

るようなの。だから……アルバニアンになりすまして取引を台無しにする」

「僕らはてかが狩りを手に入れ、デリンジャーはアルバニアンに一泡吹かせてWinWinか。まったく楽しくなってきた」

心なしかワクワクワクワクしてるように見えるサイファーに、彼女はとんでもない一言を言った。

「出番があるのは、あなたじゃないの。なりすますアルバニアンの構成員は女の子なの。そしていきなりフレデリカのほうに向きなおったのだ。」

「はじめまして、私はキャサリン・ソーン。ファミリーの庶務雑用と変装担当よ。ボスの側近のケリーは私の恋人で、この上ないベストマッチの相手。どうかよろしく頼むわ」

「フレデリカ・エインズワースです。一応、サイファーさんのお手伝いです」

おずおずとフレデリカが差し出した手を、キャサリンはしなやかな指で優しく握り込んだ。

見惚れるほどの笑顔を、唇のルージュが彩っているようでサファイアブルーの瞳は宝石に負けないだけの輝きとなっている。

「今回の私の仕事は……あなたをアルバニアンの構成員に化けさせること。わかった？」

「……………わたし？」

自分を指さしたまま固まっていた。

想起、心の闇は弾け飛んで

疑問も抵抗もなかった。できなかつたというのが正確だ。

では行きましょ、とキヤサリンはフレデリカの手を引つ張つて、乗つてきたガーニーに放り込んで、連れていかれた先は住宅街の一角。薄暗い中に冗談みたいなものが、見合うだけの異様な存在感を放つていた。

家々を積み木にして、不恰好に積んだようなものが高さ十三メートル、幅三〇メートル、奥行一三〇メートル以上に亘つて占拠している。よく見れば接している部分は完全に融合してしまつており、恐るべきことに水平だつたりちよつと傾いていたりする家々は高さに関係なく明かりが灯つている。入り口と地表をつなぐのは、片っ端からツギハギにされた手すり付きの簡素な足場に階段、はしごが蜘蛛の巣のように張り巡らされている。

凶鑑で見た不規則網にそっくりだつた。

さらに住宅の塊を一区画にして、鉄筋とモルタル、ベニヤ板、段ボールとトタンとバラバラの材料の壁で隔てている。

設計図などなく、当座で行き当たりばつたりに築いていったのだろう。

「おもちゃ箱住宅地よ」
トイボックス・レジデンシャル

「どうやってこんなものが……」

「下層永遠の謎よ。子供が無遠慮におもちゃ箱に突っ込んだように家々が連なっているけど、逆さになっている家でも繋いでもない水道管に蒸気供給管からは、普通に水道や蒸気が出てくるの。料金を払わなくていいから、浮浪者とか根無し草連中が住んだりするのよ。おまけに倒壊したことは一切ないし、前にアーカムを襲った地震でもここだけは全く被害がなかったのよ」

「……縮図だ」

思わず口を突いて出た。

近所づきあいが健全に行われている区画もあれば、やたら口うるさく言い争っている区画もある。対面良くつくろっているように見えて、自分の家の前で隣人の文句を聞く相手もいないのに吐き捨てている男がいた。宅配便の若い男を、熟れた体を持て余した女が自宅に誘い込んでいる。子供を甘やかす親とひっぱたく親が、区画を隔てる薄い壁を挟んで存在している。

人間というもの、彼らの立つ世界、その縮図のように感じられた。

それを見たからこそ、人が生きる理由の一つを垣間見た。これほどの多様性があるからこそ、人は自分の求める何かのために生きていられるのかもしれない。

貧しき者は富を。

富める者は新たなる生きがいを。

周りに不満を抱く者は、新たなる場所を求めるか、去るか。

周りに満足する者は、素晴らしさを伝えるか、胡坐をかくか。

足りないもの、求めるものがあるから、それを手に入れられぬまま人は死ねないのでろうか。だからすべてに絶望した時、人は死を選ぶのだろうか。

フレデリカも大学時代、乱暴された時には世界の全てを呪い、何も出来ぬ自分に歯噛みした。ひどく痛めつけられたが、純潔を奪われることはなかった。だが『なぜ自分だったのか』という思いは常について回って、ごく一部の人間を除くすべてに不信を抱くようになった。

あのとき、なぜサイファーを匿ったのか。それも標的になった時と同じような、どうにもならない運命のいたずらなのだろうか。でも、それがきつかけで不信は解消されて、サイファー・アンダーソンという男は日常に組み込まれつつあった。

それも人生の酸いと甘さなのだろう。ただ楽しむには、フレデリカは若すぎた。

「小さな世界ですね、ここは」

「そうなるとアーカムはおもちや箱を入れる大きなおもちや箱になつちやうわね」

もしかしたら地動説により明らかになった星と宇宙も、より大きな何かからはおも

ちや箱に見えるのだろうか。そして、それからはおもちや箱の営みなど、本当におもちやでしかないのだろう。

「さて、私の仕事場に行きましよう」

そこからいくつもの階段とはしごを上っただろうか。

こじんまりとした一階建ての一軒に案内された。

中は完全に理髪店のそれだった。蒸気駆動式が主流のバーバーポールがないこと以外は、どこから見ても理髪店か美容院にしか見えない。

「ささ、座つてちょうだい」

「うわわっ！」

口調は促すように聞こえたが、半ば強制的に椅子に座らされた。

髪が付きにくいように滑らかな化学処理のされた布が首を一周し、そこから下を覆い隠す。完全に理髪を行うためのスタイルに移行した。

ちよつとだけ戸惑った。

髪型にこだわりはなかったものの、切るタイミングは自分で決めたかった。たとえば、いつ来るかわからない失恋の日とか、あまりにも伸びすぎたときとか。今、フレデリカの煌めく黄金の髪は腰を越えようとしている。

「綺麗な髪ね。普段から特別な手入れとかはしていないんでしょう？ ホント、羨まし

くなつちやうわ」

「わかるんですか？」

「その道の専門だからよ。髪を洗う石けんも、香油も、寝るときのスタイルだって、なんでもわかちやうのよ。髪を我が子のように扱っていたり、人前に出る仕事をする人は本当にきれいだ。でも、あなたの髪は今までの中で特別よ。羨まれるのも超えて、恨まれたんじゃない？」

「そう……ですね。じゃなかったらレイプ同然の乱暴はされなかつたと思います」

「……………つらい経験をしたのね。きつと私だつたら一晩泣けば、きつと明日から平気でいられるけど、きつとあなたは耐えられないわよね。好きでもない男に大事なものを踏みにじられるのは」

「それじゃない、それじゃないんです。顔を殴られたのも、胸やお腹に吸い付かれたのも、そんなにシヨックじゃなかった。きつと犯されたって、そうやってやり過ごせばいいはずでした」

キャサリンは髪を梳かす櫛を持つ手を止めた。

「——なんで、私だつたのかって。それだけが、ずっと引つかかつて」

「あなた——」

「普通に——普通に過ごしてただけなんです……なのに、あの人たちはことあるごと

に私を呼び出して、殴りつけて乱暴してツ。何も——何もしていないのにッ！」

激情が滴しずくとなつて黄金の双眸から一すじ溢れ、そこからとめどなく流れていく。両手で涙をぬぐい、その気になれば老若男女を問わずに喝采を浴びるであらう美しくもあどけない顔はくしやくしやになる。

いまだにフレデリカの心には亀裂がある。

世の理不尽にか細くも濃厚な怨嗟を吐き続ける、漆黒の闇を抱いた亀裂が！

だから銃把を握れる。引き金を引くことを躊躇わない。脳漿をぶちまけることに、抵抗はなかった。もし止まってしまうようなことがあれば、自分の身は世界という獣が持つ、理不尽という名の太くも鋭い毒牙で貫かれて引き裂かれる。

——私に手を出す下劣な奴らは

——全員

初めて人を殺めたあの日から、フレデリカの心は知らぬ間に軋んでいた。

およそ本人として気付いてはいない。それが共通事項だ。人は誰もが「自分は大丈夫」という根拠のない自信をもとに、我が身を切り裂くに等しい誤診を重ね続ける。

皮肉にも、そうしてしまったのは戦術を教え、過ちに悲鳴を上げる心を支えたサイファーだった。支える人間がいたために、心が追った傷は遅効性の毒に早変わりした。

「……信じられる人はいるの？」

「そう……ですな。ヘンリエッタにバベツジ教授に、それとサイファーさん」

「あら以外。あなたが一番嫌悪しそうなタイプじゃない？ あんなどても大きくて、キザなくせして肝心なところで踏み込んでこない男なんて」

それにクスリと微笑みながら、

「私がついても、彼くらい大きければちゃんを受け止めてくれます。それに付かず離れずくらいが、今は最適な気がします。それに……サイファーさんは口でからかつておいて、肝心なところだとしつかり優しくしてくれる人ですよ？」

花もほころぶような笑みに変えて、ふわりと笑って言ったのだ。

思わず姿見に映ったフレデリカにぼーっと見惚れて、それから一分も経過してしまっ

た。

「ホント、サイファーにはもったいないわ」

「あの……まだそういう関係じゃないので」

「いつか、そういう関係になれたらいいな。というくらいの願望はあるんじゃないの？」

「うう………背中を任せてもらえるだけで、私は充分です」

ほんのりと顔を赤らめて、もじもじしながら俯いた。

「でもサイファーは関係の発展を望んでるかも。たぶん背中を預け合うくらいじゃ、まったく足りないくらいに」

「私がそこに収まってるいいのでしょうか」

ここでキャサリンは拗づいた。

フレデリカの自己評価の低さに。その類まれなる、輝くほどの美貌を持つているのなら自惚れていたたり、自信過剰になつてゐる節がある。なのに彼女には全く存在しない。むしろ自分の顔の価値など感じていないようだった。

極論で言つてしまえば見た目の良さなど記号でしかない。

だから強姦まがいの乱暴を働かれた原因になつた美貌など疎ましいのだろう。そこそ運命の理不尽を呪い、気づかぬうちに己の心を黒く染め上げるほどに。

その清楚で清らかな美貌の下に、地獄の業火を燃やし、無明の闇を抱えて。

「もっと自信を持つたら？ きつとウジウジしている娘は好きじゃないわ」

「別に……好きというわけじゃ」

「じゃあ嫌い？」

「嫌いだったら一緒にいません！」

「それが答えよ」

今までフレデリカの髪を梳いていた手を止め、理髪椅子に座るフレデリカの前に立つていた。

完全に鮮やかなネイルで彩つた人差し指。びしりと突きつけられて。

「少なくとも、一緒にいていくくらいに、彼のことをあなたは想っているのよ」
決定的なまでに事実を叩きつけられ、視界がぐらついたような錯覚を感じた。

それだけキャサリンの言葉は的を得ていた。

最初は恋慕——違う。

次は依存で——違う。

たぶん一番はつきりしているのは、ただ一緒にいたいという気持ち。

大きくて、背の高い。強くて頼りになる、天邪鬼だけど優しい彼と一緒にいたいというシンプルな想い。硝煙と葉巻の香りを灰色のコートから漂わせ、煮え切っていない半茹での彼では釣り合わないような気もするが。美女と野獣、という人はいるかもしれない。

「いっそのこと立派なコレでも使って誘惑しちゃえばいいのに」

あつという間だった。キャサリンの手が下腹部を回って、そのままオーバー九〇の爆乳を鷲掴みにする。

むにゆう。そんな音が聞こえそうなくらい柔らかく、それを感じさせるほどに形を変
える。

「ひゃあつ!?!」

「うわっ、すぐくおつきい。なんでウエストがこんなに細いくせして、胸がこんなにおつ

きいのよ。何食べたらこうなるの」

「いい、いいいきなり触らないでっ!」

「触るなっていう方が聞けないくらい揉み心地。プロポーションは素晴らしいわね。ヒップも理想値に近いし、他は基準を超える細さと大きさ。コーデイネイトが楽しくなってきたわ」

そこから瞬く間に髪を整え、案内された衣裳部屋の服に着替えさせられる。さらに下着まで替えられた。

恥ずかしさどころかキャサリン曰く『胸囲に合わない小さいブラなんて使うんじゃないの』とお小言まで貰ってしまった、もう少し衣服やおしゃれに気を遣おうと思ったのであった。ただ、そのせいで見た目の大きさが大きくなったが。

鏡を見て、思わず目を見張った。

髪は耳の上でリボンを使って二つに結んでいる。リボンとフリルでいっぱいピンクや水色のパステルカラーで彩られた少女趣味前回のロリータドレスは、フレデリカのあどけなくとも美しい顔立ちに違和感なく溶け込んで、さらに肢体を華やかに包む。白いストッキングはガーターで留め、愛用の編み上げブーツも合うものと替えられた。

ここまでリボンとフリルでいっぱいだとプレゼント・ボックスになったような錯覚を感じる。そうなると箱の中身は一糸まとわぬ自分の裸身になってしまう。それを誰に

送ろうか——と考えたところで赤面した。

——そこで、なんで、サイファーさんが出てくるの!?

——違う、違う、断じて違うの!

——キャサリンさんと、そういう話をしたせい!

——そう、だから、絶対に違うんだってば!

一気に耳まで赤くなつて、頭をふりふり。何かと思つたキャサリンも何を考えたのかわかつてしまつたらしい。真つ赤なルージュの唇が三日月に変わつてつり上がった。

「サイファーに見てほしいの?」

「そ、そそそ……そんなわけありません! 見てほしいなんて、欠片も思つてませんから!」

「そりや寂しいな。まあ、僕の感想だけどき、そのロリータな服は似合つてるし可愛いと思うけど?」

いつの間にか家の入口にサイファーが立っていた。

灰色をしたロング丈のダスターコートに同じ色のテンガロンハット。ジーンズの上から白いシャツプスを付けたガンマンの出で立ちで、扉に背中を預けて立っていた。その銀灰色の目はフリルとリボンとパステルカラーに彩られたフレデリカを審美するように、ブーツから二つ結びにされたプラチナブロードよりは色の濃い金髪までを眺めま

わしていた。

そこまで期待と歓喜に満ちた視線を浴びせられると、さっきのプレゼント・ボックスの感覚がよみがえってくる。しかも、目の前に中身をあげる相手を考えたとき、なぜか出てきた男がいるのだ。

「やっぱりいい仕事するが……こんな服装で大丈夫なのか？」

「まったく問題ないわ。アルバニアンの取引相手は二〇歳のロリータ趣味愛好家。自分の顔も重大に成形したっていうくらい熱意ある女。フレデリカちゃんにはうってつけじゃない？」

「ちがいない。写真があつたら十枚は買ってる。それだけ似合ってる」

「デリンジャーに相談して、フレデリカちゃんの写真の販売をシノギにしてもらおうかしら」

「何言ってるんだコラぶち殺すぞ」

「あらあら怖い怖い」

サイファーはマジだ。本気^{マジ}だった。質量さえ感じるほどの凄味を放っている。ノミの心臓ならショックで停止どころか、爆発四散さえあり得るんじゃないかと思うくらいに。

サイファーもフレデリカのことでは割と感情をあらわにする。いつもは不敵でシニ

カルな笑みを浮かべて、煙に巻くように人をからかったりするというのに。

見た目を疎ましがっているから、普段から見た目を褒めることはない。こうやって衣替えとかをすると感想をくれたりする程度で、いつもは作ったご飯やおやつをべた褒めしてくれる。ただ美味しい手料理というものに巡り合ったことがないか、恐ろしく稀なことだっただけかもしれないが。

「似合って……ますか」

「あんまり嬉しくないか？」

「見た目とか服が似合ってるかを褒められるより、丹精込めて作ったご飯を美味しくいただいてもらったほうが嬉しいですよ」

「いや、それは今更過ぎる気がしてな。フレデリカのご飯はいつも旨いからな」

「あなたたち、本当はデキてるんでしょ？」

「違う」

次にカレーを作る時はわざと焦がしてみよう。

少しぐらいは意外なりアクションが得られるかもしれない。日頃から自分をからかっているのだから、これくらいの意趣返しをやっても罰は当たらないだろう。こつちも今更過ぎるが、思えばサイファアの胃袋はすでに掴んでいる。

「マズい料理を作れないのか？」

「う、うーん」

「すぐく返答に困る質問だ。」

何しろフレデリカは普通に調理してるだけだ。ただ技術を教えられたのは料理人の祖父だったせい、腕によりをかければフルコースだって普通に作れる。要はマズい料理になってしまう原因をことごとく回避するという、料理人の英才教育を叩きこまれたせいなのだ。

料理というものはキッチンという名の研究室で生まれる科学であり、レシピに記された分量は最適^{optimal}な化学反応^{chem}を起こすための黄金比だとフレデリカは認識している。それをないがしろにするような行いは教え込まれた教訓と経験が自動的に忌避する。

「マズい料理って、わからないんですよ。祖父の料理はいつだって美味しかったですし、ヘンリエッタも元から人並みには作れたので」

「世界中の料理できない人間を敵に回す発言だぞ」

「そりや目玉焼き^{サニ！サイド}も作れない人間の言うことだから、ずいぶんと説得力があるわね」

「しかたねえだろ。フライパンから皿に移そうと思ったら、こびりついて取れねえんだ」

あまりのことに内心まさかと思いつながら、確認で聞いてみることにした。

「フライパンに油引いてます?」

「それって引くモンなのか?」

思わず「信じられない!」と叫び出しそうになった。これはもう料理が出来なくて『ひどい』というより才能と思えるくらい『すごい』ものじゃないだろうか。今ではフレデリカが家事全般をやっているが、サイファーも掃除をすることがある。

ただ蓄蒸気圧式の掃除機を床一面にサツとかけて、はたきで高所の埃を大雑把に落とし、サツと雑巾で水拭きするくらいだ。本腰据えてやっているのは仕事着の手入れで、特にロングコートは大事にしている。今まで面倒な部分は人を雇って外注していたのだろう。つくづく贅沢だと思う。

「自炊って……」

「する暇もないような生活してた。結構前から落ち着いてきてからはメシに呼ばれたり、適当な場所で外食したりする」

「……わかりました」

フレデリカは決心した。

自分がサイファーの下にいる限り、キッチンには自分のテリトリーにしよう。よほどのことがない限りサイファーがキッチンに立つことはないと思うが、料理のイロハもさしすせそも理解していないような人間が包丁を振るうなどキツイジョークだ。

「呆れられちゃったみたいね」

「僕はなんか変なことでも言ったか?」

「フレデリカちゃんの中では、信じられないくらい非常識極まりないことね」

「料理と女は難しい」

すごくしかめっ面だった。

思わず吹き出しそうになる。それはそれでさらにしかめっ面になりそうだし、下手をすれば怒り出しかねない。戦いを生業にする者の悲しい性^{サガ}で、怒りの沸点は人並よりぐっと低いのだ。

それでも、ここに来た本題は忘れてはいなかった。

「準備はできてるみたいだな。それじゃデリンジャーと僕の作戦を教えてやる」



酒場『Catherine Tramell』はアーカム下層の駅。そこからキロ単位で離れた場所にある。

足を組んだ女の形をしたネオンサインが目印だ。隣はダイナーで扉を一つを挟んで

隣同士で、二つの店の店主は夫婦だった。旦那は酒場を切り盛りし、妻はダイナーで腕を振るう。

そこにパステルピンクの日傘がやってきた。日傘を握る反対の手はトランクを提げている。

取引相手になりましたフレデリカの所作は、つんと澄ましながら周囲の警戒を怠つてはいない。取引相手の癖や特徴は周知しているし、加えてアルバニアンとは初対面という話だ。ならばバレる心配というものは杞憂になる。

酒場の店主に今の自分の名前である取引相手をの名を言えば、そのまま二階の客室に通してくれた。

安っぽくなり過ぎない簡素な扉を通った先にアルバニアンの売人がいた。

品性の卑しそうな禿頭の上に、脂肪太りで背はやつと一六〇センチあるという、まるで球体のような男だった。下着一枚の上から毛皮のガウンを羽織り、両脇に肉感的な下着の女を侍らせて、その太腿に舌を這わせている。嬌声を聞いてしまい、心の底から帰りたくなった。

「待つてたぜ。そんなわかりやすい格好でありがたいねえ」

座りな、と言って目の前の一人掛けを指さした。

腰を下ろした瞬間に売人は包みを投げて寄越した。

「依頼人がどんな別嬪でも、仕事では手渡ししねえのが俺の流儀だ」

「触れただけで人を殺せる世の中ですから、仕方ないことですよ」

フレデリカの言ったことは真実だ。

下層の科学技術が生み出した人皮程度の厚さで手に隙間なくフィットし、触れた箇所
の皮膚から部位を問わずに五分で死に至らしめる狂気の暗器がある。

目の前の売人のように初対面の相手との接触をなるべく少なくするのは、ここで長生きする秘訣と言えた。

「最近になって出回ってる新薬だ。ほんの数ミリグラムでも一気にトべる」

「誰が作ったんでしようね？」

「教える義務はないぜ。薬をやり取りする以上のことはしない主義だ。知らないわけじゃないが、仕入れルートは独占したいんでね」

「本当はわかっていないだけで？」

「それは俺の主義に反する。自分でもわからないものを売るなんて、阿漕な真似は出来ねえ。吸ったことはないが、花屋をやってるやつにお試しで進めたら、えらく気に入ってくれたよ」

「その人の名前、ベンジャミンと言いませんでしたか？」

「あー……………そうだ、確かそんな名前だった」

間違ひなくこの売人は薬の情報を知っている。

服用したものを別の存在に作り変える、そんな狂気の薬物がいかにして生まれたのか。出回ってしまったえば、アーカム全体のバランスを作り変えてしまう。ワイアット・アープはそれを危惧した。ジョン・デリンジャーはそれを望まない。

そしてサイファーとフレデリカは託された。

だから余計に緊張する。ここでの結果が今後に大きく関わってくる。

「そっういえば」

売人の視線が舐め回すものに変わった。

フレデリカの足先から、ロリータドレスでも隠し切れない胸元まで、隅々まで視線が舐め回す。売人はフレデリカを視姦している。嫌悪感に飛び出しそうになるのを必死にこらえていたが、売人はそれをお見通ししているかのように愉しみを味わう。

「薬をやつてからハメれば相当なものらしいが、アンタはやつたことあるか？」

「……答える必要は？」

「ははっ、やつぱりアイツの言つたとおりだった」

指を鳴らすと同時に、短機関銃を携えた男たちが雪崩れ込んできた。

人数は十二人。それほど大きくない部屋は男たちと殺気によっていつぱいになり、フレデリカは針の筵と化した。

「アンタとは確かに初対面だが、中層の方まで行ってフリーの娼婦をやってるらしいな。だが、さつきから未経験としか思えない反応なんだよ。こうなったら本物か偽物かなんてどうでもいい。俺とこいつらで飽きるまで輪姦まわしてやるだけだ」

その言葉が何かをプツンと弾けさせる。

トランクに素早く手を伸ばすと、留め金に偽装したピンを引き抜いた。

それを売人めがけて放る。安全装置を兼ねた取っ手が、新館を抑えるバネの力で弾け飛んだ時、札束と同時に爆炎と熱波が襲い掛かる。

売人と自分を挟んでいたテーブルを蹴飛ばすと、飛び上がるように立つ。そのままドレスのスカートにある隠しスナップを解放する。スカートを膨らませていたパニエがいくつか外れ、スカート本体には腰までのスリットができる。そこに両手を突っ込む。

二挺が握られていた。『全にして一、一にして全』を冠する魔銃が。

振り返りざまに『All In One』をフルオートで薙ぎ払う。四人が一気に打ち倒された。

いつもと何かが違う。殺気に何かムラというか、強弱があるように感じられた。背後の殺気が灼け付くほどに強まった時、銃声が響く。

右頬を銃弾が掠っていくのがわかる。口径は九ミリ。フレデリカの視界は戦場によって与えられた回転運動をしながら飛翔する弾丸を、ハッキリと捉えていた。

また殺気が灼け付く。毎分六五〇発もの連続した発砲音が途切れ途切れに聞こえてきた。遅れてきたのは超音速の弾丸。五感は今や物理法則を凌駕した未知の領域にいる。普通の人間より傷の治りが早かったり、エネルギー質の何かを使って戦ったことはあるが今回は常軌を逸し過ぎている。

黄金の双眸が告げる。

——複数の銃撃に対する対応として、固有時間を基底時間から上位時間へシフト。

やはり瞳の仕業だった。

視界いっぱい広がる鉛の礫をしばらく見つめていたが、意を決したように双銃を持ち上げた。

大きなマズルフラッシュが目を焼く。放たれた弾丸は弾丸へと向かっていき、互いの運動エネルギーによってへしやげあつて潰れる。引き金を引く度に弾丸に弾丸を当てて打ち落とすという絶技を披露する。遅延された時間の中であってもフレデリカだけは十全に動けるといふ優位性の成せる技だった。

二挺を余裕をもってリロードし、今度は攻撃に移る。

目を付けたのは天井に吊り上げられた、部屋の質素さには不釣り合いなくらい大きな

シャンデリア。

あろうことか、そこへとめがけて跳躍し、足を引つ掛けてぶら下がる。

そのままシャンデリアごと回りながら、二挺をフルオートで撃ちまくっていく。リロードの際に装填したのは四〇連円筒弾倉ドラム・マガジンだった。連射は途切れることなく、部屋中に弾丸をまき散らすまで止まりはしなかった。

シャンデリアから飛び降りた時、役目を終えた弾倉も銃から解放された。

「あの女を殺せ！　ぶち殺せ！」

売人に冷静な思考はなかった。

捕え、いたぶり、凌辱の限りを尽くそうと画策した余裕も消え失せている。思考を支配するのは生存奉納だけで、部下はそのための肉の壁に過ぎなかった。だから、彼は銅鑼声で雇い入れた部下を呼び出す。

だが下層基準の四五口径の重量高速弾も無力だった。

遅延された世界の中、精確に放たれた迎撃の弾丸が当たるものだけを撃ち落している。それだけに留まらず、フレデリカは浴びせられる殺気から安全な範囲を読み取り、無意識のうちに陣取りを変えていく。

傍目には身を翻しての移動をしながら応戦しているように見える。しかしフレデリカには世界はゆつくりと回っていき、銃口と殺気の感触から最適な位置取りに移動と同

時の迎撃を行つてゐる。多くの修羅場を潜り抜けた荒事屋でも真似できない芸当だ。

今、部屋の出口には三人の男が円筒弾倉を装備した短機関銃で掃射を行つてゐる。

その弾幕を凌いでゐるわけだが、らちが明かないと判断。一息に床を蹴つて――

――距離を「奪う」のだ

弾丸の軌道を瞬時に読み取り、上位時間という最大のアドバンテージを活かして最適な縮地ルートを導き出す。あとはそこを通つて距離を詰める。まずは両手を交差させてのクロスファイアで二人。反動を乗せた銃身の打撃で顎を打ち抜き、崩れ落ちる瞬間を見計らつて頭蓋を吹っ飛ばす。

飛び散つた脳漿と血肉、頭蓋の内を晒した死体などどうでもいい。

這いずり回つて逃げ惑う売人しか眼中にない。

――あんな男。

――ゲスな男。

――私に手を出すなら。

遅延した時間の中で売人は滑稽なほどのろまで、憐れみももつたいないほどに無力だった。

自分がどんな顔をして売人を追い詰めてゐるかなどどうでもいい。

邪魔をする部下を機械的に二挺で葬り、追い立てるようにギリギリの位置に発砲して

やる。

転がりながら、涙も涎も垂れ流しにするボールそっくりの男は笑いさえ誘うようだった。

——ざまあみろ。

——いい気味だ。

——私に手を出すなら。

「——殺してやる」

一気に弾ける。激情が、しがらみが、闇に飲まれて一気に迸る。銃弾はそれを一身に受け、炸薬で飛び出す。

売人の右手首から先が吹っ飛んだ。きれいさっぱり。断面は鮮やかなピンク色だったが、いささか白が濃いような気がしてならない。

第二射。今度は左ひざ。内に炸薬でも仕込んであったように、ぼつと音を立てて弾け飛んだ。頬の生温かな感触は飛んできた肉片。摘まんでポイと捨てた。

第三射と四射は同時。右ひざと左ひじが血飛沫を噴いた。

真つ赤な血だまりの中で呻き、身をよじって苦しむ売人をいかなる顔で見つめていたか。些細なことだと断じて、一度おろした銃口を持ち上げる。

銃声。銃声。銃声。

撃って、撃って、撃ちまくる。弾丸は外さない。確実に一弾一弾当たっていく。

——ゲスめ。

——クズめ。

ようやく自分が笑い出していたことに気付いた。

だが引き金を引く指は止められない。

——殺してやる。

——犯ころしてやる。

——潰ころしてやる。

——壊ころしてやる。

——コロシテヤル。

「やめておけ」

弾切れの銃を延々と撃ち続けていたところを止められた。

振り向けば目に入る灰色の外套、大きな身体、銀灰色の瞳と橙の髪。大きな手が銃把を握る手を優しく包み込んで、険しい顔をして立っていた。

「手がかりを潰す気か」

押し退けるように売人に近寄ると、瀕死の身体を掴み上げる。

「ひいつ、サイファー・アンダーソンがなせこにッ!」

「そんなことはどうでもいい。誰に僕とデリンジャーの罖を聞いたこともな。ただばら撒いてる薬の出所はキリキリ吐いてもらうぞ」

闇が濃くなっていく。

すべての活力が押さえつけられ、失われていくと錯覚するほどの威圧感が空間を満たす。それは間違い用もなくサイファーから放たれているのだ。コートの黒が濃くなつたような気がした。

「第五区画のイカレた学者から買つてんだよッ！　いくらでもいいから卸売してくれねえか、つてなッ！　ほーランドつて名前だったよッ！」

「そっかい」

こめかみに破壊の化身が突き付けられたのを、売人は果たして感じていたのか。

七〇口径もの巨弾が肩に至るまで破壊効果を存分に発揮した。肩から上は数ミリ程度の肉片をまき散らし、冗談じみた量の血飛沫が一面に飛び散った。

「悪いが」

フレデリカのほうをふり返って、

「フレデリカに向かつて輪姦まわしてやる、なんてのたまったことにブチ切れたのは、本人だけじゃなくて僕も同じさ」

「あ、あの……」

「無事でよかった」

そつと抱きしめられたことを理解するのに時間がかかった。やはり大きな彼の腕の中は不安も何もかもを、潰して、砕いていくようで、フレデリカにとつとでも暖かだった。

「すみません、私あともう少しで……」

「いや、僕もお前さんを買いかぶりすぎていたからね。そのツケがまわってきたのさ。次はどんな時でも研いだけかりのナイフのように澄まして冷静であることをオススメしよう」

「……………はい」

腕の中なのに、暖かなものの内にいるのに、気分はずんと沈む。

暴走した自分を恥じている？

手がかりを台無しにするとどうだった自分を情けなく思っている？

——違う。

気づいたのだ。あの時の自分がどんな顔をしていたのかを。

——泣きながら笑っていた。

そして売人を蹴り抜いた。追い詰めるために手足から撃ち抜いて、芋虫も同然になつたところを死にづらい個所から撃ち抜いていく。喉を潰すほどの、聞くに堪えない悲鳴

を聞きながら、芽生えたばかりの嗜虐心にまかせて引き金を引く。とうに弾倉は空だといふのに。

——そうか。

——あんな怪物を自分の内に飼っていたことを、恐れていたんだ。

自分の身体が人間離れして、怪物じみている自覚はある。

けれども本当の怪物とは心まで人間離れすることだと、たった今知った。そして、さっきの自分は心まで怪物と化して、力のままに目の前の人間をいたぶった。一すじだけ涙が落ちた。

「サイファー！ フリツカちゃん！」

慌てた様子のキャサリンが肩で息をしている。

「アルバニアンの連中が大挙して、ここに、やってくるわ！」

黄金と銀灰色の瞳が合った。

フレデリカは二挺を再装填した。

殲滅、覚悟と勇気をいただいて

武装の準備はし終わった。その頃には何人か階下になだれ込んできたことを物語る、物々しい足音が少なくとも十以上は聞こえていた。殺気が叩き付けてきても、フレデリカの思考は本人も不気味に思うほどに平静だった。だから闘志は程よく燃えて、総身に力を取り戻させている。

シリンドラーをスイング・アウトした『Howler in the Moon』を見つめたまま、サイファアはフレデリカのほうを見つめていた。

気にするのも無理はないと言えた。狂的なまでの感情の本流を、銃弾に乗せて一人の男をいたぶって凌辱したのだから。おそらくはベアトリクスを殺してしまったあの日から、その心には狡猾なまでに存在を隠した悪魔が巣食っていた。悪魔は闇という名の毒素を放ち、幼気ささえ感じさせる女を一時的に怪物に変えた。

「頼むから無理だけはしてくれるな」

「大丈夫です。今度はきちんとできますから」

聞いたことのない冷たい、平坦な声だった。およそ心に吹雪でも吹き荒れてなければ出せないような、抑揚の存在しない声だ。

いつもは朗らかに笑って、殊勝と言つていいほどに自分に良くしてくれる彼女に、こんな一面があるとは夢にも思わなかった。

きつと自分は狂戦士に斧を与えてしまった、とサイファーは内心悔やんでいる。それはフレデリカ自身の望みでもあった。襲い来る全てを自力で撥ね退け、迎撃するだけの力を深層心理は渴望していた。牙を得たのが狼か、狂犬か、内に飼っていたものが校舎であれば、得た牙は己の喉笛を食い裂き、両眼を抉り出し、はらわた腸を引きずり出す。

「もう下に来ていろわ」

ソード・オフしたショットガンのフォアエンドをコツキングしながら、不安をキャサリンは階下に向けている。

実戦を経験したことが皆無というわけではなかったが、彼女の専門はあくまでも変装に必要なメイクに服の見立て。拳銃にナイフ、大型散弾銃にベルトリンク給弾式の機関銃を持ってしゃかりきになるのは別の人間の仕事だ。万が一に備えて、部屋に飛び込んだのフォローを入れようと思つてついで来たのが運のツキだった。

「別に後ろのほうでブルついてもいいんだぞ？」

「それはそれで女が廃るつてもものよ」

「猛々しいな。男ウケは悪そうな気がするけど」

「黙つて見てるなんて性に合わないのよ」

「私も……おとなしくしてる気はないですから」

フレデリカから放たれる気迫ともいうべきものは、ぐんと勢いを増している。年は二〇と少し、顔立ちはティーン・エイジャーにも見えるあどけなさから想像もできない重々しさを伴っている。

一皮むけたといえればそれまでな気もするが、その範疇には確実に収まり切っていない。

本質が何か別のものに変わったようだった。優しげで、儂げで、穢れに染まり幾度も折れても挫けぬ心は感じられない。自分を追い詰めてきた全てへの意趣返しを果たさんとする、今も砥がれつつある殺意だ。老若男女の価値観を越えて心に響くだけのニフのごとき美貌が後押ししているように感じられた。

「いざとなったら僕が突破口を開く」

「一回で何人いけるでしょうね？」

「実は柄にもなく動揺してて、いつもの余裕と冷静さは半分だ。何人か外すかもな」
階下への階段の一団目を踏んだ時に、濃密な殺気が三人を叩く。キャサリンは取り落としそうになった散弾銃を慌てて持ち直した。やはり荒事の経験というものは土壇場で生きてくるというものだ。

サイファアの手にはいつものリボルバー。近代に類を見ないほどの破壊兵器だ。

「見え見えだぜ」

階下で待ち受ける者の目にひよつこりとリボルバーが顔を出した。

建物中のガラスに陶器が粉碎するほどの銃声が鳴り響く。腹の底まで響くほどの轟音は、襲撃者たちにはかり知れない恐怖を植え付ける。

上半身が内側に爆弾でも仕込まれたと思うくらい爆散した。それが三人。

ぶちまけられた赤黒い汚物は酒場の一階を広く染め上げる。下半身だけの死体がどろどろと倒れた時、襲撃者たちの闘志は一気に大爆発する。

「野郎、やっちまええ！」

「ぶつ殺せ！」

「仇は取ったらあー！」

獲物を抜いた時、灰色の風が吹いた。

一人の襲撃者が自分の手首が地面に落ちるのを見た。床に落ちた瞬間を見届けるには首を下に向けるしかないが、彼は首を動かした覚えは一切なかった。最後に見た光景は刻まれた首のない己の身体が、バラバラになって崩れ落ちる瞬間。きっかり三秒後に彼は息絶えた。

それは他の者たちも同様だ。十数人がなますに切り刻まれた。

その元凶は階段の踊り場から酒場の入口まで一気に切り抜けたのだ。

サイファー・アンダーソンはその手に五尺もの野太刀を携え、酒場の入口に立っていた。

超人的な膂力にまかせての疾走と神速の剣戟は十数人もの男たちに、何十もの死の刃となつて襲い掛かつていた。男たちはその体を複数にわたつて刻まれていたのだから、その刀の腕前がどれだけ凄まじいかをはつきりと示した。

「や、やろお……ッ！」

「……真正正銘の化けモンだな」

敵うはずのない存在を前にして残つた五人の男たちがとつた行動は、サイファー以外の排除に移ることだった。

タンと靴音が響いた。フリルとレースで飾られたゴシック・ドレスに合わせたブーツが床を打つた。その手には四〇〇ミリに迫る二挺拳銃が握られている。

その顔立ちは女に似ていた男たちの心を激しく打つ。

見たことがないほどに美しくも、可愛らしい。少女から女へと変わる境の黎明のごとき、儂くもこの場に確かに存在している。それでも二人の男は冷静だった。油断するな、と鉄火場を潜り抜けてきた経験と本能が警鐘を鳴らす。

二人の武器はウィンチェスターM94とM1912トレンチガンだ。三〇口径のライフル弾は下手な装甲は簡単に貫通するし、切り詰められた銃身から放たれる算段は規

格外の殺傷範囲を誇る。

散弾を避けたところをライフルで撃ち抜くという連携が二人の得意技だった。いつからコンビだったかなど修羅場の戦慄が塗りつぶしたが、それでも磁石のごとく荒事には二人でいた。ボスは二人の連携を気に入って、常にペアでいるように命令するくらいだった。

——兄弟、俺はなさけねえくらいブルってるぜ。

——心配すんな、俺もだ。

トレンチガンが火を噴いた瞬間に、もう一人も身構えた。

有効射程距離は拳銃にも劣るが、散弾の売りは点を集めた面の制圧力だ。スラムファアアで休まずの二発目を撃てば、逃げ場ほとんど無いに等しい。

フリルとレースが視界から消えた。

並外れた俊敏さに驚く暇もない。相棒のもう一人は跳んだ先をすでに追っていた。

三〇口径のフルサイズ・ライフル弾を食らえば、たとえ鋼の筋肉を持つていたとしても無事では済まない。さらに弾丸は特製だ。強固な合金の被膜は厚さ一〇ミリ以内なら大抵の装甲を貫通するが、その下には数倍に広がる工夫を施した鉛だった。内臓を切り裂いて、掻きまわし、摘出しようが鉛中毒が苦しめる。

腹に撃ち込もうものなら広がる灼熱にのたうち回るだろう。

歪んだ笑いを浮かべていた。狙いは冷静に、どす黒い感情を乗せて引き金を引き絞った。

妙な音がした。銃声がした刹那の後、金属と金属のぶつかり合う、異様な音が。

まさかドレスの下に装甲でも仕込んでいたか。疑念は瞬時に彼女の身体の足から下まで見回させた。いや、金属板の類を仕込んでるようには見えないし、やたらデカい乳はどう考えたって本物だと結論を下した。裏付けるように体のどこにも銃創が存在しない。

——— どういうことだ、クソが!?

反射的な神速のレバー・コックからの第二射は正答の判断だった。

それも同じ結果に終わった。

自分と女の間にあるひしやげた弾丸がある予感を浮かばせる。

——— まさか。

——— 弾丸を弾丸で撃ち落としているのか!?

さらに第三射を撃った時、予感は真実として叩き付けられた。ライフル弾を撃ち落すために、目の前の女は二発の弾丸を寸分違わず、自分の銃弾に撃つて当てている。信じられるわけがなかったが、三度もの発砲は紛れもない真実を雄弁に語る。

「兄弟!」

「おうよー」

三発目の散弾と同時に獲物を持ち替えた。

M 9 4 から二挺の M 1 9 1 1 に。こうなれば一発で勝負するよりも、複数の弾丸で勝負した方がいい。多くの弾丸に一工夫を加えれば、闇雲な乱射はヴェールを脱いで狩り人の矢と化す。

弾丸の数は左右の弾倉の合計と薬室の分で計十六発だが、実際に狙って撃った弾丸は六発ほどだ。自動拳銃の連射には自信があるから、雁に女の技量がでたらめであつても弾丸をすべて撃ち落すことは不可能なはずだ。

それも散弾を飛んでよけながらでは拍車がかかるだろうと計算に入れていた。行動は完璧だった。

弾丸が交錯する。

散弾銃が吠える。拳銃が鳴く。二挺は七回の怒号を轟かせる。

それでも銃創は一つとしてない。いくつかの弾丸——合計にして十発が——壁に撃ち込まれている。撃ち落とされた弾丸は六発分だけ。

「残念ですけど、読めてるんです。六発しか私を狙ってないのも、万が一にも奥が一にも外したときは仲間が仕留めることも」

相棒の思考もびつたりと息を合わせたように、M 1 9 1 1 の二挺拳銃を外した時に備

えていた。だがトレンチガンの引き金に指をかけたまま、脳漿をぶちまけて倒れていた。脳幹を吹っ飛ばされては一切の行動もできずに絶命する。

交差するように構えた二挺は右手を息絶えた相棒に、左手は自分に向けられている。両手のM1911はすでに弾切れだった。M94を拾う前に相棒と同じ末路を追うだけだ。女の後ろで仲間の3人がどでかいリボルバーで吹っ飛ばされるのを見て、自分の終わりがこの仕事だということ察してしまう。

だから聞いておきたかった。

「名前、なんていうんだい？」

「……フレデリカ。フレデリカ・エインズワース」

「ぴったりのいい名前だよ」

飾らない率直な感想だった。

「なんでそんなデカい銃を二挺も持って、こんな鉄火場にいる？」

「ほとんど成り行きだったんですけど、つい先ほどはつきりと分かったんです」

「ぜひ聞かせてもらいたいねえ。冥土の土産にさ」

こっそりと後ろ手に薬室に一発だけ込めた。スライドも戻してあるし、撃鉄も起こしたから、いつでも撃てる。

「傷付きたくないだけなんです。そう思うくらい痛めつけられたせいで、心の奥に深く

「怒りが根ざしてるんですよ」

「大層な理由だな、あんたにとっちゃ」

「未遂でも、レイプはシヨックなんですよ？」

「さっきの言葉は忘れてくれ。それでも、その怒りはアンタを食い尽くす。今もこの瞬間もむしばんでるだろうし、俺がこっそり一発込めたことも」

「知ってますけどね」

「忠告のついでに受け取っていけ！」

人生最高速の抜き撃ちだ。

ガクンと膝が折れたのを感じた。弾丸が撃ち落されたことも、心臓の辺りを打ち抜かれたことも。

銃声が遠くでなったような気がして。

それっきり。

それっきりだった。



脳漿をぶちまけて倒れた死体をぼんやりと眺めていた。さつきまで饒舌に喋っていたというのに、呆気ないほどに一生その口を開くことはなくなつたのだ。死の不可逆性とその唐突な到来を嘔み締めた。

念のために二挺に再装填した。

『Align One. One in All全にして一、一にして全』を名に戴く魔銃だ。銃把を握り込んだだけで、人界の常識というものを薄氷のごとく撃ち砕くものだとわかる。それを抜きにしたつて、つい先ほどに目覚めた力は異常すぎる。

殺気の濃度から攻撃のタイミングを読み、込められた想いから本当に殺すための一撃を判別し、自分の時間軸を上位にシフトすることで周りを遅延させる。

サイファーと違つて体に変化するといった、目に見えてわかるような異変ではなかったが、自分にしかわからないからこそ恐ろしかった。

「……平気か？」

だから気遣いの言葉をかけられたことに気付くのにも時間がかかった。

左隣に大きな灰色の巨体が。灰色のロングコートを着込んだ、見慣れた姿。手には愛用の規格外な大ききのリボルバーを握つたままだ。あれで三人くらい葬つたはずだ。その死体は原型さえとどめていない。

「覚醒が進んだか………怒りが引き金になったかな？」

つ、と大きな手が頬を撫でた。

いつも触れられたときは、不思議と嫌じゃなかった。邪さを視線から、表情から、態度から、まったく感じられなかったから。気遣いと慈しみがなせる技だと、直感が告げている。

でも今はすごく気難しい表情をしている。何かを探っているようで、それが忌々しげで、苛立っているように見える。

「そう……ですね。きつと今まで吐きだせなかった分が、嘔いて出てきたんだと思います」

「それが『力』の覚醒を促したか。僕が探ってみたのと勘を合わせれば、まだ覚醒の伸びしろはある」

「まだ、増えるんですか？」

「きつと欲する限りね」

背筋に氷の針が刺さったように感じた

手に入れた力はすべて強大なものばかり。さらに周囲の遅延は確実に黄金へと変じた、自分の双眸が関わっている。自分の頭の中に直接語り掛け、いくつもの力を与えている。

それ以上の力があるなど考えたこともなかった。今しがた手に入れたものに戦慄を隠しきれていないというのに。

サイファーは覚醒の原因を怒りと言っていたが、そうだとしたら、また同じように新たな力を手に入れるだろう。根源にあるのは理不尽への行き場のない感情だから。自分に降り注いだことへの怒りが、心をどす黒く染めて黒い炎を燃している。

ぶつける先は売人のように自分を犯すことを考えていたり、襲撃者に命を脅かす者たち。殺し、犯し、潰し、壊すために力を欲するだろう。ぶつける先の人間たちと同じ穴の貉であることに気付いて、自らの浅ましさに泣きそうになるのをこらえた。

「力は恐れるもんじゃない。理解して、飼いやらせ。手足のように操り、寸鉄のように潜めておけるように」

「でも……私は、また今日のように、なってしまうかもしれないんですッ！ 手がかりを潰したり、勢い余って殺してしまったり、するかもしれないからッ！」

「そんなの僕が手伝ってやるしかねえじゃねえか」
「……………え？」

いつものシニカルで不敵な笑みではなかった。

ふんわりと、仕方ないなと目で言っていたが、優しげな笑みだった。見たこともなかった。

「二人じゃ、ないんだよ？ それに自分の身は自分で守れるようにしてやるといった手前、力に振り回されるなんて自体は嫌だからな」

「……ありがとう、ございます」

「つたく泣くこたあねえじゃねえか。頼ってくれなきや、僕は何のためにいるんだって話だ」

言われたから泣いていたことに気付く。思わず俯いた。つま先の地面に涙のシミが出来た。

また暴走するかもしれない、こんな自分に優しい言葉をかけて、支えてくれると言ってくれている。分不相応なくらいの優しさをくれようとしていることに、言いようのない嬉しさと安心が多幸福感になる。

なんてどうしようもない女なのだろうと思う。

サイファーの器に収まって、依存しようとしている自分に。彼の器というものが大きい小さいのかはわからないが、およそ迷惑とは思っていないようだ。それに安心して身をゆだねようという自分があさましくて、受け入れようという優しさが嬉しくて、とても複雑な思いだった。

「すみません……ちよつと嬉しくなっちゃってしまっ」

「そうかい。ちよつと自分でもクサイセリフを吐いちまったな、なんて思っていたんだ

が」

「そんなことないんです。一人じゃないって、頼っていいって、本当にうれしくて」
顔をあげると、ムスツとした表情のサイファーがいた。

何か怒らせるようなことを言ったのだろうか。結構こだわりが強いというか、格好つけたがりだ。そういうえば『優しい』とか、そういうことを言われるのを嫌がっていた。

「ちよつと、私を置き去りにして何してんの。言っておくけど最初から見てたけどね、あなたたち本当はデキてるんでしょ？」

完全に存在を忘れていた。

言葉通りだとすれば、今までのやり取りを全部見られて聞かれていたというのか。

かなり恥ずかしい。思い返してみれば、明らかに同居人以上の人間がするような会話だった気が、しないでもない。それを知り合つて間もない人間の前で繰り広げていた。冷やかしを食らうのも納得と言えた。

「二度とそのネタで冷やかしたり、からかったら、舌を引っこ抜く」

「あらあら、それだけフリッカちゃんが大切なのね」

むすつとしてた顔だったのが、さらに眉間にしわが寄つてひどいことになっている。

でも怒っているように思えなかった。苛立っているのは明白だが、怒りとは違うよ
うな気がするのだ。

「サイファアの顔、そんなにしげしげと眺めてどうしたの？」

「え、いや、しげしげとなんて、見ていないですよ！」

「だったらいいことを教えてあげるわ。今のサイファアはあなたの言葉で照れてるの」

はい？　と思わず聞き返しそうになった。

ムスツとした怖い顔が、まさか照れているときの顔だとは信じがたい。視線を薙ぎ払うようにしてにらみつけければ、範囲内の全ての一般人はビビり抜くと思うくらいの顔になっっているのに。

「照れた顔を見せるのは情けなくてカッコ悪いから見せたくない、という理由で照れそうになつたら顔中に力を入れてるの」

「やめろ、それを言うのはホントにやめろ」

「意外にかわいい人なのよ」

「ああ、それはわかる気がします」

「……マジで切実にやめてくれ」

二メートル近い巨体が一気に縮んだように感じられた。

やっぱり、なんだかかわいような気がする。照れた顔を見られたくないなんて、どれだけ格好つけたがりなのだろうか。改めて思えば灰色のロングコートとかテンガロンハットとかシャツプスとか、格好つけてる以外の何物でもないような気がした。

ただ中層あたりの荒事屋たちも格好つけたような人間ばかりだった。サイファーが特別というわけでもないらしい。

「でもコートを馬鹿にするのはダメよ。なんでも大切な人からもらった、今じゃ形見になっちゃたものだから」

「はじめて聞きました」

「この下層でも二つと造れないくらいの特別製だ。気に入ってきてるフシもあるけど、今の僕がいる要因となった人間から貰った代物でな」

「こまめに手入れしてますから、大事なものだと思っただんですけど。それだけ大事なもののなんですね」

「そのあたりも含めて面白い人なのよ、サイファーは」

「……やめてくれよ、ホント。僕の色んなモン、ズタズタだぜ」

普段の行いが災いしたかな、と思ってしまった。

さんざん人をからかっているのだから、一種の意趣返しになった。凶らずもだが。「それにしてもホーランドね。デリンジャーの知っている人間だといのだけど」

「十中八九、知らないだろう。ヤツは顔を知っている人間がやった悪事には地獄耳だ。それ以外は人並だからな。しかし第五区画か、まったく厄介な所にいるもんだ」

「危険な所ですか？」

「うーん、ベンジャミンのアパートがあつた第四区画に勝るとも劣らない。下手に行くのは躊躇われるな」

腕を組んで唸っている。

たしかに同じくらい危険なのなら、おいそれとは行けない。それに今日は自分自身の変化や荒事もあつたので休みたい気分だ。

「今日は宿に戻って休もう、と言いたいところだが」

「え？」

「今回の襲撃者のことを考えると、このまま宿に戻るのは危険だな」

「もしかして薬物の大本とアルバニアン・マフィアが手を組んでいる可能性があるとしても言いたいのか？」

「そういうこと。この調子じゃ中層の自宅も待ち伏せられてるかもな」

そのまま酒場のカウンターの方まで歩き出した。

奇跡的に流れ弾にもあたらずに無傷だった店主に何か言った後に、そのまま電話を持って来させた。

——話の途中で訝しむような顔になっていたが。

「新しい宿の手配ができた。デリンジャーのヤツはこういうときにも心強いな」

デリンジャーに電話をしていたらしい。

下層のだいたいのことを牛耳っている彼ならば、アルバニアンの手の及んでいない宿を手配することなど容易いことだろう。こういう時とサイファーは言っていたが、基本的に筋さえ通していれば、かなりの無茶でもできてしまいそうな気がする。

「変な場所じゃないでしょうね？」

「そんなことでできるかバカ。入り口を見ただけで悲鳴あげちまうわ！」

「まあ、あなた譲りのからかい癖のあるデリンジャーだから、何かあるとは思うけどね」

「……………そうなの？」

「気づいてなかった？」

「まったく知らなかったわ」

どうやらデリンジャーにも同じくらいの悪癖があるらしい。

もしかするとサイファーからうつったのだろうか。キャサリンも「あなた譲り」と言っていたから、そっちのほうが正しいのかもしれない。だとすると癖がうつるくらい昔からつるんでいたのだろうか。そうなると五年以上は一緒にいた仲なのは確実に、もしかしたら十年以上だということもあり得る。

——もしかしたら。

——年を取っていないのかな。

うすうす感じてはいたが、改めて意識すると戸惑ってしまう。

あらゆるものを砕き、破壊する強大な力を振るう彼が真つ当な人間ではないとは確信できる。どれだけの年月を生きていたかなど想像もつかないが、少なくとも見た目通りの年齢ではないだろう。

だから自分の過去というものを語りたがらないのかもしれない。

仮に悠久の年月を生きていたとしても、信じられるようなものではない。

もし信じられたとしたら、その瞬間から化け物や怪物として見られる。

どことなくシニカルで不敵な笑みも、厭世的な雰囲気もそこから来ているのかもしれない。

——そうだとしたら、私は何をしてあげられるのかな。

自分をそばに置く理由がわからなくなってしまった。いや、元から不明だったのが、もつとわからなくなってしまう。

「どうした？」

「いえ、なんでもありません」

「ま、あんまり考え込むのも良くない。早いとこ休もう」

移動は蒸気二輪車ではない。ガーニーだった。あれを乗りこなせるのはサイファーくらいしかない。下手に居場所を知らせるような要素は省いておきたいが故の措置だった。

ハンドルはサイファーが握っていた。やはり移動手段のことを考えて免許は持つておくべきだろうか、とぼんやり考えていた。女性でも乗りやすいタイプの小型ガーニをどこかの企業が開発していたような、なんてとりとめのないことを考えていた。

「フレデリカ」

考え事をしていたせいで反応が遅れてしまった。

「ひゃい！」

どこから出たのかと、自分でも不思議に思うくらい甲高い返事になってしまった。

「まだついてくる気か？」

「え？」

質問の意味が一瞬わからなかった。

「今更なことかもしれないが、僕の稼業はとつても危険だ。だから危険予知とか危機の察知は必須なんだが、僕の勘がこれから先がとつてもヤバイと訴えている。正直言つて、お前さんを守りながらやっつけていける気がしない。だから中層に変えるなら今の内だと思つてな。ヘンリエッタあたりを頼れば、居場所もあるし危険も少ないはずだ」

「そんな……どうして、いきなり今になって」

「僕のけじめだ。その、まあ……なんだ。ちよつと恥ずかしくて言いにくいことなんだけどな」

目を丸くした。

ちよっとだけサイファアの頬は赤い気がする。どこからどう見ても、気恥ずかしさと照れの混じった表情だ。

——やっぱり、少しだけかわいい。

内心でほくそ笑んだのを気取られないように、努めて真剣な表情を崩さなかった。照れた顔をしていても、サイファアの眼差しは真剣そのものだったから。

「……………いなくなつてほしくは、ないんだ」

「…………え」

「僕が危険を感じるくらいヤバいなら、お前さんだと命を落とす可能性が高い。僕もなんでこんなことを言ったのか、お前さんをどう思っているのかも、わからないんだがな。けどな、多分いきなりいなくなられたら、すごいことになりそうな気がしてならないんだ。僕は克己心という者や自制の類に自信のない性質たちでな」

それは包み隠さないサイファアの本心の訴えだとわかつてしまった。弱音の類とは無縁だとばかり思っていたのは、フレデリカの勝手な想像だったのだ。

戦いの場では強靱な肉体と強大な力にまかせて何もかもを蹂躪し、砕きつくす彼でも、弱さはあるのだ。暴力では決して解決できないような、説得や交渉はきつと不得手なのだ。だから少しでも自分の意思と主張を聞いてもらうために、本心の全てに至るま

でさらけ出した。

それだけ自分を大事に思ってくれているのだろうか。

「いまさら、この件を私だけ下りろというんですか」

「恨んでくれてもいい」

「あなた一人に全部を任せて、自分は安全な場所にいるなんて、そんな寝覚めの悪い真似が出来るわけ……ッ」

ガーニーが急ブレーキをかけたかと思えば、座席がガクンと倒れた。そこを大きな手が押さえつけてきた。

息の詰まる感触、必死になって息をしようとする自分を阻むように、眼前にいる彼の顔は険しかった。ほとんど押し倒されるような体制で、密着しているのに等しいはずが体温は感じられなかった。背筋に冷汗が浮かんでいる。

「聞けない、ってか？」

ドスの利いた声だ。体格の割には高めな彼の声からは想像もつかない、地を這うように、鉛の空気を伝わってきた声。

「私だって、譲れない領分というものが……あるんです」

それに、と付け加える。

「私だって……あなたがいきなりいなくなられたら困るんです」

覆いかぶさっていた巨体がなくなった。

すう、と深呼吸すれば、押し倒された時の苦しさは和らいだ気がした。

「チツ、お互い同じ思いってことかよ。デキてんのかつて冷やかされるのもわかる気がしてきた」

吐き捨てたながらガーニーを再出発させた。

急発進気味だったせいで、倒れたシートにもう一度倒れた。

「すみません」

「気にするな。お互いに譲れないモンがあるということ。あんまり従順にホイホイ従っていられると、ちょっと付き合い方を考えなくちやいけないなと思っていたところだ」

「なんか……ただの同居人の会話じゃないですよ、ね？」

「やめろ」

「ごめんなさい」

「変に意識する」

「え？」

耳を疑った。

意識する、と言ったのだ。今まで一か月前の約束のために同居しているだけで、それ

以上の存在として見ているとは露ほども思っていない。サイファー以外の男性には苦手意識を抱いているし、彼も自分の作った食事にはちゃんと感想をくれるし、家事全般をやっていることに感謝もするし手伝つてもくれる。

だから意識されているなんて夢にも思つてなかった。

「ちよつとでも考えたことなかったのか？」

「そんな、こと」

「ガワが特級に良くて、中身もいいなんてほつとけねえよ。作るご飯がうまくて、家事も全部できて気立てもいいじゃねえか。大抵の女はガワが良かったらノーテンパーか悪女だし、作る飯は消し炭かゲロだ」

サイファーはそう言った。

違うと言いたかった。心は黒く染まっている。

完璧というわけではないのだ。そんなものは存在しないと少ない経験から導き出している。

だからサイファーがここまで自分を褒めるようなことを言っているのが我慢ならなかった。できることなら大声で違うと言ってしまいたい。

「だけど、そんなお前さんにも歪んでるところはあるんだな」

「……………はい」

「誰だってそうだ。一生向き合っていないきやならないことだな、僕も未だにケリをつけられないんだ」

「一人じゃない、頼っていい、そう言ってくれましたけど、お互いに言えることですね」「じゃあ僕が頼ってきたときは、お前さんはどうしてくれるんだい？」

「腕によりをかけて、食べたいものを作ってあげます」

「……そいつはいいね」

サイファアは少し寂しそうに見える笑い方をしていた。

なぜそんな笑い方をするのか、不思議には思ったものの、気づいたら今夜の宿に到着していた。すでに入口の前でコンシエルジュが出迎えている。

「アンダーソン様ご一行ですね？」

「デリンジャーから聞いているのか」

「はい、都合良く一番いい部屋が空いておりますので、そちらにご案内させていただきます」

「あー、頼む」

そっけないような対応だったが、フレデリカはちよつと戸惑っていた。やってきたホテルはそれなりに上流だ。外観も陰鬱として薄暗い下層の中では目立つほどに綺麗で、中もちゃんと整えられている。コンシエルジュの対応も悪くはない。

やっぱり住む世界が違うな、と改めて思う。

サイファアはコンシエルジュにチップを握らせると、案内されるままついて行った。フレデリカも後に続く。蒸気機関で駆動する昇降機エレベーターは上下と共に、壁から蒸気音が聞こえてくるのが欠点だ。その点も配慮しているのか階に着いて扉が閉じれば、そこからの音はぴたりと止んだ。おそらくは壁を二重構造にして、間に音の振動を梳いとるウレタンのような素材を詰めているのだろうと推測した。

これほど良い所を急場で用意してくれたデリンジャーには、感謝してもし切れないだろう。

「こちらでございませす。何か御用があれば、室内の内線からどうぞ。ご夕食は九時を予定しておりますが、変更するのであれば何なりと」

「つたく、デリンジャーのヤツもここまでのグレードを用意してくれなくてもいいつてのに。時間は九時で構わない」

そこはスイートルームだった。アンリホテルに泊まったことのないフレデリカでも、これだけのランクなら事前予約が必要だとわかる。調度品一つをとつても、あまりお目にかかれない高級品だ。レプリカかもしれないが。

「メシの前にシャワーでも浴びるか？ 汗かいたろ？」

「そうですね。あ、でもサイファアさんがお先に入りたいならどうぞ」

「んー、じゃあお言葉に甘えて」

脱衣場に消えていったサイファーを見ながら、ふと寝室のほうが気になってしまった。

扉を開けて、フレデリカは一言。

「今じゃなくても……」



湯船に浸かって清々しい気分になったサイファーだったが、部屋に戻るとなぜかフレデリカの様子がおかしかった。なんか目を合わせようとしないのだ。なんか赤面しているようにも見えるが、このホテルに来てからからかったりした覚えはない。

しかし年頃の女の心理とは移ろう雲のようなものだ、というものがサイファーの持論で、それに沿って言えばフレデリカが何らかのちよつとした些細なことで赤面し目を合わせないようなことになる。いまだ女心を十全に理解しているわけではないのだから。

おかしなやつだと思いつつソファーに腰を下ろす。膝をちよつと折って、体を丸め

れば横たわれるくらいに大きい。

新聞でも広げようと思つたが、時計を見れば時刻はもうすぐ九時近い。夕食を食べから気ままに休んでもいいだろう。体が資本みたいなものだから、食べれるときにはしっかりと食べなくてはならない。デリンジャーもそのあたりは配慮してくれてるかも、とささやかな希望を試してみる。

夕食はコース形式だったが、やはり量は多かつた。だがフレデリカも割と平気そうに全部食べ切つていたのには驚いた。意外に健康家なのかもしれないし、食事を作る上で自分も味にうるさくなつて食べる量も多くなつたのかもしれない。美食家が美味を求めて包丁を握るといふのなら、その逆パターンもあるのだろう。

そして少しの間自由な時間を過ごしていたものの、やはりフレデリカの様子はなぜかぎこちないようだった。

原因は寝室にあつたのだ。

「恨むぜ、デリンジャー」

ここで自分の悪癖を噛み締めた。

——『情けは人の為ならず』だったか？

——いや、あれはいいことが返ってくるんだ。悪いことの場合は……

——そうだそうだ、因果応報だった。

——でも今になって返ってこなくてもいいだろうに。

寝室に鎮座していたのはキングサイズの天蓋付きベッドが一つだけ。他にベッドはない。

「フレデリカ、まさかこれに気付いていたのか？」

「……はい」

「恨むぜ、ホント」

暗に同衾をしろと言われていたようなものだ。別に今まで何かと自分の部屋で一緒に寝ることはあったが、ここに来る前に自分の本心を言ってしまった。なんだかお互いにドギマギしながら、終いには寝付けないという事態になるのではないだろうか。

「僕はソファで寝るから、お前さんがこのベッドを使え」

「え、でも……サイファーさんも疲れているんじゃない」

「この程度でへばるほどヤワじゃない」

そのままリビングのほうに行こうとしたが、

「私は……嫌じゃないです、よ？」

「……ちよつと待ってくれ」

思わず思考を放棄しそうだった。

明らかに誘ってくる女のセリフだった。いや、待てこんなゴツイ男にこんな役得が

あつていいのか。それもからかいまくった女から。見た目はハイ・ティーンくらいだが。

「むしろ……一緒にいてほしいくらいで」

「まつていつてることがわからない」

「これから危険なことになるんですよね？」

「……まあね」

「さつきは大見得切っちゃいましたけど、やっぱりなんか怖くなってしまつて。だから、いつも通りでいいんです。勇気をくれませんか？」

「僕でいいなら」

あれだけの見得を切っておきながら内心は不安だったのだ。戦いの場に関わつてから三か月もたつてないフレデリカでは無理もない話だ。責められるべき要素などない。だから守つてやらなくてはならない。

——勇気が欲しいなら、いっぱいくれてやる。

備え付けのシルクのネグリジエは素材こそ一流だが、装飾や刺繍は控えめだ。その代わり、下にあるフレデリカの肢体が情欲をそそる。ボタン一つでも外そうものなら、並大抵の男なら理性がブツ飛ぶだろう。あどけなさや美しさが同居する顔の下に、男を肉欲の塊に変える凶器を秘めているのだから。

ベッドに体を預ければ羽毛布団が固すぎず柔らかすぎずの、適度な感触で体を包んでくれる。アーカム下層は常に肌寒さに満ちているが、中層より上が初冬にもなればはつきりと冷たさを感じる。自分の左側にフレデリカが寄り添うように寝そべったのを確認して、掛布団をかぶる。

「暖かいですね」

「……………やわらけえ」

「はい？」

「いいや、ただの独り言だ」

左の脇腹辺りに感じる豊満な肉の柔らかさの感想が聞こえてなかったことに、ひとまずサイファーは内心で胸を撫で下ろしたのだった。

勇猛、鋼鉄の町を銃火に包み

サイファアの体内時計と生活リズムは七時間分の睡眠を与えた。自分でも恐ろしいくらい正確だと思いが、大抵はここから二度寝に入ってしまうのだが。

すん、と鼻を利かせると嗅ぎなれない匂いがする。かぐわしい、甘い香りが。

これがフレデリカの匂いか、と助兵衛一歩手前の思考を働かせるが、左腕からの柔らかい感触が完全に助兵衛にさせた。これももう凶器だ、世の中に出しちやいけない感じの。

全身の血がたぎるような感覚で完全に目が覚めた。下半身のごく一部がたぎってくれないでよかったと安堵する。そうなっていたらフレデリカとの間には埋めようのない溝ができることは必至だ。なんてたつて致命的な初心だから仕方ない。

疲れもあつて熟睡状態の彼女を見て、一瞬だけクラツとなった。

美醜も大きく関わってくるが寝ている顔が一番美しいという話があるが、元々が美しいと二乗倍くらいにはなるんじゃないかと思ってしまう。

「なんだろうなあ……抱きしめたくなってくる、つて変態じゃねえか僕はバカかアホかおたわけか」

「…………ふみゆ…………」

寝息と一緒に身じろぎしたことでドキツとする。そのあとにまた穏やかに寝始めたのを確認して、起きないように用心しながらベッドから立ち上がる。お気に入りの葉巻を吹かせば、いつもの余裕が戻ってくるような気がした。あくまでも気がするだけだ、さっきの発言を聞かれていて問い詰められたら、ここから勢いで飛び降りる確信がある。

やたら無防備なまでに寝ているが、可愛らしくも美しい美貌と同じくらい類まれな射撃の腕でたくさんの悪党を打ち殺したばかりとは思えない。というかネグリジェちよつと肌蹴ていないか。普通なら保養になりそうだが、今のサイファーにとつては毒寄りの保養だった。

「なんだろうなあ…………」

本日二回目の眩きだった。

このフレデリカ・エインズワースという少女同然の見た目の女は、今まで見てきた女の中で二人しかいないタイプだ。

聡明で、ほとんど逆らうことはないが、確固たる心を持ったイイ女だ。そういう女はサイファーなど見向きもしないだろうが、フレデリカともう一人は興味を向け、親愛を注いでくれた。ただ、もう一人には会えない。会うことは、二度とない。

それでもフレデリカももう一人も同じ年のくらいに彼のそばにいた。正確にはフレデリカはサイファーがそばに置いていたが、もう一人はサイファーをそばに置いていた。関係性の違いはあれど、何よりも楽しく輝かしい日々だったと思う。それだけに失われることに言いようのない恐怖がある。その悲しみはなるべく味わいたくない。

「たまには僕が起こしてみるか」

いつも起こしてもらっているのだから、たまには立場が逆転してもいいだろうと思いい、眠るフレデリカのそばに忍び寄る。

「もう朝だ。そろそろ朝飯だし、起きろ」

「……………んむう……………」

寝返りだけで起きる気配がないことに、ちよつとイタズラしてやろうと、眠る横顔に顔をそつと寄せる。

そのまま——ふつと息を吹きかけたかと思えば、瞬時に耳たぶを甘噛みしてやった。「ふひやあああああッ！」

変な声をあげて転がってから飛び起きるといふ、やたらアクロバットな起床だった。予想以上の反応が返ってきて、思わず笑い出しそうになる。必死になってこらえていないと、すぐにばれるだろうが一秒一瞬でも味わっていたい。

「なんか耳が変な感じだったんですけど」

「どんなふうに変だった？」

普通なら『気のせいだ』というのが筋だろうな、とほくそ笑む。この悪癖は地獄に落ちたとしても、ずっとついて回っているだろう。

恥じらいの紅がフレデリカの頬に浮かぶ。

「……言いたくないです」

「まあ、そうだろうな」

「普通はそうですよ。みつともなく感じてしまったのを言うわけ……ああつ！」

「へえ……感じちゃったのかあ」

「……いじわる」

射殺しそうなまでの視線を向けられたが、これも一興だと思つて流す。

人をからかうのなら何かで返される。ならば返されるものも一興だと思つて楽しもうというスタンスを、サイファーはすでに築いている。睨まれた程度でどうこうなる、というわけではないが、これ以上やると二度とご飯を作ってもらえなくなる可能性が浮上するので、そこからは踏みとどまった。やっぱり胃袋を掴まれているのかもしれない。

「私の耳に何かしたんですか!？」

「疑わしきは罰せず、だよ」

「うう……状況証拠だけですね」

状況証拠はそろっている。そもそもサイファーとフレデリカしかこの部屋にはいないのだから、自分が真つ先に疑われるのも納得というものだ。実際下手人だし。物理的証拠を突きつけられれば、さすがに認めざるを得ないが。

「朝飯はどうする？ 食堂に行くか、持ってきてもらうか」

「どちらでも構わないですよ。あなたに合わせます」

即座にフロントに内線かけた。

サービスはやっぱり良い。客のわがままも無理でなければ答えてくれる。仮宿でも妥協しないデリンジャーの仕事っぷりに、ダブルベッドの件は不問にしてやろうという気になれる。なんだかんだ憎めないのは似た者同士だからか。自分で言うことではないが。

部屋のドアに差し込んであった雑誌と新聞を眺めてから二〇分したころ、チリンと部屋の呼び鈴が鳴った。ボーイがワゴンを押してきた。

軽めの朝食だった。量も腹八文目に収まるちょうどよさだ。あまり満腹だと動きづらくなる。

「昨日はありがとうございました」

食事を終えてからフレデリカが切り出した。

感謝を受ける覚えがまるでなかった。昨日といえは酒場での銃撃戦があつたばかりだが、あの時はフレデリカが窮地を切り抜けた後に入ったから、むしろ恨まれる方が筋だと思つている。

守つてやると何回か言つたことはあるが、そのたびにフレデリカは自力で何とかしている。申し訳が立たない。

だが自分が教え込んだ技術を次々と覚えていき、メキメキと成長していくその姿に内心は嬉しくもある。

——なんだよ。

——パートナー云々は冗談のつもりだつたんだが。

——これじゃ、ホントにパートナーだ、相棒だ。

動揺を気取られないように努めて冷静に答える。

「なんのことだ？」

「一緒に、寝てくれたことですよ」

ああそれか、と納得したようではなかったようで、何とも複雑だった。

別に一緒にベッドで寝ることなど何回かある。ただ一緒に寝るだけだったのに、どうして感謝を述べられなければならないのか。サイファーはちよつとわからなかった。

「勇気を、いただけただけ」

「そりや良かった」

「もしかしたら、また、お願いするかもしれない」

少し恥じらうように顔をうつむけた。

——やべえ、かわいい。

思わず口に出そうになって呑み込んだ。事実と言えば事実なのだが、言ってしまったら口をしばらくは利いてくれない気がする。

「それじゃ、一暴れする前に言っておこうか」

「なんでしよう？」

「もし僕に何かがあったら、すぐに逃げろ。それで中層の家まで戻って、帰ってくるのを待っている」

「そんな！」

「こればかりは通させてくれ。今でも嫌な予感はあるんだ。何らかの方法で伝えるから」

「わかり………ました」

こういう肝心な所では聞き分けが良い。

万が一にも何かがあれば、もしかすると手を貸しにやってくるかもしれない。この仮宿にやってくるまでの間に聞いたフレデリカの本音が本当ならば、十分にあり得る話

だ。だから釘をさしておく。刀と銃の腕に従前たる覚えはあるが、決して無敗というわけではない。

強者ではあるが最強ではないのだ。腕っ節と規格外の暴力と“力”にまかせて暴れるだけだから、知略と陰謀にやり込められることだってある。

「それじゃあ“もしも”がないように、私も精一杯がんばります」

「そんなに気負わなくたって、いつもどおりでいい。お前さんを置いて行ったら後が怖そうだ」

「どういう意味ですか、それ」

「帰ってきててもメシを作ってくれない」

「あなたほどいいじわるじゃありません。自炊できない人を放っておいたら、三食常に外食になってしまいます」

「うーん、僕はツンとむくれて自分の分だけ作ってるお前さんが浮かんだんだが」

「そんなことするくらいなら、あなたの分も作った方がお得です」

「おおー、庶民派思考」

「どうせ庶民です」

ふと思ったが最近は何となくきりものを言うようになった。

最初にあつたところは恐ろしいくらい従順で、逆に心配するほどだったが、こうやって

対等な会話だつて出来る様になった。

大学のころに受けた辛い経験によって凍てつきつつあった心が、ゆつくりとだが解凍されてきたということか。喜ばしいことではあるが、そのきつかけが自分の与えた力だと思ふとサイファーはいたたまれない。さらに心の深層にある理不尽への怒りを解き放つ遠因となつたことを申し訳なく思っている。

この自責を告白すれば、彼女はどう思うのか。

自分の下を去るのか、あるいは残るのか。それよりも控えている仕事をの方を優先するべきだと、この問答は無理やりにも打ち切つた。堂々巡りをしたつて、意味はあまりない。

どこまでいつてもサイファー・アンダーソンという男は一介の荒事屋であり、実力行使請負業の看板を掲げているだけ。やれることは依頼人の望むものを壊し、砕き、潰し、消し去ること。求められているのは破壊のスペシャリストであることだけだ。

だから、今日とて普段通りにやるだけ。

敵対する者、立ちふさがる者を殺しつくすだけ。

ただ今日は一つだけ加える。

——フレデリカ
彼女を害するものも、殺す。



——第五区画。

酔狂や度胸試しで近づく人間はいるかもしれない。ほんの数日間の滞在もまれだが、決して皆無というわけではない。

だが定住する人間は少ない。いた、としても尋常の肉体ではなくなっている。

第五区画。アーカムの巨大なアーコロジーを構成する階層構造は、人造の大地と言つていいほどの自然科学の結晶だが、このアーカム下層のここだけは例外だ。

アーカムのほとんどはアスファルトなり石畳で舗装されている、というのがフレデリカの認識だった。おそらくは一般市民における共通認識でもあるだろう。食糧確保のための人口の畑や牧草地を除けば、アーカムの中で目にするのはきっちり舗装された人

造の大地だ。

「これは……何が起こつて」

自分の目を疑つた瞬間は何度でもある。このアーカムはそういうものでいっばいだ。怪奇現象、グリーム・クリッチャ幻想生物、未だ未知の存在だつてある。たとえば自分の黄金の双眸。

だが第五区画を目の当たりにしたとき、つい先ほどまで戦争でもあつたと言われても納得できた。それも人対人ではない、人と機関の戦争が。

地面に埋め込まれている水道、蒸気、ガス、使用頻度は少ないが電気のインフラ・ケールやパイプが、鎌首をもたげた大蛇のごとくねじ曲がつている。地面から建物の壁を張っているものだつて、その例に漏れず無残な形を示している。地面は石畳は粉々に砕け散つて、鉄骨と思わしき鋼が雑草のように生え出ている。

普段の風景はない。見渡す限りの鋼。

建物もその例に漏れない。見渡す限りの鋼鉄。

人の姿は見当たらない。見渡す限りの鉄。

メタル鋼！ メタル鋼鉄！ メタル鉄！

研ぎ澄まされた刃だつた。温もりあるものを寄せ付けけない、冷ややかで鋭い。そして重厚。

金属の街だつた。文字通り、金属以外の何もかもを排斥した。

言葉が出なくなっていたところに、上から声が降ってくる。

「第五区画。またの名を鋼鉄区画」
メタル・エリア

「全部、鉄で出来ているようです」

「ここだけがそうだ。この区画だけは機関の天下だと言ってもいい。あれを見ても」

指さした先を見つめると納得できた。

鋼鉄の巨人がいる。一か月も前に中層に攻めてきた存在だが、ここでは所作の類は人間らしい。大型の機関騎士だった。大出力の小型機関を搭載し、八割以上を機械に置き換えた存在だ。その五体は隅々に至るまで殺人平気で武装されている。技術で未だに引けを取るイギリス本土製でも、たった一体で中層での十分な脅威だとサイファーから教えられている。ヘンリエッタくらい強ければ、一對三くらいでも勝てるらしいが。

ただ視界にいるのは仕様が違う。真正銘のアーカム製で、それも下層で作られた一体だ。

どれほどの脅威になるなど考えたくもない。

イギリス本土製ではただの無骨なだけだった大剣は、圧搾蒸気を噴射することで容易に超音速の速さを生む機械剣マシンブレイドとなっている。豪壮な騎士甲冑に見える鋼鉄の肉体には、どれだけの兵器が搭載されているのか。何もかもが規格外だと判断できた。

それだけなら、まだいい。

体の一部を異形の義肢に変えた人間もいる。全身を鋼鉄に換装した人間さえいる。

ここは荒事のために、弱い自分と決別するために、力を求めるために体だけでも鋼鉄に変えていく場所なのだ。ここは機関に乗っ取られた区画ではなく、鋼鉄を求めて受け入れた人間たちの住まう場所なのだ。

「でも、なんでこんなところには？ ここには需要のある人はいないと思います」

「鋭いな。需要のあるヤクなら、ニーズの多い所に製造所を置くのは良く考える。だが今回のブツは実験的な意味合いが強いと僕は思うんだ。僕だったら一見して関係ない所に実験場を構えて、心行くまで実験に明け暮れる」

「たしかに。流通させるのが目的でないのなら、ここに工場を置くというのも納得です」
「どのみちヤクを作ってるヤツを締め上げればはつきりする」

それもそうだとフレデリカは同感だった。

ここで推測を重ねていても、事態に何の進展もない。

ただ昨日の件でアルバニアンが攻めてきたのは偶然だったのか。敵対するデリンジャー・ファミリーの協力者なのだから、狙われる理由が全くないわけではない。むしろ狙われる方が自然というものだ。

それでも態勢が整い過ぎていた、という感想はある。

サイファーがほとんどを片づけてしまったせいで脅威ではなかったが、優れたチームワークを持つほどの殺し屋を送り込んできたのだ。名のある荒くれを雇うには事前の依頼を出しておかなくてはならない。いきなり雇ってこれるほど、プロの腰は軽くないのだ。

不意に浮かび上がってきた疑問は胸の内に広がっていく。

それでも待ち受ける鉄火場を乗り切るため、それは後になって考えることにした。

「ちよつと力み過ぎだぜ」

「え」

「そのまま銃把を握れば、確実に暴発だな」

緊張していることを、指摘されて初めて気が付いた。両手に妙な力が入って、強張っていたのにも。

昨日の夜にたくさんさんの勇気と安心をもらった、と思っていたがまだまだ未熟だということ痛感した。

いや、勇気と安心をくれたサイファーでさえ不安を感じているのだ。拭いきれない不安が緊張となって浮かび上がったのかもしれない。

深呼吸。深く吸って、一気に吐き出す。手の強張りが抜けていく。

「大丈夫か？」

「幻想生物が来たって冷静でいられると思います」

「それは重畳。コイツに跨れ」

大型蒸気二輪のうえでサイファーとのタンデムは未だに慣れない。

結構な速度を出すせいで振り落とされないようにするのは骨が折れる。しかし、気になるのはやむなくサイファーの大きな背中にしがみついたとき、わずかだが身じろぎをす
る。

原因はわかつてはいる。彼だつて従前たる男なのだから、自分でも大きすぎると思う胸を押し付けてしまつては身じろぎもするだろう。いかんせん自分でも大きすぎるとい
う自覚はあるし、着れる服も限られてしまうから、下着は二つ下のサイズを使つてい
る始末だ。ヘンリエッタは大学時代から『羨ましい』とか言つてはいたが、そのたびに
あまり大きすぎるのも色々と不便だと口酸っぱく言っている。

それでも背に腹は替えられないから背中に掴まるしかない。腰に手を回して体を引
き付けるようにして、掴まる。

「何か、不都合があつたら言つてくださいいっ」

「僕を見くびっているようだな」

「い、い、いめんなさい」

「い、い、この程度でどうにかなる男じゃない」

「……………ほんとうに、ごめんなさい」

やっぱり顔が良くて、スタイルが良くて、いいことなんて男受けがいいだけだ。それも人を見た目だけで判断するような、風上にも置けないような下劣漢の。

もしかするとサイファーもそうなのかもしれない。口調は結構粗野などころがあるし、淑女レディの扱いに慣れてるかといえは良くも悪くもない。はじめと一緒に外食へ行つたときには落ち着いた服装で、それなりのダイナーに連れて行ってくれたが、あれはかなり無理をしていたのかもしれない。

おそらくは見目がいいから。自分ほどの美しい女ともなれば、男は誰でも優しくしたりするのだろう。だからサイファーは自分をそばに置いているのだろうと思う。けれども昨日の一件から何かが変わつたような気がしたのだ。お互いにいなくなつてほしくない、そうなるのは嫌だ、と胸中を伝え合つたのだから。

きっとサイファーはフレデリカを十中八九、いや確実に何かあれば助けに行く。

でもフレデリカは何ができるだろうか。自分の持つ力は借り物同然の付け焼刃だといふのに。

「着いたぞ」

「は、はい」

「さて……………正面切っていくのは愚策だな」

目の前には大きな化学工場めいた鉄筋とトタンでできた建物があった。

建設中だったのか、それとも回想する途中で廃棄されたのか、工事用の足場の残骸が朽ちたまま放置されている。外周は金網でぐるりと取り囲まれ、妙にひっそりとしていた。すべての生命が死に絶えている。雑草一つとて生えていない。

それでも人の気配はした。建物内部から三〇以上は優にある数が。

二挺に思わず手が触れる。ホルスターに収められた冷ややかな感触が、こういう時に限って心強い。

「フレデリカ、適当な窓からキャットウォークに入れ。僕が正面から行くまで、絶対に動くな」

「し、正面から行くんですか!？」

「お前さんの生存率上げるために囿になってやろうってんだ。ライフルを積んどいたから援護はよろしくな」

「……無理はしないでください」

「了解」

のしのと進んでいくサイファアの背中を少しの間だけ見つめ、蒸気二輪を探すと円筒形の革製ケースがあった。長さは一メートル三〇センチくらいか。

ファスナーで閉じられていたそれを開けると、中からスプリングフィールドM190

3が出てきた。新大陸製の三〇口径大型ボルトアクションのライフルだ。新大陸の銃火器はイギリス本土のものと比べれば格段に性能がいい。

このライフルは銃身を太い何かで覆っている。詳しくない者が見れば、非常に肉厚の銃身にしたのだと判断するだろう。それは薄い中空の金属の筒にウレタンを詰めた消音器だ。これだけのライフルとなれば超音速による衝撃波の音は消せないが、一番大きい弾丸の爆発は聞かれない。肩に掛けられるようにスリングまでついている上に、弾倉裏蓋を外しての手早いリロードができるように改造されている。

側面から回り込んで、朽ちた足場に手をかけた。



工場の鉄扉は割と堅固そうだとサイファーは腕を組んで眺めている。

正面切っていくとなれば、それなりに派手なことをやって囿になる必要があるだろう。扉の向こうには5人もの気配を感じるとくれば、取る選択肢は一つだ。

無造作に蹴りを放つように構える。ふうと一息ついた。

本当に気を抜いたような蹴りが、堅固な鉄扉に触れたときだった。

総重量一トンをはるかに超える扉が、五人の男たちを瞬く間にのしかにした。地面と扉の隙間から真つ赤な絨毯がじわりと滲み出てくる。

建物全体に雷鳴が響き渡った。天井へ向けての威嚇射撃だ。

「ここでヤク作つてる張本人、今すぐ首根っこ捕まえて引き渡せ！ さもないともつと死人を出すぞ！」

規格外の巨大リボルバーを向けたとき、工場の方々にいた人間全員がサイファーの方を見る。

バン、と殺意が叩く。物理的な衝撃を以て、頬を叩いたように感じる。

瞬時に戦力を分析する。

——どこかしら改造してるやつらがほとんどだ。

——全身機関までいやがる。ごくろうさんなこった。

機関銃の掃射が降り注いだ。定型の手足で機関銃を撃っている者は少ない。だいたいが四肢か全身を強力な戦闘用機関搭載義肢に替え、内蔵された武装を使っているのだ。

工場内は乱雑にコンテナが積まれていたおかげで遮蔽物には不自由しないが、内蔵火砲の口径と弾丸によっては貫通してくることもあり得る。人間一人くらいなら跡形も

なくズタズタにできるくらいの威力が最低限なのだから。

二メートルを超える巨体と灰色のロングコートにテンガロンハットと目立つ服装だが、目につかないように立ち回る術は心得ている。

弾幕を展開している男たちの陣から少し離れたところにいた一人の背後を気取られずにとるくらいは朝飯前だ。

全身を機関に置き換えている。総身すべてが鋼鉄の輝きを放ち、左手はねじくれたように変形して二門の内蔵火砲を展開している。そいつの首に手をかけるや、一息にひねる。

金属が破断する耳障りな音がした。首の関節をすべて捻じり切ったところから、一気に脊髄を引っこ抜く。首から下を思い切り蹴飛ばして、固まっているところにつけてやる。三人がなす術もなく薙ぎ倒された。

銃口が一気にサイファアのほうを向いた。

けたたましい連射音が鳴り響き、マズルフラッシュはストロボとなって戦場を染める。

その全てを塗りつぶし、かき消すほどの轟音と明滅。『Howler In The Moon』の咆哮は銃声とマズルフラッシュと共に、言い知れない恐怖を銃口の先にある有象無象に刻み付ける。全身機関の男が一気に弾け飛んだ。装填されていたのは

ホーレス・カーター謹製の炸裂弾だった。

火柱をあげながら強烈な衝撃とモルタルを変形させるほどの熱量で五人も屠る。

その時、サイファアの立っていたコンテナが蒸気を伴いながら射出された何かで跡形もなく弾けとんだ。住んでのところで真上に飛んで避ける。

「うおわつとー！」

「今だ、撃ち殺せー！」

キヤットウオークにぶら下がる形で捕まった彼に、一斉に銃口が向けられた。

「撃てー！」

サイファアと男たちの声が重なった。

キュン、と甲高い音がした瞬間、一人の心臓が撃ち抜かれた。

もう一回同じ音がしたとき、今度は別の男の眉間が撃ち抜かれた。

「狙撃だー！」

そう叫んだ男は、叫んで開けた口に弾丸を撃ち込まれた。

「グッド・タイミングだ、フレデリカ」

「早くそこから降りてくださいー！」

「あいよー」

サイファアが着地した時、目の前にいた男は真つ二つになる。手を離したときに抜い

ていた日本刀で唐竹割りにしたのだ。

「来いよ腰抜け」

人差し指をクイクイとやって挑発すれば、男たちは逆上にまかせて銃口を向けてくる。

弾丸が殺到する。それをサイファーは避けようとしめない。

五尺もの長尺の野太刀が刃渡りに見合わぬ機敏さを見せつけ、斬線を閃かせながらサイファーの目の前で煌めきながら刃は舞い踊る。その下に落ちたものを男たちは理解しただろうか。小さな甲高い音を立てて墮ちたのは、育英にも刻まれた弾丸だった。

「……化け物ッ！」

「よく言われるよ」

苛立ちと侮蔑を顔に浮かべたまま男は真つ二つになった。

瞬撃の剣戟だった。おそらくは誰も振った瞬間を見てはいないはずだ。地面に倒れた途端にその体は数百もの肉塊となって一面に広がった。

ここで残った者たちは自分たちに待ち受ける運命を理解したのかもしれない。そこから逃れられるかどうかなど度外視して、半狂乱と化して敗走する。それでも二人は容赦しなかった。特にフレデリカの狙撃は百発百中の精度を發揮し、スコープの十字線に捉えられたものはことごとくがワン・ショットで撃ち倒された。

工場は無人と化した。フレデリカとサイファー、もう一人を除いては。

「一人だけ残しておいたんですか？」

「ああ、オラとつととテメエの所属を吐け」

「……誰が言うかつ」

悪態と一緒につばまで吐いた。ブチンと思いつきり大事な血管がブチ切れた。

一発殴ったかと思えば、膝蹴りをくらわせてから地面に叩き付け、ぴよんと飛んでから胸のあたりを踏みつける。気を失ったところをさらに殴って、無理矢理目覚めさせた。

「アルバニアンだよツ！ お前らもわかってんだろツ!!」

「まあそうだろうとは思っていたがね。アーカムで手に入れた新しい身体はどうだ？」

「クソツ！ 大枚はたいて手に入れたのに、なんでこうなんだよツ！」

「さ、ここにいた理由も吐いてもらおうか」

「それだけはどうしても言えねえな」

ここだけはどうしても譲らないと、目でも訴えている。

仕方ないな、と嘆息するとあろうことか野太刀をおもむろに左足へ突き刺した。そこだけは生身だったようで、刃の波紋を鮮血が汚す。手負いの獣めいた悲鳴を上げ、男はエビ反りになって痙攣した。

うつぶせの状態でそうなったから、必然的に上半身が持ち上がる。今度は右肩の辺りを浅く一閃する。男の五感は何れも灼けるような苦痛を伝え、それは脳の許容を越えて灼け付くのだ。

ここで気づく者なら気付けるはずだ。サイファーはわざと苦痛を増やすように斬っていることを。

いかに多くの痛点をなぞるように斬るか、切り口をいかに不恰好に、そして大きくするか。素人目では適当に斬ったり突いたりしているようにしか見えないが、実態は達人の知識と技がなせる拷問なのだ。

「やめろ！　お願いだからやめてくれえ！　言う、言うから！」

「忠告しておこうか。嘘ついたら、もつとひどい目にあわせてやる」

指の骨を鳴らす。力も大きく、指も体格相応に太いせいか重厚で大きな音がした。

きつとブン殴る気満々だ。ただでさえ身体中に朱線の走る男に、体格以上の馬鹿力で殴りつけられようものなら最悪は死んでしまう。曰く「もつとひどい目」というのだから、きつと生かさず殺さず痛苦を与えることに特化した、そういう責めを行うのだろう。「ここに協力者がいる。ホーランドっていう狂碩学だ」

息も絶え絶えになって吐き出した理由と、その名前。

一度は聞いたことのある名前だった。

「やっぱり、薬の製造者とアルバニアンは……」

「繋がっていたか。納得といえれば納得だが」

売人と接触したところに襲撃があつたことから、フレデリカはアルバニアンと薬物製造者に何らかのつながりがあるかと薄々感じてはいたのだ。考えてみればアルバニアン・マフィアはアーカム下層への進出を狙っている。薬物製造者は実験を重ねたいと願っている。アルバニアンは製造者の身の安全と実験の補佐を願い出て、見返りにアーカム進出の手助けをする。碩学だというのならアーカム下層の妖技術を以て、構成員たちに力を与えてもいい。もしかしたら、倒れ伏す彼らは件のホーランドなる碩学によつて改造されたのかもしれない。

「そうか、そいつはどこにいる?」

「はいの——」

言い切ることはなかつた。

上顎が吹っ飛んでしまえば、その舌は言葉紡ぐことはない。それ以前に舌を動かす命令を送る脳が跡形もなく吹っ飛んでしまつては無理もない。

銃声。何回も連続して。

——銃声。

——銃声!

— 銃声!!^{BANG}

— BANG!!

— BANG!! BANG!! BANGBANGBANGBANGBANGBANG
G BANG BANG!!!

猛烈なほどの大口徑弾と思しき連射は文字通りの鋼の身体を、呆気なさすぎるほどに粉砕した。

おそらくは四挺以上の大口徑機関銃による掃射だ。入り口の方に複数の気配を感じたことから、確実に増援が来た。

「あら」

耳を打ったのは女の声だ。二十代に差し掛かった女の声だが、異様なほどの色香を声音に孕んでいた。

「男のほうは私がやるから。女のほうは好きにしなさい」

肩の辺りで綺麗に切り揃えたブルネットは揺れもせず、右手一本で四体もの機関騎士を動かした。

あらゆる欲望が開放的なアーカムと言えど、女の服装は露出が多すぎる。娼婦が着るようなピンク色のチューブトップに、足のほとんどを露出するような下着同然のホットパンツだ。手足を覆うものを極力排しているようだ。

サイファーは銃に再装填している。

フレデリカもおめおめと殺されてやる気はない。

「フレデリカ、腕の見せ所だ。返り討ちにしてやれ！」

「……………はい！」

避けようない死地に意気揚々と踏み出した。

血戦、死の舞踏を鋼と共に

上階での騒ぎを狂碩学の耳は聞きつけていた。

そのこめかみに浮かぶのは憤怒の青筋。忌々しげに歯ぎしりをする。

「この研究は邪魔させん。邪魔させんぞ」

幾たびの濾過と化学処理を通されて、真つ白な洗い粒の薬物を見つめる。

狂碩学の叡智を文字通りに結晶としたものだ。彼はこれを周辺の区域に売人を通して違法薬物として捌いている。あくまでも快楽性を高めるための薬物という形ではあるが、本質は大きく違っている。摂取したものは受け入れる体質を持ったものだけを生かす。原料として入れた忌々しき生命の欠片が、受け入れるに足るかを選定するのだ。見初められた者には力を、あぶれたものには等しく死を。

選定に選ばれたものこそ、新時代を生きるに等しいと狂碩学は確信している。

妄信と言つてもいい根拠を欠いた確信だったが、どうあがいても敵うことのない碩学のため。その権能が見せた未来を回避するために、世を作る人類すべての改造に狂碩学は踏み切った。

人間すべてが『自分こそ正しい』と思ひ込み、既得権益のために万人に受け入れられ

るヒューマニズムを騙り、反するマイノリティを排斥する。確固たるアイデンティティを持たぬ者が大都市にはびこり、右に倣えとロクに考えもせずに行動する。

だからこそ狂碩学たる自分が新人類を生み出す。今ある人類が想像した新人類を駆逐するなら、それも僥倖だ。どつちにせよ今ある試練も、これから与えていく試練も、今の人類が乗り越えていけば見せられた未来は回避できる。それこそが与えられた使命であり、命を投げ打つほどにやりがいを感じる生き甲斐だ。

「お前は儂を守るためにいるそうだな。いささか頼りないように見えるがの」

「私の技に力は必要ありません」

「見た目通りではない、というのは飽きてきた」

「あの男のように、見た目以上というのをお気に入りですか？」

狂碩学は真つ白の顎鬚を撫でる。浮かんでいる表情は歓喜だった。

「そうだな、あの男はいい。とてもいい。数多の屍の山を築き、血の大河を流す。刺客を差し向ければ差し向けるだけ殺す。アルバニアンはきつと無事ではすまんよ。もつと死ぬ」

「ええ、十二分に警戒すべき男です」

「あの男に勝とうと思うな。本来であれば死しているはずが、いかなる手を使ったのか生きておる。出し抜く方向で行け」

「言われなくとも」

「ならいい」

この狂碩学はサイファー・アンダーソンという男の過去を知悉しているのか。

眉間のしわは忌々しげに深く刻まれているが、口は狂気の成せる笑みでつり上がっている。目は歓喜の色で爛々と輝いて、人ではない何か別の生物を彷彿とさせる。

その近くで培養槽がごぼりと気体を吐いた。生物を培養しているのではなく、出来上がっているのは巨大な結晶だ。光を吸い込むほどに青黒く、そして禍々しい。見つめているだけで健全な精神が犯されていき、この世に存在してはならぬ化合物だと確信できる。作り上げた人間は確実に正気の世界と決別し、狂気の世界にとうの昔に旅立っている。

その成長を血走った眼で狂碩学は見つめた。

完成した暁にはアーカム全体に、この結晶から精製した薬物をばらまくことができ

る。
作られた新人類と旧人類の戦いの果てに新時代の幕が開く。見せられた未来を回避した新時代が。

「根競べだ。農をねじ伏せてみる、叩きのめしてみる、化物」

サイファー



硝煙を纏わせたまま、女は一步一步進んでいく。

周りに霧がまとわりついてるように錯覚する。妙に大きな足音と重心の位置から真つ当な生身ではないことはいかががえる。その周りを鋼の甲冑たちが固めている。

甲冑の歩みは重厚だ。鋼鉄の四肢の内には人外の馬力を生み出す大出力の機関が埋め込んであるのだろう。

機関騎士の力は強大だ。それこそ幻想生物と並び称されるほどに。

街中で見かけたのと同じ型なのだろう。機械剣は臨戦態勢を整え、搭載されている噴射機構はわずかに振動して駆動している。

彼らを従える女として普通ではないのだろう。

わずかに体にどこかに搭載した数式機関の駆動音が聞こえる。空間そのものが震えるような独特の音だ。

彼女の視線は一身にサイファーへと注がれている。目の前の偉丈夫をどのように料

理するかを夢想し、すでに脳裏では悲惨な死体に成り果てているのだろう。

耳まで裂けている、と思うほどの狂気がなせる笑みが証拠だった。

「フレデリカ」

「わかっています」

「あんなブリキどもに後れを取るような女じゃないことは、僕だって十分わかっているとも」

「あんな女にやられないでくださいね」

「もしかしたら一回か二回は蜂の巣になるかもな」

女はたおやかな手を振り下ろす。

一斉に騎士たちが背中から圧搾蒸気を噴射した。足底の球体車輪によって変幻自在の軌道を行いながら、銃弾並の速さで縮地していく。

フレデリカは二挺を抜いた。

毎分一〇〇〇発もの速射を『All In One』は吐き出していく。人間であれば命中箇所は確実に四散し、ショックで血流は逆流して即死するだろう。

だが鋼の鎧は揺るがない。そよ風でも吹いたように表面には傷一つ、煤一つとしてついでいない。

その頭上を灰色の影が飛び越していった。同時に幾重にも輝線が走る。

真つ二つにずれた二体の騎士から噴き出したのは褐色の機械油と、同じ色に薄く染まった蒸気。断面からわずかに温存されていた内蔵と機械部分が雪崩れ落ちた。

サイファーはすでに野太刀を抜き放っていた。そのまま落下の勢いも乗せて渾身の一閃を放つ。

「ガンマンかと思つたらサムライなのね。いや、今のあなたはローニンかしら」

女はわずかに身を引いただけで避けた。その鼻先から一寸もしない所を、豪壮にして鋭き白刃が通り過ぎたというのに。この中では命のやり取りというものにサイファーと同じくらい慣れてるのだろう。

刀を翻し、八双の構えに移行。

視線を向けずともフレデリカが残る機関騎士たちの相手をしていることはわかつていた。信じて任せることにした。

「僕をご使命とはね。男冥利に尽きるってモンだ」

「妬いちやうんじやない？」

「誰が妬くんだ？」

「わかっているくせに」

「あいつがそういうタマかよ」

「女はいつでも仮面をかぶって美しくなっていくのよ」

「お前さんは両手両足というわけかい？」

「あら鋭い」

たおやかな右腕に異変が訪れた。傍目には体温の通っている健全な腕に見えるが、展開ギミックが作動した瞬間には八つもの銃身を有する殺人兵器と化したのだ。口径は貫通力を重視した二二口径が四門、衝撃力を優先した五〇口径が四つだ。

二の腕はつつがなく弾丸を供給するための弾倉が突き出て、装填と排莖の機構を外部動力にするための淡い光を放つ数式機関が装備されている。

銃声が空気を震わせ、弾丸が大気を切り裂く。発射速度は毎分二〇〇〇発を優に超えている。

弾幕というよりは弾壁に等しい。点を寄せ集めた面制圧を、この女は単身でやってのけているのだ。二種類の弾丸は工場の固いモルタルの床を撃ち砕き、薄い鉄のコンテナを易々と引き裂いていく。

長大な白刃が翻る。ぎらりと煌めきながら優美な曲線を描く刃は、瞬き一つの間にも十にも振るわれて弾丸を切り落とす。床を埋め尽くす勢いで二つになった二種類の弾丸が転がっていくが、小気味いい金属音に交じって一発だけ鳴り響く雷鳴に等しい銃声。

『Howler In The Moon』より放たれた四〇〇グレインもの巨弾は

塩水を描くように螺旋状の軌道を描いて女へと飛ぶ。特製の変則弾道弾だ。ホーレスによつて作られたこの弾丸は、射手の念を受けて曲線的な軌道も幾何学的な軌道も思いのままに飛ぶ。直線的に飛ぶ通常弾では弾壁によつてあえなく撃ち落とされると踏んでの選択だ。

それさえも女はわずかに動くだけで避けた。銃口の位置からおおよその着弾地点を予測したうえで、安全圏に少しずつ移動していたらしい。外れた弾丸はコンテナ一つを悠々と吹っ飛ばし、その向こうのコンテナにまで大人の頭大の大穴を開けた。

「なんだ。案外拍子抜けじゃない」

「最近になって搦め手も使うようになってね。小細工も使わないと僕のような男は生き残れない」

そういつてシリンドラーをスイング・アウトした。空葉莢だけを捨て、撃つてない弾丸はコートの中のポケットに突っ込んだ。

新たに装填するのは機関改造者用の弾丸だ。弾頭重量二〇〇〇グレインものともない代物だ。装薬に至るまで特別製で、葉莢の肉厚も相当だ。ただ流れ弾といった問題を考えると仕様は躊躇われる威力だ。

コートの内側から手のひらサイズの鏡を取り出した。それを見ながら狙いをつけるのはたやすいことだ。

大型マズルブレーキが青白い発砲炎を噴き出した。発砲で空間全体が震えたと錯覚してしまふだろう。

大型のカノン砲が直撃したに等しい。四段も積み上げられたコンテナが一気に吹っ飛んだ。

サイファアは駆け出した。地を這う蛇のようにジグザグに低姿勢のまま縮地する。

女の残る手足は異様な動きを示す。左腕は大口径の圧縮蒸気砲へと変わる。両足は九ミリ連装機関銃を備えた逆関節の機械的なものに変貌する。

高速機動には向かない逆関節型の義脚は姿勢の固定には抜群の効果を發揮する。だから一斉掃射の反動など意に介さない。

大量の銃口から視界を埋め尽くすほどの弾丸をサイファアはどう捌くか。コート右そでが漆黒へと染まっていき、あらわれるのはクノウトを思わせる鞭状の闇。異様な密度を保ちながら動き回り、野太刀と共に迫りくる弾丸のことごとくを叩き落としていく。

「アツハツハツハツハツハツハツ！ やつぱり教えられたとおりだったわ！ まさかあの時の化け物が生き残っているなんて！」

「その身体、しつかり覚えているぜ。しこたま新大陸の反乱軍どもをハチの巣にしたヤクでもキめたバカ女がいるってな」

「その通り。個人単位で一個大隊の火力を得る身体なんて、私にピッタリでしょう?」
「一発撃つて当たらねば十発撃ち、十発撃つて当たらねば百発撃つ。素晴らしい設計思想だな」

「その力、流星は『女王陛下ハスの魔犬カゲイ』というだけはあるのかしら?」

返答は銃弾だった。今まで大量の九ミリ弾を撃ちまくっていた右足は跡形もなく吹っ飛んでいた。

「僕をその名で、呼ぶな」

「……今まで、どうやって生き延びてきたの?」

「死にたくなかっただけ。僕が生きてる理由はただそれだけ」

撃鉄を起こす音が鳴り響いた。どこかでフレデリカと騎士が交戦する音が聞こえてくるが、それだけは嫌にはつきりと響く。

「あなたも死を恐れているのね」

「まあ、知り合いは『生も死もペテンだ、まやかした』とぬかしたがね。結局のこと死と隣り合わせになって、懐かしいあの時のことに浸っていたいだけだよ」

「男ってホント、ロマンティストよね。でもそうよ、死を感じていないとあなたも私も生きていられない。一度でも命のやり取りをやってしまったら、市井に生きる一般人の道は二度と歩めない。だから私はここにいます」

「あるのはただ一つ。境界線に跨つてゐる公僕に処分されるか、今のように共食いだ」
「あなたに殺されるなら、少しはマシね」

クンとサイファーは首を傾けた。そのすぐ横を物理的破壊力を持った圧搾蒸気が飛んでいった。秒速二三〇〇メートル、その温度は六〇〇度に迫る。生身の人間がもろにくらえば、大型のガーニーに跳ね飛ばされるのに等しい衝撃で吹っ飛ばされながら、高温の特殊な攻撃用圧搾蒸気によって全身やけどは避けられない。

自慢の殺人兵器を紙一重で避けた彼に、思わず女は称賛の口笛を吹いた。

次の瞬間、五体はすべてバラバラになつた機械部品となつて四散した。ステロイドの人工皮膚の下もすべて機械だつた。考えれば無理もない話だ。両手両足の戦闘用機関搭載義肢の重量を支えるにはリン酸カルシウム主成分の生身の骨格では不可能だ。

ただ頭部だけは機械油とは違うものを垂れ流している。少しだけ、肉も。

「脳が残っているから人間なのか、それとも意志があるから人間なのか。どのみち人殺しのための身体を抱えては、長生きできんだらうに」

物悲しそうに呟いた声は、響くことはなかつた——どこにも。



フレデリカの背筋を冷汗がなせる。

単独で相手した中では最大戦力だ。相手はとつくに人間をやめて機関騎士に生まれ変わっているベテランで、こっちは変化してから一月と少ししかたっていないルーキーだ。

ただ経験は工夫で埋められる、教えられた技で埋めることができるのだ。

狙うは関節部。柔軟な駆動を必要とする以上、装甲を配することは不可能なのだ。

狙いも定めぬ連射のように見えて、フレデリカは遅延した時間の中で跳ね上がった銃身を次の連射が来るまでに余裕をもって直し、照準を再び合わせている。傍目には毎分一〇〇〇発ものフルオートを狙った箇所にも、それも寸分の狂いもなく撃ち込んでるように見えるだろう。

騎士は速さを以て対処した。球体車輪がもたらす変則的な二次元軌道を、腰だめに機械剣を構えたままこなしている。縦横無尽に動き回られては狙いもつけ難い。

その攪乱の中で必死に殺意を読み取ろうと試みる。

しかし人体の大半を機械化されているとなれば放たれる殺気も薄まるのか、感じ取れるものは皆無に等しかった。あるいは戦闘補助用として情報処理に使われている階差

機関によって、ほぼ自動的な戦闘行動をとっているからかもしれない。

その時、ピンと感じる者があった。

振り向いたときには眼前に機械剣の赤熱した刃が、峰に配された噴射口から圧搾蒸気を噴射して迫っていた。

反射的に仰け反って避けた。あやうく胸を持っていかれそうになって、つくづく大きすぎる自分の胸に辟易してしまふ。こういう時には、やつぱり邪魔だ。もう二回りくらい小さければ、格段に動きやすくなるのにと世の女性が血涙を流すようなことを内心で思っている。こういう時にこそ、余裕は持つておくものなのだ。

だから二挺の狙いも容易くつけられた。

『All In One』は首の後ろを。

『One In All』は剣を握る右手の肩関節を。

銃火が弾け、弾丸は装甲をかいくぐって狙った場所に撃ち込まれた。機関騎士の首の後ろには、先述した階差機関が埋め込まれている。ここをやられれば体を動かす度に大脳への過負荷によるオーバーロードの危険が出てくる。おまけに右肩の肩関節を破壊したことで、剣をぶんぶん振るわれる心配は永久に去った。

さらに立ち上がれないように両膝まで撃ち抜いた。

ここまでやればさすがに戦意喪失するだろうと見込んでいた。

その安堵を狙ったように左手が跳ね上がった。機械にしかありえない挙動で、腰をぐいんと回して五〇ミリ旋条砲を向けた。五体もそろえて一斉射撃すれば軍艦さえ鎮める威力だ。目の前にいる神もメモ金色のこの世にいるとは思えない美貌の少女——實際は成人を迎えてはいるが——など一発あれば十分だ。

——それも読んでました。

その眩きと左手に握る拳銃が跳ね上がったのを、騎士は知ることはなかった。

『One In A 1』より放たれた四五口径弾は旋条砲の内部へ入り——。

複数の爆発がほぼ同時に起こった。旋条砲の薬室に装填されていたのは対人ぶどう榴弾だ。発射されてから銃口近くで拡散し、人間であればまとめて三人を跡形もなく木端微塵にする十ミリ小型榴弾を二〇個も前方一八〇度の範囲にばら撒くのだ。それが機関騎士の左腕の内部で炸裂し、左半身を跡形もなく吹っ飛ばし、シヨックでわずかに残った生身の部分は機能停止する。

階差機関を潰したからこそ、土壇場の反撃で放たれた濃密な殺気をフレデリカは感じ取れた。もし反応が一步でも遅れていたら拡散した榴弾の餌食となっていただろう。

どう、と音を立てて倒れた騎士を見た瞬間、全身を悪寒が襲った。

殺気を感じたときに似ているような気がするが、これのほうがもつと強い。

何かが身を叩いたようにフレデリカはその場に屈む。背後のコンテナが斜めにずれ

た。そのまま断面を滑っていき、腹の底まで響くような音を立てて落ちた。

何だ！ 何を使った！

正体のわからぬ兵装はフレデリカの周囲を飛び回っている。空気を裂く音が周辺の空間で何度も鳴って、避けようのない死の気配が忍び寄っていく。

とにかく周りを見回して兵装の正体を探ろうとする。

何もない虚空を見つめるだけだったが。後ろからの濃密な殺気を感じて飛び退いた。遅れてぴゅうと空気の裂ける音。さらに遅れて地面に一直線の斬線が走る。その延長線にあるコンテナももれなく真つ二つだ。

続けて変形して五〇センチ砲と化した左腕を発砲した。

装填されていたのは対人ぶどう榴弾だ。砲口から少しだけ直進したのちに、弾殻が弾けると同時に20個の小型榴弾が拡散する。

死をもたらず小さな花火を自分に当たるものだけを選んで撃ち落とす。爆轟と熱波が晴れた後、二挺を携えてフレデリカは揺らぐことなく立っていた。やや癖がありながらも流れる金髪も、同じ色の双眸も、目映いほどに騎士の脳に焼き付く。

それでも騎士はほぼ機械的に縮地の動作を行った。装甲が非常に重いため、地面を蹴るのではなく、足の底にある球体車輪を用いたものだ。背部噴射口から圧縮蒸気を噴射しての移動は時速二〇〇キロ超だ。鈍重な身体は三〇〇キロを超えるために掠るだけ

でも、重傷は免れない。

びゆう、と空気をうならせて機械剣が一閃した。身長差と潜り込んで回避することを考慮して、斜め下に振り抜く。

フレデリカは懐へ滑り込む。それでも顔を削られることは避けられない。だが死の刃を低姿勢を保つために腹に着けるようにしていた二挺を、機械剣の刀身の腹を打つように跳ね上げた。音速以上の加速を持つていたがために、軌道を逸らすのは逆に容易かった。

その時、騎士の重厚な肩部装甲から妙な駆動音がしたことを、フレデリカの耳は聞き逃すことはなかった。

またもや見えない兵装が周囲を包んだことを本能的に察した。少し前までは備わるとも思わなかった戦闘者としての長直感ともいうべき勘は、確実に危険から遠ざけている。だが周囲一带を取り囲む不可視の兵装が相手となれば、頼れるものは五感に頼らぬ察知のみ。

嵐のごとく不可視の何かが駆け抜けた。

かまいたちが幾重にも重なって通り抜けた。そう錯覚するほどに何もかもがごとごとく切断され、細かい破片となって辺りに散っていく。ここまでやられれば生きているものなどいるはずがない。

だが騎士の耳は発砲音を聞いただろうか。コンテナが切断され、崩れ落ちる音。切り抜かれた屋根が落下する大音響。鉄筋の失墜する大音響に紛れて聞こえることはなかった。

——集弾。

一度撃ち込まれた箇所寸分の狂いもなく、立て続けに弾丸を撃ち込む。

フレデリカはこの常軌を逸した絶技を騎士の肩部装甲に向けて放ったのだ。一度弾丸を受けて刹那の瞬間だけ脆弱性を露呈した装甲は、続く第二弾によって貫徹され内部装甲を破壊された。

その瞬間、周囲にきらきらと煌めく何かが辺り一帯にわだかまる。

「金属製の斬鋼線……触れただけで指が落ちますよ」
スラッシュユースリング

それは百分の一ミリ単位まで研ぎ澄まされた無数の鋼線だった。それは肩部装甲内部に隠された巻き上げと送り出しを兼ねたルールによって、宙を自在に舞いながら触れたものを有象無象問わず両断する兵装なのだ。

今度は騎士の兜を集弾が襲った。必殺の武器をやられて呆然としていた時だった。

「終わったらしいな」

その声がサイファーが無事だと物語っていた。彼自身の声なのだから。

二メートル近い巨軀とガンマンのごとき風体を見たとき、フレデリカの心は一気に安

堵で満たされた。

「結構、てこずりました」

「いや機関騎士相手にあそこまで立ち回れて、さらに打ち倒すことができたんだ。充分満点合格花マルをあげてやってもいいくらいだ」

「少し買いかぶりすぎです」

「いいや、最初にあつたころの貞淑で家庭的なお嬢さんだったころを知っていれば、十分に妥当な評価だと思うけどね」

「あの、サイファアさん？」

「いまやこんなに強くなっちゃって予想以上だ。本棚の官能小説もどんどん増えてくのも予想外だけどね」

「さ、サイファアさん！」

「なんか間違つたことを言つてたか？」

「いえ、違つてはいないですけど、でも、違うんです」

「一人ですときのオカズってわけか」

支離滅裂な否定の代わりに思い切り噴き出した。

「凶星か」

「……まさか無事だと思つて安心したところに、こんな仕打ちを受けるなんて……」

そしてサイファアのほうを見上げて、フレデリカはちよつと驚いてしまった。

きよとんとした表情の彼と目が合ってしまったから。気づかぬうちに自分も同じ表情をしてしまっていた。

沈黙が訪れる。

——一秒。

——二秒。

——三秒。

プツと噴き出したのは——サイファアだった。

「ハハッ、『無事でよかった』か、そうかそうか」

好々爺のように呵々大笑していた。これもフレデリカにとってみれば初めて見る表情の一つ。いつもの不適でシニカルな笑みとは、根本からして違う純粋な歓喜のみがなしえる笑顔だった。

「笑うなんてひどい。そういう人は、苦手で、嫌いです」

「わるいわるい……心配なんてされたのは、久しぶりだったからな」

情に、飢えていたのだろうか。

そう、フレデリカは思ってしまった。ヘンリエッタも、フランクも、デリンジャーも、心配するなんてことはなかった。きっとサイファアほどの強さがあれば、そんなものは

無粋だと思っっているのだから。

でもフレデリカは違う。

いなくなつてほしくない。心の底からそう言える。理由は不確かであれど、要はそれだけ大切な人なのだ。

幾度となく助けてもらつて、世話になつて、それらの恩に報いたいと思つたことは幾度とある。食事を作つたりするのも、こうやつてサイファアの手伝いをするのも、根底に恩に報いたいという思いがあるからなのかと薄々思つてはいた。

どんどんサイファア・アンダーソンという男の存在が大きくなっていく。

——きつと、驚いているのかな。

——私みたいな人は、きつと今まで会つたことないと思うから。

胸中の眩きは運命のいたずらか——的を射ていることを知る由はない。

「だったら飽きるまで心配してあげます」

「それはそれで困るんだけどなあ」

「私はあなたにからかわれて、いっつも困つて居るのですけど?」

「意趣返しつてわけかあ。参つたなこりゃ」

「自業自得の因果応報です」

「ぐうの音も出ないな、そう言われちまつたら………ちよつと待て」

「え？」

「ちよつとの間、動かないでくれ」

神経の全てを研ぎ澄まし、何かを感じ取ろうとしている。

フレデリカも同じように試みるが徒労に終わった。榴弾の炸薬が発する臭いや高压蒸気の独特な熱気が感覚を阻む。

「風が流れている」

「風、ですか？」

戦闘の影響で工場内はとても風通しが良くなっていた。

サイファーが大きなトン単位の鉄扉を蹴破ったり、銃弾が壁を穿ったり、斬鋼線が天井や床をぶった切りまくったせいで色々な場所から隙間風が吹き込んでいる。何かおかしな部分でもあったのだろうか。

「今のお前さんじゃわからんとは思いますが、地下へ流れる気流が一つだけあったんだ」

「地下へ？」

「この工場はカモフラージュで、地下が本丸なのかもな」

だが階層構造アーコロジーであるアーカムで、大規模な地下室は少し難しい。サイファーの自宅も地下に武器庫があるが、あれはそこまで深くはないし、面積もさほどではなかったはずだ。

となると、だ。

何かもつと恐ろしいものが待ち受けている気配を感じ取った。常識の薄氷を叩き割るような。

歩き始めたサイファーの後に黙って続いた。何もしゃべることなく、ただただ足を進めるだけだった。だが足取りはなぜか重く感じられ、全身を正体不明の悪寒が抱擁している。冷汗が背筋に浮かんで、ブラウスに染み込むことなく背中を伝って流れていくのを感じた。

サイファーはどうだろうか。

こんな正体不明の恐怖など露ほどにも感じていないのか。あるいは感じてはいるが、恐れるに足らないのか。あるいは押し殺しているのか。その一切をサイファーの背中と感じさせず、揺るぎない足取りは変わらない。まるでマットシルバーのごとくタフさと鋭さを兼ね備えており、恐れなど緑錆が浮くごとく似合うわけがない。だからこそ野太刀と規格外の巨銃を扱うためのハードさがあるのだろう。

「()か」

「……地下通路ですね」

それは騎士が斬鋼線を振り回した中で偶然空いたのであろう。モルタルの床が切り抜かれ、そこから同じモルタルの地下通路が覗いている。凶獣が顎を広げ、その大口に

獲物が飛び込むのを待っているようだった。

思わず一歩後ずさってしまった。

空気がまるで違っている。ここから先が、人界の常識倫理一切合財を冒瀆する狂気の世界への入口だと理解した。

「本当についてくる気か？」

「……決めましたから、行きますよ」

「わかった、僕も全力を尽くす」

「でも……一回だけ手を握っていいですか？」

「僕で良ければ」

差し出された大きな手を両手で包み込んだ。

手のひらは日本刀や拳銃を握ったタコでござつとござつとしていて、表皮も厚くて男性的な力強さを感じさせた。伝わってくる温もりが心強く感じて、いつでも戦える気になってきた。いま幻想生物が出てきたって単身かつ片手間に屠つてのける自信がある。

「いつでもいけます。大丈夫です」

「じゃあ行こうか」

ひよいと抱えられた。

——え？

——なんでお姫様みたいに抱えるの!?

そのまま床の穴へと飛び降りていった。地下通路の天井は割と高かった。

照明は電灯があつたものの、電力が来ていないのか点いてはいない。斬鋼線が電線を切断したのかもしれない。

「あの先を見ろ」

視線の先には抱えられたことなど吹き飛ぶようなものがあつた。

「……………抜け道―」

暗いはずの地下通路でも嫌にわかつた。下層のどこかに繋がっていることは、薄暗い屋外に繋がっていることから伺えた。

「こりや相手は相当なやり手かもしれないな」

「……………行きましょう。できることからやっていきましょう」

「違ういや」

意を決して二人は一步を踏み出した。

無限、老碩学の夢は万象を産み落として

抜け道を通り過ぎると空気が一気に重たくなった。

この重圧にフレデリカは覚えがある。肌が粟立つ独特の感覚は幻想生物とかしたベアトリクスや、天使のごとき姿へと身を変じたベンジャミンと対峙した時と同じものだ。現世を冒険し嘲笑する異界の者どもだけが放てる瘴気というべきものだろう。

「ひどい空気です」

「僕も同感だ。ここはデリンジャーの管轄外の最下層近くかもな」

「管轄外？」

「デリンジャーでも下層は手に余るといっわけ。特に最下層とその付近は」

「近くでもここまでの空気なんて……」

「いつもなら、もう少しだけ薄い」

アーカム最下層は夜の闇に包まれている、と錯覚してもいいくらいに真つ暗だ。

荒れ放題の石畳を照らすのは前時代的なガス灯だ。それも弱弱しく、フィラメントの切れかかっている電球のように明滅を繰り返す。二人の影は物陰から忍び寄る怪物のように、何度も現れては消える。

空気と、暗さと、様々な要因が絡み合つて得も言われぬ不気味さに包まれている。

人の営みがあつたであろう家々の数々はすべて廃墟だ。それでも視線を感じるのは気のせいではない。

不意に家の影が揺れた。

金属光沢に覆われた体が現れた。人間離れた容貌が多い下層と言えど、こんな見た目をしているのは一人しかいない。

「DM」

「よお、デリンジャーが言うには、相当な暴れっぷりだったと聞いたぜ」

「何の用で来た？　ここが冷やかしじやすまない場所だとは、お前さんだつて重々承知のうえだろう」

「それはわかつてる。自慢の次元防御も紙ぺらみたいに引き裂く連中だつて、ここには存在している。でも、いつまでも蚊帳の外ではいられんからな。あれを見てみる」

真夜中と同じくらいの暗闇でも、金属光沢で輝く指の指す先は異様に際立つて見えた。

それは何の変哲もない石畳の階段だ。だが長さが異常だ。石段の先は全く見えないほど遠い。現実ではありえるはずがないものだど、サイファーもフレデリカも本能的に察した。特にフレデリカの目は正体を告げていた。

——前方の石段に大規模の空間歪曲を確認。

——石段の長さは無限大に延長されています。

「これって……」

「フレデリカのお嬢ちゃんは気付いたようだな」

「おまけに不用意に足を踏み入れれば、後方の空間を遮断して間髪入れずに異空間に隔離。あとは永遠に石段を上がったり下がったりしている内に、餓死するか精神が参ってキューだ」

「だから俺が手助けする」

石段のほうに向きなおってDMは指を鳴らした。

打ち鳴らした指先から波紋が広がる。見たまんまの、水面に石を投げたのと同じ波紋が揺らぎながら、ついに石段に到達した。

途端に天地が揺れる。ガラスに描いた絵に大きなハンマーか、工事用の杭でも打ち込んだように、目の前にあった無限の長さを誇った石段が爆砕した。それと同時にDMが膝をついた。

柔軟な生肌と同じ質感を有する、金属光沢を放つ肌に浮かぶのは瀑布のごとき汗。

「俺は……までだ」

「助かった。僕もあれを力づくで破るのは、ちよつとキツイ。専門家が出てくれたおか

げだ」

「ありがとうございます、DMさん」

「どういたしまして。アンタみたいに綺麗でかわいい女に礼を言われるのは男冥利に尽きる」

「二つだけ教えておこう。フレデリカを褒めたって、出てくんのは恐ろしくウマイカレーだけ」

「機会があれば、ぜひいただきたいね」

そのまま口を真一文字にしてサイファーは歩き出した。

フレデリカは振り返って、ペこりとお辞儀。DMは手を振って応えるだけ。

そのまま歩き続けること、およそ五分。何かあったわけでもなく、フレデリカは口を開く。

「勝算は……どれくらいありそうですか？」

恐る恐る聞いた。

サイファーはきつと自信家だと、本人の言動や周囲の評価から推測している。こういう実力を疑うような質問は、たぶん機嫌を損ねると思つて、あまりしなかった。

「さっきの石段のおかげでな、思っていた以上にだいぶ下がったわ。こんなことまでできるとは思わなかった」

以外にも冷静に、理的に返してくれた。

真剣な時はきつとこうやって、努めて冷静に出ているのだろう。あの感情的で、粗暴なのは、格下相手ゆえの余裕というものだったのか。

やはり付け焼刃の自分とは、一線を画する暴力だ。

粗暴に暴れ狂うこともあれば、研ぎ澄ませた刃のごとく冷静に振るわれることもある。

プロフェッショナルの暴力。

その表現が、ひどく、びたりと合う。

「あれだけの空間歪曲ができる相手だ。無傷ではいられないかもな」

「どうやってああいうものを作ったのでしょうか？」

「空間歪曲自体は下層じゃ珍しくもないことなんだが、さっきのは長さが問題だ。空間の構成要素に無限大の情報を書き込めば不可能じゃあないが、それができるとなると普通じゃない。碩学はあらゆることに通じ、異なる学問から新たな知識を生み出すとされるが……あそこまでとなると笑えんな」

「碩学は……そんなことまで、できるんですね」

「知識もまた力だ。覚えておくといい」

思わず大学のバベツジ教授を思い出した。彼も名の知られた碩学であり、発明した

品々は数知れず。

それでも、こんな超常現象を起こせるとは思っても寄らなかつた。現実を書き換えるほどの偉業を碩学は成し遂げるといふのか。この世を覆うテクノロジーのほとんどが碩学によつて生み出され、今や世界になくしてはならない存在へと昇華したとしても、現実を書き換えてはならない。

それは犯してはならない領分だと、フレデリカの本能が、双眸が告げる。

「もしくは碩学じゃなくて、もっと別の何かかもな」

「そう推測する理由は？」

「いくら碩学でも無から有は生み出せない。あれだけの肉體変異を起こす薬物を作るには、やっぱりそれなりの材料が必要だろ？」

「たしかに納得です」

「利害関係はどうあれ、協力関係を結んでるんじゃないか？」

「そういう存在は……どうやって協力関係を結ぶのですか？」

「方法はいくらでもあるが、一番安全で安パイなのが道具をきつちり揃えて、きちんと呪文を唱えて召喚する方法だ。呼び出した後に備えて生贄が五体もあれば、さらにいい。そのための呪物やら道具は下手すると中層でも買える」

——ちよつと待つて冷静に考えるととてもマズい気がします。

言いようのない、得体のしれない恐怖が背中に冷汗を浮かばせる。このアーカムは超常存在と背中合わせだとはサイファーと行動を共にするあたりから気づいてはいたが、形を変えて突き付けられると改めて恐ろしくなる。

「お前さんは呼ぼうとか考えるなよ」

「命令されたって呼びませんから！」

「それならいい。きつと呼び出した瞬間に盲目だ。その目ん玉がのどから手やら職種やらが出るくらいほしい連中はゴマンといるからな」

——これ、それだけすごいものなの？

——そう思うフシが、ないわけではないけど。

——もしかして、私は爆弾を抱えているの？

にわかに心臓を締め付けられる。こんな恐怖を味わったのは初めてだ。

近いものを上げるとすれば、ファイアをファミリーごと一網打尽にできる証拠をひよんなことで掴んだ下っ端の気分だ。目に移るすべてが自分を狙っているような、それが一番近い。

「だけど僕の目が黒いうちは、そんなことはない」

「……照れちやいそうです。こんな状況なのに」

「たしかに。アーカム最下層でするような話じゃないな。こういうことを言うやつに

限って、トーキーや小説じゃすぐに死ぬんだよな」

「わたし、自分の身ぐらいは、自分で守れます！」

「フレデリカ、そりゃ杞憂というヤツだ。目ン玉抉り出されるほうの心配をしろ」

「それ……考えたくなかつたのに」

「それでも考えとけ。最悪のパターンというヤツは、常に考えておくものさ」

最悪のパターン。

考えたくはなかつたが、それでも無理矢理想像力を働かせてできる限り考える。

真つ先に考えたのは自分が死ぬこと。本来であれば残っているのがベストだというのに、無理を言つて同行している。やられてしまう可能性は濃厚だ。

——もしかしたら、サイファーさんが……

思わず振り払つた。

そんなことあるわけない、という思いが大半を占める。

でも可能性としては存在する、という考えが隅に巣食う。

あの大きな背中が眼前から消えることに、言いようのない恐怖が芽生えてくるのだ。自分でも、それほど恐れる理由がわからないほど。抑えようのない身の震えが何よりの証拠だった。

——せめて。

——せめて、あなただけは。

無事を祈るのは変な気がして。

でも、それでも、せめて祈る。

——大事な人、なんでしょうか。

——いつから、それだけ。

——こうやって祈るぐらい。

——大切に、なつたのかな。

——私は、守られるほうなのに。

腰だめのホルスターに鎮座する二挺に触れる。変わらぬ木製グリップパネルの硬さと温度が、力の象徴として鋭利な刃のごとく存在を主張する。

射手にその引き金を引かれる瞬間を今か今かと待ち続ける。忠犬であり、狂犬であると言えた。

だからこそ心強い。

その二挺に冠せられた名は『全にして一、一にして全』なのだから。

「さて、第二関門にご到着か」

「……扉？」

「お次は無限大の厚さを持つ扉か。まったく無限大の大安売りだ。スピリタスなら良

かったのに」

「……どうするんです？」

「目だけつむつててくれ、無理矢理ぶち破る」

思わず目を閉じた。

本能的な動きだった。そうしなければ、危険だと本能が叫んだのだ。

降りかかってくるのは、凄まじい重圧。手足が冷え切つて、感覚を失った。

常世の全てを否定する何かが、瀑布のごとく流出している。空気も、空間も、何もかもを冒流し、嘲笑う。『あつてはならないもの』が現実を侵している。

——なに、これ。

——これは。

——サイファーさんが、やっているの？

ベアトリクスのを砕きつくしたとき、ベンジャミンの翼を捌いたとき、得体の知れない暗黒が様々に姿を変えて展開した。その時も言いようのない何かを感じたし、いつもの灰色のロングコートは漆黒へと変わっていた。

——けれども、今は。

——比べものに、ならない。

何が起こっているのか、何をしているのか。

まるでわからない。目の前の超常現象の詳細をことごとく看破してきた黄金の双眸とて、視界に対象を修めねば真価を發揮することは無い。

それに重圧が、恐怖が、瞼を閉じさせる。見てはならぬ、と本能が悲鳴を上げて目を開かせない。

「——ッ!!」

声にならない悲鳴を上げたのは、うねる力を感じ取って。

渦潮か、それが竜巻のごとく、抗うことなど考えさせないほどの暴威となつて、存在している。

それが一気に、膨張する！

——激震！

空間そのものが打ち振るえた。

奔流と化した力が無限大の質量を貫いていくのを、視界がない中でも不思議とわかる。この世に存在するはずのない、無限という途方もない量を蹂躪する力。性質も、その量も、この物理法則の支配する現世にて絶対である無限を、踏みつけて、蹂躪し、砕きつくす。

破壊！ D e s t r o y 破壊！ D e s t r o y !

はあ、と息を吐くのを確かに聞いた。

フレデリカの心はそれだけでひどく揺らぐ。ただサイファーは一息ついたただけなのに、その声音だけが——たまらなく恐ろしい。

噴いて出てきそうなのを必死に抑える。下手をすれば恐慌に陥りそうなのを、理性と気概をもって抑え込む。恐怖に震えることはしたくなかった。自分を守ってくれる、大事な彼を恐れたくはなかった。

そして重圧は唐突に消えた。

「目、開けていいぞ」

おずおずと目を開けた。

目の前に、いた。見慣れた銀灰色の双眸と、橙に近い茶髪、それなりに整った顔が。

「大丈夫か」

「……はい」

「そっか………なかなか、肝が太い。アレの近くにいた人間は、等しく僕を避けるんだがな」

「避けたりなんて、できるわけありません」

「フレデリカが二人目か……」

「二人目って……」

「……そうだな、歩きながらも話そうか」

無限大の質量と厚さを誇った扉はなかった。大地より重い質量も、それを支える歪められた空間もなかった。

あったのは扉もない、長い門だ。距離は長かったが、せいぜい三〇〇メートルくらいだ。ちゃんとむこうぐあが見える。

「はじめて会った時のことを覚えているか？」

「ええ、それは忘れられなかったですよ」

「顔を見たときな、びつくりしたんだ」

あの時のサイファーは自分の見た目で選んだのか。ただ綺麗すぎるだけで、それだけなのに。

男であれば無理もないことだが、なぜかモヤモヤとした気持ちになる。

「雰囲気かなあ……僕を避けなかった一人目と、フレデリカがそっくりでな」

「そっくり、だったんですか？」

「フレデリカほど綺麗ってわけじゃなかったけど、金髪とか身長とか元々の青い目とか似てた。探せばいそうな特徴だけど、ここまでそっくりだったのは驚いた」

「それで、私を……」

「最初は本当に興味本位だった。その一人目とは忘れることができなくらい、色々と運命的なアレコレがあつてな。ベアトリクス的一件が済むまでと思つてはいたんだが、

色々と似ているところが多すぎて、結局のこと今に至ってるんだ」

「その人は、今はどうしているんですか？」

「死んだ」

後頭部を殴りつけられた。

そう錯覚するほどの衝撃が襲う。

——まさか、サイファーさん。

——私と、その人を重ねて、いるんですか。

黒い靄のようなものが、心を覆ったように感じた。

しかし、それはわずかな時間だけ。漆黒の霞はサイファーの言葉が吹き晴らす。

「だけど、フレデリカは、やっぱりフレデリカなんだよな」

「え……………」

「あいつはひどいお転婆だった。生傷なんか作らない日はなかったし、やたらと出かけたがるし、なれもしない料理に手を出して炭にした肉は数知れず。おまけに絶壁だった。引っかかりもないくらいにな！」

「うわあ……………」

「それでも、僕に真摯に向き合ってくれた、忘れられないお転婆だったのさ。その時の同僚は顔を見るたびに文句と説教しか垂らさないからな」

「私は……あなたと向き合えているのでしょうか？」

思わず聞いてしまった。

懐かしさから来るものだったのか、ほころんでいた顔が翳る。

マズいことを、聞いてしまったか。後悔が押し寄せた。

「向き合えてなかったら、きつとここにはいないよ。僕がすべてを終わらせるのを黙って待っている」

これも思わず口に出した。これは小声で、聞こえないように。

——良かった。

胸中に訪れた安堵が何から来るのか、気に留めることもしない。ただ、ただ、噛み締めて味わった。

「僕もな、フレデリカみたいな娘は久しぶりだった。こうして隣をいつも歩いてくれる、お前さんみたいな娘は」

「私も、その………あなたが隣にいてくれるのが、なぜか嬉しくて、心強く感じて」

少しの間。

ちよつとの間。

わずかな間。

足音だけが響く。暗く、長い門の道に響き渡って。

「そばにいても、いいですか。これからも」

「お前さんが構わなきや、気が済むまでいてくれていい」

「それでは改めてよろしくお願ひします」

「それじゃあ、こちらも改めてよろしくな」

差し出された手を取った。

門の終わりは、すぐそこに。



——びうん。

空気を震わせる音。

妙に甲高く、耳に着く音を操り手の耳は聞き逃さない。

「第二関門さえ突破しましたか。しかも力はまるで衰えた様子を見せない」

「あれはそういう存在だ。限界など、ハナから存在せん」

「私とて抑え込めるかどうか、少々保証できかねます」

「……臆したか？」

老人の声は地響きと化した。埃が降ってきたのを、操り手は感じた。

少し前から、この老碩学の力は比例的に上昇している。今、こちらに向かつてきている二人の前に立ちはだかった、無限の階段と無限大の扉は彼が生み出したものだ。

その手段も、ただ思考しただけで生み出されるのだ。

神の領域だ、と操り手は思った。

思考一つで人類の手繰る科学では成し遂げられぬ無限を生み出し、掴むことさえできぬ空間を捻じ曲げる。

もし直接その手を振るえば、言葉を紡げば、それ以上の何かが起こる。自分の推測は十中八九、現実になる。その確信が操り手にはあった。

「まさか、サイファー・アンダーソンは確実に抑えます」

「ならいい。あの男は恐ろしい。たとえすべてを跳ね返す力を持つのが、念じただけで相手を殺す力を持つのが、いかなる力を以てしても届く前に砕かれる。お前の技の秘策とやらの掛けてみるとしよう」

「破られたことはありません。そばにいる彼女では知られることもないでしょう」

「あの眼を侮らないほうがいい。アレの真価はすべてを見抜くことではない。世界の全てを知るのみならまだしも、見たものを世界にすることが本質だ」

老碩学の目はぎらついている。

彼は狙っているのだ。フレデリカの黄金の双眸を。

「狙っているのですね」

「わかるか。今や、この世界は私の思いのままだが、この力をくれた存在のように《彼方なるもの》をこえてはいない。夢幻の世界に手をかけ、その力を手にすることが最終目的だ。夢幻の力を手に入れれば、人々の夢と現実^夢は融和し合い、夢は現実となり、自由な現実^夢は崩壊する」

「その先にあるのが——恒久的な平和というわけですか」

「夢——理想がぶつかり合うことなく、確実に叶うとなれば人々は満たされる。しかし、夢想のごとく干渉し合うことなく、平等にかなえられていくのだ。争いの中に生の充足を見出すものと、平和を愛する者が共存する事ささえるのだよ」

「なるほど……では、その理想郷^{暗黒郷}がどう行き着くのか、我が主人のもとで見届けさせてもらいましょうか。あと——」

「なんだね」

「眼以外は——私^{暗黒郷}がいたただきます。中々にいい対象となつてくれそうなので」

操り手の姿は——いずこへ。



門を抜けた先——そこはゴシック調の洋館だ。

日も届かぬゆえに植物の育たないアーカム最下層であるにもかかわらず、壁の蔓バラは青々と茂り、毒々しい紅の花弁を広げている。

そして、空気が違う。

肌が粟立つレベルでは済まない。むしろ馴染んでさえいる。それも双眸は、大歓喜だ。

その状況を伝える際は、酷く淡々としていたが。

——状況、周辺一帯の環境は夢幻郷と三割程度の類似性を示しています。

——最適化が行われた今の身体にとって、人界以上に馴染む環境です。

そう、むしろ体は軽かった。重ささえ感じていない。なのに五感はひどく鋭敏になっていた。今なら羽毛が宙を舞う音も、子虫の足音も、空気の質量も、感じることできかないものを察知できるような気がした。

「環境が書き換えられている」

「この空気、人間では耐えられそうにないですね」

「足を踏み入れただけで発狂する。これで平気だとすれば……わかると思うが」

「大丈夫です。自分の身体が普通じゃなくなっただけなんだから、もう気にしてませんから」

「……そうだな、発狂しなくてラッキーくらいに考えときゃいいさ」

言うとおりにすることにした。

「デメリットなんてほとんど無いようなものだから、いつそメリットにだけ目を向けているのが最善だ。」

「ここで気をもむ必要性など、皆無なのだから。」

洋館の庭はずいぶん広い。

どのくらいの大かさかと聞かれても、パツと出てこないくらい大きい。

庭木や花壇は枯れ果てている。蔓バラだけが青々としていただけあって、ほかの植物が枯れ果てているのは不気味に思えてくる。

「まるで幽霊屋敷ですね」

「もしかしなくても幽霊屋敷だ。こんなところに住むヤツなんて幽霊にイカレ野郎、そしてキチガイと相場は決まっているんだ」

「真つ当な人は空気だけでアウトでしょうけど」

「違うない」

そこから、さらに一步。

踏み込んだ瞬間、何か渦巻いた。目で見れるものではない。なぜならば、それは――
―感情！

それも生を欲する死者のそれだ！

「走れ！」

二人揃って駆け出す。

駆け抜ける石畳の両脇、その地面がぼこぼこと隆起していくのを見ないようにしながら。

わずか一分でフレデリカが気付いた。

「距離が縮まりません！」

「クソッ！ 死者をよみがえらせて驚かせた隙に、空間歪曲をキめるとはな」

サイファーは巨銃を抜いた。コートの形を崩さずに収める保持方法は彼のみぞ知る。

リボルバー
輪胴をスイング・アウトし、装填されていた弾丸を抜いた。新たに込めるのは薬莖と

見間違える弾丸。それは七〇口径の散弾だ。

砲と言つていい巨銃が咆哮する。

放たれたのは直径六ミリ程度のばら弾が三〇発近くも放たれた。

襲い掛かる相手は隆起した地面より現れた、生者の命を求める亡者。腐りかけて蠅の

たかる肉体に、偽りの生を断ち切るばら弾が撃ち込まれる。

ばら弾一つ一つが着弾した瞬間に炸裂する。

小規模の爆発を起こし、腐りかけてぐずぐずになった肉体は跡形もなく吹き飛んだ。餌食となった亡者の数は二〇を優に超える。この圧倒的な面制圧力は他の弾丸では成しえない。

「意外に脆いな。普通の弾でもよかつたか」

「腐りかけですから。頑強さは望むべくもないですが……」

フレデリカの黄金の双眸が周囲一帯を見回した。

亡者は地面から矢継ぎ早に這い出してくる。その数はすでに五〇を超え、洋館の庭を埋め尽くそうとしていた。尽きぬ増援が相手となれば、違つた脅威となる。

「ジリ貧になりそうだ」

「弾丸は温存したいんですが……」

フレデリカの武器は二挺のみだ。弾が尽きてしまえば徒手空拳しかない。心得がないわけではないが、亡者を相手取るならば銃のほうがいい。

それに後にどんな脅威が待ち構えているか不明だ。それに備えて弾丸を節約しておくのは道理であつた。

「仕方ない。ぶつた斬るか」

「いくら斬っても同じことだと思えますけど……」

「いや、斬るのはここだ」

「ハイハイ」

いつの間にかサイファーの手には五尺もの野太刀があった。片方の手で指さすのは——地面。

「出力は落ちるが——まあ、十分だ。この姿のままでもいいか」

黒く——漆黒に、暗黒へと染まっていく。

外套ではない。優美な弧を描き、刀工が腐心して描いたのであろう波紋が映える野太刀が染まっていくのだ。森羅万象を撃ち砕き、蹂躪することを許された黒き力。それと人並み外れた技巧で振るわれる野太刀が織り成すのは——歪められた場の両断であった。

振るった一刀は空間に黒い剣閃を刻み付けた。そこから力が流し込まれる。森羅万象を撃ち砕き、蹂躪することを許された暗黒の権能が！

歪められた空間が消滅すると同時に、あれだけいた亡者も幻となっていた。庭園にはサイファーとフレデリカだけが残されていた。

「うん、この状態で振るっても、これだけの威力を叩き出せるか。これからは積極的に使っていくことを考えとくか」

「……歪んだ空間を、斬ったんですか？」

空間が歪んでいたことは双眸が伝えている。

「ああ、極東の剣術と僕の力を合わせた。片方だけじゃ成し遂げられなかったらうよ」

「そんなことまで……」

「今さら驚くようなことでもないだろう。こちとら無限大の扉もぶち破っているんだ」

そんなことを言われてしまつては、もう感覚はマヒしたも同然だ。空間一つぶち壊したとしても、もう驚かない確信が出来てしまう。

ただ、それに慣れてきている自分がいることをフレデリカは気付いている。そこから抜け出すことが出来ない事も、併せて。

洋館の正門に今度こそたどり着いた。今度は歩いて一分もしない内に。

押し開ける前に、五メートル近い大きな扉がひとりでに開く。ホラーものの小説や
音声映画
トーカーでよくあるパターンだ。その後は決まつて――。

「おっと」

「うわっ！」

洋館に足を踏み入れてから、少し歩みを進めたあたりで扉が勢いよく締まった。

埃が舞い上がり、洋館中の蠟燭が灯っていく。古びてはいるが汚らしくはない。

エントランス・ホールは意外と広かった。中央から奥の壁に向かって階段があり、そ

ここから二階へ向けて左右に分かれている。典型的な形だが、伝統的な美しさと様式美がある。

左右へと分かれる分岐点の踊り場に一人の男が立っている。

目を見張るほどの美丈夫だ。微笑みかければ女であれば誰だつて墮ちる顔を彩るのは、腰まで流れる銀色の長髪だ。ロングコートもシャツもスラックスも全て漆黒だったが、目の前の彼には良く似合っている。フレデリカには見覚えがある。

「あの時の……」

あの不貞の行いを忘れてはいなかった。

「初見の方も、再びの方も、両方ともいらつしやるので自己紹介を。ウォルターと申します。この立場になる前は画家をしております」

「へえ、絵描きが荒事か。世の中というのは、どうにも良くわからんもんだ」

「あなたが斬っていったアレ、お気に入りだったんですよ」

「たしかに貴女ほどの大ききとなればデザイン性に富むものは少なさそうです。たしか上から九五、五六、八五でしたか。一六一センチの身長に対して、破格のスタイルですね」

「意外といい趣味をしているな」

「光荣です、と返しておきましょう」

フレデリカは二人の会話なんて頭に入っていない。具体的にはスリーサイズを暴露されたあたりから。

しかも女の目線から下着のことまでのたまった。そもそも大ききだけで下着選びに悩んでいることまで感づかれるなんて、きつと自分のように弄んだ女性が多いに違いない。そんな感じで顔面蒼白だが、思考はひどい暴走状態だ。

「フレデリカ、オーダーメイドの金くらい出してやる」

「……………余計なお世話です」

完全に意気消沈してしまった。

本当に余計なお世話だった。オーダーメイドくらいしかデザイン性の高いものはないが、そこまで世話してもらうのは嫌だ。その気になればフルカップのシンプルなもの構わない。ヘンリエッタは『もつと着飾れ』と言ってくるが。

そのときウォルターが飛んだ。

人間では決して成しえない挙動だ。翼でもあるように舞い上がって、ふわりと舞い降りた。エントランス・ホールの階段を一足飛びに跳躍し、両手を振り下ろす。

——びうん。

空気が弾ける。

床と壁に斬線が走った。

類似の痕跡を残す凶器をフレデリカは既視している。だが、もつと鋭く、数も多い。

「どうやら、そちらのお嬢さんは似た凶器を見たことがあるようですね」

「どうせ金属の糸だろう。だが衣服の隙間まで潜り込む技巧の持ち主は、僕でも知らないな」

答えたのはサイファーだ。ウォルターの意外そうな顔に、いつものシニカルで不敵な笑みを以て応じた。

「ちつとは楽しませてくれ」

巨銃から散弾が放たれた。

魔戦、正気の薄氷を打ち砕き

散弾を不可視の糸が薙ぎ払った。

数百、数千もの糸が網状に絡み合い、散弾を斬り捨てて無力化させる。その技巧の凄まじさに思わず、サイファーは口笛を吹いてしまった。

その音を頼りにウオルターは糸を飛ばす。

傍目から見れば、不可視の何かが大理石の床を抉り取りながら猛スピードで進んでいくように見えただろう。銃弾ほどではないが速い。

サイファーは真上へと三メートルも飛んだ。灰色の外套が翻り、魔鳥の翼さながらに広がった。いつの間に抜いたのか愛用の刃渡り五尺にもなる野太刀は、大上段に構えられている。そのまま振り下ろせば頭頂から股間まで一刀両断だ。

「それは悪手というものですよ」

ウオルターが腕を交差するように引いた瞬間、洋館二階のテラス部分の柱がブツ切りになったかと思えば、一つ七〇センチはくだらない瓦礫が飛んでくる。かなり速い。いかなる手段をもって飛ばしたのかは不明だが、確実に音速を超えている。

散弾を装填されたままの『Howler In The Moon』を左手に、野太

刀を右手に構える。

サイファーが目まぐるしく動く。真つ先にこちらに飛んでくる瓦礫から迎撃に入る。一つ一つが炸裂する散弾だから、少しでも当たれば脆い瓦礫は砕け散る。それでも対処しきれないときはウォルターの糸の技巧にも負けぬ自信がある剣技で、五尺もの野太刀を振るうのだ。

飛来する瓦礫が砕かれるたび、礫と煙が視界をふさぐ。

その中に光る銀線をサイファーは見逃さない。

独特の軌跡を描きながら、四方八方三六〇度から迫る死の糸を薙ぎ払う。剣風一つで千々に両断された糸がむなしく床に落ちる頃に、サイファーも同じタイミングで舞い降りた。

「ずいぶんと細い糸だな。おおよそ千分の一ミリから、さらに細い糸が絡み合ってる」

「わかりますか」

「相手の凶器がわかんなきや、アーカムじや一週間も生きてられない。ケース・バイ・ケースで違う太さの糸を使い分けているのか？」

「そこまでお見通しですか」

「まだ手はあるはずだ。そうでなきや、お前さんの技なんて大道芸に過ぎないよ。それにフレデリカがないことにも気づいてないようだしな」

「おや、いつの間に」

サイファアの隣にいたはずのフレデリカは、先ほどのぶつかり合いの間に消え失せていた。

「お前さんに散弾を撃った隙に、先に行かせた。アイツを守りながら、お前さんの相手はできそうにないんでな」

「ふむ、それは良い判断と言うべきでしょう。戦いの場としての判断なら」

「……なるほど、やっぱりフレデリカの目を狙ってるのか」

「ええ、私たちの雇い主は。私個人としましては眼以外の全てをいただく約束を、すでに取りつけてまして」

「そうかい……髪の毛一本、血のミミリットルもやる気はないけど、さ」

腰だめからの振り抜き一刀！

空すら切り裂く鋭さと野太刀の重量など感じさせない素早い振り抜きを、野太刀を腰にためたまま、地面を蹴つての縮地から放ったのだ。並の装甲なら易々と切り裂いてしまふ、尋常なる荒事屋なら乾坤一擲の一撃だ。

それをウォルターがひよいと後ろへ飛んだだけで避けたのを見るや、さらに二撃三撃と野太刀を振るっていく。攻撃を一度だけに留めず複数回重ねる手腕は歴戦の者だけかなせる技だ。しかも一撃一撃が必殺の威力を秘めているとなれば、達人相手であつて

も十分な脅威だ。

長物の刀をくるりと回し、正眼に構えてからの轟突——に見せかけて後ろへと飛び退いた。サイファーの手に刀はない。あるのは奈落のごとき黒を銃口に孕んだ『Howl er In The Moon』の回転式拳銃にしてはあまりにも大きすぎる巨体だ。月まで届く——そう確信できるほどの咆哮だ。

放たれた弾丸は通常弾として使う弾丸とは違う、体に機関改造を施した者たちに使う弾丸だ。通常弾とは弾頭重量は五倍、銃口初速は七倍に迫る。

咆哮は一度——放たれた弾丸は十二発。仰ぎ撃ちフライングショットのような特別な撃ち方をしたわけではない。撃鉄を起こしてから、引き金を引く動作は一回分だというのに。

「なかなか楽しませくれる！」

「そりやどうも」

規格外の巨弾を複数の糸を組み合わせて斬り捨てながら、ウォルターは笑っていた。それに応じるサイファーも——笑っている。

この二人は笑っている——戦いを、命のやり取りを心から、魂の底から楽しんでいるのだ！

「お前さんとは敵じゃあなければ、割かし楽しくやっていけると思うなあ」

「私も——ええ、同感です。どうやら根底の思考回路は同じらしい。私は芸術家として

多くの美しいものを画布の上に描き出し、その中に命の輝きを見出そうとした。時には生きる希望を失い、死を乞う未亡人の喉笛を搔つ切つて、死にゆくさまを描き出したことさえありました」

「凝り性だな——そして、お前さんは命を輝かせるには、死という名の輝きが必要だと悟つた」

「そう——生を最も尊く気高きものとして感じるには、なによりも純粹な死が必要だという結論に至りました。いつしか——私自身も死を追い求めるようになっていたのです」

「そうかい——フレデリカを手に入れて、どうする気だよ？」

それを聞いたのが皮切りだ。

ウォルターの笑みに狂気が宿つた。瞳に闇が渦巻いた。

「肉体的な方法で死にアプローチするのは飽きました——精神的な方法で死にアプローチしてみよう。つまりは心を壊すんです。あの黄金の瞳を抉り出される様は絶対に描くとして、その後が肝要だ。心を少しずつ壊死させて、彼女の精神が彼女でなくなつていく様を思う存分描き出していききたい高尚たる魂の輝きを彩るのがあの美貌ともなればそれは最高の芸術となつて昇華されることでしょう！」

「……………させるかよ、そんな真似は」

狂ってる、と言うこともない。

壊れてる、と言うこともない。

サイファーは否定しない。ウォルターの狂気を。

——僕とて、同じ穴の貉、というヤツだ。

——ヤツは死に求めた。僕は戦いに。

——命の価値、輝きというものをな。

——僕もヤツも、五十歩百歩だ。

——内心の自嘲に気付く者は、この場にはいない。当人だけを除いて。

「あなたは、どう……なんです？」

——一気にまくし立てたのか、肩でウォルターは息をしている。

「僕はねえ……戦いの中にいないと、自分が生きてる感覚を感じられなくてね。お前さんも生の輝きを描き出す中で、ずつとぬるま湯に浸かっていた自分の命が活性化するような感覚。それを味わわちまったんだろ？」

「そのとおりですよ……だから私は平穏も安定も捨てた。命を失う感覚を味わうことで、人は自分の命の価値を噛み締めて幸福を味わえる」

「ホント………敵として会いたくなかったよ」

言い終えた途端、緩く弧を描く刀の刃は黒く染まっていく。

常闇よりも、なお暗く、重く、そして黒く。その刃から放たれるのが、尋常の剣技ではないことなど容易に想像がつく。

「初っぱなで、くたばってくれるなよ」

黒き刃を一度納刀、構えを居合の型に変更する。

縮地もせずに振り抜いた。刃は空を斬る——その程度に収まるのが尋常の剣技だ。刃の届かぬ遠方を斬り裂く技を、人類は未だに編み出してはいない。

だが——サイファーの一刀は裂いた。

未だに誰も断ち切れなかった空間を！

その銀灰色の眼に映る景色が一刀を振るった軌跡に沿って、見るも鮮やかに、ズレる。

そこにウォルターはいない。技の危険性を本能的に察したのか。

「今のを初見で避けるとは……刀が振り抜かれてから空間切創が起こるまでは、きっかり0秒なんだが？」

「ならば私がどういう存在かも、わかったも同然では？」

「ああ、この世の道理に縛られないためには、自身の存在価値というものを上にシフトさせるか……この世ものではない何かに成り果てるか、だ。お前は——死者か」

「ええ、主ともいふべき男の力で、浅ましくも現世に居続けていられるのです」

「操り人形——というわけでもなさそうだ。面白そうだ」

「私も——あなたのような人間は初めてだ」

——ぱあん！

空気の炸裂する快音と共にウォルターはサイファーへと接近した。その後が続くのは糸の大瀑布だ。触れたものを千々に裂く鋭さを秘め、サイファーの曲を斬り裂かんと迫る。

糸は幾万にも増えた。死の糸が重なり合って生まれた波状攻撃を、黒く染まった一刀を右回りに一周。

黒き力が剣閃となって三六〇度すべてを斬り捨てる。周辺一〇メートルもの範囲が切り刻まれ、ついにサイファーの一刀はウォルターの身を捉え、原形を残さぬほどに斬り裂く。

「ほほう………：……：ダミー、か」

後ろ手に巨銃を構える。銃口の先には——変わらぬ姿のウォルターが。

「あれだけ細い糸なら光の反射を使って色を出し、体内に至るまで模倣することも不可能じゃないな。あれだけの糸の量は僕を刻む目的もあったが、ダミーの維持も兼ねていたのか」

「恐ろしい洞察力です。主が脅威に感じるのも頷ける」

ウォルターの姿が洋館の柱、その陰に消えた。長い銀髪も、黒づくめのシャツもス

ラックスもコートも見えない。

「ですが、それだけ興味をそえられるということですよ」

言い終わりの声が急にしやがれた、と思った時には掻き消すような銃声が鳴り響いた。

飛来する弾丸を巨銃の弾丸で撃ち落とした。弾丸を弾丸で撃ち落とすのは、なにもフレデリカの専売特許ではない。ただサイファーの場合は巨銃を後ろ手のまま、という条件が加わるが。

「一度は会ってみたかった。お前にな」

「ワオ！ 僕って有名人？」

振り返って、もう一度『ワオ』という羽目になった。

ウォルターの姿がない代わりに、着流しを来た老人が立っていた。彫りの深い顔が災いして、どこかの出身かは判断できない。その両手が保持するのは銃床内部に反動消去機構を搭載した五〇口径自動小銃M3エクスキューションナーだ。

「お前さんが『主』という男かい？」

「そうだ、斑鳩重臣という」

「……なるほど、確かに主だけ。その体の中に千はくだらない命が渦巻いてやがる。何らかの方法で取り込んだんだな？」

「正確には千と六三だ。儂は獲物を殺すことで取り込み、その命を自在に使役することができる。生き返らせずにな」

「たしかに、動く死体のほうが都合がいいこともあるわな」

「そして……その力は儂自身にも適用される」

ほぼ不意打ちで放った空間切創は重臣を捉えることはない。

しかし、その範囲は段違いだし、斬撃の数も増えていた。ウォルターに放った数は一つだが、今度はより大きな斬撃を幾重にも重ねていた。

内壁が爆弾でも炸裂したように吹っ飛んだ。多重空間切創は標的か何らかのものに当たれば、切断と同時に周囲の空間を粉碎するのだ。

出来上がった穴には廊下が覗いている。そこに重臣は獣の敏捷性を思わせる、超人的な機動で飛んだ。

右手の黒く染まった野太刀を鞘に納めると、サイファーは『Howler In The Moon』を抜いた。そして鞘を背中に背負うように保持した。紐の類はないが、背中に合わせただけで離れることはなかった。重臣の後に続いて飛んだ。

廊下を歩きだして早々に内心は驚きに満ちてしまった。

——なんだ、こりや。

——ここまで弄るか。

廊下はあり得ない構造をしていた。道はいくつにも折れ曲がり、距離を考えればエントランス・ホールを突き破ってもおかしくないものさえあるが、それらは破綻することなく迷路として機能している。

サイファーはすでに正体を看破した。空間操作も極めれば一平方メートル四方に山一つ分を圧縮して修めることも不可能ではない。世界を形作る盤石である空間を操るということは、距離も、面積もまやかしとなる。

何も考えず歩き出したところに、眼前を弾丸が横切った。

「おっと………一キロ先からの狙撃か。あの銃にはスコープもついてなかったのに、あの爺さんなかなかやるな」

弾丸の飛んできた方向に子供が石を投げて遊ぶような感覚で、右手の巨銃をぶつ放した。装填されていたのは特製の弾丸だ。ホーレスが費用を相当吹っ掛けてきたが、いざ使ってみると代金相応の価値があった。

ぼつと彼方で青白い火の玉が灯った。

「むむむ、当たってないか」

そのまま狙撃が放たれた方へと、躊躇うことなくつかつかと歩き出す。

巨銃は構えたまま、じつと果て無き廊下の先を睨みつけている。その巨銃をおもむろに右へと振るった。飛来してきた弾丸を撃ち落した。七〇口径と五〇口径という破格

のサイズがへしやげて、くつつき合つて床に落ちる。

「悪いが、かくれんぼは嫌いだな」

撃鉄を起こした。叩く弾丸は先ほど撃つた特製の弾丸だ。

「出てこい。僕はシンプルなのが好みだ。まだるっこい戦いは大嫌いだね」

「こうでもしなければ、すぐに殺されてしまうよ」

声だけの返答に足音荒々しく、ずかずかと進み始めた。

「そうかい、だつたらお望みどおりにしてやる」

壁紙を張られた壁はコンクリではない。年代物の洋館だけに、材質も相応の木の建材だろう。

そこに向けて引き金を引いた。

青白い火炎の花が咲き誇った。花卉に触れたものを等しく炭化させる、地獄の猛火を秘めた青き花であつた。これではただの焼夷弾だが、放たれた火炎の温度は実に摂氏七〇〇〇度を優に超え、弾頭内部に火炎と併せて圧縮封入された重金属を爆圧でジェット流にさせる。猛き流れと化した重金属は秒速九〇〇〇メートルを維持し、あらゆる装甲を融解貫通させる

青白き花卉は火竜の燃え盛る舌も同然に壁と床を舐め回した。

だが、激しく燃え盛るはずの火は呆気なく消え失せた。元より普通ではないこの場所

では、住まう者の都合で物理法則が歪められていても何ら不思議でもない。
「(いち)ちらだぞで」

その言葉と同時に銃火が爆ぜた。

サツと身を引いたのは経験則からか。自慢の巨軀があつた壁には小型の爆弾でも炸裂したような痕が二つ。大口徑小銃の破壊痕は一方的に無残な印象を与えるほど大きい。

弾丸が飛んできた方向は背後。振り返つて目に映つたのは、どこまでも続く一枚の壁。

——いつの間にこんなモンを。

記憶が正しければ後ろは廊下があつたはずだ。これだけ大きなものをリアルタイムで創るとなれば、相応の巨大なエネルギーが発せられる。それさえも感じなかつたということは、それだけ洋館を覆う支配力の強さを物語っている。

また銃声が轟いた。

目の前の壁から炸薬の燃燒ガスを彗星のように引きながら、二発の巨弾がサイファアの両眼へと飛来する。半身になって躲したのは、意図的なことか、それとも偶然か。

反撃の弾丸はあの特製の弾丸だ。

壁に殺到するたびに青白い火炎の毒華を咲かせ、焼け焦げ抜いた大人の頭大の破壊痕

を色濃く残す。サイファーも同じく二発撃つたために破壊痕も二つある。穴から覗けるものは何も無い。

銃を保持したまま、左右に振りつつ、周辺を警戒する。

しん——静寂が王座にいる。

静かだ。ここに何もいないような。生命の息吹など、自分も含めて端から存在しない。それほど錯覚に囚われそうだった。それでもサイファーの極限ともいえる集中力は衰えることなく、壁の向こうにいるであろう射手の存在を捉えようと試みているのだ。

巨銃を支える腕がだらりと垂れる。銃の保持すら捨てて、索敵にすべてを費やす。

——どこだ。

足音がした気がした。

——どこだ。

体臭のような臭いがする気がした。

——どこだ。

壁の穴に着流し姿がうつつた気がする。

——どこだ？

引き金を引く音がする。

——見つけた!

床を蹴つて一気に飛んだ。それと同時にフルオートと錯覚するような連射が襲い掛かる。

その中から当たるものだけを選んで撃ち落とす、残りは壁の向こうの射手へと撃ち込む。二十四発という六発しか込められそうにない大きさの輪胴から薬莖を排莖し、新たに全弾を込め直す。二十四発分排莖し、二十四発分装填するまでの時間はコンマ〇・一というわずかな時間だ。

それだけの猛射を食らっては壁はボロ雑巾も同然だ。

体当たりをぶちかまして、思い切りサイファーはぶち破った。

向こうにいた重臣の顔を掴んだ時、違和感からの驚愕が襲い掛かった。

——こいつは。

——囹か!

老人の身体はライフルだけを残して、千々に散る。形作っていたのは——幾重もの糸。



不気味なほどの静寂の中をフレデリカはひたすら駆けていた。

散弾が炸裂した瞬間に『行け！』と言われて、ほぼ反射的に走り出してしまった。

一対一にでもしなければ、きつと勝てない相手だったのだろう。となると今は自分の身を守る必要がある。

両手に二挺を構えたまま、周囲を警戒しつつ歩みを進める。

ふと人の気配を感じた。

——誰かいる。

思わず引き金に指をかけた。この状況を考えれば、味方なんてサイファーだけなのでから誤射の心配はない。無抵抗の一般人がここにいるとは思えないし、仮にいたとして射殺してしまっても心は動じないような気がした。

少しずつ戦いに慣れていつてる。

気配のするほうから足音までした。確実に人がある。

一步、一步を慎重に踏み出していく。

気付かれれば反撃の可能性だってあり得る。危険は潰すに限るのだ。

「殺——ッ！」

獸の声に等しい。いや、この喰りは蛇のものだ。

半身を蛇身に変じた元人間と思わしき何か飛び出してきた。顔には人間の名残を残すが、両腕だけを残して骨格ごと蛇だった。その口はフレデリカを一飲みにと、総体の関節をすべて加速装置にして飛び掛かった。

二挺をフルオートでばら撒いたのは、敵の姿を確認してからの反射的な反応だ。

弾丸はすべて柔らかな鱗でしか覆われていない腹へと撃ち込まれた。苦悶に身を激しく痙攣させながら、蛇人間は床に湿った音を立てて飛び込むように崩れ落ちた。そこでフレデリカの目は信じられないものを見た。たしかに撃ち込んだはずの弾丸が、肉の隆起によって押し出されていることに。

へしゃげた弾頭が床に落ちていく様を呆然と見つめてしまっていた。

その背後より忍び寄る獣に気づいてはいない。大木さえ一噛みでへし折ってしまう咬筋力と並の合金よりも強靱な牙をもってすれば、頭蓋骨を噛み砕くことなど容易だ。しかし、獣は後姿だけで気づいてしまった。老若男女人種を問わずに見惚れさせる可憐なる美しさを。それが獣ではありえぬ邪な感情を生む。

喰らいついた口は宙を噛んだ。

下顎より冷ややかな鋼の冷たさを感じた、と思った時には獣の頭蓋は爆散した。『全にして一、一にして全』の名を冠する魔銃がコンピで歌声を上げたのだ。返り血はすべ

て天井に散った。獣の真下で屈んでいたフレデリカには一滴も滴らない。

だが、その時にはフレデリカを人ならぬ何かを取り囲んでいた。

大型の類人猿、ライオン、虎、グリズリー、鱶、牛といった獣たちだが、どこかしらに人間としか言えない特徴を有している。彼らは獣しか持ちえない独特の獰猛さを常に発しているながら、その瞳の奥には人間の狡猾さを宿しているのだ。

洋館の壁が打ち震える。それは単なる振動から少しずつ、あるものへと変わっていく。ひどくしやがれた老人の声に。

『ようこそ、瞳を持つお嬢さん』

「……誰ですか」

『では自己紹介だ。一介の碩学ホーランドという』

「なぜ、いきなり私に語りかけてきたんですか？」

『交渉だ。私が欲するものは、君だけが有している』

「目はあげません」

『義眼を用意しよう。生身の目と同じ、ちゃんとものが見えるやつをな』

その時、獣たちが一齐に牙をむいた。

脅しだ。これでも首を縦に振らなければ、眼球以外の全ては彼らによつて弄ばれ抜かれた拳句に貪り食われるだろう。

「ウォルターという人、あなたの仲間ですよね？」

『そうだ』

「なぜ、あれだけの人があなたに協力を？」

『報酬を与えた——君の眼球以外をくれてやると』

告げられた凄惨なる盟約をフレデリカはどう捉えるか。

息を飲むのか、それとも失神するか。

だが、可憐なる唇から出たのは——糾弾だ。

「約束を反故にするということですか」

『反故にはならん——君がその瞳をくれるのなら』

「だったら分かり切っているはずですよ。あなたのように仲間との約束一つ果たそうとせず、自分の目的を最優先して、約束は反故にする。そんな人に私の目はあげられません」

『交渉決裂か——では彼らに食られるがいい。そいつらは人類のさらなる進化を探る過程で生み出した。人間と獣を組み合わせたのだよ。獣たちは獯猛でありながら、シンプルにして力強い団結を築き上げる。それを人間感情の簡便化に取り入れられないかと思ひ、掛け合わせたのだ。結果は失敗でな、このように本能と欲望だけの怪物に成り果てた。だが捨てるにも惜しいのでな、様々な強化処置を施して番犬代わりにした。あの時の私は人類の進化に恒久的世界平和への道を探っていたが、それは大きな間違いだと

気づくのに十年はかかった』

「失敗した理由、私にはわかります」

『ほほう、聞いてやるぞ』

半獣半人も動かなかった。

「強すぎたからですよ。人の知恵と獣の力が一緒になれば仲間の力なんて必要ありません。それでは団結なんてものは望むべくもないでしょう？」

『ふうむ、一人で集団に匹敵する力を得れば、欲望のままに行動することは道理か。ならば、サイファー・アンダーソンがアーカムの中層に燻ぶる理由は？ 彼ならば力がもたらす恐怖で全世界を牛耳れるぞ』

「それは——問題が間違っています。サイファーさんは望んであそこにいます、私は思うんです。理由がまるでわからないですが、それだけ人の感情って難しいものだと思いますよ？ それこそ恒久的な平和と同じくらいに」

『よし、我が研究室へ招いてやろう。生き残れば、な』

半獣半人が一斉に飛び掛かってきた。

その全てが我欲にまかせての猛進だ。強靱な獣の肉体がぶつかるのも、フレデリカを捉えなかった爪や牙が他の半獣半人を傷つけても、すべての集中力を投じてフレデリカを食い裂くことに没頭している。

様々な強化処置を施した、とホーランドは言った。だが一匹の半人半獣を撃ち抜いたときは、きちんと殺すことができた。脳の損傷だけは治しようがないらしい。となれば狙う箇所は決まりきっていた。

スウエイ・バックをしながら、冷静に弾丸を脳天に叩き込む。

脳漿と血飛沫が毒華めいて宙に散った。鼻を覆うほどの血臭と硝煙と獣臭さが空気を凌辱する。

二挺と時間遅延能力を以て、フレデリカは最大の対応力を発揮した。飛び散る血潮も、吹き飛んだ頭蓋の欠片も、破壊された洋館の建材も、フレデリカを凄惨に美しく彩っている。マズル・フラツシユはストロボのように断続的に美貌を照らし、半獣半人たちの脳裏に焼き付けていく。

それでも獣の大群は全く勢いを衰えさせず、むしろ数を増してさえている。

だが半獣半人は気付かなかった。おそらく渦中のフレデリカとて気付いてはいないはずだ。そのあどけなさを多分に残す顔と豊満なる肢体より溢れ出る正体不明のエネルギーを！

それはフレデリカの両腕より玉虫色の奔流となって二挺を包む。放たれた弾丸は同じ色の軌跡を描きながら、二匹の半獣半人に命中した時だった。

電撃が炸裂したような閃光が辺り一帯を青白く染め上げた。半獣どもはどこにもい

なかつた。残っていたのは、耳かき一杯分の炭のようなものだつた。

雷としか思えない青白い光は獣たちのほとんどを焼き尽くし、わずかな炭だけしか残さなかつたというのか。

銃口から白煙を噴き上げる二挺を手に、ぶるりとフレデリカは震えざるを得なかつた。サイファアの人間離れした戦いぶりは見慣れたものだが、それと同じだけの力を自分が持つとはにわかには信じ難かつた。瞳が何も告げなかつたのが余計に不安を煽る。

それでも気持ち奮い立たせて歩き出した。

招かれている、と確信できる何かがあつた。近いものを上げるとすれば気配とか殺気に近い何かだ。実際に質量を有していると錯覚するほどの、非常に強い人間の思念と言つていい。それがフレデリカのいる廊下の奥、そこにある大仰な鉄扉——ではなく備品庫としか思えない小さな扉から発せられている。

恐る恐る歩を進めた。

一歩一歩を踏みしめるたびに、狂気の深淵へと近づいていく。尋常の世界では理解できぬような叡智の数々が蠢き、正気の世界を塗りつぶさんとうずうずしているように感じた。

小さな扉を震える手で押した。

わずかな軋みと共に扉が動いて——一気に引き込まれた。暗闇の中を猛風に運ばれ、

ガーニー並みの速さで運ばれていった。上下左右に速さも時々変わりながら、強烈な大気の奔流にもまれ抜いた。終いにフレデリカの身体は柔らかな何かに、強かに叩き付けられた。その衝撃は常人なら全身の細胞が粘液状と化し、間違ひなく即死しているはずのものだがフレデリカは気付かない。ほぼ無傷だったのだから。口の脇からあふれた血を、少し口内を切った程度にしか考えてなかつた。

起き上がった瞬間、息を飲んだ。呼吸も忘れてしまった。

しかし——壁も床も呼吸をしていた。蠢いていた。研究室というのであればコンクリートかりノリウムに代表される化学素材の床が常道だというのに、触れてみれば生体と変わらぬ温もりと血流の脈動を感じた。無論見た目も。

巨大な生物の腹の中に取り込まれた気分だ。だが天井には血管と思しき鮮やかな朱と青黒い肉の管に交じって、鉄のパイプが幾重にも折り重なっている。

「お嬢さんには辛いだろうが、なにとぞご勘弁を願いたい。さて、我が研究室へようこそ」

老碩学が座る椅子も生皮を剥がれた赤い肉の色を放っていた。整えてもいないもじやもじやの白髪、スラックスとシャツに白衣までくたびれている。だが一番目を引くのは左目だ。白目の部分は黒く染まり、瞳孔は深海のような色をしている。

扉から放たれている猛烈な殺気ともいえる強い思念の主は、確実に老碩学が放つてい

たものだと確信した。眼差し一つだけでも、不可視にして無質量の思念が形と重みを備えた何かになってぶつかってきているように感じた。

風体はライバルに負けて学会を追放された三流学者のようだったが、気迫は今にも人界を侵略せんとする魔の軍勢を率いる魔王の参謀を思わせた。

立ち上がる所作一つでフレデリカは逃げ出しそうになった。何もかもをかなぐり捨てて泣き出しそうになりそうだった。心は身動き一つで折れかけていた。

逃げない、と己を奮い立たせたのは正解だったのか。

「飲み物はご要りようかな？」

「いりません」

「どうも嫌われているらしい。これ以上、薬物をばら撒く気はないというのに」

一歩近づいた。老碩学の背中には鋼と肉のチューブが接続されている。

座っていたひじ掛け付きの肉椅子を介して、この部屋と一体化しているようだ。いや、洋館全体とも合体しているのかもしれない。

「怖い顔だな。それほどまでに私の力が恐ろしいかね？」

重圧が少しだけ和らいだ気がする。ちよつとぐらいは気を利かせてくれるだけの配慮があつたらしい。

「これは、ちよつとしたきつかけで芽生えた借り物同然の力だ。本来であれば風と共に

あるための権能を授けられるのだが、私が呼び出したものはいささか事情が違っているね。この地球程度のレベルであれば、思いのままとなるだけの力に目覚めたのだ。その力と同じことができるきっかけは、君だって持っているのだよ」

「私には、何もできません」

「いいや、できるのだ。その瞳は幾度となく君の窮地を救ってきたはずだ。あの失敗作たちを退けたエネルギーをどう説明する？ しかも我が研究室に来た時だってそうだ。あの勢いで叩き付けられれば、真つ当な人間では即死だ。遺体は原型をとどめず、この町の超医学を以てしても蘇生は不可能だろう」

フレデリカは何も言わない。言えなかつた。絶句している。

「その力を以てすれば実現は容易だ。私が呼んだものは『彼方なるもの』を垣間見ただけだが、その瞳をもつてすれば『彼方なるもの』の向こうにも手が届く。その果てにあるものが真なる全能の力だ。この世を思いのままに変える力だ。人の感情というものも存外に大きいせいで、いかに空間を歪めようと、同一世界における異なる結果の同居を成し遂げるには私の力では不足だ。全人類全ての幸福の成就を以て成し遂げられる。これが私の理論だ。さあ、その眼をよこせ！」

ついに老碩学からの重圧は物理的な干渉力を帯びた。

フレデリカはついに地に伏せた。肺腑にあつた空気はすべて押し出され、窒息寸前の

苦しさにあえぐ。

ホーランドは、ゆっくりとフレデリカに近づいてきた。眼差しはあくまでも柔らかく、紳士的な物腰であると言えた。

「さあ、瞳を抉り出して、私に差し出すのだ」

血塗られた要求を——フレデリカは撥ね退けた。

差し出された手を払いのける。

「人を思いのままに操って成し遂げる平和に、私は加担する気はありません！ 両目も、

血の一滴もあげません！」

啖呵を切ってから二挺を抜いた。フルオートで一気に引き金を引く。

老碩学の瘦躯は爆発したと言ってよかった。爆炎の代わりに出たのは滾る血潮だ。背中から一気に噴き出て、接続されていた鋼と肉のチューブも接続部から弾け飛び、ついには臓腑も細かい肉片となって床と壁に天井まで赤く彩った。

身体中に大穴を開けた矮躯は仰向けに倒れようとしていた。背中と床が触れ合うまで三〇センチの位置で、ぴたりと止まった。そのまま老碩学は起き上がった。直立した矮躯に肉と鋼のチューブが蛇のごとくくねりながら殺到し、老碩学の背中に再度接続された。

「そうか……交渉決裂か」

顎をしやくつた。

それを合図に入ってきたものに、フレデリカは目を疑った。

ウォルターは誰かの襟首を掴んで、この研究室まで運んできた。おそらく運ぶのに難儀したであろう巨軀、膝を通り越すほどのロング・コート、ガンマン必需品のテンガロンハットにシャツプスにジーンズとブーツ、肩甲骨の辺りまで伸びた橙に近い茶髪。これらの特徴を一つ一つ押さええていなくても、フレデリカには誰なのかすぐにわかった。わかってしまった。

「サイファー、さん……………」

信じられなかった。

意識を失って、コートの襟首を掴まれて、うな垂れている彼の姿が。意識を失って、敵の手に落ちていたことが。

ウォルターの手が、まっすぐと突き出される。

一条の銀が飛んだ。

逃避、決意を支えるのは新たな力

思考も意思も、理性という脳の働きはなかったと言っている。

故にウォルターが右手を伸ばしたのにも気づかなかつた。飛んだ銀の一条にも気づいたかどうか。

鮮血が散った。

「ぐっ！」

鋼鉄のスローイング・ダガーがウォルターのしなやかな織手を穿つ。

グイツと後ろに惹かれる感覚で、ようやくフレデリカの意識は現実に舞い戻った。

「……………ヘンリエッタ？」

「ああ、ちよつとデリンジャー・ファミリーに頼み込んで、ここまで連れてきてもらった」

「なんで、ここに……………」

「ああ見えてジョン・デリンジャーという男はお節焼きでね。私の存在は、あの男の中では保険だったらしい。君かサイファーに何かあった時のために、いつでも下層に招ける準備を人知れずやっていたんだよ」

「……………そうだ、サイファーさん」

発砲はほぼ反射的で、なおかつ狙いは正確だ。ウォルターを狙った弾丸は、まかり間違つてもサイファーに当たることはない。そう言い切れるだけの精度だ。

——びゅうん。

空気の跳ねる音と共に真つ二つになつた弾頭が床に落ちた。

片手を一薙ぎするだけで斬り落としたのだ。放たれた弾丸の数は十二、初速は秒速一〇〇〇メートルを超えている。それどころか、蛇のごとく幾重にも重ねられた金属糸が鎌首をもたげたように持ち上がるや、飛び上がつて天井から降り注いだのだ。

「下がつてくれ！」

ヘンリエッタがスローイング・ダガーを十本も投擲した。それでも何十、何百と折り重なつている金属糸の群れ相手では螻蛄の斧だ。それでもくねる金属糸を迎撃できたのは、ダガーの周囲をまわりつく鎌鼬の恩恵であろう。

さらに追加のダガーを放つたとき、後方から銃声もした。連続した発砲音は機関銃が為しえる音だ。拳銃弾と思わしき軽快さだが、どこか重厚なのは四五口径だからか。

トンブソン短機関銃を携えたケリーがいた。

先ほどの掃射で撃ち尽くしたらしい三〇連の弾倉を捨てると、新たに五〇連のドラム・マガジン円筒弾倉を装填した。薬室に一発残していたのか、装填ボルトも引かず掃射を再開した。木製のフォアグリップを取り付けているおかげか、銃口の跳ね上がりは少なく、傍

目から見ても連射は安定している。

だが毎分七〇〇発近い発射速度も無意味であった。

ウォルターはヘンリエッタのダガーを捌きつつ、金属糸を巧みに手繰りながら防壁を構築していた。人間の愛では捉えられぬほどに細い金属糸は、網状に細かく組み合わされ、触れるものを斬り裂いて無力化するのだ。

「よし、このまま退却だ」

「ま……待って、サイファーさんは!？」

「あとにしろ! 今は逃げるのが先決だ!」

ヘンリエッタに手を引かれて、やむなくフレデリカは駆け出した。

最後までサイファーからは目が離せなかった。あれだけ強かった彼が敵の手に落ちている現実を、いつまでも認識できないでいた。

機関銃掃射を終えたケリーも後に続いた。

フレデリカがあらかた掃討してしまったせいで、あの半人半獣たちは一匹も出てこない。それだけは幸運といえたかもしれない。

ただ洋館のエントランス・ホールに差し掛かったあたりで、銃弾のお迎えを受けることになる。

ヘンリエッタが手鏡を取り出した。注意深く、反射で気づかれないように鏡で敵の数

を確認していく。

フレデリカも銃弾のお出迎えを受けてから、戦闘のスイッチが入る。二挺を抜き、残弾を確認している。

ケリーに至ってはバックアップの下層のコピーM1911の状態を確かめ、新たに円筒弾倉を装填している。

「一人がこつちに上がってきた」

「俺がやるか?」

トンブソンの装填ボルトを引き、初弾を装填したケリーが身を乗り出した。

「いや、私がやるよ」

ヘンリエッタの右手が震む。

エントランス・ホールの一階と二階をつなぐ階段を駆け上がった、アルバニアン・マフィアと思わしき男は頭と胸に5本ものスローイング・ダガーを根元まで突き刺された。ほとんど即死状態だった。

次の瞬間、掃射が行われた。

拳銃弾もライフルも入り混じっている。二階からエントランス・ホールに出る廊下の角を熱心に掃射している。

フレデリカが動く。遅延された世界の中、自分に当たる相手の弾丸だけを自らの弾丸

で撃墜する。これをやることに慣れてしまった感覚がある。いや慣れなければダメだ。そうでもしないと、これから困ることになる。

フレデリカにとってみれば世界が遅延され、自分はその中で普段通りに動ける。言い換えれば、相手からしてみればフレデリカが高速移動しているように見えるはずだ。いや、弾丸がゆつくりと向かってきてきているくらいに遅いものだから、鈍い連中だといきなり消えて離れたところにいるように映るかもしれない。

驚きが襲撃者たちを包んだ。彼らはアルバニアン・マファイア。ロンドン、特にキングスクロスのあたりでは無敵を誇ってきた彼らの矜持は、一見してティーンとしか思えない少女によつて揺らぐ。掃射の狙いも揺らぎ、弾幕に整合性が少しだけ損なわれた。

その僅かな隙でヘンリエッタは充分だ。右手に携えたのは黒い防錆処理を施したグールカナイフ。逆手に構えて、駆け出した。

エントランス・ホールの一階に飛び降りたことに、気づく者は皆無だった。グルカナイフは牙であった。鋭く研ぎ澄まされた、獲物を確実に仕留める豹の牙だ。

一人が腹を引き裂かれた。ぐじゅ、という音を聞いたのか、顔が恐慌に染まった。傷口からぶつた切られた腸が出ている。

二人目は瞬く間に首と胴体が泣き別れした。その早業ゆえか表情はぼかんとしたまま固まって、それから目玉が反転した。

突如として無残な斬殺死体が量産されていく中、アルバニアたちはフレデリカに加えてケリーのトンブソン短機関銃の弾幕を捌かねばならなかった。ホールの柱をなけなしの遮蔽物としたり、こまめに動き回ったりしているが、確実に打ち倒されている。よく見ればヘンリエッタのスローイング・ダガーが突き刺さっている者もいる。状況を見つつ、適宜の投擲で打ち倒したのでろう。

エントランス・ホールのアルバニアが一桁になった頃、三人そろってホールを飛び出した。

ケリーはあらかじめ隠しておいたガーニーを発進させ、ヘンリエッタとフレデリカの前につけた。フレデリカを押し込むように乗り込ませた後、ヘンリエッタは車外にしがみつく形をとった。

「ケリー、このまま出してくれ！」

「振り落とされんなよ！」

ガーニーは石畳にタイヤのゴムをこびりつかせながら、ほぼウィリー状態で急発進した。

その後を大型のガーニーが五台も追う。

「フレデリカ、何か銃はないか？」

「ちよ、ちよっと待ってください」

急に押し込まれるように乗り込まされ、さらに最下層の暗さもあるのか、ほとんど手探りだ。握り慣れているM1911系統のグリップを探り当て、引っ張り出して手渡した。

銃を見て、ヘンリエッタは言葉を失いかけた

「もう少しましな銃をくれないか!？」

「え……うわっごめんなさい変なもの渡してしまいました!」

それは六インチもの長銃身とロングスライドのM1911の銃把部に、鉄パイプを折り曲げたような銃床を取り付け、ダストカバーをスライドいっぱい延長した先端にフオアグリップを取り付けている。セミオートとフルオートを切り替えるためのレバーがあることから、機関拳銃らしい。

「銃なんかどうでもいいだろが! 敵さんはもう構えて、こつちをハチの巣にする用意が出来ている」

「ええい! この銃で十分だ!」

機関拳銃はある程度は撃ちやすく作ってあった。発射速度は多く見積もっても毎分八〇〇発程度だろう。

フルオートで発射しても反動制御は容易だった。だが装填されていたのは通常の七発入りの弾倉故に、連射はごく僅かの時間で終わった。

「フレデリカ、替えの弾倉をくれ」

「これをどうぞ！ 五〇発入りですよ！」

「助かるよ！」

五〇発入りの円筒弾倉を受けとると、迷うことなく弾倉挿入口マガジンウェルに叩き込んだ。

ガーニー五台の運転席以外の窓という窓から荒くれ男どもが身を乗り出した。改造機関銃や大型のリボルバーを携えているものがほとんどだが、ガーニー一台につき一挺のブローニング水冷式機関銃を屋根に据え付け、サンルーフから身を乗り出して弾薬に糸目をつけずに撃ちまくっている。

ケリーがガーニーの運転に集中している今、フレデリカも黙って乗っているわけにはいかない。

『One In All』を抜いた。車上からの射撃は上下左右に揺れるために精度に欠けるのを、銃身を固定することで高精度を生み出す構造を組み込んだ『One In All』によって補おうという考えだった。

シングル・カラム・フレームの握りやすい銃把を握り込み、ガーニーのとある箇所に向けて照準を合わせる。

重厚な発砲音と共に四五口径が発射された。

一台のガーニーの前方が暗闇に包まれた。

フロントライトが撃ち抜かれたのだ。最下層はいつだつて真夜中のように暗い。それもライトで適切な明るさを得た中で夜闇に等しい暗さに放り出されれば、視界は暗黒に染め上げられたことに等しい。横道に逸れた瞬間、すでに役目を果たさなくなったガス灯の残骸に激突する。一台脱落した。

「うまくいきました」

「ライトだけ狙つたのか？」

「分の悪い賭けでしたけど」

「歴戦の荒事屋でも難しい技だ。さて、ガーニーはまだ四台残ってる」

その時、一台のガーニーの水冷重機が弾切れを起こした。車両の揺れがあるのか、それとも慣れていないのか、射手は機関銃のカバーを開けたまま弾薬帯を掴んでまごついてる。

見逃すわけがない。機関拳銃の銃床をしっかりと肩付けし、フルオートで四五口径弾をばら撒く。だが普段は使わない銃という得物と車両の揺れという不利が災いして、一発も掠りはしない。それどころか射手は拳銃を抜いて、ヘンリエッタへと発砲する。

機関拳銃をあらうことかヘンリエッタは口で啞えると、右手を振った。

一本のスローイング・ダガーが射手の眉間に突き刺さっていた。

「ヘンリエッタも負けてないじゃないですか」

「いや、その、フレデリカ。実を言うとナイフは四本投げたんだよ」
「二本でも当たれば御の字ですよ」

そう言いつつ放ったフレデリカの弾丸はガーニーのライトではなく、今度は運転手を撃ち抜いた。また一台脱落だ。

すると残った三台のガーニーは一台だけを残して、三メートルほど離れた。ヘンリエッタもフレデリカも怪しんだが、取り残された一台から放たれたものによつて驚愕へと変わる。

「重機関銃だ！ おそらく五〇口径だ！」

「冗談だろ!? このガーニーなんか五秒もかからず蜂の巣だ」

ケリーが洋館の近くに隠しておいた、このガーニーは八ミリまでの大口徑ライフル弾までなら余裕で耐える装甲を持つ。しかし人体を両断するほどの威力がある五〇口径重機関銃弾が相手となると、一発ごとに装甲は貫徹し、動力を生み出す蒸気機関のボイラーに着弾すれば、行き場を失った蒸気が爆発も同然に炸裂するだろう。

そのことを想像してケリーは身の毛がよだつ。

その間に水冷機関銃から五〇口径重機関銃に交換を終えていた。その横にどデカい弾薬帯を修めているであろう鉄箱を据え付けると、カバーを開いて弾薬帯を差し込む。初弾を込める装填レバーを引き切った。

「掃射、来ますー！」

フレデリカの声はもはや悲鳴に近い。

「ええい、あんちくしょうめ！」

ケリーはハンドルを左右に切り、ガーニーを蛇行させる。素早い左右の移動で弾幕をやり過ぎそうというのだ。

「ヘンリエッタ、私の手を掴んでください！」

「すまない、助かるよ」

流石に車外にしがみついていたの迎撃が今となつては無茶だと感じたのか、車内に移動しようとしたのをフレデリカは手を引いて助ける。

ちやうどヘンリエッタが車内に入ったときだ。

左の後輪に重機関銃弾が命中した。続けて前輪にも着弾した。

バランスを失い、ガーニーは二転三転する。もみくちやにされながらも体を強く打たないように、三人はうまく受け身を取っている。ガーニーは石畳の上を三メートルも滑り、とどめに一回転して止まった。

すかさず残骸から這い出て、最下層の街並みに隠れる。あのままガーニーの残骸にいれば、丸ごと五〇口径重機関銃で蜂の巣にされるのがオチだ。

重機関銃を搭載したガーニーが止まる。遅れて水冷機関銃を積んだガーニーが二台。

車両一つにつき五人のアルバニアン・マファイアが乗っていたらしい。十五人近い男たちは三人を探すべく、各々の得物を携えて周囲を警戒する。

たまたまフレデリカが隠れた近くにヘンリエッタもいた。小声で状況を話し合う。

「フレデリカ、やつらはドライブ・バイ用の軽火器と降りたとき用の重火器の二つを持っていたようだな」

「散弾銃に自動小銃……骨が折れそうです」

「下手をすればガーニーの機関銃を使われる可能性もある。とくに五〇口径のほうは注意しないとな」

ケリーも下手に動けないのは同じだ。

このまま膠着状態だと誰もが思っていた。

突如、重機関銃を車載したガーニーが爆発する。四人ほど巻き添えを食らって吹き飛んだ。

さらに男たちが六人ほど集まっている中心が炸裂した。よく見ればわずかに紫電を帯びている。

「心強い味方が来てくれたみたいだな」

「デリンジャーさんですか」

「ケリーが攻め込んだらしい。私たちも行くぞ」

遠距離から超電磁砲による援護射撃だ。それができるのはジョン・デリンジャー以外にいない。

ケリーとフレデリカが掃射を行い、ヘンリエッタが狙い澄ましたスローイング・ダガーの投擲を行えば、残る男たちは五秒もしない内に倒された。

数分後、デリンジャーがガーニーに乗ってやって来た。追手の来ない内に乗り込み、ケリーがハンドルを握った。

車内はしばらくの間、沈黙が支配していた。誰もが口を開かなかった。

フレデリカの内に渦巻く感情が何なのかを、誰もが図りかねていた。箝口令を布くほどに俯いた美貌から垂れ流されるだけの思念は、それだけの重みを持って車内に満ちているのだ。

「私、決めました」

「……助けに行くのか」

鉛めいて重くなった口をデリンジャーは精一杯開いた。

「はい」

フレデリカの返答ははっきりと、快活に口にされた。俯いていた美貌は上がっていた。

「力を、貸してください」

意を決して言葉にした。自分の胸中に巣食った感情の浅ましき故か、どこか声音に後ろめたさが含まれている。

「私はサイファーにいなくなると、明日の仕事にも困る身でね。喜んで力を貸すよ。友達の頼みでもあるし」

「ありがとうございます」

思わずヘンリエッタの両手を握る。

ヘンリエッタのほうは微笑みを投げかけられたせいで、少しの間フレデリカの顔を凝視してしまった。

「……無自覚な分、たちの悪い子だな。こうなると、いやでも降りるわけにはいかない」
「控えめに見えてハッキリとものを言えるんだな。いいだろう、ファミリー総出で救出してやろうじゃないか。あのデカイ囚われの愛しい騎士様を」

デリンジャーはファミリー総出で協力する意を示した。きつと他の構成員も名乗りを上げてくれる確信が不思議とあった。現にケリーも死力を尽くして協力するつもりなのだ。

「サイファーさんは、私にとってそういう人じゃありません」

「今はそうだろう。これから、となると話は違ってくる。なにせ男と女だからな、一分先だってわからないものだ」

「サイファアーさんと同じくらい意地悪です」

「類は友を呼ぶ、というのかな？ サイファアーが教えてくれたんだが、いかんせん東洋の諺だからな」

これから凄惨なる戦いが待っていても、調子は軽く話は弾む。

フレデリカはサイファアーを取り巻く人間関係を構築する何かに、思いをはせていた。『実力行使請負業』という普通ではない稼業に従事し、人並み外れた巨軀に似合わず、良くしゃべって良く動く。女性をからかうのが好きな、子供めいた男。

なのに、デリンジャーは参戦を決めた。ヘンリエッタも雇用主の危機とはいえ、尋常ならざる戦いに身を投じる決意を固めたのだ。

きつと強さがあるとフレデリカは思った。味方としていてくれるだけで、まるで自分が世界最強にでもなったような錯覚さえ与えてくれるほどの安心感。それがいつしか人を集め、今の関係を築いたのだろうか。

そう思う自分も、彼の与えてくれる安心感にあやかっている。

だから、その分何かを返してあげたい。

返さずには、いられない。

——だから奪った、あの人たちは。

——殺してやる。



叩き落とされる感覚で目が覚めた。

五体満足、装備に衣服まで無事なことを確認してからサイファー・アンダーソンは立ち上がった。

あの時、重臣を掴んだかと思ったが、あれはウォルターが己の魔技を以て生み出した糸人形だと思った瞬間に意識を失った。直前に感じたのは自分の力が己の制御下に入りつつも、他者の手に落ちたように沈黙した感覚だ。

「野郎、糸を僕の神経系に食い込ませて、脳の命令系統を掌握しやがったか。さて、どうやって対策を立てようかな？ 前に血管から肉体を操ってくる奴がいたから、血に力を混ぜたんだが。さすが神経となるとなあ」

言ってしまうえば自分の力で自分を締めるようなものだ。柔を理とする武術の中には、

それに技をかけるものの力を加えてさらに威力を上げるものがあるのをサイファーは知っていた。

武術とは自分以上の暴力から身を守るための理。だとすればウォルターがサイファーに行使した技も、田由真む技巧の洗練の果てに達した、圧倒的な暴威を制する武なのかもしれない。

「しかし、ここは……あの爺さんの中か。千人以上もの命をストックするためとはいえ、ずいぶん広いな」

それは一つの村だ。

しつかりと現実の大地が存在し、青空には太陽が昇っている。どこか牧歌的な風景なのは、重臣の趣味なのだろうか。

サイファーは悠々と歩きだした。村というからには家があり、そして家には人がいる。異常な世界ではあるが、人が作り上げたであろうものが人界の営みを外れていることはあまりない。

そんな希望を持って村に一步を踏み入れた。

足元に銃弾が撃ち込まれた。発砲音と撃ち込まれた角度から、村にいくつもある物見櫓からの大口徑ライフルによる狙撃だと判断する。サイファーはコートの内に入れた。

「こういう時は武器の類はないと決まってるんだが……あの爺さんなかなかどうして親切じゃないか。いや、侮られてるとみるべきか」

手に感じる愛用の『Howler In The Moon』の規格外の重みが心強く感じるのは、ずいぶんと久しぶりだ。

家の陰に身を隠してみるものの、コート裾を狙撃が掠る。遊ばれているな、と確信した。こうなってくると生命の危機より怒りのほうが上回る。直しようのない性分なのだ。

とりあえず手近かつ、自分を狙える位置にある物見櫓に向けて炸裂焼夷弾を撃ち込んだ。ホーレス特製の弾丸は着弾と同時に可燃性の粒子を周囲にまき散らし、それらが一齐に引火することで並の手榴弾以上の威力と加害範囲を誇る。

火柱と爆轟を上げて木製の物見櫓は派手に吹っ飛ぶ。業火に包まれた狙撃手が手足をばたつかせながら、冗談じみた距離を吹っ飛んでいく。

「そういえば、あの爺さんは千と少しの数が中に入っているとか言ってたな。下手をすれば、それだけの数を相手しなくちゃならんということか」

家の陰から飛び出し、村の中を駆け出した。

同時にタイミングを若干ズラしつつ、物見櫓からの狙撃が殺到する。

それをあろうことか超人的と言っていい疾走を地面から、なんと村の家々の壁にシフ

トし、地面と平行になって走ること回避した。たとえ百人を射殺した歴戦の狙撃手であろうと、壁を使って地面と平行になって走り抜ける存在は撃ち抜けるだろうか。人知を超えた超三次元機動の前では、コート裾にさえ弾丸は掠らない。

村の中心部に到達した辺りで、サイファーは宙へと飛んだ。巨銃には炸裂焼夷弾が装填されたままだ。

ジャンプの高度は六メートルを優に越した。棒といった道具を使っても不可能といえるような高さを、難なく飛んでしまうあたり、真つ当な人間ではないと確信できてしまう。

空中で身を翻し、雷鳴めいた銃声が八回も轟いた。物理学上、いかに空中で身を捻ったり振ったりしてもじたばたするだけだが、サイファーは発砲の反動をうまく方向転換のエネルギーとして使い、見事に物見やぐら全てに炸裂焼夷弾を送り届けた。

火柱はほぼ同時に上がり、狙撃手はすべて倒された。

関の声が上がる。家々から明らかにならず者といえる連中が躍り出てきた。手には大型の自動拳銃から、無骨なマチェットまで。武装はバリエーションに飛んでいる。さらに遠くには五〇口径重機銃に三脚を付けたものを土囊の上にのせている。

「こいつら全部があの爺さんに取り込まれた命つてか……ここでやられちゃったら、僕も彼らの仲間入りということかな？」

サイファアはさらに野太刀を抜いた。『Howler In The Moon』があるのだから、野太刀もあるだろうと思つての行動だ。

巨銃は左手に持ち替えて、そのまま灰色のロングコートの内側に。それから野太刀を正眼に構える。テングロンハット、ロングコート、白いシャツ、ズボン、ブーツと格好はふざけているが、佇まいと放たれる気迫は間違いなく極東の島国に伝わる剣術の達人であると物語っている。

そのままサイファアはあろうことか五〇口径重機関銃に向けて跳躍した。

灰色のロングコートは魔物の翼めいて翻り、目の当たりにしたものに戦慄を振りまいた。

重機関銃までの距離は五〇メートル以上あったが、家々から出てきた荒くれ共は誰もが仁っ跳びで行けると確信している。それは重機関銃の射手とて同じだ。半ば半狂乱になりつつも、狙いは外さずに連射を叩きこむ。

弾速は音速の三倍、威力は大の男だつて真つ二つになる剛弾。それはサイファア相手だろうと、その破壊力をいかになく発揮するかに見えた。

その巨軀の周りに散る火花を目の当たりにするまでは。

銃弾を野太刀で斬り落としていたのだ。濡れた薄紙でも裂くように、鉛に銅の被甲を施した五〇口径重機関銃弾は両断されて地面に無残な姿となつて転がる。

射手は完全に狂乱した。逃げることも忘れて、迫りくる悪魔を撃ち落さんと引き金を引きつぱなしにしたまま。

——唐竹一刀。

射手は重機関銃ごと頭頂から股間まで一刀両断された。血の一滴も垂れぬまま、真つ二つになったかラファが地面に触れた瞬間を皮切りに、地面を血肉が染め上げて汚しつくす。

「ざあて」

振り返った。野太刀の五尺は確実にある刀身も、二メートルを超す巨軀も血に染まっていない。

「根競べかな？」

おどけたように言って、笑った。

荒くれたちは怖気づいていたものの、敵意の炎は赤々と燃えている。

「最悪、ここを吹っ飛ばすか」

冗談じみた内容だが、瞳は真剣そのものであった。



決意を告げ、心強い協力者を得てから二日が経とうとしていた。

フレデリカは一度、第十二層の自宅に戻ってから、あの射撃練習場で十にもなる弾倉を空にしている。

腕を鈍らせないためだ。

ヘンリエッタも協力してくれている。

右手に握ったコインの数は全部で十。それらを乱暴に投げた。距離は一番近いコインでも三〇メートルは離れている。

銃声は二挺を使って十回。『All In One』は四回、『One In All』は六回の銃声を上げた。

小気味よい音を立てて、十枚のコインが地面に落ちる。すべて無残にへしやげている。

「宙に舞ったコイン全てを撃ち落すか……これは私も超えられてしまったかな？」

「経験では負けてます」

「この世界は力がすべてなんだが」

「経験だって力ですし、戦い方の違いも力だと思えますよ？」

「どうやら口でも負けてしまったらしい」

ははは、とヘンリエッタは笑った。この自分にはない快活さともいうべきものが、フレデリカには羨ましかった。それがあれば、少しは自分の太陽の下を胸を張って歩けただろうかと思う。

いまだ熱を放つ空弾倉に目を向け、それから銃把を握る己の手を見た。あるべきであろう拳銃ダコは微塵もなく、滑らかでハリと潤いを湛えた織手だ。少しずつ人間の弱さを捨て、少しずつ怪物の強さを身につけつつある我が身が恐ろしかった。

これだけ力を研ぎ澄ましたとしても、サイファーを救い出すには足りないのかもしれない。

だが、それは問題ではない。

実力が足りない。だが問題ではない。

救い出せる保証もない。だが問題ではない。

逃げ帰れる可能性もない。だが問題ではない。

できるか、できないか。そんなレベルさえ通り越した。思いつくことは全て些細で、問題にすることでもないのだ。

フレデリカはやると決めた。あとはやるだけ。単純明快だ。

それから二人はホーレスの銃砲店を訪れた。

「私は、ここの店主が少し苦手だ」

「私も苦手です」

「フレデリカは何をされたんだ」

「身長とスリー・サイズ、それに足のサイズもバラされました」

「私は体重までバラされたんだぞ」

「それをサイファーさんに聞かれました」

「心中お察しする」

その一方で、このスローイング・ダガーとナイフしか使わない親友が、銃を扱うホームレスの店に何の用があったのだろうと思っていた。少々、思考回路が常人とはまるで方向性が違った気狂いだが、己の信念に基づいて最高のものを作り上げる職人だ。だが用のない人間は、きつとそっけなく接するのだろうとフレデリカは思っていた。

扉を開けると店内は薄く霞が掛かったようになっていた。店主のアン・バランスな鋼鉄の腕から放たれる高圧蒸気が、店内の建材や商品の銃に一切の干渉をせずに空中にわだかまっているのだ。物理学を超えた現象は、生粋のアーカム民でなければ骨の髄まで驚愕が走り抜けるだろう。

「来ると思っていたよ」

「必要だったので」

「あの男のために私のところを訪れるとは、やつも随分と罪作りな男だ」

「サイファーさんは、そういう人じゃありません」

「ああ機嫌は損ねないでくれ、彼方なる者の姫君よ。黒き幻想を振りまく踏み越えし者のために力を振るうというのであれば、最高のものを用意するのは道理というものだ」

店の奥に消えたかと思えば、少ししてから二つの一抱えもある黒革のケースを持つてきた。形は二つとも違う。一つは大きめの旅行鞆といえるもので、もう一つは異様に横幅が広い。フレデリカの身長くらいありそうだった。

「開けてみても？」

小首をかしげて聞いてみた。

「いいですとも」

ホーレスの、どこか人間らしくない顔が微笑みの形をとる。

フレデリカは旅行鞆めいた方を開ける。

中に入っていたのは衣服だった。最初目に付いたのはナポレオン・コート of 意匠を持つたダブルブレストの黒いコートだ。

「更衣室はあちらだ。なに、覗きはせんよ」

その言葉を信じることにした。なんだか男性的な性欲といった問題からは、無縁そうに思えたという勝手な理由で。

二〇分後、着替えを終えたフレデリカが出てきた。

薄桃のブラウスと濃紺の膝丈スカートを基本とし、革製のコルセット、黒い編み上げブーツ、さらに揃いの白いストッキングには金糸で蔓薔薇の刺繍が施されている。適正サイズの下着まで用意されていたのか、二つ下のサイズの下着によつて抑えられていたわかな肉の果実はその大きさを一層増している。着飾っていながらも、戦う者の印象を与える。その上からフレデリカはコートを羽織つたことで、ついに完成した。

「似合っているじゃないか」

「そう……ですか？　でも、思った以上に動きやすいですよ」

「デリンジャーのところにいるキャサリンという女がデザインし、私が夢幻の地で材料をかき集めて縫製したのだ。このリボンもつけておくといい。そっちはすべて私が作つたがね」

ホーレスの歪んで巨大な鋼鉄の腕が、もう一つのケースを指さした。

受け取つたリボンは空色。フレデリカは左右の髪を三つ編みに結つて、ハーフ・アツプの形をとつた。もともと顔立ちがティーンに見えるだけあどけないだけあつて、ヘア・スタイルをチェンジしたことでそこに清楚さが加わつた。コートの黒に、流れの変わった黄金をそのまま紡いだような金髪が流れる。

そのまま、もう一つのケースも開け放つた。動作の所作一つ一つに言いようない神秘

が秘められている。留め具を外すのも、蓋を開けるのも、すべての動作が理想的な美しさというものを孕んでいた。

ケースに入っていたのは大きなライフルだ。それも異様にデカイ。

「七〇口径半自動式砲『Song For Fog』だ。全長一五四ミリ、重量は十七キロもある。だが今の君に使えないことはないだろう。空砲を使えば、専用の小銃榴弾ライフル・グレネードを使うこともできる。作動はガス圧作動方式、銃身の交換は慣れれば一分もかからない」

一般的なライフルとは形態が少し違う。曲銃床ではなく、各所を調節できるサムホル・ストックを使い、機関部も洗練されたデザインからは数十年後の未来のものと思ってしまう。巨大なマズル・ブレーキは小銃榴弾を扱う上でのアダプターの役目も備えているのだろうか。

「では行つてくるといい」

「わかりました。必ず連れて帰つてきます」

そしてホーレスの店を出たときだった。

二人の足元に銃弾が叩き込まれた。

パンキツシユな風貌の男だ。ダスターコートを袖を通さずに羽織り、腕は装甲板で覆っている。手には妙な武器が握られている。傍目には短機関銃に見えるが、それは機

関部の下半分で、上部にはゴツいリボルバーを据え付けたように見える武器だ。

「そうは問屋が卸さねえぜ。俺は克蘭トン。今日をお嬢さん方の命日にしてほしい人がいるんでな、悪く思わんでくれ」

そう言つて武器の銃口を向けた。睨んだ通り、短機関銃としての銃口が下部に、リボルバーの銃口が上に来ている。それが二挺、よつて四つの銃口がフレデリカたちを捉えている。

ゆつくりと、二人は自分の得物を抜いた。

対決、魔戦は黒き幻想を目覚めさせ

スローイング・ダガーを投げかけんとしたヘンリエッタを、フレデリカの腕が遮る。なにを思ったのか、と顔をのぞき込めば、決意を黄金の双眸に宿らせている。それも戦意に満ちた。

「ここは私だけでやります。いえ、やらせてください」

有無を言わさない語調。指先も動かすことができない。

これだけの気迫を出せるようになったことに、驚き半分、感嘆半分だ。あの虫さえ殺せそうにもないフレデリカが、サイファーによってここまで成長した。そして、もらったものを全て使って、彼を救い出そうとしている。

ならば、できることはただ一つ。

ならば、やることはただ一つ。

ならば、すべきことはただ一つ。

「盛大にぶちかましてくるがいいさ」

——背中を押してやることだけだ。

フレデリカの手には、すでに二挺が握られている。ただし、銃口は持ち上がっていない

い。

クラントンと名乗るパンク・ガイの銃口は全てフレデリカのほうを向いている。

ここで決定的な差がある。それをどう埋めるといふのか。

「私が避けた弾丸、ヘンリエッタは避けられそうですか？」

「弾丸を相手にすること、フレデリカよりは先輩のつもりだよ」

「それはよかったです」

——流れ弾のこと、気にしなくていいので。

ゆらり、と何もかもを一新し、より戦闘向けとなつた衣服に包まれた姿が傾いだ。

そのまま地面に接する、という距離まで来たとき一気に地面を蹴つて駆け出した。地面を這うにはあまりにも早すぎる速さで、クラントンの懐に潜り込んだ。

立ち上がると同時に二挺を握つた両手を跳ね上げる。クラントンの両手は跳ね上げられ、バンザイするような姿勢になる。無防備なのは——股間だ。

振り上げられた右足は空を切つた。その勢いそのまま宙返りし、見事に着地した。もし、先ほどの一撃が成功していたならば、クラントンの鞞丸は片方ないし両方とも潰されていたに違いない。

冷や汗が流れたのを、クラントンは拭つて隠す。動揺を悟られたら、また攻め込まれるのが目に見えている。

短機関銃の引き金を引ききった。

発射サイクルは意外に速く、毎分七五〇発は優にある。狙いはつけず、ばらまくように撃つ。

フレデリカは撃ち落さない。低姿勢からの這うような高速移動で、獲物が銃にもかかわらずクラントンの懐へ潜り込もうとする。なにを狙っているのか。

身を捻つてからの手刀——ではなく銃身の薙ぎ払い、クラントンが受ければ、反対の手に握られた拳銃によるダブル・タップが咆える。クラントンが体を翻せば、後ろ手に回した銃から弾丸が放たれる。それらから正拳でも打つように手を突き出してからのフルオート。

クラントンは困惑する。

——拳銃を使った近接戦闘だと!?

それは銃撃戦という概念を根底から崩すスタイルであった。

遮蔽物に身を隠しながら、遠方より敵を仕留めるのが普通だ。時折、壁から銃口だけを出しての盲撃ブラインド・シューティングちを織り交ぜたり、大胆に身を躍らせてからのフルオート射撃を見舞ったこともクラントンにはある、

だが、目の前の少女にも見える女の戦い方は、見たこともない。だからこそ異質であり、自分が踊らされている現状に後頭部をブン殴られたような驚きが襲う。

自分が今、何よりも優先するのは一刻も早い後退と、戦略的優位性の確保であった。ほとんど瞬間移動にしか見えないスウエイ・バックで四メートルもフレデリカから距離をとる。得意技だ。刃物を心得る相手に迫られた時、よく好んで使う技だ。独自の歩法が信じられない速さと距離を生み出す。

短機関銃の引き金を引いた。

それを円を描くような軌道でフレデリカは掻い潜った。自分のスウエイ・バックはかなりに早さだと信じているが、フレデリカも相当に速い。眼前に迫ろうとしたとき、黒に身を包んだ金髪は視界から消えた。克蘭トンは自分の身長を思い出し、一八〇センチ前後の自分から見て消えたのだから、というところまで考えたときバック転した。

黒いブーツと白いストッキングに包まれた足が、克蘭トンの足があったところを一閃した。剃刀のごとき鋭さとハンマーの重みを兼ね備えており、食らえば呆気なく地面とランデブーする。

——お、ガーターベルト。

バック転しながらも、克蘭トンの視線はストッキングから伸びるレース飾りのついた黒いガーターに行く。足払いを放ったせいで、膝丈のスカートが捲れ上がったのが原因だ。自分でも辟易するほどの好色さであった。大多数の男がフェティシズムとして好むガーターに、目がいけないわけがなかった。

それに気づいたか、それとも追撃だったのか——ピタリと足払いの姿勢を維持したまま、フレデリカは二挺を構えていた。発砲は八度に及んだ。

クラントンの実力は好色さを発揮した中であつても本物であつた。九ミリが四発、四五口径も四発。計八発もの超音速で飛ぶ弾丸を避けたことが物語っている。それだけにとどまらず獲物の引き金を引いた——リボルバーのほうを。

輪胴の隙間から生ずるシリンダー・ギャップとマズル・フラッシュのせいか、まるでクラントンの両手で小型の爆弾でも炸裂したような絵面になつた。放たれたのは四五口径だが、ピツタリの寸法を持つ小銃弾ライフルの薬莖を組み合わせた特製の弾丸だ。体内に撃ち込まれた瞬間、弾頭側面がグロテスクな爪状に変形し、獲物の体内を切り裂きながら死への片道切符を贈呈する。

それを半身になるだけで避けたかと思えば、すかさず反撃の銃弾を放つ。フルオート射撃だが、発射レートを逆算しつつタイミングを見計らつて引き金を解放する、という離れ業で発射したのか三点射だった。

三点射は豪打と化して、クラントンをのけぞらせた。胸の中心、少し左寄りの位置に子供の手のひらくらいの穴が開く。間違いなく心肺を撃ち抜かれ、ショックないし失血で死ぬ。

それでもクラントンは四歩ほどたたたらを踏んだだけで、倒れ込むことはない。それど

ころか傷口の大穴に指を突っ込んだりして、深さや具合を確かめている始末だ。

「一体、どんな弾丸を撃ち込んだんだ？ 四五口径でもこうはならない」

「九ミリのちよつと特別なのを三発」

胸に穴を空けたまま面白いかけられる、という戦慄を禁じえない光景だ。

それでもフレデリカは恐れることなく、きつぱりと答えた。

「私もあなたがなんで死なないのか、ちよつと気になります」

「一度死んだ人間を、もう一度殺すことはできない。ワケありで仮初かりそめの命を与えられてはいるが、死人のまま現世を闊歩させられている」

「解き放つてあげましょうか？」

「お嬢さんみたいに綺麗な娘に送ってもらえるなんて、願つてもないことなんだが……
主の命令は絶対なんぞでな。心中してもらおうぜ」

犬歯を剥き出しにして笑う。

また弾幕が展開された。短機関銃には細長い弾倉が装填されていたが、今度はずんぐりした円筒弾倉を込めている。

連射が中々途切れないのは、五〇発ないし百発もの弾丸を込める円筒弾倉だからか。嵐となつて襲い掛かる弾丸の中に、明らかに速さの違う弾丸が混ざっているのをフレデリカは見つけた。食らえばひとたまりもない、と判断すると一気に時間を遅延させた。

弾丸の礫は空中で停止した。この力は使えば使うだけ、強くなっていく気がしてならない。双眸から発せられる力が時間軸に干渉し、流れの速さに干渉するプロセスは次第に早くなっている。

——そして、クラントンに終止符を打つのは、この力。

フレデリカの周りを白い靄が包み始める。“力”を使う感覚はあまりよくわからないうが、自分の中にある扉から引つ張ってくる感覚に近い。あの半人半獣どもを吹っ飛ばした、恐ろしささえ感じるほどに滾る力。時間を遅延するという上品なものではなく、完全にベクトルを破壊に向けたもの。

青白い雷となって右腕から“力”が迸る。必要に駆られて、この二日間に制御を覚え込んだ。自分の火力不足は自覚していたから、半人半獣を消し去ったこの力を習得することは急務だった。ホーレスが新たな獲物を用意してくれていたのは嬉しい予想外だったが、あんな長物は使いどころが限られる。

弾丸は青白い稲妻を帯びた。クラントンに炸裂した瞬間、膨大なエネルギーをぶちまけた。辺り一面に青白い工場がジグザグに散り、軌跡上の全てを焼き尽くした。体内にも流れ込み、臓腑のほとんどを焼き焦がす。膝を折って、家訓と頭は仰け反ったようになり、口からはとめどない黒煙が噴き出ている。

それからホーレスの店の近くにケースに入れたまま置いておいた『Song For

『Fog』を取り出した。

フル装填した七連発の複列弾倉を装填すれば、十二キロは下らないが、それを持ち上げられるほどに変わった自分が頼もしくもあり恐ろしくもあつた。

銃身に青白い雷が走る。肉厚で長大な銃身が、ぼうと暗闇の中で光る。引き金に指をかけた。

——さ、やってくれ。外すなよ。

クラントンは覚悟を決めていた。

そうなると絶対に外せなくなつた。一撃で絶命させてやる、と固く決める。

引き金が、妙に重い。いや、指に力がこもっていないだけだ。自分の腕の中で異様なほどの存在感を放ち、それに見合つた重みを与える破壊兵器の反動を恐れているわけではない。自分の弾丸が、己よりも長く戦場に入り浸っているクラントンへの解放と鎮魂の弾丸になりえるかが不安なだけだ。

——いきます。

ぐつ、と引き金を引き絞つた。

マズル・ブレーキから十字型のマズル・フラッシュが吐き出された。弾丸は大口径重量弾にふさわしい直進性を発揮し、雷のエネルギーを帯びて、青白い軌跡を残して飛翔する。

弾丸は着弾と同時に見せかけの爆発を起こした。同時に吹き飛んだ血肉を迸る雷が焼き尽くしていく。人の焼け焦げる、たとえようもない臭気を色濃く残してクラントンの姿はなかった。焼け残った両腕の装甲版も、ほとんど溶解して石畳に焼け付いてしまっている。

「二人で片づけてしまうとはね」

「自分でも、ちよつとびつくりしています」

「後悔していかないのかい？」

「……遅かれ早かれ、きつとこうなっていたと思います」

「だったら、サイファーに出会えたのは幸運だったんだらうよ」

ヘンリエッタの言う通りかも知れない。きつとベアトリクスに捕まったままだったら、配下の男たちによつて身も心も汚され抜いた拳句に、“力”を発現していたかも知れない。そうなっていたら、今のように振る舞えてはいないはずだ。たぶん、ヘンリエッタがあつてもわからないくらいに豹変していたかも知れない。

だからこそ——サイファーのことは放っておけない。放っておけるはずがない。

安心を与えてくれたことに恩返しできていない。

戦えるようにしてくれたことに報えていない。

支えてくれたことに何もできていない。

だから——今度は自分の番だ。返せていないものを、返すときなのだ。



屍の数はそろそろ八〇に達する。

流石に休みなしで二日間もの間、逃げ回って殺せたのが百にもなっていない。

「どうも、この体内世界ではあの爺さんは全知全能の神なんだろうな。普通の人間が自分の身体さえ自在に動かせないのに、体の中に世界を持つて人を住まわせて自在に世界を変えられる。ずるいぞ」

びゅつ、と血を振り払いながら呟いた。

普通の日本刀とは少々事情が違うために、切った相手の脂肪分などで切れ味が鈍ることはない。だが休みなしで80人近くも切り伏せるのは、さすがに体力的な問題が生じてくる。昔は三日三晩休みなしでやれていたんだが、という外見年齢不相応な発言は呑み込んだ。悲しくなる。

『Howler In The Moon』に炸裂弾を装填し、村の中を駆け回った。

この村の中全てがサイファーを追い込むために機能し、どこからともなく重臣に取り込まれた狩人たちが湧き出てくる。

ジリ貧だった。

いくら弾を撃つても、増援が来る。

いくら切り伏せても、新手が来る。

いくら倒そうが、いくらでも来る。

悪夢だ、と常人なら頭を抱えて絶望に叩き落とされる。

しかしサイファーは違う。右手に一刀、左手に巨銃を携えて、笑う。禍々しく弧を描く、そんな笑いは日本刀の刃が描くこと一致しているようで、より恐怖を煽る。愉しんでいるというのか、この絶望の最中を。

民家の陰から凶手が躍り出る。全員男だ。

手に握るのはナイフ、リボルバー拳銃、マチェットといった簡素な武器。扱い方次第では十分な脅威になりえるものだ。達人が振るえば、ナイフは急所を的確に突き、銃弾は狙ったものを外さず、マチェットは獲物を骨まで断つ。

猛獣の目をしながらサイファーを取り囲んだ。

びゅう、とつむじ風が吹く。

マチェットを構えた男が地面を蹴った。ごう、と空気をうならせながら無骨な刃を腰

に食い込ませようとする。

固く大きなブーツがマチエツトの峰を蹴る。速いものほど横からの衝撃には弱い。充分な加速をつけて振るわれた刃を、明後日のほうへと逸れていき、隙を作る。すかさず心臓を一つ気にし、間髪入れず力任せに持ち上げて、背後の男にブン上げた。それから二人まとめて炸裂弾をぶち込めば、原形が消え失せるほどに爆散する。濃い血臭と硝煙の香りが混ざって、得も言われぬ空気を醸す。この戦慄の場には、どんな香よりもふさわしい。

さらに発砲した反動に乗って野太刀を右から真後ろへと振り抜き、右方を固めていた二人を斬る。

右手で野太刀を正眼に構え直し、『Howler In The Moon』の撃鉄を起こす。研ぎ澄まされた浅い弧を描く刃は獲物を求めるようにぎらつき、巨銃の輪胴は舌なめずりでもするように回る。

男たちの間に戦慄が走った。

一步、後ずさる。その隙を逃すはずがなかった。

しゅう、と言いやうのない音を立てた。日本刀の鏢の辺りから、霧のように拡散した暗黒が刀身全てを覆い尽くす。それを振り払うかのごとく、日本刀を一振りすると剣風は男たちの間を駆け抜けた。

現れたのは黒き刀身。森羅万象を破壊することを許された、サイファー・アンダーソンの権能を吸い込んだ姿だ。

「手っ取り早く片づけたいんでな。コイツを使わせてもらう」

巨銃を懐に仕舞い込み、柄に空いた手を沿える。二、三回ほど握っては開きを繰り返すと、大きく息を吸い込んだ。

殺気が陽炎のように立ちのぼり、サイファーの姿は霞む。それから大きくなっているかのように変化し、村一つ分を包んでいくかのように錯覚させる。

その時、列をなしていた男たちがドミノめいて、バタバタと倒れ込んでいく。

だが一人だけ立っているものがある。煌めく銀の長髪、コートもシャツもスラックスも全て黒づくめ。自分をこの世界に叩き落とした一因となる男の顔を、サイファーは今まで脳裏に焼き付けていた。

「会いたかったぜ。僕をこんな肥溜めに叩き落としてくれた、落とし前をつけたくてね」「おやおや、ずいぶんなご挨拶ですが……勝機があたりですか?」

慇懃無礼極まる口調に、さすがにムツとした表情になる。

「僕はこう見えても安パイを打つほうなんだ。出来もしないことを自信満々に言うような趣味はなくなつてね」

「なら……存分に試すといいでしょう」

両手を広げるや、金属糸は殺意の雨となつてサイファーに降り注いだ。その数は千を優に超え、取り囲むように殺到する。退路は存在しない。

八双に構えた野太刀を高々と上げ、迫りくる銀の雨を見据える。身を翻して一閃すると、剣風に混じつて闇が放たれる。斬撃を飛ばす遠当ての技に己の黒き力を混ぜ合わせ、触れたものを根こそぎ消し去っていく必殺の飛び道具にしたのである。

そうして切り拓いた突破口めがけてサイファーは駆け出した。ほとんど一つ飛びにウオルターへと飛んだ。

いつの間に抜き放つていたのか。規格外の巨銃が三度も咆えた。放たれたのは強力な炸裂弾で、着弾と同時にぱつきりと分かる火柱を上げながら、着弾地点を中心に大人の頭大の大穴を綺麗に開けていく。まるで人間を丸い型抜きでくり抜いていくようだった。

身体の三か所に大穴を開けられては生きているはずもない。

その亡骸が地面に倒れたとき、生産極まる姿は幾万もの金属糸となつてわだかまり、蛇の敏捷性を見せつけながらサイファーへと飛んだ。

「つたく、いつ入れ替わったんだ!？」

そう言いつつも『最初から偽物だったのかな』と思考を巡らせているあたり、冷静というべきなのか、のんきというべきなのか、はたまたマイペースというべきか、判断に

苦しむことをしている。

巨銃の残弾をすべて少し前方の地面へと撃ち込めば、火柱と同時に土砂も同じく柱と成って天高く登り、質量の軽い金属糸はなす術もなく吹き散らされていく。

輪胴をスイング・アウトし、エジエクター・ロッドをしつかり押し込めばおびただしいほどの葉莖が足元で小山を作る。新たに装填するのは特別な弾丸だ。金属糸の守りやダミーを貫くための。そして輪胴を振れば、どう見ても七〇口径ものでは六発入れるのがやつとの大ききさなノン・フルートは重厚な音共に銃本体に収まった。

「そこか」

マズル・ブレーキからの炎は青白く、赤熱した弾体は途中で三つに分かれて散った。それで終わりかと思えば、何か立ち並ぶ民家七軒をまとめて貫通し、子供の頭ぐらいある破壊痕を残す。ちょうど四軒目に潜んでいたウォルターの頬を掠めて。

魔弾の正体は直径三ミリ、長さ六センチほどの黒い矢玉だ。専用に調合され、葉莖に高密度でローディングされた炸薬のエネルギーを一手に背負い、保護カバーを捨てた瞬間に秒速五〇〇〇メートルもの加速を得て何もかも貫通する。加えてあまりにも速すぎることから衝突の瞬間、ほとんどの装甲は液化化し用を成さなくなる。ホーレスは『数世代先の砲弾を転用した』と語っていたが、そんな理屈を差し置いて気に入るほどの威力であった。

「これはすさまじい。物理的な守りなんてものは蠋螂の斧だ」

「僕のお気に入りの弾だ。お前さんの守りをぶち抜くには、こんくらの弾でも使わん限り無理と思っただんでね」

「では……まだ私のほうが有利ということでしょうか？」

「確かめてもないことを、ほいほい口にするモンじゃない。日本じゃ、来年のことを言うDevilが笑うんだぜ？」

「ならば、現実へと変えて Demon を愕然とさせるのも一興」

にわかには右腕を天高く掲げるや、五指の先から金属糸が伸びる。それは手のひらで集まり、一本の太い糸へと変わる。

癖なく流れる銀髪にふさわしい美貌に、ウォルターは悪鬼に等しい笑みを浮かべる。

「お気をつけて。これほどに太い糸ですが、五重に編まれた螺旋の刃です。傷口は複雑にして、縫合不可。絡みつかれば、八つ裂きでは済みません」

「おお怖い。だけど、そんなデカブツで捉えきれると思っただとしたら、お笑い草だよ」

サイファアの発言が真実であることは、ウォルターとて承知している。戦場を駆け回る機動力、矢玉を弾くほどの防御力、どれを取っても一流だ。

編み込むのに難儀した極太の糸では、いかなる機動をさせたとしても、すぐに回避さ

れてしまう。

極大の質量というものは驚異的と思われるが、実際には鈍重の枷をはめられている。機関騎士はさらなる巨大化が用意に可能と言われているが、戦場において有用な範囲の速さと質量のバランスを求めた結果、三メートルを超えるものが製造されたことはない。

だが、それもウォルターは承知している。

——ゆえに、五指から糸を解きはなつた。

極太の糸は長さ一〇メートルにも達している。それが——鎖蛇を想起させるように跳ね上がる。

サイファアの頭上から、相応の質量を叩きつけんと迫り来る。

「無駄だよ」

漆黒の剣閃は巨大な糸の蛇を幾重にも刻む。

そのまま大質量の破片が降り注ぐだけに見えた。

しかし、刃を受けた箇所から爆発的な勢いで金属糸が膨れ上がる。収縮と同時に斬撃で両断され、欠損した箇所を縫い合わせていく。

極大の糸は本物の金属糸で編まれた蛇に変じていた。たった五本の糸を寄り合わせ、編み込んだにも関わらず、下手な写実画よりも本物に迫っている。もと芸術家の面目躍

如といったところか。

「その程度で止められるように出来てはいないですよ」

「遠隔操作と再生機能のダブル・パンチか。味な真似をする」

「自慢の傀儡ですので。あと遠隔操作ではなく——自動制御です」

「冗談じゃない！」

ウォルターが己の手で操っているならまだしも、原理不明の手段で動くというのであれば話は違う。

金属糸の蛇とウォルターによる連携が始まることを意味している。

鎌首をもたげた鋼の大蛇が飛びかかったのが皮切りとなる。

努めて冷静に一太刀浴びせた後に、ウォルターのほうに巨銃を撃ち込んだ。

ぴゅん、と空気の跳ねる音と共に、ウォルターの手が一閃される。それをなぞるように虚空を銀の輝線が煌めき、あろうことか放たれたホーレス謹製の魔弾は両断されたのだ。

それでも二つに分かれた魔弾は秒速五〇〇〇メートルもの速すぎる弾速に見合うだけの破壊力を示す。

砂煙と共に石礫が散弾となって、ウォルターに襲い掛かる。その数は甚大だ。全身を穿ち尽くされて、ズタズタにされる。誰だって、そう思うだろう。

周囲に輝線を煌めかせながら、ウォルターは悠々と黒いコートを翻して歩む。糸の防御は降りかかる全てを切り裂き、無力化したのだ。これで糸を編み込んだだけの大蛇を平行して制御してるなど、誰が思いつこうか。

「いいぜ。ガッツあるヤツは嫌いじゃない」

人差し指を引き寄せるように動かしての挑発。

ウォルターは右腕を一振り。それだけで全ての命令が大蛇に伝わったのか、巨体ではあり得ない速さで傍らにひかえた。

サイファーは輪胴を一振りし、薬莖は捨て、未使用のものはコートのポケットに突っ込んだ。新たに装填されたのは黒く染まった弾丸。間違いなく彼の力が込められた、外法の理を孕んだ魔弾であった。

二十四発。あり得るはずのない数を輪胴は軽く呑み込んだ。

腰だめにするように構え、撃鉄に反対の手を添えた。

銃声は一回、着弾は七回に及んだ。

ほぼ同時に七回もの射撃を行ったのは、超人的な早撃クイック・ショットちの産物だ。撃鉄を起こして

から発砲を行い、間髪入れずに引き金を引き切ったまま、また親指で撃鉄を弾いて撃つ。

この撃ち方ができるのはコルトSAAだが、『Howler In The Moon』も同じ構造を有しているのだ。さらに反対の手の五指すべてを使つてのファニング・

ショットにより、ほぼ同時の七連射撃が実現したのだ。

そして、魔弾は着弾と同時に膨れ上がる。膨大なまでのサイファー・アンダーソンの力——森羅万象を砕くことを許された権能——が半径二メートルもの球体状に広がって、金属糸の大蛇を容易に呑み込んでしまった。

しかし、ぼろきれのように残った残骸から、またも金属糸が膨れ上がり再構成を試みる。

「体の各所に糸球を仕込んで、傷をおつたら自動回復させるカラクリか。実戦レベルの速さで使う割には、まあ良くできてんな」

言葉と同時の再度の七連早撃ち。これにより大蛇は完全に消し去られた。

それからウォルターへの一発。天地が轟いた、と錯覚するほどの銃声。撃ちだされたのは外法の魔弾。

黒と銀が入り混じった影が跳ねる。糸の張力を用いた高速移動法は、弾丸を交わすだけの速さをウォルターの五体に与える。

その背後を灰色の巨影がとった。

銃声とほとんど同時に魔弾が炸裂した。今度は球体になって呑み込むのではなく、迸るエネルギーの忘位となって炸裂した。黒づくめの美影身は背中の中あたりから千切れ飛び、五体それぞれが四散する——かに見えた。

その全てが糸で編まれた偽物だ。それらは本性である幾千もの金属糸となり、サイファーに躍りかかる。彼をこの領域——斑鳩重臣の世界に落とす要因となった技が炸裂しようとした。

「どうでしょう？ 動けませんよね？ 二回目を食らうのは、一体どんな気分なのでしょうかねえ」

サイファーは無言だ。

ウォルターは嘲笑しようとして——不意に美貌を苦悶に染めた。

「——がッ!」

身動きを封じられたのは——ウォルターのほうだった。

その証拠に、サイファーの巨軀はゆっくりとウォルターのほうを向きつつあった。

「悪いが——安パイを打つ以上、同じ手を二回も食らうわけにはいなくなつてね。どうやら、この技は神経に干渉して、大脳の命令系統を抑え込み、身体を自由を奪うのか。自分で自分の体を縛る以上、対策を立てるのは難しかったが——神経系を“力”に置き換えてみた。今、糸を通して僕の力がお前さんに流れ込んでる。あと五分くらいで全身の神経細胞全部が死滅してThe Endだ」

「こんな破られ方——ありえない。神経全てを、捨てるに等しい……行いだ」

「悪いことでもないよ。神経系を力に置き換えたおかげで、見えるものもだいぶ違って

くるんだ。だから本物がダミーか、なんて些細なものはすぐに見破れた」
「——ばけもの、が」

それが引き金になったのかもしれない。

サイファアの全てが黒く染まっていく。シルエットは人の形をすでに留めておらず、顔の辺りには真つ赤に燃える眼が三つ。膨れ上がっては、縮み上がり、数多の黒い腕が生え出てくる。その身体はすでに闇と化している。光の存在を許さぬ、常闇に。

赫い亀裂でも入るかのように、目が、牙を持った口が、闇の表層に浮かび上がる。蠢きながら、一つの形を作り上げようとしていた。

重臣の世界が悲鳴を上げつつあった。いてはならぬ、大きすぎる異分子の存在に慄いている。恐れている。震えあがっている。天も地も人も、存在するすべてを狂気が抱擁し、祝福した。

この世ならざる闇が渦巻き、現世の闇をせせら笑う。
そして語るのだ。謳うのだ。讃えるのだ。

——さあ、焼き付けろ。

——さあ、歓喜せよ。

— さあ、恐慌せよ。

— 狂気の隆盛、正気の滅亡。

— 異界の繁栄、現世の衰退。

— 破壊が始まる、創造は終わる。

— 無き舌を以て、紡げ。

— 失せた眼に、刻み込め。

— 潰れた鼻で、存分に嗅げ。

— 皮を剥されても、盛大に触れる。

— 黙示の天使は、喇叭を吹き鳴らせ。

— 終わりの時がそこにある。

— 現うつつが終わり、幻まぼろしが取って代わる。

— 彼を語れ。

——いま、語る時だ。

——黒き幻想の果てを。

進撃、彼の帰還を一途に求め

空気が重く渦巻いている。

彼がいないだけでこんなにも変わるものなのか、とフレデリカは思わざるを得ない。再度、アーカム最下層に戻るのには容易だった。きつと、あの狂碩学がフレデリカが戻ってくることを見越して、廃工場の抜け道をそのままにしておいたのだろう。

ならば足元をすくってやる。フレデリカはサイファーを助け出すことにのみ集中し、その気迫が大学からの友人であるヘンリエッタを恐れさせていることなど眼中になかった。

「ずいぶん殺気立ってるじゃないか」

「これでも、抑えているほうなんですけど」

「なるほど、フレデリカは怒ると怖い手合いか」

「誰だつて怒れば怖いですよ」

「違うない」

傍目にはいたって普通の婦女子の会話にしか見えない。

しかし、その実態はフレデリカから放たれる鬼気ともいべきものに、ヘンリエッタ

は中^あてられていた。その証拠に茶髪のボブの前が身に隠れた額には、ふつつつと脂汗が浮かびつつある。

——まったく、フレデリカに何をしたんだ？

——理由はどうあれ、何かしらの形で責任を取ってもらわないとな。

——もしかしたら、お仲間の可能性だつてあるかもしれないからね。

そこからはほぼ無言で歩みを進めた。

デリンジャー・ファミリーから援軍を出してもらうことも、不可能ではなかったが、できれば巻き込むなかった。それはフレデリカもヘンリエッタも同じことを考えていた。これから行くのは尋常ならざる魔の領域、常識の通じぬ狂気の領域だ。

銃の扱いを知り、命の取り合いを経験し、幾多の鉄火場を乗り越えたとしても、不足すぎるのだ。

スライドを戻して初弾を装填する間に、わずか数インチのところまで肉薄し、首を引っこ抜く連中がいる。

人ならざる領域に足を踏み入れたものだけが、存在することを許されるのだ。

決戦の地——あの洋館の正門、その前でフレデリカは足を止める。

ケースに入れて背負っていた『Song For Fog』を取り出し、その銃口に小銃榴弾『Flare The N, Kai』を差し込む。葉室に強装の空砲をボルト

を引いて送り込んだ。

「開幕に大きな花火を上げるのかい？」

「派手なのは嫌いだった？」

「いいや……たまにやる分には、ちようどいいんじゃないかな？」

「だったら、盛大にやってやりましょう」

「まったく……いつから、そこまで遅しくなったんだか」

引き金を絞り切った瞬間、空砲の爆圧を一身に背負い、榴弾はやや山なりの軌道を描きながら飛んだ。

正門にめり込んだ300ミリもの榴弾は、内部に封入された灼熱と圧力を一気に解き放った。弾頭から発せられた熱波と爆圧はエントランスを焼き尽くし、内部の一切合切を吹き飛ばす。玄関扉周辺の窓ガラスは溶解し、窓枠は吹き飛んだ。

その余波は二人のところまで飛んでくる。予想以上の勢いに、ヘンリエッタは尻もちをつくように倒れ込んだ。フレデリカも膝立ちの状態でなければ、今頃銃を取り落して吹っ飛んでいたかもしれない。

「……やりすぎです」

「まったく同感だよ……」

洋館は燃え上がっていた。あの博士の権能をもってすれば、かなりの規模で燃え上

がったとしても消し止められそうだが、その気配が一切見受けられない所からして、ホーレス謹製の榴弾には火薬とは違う何か封入されていたのか。そう思わずにはいられない。

いつさいの立ち入りを拒むかのごとく、正門とその前庭は火の海と化す。

ちりちり、しゅうしゅう。

肌を焼く、そんな音が聞こえてきそうな熱量。

そこを銀色が三条、炎をものともせず飛び抜けていく。

遅れて、後を追うように突風が吹き荒れた。御伽噺の風精ジンが自らの口から吐き出した、といつても良い荒々しくも心地よい風。炎熱による破壊の残滓を、すがすがしいまでに吹き消してしまう。

ヘンリエッタは風のルーンを刻んだナイフを投擲したのだ。それに込められた力が、いかほどか。その効力が如実に、雄弁に物語る。

「やれやれ……………あの銃工も困ったものだよ。加減というものを、誰かと同じくらい知らない」

「だから、口ではなんだかんだ言っても、信頼しているのでしょうね」

「こういうのを……………そうだ『類は友を呼ぶ』というらしい。東洋の諺だよ」

「それだと私もヘンリエッタもお仲間ということになっちゃいますよ?」

「私とお仲間は、イヤだったかい？」

悪戯っぽく笑って、顔を近づけてまで、そうのたまったのだ。

悪辣ささえ感じてしまうほどのからかいだ。大学時代は予想もつかないほど、フランクでありながら凜々しかったヘンリエッタとは思えない。

「ちよ、ちよつと、近い。近すぎますよ」

「ん、このくらい普通じゃないかい？ 女の子同士のスキンシップの範疇だと思うけどね」

「だから近いですって！」

ほほとほほがくつつきそうな距離まで迫られ、思わず飛びのいた。

「残念。サイファーには勝てなかったか」

「そ、そこで、なんでサイファーさんを引き合いに出すんですか!？」

「いや、こうやって助けに行ったりするくらいには、彼のことを気に入っているのかと思ってるね」

「気に入って……」

言葉に詰まった。

サイファーには悪感情は抱いていない。助けてもらったし、居候させてもらったもいる。悪く思えるような人間ではないし、彼を悪く言える立場でもない。

それでも、わざわざ死地にまで赴いても助けようとするには足りないような気がした。たぶんだが放っておいても勝手に逃げ出して、報復に完全壊滅させるところまで行くはずだ。容易にその想像がつく。

それを踏まえても、ここまでできたのは――

「そうですね……きつと嫌いではないですし、親愛はあると思うんです」

その言葉を紡いで、ヘンリエッタのほうを向いた。

顔を真っ赤に染めて、俯いてるヘンリエッタがいた。

――あれ。

――私、変なことを言いましたっけ!?

困惑が埋め尽くしていく中、ヘンリエッタはおずおずと口を開く。

「いや……そんなことを恥ずかしげもなくいえるなんて、こつちが逆に照れくさくなつてしまうというか」

「え?」

「親愛であれ、その他の感情であっても、好意を抱いているのは本当なんだろう?」

「……あああつ!」

思わず頭を抱えた。

確かにすごいことを言った。言ってしまった。

確かに嫌いではない。嫌いではないのだ。ただ好きと言えるかどうかは、別物だ。

しかし『親愛はある』と言ってしまつては好きと言っているのと同じだ。恋慕ではないにせよ『好き』という言葉には無限と言つていいほどの受け取り方がある。

「そうか……サイファアのことを好きだから、ここまで来れるんだな」

「ち、違います！ あくまでも親愛というか、恋愛は一切ないですから！」

「そう必死になつて否定したら、むしろ怪しくなつてくるよ？ それに私はちよつと喜んでるんだ。男を必死に遠ざけていた、大学の中から見ればものすごい変化だからね」

「うーん、サイファアさん以外の人はいまだに苦手というか」

「……運命の相手かもしれないね、彼は」

噴き出した。

「ここら、そんな粗相をしていけないじゃないか」

「う、うう運命、じゃありませんから！」

「悪くはない相手だと思ふんだけどなあ」

「ちよつと謎な部分が多すぎて、下手に踏み込んだらヤケドしそうですねですよ」

「それは同感だね。ミステリアスなのは魅力なんだろうが、あまりにも過去を晒さないのは壁になつてしまう」

「ヘンリエッタも昔のことは語らないですよね」

「言いたくもないことなんだ。すまないね」

そして口をつぐんだ。

「……傷だらけですね。私も、ヘンリエッタも、サイファーさんも」

「無傷の過去なんてありはしないよ。その傷跡を燃え上がらせて生きるか、目を背けて生きるか。それくらいの違いしかない」

ならば、自分はようやく傷跡に向き合っているのだ。いまだ吐き気さえ催すほどの思
い出から、フレデリカは立ち上がりつつある。傷があるのなら舐めて、傷薬を塗ればい
い。彼との出会いが、そのきっかけになっている。

だから恩を返そう。

エントランスに足を踏み入れた。

「うおおおおおおおッッ！」

やかましいほどの雄叫びを上げて、手斧を振り上げた男が突っ込んできた。自然に右
腕が上がって、二発撃ちこんだ。胸部に空いた二つの射入孔を視認してから、間髪入れ
ずに左手の銃で眉間に撃ち込む。どうと倒れこんだ。

エントランスはどこから湧いたのか武装した男たちで溢れかえっている。

全員がトンプソン短機関銃、ブローニング自動小銃といった連射可能な武器。マン

リツヒャーM1895にリー・エンフィールドといった傑作小銃で武装している。完全に詰みの状況だが、フレデリカもヘンリエッタも切り抜ける無謀ではない確信があった。

かさばる『Song For Fog』は床に置いた。『All In One』と『One In All』の二挺を肘を曲げて掲げるように構え、じつと武装した男たちを見据えた。

ヘンリエッタもすでにグルカナ이프を抜いている。黒い艶消しされた刀身は、きつと赤黒く染まることだろう。

ナイフが閃くや、ヘンリエッタの姿は掻き消えた。宙に色濃く残ったように見えるナイフの挙動は、男たちの首を精密に切り裂いている。血飛沫が舞ったのを見て、フレデリカも動く。

銃口の向きから射線を予測し、発せられる殺気から誰がどのタイミングで撃つのかを読む。それができれば機先を制することなど朝飯前だ。身をひるがえして、射線から逃れ、一番先に攻撃に及びそうな人間から撃ち倒す。

一種の舞踏だ。銃弾を躲し、死線をかいくぐる、ダース・マカブル死の舞踏。

戦場のど真ん中で、可憐に艶やかに黒き薔薇が咲く。黒い外套は花卉のごとく翻り、銃火と鮮血は残酷でありあがら鮮やかに彩られる。屍山血河を作り上げながら、フレデ

リカは敵陣の真つただ中を突き進んでいく。

狙撃の雨霰が叩き付けられた。ほぼ不意打ちに近いそれを、驚異的なスウェイ・バツクを用いて避ける。

エントランスの二階にブローニング自動小銃を持った男たちまでもが集まり、ライフルを何十挺も集めた掃射を叩き込む。特にフル・オートの可能性ブローニング自動小銃や、ストレート・プル・ボルト方式により一線を画す速射性のマンリツヒャーM1895は驚異的だ。

對抗するべくヘンリエッタは手投げナイフを抜く。フレデリカはとある一点に向けて駆け出した。

ナイフの投擲と『Song For Fog』を拾い上げてからの発砲はほぼ同時だった。サイファアの巨銃に勝るとも劣らない銃声と、青白いマズル・フラッシュが銃口抑制器から十字に放火を噴き上げた。

弾丸とナイフはエントランスに直撃した。ナイフに刻まれた火のルーンは輝きを放つて間もなく、火炎の渦を巻きあげる。焰の舌が一体を舐め回し、男たちの体を容赦なく焼き焦がす。その火の勢いは、たった数瞬のうちに五体を炭化させたことから伺える。

巨弾はエントランスの一角を吹き飛ばす。装填されていた対物用破砕弾は衝撃だけ

でも致命的だ。軍用の爆弾に等しい衝撃は身体を千々に裂き、確実に即死へと誘って行く。

エントランス上階に陣取った狙撃班は壊滅状態になった。そこを追撃するようにフレデリカは、彼ら以上に正確な射撃で次々と片付けていく。七〇口径対物用破砕弾は人体相手ではオーバー・キル過ぎた。命中の都度、人体が真っ二つになるか、上半身が跡形もなく吹き飛ぶといったゴア・シーンの連続。目を覆いたくなるような光景は、その後二分ほど作り続けられた。

「皆殺しになってしまったな」

「ちよつとやりすぎてしまいました」

「いいさ、このぐらいでちようどいいよ」

「いえ、どういてもやりすぎ……ヘンリエッタ！ 上から来ます」

いつの間に天井に張り付いていたのか。莫大な質量が五メートル以上もあるエントランスの天井から落下する。揺れる地面は立っていることすら困難にし、噴き上げられる削れた床が舞い上がったことによる埃は視界を潰す。衝撃に伴って発生した大音響は鼓膜にもダメージを与え、えもいわれぬ腐臭が激しく鼻を突く。

舞い上がる埃と土煙が沈静化したとき、元凶はその姿を晒す。

おそらくは蜘蛛をベースにされたのだろう。しかし、その体長は胴体だけでも大人二

人分は優にあり、足を広げればエントランス・ホールの半分を埋め尽くすほどに大きい。おそらくは五メートル。そして隙間なく岩石とも鋼鉄とも言えない物質が身体中を覆い、頭部は明らかに豪壮な牙を携えた猛獣のものだ。

「なんだこれは!?!」

「たぶん、作られた生き物です!」

「マッド・サイエンティストだな。生き物を作り変えるとは……ここは私が引き受けよう。サイファアーのところへ急ぐんだ」

頷くことはできなかった。

サイファアーも、あの強い彼も、そうやって自分を逃がした。そして、帰ってきていない。

ヘンリエッタまで失うのは、耐えられなかった。

「早く行くんだ。私なら、大丈夫だから」

でも、その瞳に宿った有無を言わさぬ決意を無碍にはできない。それはヘンリエッタの覚悟に対する、侮辱になるのだろうかから。

「……………武運を!」

それだけ言って、走り出した。

振り返ることなど、するはずはなかった。



遠ざかる姿をヘンリエッタはしばらく見つめ、それから怪物巨大蜘蛛のほうに向きなおった。

右手にグルカ・ナイフ、左手に三本のスローイング・ダガーを握る。体の筋肉は適度にほぐれ、血行は最高潮だ。コンディションは万全ではあるが、相手したことのない巨大質量を持つ相手となるとわからなくなってくる。

巨大蜘蛛が岩石の塊としか思えない巨腕を振り上げたとき、ヘンリエッタの姿は消え失せた。

相手が巨体である以上、どうしても予備動作というものは大きくなる。となると攻撃の所作一つ一つは格段に読みやすくなるのだ。それを生かささないわけではない。

自身の持ちうる最高速——すなわち銃弾の数倍近い速さ——で蜘蛛の頭上に陣取り、ナイフを自分の背後に放る。刻まれたルーンが発光するや、膨大な衝撃波を発して爆ぜたのだ。

自爆に等しい真似は、誰でも血迷ったと思うだろう。しかし、加害するしか能のないと思われる衝撃波も、ヘンリエッタにかかれれば新たな使い道を見出す。

発生した衝撃波をヘンリエッタは踏みつけた。そのまま一気に最高速まで加速し、速さを載せてグルカ・ナイフを一閃した。超音速の速さと決して軽くはない重さを載せた一撃は、機関騎士の装甲さえ両断できる自信があった。

その自信を打ち砕くように、グルカ・ナイフは猛獣の頭部表面を火花を上げながら滑る。

勢いもそのままにヘンリエッタは地面に投げ出された。受け身をとっていなければ、音速を保ったまま狂走し、減刑も残っていなかったかもしれない。

——まいったな、ナイフが通らない。

——これじゃルーンも効きそうにないな。

体内へナイフが到達しない限り、堅牢な装甲の内を攻撃することは叶わない。

打つ手なしのドン詰まりだ。絶望的、という言葉がこの上なく似合う。

巨大蜘蛛が前足で薙ぎ払う。振り上げる予備動作を確認し、懐へともぐりこみ、背後をとる。

やはり腹には、糸イボがある。蜘蛛が蜘蛛であるためのアイデンティティである、糸。体を支える強靱な糸、獲物を捕らえる粘り気のある糸、その両方を出す優れた器官。そ

こは装甲に覆われていない。

拳に挟むように握ったスローイング・ダガーを殴りつけるように突き刺した。黄緑色の汚液が噴出し、ヘンリエッタの腕を汚していく。刹那、そこから白煙が立ち上る。汚液は強酸性だったのだ。

「ぐうううッ！」

思わず腕を抑えて、身体をくの字に折った。皮膚から水分が一瞬で消失し、ケロイドの様相を示して焼け焦げる。

痛みに耐えながら、焼け焦げた皮膚の上から爪でルーンを刻む。喜び、贈り物、樺の木。癒しを連想できるワード、それに再生を表すルーンを選ぶ。焼け焦げた皮膚は時間を巻き戻したかのように、元の白く滑らかな肌を再構築する、

「体液まで武器になるとは……それもここまでかな？」

糸イボから叩き込んだのはエントランスでの銃撃戦にも使った、火炎のルーンだ。

巨大蜘蛛の体は内側から爆発したに等しい。それほどの勢いで燃え上がったのだ。

炎上は六分も続いた。その間、巨大蜘蛛は暴れ狂い、エントランスを二目とみられなほど、原型もなく叩き潰していく。後に残ったのは大きな炭の塊。かろうじて巨大蜘蛛の形だけを留めている。

それが一気ににはじけ飛んだ。

後から現れたのは、生皮を剥がれた筋肉で構成された、あの巨大蜘蛛の姿だ。

「しづといなあ……」

もはや呆れさえ混じってきた。

本当にしつこい。しかも神経系むき出しの影響か、痛みで凶暴化しているようにも見える。むき出しの神経が空气中にさらされているだけでも、ひりつくような痛みがあるはずだ。これも織り込み済みで巨大蜘蛛を設計したのであれば、ホーランドは相当な悪趣味だ。

装甲を捨てたからか。巨大蜘蛛の機動性は相当に上がっているが、動くたびに筋肉が断裂して、苦悶の叫びをあげる。やはり悪辣な設計だ。痛みをもって凶暴性を上げ、より手強くしようという腹なのだ。

「それじゃ、私も切り札を切る必要があるということか」

取り出したのは獅子をかたどった指輪。総黄金造りのそれからは成金趣味は感じない。それ以上に不気味な何かを感じさせる。

右手の中指に嵌めたとたん、己の内では何かで鼓動するのを感じた。心臓ではない、もつと根源的なもの。魂、というべき何か解き放たれようと、蠢いているのだ。

「凶獣天換——」
ワイ・コンバート

それは合図の言葉。

それは解放の単語。

それは拘束の破壊。

——どこかで、獣が吠える。



託された。

フレデリカはその一心で駆け抜ける。大切な友人が鉄火場を引き受けてまで稼いでくれた、貴重な時間を無駄にしないために。

ホーレス特製の衣類は不可思議だ。スカートも、ストッキングも、ガーターも、コートも。それに腰を締めるコルセットも、フレデリカの体の動作を一切邪魔しない。さらに重さもほとんど感じなかった。おかげで、かつてない速さで走ることができている。

ただ背中にスリングで背負った『Song For Fog』の重さは耐え難いが、走るのには苦勞しない。情人ではきつと持ち上げるのも困難であろう巨銃を、背負ったま

ま全力疾走できている自分の変化が信じ難かった。

いくつもの階段を飛び降りるように駆け下り、一回下りるごとに暗さの増す廊下をひた走る。

着いた先は、倉庫なのか機関室なのか、よくわからない部屋だ。壁一面にのたくつたように大小さまざまな配管が立ち並び、部屋のところどころにフレデリカの身長を超える大きさのコンテナは立ち並んでいる。面積も天井の高さも、エントランス・ホール以上にある。

どこにこれだけの空間を収めていたのか。全力疾走に意識のほとんどを費やしていたから、地下へ地下へと進んでいることしかわからなかった。

あたりを見回していると、その鼻先を銃弾が掠めた。並みのライフルより遥かに重く、そして速いと実感した。

着流しを着た老人が、その老躯には不釣り合いすぎる巨大なライフルを携え、コンテナ三つが重ねられた上から見下ろすように構えていた、

フレデリカの反撃はほぼ反射的だ。右手に握った『A l l I n O n e』はバネ仕掛けのように跳ね上がり、フルオート射撃の指切りによる三連射を叩き込んだ。秒速一〇〇メートルを優に超える三発の弾丸は、老人の脳天を吹き飛ばすかに見えた。

一発の剛弾が相打ちとなった。長大なライフルから放たれた五〇口径弾は、九ミリ弾

三発など戯れに等しいといわんばかりに吹き飛ばす。

「いい反応だ……儂は斑鳩重臣。お前の大切な人間を預かっている」
返答は二挺の射撃だ。

もはや言葉は不要。この老人を殺す、と決めたのだから。

重臣は跳躍した。その高さは部屋の天井いっぱいまで届いているあたりから、おそらく一〇メートルを下らない。そして拳銃でも構えるような片手撃ちで、MV社製M3エクスキューショナーを撃つたのだ。

着弾の衝撃でコンテナが宙に舞い、フレデリカめがけて降ってくる。

それを七〇口径もの砲というべき一発で撃ち返した。発砲の反動をそのまま生かし、一気にスウエイ・バック。瞬時に二挺に持ち替えて駆け出した。

重臣はフレデリカの視線の先、およそ七メートル前方にいた。

コンマ一秒もたたぬうちに接敵した。重臣の構えるM3エクスキューショナーの視線から身を逸らし、左サイドから撃ちこんでいく。その銃口を長大な銃身が払いのけ、銃弾は壁の配管を穿つ。冷却水と思しき真水が噴出する。だが払いのけられた勢いに乗せて身をひるがえし、逆サイドからの発砲。頭部を狙った弾丸は寸前で、視線から頭がそれたことで背後へと飛んでいく。

「面白い戦い方だな。銃で近接戦を挑むことにより、接近戦の攻撃力を銃の火力に置き

換えている。当たれば致死の弾丸だ。避けるには銃口から射線を読まねばなるまいが、接近戦という環境ではそれも難しい。だが——まだ完成してはいないらしい」

わき腹に衝撃、それも破格のものが。

高速回転する弾丸がコートの上で噛みつくように、貫かんと奮闘している。M3エクスキューショナーのまざる・ブレーキと銃口からは白煙が上がっている。いつ撃たれのか、まるで見当がつかない。それに腹部への衝撃は内臓にもきっちり伝わって、息を詰まらせる。

「うう……ぐッー」

「攻撃を読むときは、ほとんど殺気頼りか。ならば殺気の一つもなく、静の動きをもつて対処すればよろしい」

弾丸は衝撃を与えただけだった。だが内臓のいくつかは傷ついたかもしれない。その証拠日内で肉のつながる感触があるのを、フレデリカは確かに感じていた。こみ上げる何かを吐き出せば、血反吐だった。

——さすがホーレスさん。一発も貫通してない、けど。

——衝撃も殺してくれたら、もつと良かったですよ。

あふれ出る鮮血を口のわきから垂れ流しつつ、ようやく立ち上がった。

「ほう……立ち上がるか」

殺気が叩き付けられた。あまりにも、強すぎる。

腕がまるごと喪失したように感じられた。構えた二挺の引き金を引くことさえ、忘却の彼方に追いやられた。

体の熱が失われていき、足の力が抜けていく。だが、へたり込めない。それすら封じ込まれた。

「……………負けるかッ！」

紫電を帯びた弾丸が放たれた。それはフレデリカの持つ数少ない、攻撃するための力だ。雷という体裁をとってはいるが、その本質は物理を超えた幻想の雷。世界の理という縛りから脱し、雷さえ遠くに置いていくもの。無明にとどろく雷なのだ。それを帯びた弾丸は雷に乗せられ、同じ速さで目標に叩き込まれる。

重臣もたまらず呻いて、体を折り曲げる。撃ち込まれた弾丸から迸るエネルギーに、臓腑を焼き尽くされているのだ。

左手に握る『One In All』の四五口径重量高速弾がついに重臣の脳天を捉えた。弾頭は頭蓋を粉碎しながら大脳を修復不可なまでに攪拌し、頭蓋から抜けるときにほぼ半液化化した脳漿をぶちまけた。それだけにとどまらず、正中線を下るようにフルオート射撃を叩き込む。

重臣の身体は半壊状態だ。それもわずかな皮と筋だけで、右半身と左半身が繋がって

る状態。内臓の名残と云つていい肉片が股の間から、ぼとり、びちゃり、と生々しい音を連れて落ちる。

「……なめるな」

銃身は棍となり、フレデリカを吹っ飛ばした。

「考えもなしにここまでやってくれたな……儂が死ねば、お前の大切なものも失われるのかもしれないぞ」

「……関係、ないです。筋の一本まで搔っ捌いてでも、取り戻します」

——へえ、ここまで想われていたとはね。

声はどこからともなく響く。

「ウォルターめ、討たれおつた……ぐおっ！」

どす黒い瘴気を噴き上げる一刀が、重臣を内側から貫いた。それと同時に安堵した。

——ああ、やつぱり。

——生きていて、くれた。

出口を切り開くように一閃した時だった。

空気がどす黒く染まる。存在してはいけないう何か、重臣の身体から出てこようとしている。それは解き放つてはいけないうもの、大地を踏みしめてはならぬもの、光を見ることも許されぬもの。この世のすべてから拒絶されてなお、その抵抗をすべて打ち砕き、やってくるのだ。

黒き幻想を振りまくもの。

その名は――。

「……………サイファー、さん？」

ほとんど疑うようだった。

どこか人ならざる部分があるとは思っていたが、この場を支配する空気は異常すぎた。それは今が初めてでは、ない。

あの無限の厚さと質量を持った扉を破った時と同じ。この空間に満ちるものは彼の力、そう、この世に存在してはならない何かである。サイファー・アンダーソンの権能ともいえる、あの黒い闇だ。

重臣の身体より突き出る一刀を中心に、暗黒は竜巻のごとく渦を巻いた。一切合切を引き寄せながら、万物を黒く汚していく。この闇は、それを許されている。許されているが故に、この世に存在することを、許されない。その道理は莫大なエネルギー量によつて蹂躪され、いともたやすくひっくり返される。

そして、ここに顕現する。

黒き幻想が。

昏き存在が。

万物を打ち砕くことを許された、その権能を携えて！

——フレデリカ、お前だけは。

——ひっくり返ってくれるなよ。

重臣の身体から飛び出したもの。それは人ではない、人の形がかるうじてあると言えるが、その本質は全く違うものだ。確信できる。それが黒い鋼鉄の鎧を着こんでいる。実用性皆無といえる示威を前面に押し出して作り上げられた、鋭角的で怪物を思わせる意匠。飛行するには、あまりにも重量がありすぎると思わざるを得ない鋼の翼。剣を握るには不都合な爪を有する籠手で、刃を黒く染めた野太刀を握り込む。鎧が鋭角的なのに反して、兜は無貌といえるほどシンプルだが、赫く、三つの眼が爛々と光をともしている。

状況が物語っている。

目の前の鎧に覆われた怪物は、間違いなくサイファー・アンダーソンその人だ。

怪物が一步を踏みしめるだけで、空間が軋む。ここに存在するだけでも耐えられないのに、と悲鳴を上げて感じるように感じられる。そして、鎧も悲鳴を上げている。

勘付いた。これは鎧ではないと。

——抑えているんだ。

——力が暴れ出さないように。

怪物を覆う漆黒の鎧は、拘束具なのだ。この世界では留められぬ力が、暴れ狂わないための。

「そうか……それが、お前の力か」

「覚悟を決めろ、死にかけてが」

姿は変わっても、声は変わっていない。不気味なほど。

手に握る一刀は黒く染められた答申を、臍げに揺らしながら、殺戮の時を待ち焦がれている。目の前の老人を切り裂かせろ、と叫ぶように。

「だが……彼女は どう思うのやら」

返答はない。

——黒条一閃。

光も呑み込むほどに漆黒の一刀が振るわれた。

フレデリカがハチの巣にした正中線上を、縦に続く弾痕をなぞるように振るわれた。

それだけで、身じろぎ一つ、呻き一つ、眼球も動くことなく。あつさりと斑鳩重臣は、事切れた。

千と少し、の命を吸い上げた亡骸は残らなかつた。能力の代償か、それともサイファアの権能か。砂よりも細かい粒子に変わり、風もないのに散っていった。残つたのはボロボロの着流しと、巨大なM3エクスキューショナーだけ。

「あっ……」

サイファアと、目が合った。

怪物的な意匠の鎧、無貌に輝く三つの眼。瞳孔のように白く灼ける一点が、フレデリカを三点から見つめていた。

何も言い出せない。

まったく踏み出せない。

息さえ、吸えない。

そのまま彼は、踵を返した。それが背中を押す、合図となる。

——その背中に、追いつがって。

——両手を、回す。そして、引き寄せる。

ようやく、声が出る。

「……よかった、生きていてくれた」

涙と嗚咽が混じってしまう。恥ずかしさはない、これは歓喜からくるのだから。

鋭角的な鎧は痛かったが、それも気にならない。

「助けに来るとは……ちよつと意外だったな」

「いや、だったんです……あなたがいなくなるかもしれない瀬戸際で、黙って待っているのは」

「……無茶するなよ、恋人ってわけでも、ねえんだしな」

ポン、と頭の上に置かれた手。鎧の籠手じゃない、温もりを持った手のひら。気づいたら感じるものに鎧の冷たさはなくなつて、ギャバジン織にも似た布地の感触があった。

いつもの眼差しが降ってきた。赫い、三つ眼ではない。銀灰色の双眸、見慣れた瞳の色。

「いつの間に衣替えして、髪形も変えて……男でもできたか？」

「……………知りません」

「似合ってるぜ、とても」

どきり、とした。わずかに薄暗い曇り空の向こうにある、蒼天と同じ色をしたリボンでハーフ・アップにまとめた髪を撫で、さらりと言い放った。齒の浮くような、殺し文句。ベタといえればそれまでな代物なのに、ひどく動揺した。

「こんな、ところで……褒めなくたっていいじゃないですか」

「仕方ないだろ、似合ってたんだし」

さも当然のように言う。これも懐かしい。一週間と経っていないのに、懐かしいのだ。

「それよりもだ」

ようやくよく見た灰色のロング・コート、その懐に手を入れて、黒い缶を取り出した。茶色い葉巻、長軸マツチ。

「一服させてくれ」

葉巻の吸い口をナイフで切り、啣えて火をつける。

頭上から降り注ぐ紫煙の香りも、また懐かしく。

——安心する。彼の帰還を示す、彼のすべてに。

K i s s ~風と共に歩むものは、もういない~

サイファーとの再会に耽溺していた。が、大事なことをフレデリカは思い出した。

時間を稼いでくれていた、大切な友人のことを。

「あ……ヘンリエッタが、時間を稼いでエントランス・ホールに残ってくれているんです！」

「なにイ!? そりや大変だ、今すぐ戻るぞ!」

ひよい、とフレデリカを抱えて走り出そうとする。サイファーにこうやって抱えられるのも久しぶりに感じてしまうが、別に今じゃなくてもいい気がする。だがサイファーはとつくに全力疾走の態勢に入ってる。たぶん五分もしないうちにエントランス・ホールに着くんじやないかと思つた時だ。

「そんなに急いでどうしたんだい?」

「うおおつつつとツ!!」

急ブレーキ。

ほぼ皮一枚で止まった先に、ヘンリエッタの姿があつた。

ほとんど無傷に等しい。そのヘンリエッタの姿に面食らつてしまう。特にフレデリ

力は代わりに相手を引き受けた存在がいかほどのものか、知っているが故に意外に思えてしまう。あれだけの巨獣を相手に無傷で済んだとはとても考えにくかった。

だから、あえてフレデリカは聞くことにした。

「大丈夫なんですか……ヘンリエッタは」

「ああ………問題は、ないよ」

「嘘だろ」

サイファアはそこに切り込んだ。いつも振るう一刀のごとく。

言い逃れを許さぬほど、銀灰色の双眸からの眼差しはきつい。どんな秘密であろうとたちどころに喋ってしまうだろう。

これにはヘンリエッタも観念した。どのみちばれることは明白だった、と彼女自身も思っていたのだから。

「……実をいうと、反動があつてね」

「魔術の中には、命を削るものもあると聞ぐが、そんな術を使ったのか？」

「だ、大丈夫なんですか？」

フレデリカの心配は悲愴だ。親友の危機かもしれないのだから、必死にもなるのは当たり前だろう。さつきまで重臣との死闘に加え、サイファアの真の力ともうべき闇の暴威に曝されたのだから、精神的に極限状態と言つていいだろう。

それでも錯乱に至っていないのは精神力が鍛えられている証拠だろう。くぐった修羅場は数少ないが、その質はほかの追隨を許さない。だから親友の身を案ずるだけの余裕も生まれているのだろう。

「すまないが、ここで脱落かな」

「洋館を出ればデリンジャーさんが迎えに来てくれると思いますから」

「おお、そこまで準備がいいのか」

「それじゃ、助け出したことだけは言っておくよ。ちゃんと帰ってきてくれ」

平素の時と比べて幾分かおぼつかない足取りで、ヘンリエッタは去っていった。

せめて洋館を出るまでは見送っていきたかったが、サイファーがそろった今はホーランドのもとへ行くこととなる。あの狂碩学にほんの少しの猶予を与えようものなら、さらなる惨事を生む可能性もあるだろう。だから立ち止まってなどいられない。

無言で歩き出したサイファーにフレデリカは黙って着いていく。

沈黙が痛い。自分の前を歩く、ものすごく背の高い彼。何を思っているのかを推し量ることもできず、だから口を開くこともできない。怒っているのか、呆れているのか。そのどちらかさえ、微塵も窺い知ることとはできない。

「どうかしたか?」

歩みはそのまま、首だけこちらに向けて聞いてくれた。一向に何も切り出せずにいた

状況で歩み寄ってくれたのは、素直にありがたく感じるものだ。

その表情からもサイファーの心中は読み取れそうにない。自らの内を悟らせない技術というべきなのか。その必要があるほどの生き方を、サイファーはしているというのか。

その心理的な壁が作る疎外感を、否が応でも感じてしまう。

「いえ、なんでもありません……」

「どうせ僕が怒っているんじゃないか、なんて手合いのくだらない杞憂じゃないのか？」
「くだらないなんて、そんなこと……ッ！」

「そんなことは微塵も思っちゃいない。無謀と言えば無謀だが、来る予感はしていたよ。だから怒ってなんかいない。まあ、何かあれば生き返らせてでも説教してやる」

—— 気にしていない。

その言葉で、いろいろなモヤモヤが吹き飛んだように感じられた。

—— 無茶をした。

—— 無謀の自覚はあった。

—— 死がちらついたこともある。

—— 親友だって、巻き込んだ。

—— あなたの友人にも、声をかけた。

それらから来る負い目、申し訳なき、面目なき、そのすべてが晴れていった。赦された、という思いに心が満ちていく。

「まあ、ここままでしてもらったんだ。ちゃんと帰ってきたら、盛大に祝おうじゃないか。ヘンリエッタに、ワイアットに、デリンジャー。みんな呼んで盛り上がるうや。料理とつまみはいっぱい作れ」

「……いいですね、そういうの。食べきれないだけ用意しますよ」

「そうなると大変じゃないか？ ヘンリエッタあたりに手伝ってもらったらどうだよ？」

「えっ……と、ヘンリエッタはその、レシピ通りに作ってくれたらいいんですけど

……変にオリジナリテイを入れるので……」

「なんだよ、はつきり言ったらどうだ？」

「……味覚に問題があるんです。マーマイトが大好物なぐらい」

「なるほど、よくわかった」

——マーマイト。

イギリス人ですら好みの分かれるビール酵母由来のペースト。生粋のイギリス人ではないサイファーはもちろん、食というものに対しレストランのシェフだった祖父に美食を仕込まれたフレデリカも苦手なのだ。

「やっぱりどこかしらでバランスというものをとっているんだなあ」

「それさえなかつたら、きつと最高の友人なんですからね」

「料理くらい教えてやったらいいのに」

「レシピ通りにやれば、ちゃんと一般的な味になるんです……ちよつと余計なものをつけ足したり、煮すぎ焼き過ぎ、材料を変える……レシピには先人の知恵が詰まった、科学の連鎖反応を起こすノウハウが詰まっているのに、それなのにヘンリエッタは、もう！」

「……おう、落ち着けよ」

「あ、ごめんなさい。こんなところですよ話でもないですよね」

「いいさ、それくらい落ち着いて構えていりやあいさ」

それからさらに地下へと二人は進み、コンクリートに鉄筋の風景は姿を変えていく——生々しく蠢く肉の壁に。ちようど足元に合った野太い動脈が激しく脈打ったために、嫌悪に加えてバランスを崩したのが重なって倒れ込みそうになったのを、サイファアの大きな両腕が支えてくれた。

紫煙の香りに乗せられて、気遣いが上から降ってくる。

「大丈夫か？」

「……………はい」

「まったくひどい趣味だな。機械と生肉がごっちゃになってやがる」

サイファーはきつと意識のあるうちに、この光景を見たことはないのだろう。はじめたはずなのに、フレデリカよりも動揺が少ない。いつもどおりだ。この程度の光景なら見慣れているというのか。

対してフレデリカは吐かないのが不思議なくらい不快だ。何か巨大な生き物に飲み込まれたようである。この中にいると自分という存在が溶けて、形を失って、消えていってしまう。体の末端からそうなっていくような、そんな錯覚を感じていた。

それでいて生物ではない鋼の配管が、赤とも朱ともピンクともいえぬ肉の軟壁を突き破って、どこかに機関より生み出された蒸気圧を供給する。

まるで血流だ。

——ごうん。

——ごうん。

得体のしれない怪物の吐息にも聞こえた。ありふれているはずの蒸気機関の息吹が、妙に恐ろしいものに感じられて、不安はゆっくりと加速していく。

そして一度は見た扉にたどり着いた。分厚い鉄扉。その先にいる碩学の姿が頭をちらついている、消えていく

サイファーはおもむろに鉄扉を蹴破った。くの字を軽く超えて、ほとんど二つ折りの

状態のまま、弾丸並みの速度で飛んでいく。だがそれも僅かに数メートル進んだだけで、跡形もなく、元から何もなかったように消えてしまった。

右手を前方——フレデリカとサイファアのほう——にかざしたホーランドが、生肉と機械をめちやくちやにつきはぎにしたような椅子に座って待ち構えていた。

「ずいぶんと乱暴だね」

ホーランドの声は肉壁全体を声帯にしているかの如く、大音量と大反響を伴っている。

「僕をとつ捕まえてくれたんだ。それに友達がな、お前さんのばら撒いた薬に大変ご立腹だね」

「ああ……あれも失敗だった。まさかアーカム統治局の治安維持部があれほど優秀だったとは。おかげでアルバニアンと手を組んでまで築いた流通ルートを潰されるとは。ガス状にして無差別にやるのもよかったが、レギオン「結社」にかぎつけられたら、私とておしまいだ」

——レギオン「結社」

その言葉を聞いた途端、サイファアから一気に重プレッシャー圧が放たれる。

思わず膝を着きそうになった。その単語が何を意味するのか、サイファアの反応をうかがう限り、あまりよろしくないものらしい。

「それを、どこで、どうやって知った？」

「ほほう因縁でもあるのかね？」

「決して浅くはないものが、ね」

「やはり『数少ない成功例』故か。今の我が力を与えてくれた存在は、力とともに知識を与えてくれた。それこそ世界の根底にかかわる、外なる叡智だ。人であったころには、到底知ることも理解もできなかつたことが、今はだれよりも理解できている自覚がある」

「そのありがたい力をくれたやつは、今はどこにいる」

「愚問というものだよ。気づいているはずだ。君の感覚であれば、この屋敷に足を踏み入れた時から」

サイファアの右手には拳銃が握られている。あの異様なまでに大きな、回転式拳銃『Howler In The Moon』が。

その七〇口径もの巨大で、奈落を思わせるほどの銃口はホーランドのほうを向いている。

「やはりそうなると思っていた」

「フレデリカの眼を使って、何を考えていた？」

「『彼方なるもの』の向こうを垣間見ようとね」

「世界を書き換えるつもりだったか」

「そうだとも。全人類が、己の自由を阻まれることもなく、世界の均衡も崩されない、理想的な世界に変えるのだ」

「二も、全も、両方とも取ろうとしたか。二兎を追うものは一兎も得ない、と相場は決まっているぞ」

「それも眼があれば解決する。人知を超えるだけの観測によつて、世界は新たな形を得るのだ」

「ならば、ぼくはそれを砕いてやる」

銃口はわずかに三度跳ねあがった。

マズル・ブレーキから十字に青白い砲火が上がり、現世のすべてを砕くことを許された権能を帯びる漆黒の弾丸はホーランドの眉間に一直線だ。

弾丸は狂碩学の頭蓋を三割近く粉碎した。脳漿も頭蓋も衝撃で半液状となり、肉壁で出来た部屋中にぶちまけられる。元から不快を催すほど凄惨な場は、鮮血と脳漿でさらに惨状を増す。

座ったまま、背もたれに身を預けるように崩れ落ちた。それでもサイファーに銃口を下す気配はない。

「いつまで寝たふりしてやがる」

「……………ふうむ、バレてしまっていたか」

むくり、とホーランドが起き上がる。型抜きでもされたように吹き飛ばされた脳天は、何事もなかったように元通りになっている。

しわの刻まれた右腕が、ゆっくりと、前に。

「フレデリカ、僕の後ろにいるんだ」

言う通りにしないと、きつと死よりもひどいことになる。その根拠もない予感に突き動かされる形で、素早くサイファアの後ろに回り込んだ。そして彼は左手を、前に、かざす。

——ごう。

部屋全体が激しく揺れるほどの轟風が吹き荒れた。フレデリカの「眼」が映し出したのは、ホーランドの手から玉虫色の波動が放たれ、それをサイファアの影から延びる半球状の暗黒の防壁が防いだ光景だ。おそらくは現実の視界では不可視であつたはず。尋常ならざるものを見通す黄金の双眸だけが捉えたのだ。

二度、三度と『Howler In The Moon』が咆哮した。天地が揺らいだのではないか、そう錯覚するほどの銃声だ。

権能を帯びた漆黒の弾丸は、狂碩学が紡いだであろう不可視の障壁に阻まれていた。ライフリングから与えられた回転運動を維持したまま、虚空で静止している。

「この領域を書き換えて、ぼくたちの存在をまとめて抹消しようとするとは。いやはや、ぼくに負けず劣らずのやり方だな」

「君に、これ以外のやり方が通じると思うかね？」

「買いかぶりじゃないが、思わんね」

「そうだろう。こういうのは、どうかね？」

周囲の肉壁が蠢く。生物的な消化器官のごとき様相を示しながら、その形をグロテスクに変えていく。たった瞬き一つの間、壁中に牙を備えた大口が出来上がり、獲物を引き込むための触手が名状しがたい動きでくねりぬいている。

あまりにも非現実的な光景が加速しすぎている。大口も触手もない領域と言え、フレデリカとサイファアの立つ位置から一步程度の余裕しかない。

「アブない光景だな、こりゃ」

「ヒドい趣味です」

「散々な言われようだな、作った私が言うものではないが。さて、どう凌ぐ」

触手が躍りかかってきた。吐き気を催すほどの気味悪い動きを示しながら、二人の足や腕をからめとろうと迫る。

それらを白刃が迎え撃った。

サイファアは野太刀を居合の要領で抜き打ち、さらに大ぶりの刀身を器用に翻し、さ

らに連撃を加えていく。刀を抜いていない状態から、いかに素早く攻撃に転ずるかに重点を置いて居合。抜き身のままと比べれば、どうしても攻撃速度に劣る点を、さらなる一閃をもって補ったのだ。

大口のない部分をサイファーは器用に踏み込み、ホーランドに肉薄せんと迫る。その気迫は鬼神と言っても過言ではない。いや、そのものとしか思えない。

「放たれる気迫は敵を竦ませるためのもの。本心からのものではないか」

「わかつちやうかあ」

「しかし、邪魔者はいるぞ」

そう、サイファーの巨軀。それを捕らえんと蠢きまわる肉の触手。捕まれば大口へと運び込まれ、瞬く間に飲み込まれてしまう。しかし、それを気にする必要は、彼には存在しない。

小気味のいい連射音。『下手な鉄砲、数撃ちや当たる』なんてものではない。一発一発が必殺の制度を持った、立派な弾幕を張つての火力支援だ。サイファーの行く手を阻むものに、フレデリカは鉛球を送り届けている。

そうなると狙いはフレデリカに移行する。

四方八方から迫る触手をフレデリカは飛んで躲した。跳躍は高さ二メートル、距離は四メートル半に及んだ。その超人的な跳躍を成し遂げた自覚は、彼女の胸中には存在し

なかった。しかも、跳躍の最高点——ちようど放物線の天辺——で身をひねり、後方を向いた。二挺の引き金を絞り切った。反動で舞いながら、弾幕はフルオート射撃にあるまじき精度によつて一発も外すことなく、触手たちを撃ち抜いて刈り取っていく。

フレデリカに注意が逸れていたホーランドに、サイファアの撃ちはなつた剛弾が襲い掛かる。すんでのところで不可視の障壁を展開、弾丸は見事に静止した。

「お返ししてやろう」

ホーランドがかざした右手が、くるり、と反転した。

静止していた弾丸も併せて、方向を一八〇度転換した。

剛弾は三発撃ちこんだ。それらが射手に牙をむく。そうなるはずだった。

「弾丸を止められるのが、自分だけの専売特許と思うな」

サイファアが、右手を前に、かざす。

ホーランドのやったことと同じことが起きた。七〇口径もの巨大な弾丸は、サイファアの右手の手のひらから数インチのところまで静止し、ぽとりと地面に落ちた。

「いいぞ、やはり『数少ない成功例』たるお前の力。この程度の物理干渉などたやすいかッ！」

ホーランドは笑う。

ホーランドは嗤う。

ホーランドは、嘲笑う。

脳髓の欲求、知識への食欲、あくなき探求心。

それを満たしてくれるような存在。その力の片鱗に歓喜する。心から、歓喜する。

——故に気づかぬ。

麗しい射手が、己を狙ってることなど。たとえ知っていたとしても、些末事だった。

黄金の双眸は駆動した。狂碩学のすべてを見透かし、それをフレデリカに伝える。

——狂碩学ホーランドの構成情報は異常。

——三次元上の物理法則は、ことごとく無効。

——物理的破壊は、不可能。

双眸の告げた事実は絶望的。

フレデリカの手では狂碩学は打ち倒せない。

それでも、手がないわけではない。

——基底現実への干渉は、幻想を以てのみ破壊可能。

——支援行動を、推奨します。

二挺に青白い光が灯る。

雷のように稲光とスパークを放って、長大な二挺を走り抜ける。

すでに弾丸には十分すぎるほどに、充填された。

あとは、撃つだけ。狙いをすまして、ぶち込んでやるだけだ。

——
ファック・ユー
殺してやる。

あくまでも引き金を引く手は、冷静に、努めて冷静に。

弾丸は幻想に変貌し、物理の縛りから解き放たれる。弾丸にあるまじき速度を發揮する。おそらくは稲妻よりも、光よりも。傍目から見れば、稲妻を帯びた軌跡しか映るまい。

それが狂碩学を無力化する。狂碩学から現実を混ぜる術を、一時的に剝奪する。

充分だ、充分すぎる。

サイファーにとつてみれば、その一瞬で充分だ。

「ぐううおおあアアアッ!!」

ホーランドの胸のど真ん中。ちょうど心臓の真上を、サイファーの一刀が貫いてい

た。しゃがれた苦悶の声を漏らし、狂碩学の老いた身体はのけぞった。

死の足音がようやく近づいている、という段階だが、この時点でもホーランドが生物にあるまじき最期を迎えるのは目に見えていた。

——ひび割れている。

薄焼きの陶器か何かのように、傷口を中心にひびが走っている。それは首筋にまで及んでいった。

「油断した、か」

「いいや、ぼくが関わった時点で必然だった。これは起こり得るべくして起こったことだったのさ」

「ならば、問おう——なぜ、私の望みはここで潰えた？」

「お前さんが何を望んでいたかは、僕はどうだっていい。だが、お前さんの信じるものを誰も信じているわけではあるまいし、正しいと信じていても間違っていると思うやつもいる」

「——平和を、信じられぬもの、間違っているものとても、のたまうか」

狂碩学の身に入る亀裂が、加速する。顔まで一気に、ひび割れた。

「来る暗黒の時代を——避けようと思わないのか？ 私は見ただ、およそ百年後の世界を。見せつけられたのだ、あの自己顕示にまみれ、拝金に溺れ抜いた世界を。ああ、絶

望した。変えねばならぬと、その日から狂うことを決心したよ。変革には平和が何よりだ。安全と充足の得られる世界がね。そのために、たとえ一人の女が犠牲となろうとな」

「僕は一分先のことも予測できないんでな。百年も未来のことなど、わかるわけがない。もし、そんな夢物語があるとすれば、僕にも見せてもらいたいものだね」

「あれを見せた存在か……X、Y、Z、いあ、イア、いア、いあ、フルーシユチャー！」
それつきりだ。

狂碩学の身体は碎け散った。

フレデリカの眼だけが捉えていた。もしかしたら、サイファーも見えていたのかもしれない。何かがホーランドの体内で蠢いていた。数式だ。膨大な量の数式記号とアラビア数字。そのすべてが輝きを放って、狂碩学の身体を狂わせ、碎け散らせる。

口封じ、とサイファーもフレデリカも同じことを思っていた。

その思案も、洋館の激しい揺れの前に中断させられる。



ヘンリエッタは何の障害もなく、洋館を出ることができた。逆に何かしらの罠があるのではないかと怪しんだもののデリンジャーが来てからは、その警戒も消え失せる。

「サイファーは無事だったのか？」

「すこぶる、いつも通りだったよ。ついてきたけど、これじゃ杞憂だったみたいだ」

「あの男が臥せっているのは、想像ができんがな」

「同感だよ」

おそらく噂の本人が聞いていれば、威圧感たつぷりに後ろに立っているであろう。

「それで、あのフレデリカという娘だが——」

「言わなくてもわかっているよ。たぶん、本人は気づいていないか、否定するかのどっちかだろうけど」

「向けられているほうは、どうなんだろうな」

「気づいてないからスルーしているのか、気づいているうえであえてスルーしているのか」

「……そこまで悪辣な男なのか」

「天邪鬼なんだよ。デカイ図体しているくせに、な」

そこで激震が中断の合図を告げる。洋館を中心に蜘蛛の巣上に亀裂が走っていき、地

面が陥没と隆起を繰り返し、地割れとなる。

——何かが、出てこようとしている。

——何かが、這い出ようとしている。

——何かが、飛び立とうとしている。

周囲に暴風が吹き荒れる。地割れで起こった大地のかけらが巻き上げられて、宙を舞う。なのにデリンジャーとヘンリエッタには何の影響もない。

「どうなっている!?!」

「自分の望むものだけに干渉する外法の暴風だ! こんなものを使えるのはただ一つ!」

「風に乗って歩むもの、白き沈黙」

灰色の外套をまとった、大きな男が降り立った。類まれなるほどの美少女にしか見えない女を、抱きかかえたまま。視界の端にほんの少し捉えただけでも、二人は誰かがわかった。サイファーとフレデリカだと。

「狂った碩学に力を与えた元凶だ」

「なるほど、予想は合っていたか」

——イタクア

誰かが言った。

デリンジャーは口をつぐんでいた。

ヘンリエッタは何も言わない。

フレデリカは沈黙している。

サイファアは嗤う。ただ笑う。口を三日月に歪めて。

この四人以外の誰か——いや、何かが話している。自らの名を語った!

暴風は静寂となる。だが風は吹き荒れている。大地のかけらを、宙に浮かばせるために。その中心に、名乗った者はいた。

人型に見えなくもない身体。それはのっぺりとした質感を帯びた乳白色の肌で、落ち窪んだような眼と獲物をかみ砕くための牙をもった大口がある。その身体は巨大だ。巨大であるがゆえに、崇めたくなる。信仰したくなる。目の前の怪物を!

——この領域に下りたのは、いつぶりだったろうか。

「人語を解するか」

——「彼方なるもの」の向こうを見た、その恩恵だよ。今はどんな言語でも、理解でききる。

「未来を見せたのは——お前さんか?」

——違う。見せるための権能は存在しない。でも、彼と同じものなら見たことがある。生贄を捧げてまで呼んでくれたので、相応のものを以て返したよ。彼に未来を見せ

たのは——「狂える方程式」と言っても、君たちにはわからないだろうけど
「それで、こんな派手な登場をして、お前さんはどうするつもりだ」

——どうしようかね。また彼のような人間を生み出すのも一興だ。

「なら——僕のこととは、ただ一つだけ」

空気が沈む。

黒く染まった一刀を、怪物に向ける。風の神性、イタクアに。

——君はなんだ。なぜ知らない。その力は、一体なんだ？

サイファーは飛び上がる。舞い上がる大地の欠片を足場にし、野太刀の黒く染まった刃を届かせんと迫る。それを猛風が迎え撃った。イタクアの操る黒い暴風。触れた一切合切を朽ちさせる、外法の風だ。

黒き刃が虚空を染める。野太刀の一閃で黒き暴風は断ち切られる。

——風を切るとは。

「まだまだだよ。水を斬れるようになってからが、一人前というやつだ」

——だが、そのかたちでは傷をつけられない。

サイファーの一刀がイタクアの乳白色の肌に食い込んだ。だが、それだけ。刃を何も斬ることなく、表面を滑っていくだけだ。森羅万象を破壊することを許された黒き権能を帯びた刃は、その役目を果たすことは叶わなかったのだ。

暴風がサイファアを叩く。幾千、幾万もの圧倒的な鎌鼬の礫となって撃ち込まれる。一つ、二つ、百、と防いだところで押し負けるのは明白だ。浮遊する大地の欠片も砕いて飛んでいき、クレーターとなった洋館の跡地に叩き落された。

——そこで見上げているだけが、お似合いだ。

「言つてくれるじゃねえか——拘束体、展開」

フレデリカは一度は見た。おそらくヘンリエッタも、デリンジャーも見えてはいないはずだ。サイファアは、これだけは見られまいと、警戒していたはずなのだから。奇しくもヘンリエッタもデリンジャーも、こつちを見てはいない。フレデリカが見せないように取り計らつてくれている。

あの鎧が展開する、怪物を縛るための黒き鎧が。

無謀の兜に光る三つの赫い眼を、すべてイタクアに向け。内からあふれ出る力に、鎧の関節は激しく軋む。

鋼鉄の翼が展開する。羽ばたかんと、己の存在を主張する。高圧縮蒸気が噴射するよ
うに、翼一つ一つから推進力を得るかのよう
に、黒とも濃紫とも言えない色に染まった
炎をが噴射される。

一瞬でイタクアの前に飛んでいた。

「今度は、僕が叩き落す番だ」

——その力………まさかッ！ お前が『数少ない成功例』だということのかッ！

「その身を以て、確かめてみるといいさ」

イタクアは逃走した。

死を恐れた。

碎かれるのを恐れた。

消失を恐れた。

恐れたからこそ、飛ぶ。逃げるのだ。

黒き暴風を操り、イタクアは飛翔する。時さえも彼方に置き去りにして。

「逃がさねえよ」

一刀はない。握られているのは——およそ三メートルはくだらない、騎兵用の突撃槍。鎧と同じように鋭角的な意匠を含んだ、どこか機械的な要素を感じさせる、漆黒の大槍。

穂先となる超重量の円錐の刃が、回転を始める。それをきっかけに闇も渦巻き始めた。

フレデリカの瞳は——イタクアの終わりを予見していた。

——『彼方なるもの』の向こうを見たことで、イタクアの構成情報はさらに上の領域

にシフト。

——幻想できえも、身を砕くことは不可能。

——“数少ない成功例”である、彼ならば可能。

——比類なき、その権能であれば。

——すべてを打ち砕く、その力であれば。

「吹っ飛べ」

大槍を放った瞬間、それは一筋の黒い光となった。何もかもを巻き込みながら、時さえ飛び越えてイタクアへと一直線に進む。

——いやだ………やめろッ！

「やめるわけあるか、消え失せろ」

一筋の黒い光条となった大槍は、サイファアの黒い権能に螺旋の力を加えて迫る。この世に存在するものを振り回し、森羅万象を砕く権能が毒のように染み渡っていく。

像さえもちっぽけに見えるほどの、比類なき巨体に大槍が触れた。

その瞬間、権能は螺旋の力を借りて、一瞬で染み渡った。

——あ………ッ！

呆気ないほど、たやすく、イタクアは消え去った。



「また『彼方なるもの』の見る景色が、一つ消え失せたか」

そこは稲妻走る電気の世界。

幾重にも張り巡らされた電線を、電気がスパークを散らして駆け抜ける。

情報伝達だ。階差機関の歯車が一回転する間に、膨大な情報を電子が走る一瞬の間に処理してしまう。まるで数百年後の電気文明の世界のようで、現実的なようで非現実的な光景だった。

スパークとケーブルに囲まれた中央、そこにある玉座に老いた碩学が座していた。この蒸気文明の現在では異端と言っている、電気技術の結晶で身の回りを固めている。その中心で老碩学は電子映像出力装置デジタルモーターの映像を、食い入るように見つめていた。

「——おお、素晴らしきことよ。」

——おお、喜ばしいことよ。

正気の鎖は、今はじけ飛んだ。破壊者の手によってな

狂える数式は嘲笑うがいい。

儂が、お前のもとに行くその日まで」

老碩学も狂っているのか。

今回の騒動を起こした、ホーランドのように。一心に電子映像出力装置を見つめて、しわがれた声で高らかに謳う。

周囲の電気技術の結晶は、己の手で作ったのか。宙に浮かぶ、電子によって編まれたエレクトロ・キボト電子操作盤をしわだらけの指が叩く。その動きは軽快そのものだ。年齢など、まるで感じさせない。

「近いうちに来そうだな。せいぜい、もてなしてやるとしようか」

映像に移るのは、鎧に縛られた怪物。

「——サイファー・アンダーソン」

彼の名をつぶやいてから。

「待っているよ、わが教え子たるヒルベルトよ」

そして椅子の背もたれに、身を預けた。



デリンジャー・ファミリーのアジトで宴は盛大に行われた。

アーカム統治局治安維持部保安課という公僕の身でありながら、ワイアットも拉致同然に連れてこられた。出るところに出ればスキャンダルものだが、デリンジャーであればもみ消すことも可能であろう。サイファーも報道関係には少ないものの、頼れる伝手がある。

それから酒に溺れ、紫煙が大気となる。それほどの大宴会が繰り広げられた。つまみはあつという間に足りなくなり、土壇場で店屋物を頼むような事態になったが、それでも全員が楽しんでいた。アーカムにやってきた機器を、乗り越えたことに。

フレデリカは給仕に大忙しだったのは言うまでもない。健啖な連中が勢ぞろいしたのだから、無理もない話だ。ヘンリエッタの手伝いは丁寧に断った。集団食中毒に等しい事態は未然に防がねばなるまい。

終わつたころには空も白み始めていた。

日も届かぬアーカム下層でも、夜明けの光だけは入る。そう、誰かが言っていた気がする。一度は見ておくべきものだ、とも言っていた気がする。

だからアジトの洋館、そのベランダに出て、フレデリカは暁の時を見る。

「あ」

漏れた声はそれだけ。

真上から光が降ってきた。どうやって降り注いでいるのか、なんて科学的な考察は野暮に思えた。天使でも舞い降りてきても、ちつとも不思議ではない。放棄された建物と瓦礫、それからできるカスが黒い雪となって、赤月の光を得てようやく白日にさらされる。

不浄にして、幻想的なきらめきがあった。

だから、声を出すことなど憚られる。言葉を発するなら、一秒でもこの景色を焼き付けていたい。

ぼんぼん、と肩を叩かれた。

振り向いたらギャバジン織の灰色のロングコートが目飛び込んだ。視線を上げれば、サイファアの顔が飛び込んでくる。

「びつくりしました」

「見入ってたモンだからさ」

「はい、見入ってしまいました」

確かサイファアは八〇〇ミリリットル入りのスピリタスを山ほど空にして、デリンジャーとワイアットが左右を固める形で寝入っていたはずだ、と回想する。そのうえ

で、化け物並みに酒が強いのだと確信した。

サイファーも下層の夜明けに目を向けていた。

「平気か？」

「もう、いろいろと慣れてきちゃいました」

「僕のあれを見てもひっくり返らないあたり、ほんとすごいと思うね」

「からかっているんですか？」

思わず半目になって見上げてしまう。

「いいや、本心だよ。デリンジャーもワイアットも、アレだけはダメだったらしい」

「あの姿も、あなたなんですけれどね」

「ホント、似ていると思うわ」

似ている、という言葉に反応した。

サイファーが何となく自分と似ている、と発言した存在。フレデリカは少しだけ、気になっ
ていっている。気になっ
てしまっていた。

「どういう人だったんですか？ その私に似ている人は」

「うむむ、なんか近いうちに話すような機会がありそうだから、今は教えないでお
く
か」

「ひびこ」

「いまさら言うことかよ……そうだ、助けてくれたご褒美をやるうか？」

ニヤツとした笑いを見せたので、とつさに『いらぬ』と言おうとして——できなかつた。

生暖かい感触を額に感じて。その正体に気づいた途端、それを中心に熱が顔中に満ちるのを感じる。

前髪を上げるサイファアの大きな手が、視界をふさいでいた。だから額に感覚が集中するのも、仕方がなかった。彼の行為を触覚のすべてを総動員して、感じてしまつていた。

サイファアが離れた。フレデリカの額から。

「……こと、……には、まだ早いかな？」

頬、唇の順で指さしながら、サイファアの巨軀は洋館の中に消えていった。

ぺたんと膝を折つた。へたり込みながら、赤く染まつた顔を両手で覆つた。

——おでこに。

——キス、された。

それだけで、フレデリカは過熱状態オーバーヒートだった。

蒸気伏魔都市マドネスプリンス

Flight 大英帝国へは空を渡り

アーカム中層、第十二区画。

ついに本格的な冬が到来した。イギリス本土のほうは数式機関という次世代型のエネルギー機関よりも、旧来の蒸気機関を使用しているせいか、煤煙で煤けた灰色の雪が降る。数式機関はイギリス本土でも少ない。その陰には蒸気機関にまつわる既得権益を手放したくない企業連合の思惑や、ダフィット・N・ヒルベルトによってもたらされた数式機関にはいまだに原理不明の部分が存在するためだともいわれている。

しかし、ここで向かい合う二人には関係のないことだ。今は。

企業連合の都合も。

数式機関の詳しい原理も。

拳を平手に当てる形での合掌から一礼。それが大国『清』に伝わる功夫カンフーの例であることは、功夫を少しでも知っていればわかることだ。

向かい合う二人の服装もどこか中華的な意匠を孕んでいる。

背丈は一六一センチ、腰まで届くほどの金髪を動きやすいようにポニー・テールに結

い上げている。漢服然とした道着は薄いのか、下着のラインが凝視すれば見えてしまう。動きにくいだろう、と思わずにはいられないほど豊満だ。

もう一人は二メートルを超える鍛え上げられた肉体が、服越しにもわかるほどの偉丈夫だ。赤とも茶とも言えぬ橙色に近い髪色だが、功夫の構えは非常に様になっている。銀灰色の瞳は目の前にいる少女と言ってもいいほどの女に向けられている。

「さ、フレデリカ。どこからでも好きなように、打ち込んでこい」

右手を前に差し出す構えのまま、手招きで挑発する。

「わかりました、サイファーさん。全力で行きますから」

サイファーの横腹に中段蹴りが叩き込まれた。容赦のない速度と重さの両方を兼ね備えた鋭い一撃だ。それを食らっても身じろぎ一つせず、いつもの不敵な笑いを崩さない。

「これで仕舞いか？」

「まだまだですよ」

そこから叩き込まれる掌底、手刀、正拳の嵐を、その繊細そうに見える身体から息つく間もなく繰り出していく。サイファーの受け方も見事なものだった。体格に差があるために、主に下段から中段に集中する打鍵に蹴りの数々を両腕の捌きと、歩法で見事に躲き切っている。

その見事さは拳闘とは思えない。どこか舞踊にも似た、完全に息の合った美しきがある。

フレデリカの回し蹴りをサイファーが右腕で受け、反撃の掌底を身を翻していなす。しなやかで肉付きの良い脚線美を描く足が鳩尾に入る。フレデリカの主力は蹴りだ。拳打ではどうしても劣ると考え、足技に重きを置いている。サイファーもそれは正解だと感じている。

鳩尾に食い込んだ足に力を籠め、フレデリカの朱唇からほうと息が吐かれる。功夫の理合、勁という四〇〇〇年もの歴史が育んだ物理。肉体の持つ力を最大限に活用する体さばき。それをフレデリカの意識は、身体は、忠実に実行した。

蹴り足を支点に力を込めて飛び、サイファーの肩を踏みつけ、顎を蹴り飛ばす。人間業とは思えない武芸だ。いくら体格差があるとはいえ、人間を階段でも上るように飛び、加えて攻撃まで叩き込む。だが己の身体を自在に動かす、という境地は功夫では基本だ。

だからサイファーの反応も慣れたものだった。もんどりうって転げたように見えていながら、後転倒立の要領で飛び上がるように起き上がった。

「驚いたな。もう、あんなことまでできるようになったか」

「あなたに教わったんですよ」

「鼻が高いね」

サイファアの拳打は鋭い。速さがなくとも異様なまでの重さというものがある。だから骨の髄までダメージが通り、外見の優位から予想される威力をはるかに上回る。はじめフレデリカがまともに食らった時は、思わず今まで彼に殴られたりしてきた連中に同情した。

あの見かけから予想すらできない素早い動きは、きつと功夫を修めたことによるものだ。だったのだ。

こうして手合わせして、ようやくフレデリカの気づいた事実だ。そのことを質問してみれば、サイファアからは正解の言葉が返ってきた。ありあまる力を単純にぶつけていたのではない。こうして技術を学び、最低限の労力で最大限の力を出せるようにしていたのだ。力が強すぎるから。あの縛り付ける鎧を展開せずとも、武装した人間の集団なら単身無手で壊滅できる。その力を御するためにも、功夫を学んだのかもしれない。

しかし師匠というべき人間に頭を下げている姿が全然想像できなかった。何かでひと悶着あつて、そこで見所があるとか言われて拾われていそう。そんなことを思ってしまったこともある。このことは本人に聞いてもむつつりするだけで、頑として話してくれない。

拳打の暴威に交じって、フレデリカの意の虚を突く形で繰り出された足払い。ここで

体格の差によるリーチの圧倒的なアドバンテージが顕現する。気づいた時には完全に空中で側転状態だった。そこを逃すはずがなく、乾坤一擲といつてもいい掌底が来た。

くの時になって吹っ飛ぶ。第三者の目があったら、巨人によつて投げ飛ばされたと思うほどに、非現実的な飛び方をしている。

壁に激突した。挿鉢状にへこんだ壁が、掌底の威力を物語っている。速度こそないが、サイファアの巨軀により生み出された全身運動のエネルギーは、功夫の発勁の理合に基づいてフレデリカの繊細な体に叩き込まれた。

視界は暗転し、こみ上げるものを抑えきれない。

サイファアが立ち上がらせてくれた。

「この一か月でここまで功夫に親しむとは……僕もちよつと驚きだ」

「うえ……でも、手加減なしなのはちよつと考え物ですね」

「自分で言い出したことだろうに」

「それを言ったらおしまいですよ」

「ま、まだまだ功夫が足らんということだ」

先月のアーカム下層で起きたホーランドの一件。

あれからフレデリカはもう一度己の戦闘技術というものを見直そうと決心した。射撃はもちろんのこと、接近戦にも視野を広げようとした。そこでサイファアから功夫を

勧められた。曰く『自分の力を飼いならすなら、功夫の功德を積み。僕が叩き込んでやる』ということ、ぜひと教えを乞うことにした。

清の武術は非常に独特な理論ではあったが、サイファーはそれをわかりやすく噛み砕いて説明して理解の門戸を開き、一定の理解を示したところで奥まった理合を叩き込む。覚える型と技はたくさんあったが、極端な話をいつてしまえば基礎となる理合の考えが実践できているかが肝らしい。

あとは先ほどのように時間を見つけては手合わせをする。一度も勝てたことはない。

「シャワー、浴びてきますね」

「ああ、レディ・ファーストだ」

脱衣場で訓練のための道着を脱ぎ捨てた。下着も取り去って、シャワーの熱い滴を浴びる。

手合わせの最中には気にならなくて、終わってから一気に臭ってきた汗の香りが薄れていく。自分でも花に着いた酸っぱいような臭いを、どういうわけかサイファーには嗅がせたくなかった。だからシャワー・ルームに向かうペースも少し足早になつてしまふ。

あの日以来から、どうもサイファーを意識してしまっている。額に与えられた感触とそこからくる昂ぶりは、今でも思い出せる。彼が何を思つて、あのような行いをしたの

か、まるでわからない。

からかうつもりだったのか、スキンシップか。あるいは親愛の情を込めてのことか。そのどれもが、なんとなく違うような気がする。

——ダメ、頭がモヤモヤする。

シャワーのコックをひねる。程よい温もりの温水は、心身を冷やす冷水に変わる。それでも回想によつて生じた昂ぶりは、鏡に映る己のかんばせを朱に染めている。

繊細でいて、豊満な体も視界に入る。きつと男好きのする身体だ、とフレデリカ自身も思わずにはいられない。ここ最近は鍛えていたせいか、余計な贅肉は腰回りから消え失せている。ちよつと前までは下着に少し肉が乗っていたが、今はそれもない。なのに、バストが全然変わっていないのは、本当に奇跡的というか作為的な何かさえ感じってしまう。

これならオトせない男はいないはずだ。もしかしたら——と考えたところで、頭を振つて中断した。

まるで彼とそういう仲になりたい、と考えているようだった。それだけは思つてはいけないような気がして、言葉にすることはおろか思うことも封じ込めている。

「何やつてるんだろ……………」

長い溜息が混じる。

下着をつけて、着込んだのは白いブラウスと深緑の膝丈スカートだ。裾には黒いレースで刺繍がしてあり、そこがワンポイントのおしゃれになっている。シンプルにして、華がある。

リビングに戻ってみればサイファーは誰かと電話で話し込んでいる。あまり話したくない相手なのか、それとも苦手な相手なのか、眉間にしわが寄っている。

電話を戻す時も、ほとんど叩き付けるようだった。

「サイファーさん、シャワーのほう空きましたよ」

「おう」

返答が素っ気ない。やはり何かあったのだろう。

「そうだ、明後日からヘンリエッタもつれて長い仕事になりそうだから、連絡と支度をしておいてくれ。一週間分くらいの用意を、な」

「どこに行くんですか?」

「ロンドンだよ」

シャワー・ルームに消えていく、曲の背中を呆然と見つめて。

「ロンドン!?!」



そして当日。

集合場所はサイファアの自宅だ。とはいえフレデリカは居候しているようなものだから、ヘンリエッタを待つだけだ。

アーカムは完全に冬景色だ。ホーランドの一件があつたところは冷え始めていた時期だったから、それから一カ月もたてば冬になる。雪かきをするための蒸気圧式ロータリー・ガーニーが、魔物の牙のような円の子にも似た歯を回転させて、粉雪も塊の雪も等しく粉碎して融雪機関を積んだガーニーに放り込んでいく。

厚手の膝丈トレンチ・コートを着たヘンリエッタは、かなり大きめのトランクを抱えてきた。

「予定より早いが……出発するか」

サイファアは自分の荷物だけではなく、ヘンリエッタとフレデリカの荷物も自家用車のガーニーに積み込む。こういうところでは、割と紳士らしい振る舞いをしてくれる。結局は天邪鬼ともいえるからかい癖のようなもので、プラマイゼロになるのだが。

ガーニーは冬道を難なく走る。冬道用のスパイク・タイヤの性能向上も大きいが、

アーカム中層からはすべての道路に発熱機構ロード・ヒーティングが備わっている。アーカムというほとんど町と変わらない超大規模アーコロジーのインフラを維持する、方程式機関ヒルベルト・メカニズムの排熱だけで行っているらしい。

フレデリカはこれだけの利便性がたつた一つの数式機関によって賄われているとは。到底思えない。だがアーカム統治局はそのように正式発表している。近年の百科事典でアーカムの項目を読んだとしても、この事実はしっかりと記されている。

——方程式機関ヒルベルト・メカニズム。

かの大碩学にして数式機関の生みの親が、自らの手で作り上げた特別な数式機関を指す単語だ。組み込まれている数式は常人の理解の外にあるといわれるほど精密で、一部では神秘数学さえ盛り込まれていると言われている。その実態を誰も知らないが故に、よく陰謀論の的になったり、怪奇雑誌の題材にされることもある。しかし、これから向かうロンドンはどういった技術の恩恵にはあやかっていない。いまだに蒸気機関が主流であり、数式機関は十もないようだ。煤煙の汚れを取り除く触媒装置を化学が生み出したおかげで、空気はずっと綺麗になったらしい。だがテムズ川はいまだに黒く濁っている。

目的地には三時間もかかった。

アーカムの大地ではない。基盤となる島、ウルベスの地盤を削って掘った長大な道だ。写真でしか見たことない、一生の間にわたって縁も所縁もないと思っていた場所

だ。

「飛行場……!」

「本当だ、生で見るのは初めてだ」

驚きと好奇心に揺らぐ二人に、頭上から声がかかる。

「さて、まずはこいつを受け取るんだ」

渡されたのは二枚の厚さ三ミリ、縦三センチ横六センチの薄い鉄板だ。表面には貫通しない程度の穴が大小様々に空いている。しかし、総数は二枚とも同じ五〇だ。

「これって……」

「数式カードか?」

数式カード。それはパンチ・カードに変わる新たな情報記憶媒体ともいべきものだ。表面に開けられた穴は大きさを三段階に分け、数は五〇で統一する。そして数式技術を以てより細やかな情報を書き込む。これを総合的な身分証明書として運用したものだ。

これを持つているのは一部の上流階級や政治家、王族くらいなものだ。飛行場以上に縁も所縁もないと思っていた。

「あまり見せびらかすなよ」

「は……はいッ!」

「あ、ああ」

「よろしい。それじゃ手続きに必要なだから、その数式カードは」

飛行場の受付がある建物に向かい、サイファーに案内されるまま必要事項を渡された書類に記入し、数式カードを読み取り装置に差し込んだ。

——きりり、かちり。

——きり、きり、かち、ん

歯車の軋む音がして、それから一分で読み取りは終わった。ヘンリエツタも同じだ。

サイファーはとづくに手続きを済ませたらしく、建物の外で待っていた。

「見ろ、僕たちはあれに乗るんだ」

顎でしゃくるように指し示したのは、鋼鉄の鳥と言つていい代物。スチーム・エア・ブレイン 蒸気圧式旅客機が

巨大な翼の端に取り付けられた推進機構から、とてつもない量の圧縮蒸気を噴射して、地上で旋回している。

圧搾蒸気が視界をふさいでいたが、冬の冷風が吹き飛ばしてくる。

飛行場の係員が案内してくれた。スチーム・エア・ブレイン 蒸気圧式旅客機の内装はホテルの一室かと思っ

どに豪華だ。革張りの椅子が四つ、おそらくリクライニングの機能がある肘掛付きのものだ。飲食もできるようにテーブルが付き、かなり便利そうだ。窓もついているから、

飛行中は景色が拝めるかもしれない。

『それではお好きな席に着いて、安全ベルトをお締めください。飛行予定時間は五時間を予定しております』

伝声管を通して聞こえる男の声。おそらくは操縦士のものであろう。

フレデリカもヘンリエッタも、サイファーに教わりながら安全ベルトを締める。そして離陸の時を今か今かと、内心で歓喜と好奇心に震えながら待っている。

『それでは出発いたします』

蒸気圧式旅客機はゆっくりと加速し始める。あの長い道は滑走路というらしく、離陸に必要な揚力を稼ぐためにあるとサイファーが教えてくれた。

フレデリカもヘンリエッタもほとんど座席に押し付けられていた。加速はどんどん強まっているために強烈なGがかかっているために。だがサイファーはいたって平気そうだ。

そしてついに離陸した。内臓が浮きああるような独特な感覚に、何の反応もできずに茫然としてしまっているのは、フレデリカもヘンリエッタも一緒だった。無論、サイファーは平気そうだ。それどころか高度が十分に上がったところに乗務員を読んで、スコッチ・ウイスキーを注文している有様だ。

窓からの景色はすでに上空遥か高くから地上を見下ろす形になっている。高度はおそらく数百メートルを優に超えているはずだ。自分で拝むことはないと思っていたは

るか上空からの景色、フレデリカはしばし見とれてしまった。

フライト開始から二時間が経つころだ。

サイファーはふと、フレデリカの座る座席を見た。何か妙だと感じた。

ひどく生氣というものが乏しいように感じられる。視線を向けてから一切の身動きをしていない。

「大丈夫か？」

飛行状態は直線の安定飛行だ。だから立ち歩いて問題はない。

フレデリカの顔の前まで来て、ぎよつとなつた。死人と見紛うほどに白い。いや、元から色白なのだが、それ以上に輪をかけて白い。青白いと言つてよかつた。

かすれるような声を、フレデリカは絞り出した。

「……………きもちわるいです」

しまった、とサイファーは出発前の自分をぶん殴りたくなつた。どうせ空を飛ぶのは初めてだろうから、聞いても仕方ないだろう。そうタカを括つていたのが災いした。

フレデリカは完全に空の旅に酔ってしまっている。

「空もダメだったのか……」

ヘンリエッタの言葉はある予感を裏付ける。

「空も？？」

「フレデリカは船酔いするタチなんだが……本格的に陸の乗り物にしか乗れないらしい」

「ふねより……きもちわるい」

完全に口元を抑えて、蹲ってしまっている。

「ヘンリエッタ、ここは任せていいか？」

「手ぐらい握ってやったらいいだろうに」

「バカ言ってるじゃねえ。リバーズするかしないかの瀬戸際だぞ。僕なんぞに見られようものなら、一生門の人生の汚点になる」

「ほんきで………瀬戸際です」

うぶ、とフレデリカが息を漏らす。乗務員がブリキの洗面器を持ってきてくれたおかげで、機内を汚す事態は避けられそうである。だがヘンリエッタは非難するような視線を向けてきているし、フレデリカの呼吸は弱々しい。

フレデリカの右手をサイファーは両手で包み込んだ。

「フライトの残り時間を機長に聞いてくる。それにここの乗務員は一流だから、乗り物酔いくらいすぐにどうとでもなる。だから心配するな」

「……はい、ご迷惑おかけします」

「初めての空の旅が、こんなことになるとはな。すまなかつたよ」

「いいんです……私も、何も言わなかったせいですし」

それから宣言通りに操縦室のほうに向かい、基調にフライトの残り時間を聞いた。その途中でえづくような声が聞こえた気がしたが、気のせいだということにして聞いてないことにした。

淑女にも、プライドがある。



フライトは終わった。

スチーム・エア・フレイシ

蒸気圧式旅客機はクロイドン飛行場に着陸し、完全に顔が土気色のフレデリカもヘン

リエツタに肩を貸してもらって降りてきた。

「帰りは船旅のほうがいいかね？」

「そのほうがいいよ。これはちよつとヒドすぎる」

「それで、おねがいます」

完全にフレデリカはグロッキーだ。異常なほど生気に乏しい。

次に進もうとしたサイファアの鼻先に、散弾銃の銃口が突き付けられる。構えていたのは今までサイファアたちを乗せていた機を操縦していた機長だ。

「何の真似だ」

「申し訳ありませんが事情がございまして……死んでいただきます」

散弾銃が発砲と同時に跳ね上がった。散弾は全弾まとめてサイファアの顔面を撃ち抜いたに違いない。

「サイファアさん！」

さすがに目の前で起きた異常事態に、フレデリカも悲鳴を上げた。至近距離からの散弾の直撃、それも顔面となれば無事ではすむはずもない。散弾の硝煙はもうもうとサイファアの頭部を覆い尽くし、無残な惨状であろう場所をかるうじて隠していた。

ころん、と間の抜けた音が響く。鉛の小粒が硬い地面に落ちた。

「おー痛いな、こりや。僕じゃなきや死んでるところだ。極地の灰色熊用の弾じゃねえか」

「二メートルはある熊でもバラバラに引き裂く銃だぞ!? なんで生きてやがる!?!」

機長としての体面はかなぐり捨てたのか。手に握る散弾銃の台フオア・エンド先を国金具しようとしたところを、サイファアに思い切り蹴飛ばされた。六メートルも吹っ飛んだ拳句、バウンドして三メートル、さらに二メートルも地面を転がった。

サイファアの顔は無傷だった。一センチ大の鉛弾がわずかにめり込んでいる程度で、振り払えば一発も残さずに落ちる。

「おい、お前らのトコの機長は……後ろだ！」

フレデリカとヘンリエッタのほうに振り返ったとき、サイファアは乗務員が短機関銃を構えているのを見たのだ。大声で呼びかけたのが幸いしてか、二人とも背後からの奇襲を避けることができた。

「こりゃ飛行場は敵だらけかもしれんぞ」

「遮蔽物が乏しい状況だ。私だって、ずっと走り続けられるわけじゃないよ」

「厳しいな………フレデリカは動けるか」

「なんとか」

無理矢理にでもはにかんだような表情で、いつもの二挺を握り込む。一応だが、フレデリカは乗り物酔いから回復したらしい。『Align One One in Air全にして一、一にして全』の名を関する二挺の魔銃は、変わらぬ輝きを放っている。

飛行場の建物。おそらくは運航のための施設なのだろうが、三人はひとまずそこを指すことにした。なんでもサイファアには電話すれば助けにきてくれるかもしれない、そういう相手がいるらしい。なぜ『かもしれない』なのかは曰く『個人的な事情で嫌われているから、へそ曲げてきてくれないかもしれん』とのたまった。

こういう一筋縄ではいかない知り合いというものが、サイファアの周辺には多い。やはり彼自身が一筋縄ではないか男だからか、と思つてしまったことは胸の奥に嚴重にしまつておくことにする。きつとむすつと怒つてしまふだろうから。

建物には裏口から入つた。思い切り扉を蹴破り、内部に銃口を向けた。来る途中で襲い掛かつてきた男から奪つたウェブリー・リボルバーだ。こんなところで壁の二枚や三枚くらい余裕で撃ち抜く『Howler In The Moon』は威力が強すぎる。ウェブリー・リボルバーは四五口径なので威力に不足はない。

中には誰もいない。しん、と静まりかえつている。サイファアは起こしたウェブリーの撃鉄をデコックする。

「今のうちに電話しちまうか」

ダイヤル式の電話をかける。

「聞こえるか？　今飛行場で襲撃を受けている。情報でも洩れているのか？」

『ああ、私のほうでもそれを掴んだよ。全速力でそちらに向かつている』

「お、今日は事情が違ふと見た。何だかんだごねそうなんだがなあ」

『そうだな、今頃はスコーンをお供にティー・タイムを決め込もうと思つていたところだ』

「この野郎、死んでしまえ」

叩き付けるように電話を切った。ある意味では叩き切ったと言えるのかもしれない。

そのとき裏口から短機関銃を持った男たちが躍り出る。毎分七〇〇発近いフル・オート射撃で吐き出されたのは弱装の三八口径弾。装薬量が少ないだけあって、銃口の跳ね上がりは抑えられる。よって狙いは格段につけやすい。

不意打ちに反応して部屋にある机やキャビネットを遮蔽物にできたのは、不幸中の幸いというべきか。それとも経験則故の行動というべきか。

サイファーは巨体を器用に隠しつつ、盲撃ちでウエブリーを撃つ。隠れながら、銃だけ出している発砲だというのに驚異的な命中率を発揮した。弾倉の六発のうち五発も命中する。二人ほど倒すことができた。とはいえ弾丸はそれつきりだった。ウエブリーは奪つても、替えの弾丸までは奪っていなかった。

しかし、もっと有用なものが近くに転がってきたのを、サイファーが見逃すはずはない。

さつきまで自分たちに向いていた脅威である短機関銃だ。木製で曲銃身のボデイに、艶消しされた鈍色の銃身が生え出ている。たしかドイツあたりが開発したのをきつかけに、それが他国にも流れ、同じものを作ろうという流れになったものだ。特にロシア製のものは強力らしい。

それが二挺、いまだ冷めやらぬ銃身の熱と立ち上る硝煙を色濃く残しながら、自分の

近くに転がってきた。そうなれば拾わない手はない。

飛び込むように前転し、二挺の銃把を掴んだ。前方にいる男たちは五人。まずは彼らに鉛弾を腹いっぱい食わせてやる。

あつという間に五人は片付いた。しかし、ここで問題が起こる。短機関銃は弾切れを起こしたのだ。

仕方なく、倒れた男たちからいただこうとしたとき、サイファアの後方——そこには二階へと通じる階段がある——から関の声がした。

新手だ。人数は四人だが短機関銃ではなく、ブローニング自動小銃で武装している。ライフル弾を使うために弱装の拳銃弾では話にならない。

すう、と息を吐き、激震が起きる。

——震脚。

功夫における技は建物中に揺さぶりをかけ、地面にあるものは宙を舞う。

短機関銃の弾倉も同じように。宙を回転しながら無軌道に飛ぶそれを、サイファアは器用に弾倉挿入口に銃本体を振り下ろすようにして叩き込んだ。一挺を小脇に抱え、もう一挺の装填レバーを引く。同じように脇に抱えていたほうも

発射準備を整えた二挺を彼らのほうに向けたとき、サイファアの傍らにフレデリカが控える。

増援の男たちは一発も撃たぬまま、フレデリカとサイファーから鉛弾の雨霰を食らった。正確無比なフレデリカの射撃は一見して乱雑に見えて、その実まったく標的を外していない。サイファーの短機関銃も相当な弾幕を展開し、逃げ場を奪い尽くす。

「メイザースのヤツは、まだ来ないのか」

また拾った弾倉で再装填しながら、柄にもなくぼやく。

その背後で断末魔が聞こえた。たった『がっ』というだけの短いもの。

「油断大敵だ」

「これだと、まだまだ来そうですね」

眉間にナイフを一本突き立てた状態で、あおむけに倒れた男をフレデリカは一瞥した。手にはソード・オフした水平二連散弾銃。背後から狙おうという算段は、ヘンリエッタの手によって叶うことはなかったのである。

そのときガーニーのエンジン音がした。停止した時に蒸気を排出する独特の音がするから、確実に蒸気機関を使っていると断言できる。

建物の外に出てみれば、六人くらいは乗れそうなガーニーが止まっている。その前にサイファーたちを出迎えるように、一人の男が立っている。撫でつけた金髪、神経質にゆがめられた相貌、長身矮躯の男だ。エメラルド色の双眸で三人を睨み付けるように見ているながらも、深緑のスリー・ピースのスーツに濃紺のインバネス・コートという英国

紳士の出で立ちにまわりつくイメージは損なわれていないように感じさせる雰囲気
を醸している。

「迎えに来てやったぞ」

「ありがとう。あと三分遅かったらハチの巣だった」

「そうなったら、お前の死体には穴一つ一つにスズメバチを突っ込んでやる」

「嫌われてるなあ、僕は」

「見ない顔が一人増えたようだな」

神経質そうな表情が少しだけ和らいだ。淑女の前では紳士であろうという心がけは
あるらしい。

「紹介しよう」

口を開いたのはサイファーだった。

「この男はマクレガー・メイザース。英国の切り札、魔術卿と言われる男だ」

それを聞いてから、彼は恭しく一礼したのであった。

Happiness（殴り込みには黄金の二挺を）

飛行場から逃げおおせるまでに追手が来ることはなかった。

追うことを諦めたのか、それとも泳がされたのかは定かではない。フレデリカとして全社であつてほしかつたし、ヘンリエッタも同じだろう。サイファーは後者のほうがいいのかもしれない。

久しぶりのロンドンの街並みが見えるまで、時間はかからない。ガーニーはかなり快速で進んでいる。サイファーがハンドルを握っているせいだろう。どうも飛ばしたが、りらしい。

最後にロンドンを見たのは十五の頃だった。あの頃は自分でも心底恨みたくなくなるほどに無力だった。自分を捨てて、愛情も興味なく、打算でフレデリカを利用する義理の両親のもとに預けた、顔も知らぬ実の両親が憎かった。

アーカムに渡つて義理の祖父と二人暮らしになつてからは、心の故郷はアーカムだった。実の両親も、義理の両親も、親子のつながりというものは忘れ去つていた。自己防衛の一つだ。自分を追いつめるものに関する記憶など、さつさと忘れるに越したものはない。だから義理の両親から絶えず投げかけられた冷淡な視線、あれは選民を見る目だ

と察するほどの見下す眼差し。

——それを、ロンドンの街並みが思い出させる。

蒸気機関による煤煙の害は永遠の命題とされてきた。だが化学技術の発展が生んだフィルター上の触媒装置を、煤煙排出用の煙突に取り付けることで一気に空は青さを取り戻しつつあった。自分がロンドンを去ったころから比べて、ぐつと空は青く、そして空気は吸いやすい。

なのに、頭の中で写真の像が焼き付くように、瞬きながら何度も思い出される。

あの見下す眼が完全に焼き付いてしまつて、どうあがいても掻き消せない。

——消し去りたいのに。

——忘れ去りたいのに。

——風化させたいのに。

けれども、けれども。

焼き付けられた記憶は火傷に等しく、苛むように存在を主張する。それは身体の震えとなつて表に現れる。

ヘンリエッタはそれに気づいた。隣に座っているのだから、当たり前と言えば当たり前か。

「大丈夫かい？」

「だ、大丈夫です」

「乗り物酔いがぶり返した、というわけじゃなさそうだな」

さすがにサイファーにはお見通しだったらしい。ハンドルを握っている関係上、こちらを向くことはできないはずなのに。いつもは精神の繊細な機微や、心の浮き沈みには鈍いように見える。だが本当は気づいているうえで、あえて鈍いフリをしているのかもしれない。

「思い出したくないことでも、よみがえったのか？」

「……………はい」

「僕もそうだ。ロンドンに来れば、いやでも思い出すことがある」

「忘れられないのか、彼女のことか？」

「……………まあね」

やはりサイファーにも思い出さなくても、いやでも思い出してしまふことはあるらしい。誰だつて一つや二つは、そういうものを持つているはずだ。それは彼も例外ではないらしい。メイザースの反応からして、どうやら女絡みではあるらしい。

もしや痴情のもつれか。それとも叶わぬ想いでもあったのか。

きつと自分より人生経験があることは分かり切っているから、そういうことの一つや二つはあつても、まったくおかしくはない。むしろないほうが不自然だ。それは先入観

のようなものであつたし、同時に願望のようなものでもあつた。経験豊富な頼りがいのある存在だ、というイメージを抱いている。

「どのみち、どうあがいたとしても過去は変えられんよ。起こつちまつたことは、起こるべくして起こつたことなんだからね」

「でも……やつぱりちよつとだけ、つらいです」

「古傷を抉られるのがつらかつたら、真横にいる親友に慰めてもらうことだ。一人で耐えるよりは、きつと楽だ」

ヘンリエッタは手を握つてくれた。少しは震えも和らいだような気がしないでもない。

そんな余韻も見えてきたものが掻き消してしまつた。

「サイファーさん、あれつて……?」

「天下のリッツ・ロンドンだ。知らんのか?」

「いえ、知つてます、知つてますけど!」

「スイート取つてもらつているから。人生初だろお?」

もうひつくり返りそうだった。

英国王室から御用^{ロイヤル・ワラント}達を賜り、入場にはドレス・コードがあるほどの超高級ホテル。

それもスイート。いまだに庶民の思考が根強いフレデリカには、目の前が真つ暗になる

ほどの衝撃だ。

ヘンリエッタもなんか固まっているようだし。

「とはいえ、フレデリカは普通に行けそうだけど、僕とヘンリエッタはダメみたいだからな。ここは裏ルートで入る」

「お嬢さんたち、今から見るものは他言無用だ」

メイザースに釘を刺され、思わず口を覆った。

ガーニーはリッツ・ロンドンの裏手へと回る。そこには従業員と思わしき人間が、三人ほど待機している。ガーニーはリッツ・ロンドンの建物を向くようにして停止した。

すると従業員たちは、どこから出したのか暗幕のような布を持ってガーニーの周辺を囲む。次の瞬間、蒸気の排出音と同時に石畳の道路が陥没する。いや、地面そのものが昇降機と化してガーニーを地下に導いている。

止まった先は駐車場のような場所だ。いくつものガーニーが並んでいるが、どれも一目で高級車だとわかるものばかりだ。ぼんやりとした橙色の光を放つガス灯の明るさが、逆にガーニーの放つ高級感というものを引き立てているように見えた。

「ここは表立って招待できぬ人間を通すための裏口だ。今回のことは内密に頼みたいことだな」

「そりゃ穏やかじゃないな。どうも他国が攻めてくるというわけではないらしい」

「それなら貴様を呼ばん」

「それは一体、どういうことなんですか？」

「お嬢さんのお顔に免じて言っておくとすれば、外ではなく内側の問題なのだ」

「スパイでもいたのか？」

「実をいえば、内乱一步寸前なのだ」

ガニーを駐車したと同時に、全員が沈黙した。

「詳しい話は部屋でしよう」

そこから昇降機を通り、廊下を通り抜けるまでずっと無言だった。

スイート・ルームの煌びやかさも、まるで目に入らなかつた。

他国に比べて異常すぎるとさえ思えてしまう蒸気機関技術により、揺るがぬ盤石の体制を築いている大英帝国で内乱が起きるとは信じ難かつた。しかし、しっかりとした基盤の上にある平和を気に入らず、それを変革しようとする目論む人間もいるのかもしれない。

「事の発端は半月ほど前だ。極右政党の集会演説に武装集団が襲撃を仕掛け、死者三十四名、重体五名、重軽傷者二十四名を出す大事件が起きた。犯人たちは依然として不明だが、目撃者の証言では軍隊のような理路整然とした動きだったらしい」

「極右とはいえ右寄りの連中だぞ？ それに襲撃に手慣れているということは市街戦の

スペシャリストということになる。そんなのは近衛機関隊スチーム・ガードナーズか機関機動隊スチーム・コマンド、それか他の特殊作戦群くらいだ」

「そうだろうな。正直に言ってい舞えば、犯人たちの動機もわからん」

「きつとイかれ狂ってんだろうよ。どう考えたって正気の沙汰じゃあない」

「そんなわけはないだろう。もつと損得の絡んだ理由でなければ、特殊作戦群並みの戦鬪力を有する連中を動かすわけがない」

「どちらにしても、まったく手掛かりがないということですよね？」

「ああ、フレデリカ嬢の言う通りだ」

「そんな事件を僕らに丸投げする気か？ テムズ川の水と紅茶で頭でもイっちまったのか」

メイザースの告げた状況を整理すれば、指一つ動かせないほど何もわかっていないらしい。そんな状況でやとわれのサイファーたちにできることなど、何一つとして存在しない。

「そうだ。お前たちに依頼するのはイかれた作戦だ。ローラー作戦ともいうがね」

「つまり怪しそうなヤツを片っ端からぶちのめして来いと。大英帝国も大胆になったな」

「それは少し無茶ですよ」

「黙れ。ゴミだめを漁るのがお前たちの務めだ」

ここにきて本性を現したように感じられた。

メイザースから放たれるのは上に立つ者の風格。下で支えるものを意に介さず、容赦なく踏みつけることができる者の貫禄だ。大英帝国の中枢に立っているとでもいうのか。こうして依頼するために招いているのだから、おそらくは相当な地位に立っているはずだ。

サイファアの言っていた『大英帝国の切り札』であるがためか。

「へえ、そんなに僕が生きているのが気に食わんか？」

「……ああ、そうだ。飼い主を失った狂犬が、なぜ生きていられる？ 危険極まりない化

け物が、野放しになっている現状は、とても耐えがたいものだ」

「——さつきからッ！」

フレデリカがテーブルを叩いていた。

いつの間に淹れられていたのか、におい立つ紅茶の入ったカップも皿も宙を舞うほどだ。平手でたたきつけた手は小刻みに震え、怒りのほどを顕著に示していた。

「狂犬だの、化け物だの、あなたはサイファアさんの何を知っているというんですかッ！」

「この人は確かにひどい人かもしれないけれど、そこまで言うことはないはずです！」

「お、落ち着かないか」

ヘンリエッタの制止もあまり耳に入らなかった。とにかくサイファーをひどい言葉で揶揄した、目の前の英国紳士然としたメイザースが許し難かった。

ふん、と鼻を鳴らすと、

「何も知らんのは、君のほうだ」

「——ッ」

ぎりり、と齒噛みしてしまっていた。

その時にはメイザースはフレデリカに興味を失ってしまっていた。視線はサイファーのほうに向いていた。

「ここまでお前を思ってくれるお嬢さんがいるとはな。どんな手を使った？」

「なにも。お前さんとは違って、変な色眼鏡をかけていないのさ」

「色眼鏡、だと？」

「僕と同じくらいの活躍をしよう、なんて気負わなくてもいいのにね」

ぎりり、と今度はメイザースが齒噛みしていた。

確かに凶星を突かれたような顔で、憤怒に染まっている。

「そんなわけ、ないだろう」

「……ま、今はそういうことにしておいてやるよ。フレデリカも落ち着くこつた」

場に満ち満ちていた怒りはようやく鎮火したようだった。しかし、フレデリカの方は

いまだに小刻みに震えているし、メイザースの拳も流血せんばかりに握りしめられている。完全に消えてはおらず、燻ってはいるらしい。

サイファーは特に気に障った様子もなく断りもなしに葉巻を吹かしてさえている。

ヘンリエッタは混乱していた。主にフレデリカに関して。サイファー絡みの件で、なぜあそこまで激昂したのか。親密な仲とはいえ、こればかりはわからない。メイザースと同じことを聞いてしまいそうだった。

「ま、あまり情報をくれないのなら、こっちで好きにやらせてもらおうよ」

「どのみち、スマートにはできん貴様だ。あのリボルバーしかもっていないのだろう。こいつを持っていけ」

革のトランクケースをテーブルに置いた。

蓋をあげ放つてみれば、そこには二挺の銃が鎮座していた。七・五インチもの長銃身とそれに合わせたスライド。反動抑制のために、スライドの左右を切り抜いて穴をあけ、そこから銃身に開けられたガス・ポートが左右合わせて十八個もあけられている。ダブル・カラムの複列弾倉は十数発以上は余裕で納めるだろう。象牙のグリップ・パネルには奇怪な怪物が精魂込めて彫金されている。

「RS AFの技術者総出で作り上げた。お前のリボルバーには劣るだろうが、きつと名銃だ」

「……イヤミか、てめえ！」

確かに名銃であることはサイファアーも一目で見抜いた。だが、どうしても気に入らない一点がある。

「こんな金ピカ拳銃ひっさげて歩けってか!? 成金のバカ息子じゃねえか！」

「似合うと思ったんだがな、メツキは私が指定したんだぞ」

「おーし、わかった。試し撃ちの第一号はお前さんにしてやる」

言うやいなや、黄金に輝く二挺を手に取って、弾倉を銃把に叩き込む。

「サイファアーさん、落ち着いてください」

単なる偶然か。それとも運命なのか。

自分に『落ち着け』といさめた相手に、落ち着くように言う羽目になるとはフレデリカは思いもよらなかったのである。



アーカム第十二層。

ここには清濁併せ持った空気が満ちている、と表現する人間もいる。住みやすくもあれば、住みにくくもある。安全と言えば安全だし、危険と言えば危険だ。アーカムの光

と闇の狭間であるがゆえに、その両方を孕んでいるのだ。

だから、ここにはいろんな人間が集う。

この男がいても不思議ではなかったのかもしれない。

「イイ銃だなア。ええ、おイ？」

アーカム45——アーカム中層で出回っているM1911の違法コピー——をぶら下げるように持ちながら、ねつとりと絡むような口調で店主に語り掛ける。ここは中層の市場だが、露店で護身用の拳銃くらいなら取引されていたりもする。

アッシュ・ブロンドの髪は逆立て、鎖状のネックレスやブレスレットをジャラジャラとぶら下げている。見るからにパンキッシュだ。おまけにジャケットからストラックス、ブーツにチョーカーまで黒革ときている。完全にパンクだ。背丈は一八〇センチ後半くらいか。鍛え上げ、引き絞られ抜いた肉体美は見事なものだ。

この風体だけで店主は警戒していた。確かに怪しいと言えば怪しいのだが、もつと別の理由だ。このご時世でパンクが流行っている場所はただ一つだ。

——新大陸。

未だ大英帝国から独立せんと虎視眈々と目を光らせ、再起の炎を燃す。束縛を砕き、自由を求める流れにパンクが収まったのは当然と言えば当然か。であれば、最悪の場合にはアーカム中層を拠点にして大英帝国へのスパイ活動を行う新大陸のレジスタンスか

もしれない。

「ここが戦場になるほどの問題だ。店主はひどい冷や汗をかいていた。

「おい、弾もくれよ」

「お、お代はいただけれるんでしょうね？」

「心配すんなよオ、女王陛下なら束になるだけある」

「なら、いいんです。ええ」

「そうだなア………ちよつと試し撃ちしてみるか」

「え？」

銃把に弾倉を叩き込んだ瞬間が、店主の見た最後の景色だった。

レミントンM1860ニュー・アーミーが脳漿をぶちまけた。近くにいたアーカム統治局の保安官が散弾銃を抜こうとしたのを、彼は身体は動かさず、アーカム45だけを握る腕だけを動かして照準した。保安官の化学が吹っ飛び、お次は額に射入孔が開く。

市場は大混乱と化した。

「さあて、飛行場はどつちかなア？」

言葉の端々に抑えきれぬ狂気を孕ませながら、レミントンM1860を仕舞って、露店から失敬したもう一丁のアーカム45に変えて二挺拳銃のスタイルをとる。

保安官や流れのガンマンが集い、パンクの男を取り囲む。

「おう、いいねエ。まとめてかかってこいよオ」

次の瞬間、拳銃を乱射し始める。とはいえ、狙いを完全に定めていないというわけではない。むしろ、一瞬で照準を済ませて発砲している。たった一人に弾倉の弾丸を全部撃ち込むほどの勢いだ。

高笑いしながらの連射は当然と言えば当然だが、長く続くわけがない。あつという間に予備の弾倉まで使い切つて、二挺のアーカム45はホルルド・オープンして熱気を放っている。

「ありやあ」

「なんてマヌケだ」

「笑えるぜ」

嘲笑した保安官とガンマンの首が飛んだ。

男の手に握られているのは太刀と打刀。名刀であることは言うまでもない。

先ほどよりも凶悪な笑みを浮かべて、彼は獲物のほうを向く。

ジャケットの前をおもむろに開けた。そこに極彩色の刺青で書かれていたのは『I am John Do』の文字。それが鎖骨から股間のあたりまで、単語ごとに区切られて自己主張している。

それから二時間後、アーカムの飛行場から一機の蒸気圧式旅客機が飛び立った。

客室乗務員も、機長さえもいなかった。皆、物言わぬ。



一夜が明けた。

リッツ・ロンドンのベッドは相当に寝心地がよかった。フレデリカもヘンリエッタも大満足が継続している。

サイファアは別の部屋だ。男女が一緒というのは、やはり体面的には問題らしい。ただ、フレデリカにとってはヘンリエッタと一緒のほうが気兼ねしなくていい。

寝汗がひどかった。シャワーを浴びたくなる。

隣のベッドにいるであろうヘンリエッタはいない。シャワーの水音だけが聞こえる。お先にいただいているらしい。

汗を流せたのはそれから二十分後のこと。いつもの仕事着に着替える。

黒いコート、白のブラウス、濃紺のスカート。金糸のバラが映える白のストッキングは同色のガーターで吊る。コルセットでウエストを絞り、その上からさらに二挺を保持するためのホルスターも巻く。前屈と背伸びをして、動きやすさを確認した。

最後に腰まで届く長さの金髪を、青空を映したようなりボンで結わえる。これで完成

だ。

「さて、どうしようか？」

ヘンリエッタが問いかけてきた。恰好はいつもとそんなに変わらない。長袖のブラウス、茶色のベストを着て、黒いスラックスだ。茶色のボブは潤いを得て、その艶を三割増したように見える。そしてフレデリカは見上げねばならないほど長身だ。一七五センチは優にある。充分に見目麗しい女だ。

「とりあえずサイファーさんのところに」

「そうだろう。だいたいのは、決めているのだろうから」

ということとサイファーの部屋の前に来たのだが、さつそく歩みを止めてしまった。

叫んでる、すごい叫んでる。

大声で誰かと電話をしているようだった。リッツ・ロンドンの部屋は防音性は抜群なのか、誰も飛び出してこないのが不思議だった。もしかしたら、このフロアに宿泊しているのが、自分たちだけの可能性があるが。

おそるおそる、三回ノック。たしか三回が作法だった気がする。

返答はない。大声だけが聞こえる。どうも聞こえていないらしい。

思い切つて扉を開けた。鍵は掛かっていない。

「なんつくソツタレだ。アーカムの市場を真っ赤に染めて、何がしたかったんだよ」

「あの……サイファーさん？」

「ああ……悪い、驚かせたな。ワイアットから連絡が来てな、アイツにはめぼしい連中のことを調べてもらっていたんだが、昨日のお昼ぐらいにアーカムの市場で銃を乱射したバカがいたらしい。保安官七名が死亡。目をかけていた荒事屋のガンマンは十人も死んだ。これがどこぞの組織の差し金だったら、とつくに戦争が起きてる」

「そんな……犯人はどうなつたんですか!？」

「ワイアットが現場に急行した時には、残っていたのは死体だけだったらしい。吐くほどグチャグチャだったそうだ」

「ひどいものだな。何を考えているんだ、その犯人は?」

「たぶん色々つぶつ飛んじまってるんだろうよ。ただ、悪い知らせばかりでもない。ロンドン中のギャングやマフィア、過激派政治団体をワイアットに洗ってもらったおかげで、第一の調査対象の目星を付けることができた」

ニヤリと不敵な笑みを浮かべながら、数枚の写真をテーブルの上に並べる。

どこかの会館の写真だ。相当大きい。階層は五階もある。

「後ろ暗そうな連中が何人も出入りしてる、デカイ貨物を大量に運び込んでいた、行方不明者が出入りしているのを見た。とにかく怪しい噂が絶えないところという話だ」

「それって……ただ疑わしいだけですよね?」

「なに言つてやがる。疑わしきは五臓六腑まで見るのが常識だろ。クロだったら、ぶちのめす。シロだったら、腹いせにぶちのめす。相手がごねようもんなら、黙らせるためにぶちのめす。ま、いつも通りって話だよ。それに突入するときの建前だつて用意してある」

「ああ、まったく腕が鳴るといふものだよ」

「え、ヘンリエッタはそういうタイプでしたっけ?」

指の骨を鳴らし始めた親友に、フレデリカは戸惑いを隠しきれない。どちらかと言えば理性的だと思つていたヘンリエッタが、実は手のほうが先に出るタイプだということは今更ながら認識した。サイファーという比べ物にならないくらい、とりあえずぶちのめすという特級と比較していたのがマズかったのかもしれない。

こうなつてくると、本当にストッパーになれるのは自分しかないんじゃないか。そんな危機感を抱いてしまう。

「作戦だけど、僕は正面から行く。そうなるとひどい騒ぎになるだろうから、その混乱に乗じてヘンリエッタは屋上から、フレデリカは裏口から突入しろ」

「抵抗したら?」

「武装要員は殺つちまえ。非戦闘員は巻き込まれちゃ寝覚めが悪いんで、適当に気絶させるなりして無力化すること」

「目的地は、どこになるんですか？」

「ワイアットが調べた限りじゃ、デカイ地下空間の存在が確認できているらしい。ひとまずはそこを目指そう」

「本当にキナ臭いな」

「一体、何の施設ということをやっているのかねえ？　ここまで怪しいと逆にシロに思えてくる」

「行つてみなければ、そんなのわからないと思いますよ」

そのフレデリカの言葉で一行は移動することにした。

ガーニーの中で車窓から件の建物を、三人して張り込んでいたのであった。

人通りもそれなりにある中、その建物だけは何か妙な雰囲気というべきものを放っている。たとえるなら白いシートに一滴だけ落ちた黒いインクの染み、白い羊の中に一匹だけいる黒山羊。何かが異端と言つていいのだ。存在してならないような気がする。そういう思いに駆られるのだ。

「アタリな気がするんだが」

「私もそう思います」

「キナ臭い感じがプンプンする」

その異様な雰囲気というものを三人とも感じ取つたらしい。

フレデリカとサイファーは銃の遊底を引き、ヘンリエッタはナイフの調子を見ている。

そのとき、建物から壮年の男が出てきた。割と頭髮が寂しい感じだが、瞳には溢れるほどの生気が満ちている。くたびれた見た目とはアンバランスなエネルギー感を感じさせる。

「ちよつと声かけてくるわ」

「え、あの人にですか？」

「二人とも、一応ガーニーから降りとけ」

そのまま、割と大腿で男性に近づいていく。

「あー、ちよつといいかい？」

「ん、なんででしょうか？」

男は見た目からは想像もつかない、明朗とした丁寧な口調で答えてくれた。擦れているところなど一切感じさせない。

「ここつて、いったいどういうところなんだい？」

「ああ、あそこは『幸福な社会を求める会』の会館ですよ。もつとも、割と最近になってきたところなんです。私もちよつと前に入会したばかりなんですが」

「ここでサイファーは男の口から『幸福』というワードが出た時点で、カルトのにおい

を感じて内心げんなりしていた。

——やだなあ、カルトは話し通じないし、いい気分では仕事できないんだよ。

とは言え、気持ちよさそうに話す男を邪険にできそうにはない。心は痛まないが、体裁が悪い。

横目でフレデリカとヘンリエッタのほうを見れば、生暖かい視線を感じる。睡が無性に吐きたくなった。

「そうだ、今から私と一緒に講義を聞きに行きませんか？ 今の社会に存在する理不尽な苦しみを何としても取り除かねばならない、そのための危機感というものに目覚めるはずですよ！」

「いや、その、気持ちはうれいんだがな……僕には——」

「ささ、早く行きましょう」

思った以上に男には力があつたらしい。否応なしにサイファーは会館の中に引つ張られていく。

ちら、と二人のほうを見たらヘンリエッタはすでに腹を抱えている。減給を心に決めた。

会館の中は外とは裏腹に、暖かで明るい印象を与えさせる。暖房機関が程よく働いているおかげか、ロング・コートを脱がずとも暑苦しさを感じない。かと言って肌寒さも

ない。

天井を見れば、ステンド・グラスまではめ込まれていた。暖かな雰囲気の原因は、ここから来ているのかもしれない。日輪をモチーフにして、陽光が降り注ぐ構図で描かれている。

——たしかに、陽の光に当たっていれば幸せになるかもしれないが。

——ずっと浴びてると、暑苦しいだけなんだよ。

階段を上がって二階。そこからすぐの部屋が講堂だった。かなり広く、百五十人くらい収容しても余るくらいだ。

「お好きな席にどうぞ」

「んあぁ……………」

ここまで来たのだから、ちよつとぐらい講義を聞いていてもいいだろう。そう思つて一番出口に近い席に陣取つた。

それから二十分ほど経つたか。行動は

えらく恰幅のいい男が登壇する。体格も上物のスーツに負けないほどのポリウムで、首に至つては垂れた脂肪と革で埋没しているような状態だ。浮かべている笑顔は非常に穏やかそうな性格である、という印象を抱かせる。

「みなさん、ごきげんよう」

軽い挨拶から講話が始まった。

扉に鍵がかけられた。その向こうに人の気配を感じる。

「いいですか？ 幸福の始まりは平等から始まるのです。占有は決してしてはならないことだ」

軽く聞き流す。

腕も足も組んで、完全に聞く気がない姿勢を作ってみた。

壇上の演説者は気づいていないようだが。

「金銭は悪だ。格差を生む」

軽く聞き流す。

こっそり女王陛下ポンド紙幣の束を数えてみる。

「暴力はいけない。弱者を踏みつけることは、人としてあってはいけない。そんなことをするのは化け物だけだ」

大あくびしてみた。

面白いぐらい演説者は気づいていない。

「政治家や貴族が政治を取り仕切るのは終わりにしましょう。国民の総意で国を動かすのです」

メイザースは元気かなー、と鉛色の空を窓から見上げた。

「我々、『幸福な社会を求めるとは』はすべての人が理想的な幸福を得ることに……どこへ行かれるんです？」

サイファーはついに我慢できなくなった。

「シヨンベンに行くんだよ」

「なんですか、それは？　幸福を求めるとは研鑽の心が足りない証拠です。そして得たものを分け合い、等しく幸福になる。すばらしいことだとは思いませんか？　それを尿意一つで目覚めの講話の途中で席を立つとは——親、見ない顔です。何者ですか？」

「ああ？　僕はためえらみてえなカルトぶつ飛ばしてぼこぼこに殴って鉛球しこたまぶち込んだ後、政治家と貴族から女王陛下の束をもらう幸福の独占が生きがいのアーカムから来た荒事屋だ」

カルト、と言ったあたりから演説者の額には青筋が浮かんでいた。

「ええい、こうなれば教育です。金と暴力と淫楽に染まった心を、浄化して差し上げなさい！」

扉が跳ね開けられた。

黒いスーツの二人組が現れた。ガタイはかなりいい。身長は一九〇を優に超えて二メートルに差し掛かろうとしているし、体重も軽く百キロはあるはずだ。

一人が踏み込みと同時に電光石火のボディ・ブローをサイファーに打ち込んだ。

普通の男ならこれで何もできなくなる。最悪、内臓が破裂する。

だが、この男は違う。

「ありがとよ。これで、あおいこだ」

軽く突き飛ばすように、平手で押した。

それだけで二メートルに迫る巨躯が吹っ飛んだ。もう一人は吹っ飛んだ相棒を呆然と目で追うだけだ。そのまま窓を突き破って、たまたま運悪く駐車していたガーニーの上に落下する。屋根はへしやげて、窓ガラスは爆発したように粉碎されて、破片が飛び散った。

ここで、もう一人が踏み込んだ。頭部狙いのハイ・キックが喰る。

「軽いな」

その蹴り足をサイファアは難なく掴んでいた。ネギの頬を束ねてへし折ったような音が響く。追って男の絶叫が響き渡った。男の脛は握りつぶされ、完全に修復不可能だ。

「オラ、退場しろ」

そのまま、吹っ飛ばした男がいるほうとは反対側に投げる。モルタルづくりの壁だ。投げ飛ばされた巨体は堅固な壁を砕くための質量弾と化し、自ら開けた大穴から地上に落ちていった。

「この化け物めエー！」

演説者は銃を抜いた。小さなリボルバーだ。口径は九ミリもないはずだ。発射された小さな礫を首を傾げるだけで避けた。

「大正解」

その両手に握られていたのはメイザーズからの二挺。黄金に輝くロング・スライド・カスタムのアーカム45を、両手を交差する形で構えていた。機関銃かと思うほどの連射をサイファーは放つ。一挺に左右九個ずつ開けられたガス・ポートから白煙が上がるほど撃ちまくる。

血肉と脳漿で不可解な凶を背後に描いた演説者が倒れた瞬間、聴衆は一気に恐慌した。

「うわあああああああ!!」

「に、逃げろお！」

「助けて、人殺しよ！」

我先にと出口に殺到する。その過程で老婆を突き飛ばそうが、転んだ女を踏みつけようが、恐慌に入った人々は逃げることしか頭にない。その様は、あまりにも滑稽で。

「みんなして我先に逃げるかね。幸福は分け合うもの、という教えはどこに行ったんだよ」

多くの気配がここから去っていき、新たな大量の気配がこちらに向かってきている。

「Come On Scumbags」
来、い、よ、ケ、ソツ、タ、レ、共

Action 伏魔の領域は地の底に

銃声が響く。

——何度も。

——何度も。

会館から人々が逃げていく。どれも一般人だ。

入っていくものは明らかに普通の人間ではない。裏に身を置く、暴力が飯の種という人種だ。

乱暴言わなくても、フレデリカにヘンリエッタと同じ人種ということになる。

「さっそくやらかしたようだね」

「人が二人も二階から降つてきて、さらに機関銃並みの連射で発砲。どう考えても増援が来ますよね」

「わかりやすい合図だね。では所定の位置に着こうか」

ヘンリエッタは近くの建物の水道管を足場に、周囲の目を引かないように登っている。長身のわりに細身なおかげで身軽なのか、危なっかしさは一切感じられない。あれよあれよという間に屋上に上り、そこから一足飛びに建物との間を飛んで会館の屋上に

陣取った。

フレデリカも裏のほうへと回る。これだけの騒ぎにもかかわらず、警察が動いている気配は感じられない。サイファーが事前に根回しでもしているのか。そう思いながら裏口へ回れば、拳銃で武装した黒服が入り口を固めている。

身を躍らせて、狙いを素早く定める。フルオートで弾丸をばらまけば、男たちは不可視の巨人が剛腕を振るったように吹っ飛んでいく。

体当たりで裏口の扉を吹っ飛ばす。左にいた男に鉛弾をぶちこんだ。散弾銃の引き金に指をかけていたのだから、まったくもって当然の対応だ。

マウザーC96めいた形状の『A l l I n O n e』を横に構える。フロアに大勢いる拳銃をこっちに向けている男たちに、発砲の反動を生かしながら薙ぎ払うようにバラ撒く。そのまま勢いを利用して踏み込むと、近くの柱に身を隠す。

撃ち漏らした敵が火線を展開する。隠れ場所と遮蔽物を兼ねた柱が、砕かれて粉塵となり、宙に舞う。視界がけぶって、男たちの姿を隠す。

二挺の銃身とスライド、額に当てるように構え、深呼吸する。意識を研ぎ澄ます。

銃声の数——たくさん。

銃の挺数——およそ四つ。

銃の種類——大型リボルバー、中口径自動拳銃、大口径短機関銃、十ケージ二連散弾

銃が各一挺ずつ。

—— 突破は、容易。

「行きます」

自分に言い聞かせるように、独り言つ。弾倉を箱型の弾倉から、円筒弾倉へ変えた。これで弾数は二倍近くになる。具体的には『All In One』で四〇発、『One In All』で三三発となる。

地面を蹴り付け、側転の要領で飛んだ。回る視界は狙いを付けづらいが、宙を舞うフレデリカに狙いを定めるのは容易なことではない——ただ一つの武器を除けば。

狙うべきは——散弾銃！

上下に二本並んだ銃身、そこから放たれる十ケージもの大口径散弾はロクに狙わなくともフレデリカの身体を射線に捉えるはずだ。よく狙えば必中だ。ホーレス謹製のナポレオン・コートの意匠を孕む黒いコートは、ライフル用三〇口径強装の徹甲弾さえ余裕で防いでしまう。だが衝撃は防ぎきれないから、一発でも食らって姿勢を崩してしまえば、そこから命中弾を雨霰ともらってしまう。今は宙を舞っているのだから、なおさらだ。

二挺の三連射はすべて命中した。頭に二発、胸に一発。脱力した脚は支える義務を放棄し、男の身体は奇怪な踊りのように崩れ落ちていく。すでに遅延された世界の中にい

たフレデリカの視界で、それはやたらと際立って見える。

今度は短機関銃を携えた男の眉間に四発も撃ち込んだ。細かい肉片と血飛沫が爆発したように飛んでいく。

最後の残る二人。大型リボルバーの撃鉄はすでに起きています。中口径自動拳銃の引き金には、指がかけられていた。あとは狙いをすまして、フレデリカを撃つだけとなっている。

対するフレデリカは並べるように構えていた二挺の感覚を、少しずつ開けていく。そして、止めた。

着地すると同時に発砲する。両者の発砲は同時だった。フレデリカは二発ずつ、男たちは一発ずつ。

熱い鉛弾が頬を掠め、黄金を紡いだ金髪をなびかせる。そして、男たちは脳天に射入孔を開け、ゆっくりと崩れ落ちていった。

「……増援!? 一難去つてまた一難、ということですか」

列を成してやってきた増援に向かってフレデリカは二挺を構えたまま、全速力で駆け出す。

片膝を着いて、立ったまま、通路をふさぐように様々な姿勢をとった男たちが発砲を始めた。濃密な弾幕は鉛製の死のヴェールとなり、殺気は質量を持つてフレデリカを真

正面から叩く。

フレデリカは双眸の力を最大限に使う。不可思議な力を己に与える黄金の双眸は、フレデリカ感覚に干渉し、弾丸の速度を遅延させる。その中で彼女だけが平素と変わらぬまま動くことができる。傍目には瞬間移動と同じように見えるかもしれない。

撃ち落とすべき弾丸には弾丸を以て応酬し、それ以外は射線から己の身を逸らすことで対処した。単純に走っているように見えて、弾幕の中から弾くべきものを弾き、男たちに弾丸を撃ち込んでいく。それだけの高度な戦闘行動を行っているのだ。

男たちが一人、また一人と倒れていけば弾幕は薄くなる。そのまま突っ切れるか、と思つた時だつた。

新たな男がやってきた。その手には異様に巨大な散弾銃が握られている。ポンプ・アクション方式のシンプル故に堅固な造りの。それは大型の肉食獣を狩るときに使う口径四ケージもの怪物銃だ。対人戦ではまず使われるはずのないものに、ついに自分もここまでされるようになったかと自嘲してしまふ。

巨銃が雄たけびを上げる。拡散し、散らばっていく弾丸をフレデリカは飛び越えた。二挺を構えて、姿勢を逆転させた。空中で上下反転したまま、真下へ向けて乱射する。

鉛弾が全身を食い破つて、ズタボロにする。フレデリカは反動を生かして、体勢を元に戻す。そのまま正面に向けて引き金を絞る。

通路をふさいでいた男たちも六人になったところで、二挺は沈黙した。両方ともホルド・オープンし、フレデリカを一気に窮地に叩き落す。それでも彼女は慌てることはなかった。着地した衝撃で散弾銃を舞い上がらせ、見事にキャッチした。まだ一発も撃つてないが、四ケージという大口径故に弾数は少ないはずだ。初弾は装填されている。

発砲した瞬間、銃床を通して恐ろしい反動が来て、思わずたたたらを踏みそうになる。フォア・エンドをコッキング出来たのは、今までの実戦経験から成せた技か。その反動に恥じない威力で二人もまとめて、散弾は吹っ飛ばした。もう一度引き金を絞って、もう二人を片付ける。三度目は一人だけだった。残る一人が後退したために。

散弾銃の弾は尽きた。惜しげもなく投げ捨てると、残る一人に向けて走る。

レマツト・リボルバーの銃口がいやでも視界に移って、ひどく際立つて見える。

放たれる八発の弾丸、それから六三口径の散弾までフレデリカは避ける。前蹴りを鳩尾に叩き込むと、そこを支点にさらに上へと飛翔する。側頭部への蹴りを叩き込んだとき、壁にめり込むほど吹っ飛んだ。もうもうと立ち込めるモルタルの破片から生まれた煙が晴れたとき、男は再起不能となっていた。

二挺の弾倉を排出したとき、殺気を感じた。

倒したと思っていたのに、一人の男が立ちあがっていた。その手にはコルト・ドラ

グリーンが握られている。あれは大口徑だ。食らえば防弾でも骨にヒビが入る。

一挺だけでも弾倉を込めて、遊底を引いて初弾を装填しなければ。それは時間との勝負、目の前で自分を狙う男との速さ勝負だ。それもフレデリカに相当不利なハンデがある。

照準まで間に合うか。

それはドラグリーンが天井に向けて発砲された瞬間に決した。男の眉間にはスローイング・ダガーが深々と握り手のあたりまで突き刺さっている。

「九死に一生だったね」

「ヘンリエッタ!? 屋上のほうは大丈夫なんですか?」

「連中はサイファアのほうに行ってしまったらしい。おかげで楽なものだったよ」

「ケガがなくて、なによりでした」

「フレデリカのほうが屋上のほうに行ったほうがよかつたんじゃないかな?」

冗談めかして、はにかみながら言った言葉にフレデリカは同じように返した。

「私、スカートですから。あんなふうによじ登っていったら、見えちゃいます」

「そうだね。あんな清纯な雰囲気にして、けっこう布地の面積が少ない白のレースなんて見られたら憤死モノだ」

フレデリカは一気に真っ赤になった。いつ見られていたんだ、と思ったがリッツ・ロ

ンドンでは同室だったから見られていても仕方がない。ただヘンリエッタのどこか見透かしたような笑みが、妙に引つかかるだけだ。

「さて、あんなのを誰に見せる気なんだか」

「そ、そんな人いませんから！」

否定すればするだけ怪しまれる、とはよく言うが否定せずにはいられなかった。



黄金メツキ・長銃身のアーカム45を二挺携えて、サイファーは講堂から飛び出した。左右から殺到する男たちに、クロス・ファイアの四五口径を連射する。弾倉内の弾丸を撃ち尽くすほどの勢いだ。それでも連射は途切れることなく、ホールド・オープンしたところには全員が物言わぬ状態となっている。両方まとめて弾倉を排出すると、右手の一挺を口に咥え、左手のほうに弾倉を込め、スライド・ストップを開放して初弾を装填する。そして口に咥えているほうを、そのままの状態で装填し、持ち直してから同じように初弾を装填する。

二挺拳銃のスタイルをとる以上、再装填の問題はどこまでもついて回る。

フレデリカは割と細かく弾数管理を行っているのか、それとも臨機応変に戦っている

のか、弾切れで困ったようなことを一度も言ったことはない。気を遣っているだけかもしれないが。

しかし、サイファーは本来であれば色々と規格外の超巨大リボルバーを用いるのが常だから、二挺だとしても調子が狂う。とはいえ『Howler In The Moon』はアーカムの中や人外相手だからこそ使用ができるようなものであり、ロンドンの街中でぶっ放す気にはなれない。

「さて、地下はどこにあるのかなあーつ、と」

廊下を曲がったところで待ち伏せていた男に、六発もぶち込んだ後、雄たけびを上げて突っ込んできたナイフを両手に携えた男に回し蹴りを叩き込んだのちに、脳漿が吹き飛んで世界地図を描くまで撃ち込む。

「こつちだ、こつちにいるぞー！」

「来るぞ来るぞー！」

慌てた様子で増援を呼ぶ男たちに、
「行っちゃうよー」

そう軽い調子で返す。

大挙してやってきたのは拳銃で武装した男たちだ。ずいぶんとなめられたものだ、と嘆息する。

複数の銃から放たれる濃密な弾幕、それらが頬を掠めてもサイファーは涼しい顔だ。死と隣り合わせの状況、ギリギリの立ち位置というものを楽しんでいっているのか。なかなか倒れないサイファーに反して、男たちは着実に数を減らしていく。

「まったく、こういうペテンたちは烏合の衆をかこっているのが定石だが、ここまでお決まりだと笑えてくるぜ」

「機関銃だ！ 機関銃を持ってこい！」

持ってきたのは水冷式のジャケットを銃身に装備した、三脚架に据え付けられた機関銃。どこまで伸びているのかわからないほどの弾薬帯を機関部から伸ばし、あとは引き金を引かれるのを待つだけとなっている。

ヴィッカーズ重機関銃だ。最近になって大英帝国の陸・海・空軍に採用された最新式だ。非常に耐久性の高い構造で、拠点防衛用に据え付けられたり、兵器に搭載されたりと幅広い形で運用されている。しかし、一人に使うにはオーバーすぎる。

「こりゃヤバ……うおつと！」

首を傾けた途端、顔のあった位置をライフル弾が通り過ぎる。男たちも武器を変えたらしく、名称もわからない安物のリボルバーや自動拳銃から、M1911やブローニングM1900に加えてリー・エンフィールド小銃まで持ち出してきた。本気になってきたということか。

しかも、通路には身を隠せるような場所はない。一本道だ。

二挺を仕舞う。右手を広げると渦巻くような闇が展開し、サイファーはそこに手を突っ込む。現れたのは愛用の野太刀だ。黒塗りの龍の彫刻がされた鉄拵の鞘、赤銅の柄頭と銀に光る鍔の彫金は生唾を飲みそうになる。

それをサイファーは抜き放つ。刃渡りおよそ五尺という野太刀だが、この男が振るう分には妥当な気がしないでもない。それほどの長物を構えて、挑発する。

「来いよ」

その言葉と同時に一斉に発砲された。中口径拳銃弾からライフル弾までバリエーションに富んだ弾丸が、サイファーの命を奪わんと一気に迫る。その大量の死の御使いをどう捌くというのか。

抜き放たれていたはずの長大な刃はかすんで消える。その名残はサイファーの目の前で火花を散らして叩き落される弾丸によって存在を主張している。野太刀は高速回転して盾となり、数多の弾丸を叩き落としているのだ。

「……………化け物かッ！」

「その通り。心して相手してくれよ」

吐き捨てた男の首が宙を舞う。認識をはるかに超える速さでの縮地からの抜刀斬り。返す刀での二撃目は男とヴィッカーズ重機関銃を真つ二つにする、

瞬く間に総崩れとなったが、あまりにも遅すぎた。一番遅い者は振り返る暇もなく斜交いに一閃され、一番早い者でも心臓を一突きにされて、そこから振り上げる一刀で両断された。ぶつ切りになった死体は凄惨さだけを場に残す。

チン、と小気味よい鏗鳴りを立てて納刀する。

「なんだ、あつけない」

失望をたつぷり含んだ声はむなしく響く。

「さて、背負い太刀は趣味じゃないんだが……そうも言つてられんか」

サイファーにとつては片手で持てる野太刀だが、その刃渡りの大きさからかなりかさばる。背負い紐で普段から野太刀を扱っている右手とは逆の、左肩から柄が来るようにして背負う。こうすれば腕の関節だけではなく、肩の関節も使えるのでスムーズに抜刀することができ、練習は必須だが。

それから地下を目指して、いくつもの階段を降りた頃。とつくに窓はないことから、完全に地表の下に来たことは間違いないと踏んでいる。

地下三階——その表示を見たときに、確信が変わる。

地下鉄のプラット・ホームを彷彿とさせる場所だ。現に線路はあるが列車が存在しない。まだ来ていないというのか。

場所はかなり広い。これだけ広ければ、人も貨物も積み込むのには苦勞しないだろ

う。サイファアの視線はホームの真ん中あたりを射抜いていた。

「いるのはわかっている。おとなしく出てこい」

空間が歪む。ねじくれて、かきませたように歪んでいく。

現れたのは黒い長衣の男たちが三人。その手には凶悪な輝きを放つ両刃の片手半剣バスタードソードが握られている。

「数式迷彩か。こりゃわかんなくなってきたな」

そう言いつつサイファアは三人に向けて発砲する。両手のアーカム45での連射は機関銃の掃射に匹敵する。相手が常人であれば死は免れない——常人であれば。

弾丸は何も傷つけなかったのだ。男たちも周りの地面も。

三人一斉に剣を握っていないほうの手を開く。へしゃげた弾頭がむなしく地面に落ちた。弾丸すべてをつかみ取った手は黒ピカリする、鋼で覆われているように見える。だがサイファアはそれが籠手の類ではない、正真正銘のうでなのだという確信があった。

「最新式の機関兵士か。ほとんど人間と変わらないところまで来るとは……………やつぱり世の中は面白いことで溢れている」

そう目の前の三人は人であって人ではない。総身は肉をほとんど捨て去り、高度な精密機械に置き換えられている。その所作が筋肉繊維ではなく、蒸気圧駆動のピストンと

ギアとカムの組み合わせだと誰が気づこうか。それほどの滑らかな動作に反して『ベツド・ルームまでついていける蒸気重戦車』とまで言われる戦鬪力を秘めている。

鋭い両刃の剣を構えだすと同時に、サイファーはコートの内から愛銃を取り出す。あまりにも規格外に巨大な七〇口径もの魔銃『Howler In The Moon』を抜いたので。ここは地下の上に、相手は人をやめた存在。ためらう理由は存在しない。アーカムと同じようにぶつ放すことができる。

「少しは楽しませろ」

機関兵士は地面が抉れ飛ぶ勢いで踏み込んだ。音を優に置き去りにするほどの速度に乗せて放つのは、両刃剣による乾坤一擲の突き。それがタイミングをずらしての三連撃となつて襲い掛かるのは、悪夢と言つてもいい。ただ、それは空を切つて、何の手ごたえも彼らに返さなかった。

二メートルを優に超えるサイファーの巨軀は、見た目に反した身軽さで三人を飛び越えたのだ。そこから巨銃を三連射するも簡単に躲されてしまう。装甲と馬力に重点を置いた機関騎士とは違い、機動性と反応がウリなのだろう。これを捉えるには機関銃群による一斉掃射ぐらいしか手がない。

「なかなか面白いじゃないか」

今まで右手で持っていた『Howler In The Moon』を左手に持ち替

えると、右手と巨銃を握ったままの左手で器用に野太刀を抜刀する。抜き身の刀身に黒いモヤがかかり、晴れたときには鈍色の刀身は漆黒に染め上げられていた。

今度は一人ずつ連携をとって、サイファーに突貫する。

真正面から真一文字の振り抜き、左側面からの切り上げ、右後方から跳躍しての大上段。前者の二つは同時に、遅れて最後の飛び上がりの大上段が叩き込まれる。

それをサイファーはどう迎え撃つのか。

漆黒に変じた刀身は片手半剣の刃二つを、ほぼ同時に弾き返す。厚さ三〇ミリもの装甲すら叩き切る一閃を、片手で弾き返す脅力を巨軀に秘めているというのか。

遅れて打ち込むはずの三人目は空中で致命的な隙を晒す。宙に飛んでしまった以上、もはや身動きは取れないと言ってもよかった。彼に向けられたのは『Howler In The Moon』の奈落を思わせる銃口。とっさに剣で防御の構えをとる。

巨弾は片手半剣に直撃した。その衝撃で地下の天井に彼は激突し、一切の行動を封じ込められる。無防備に落下しようとした瞬間、漆黒の闇が一閃となる。

一刀両断。頭頂から股間まで一息に、あまりにも呆気なさすぎると感じるほど真つ二つになる。わずかながらの血肉とおびただしいほどの生命維持に所作・動作をつかさどっていた精密部品がばらばらになって、瀑布のごとく降り注いだ。

「まずは一人目、と」

銀灰色の双眸が残る二人を見据える。

その時だ。はじめて機関兵士が言葉を紡いだのは。

「シャトレ式数式図、起動」

歯車の擦れ合うような、耳障りな声を発すると同時に、黒の長衣に青白く数式が輝く。基底現実で起こっている様々な事象に、いかなる数学的過程があるかを解明。緑鉱石と赫鉱石を用いて超常現象を起こす基本原理はダフィット・N・ヒルベルトが考案し、それをさらに発展させたのはエミリー・デュ・シャトレの血族ともいわれている。

こうして数式を目の前で扱ったのだから、おそらく機関兵士は超常の理に身を置いたはずだ。

手に握る片手半剣も何かが違う。

サイファーは『Howler In The Moon』をコートの裡に仕舞い込む。

野太刀を納刀し、抜刀術の構えをとる。

機関兵士の踏み込みは消失と言っている。一瞬で視界から消え失せ、音速突破の証拠である衝撃波と円錐雲を生じさせながら、複雑な三次元機動で肉薄せんと迫る。

「いいぜ、まとめてぶった切ってやる」

猛烈な勢いでの踏み込みからの居合。本来であれば納刀状態からの素早い対応、さらなる連撃という非常時の技術だがサイファーの場合は違った。納刀により総身の力を

溜め込み、抜刀によって解き放つ特異の一閃となるのだ。それは両手で太刀を握り込み、大上段からふつた時の剣速をはるかに超える。

無論、既存の居合というものが連撃を重ねるといふ思想のもとに成り立っているのであれば、サイファアのそれも準拠する。ただし、重ねられた太刀がいかなる軌道で、どれだけ振るわれたのかを窺い知ることはできない。刃渡り5尺物の太刀はわずかに見える漆黒の剣閃だけを残して、尋常の世界から姿を消したのだ。

機関兵士はぶつ切りだった。両腕を失い、下半身とも別れを告げたほうが渾身の力で言葉を紡ぐ。

「まさか……………剣のほうか、得手だった……………のか？」

「まあね」

さも当然と言わんばかりの返答に、機関兵士は目を剥きながら絶命した。

まさかガンマンとしか思えない風体でありながら、実際は剣士だとは誰も思わないはずだ。銃の腕も一流なのがそれに拍車をかけているが、ひとたび剣を握ったとなると超一流の実力を示す。

「しかし、機関兵士に数式技術……………一体、何を相手にしてるんだ？」

あごに手を当てて思案してみても、ほとんど何もしなかに等しかった。

全容どころか輪郭も、尻尾も捉えられない巨大な組織の影を、サイファアはひしひし

と感じているのだった。



それから十分ほど経った頃。

バタバタとした足音が地上のほうから降りてくる。人数はおよそ二人。

自分が下つてきたほうに視線を移せば、見知った二人が降りてきた。

「僕が一足早かったらしい」

「ここを探すのに、ちよつと迷ってしまつて」

「誰かさんが暴れてくれたおかげで、移動は楽だったけれどね」

「僕の専売特許だからな、暴れるのは」

フレデリカとヘンリエッタがやってきたのだ。その間、サイファーはほとんど待ちぼうけみたくないものだったが。2人は、この地下空間の大きさに気圧されているようだった。無理もない話だ。女王陛下のお膝下、大機関議会の統治下にあるロンドンで極秘裏に地下鉄を通すなど正気ではない。

フレデリカはバラバラになっている機関兵士の死体に気づいた。

「サイファーさん、あれは……」

「身体のひとつと精密機関に置き換えた、機関兵士つてやつだ。たぶん最新型だな」
「敵は国家レベルかもしれないということかい？」

「僕もお前さんたちが来る間、ずっとそれを考えていたんだ。どこかの国が諜報活動しているのか、それとも獅子身中の虫というやつなのか、皆目見当がつかん」

「裏切者がいる、ということですか？」

「あくまでも可能性。0じゃなければ、なんだつてあり得るんだ」

「とりあえず地下の探索に移ったほうがいい。ここで止まっても、らちが明かないだろう」

「賛成。どこから調べようか」

その時だ。蒸気を噴出させながら、巨大な鉄塊がやってくる。車輪を線路に軋ませながら、目を見張らいたように前照灯を灯して疾走する。蒸気機関車だ。陸運の主流である。煙突からの排煙は空調機関によって、人知れず地表に排出されているのだろう。

列車の構成はほとんどが貨物車だ。鈍色のコンテナを積み込んでいて、それを守るようにトンプソン短機関銃やブローニング自動小銃といった強力な火器で武装した男たちが守っている。

無論、彼らが三人に気づかないわけがなかった。

「散らばれ！ 散らばれ！」

サイファアのかげ声がなければ反応はきつと遅れたはずだ。

一斉に撃ちかけられたのを回避できたのは、奇跡的な確率だった。

人並みの体格を持つヘンリエッタとフレデリカは、何とか弾丸を凌げる遮蔽物に身を隠せたものの、サイファアだけはどうしようもなかった。迫りくる弾丸をどう捌くというのか。

野太刀を抜き放つや、霞んで見えなくなるほどの剣速で振り抜く。火花が散り、真つ二つになった弾丸が落ちる。それは斬撃による結界だ。仇なすものを切り捨て、身を守る攻撃の守りなのだ。

それを維持したままサイファアは突つ走っていく。片手で振るには長すぎる野太刀を器用に右手一本で手繰りながら、左手に黄金に輝く長銃身のアーカム45を撃つ。走りながらももある程度の命中率を維持しているのは、射撃技術の高さからくるのだろう。

——あれは！

貨物のコンテナ、その上から一人の男がサイファアを狙っている。あまりにも大きなライフルだ。きつと四五口径ないし、五〇口径はくだらない。機関部が見えるから、きつとボルト・アクション方式ではない。ガス圧利用のセミ・オート方式だろう。

フレデリカは『One In All』を構える。この銃は見た目こそ長銃身のM1

911だが、中身はガス圧利用方式だ。銃身は機関部に固定されているから、狙い撃つにはこつちのほうが都合がいい。

『All In One』のようなショート・リコイルの反動利用方式では。

銃身が、動く。

狙い撃つには、不都合だ。

「——あげっ」

聞くに堪えない断末魔だ。右目の下あたりに撃ち込まれた弾丸によって、頭蓋を吹っ飛ばされる。ぽっかりと欠けた三日月のように頭が残って、血と肉の飛沫を散らして息絶える。

そのまま両手で銃把を握り込んで、精密射撃の構えをとりながら戦闘要員を片付けていく。『Song For Fog』をかさばるからとということ置いてきたが、無理をしても持ってきたほうが良かったかもしれない。

ぼやいても仕方がない。冷静になって、アイアン・サイトに捉えた男たちに銃弾を送っていく。今まで隠れているだけだったフレデリカが反撃に転じたのは、ヘンリエッタが前に出る機会を生むことにつながった。

どこから取り出したのか黒い艶消しの加工がされた、大振りのグルカ・ナイフを右手に。左手には三本のスローイング・ダガーを握り込む。

左手を一振りすれば三人の男が倒れる。ナイフ一本につき、一人。投擲という狙いづらなものだというのに、ほとんど百発百中だ。ある意味では銃よりもすごいものかもしれない。

サイファアはすでに六人も斬り捨てていた。その五尺もの長大な野太刀の刃には、血潮の一滴もついてはいない。

地下鉄を守っていた男たちが、全員片付くまで時間はかからなかった。

死屍累々の中をサイファアは無遠慮に進んでいき、運行を司っているであろう機関士のいる場所まで進み——そして固まった。

ヘンリエッタが後に続く。

「嘘だろ、オイ」

人間はいなかった。おそらく機関車の制御系に歯車とカムとピストンで直結されていたのは、幾何学的な歯車の塊。ゆるゆると回りながら、次の発車の時を待っている。それは解析機関だ。この大英帝国が誇る世界唯一の情報処理機関。歯車の運行によって記憶されているのは、この地下鉄を動かすためのプログラムか。

サイファアは鈍器で頭を殴られたようだった。機関兵士のみならず、これだけの情報処理機関まで保有するほどの存在。それに自分たちは挑もうとしていることに。まるで風車の群れに挑むドン・キホーテのようだ。単体の、強大な相手であればサイファア

が手段を選ばずに片づけられる。

しかし、強大な規模の、多大な人数を要する組織となると一気に手強さは増す。個人はいつだって、組織というものに踏みつけられるのだ。それは、きつとサイファーとて例外ではないのかもしれない。

「敵は思った以上に、デカい上に力も技術もあるということか。それとも、やっぱり獅子身中の虫、クーデターを目論んでるバカがいるのか」

「らしくないな」

「こんだけデカい組織となると、さすがの僕も気が滅入る」

「全員殺して終わりにしようとか、そんなことを考えてはいないだろうね？」

「ヘンリエッタ、そんなに僕の考えてることは筒抜けなのか？」

「わかりやすいんだよ」

すつかり話し込んで二人のもとに、フレデリカは駆け寄ろうとした。

その背後より声をかけられる。

「オオイ、お嬢さん」

なんだ、このパンキッシュな服装は。そう思った瞬間、一瞬にして呼吸を奪われて、吹っ飛ばされる。誰かに受け止められたような感覚と、気遣うような声。視界は明滅して、胃から何かこみ上げる感覚がする。たぶん、おなかを蹴られたのだろう。

こみ上げてきたものを吐き散らす傍らで、そう思っていた。

地下鉄が汽笛を吹き鳴らす。それは発車の合図だ。

「なアんだ、天下の実力行使請負業『Call Of Cthulhu』もたいしたことないんだなア、ええ、おいイ？」

「冷やかしにしては、うちのカワイ子ちゃんに結構なことをしてくれたな。アーカムの市場でぶっ放しまくるやつは、考えも違うらしい」

「おおツ、わかってたんだなア。俺様はうれしいぜ」

歓喜に震えるのは二〇代くらいの男。逆立てたアッシュ・ブロンド、アクセサリーを大量に身に付け、ピアスも同じくらい開けている。全身をびっちりとした黒いレザーのジャケットやブーツで包み、犬歯をむき出しにするほどの笑みを浮かべている。

そのアメジスト・カラーの双眸を三白眼にして、爛々と輝かせている。アーカム中層の市場で凶行に及んだ男だ。

「アンタは、やつぱり一味違うのかなア？ ちょっと食わせてくれよオ」

「腹壊しても、知らねえからな」

凶獣、ここに相対した。

Stampe (死も恐れぬ自由の男)

先に仕掛けたのは男のほうだった——となるはずが、機関車は急激に加速した。

解析機関があるほうを見てみれば、歯車群の中に一発の銃弾が食い込んでいる。機能を放棄したことが、どういうわけか機関車の暴走に繋がったのだ。男が笑みをさらに強めているあたりからして、どうやら狙い通りらしい。

「ヘンリエッタ！ フレデリカを頼むぞ！」

「あ、ああ！」

未だ復帰できていないフレデリカをヘンリエッタに任せした後、サイファーは瞬時に二挺拳銃に持ち替えた。あちらも同じアーカム45を構えている。奇しくも同じ二挺拳銃だ。カスタムされているかどうか、その程度の違いしかない。

二人とも撃ちながら疾走する。狭い貨物列車の上となれば、直進するしかない。

弾丸は双方とも当たらない。わずかな足の動きによる体幹の左右運動や首を傾けたりして、うまいこと避けている。

ついに二人はぶつかり合った。通常の五インチ銃身のアーカム45と長銃身の七インチ半が噛み合うように、たがいに銃口を逸らし合う。

「やあ、はじめまして。なかなかどうして度胸もあるし、いい男じゃねえか。僕に一人で挑んでくるとは、それだけで評価できる」

「おおッ！ 意外と好印象じゃん？」

「けどフレデリカに手を出してくれたのは、とても許せねえ。とても、な」

サイファーの前蹴りが炸裂した。背がデカければ、その分だけ足も長いのだ。つま先を叩き込む形のトー・キックとなれば、その威力は推して囿るべしというべきだろう。事実、パンクな男は血塊を吐いた。内臓まで行つたのだろう。

しかし、傍目から見てもわかるほどのダメージなど意に介さないように、彼は腕に恐ろしいほどの力をこめる。その力強さを示すかのように、足と接している列車の床が深く陥没する。変形した箇所が車輪と擦れ合い、耳をつんざくような音とおびただしい火花を生むこととなる。

そのままサイファーを自身の後方に向けて投げ飛ばす。

これには彼も驚いたのか、目を見開いたまま宙を舞うこととなる。しかし、すぐに我に返つたのか両手の二挺を撃つ。男も応じるように同じ連射速度で撃ち返す。弾丸と弾丸は交錯して、線路へと落ちていった。

「タフなうえにパワーもあるのか……お前さん、名前は？」

「みんな、俺様のことを身元不明死体J。h。n。D。o。e。と呼んでる。たまに死なネバーダイ・フリーマンずの自由人と呼ばれる

こともあるけどさア。俺様はアンタたちの組織名知ってたけどさア、アンタの名前知らなかったわ。なんていうの?」

「サイファー・アンダーソンだ」

テンガロン・ハットを直し、ロング・コートの裾を払いながら挑発も含めたジョンの言葉に応じる。

「ジョン・ドウか………実は新大陸の事情にも、ちよつとは明るいんだ。お前さんの前は誰でも知っている——新大陸最強の男と呼ばれているそうだな」

「買いかぶりすぎなんだよオ。新大陸一しぶとい男つて覚えておいてくれな」

そう言いながらジョンは交差して背負っておいた二本の太刀を抜いた。

「名刀だな」

「わかるか? カネサダとドータヌキつて名刀だよ」

「少なくとも、お前さんにはもったいなさすぎる代物だつてのはわかる」

サイファーも応じて野太刀を抜いた。刃は鋼の輝きを宿した状態だ。様子見を決め込んでいるということか。双方の距離は三メートルほど。

両者同時に踏み込んだ。

二刀によるジョンの時間差攻撃を、サイファーは野太刀の刀身の長さを生かして捌く。

打ち合うたびに火花が散り、後退しては前進することを双方ともに繰り返していた。傍目から見れば、ほとんど互角のように見えた——そう、あくまで見えるだけだ。

「——押されている」

熱に浮かされるような声で、フレデリカは呟いた。

「どういふことだい？」

「サイファーさんのほうが、押されています」

「バカな。ほとんど互角のようにしか見えないうぞ」

「足元を見てください。サイファーさんの」

言われた通りに視線を移して、そして目を真ん丸に見開くこととなる。

「……………なんだ、あのジョン・ドウという男は!? あんなナリでメチャクチャな力をしているなんて!」

サイファーの足元はジョンが一刀を加えるごとに沈んでいるのだ。体躯の大きさはサイファーに一步譲ってはいるが、その膂力は上回っているということか。事実、一撃の度にサイファーは眉間にしわを寄せている。

技術など小細工に等しい、と言わんばかりの剛力でジョンは苛烈に攻める。

——一撃。

——二撃。

三撃目でついに列車が傾いだ。サイファーは膝を着き、体勢を大きく崩す。「もらったア！」

首に向けての横薙ぎと、もう一方の刀で心臓を狙う。逃げ場はどこにも存在しない。「悪いけど、僕もしぶといんだ」

野太刀の刃が漆黒に染まるや、今までとは段違いの剣速が暴風となつて吹き荒れた。たった一撃でジョンの必殺の二連撃を捌いたようにしか見えないが、実際は多重に重ねた剣閃が二刀の機動を逸らし、それに伴つてジョンも身を躍らせる形で宙を舞う。

その無防備な横腹に、掌底が添えられた。そつと。

「発勁だ。くたばつてくれんなよ」

練り上げられた勁がジョンの身を貫いた。

「ウツソ……オゴツ！」

疾走する地下鉄からトンネルの天井に叩き付けられるや、爆発に等しい衝撃が発生する。吹つ飛ばされたジョンの身体は一種の質量弾と化して、地盤を粉碎することとなつたのだ。これでは死んでないにしても、追つてくることは不可能なはずだ。

まして、こちらは暴走する機関車の上にいるのだから。

「フレデリカ、目覚めたか？」

「ちよつと厳しいかもしれませんが」

「ヘンリエッタ、肩貸してやれ」

「言われなくても」

少し屈むような形になったがヘンリエッタはうまいこと、フレデリカの身体を支えている。

「しかし、ヤツに蹴られてよく目覚められたね。背負っていく気もあつただけだよ」

「とつさに全身の力を抜いて、抵抗をなくしてみたんです。清の武術には、そういう防御もあるとサイファーさんから聞いたので」

「何気なく言ってるけど、それ達人級の技だぞ。もしかしたらフレデリカには、自分の身体を思い通りに動かす才能があるかもしれない。古今東西の武術家が放っておかないぞ」

「狙われてばかりですね……でも、あの人には通用しませんでした」

あの大出力機関を彷彿とさせるほどの人間離れた、いや生身から出せるとさえ思わない規格外の膂力。それを食らった衝撃は、きつと忘れようとしても忘れられない。

「新大陸最強の名は伊達じゃないとかね。僕も音には聞いていたが、アレほどとは。剛よく柔を断つ、を地で行きやがる」

「意外にサイファーさんは技巧派ですからね」

「私も最初は驚いたよ」

「見た目で判断するとえらいことになるのは、技巧も力技も同じということか」

僕も精進だな、と呟きながら内心は柄にもなく悲観気味だ。正直言つて弱音の一つが出てもいいぐらいだ。それだけジョン・ドウという男の体躯に見合わぬ剛力は凄まじく、自分の技術で受け流して捌くというビジョンの一切を打ち砕く。

無理を通して通りを引つ込ませるといふより、ハナから全開で無理を通してゐるようなスタイルだ。常に火事場のバカ力を出してゐるような状態だと考えれば、すくと腑に落ちる感じだ。それだと自分の身体も無事では済まないはずだが——と、そこまで考へてジョンが前蹴りで吐血するほどの深手を負つたというのにダメージなどまるでない様子を思い出したとき、列車は蛇のようになつてゐた。

最後尾の車両が押さえつけられてゐる！

その勢いもあるのか、列車の速度と相まつて一気に跳ね上がったようだった。フレデリカもヘンリエッタも宙を舞う。サイファーだけが、どういふわけか直立できてゐた。まるでへばりついているように。そのはためく灰色のロング・コートも意に介さず、その銀灰色の双眸を以て暴拳の下手人を見つめるのだ。

「自分で言うだけあつて、本当にしづといヤツだ」

「この列車の行き先を知つてゐるか？」

「知らん。だから乗つてゐる」

「俺様とアンタとの……………決着への直行便なんだよーッ！」

あろうことか、ジョンは列車の最後尾に思い切り自分の剛力をかけて、力任せに列車を止めたのだ。

その暴挙たるや。それを叶える怪力。

これが新大陸最強、とまで言われる男の力か。

「さあ……さあ、さあ、さあさあさあさあさあ！ 俺様をぶつ殺してみろオ！」

「言われなくても、お望みどおりに」

跳ね上がり傾斜のついた車両群を一気にジョンは駆け上がる。

応ずるサイファーは野太刀を抜き放つ。

刃がぶつかり合った瞬間——地表まで弾け飛んだ。



閑静な住宅街。人々は普段通りの日常を過ごしている——Now 少なくとも今は。

それを打ち破る瞬間は唐突にやってくるのだ。例えば——Now 今。

大通りの十字路の中央が、一気に隆起した。大量の土砂が大穴から噴水めいて飛び出

す。その高さは六メートルにも達した。それと一緒に現れたのは機関車に直結された貨物列車群。

鉄の塊は緩やかに放物線を描きながら、地表に失墜した。

しかし、いまだに空中にいるものが二つ。灰色のロング・コートを翻しながら飛ぶ巨軀の男。もう一つは体にフィットしたような黒づくめのパンク男。

通りを挟んでアパルトメント群の屋根に降り立った。

「こうだ、こう来なくっちゃあ。おもしろくねえんだよオ」

「ひどいことしやる。ロンドンが大混乱だ」

「んなことはどうでもいい、どうでもいいんだよ。アンタを味わって、それで楽しみや万々歳だ」

「自分に正直だな。悪く言えば、自己中心的ともいえるけどね」

その言葉に反応したように、ジョンはアーカム45を構えた。横内の構えは狙いづらいが、とにかくよく映える。

「それで結構。誰かの顔を伺いながら、誰かを気遣いながら、誰かのために生きるなんて、そんなの俺様の生き方じゃない。いつか死ぬその時まで、人生を抱きしめていたいんだよ」

「じゃあ、今この場で殺してやるよ」

巨銃を抜き放つのは一瞬。撃鉄が起きてから、発射まではコンマ〇・一秒以下だ！

『Howler In The Moon』が砲火を上げた。巨大な回転式拳銃の体裁をとった、ほとんど個人携行の回転式大口径火砲だ。銃口とマズル・ブレイキから青白い砲火が上がり、アパルトメントの屋根に着弾した途端、大人一人を飲み込むほどの大爆発が起こる。

もはや何らかの乗り物に搭載して運用するべき、という思いを禁じえない威力をサイファーは片手で連射する。装填されているのはホーレス謹製の爆裂弾だった。

五発も発砲すれば、アパルトメントの屋根には大穴があく。元々は人ならざる幻想生物や重機関兵器に対抗するためにあつらえた弾丸だ。少なくとも人間相手に使うべき代物ではないのだ。

そこまでさせたのは一つの疑惑。

勘だけで推測した一つの疑念。

もし当たっていたのだとしたら。

ぼつかりと空いて、周りが焦げ付いた屋根の大穴のふちにサイファーは降り立った。通り一つ分挟んで向かいの建物の屋根の上にいたというのに、ここまで来れたのは一足飛びにここまで跳躍しただけだ。別に特別なことではないが、野次馬根性のある連中が、屋根の上を見上げて言葉を失った状態で口をパクパクさせている。

大穴からアパルトメントの一室が見える。粗末なフローリングだけで、家具や調度品の類は一切なかった。空き室だ。

降りようと思つて、一步を踏み出そうとして——銃口を真上に向ける。

炸裂音は一つ——いや、わずかにズレて二回分になっている。サイファーはその場から飛び退く。つい先ほどまでいた位置にジョンが降つてきた。両手に握られた二刀は深々と、フローリングを貫いていた。

「まさか僕の弾丸をぶつた切るとはな」

「見えたからなア」

「にわかには信じがたいな」

それは一種の確認であつた。巨大、武骨、重厚の三拍子そろつた『Howler In The Moon』が強力なバネ仕掛けではね上げたように、一瞬でジョンの眉間に照準する。弾倉にはいまだに爆裂弾が装填されているから、直撃すれば身体部位の一つさえ原型をとどめるかどうかさえ怪しい。ただのボロくず同然の血肉だけが残るはずだ。

青白い発射炎は銃口とマズル・ブレイキのスリットから噴射され、濃厚な硝煙の中から70口径もの巨弾が一直線に三件へと飛ぶ。

ジョンは左手の太刀を口に咥えるや、両手で右手の太刀を構える。弾丸が食い込んだ

瞬間に、一気に振り抜いた。

巨弾は二つに分かれた。ジョンは壁を背にして立ち、壁には窓があった。二つになった弾丸は運動エネルギーを失うことなく、窓を粉碎して向こうの建物に着弾して爆発した。

「イかれてるぜ！」

「よく言われるさー！」

サイファアは野太刀を水平に一閃する。狙いはジョンの首だ。

意外なことにジョンは防御も回避もしなかった。サイファアは自身も当たると確信できるほどの速さを以て振り抜いたが、身じろぎ一つしないのはさすがに妙だった。

長大な刃は首筋に食い込み、そして通り抜ける。あとは宙に生首が飛ぶだけ——それはずだった。

ジョンは健在だった。首筋には傷一つない。

サイファアは二の太刀を見舞う。ジョンの右肩から左腰へ向けての袈裟掛け一閃。

ぴつちりとした漆黒のパンク服が斜めに切れたただけだ。チツチツチツと連続した舌打ちをしながら、人差し指を左右に振る。

「拍子抜けだよ。アンタなら俺様をぶっ殺してくれると思ったのに」

「そっか……じゃあお望み通りに」

おもむろに『Howler In The Moon』の弾倉から爆裂弾を排莖した。ここまで撃つた弾丸は七発だから、未使用の弾丸は十七発にもおよぶ。たつた六発装填するのがやつとと言える大ききの輪胴から、合計二十四発に及ぶ莖莖と弾丸が排出されるのは圧巻されるものがある。

ジョンも口笛を吹いた。ぴゅう、という音はよく通る。

新たな弾丸を装填するのか——そう思った時、サイファアの手が霞んだ。

ジョンの舌が感じ取ったのは鋼の味。

ジョンの頬が感じ取ったのは鋼の質量。

遅れて響く、顎への打撃。アツパー・カットだ。

サイファアはジョンの口に弾丸を突っ込んだのだ。今しがた取り出した爆裂弾を五発も。そこからノン点が揺れるほどの勢いでアツパーを叩き込む。

弾丸の雷管が作動する。

ジョンの顔は爆散した。青白い爆炎のブラストは上半身に至るまで加害したはずだ。事実、腰から上はほとんど肉片も同然で、ずたずたになつて引き裂けていた。ここまで凶悪な攻撃を叩き込んでおいてなお、サイファアは『Howler In The Moon』に新たな弾丸を装填している。今度は散弾だ。

無残な状態のジョンを見下ろしたまま、立ちすくむこと、およそ五秒。撃鉄を起こそ

うとして——そのまま背を向けた。

だが、ふいに背筋に氷の針でも差し込まれたような悪寒を感じ、振り返った。

ジョン・ドウがそこにいる。ずたずたの上半身のまま、自らの足で立っている。残った筋と皮だけの無残な両腕は、気づいた時には骨という名の芯が通り、それに巻き付くように生皮を向かれたままの筋肉繊維が復活していく。どこに置いてあつたのかアーカーム45を、復活した両腕で握り込んでいた。

「嘘だろ、オイ……………」

ぎりり、と歯ぎしりしたのに反応した。そう思ってしまうほどの速さと目敏さで、頭部が下あごだけ復元された。表皮など皆無な、赤黒い筋肉をむき出しにしたままの。そこから骨、筋肉、そして虚空から眼球が復活した。焦点の定まらぬ双眸は、あつという間にサイファアの銀灰色の双眸を捉えた。

「地獄の底から舞い戻ったよオ？」

「もう一回送り返してやる」

巨銃が火を噴いた。放たれた散弾は殺意の幕となつて、ジョンの身体を粉碎する。

しかし、散弾によって引き裂かれたはずの肉が、潰された内臓が、砕かれたはずの骨が。散弾が身体を貫いて、体外へと抜け出た途端に復元する。悪い冗談としか思えなかつた。見方によっては身体をすり抜けているように見える。

対してジョンの弾丸は全弾命中したものの、コートの防弾効果によって止められる。だが衝撃を完全に殺しきれたわけではなかった。

わずかに、たたらを踏んだ隙を見逃すはなかった。

サイファアの腹にジョンの前蹴りがぶち込まれた。並みの重蒸気機関を全開で稼働させ、その全てを打撃力として割り振ったとしても、このパンク男の脅力を上回ることはないはずだ。重蒸気機関一つで二〇〇メートルクラスの戦艦一隻を賄える出力を超えるわけがない、眉唾だと思ふことはないはずだ。

水平に吹っ飛んでいったサイファアがアパルトメントや民家に商店、およそ十四もの建物をぶち抜きながら700メートルも飛んで行ったのだから。



「ひどい目にあつた」

「あのジョンつて人……サイファアさん以上にメチャクチャかもしれません」

「言えてるかもしれない。そして規格外にメチャクチャなツー・トップが閑静なロンド

ンの街並みを、数百年前の遺物に変える勢いで暴れまわっているとしたら」

「止めるのは義務ですよね」

ジョンが空けた大穴から地表へと這い上がってきた二人に、頭上から瓦礫が降り注いできた。幸いにも当たるものは小指の先程度が、肩にかかったぐらいだが。

見上げれば通りを挟んで並び立つアパルトメント二軒に、何かが通り抜けていったよ
うな跡があつたのだ。

見ようによつては、人の姿に見えなくもない。

「誰かぶち抜いていったのかな？」

「ジョンさんでしょうか？」

「あー、簡単に想像できちやうなあ」

「追うよ、追うよー。俺様はアンタを追っかけるよお！」

屋根から屋根へと飛んでいくジョン・ドウの姿を見て、フレデリカとヘンリエッタは固まった。吹っ飛んでいったと思われるのはサイファーのほうだろう。正直言つて意外だった。

「あの男、新大陸最強と呼ばれるにふさわしいようだね」

「ガーニーか何かを調達しないと、追いかけるのは骨ですよ」

「そうなんだけど……運転免許なんて持ってないんだよ」

「……………それは、私も同じなんですけれど」

沈黙するしかない。どうしようか、と途方に暮れかけたとき、ガーニーのブレーキ音が響く。

大型のゴツイ警察用のものだ。まさか自分たちを捕らえに来たのか。そう思つて身構えたが、見知つた顔が出てきたおかげで一安心する。

剣呑な目つきをした、白髪交じりの男。善人でも悪人でも、目が合えば背筋が凍る。正義感溢れるならず者保安官。ワイアット・アープその人であった。

「なんで、このロンドンの真つただ中にいるんだ？」

「サイファアさんの仕事です。こっちは……………」

「ヘンリエッタ・ウエントワースだろ？ 知っている」

やっぱり面識があつたかと紹介しようとしていた口を閉じる。

自分も引き合わされたのだから、きっとヘンリエッタも同じようにされたのだろう。襲撃があつたかどうかは別だろうが。

「バケモノみたいな二人が暴れていると市民から通報があつてな。たまたまアーカムから出張していたせいで来る羽目になった。片方はサイファアのようなのだが、もう一人はどんな奴だ」

「ジョン・ドウ、そう名乗つていたよ」

ヘンリエッタが答える。秘密地下鉄でのサイファーとジョンのやり取りを聞いていたのは彼女だけだ。

「なに……『死ネバーダイなフリーマンずの自由人』のジョン・ドウか？」

「ああ、新大陸最強だと言われていると、本人の口から聞いた」

「くそっ………世界の終グラウンド・ゼロわりまで一時間の気分だ」

「いまはサイファーさんのほうが押されているみたいですけど……」

「どっちにしても、ロンドンが更地になるまで十分とかからんだらう。何かしらの手を打たないと、本気でマズい」

「とりあえず二人はあっちのほうへ飛んで行った。ガーニーが何かで追いかけるのが先決だと思うんだけど」

ヘンリエッタの人差し指はサイファーとジョンが行った方向へ、視線はワイアットー
ーを通り過ぎてガーニーに注がれている。

「ガーニーに乗れ！ 急いで追いかける！」

話のわかる人だ、とヘンリエッタもフレデリカも同じことを思う。

警察用らしく、ガーニーの動力機関は力強い駆動音で吠え、車輪の回転の源となるピストンの回転を瞬く間にサイ台まで引き上げる。シートの背もたれに押さえつけられるほどの加速で一気に走り出す。

警察が交通整理をしているのか、行き交う車はひどく少ない。走っているガーニーも警察関係の車両がほとんどであろう。パニックになった市民も鎮火し、今となっては地面に空いた大穴とそこから出てきた機関車を見に野次馬となっている。

「んん……？」

警察の交通整理が行われている区域を抜け、サイファーが飛んでいったほうへと車は急行する。その中でフレデリカはすれ違ったり、後続車両の中に違和感を感じ取る。

敵意とも、殺意ともいふべきか。

後続車両の一台から、拳銃を構えた男が身を乗り出した。

ガーニーの後部ガラスが撃ち抜かれる。思わずフレデリカは身を伏せた。

「後ろ！ 誰かに追われています！」

ヘンリエッタが後ろを見たときには、サン・ルーフからトンプソン短機関銃を構えた男が上半身を出していた。

フレデリカたちの乗るガーニーに強装弾であろう四五口径弾が嵐となって襲い掛かる。その衝撃はガーニーの重い車体が軽く跳ね上がるほどだ。

両手に二挺を握り、車^{ドライブバイ}上射撃に乗り出した。

しかし、相手方のガーニーも装甲仕様だったのか、撃ち放たれた弾丸は表面をわずかに削って弾かれた。

「防弾車です！ それも複数が撃つてきています！」

「お前たち、一体何に首を突っ込んだ！ どう見ても連中は戦闘のプロとしか思えんぞ！」

ワイアットはS&WのM3を抜いた。SAAは銃身が長すぎるから、取り回しの良い四インチ銃身のM3が適役だ。愚痴を叫びながら、バック・ミラーだけを頼りに照準した弾丸は見事にタイヤを撃ち抜いた。バランスを崩した後続のガーニーが横転していく。

フレデリカも負けていられない、と言わんばかりに車窓から身を乗り出そうとしたとき、一台のガーニーが速度を上げて横に着いた。そのまま車体で体当たりを仕掛けてくる。

「うわわっ！」

「容赦ないな……これは私も一肌脱がないと」

ヘンリエッタはそう言うや否や、ガーニーの屋根に手をかけると新体操めいた動きで屋根に上がった。

右手にグルカ・ナイフを構え、体当たりを仕掛けてきたガーニーへと飛んだ。屋根に飛び移るや、グルカ・ナイフの湾曲した刃を生かして逆手に握ったナイフで運転手を狙う。曲がった刃は運転席を狙うのには都合よく、運転手の側頭にあっさり突き立てら

れた。

そのままヘンリエッタはガーニーが運転手の死によって暴走する前に、次のガーニーに狙いを定める。生身の人間とは思えない、猛獣めいた跳躍力をいかになく発揮して飛びながら、スローイング・ダガーを別のガーニーに投げる。刃に刻まれた炎のルーンが発火し、ガーニーのエンジンをオーバー・ヒートさせる。ボンネットから爆発同然の勢いで白煙を吐き出し、スピルしながら脱落していった。

軽業の見世物のようにガーニーからガーニーへと飛ぶヘンリエッタの姿を認めつつも、フレデリカは精密射撃向けの『One In A 11』を両手で握り込む。狙うはサン・ルーフからヘンリエッタを狙う連中だ。射撃は精確そのもので、銃声が鳴るたびに脳漿と頭蓋が飛沫となってぶちまけられる。

ワイアットはM3での精密にして迅速な射撃を以て、ガーニーのタイヤを撃ち抜いていく。精密射撃には向かない重い引き金のダブル・アクションで、さらにバック・ミラー越しの射撃だというのに弾丸は一発も外していない。フレデリカにもヘンリエッタにもない経験という名の武器が本領発揮している。

五分もしないうちにガーニーはすべて片づけられた。

『死なずの自由人』にさつきの中……ただごとではなさそうだな。そうなってくるとお前たちじゃおれに何も話せない事情があるだろう。サイファーも何も言わないだろ

うな」

「すみません……」

「構わない。守秘義務というものは、守らねばならんからな」

「どのみち、あなたたちも無関係ではいられないと私は思うけどね」

「悪い冗談はよしてくれ、ヘンリエッタ」

そろそろサイファアの飛んで行った場所に着くころだ。フレデリカたちがそう思った時だった。

とてつもない衝撃がガーニーを襲う。まるで真横で爆弾でも炸裂したように感じられる。ひとたまりもなく二転三転勢いで横転した。なんとか車外へと這い出てみると、塔と思わしき建物の屋根が近くに突き刺さって、深い窪地に変わり果てていた。あと数メートルずれていたら、確実に乗っていたガーニーに直撃していただろう。

「メチャクチャだ……一体、どんな戦いをしてるんだ!？」

ワイアットも落ちてきたであろう塔の屋根、その残骸を見つけたらしい。

そしてヘンリエッタがようやく這い出たときだった。

人の気配が感じられないほど静まった一帯。周囲の建物はすべて無人と化しているのだろう。

その外壁に無数の斬線が走ったのを、フレデリカの双眸は捉えた。人智を超えるも

の、人界ことわりの理からはずれたものを捉える黄金の双眸が！

「逃げてくださいー！」

フレデリカの叫びと同時に建物が一気に崩落した。斬線に沿ってズレるや、自重で一瞬のうちに形を失った。

立ち並んでいた建物は半径五〇〇メートルもの範囲にわたって斬り刻まれ、瓦礫の山と化していた。さらにいかなる方法を用いたのか、逃げ遅れた人々は存命のまま、瓦礫の上にへたり込んだ状態でぼかんとしている。常識を超える現象と目まぐるしい状況の変化が、脳を一種のショック状態に陥れたに違いない。

おそらくは狙った生命以外を傷つける目的はなかったのだ。

サイファー・アンダーソンが狙ったのは、ジョン・ドウただ一人。

瓦礫と化したモルタルづくりの建物が地面に成り代わった中で、自分たち以外が死に絶えても刃を交え続けてきたとしか思えない凄惨な空気をまとっている。

ジョンは二振りの太刀で二刀流の構えをとり、歯をむき出しにしたすさまじい狂気の笑みを浮かべている。

対するサイファーは異様としか言えなかった。灰色だったロング・コートは漆黒に染まり、黒いモヤを纏っているよう。そして半顔は同じように黒く染まって、深紅の亀裂が三つ目を形作っている。燃えるような眼を、三つ。左手で鞘に納めたままの野太刀を

握り、銀灰色の眼と深紅の燃える眼の四つでジョンを見据えているのだ。

「やっぱすげえやアンタ。俺様でも、こんなに燃えたのは久しぶりだよオ」
「おしやべりな口は、そろそろ閉じておくべきだ」

二人の刃が、ぶつかり合った。

Match 霧中より赫き三眼は出でる

見下ろすものがある。

ロンドンを、大英帝国全てを睥睨するように。慈しみも、野望も、打算も、嘲笑もない光を宿さぬ瞳で見下ろす。

整った容貌だけあって、その冷淡さはいっそう際立つ。

座するのは天高くそびえる塔。それは時を刻む塔だ。大英帝国の象徴と言つていい、

大出力重蒸気機関を組み込まれて半永久的に時を刻み続けるという蒸気時計。

ビツク・ベン。

ゴシック調の退廃的景観を覆うように張り巡らされた、どこか冒流的にさえ思える蒸気機関の配管は二四時間三六五五片時も一秒も休まずに駆動し続ける。機関技術に明るくなくとも、時計塔一つの運用にこれだけの大機関を使用するのは過剰だと思うだろう。

ただ、それもこの蒸気時計スチーム・クロックを一目見れば疑いもなくなる。なぜなら「そういうもの」だと建設当時から定まっている。

当てはまらないとすれば、文字盤のステンド・グラスを窓代わりにして下界を睥睨す

る彼だけか。

「進捗はどうだい？」

いつの間に背後に男が立っていた。

実に壮健な老境に差しかかった男だ。長衣の制服を見に纏う姿は山とも壁とも例えられそうだ。

「順調、の一言に尽きます。あと一週間もあれば完成かと」

「うん、それでいい。技術者には相応の見返りをくれてやるように」

「それはもとより承知の上です」

そのまま男は下がろうとした。

涼やかで若々しい声が止めた。

「待って」

「なんででしょう？」

「正直言つて、君ほどの人間が来るとは思わなかったんだ。今まで何回聞いても理由は話してくれなかったよね？ いつになったら話してくれるのかな、と思つてさ」

ふうむ、と顎に手を当てて考え込んでしまった。

男の腰にあるものは本来であれば生身の人間が使うものではない。それを彼は自在に操つてのける。矛先が向けば断ち切られぬものはないだろう。それが自分に向けば

——地雷を踏み抜いたか、と思案するも表情には出ない。

「心境の変化、というよりは自分の本質に気づいたというべきでしょうな。戦場で生きて戦場で死にたい、という爺の浅ましい願いですよ」

「そうか……うん、うん、幸せとは人それぞれだ。戦いに生きて戦いに死ぬ。それが君の望みであれば、僕はそれを否定しない」

しかし、彼は否定もしなければ、認めもしない。共感さえしないだろう。

すべては些細な差異だと、そう言わんばかりだ。

それでも彼は受け入れるのだ。どんなに冷たい眼差しをたたえたままでも、いかなる思想に共感を見いだせずとも、自分の理想のために必要なだと割り切つて。

「君のために、ここを戦場にしよう。そうすれば、きつとなれるよ——幸せに。幸せに、なれるんだよ。止めるものも、貧しき者も、強き者も弱き者も。みんな、みんなが一つになつて幸福になれるんだよ。大英帝国のすべてが、いや世界のすべてが僕の幸福に包まれるのさ」

「期待させて……いただきましょう」

「その剣だつて存分に使うことができるはずだ」

口調はあくまで優しく語り掛けるように。しかし、光を移さぬ瞳は老人の腰に注がれている。

「壮健なる男の腰に提げられているのは大振りの大剣だ。眩いほどの銀に輝く一八〇センチ以上はある刀身、その峰には柄との接合部分まで伸びるパイプ状の噴射口があり、前述の接合部分には駆動音を響かせる蒸気機関が搭載されている。

——エンジン・キャリバー
機関大剣。

本来であれば生身を捨てている者が扱うことを前提に設計されている規格外級の兵装を、老いた生身で振るうとでもいうのか。あるいは生身に見せかけた高度な機関改造か。

「ええ、久しぶりの戦いに、この老骨も滾ってまいりました」

「期待しているよ。王を守るための騎士ナイトとして、僕は君しかいないと思っていたんだ。持てる限りの力を尽くして頑張つてほしい」

老剣士にはわかっていた。

言い放った言葉などは建前だと。自分になんの期待もしていないことを。目に見える表情に素振り、声も口調も言つてしまえば対外的な建て前のようなもの。

それでも老剣士には十分だった。

体が、精神が、本能が戦いを欲していて、彼はそれを満たしてくれると言った。ならば、それでいい。どの道にしる戦いは起こるはずだ。

——彼ほど狂った男が動けば、きつと争いは起きるのだから。



半顔を黒く染め上げ、赤い亀裂のような三つ目と生身の双眸でサイファーはジョン・ドウを見据えていた。

無言だ。彼にとつては珍しいことだ。いつもであれば軽口の一つや二つは飛ばしてゐるはずなのに、それをしないのはジョンが相当の実力者であることの証明か。

抜き身のままの野太刀を一振りするだけで、ジョンの身体に輝線が走る。おそらくは斬った軌跡なのだ。尋常の存在であれば両断されるはずだ。しかし、空間ごと断ち切る刃によつて頭頂から股間まで刻まれた斬線は消失した。それはジョンもサイファーと同じ頂上に身を置く者の証ということか。

「ははっ、やっぱり歯ごたえあるヤツで嬉しいよ。食べがいがある」

「二回目だが、腹壊すぞ」

「それでも結構。毒もいいスパイスだ」

犬歯をむき出しにするほどの笑顔を見せ、ジョンは両手の二刀をくるりと器用に回して構えなおす。

跳躍による縮地は消失と出現と言ってよかった。忽然と消え失せたかと思えば、瞬き一つの間にはサイファーの前に現れる。サイファーは驚くことなく初撃を簡単に防いでみせた。

無論、ジョンの攻勢は衰えることを知らず、二刀の連撃は嵐そのものと言っている。

その全てをサイファーは野太刀一本で防いでいるというのか。いや、傍観するしかなかったフレデリカは野太刀に加わって防御を行う何かを捉えていた。

「触手……鞭？ ううん、違う」

——あれは。

——翼、だ。

——翼の羽、ただ一枚が自由自在に伸び縮みしてる。

幾度となく見てきたサイファーの操る鞭状の闇。長外套を黒く染めて顕現するそれが、翼のたった一枚の羽根だと誰が気づこうか。

焦げる臭いが鼻を突く。

羽が通るたび、舞う塵はおろか空気さえ焦げ付いているというのか。

伸縮自在にして音などはるか遠くに置く羽と、磨き上げられた技術で振るわれる長大

な野太刀。どれもが僅かでも掠れば、そこから百では済まぬ致命の連撃を食らって果てるだろう。たかだか再生能力を有しているようが、肉が繋がる前に新たに裂かれ、さらに一太刀を加えられることとなる。

——それでも。

ジョン・ドウは止まらない。

——それでも。

ジョン・ドウは退かない。

——それが。

ジョン・ドウであることの証だと、雄弁に語るがごとく二刀を振るう。

人知を超えた高速戦を展開するサイファーに対抗するため、ジョンの一举一動も尋常の領域ではなくなつた。まさしく怪物同士の戦いと言つてよかつた。銃弾すらはるかに凌駕するほどの刃と肉弾のぶつかり合い。立った人たちが戦略兵器と言える。そこに付け入る余地はない。フレデリカも、ヘンリエッタも。

両手の二挺を向けてみても、指は震えたまま一向に動こうとはしない。もどかしくて、逸る気持ちだけが重苦しくわだかまる。

鏢迫り合いになつて、両者は一度止まる。

「そんな姿になつて、その程度なのかア？」

「なめるなッ！」

ジョンの二刀は弾かれた。次の瞬間、腰のあたりで何かが爆発したようになり、血飛沫が飛び散る。

轟突だ。それしか言いようのないサイファアの野太刀による一突きだ。一刀を握り込む右腕の引き込みで切っ先の間合いは取られ、突き出す勢いを生み出したのはたった一步の踏み込みと上半身と下半身の屈伸によるバネだ。その威力は切っ先がめり込んだ瞬間、ジョンの腹が爆発したように弾けたことから伺える。

それでもジョンの身体は二つにならない。背中側の皮一枚で繋がっていた上半身と下半身は、急速に復元を開始する。サイファアの身体が傾いだ。蹴りを叩き込まれたのだ。

「耐えてみせろよオ」

サイファアのコートを突き破って突き立てられたのは、アーカム45の弾倉だ。振り下ろされた太刀はあろうこと赤く輝いている。このジョン・ドウという男はたった一振りしただけで日本刀の刃を熱するというのか。赤く焼ける刃は弾倉の上に食い込み、一瞬で弾薬の装薬を熱する。

今度は紛れもなく爆発だ。常人であれば肩が千切れ飛んでいて当然だが、多少たたらを踏んだ程度だ。

「痛いかな？ 痛エだろオ？」

「多少はね」

右肩を爆破されたにもかかわらず、野太刀を取り落とす無様もない。傷を押さえる左手を払った時には、あるはずの痕は欠片もなかった。傷も、コートには穴もほつれもない。爆破の事実さえなかったのでは、そう錯覚しそうになる。

「なアんだよズルいなア。服直せんのかよ」

「種も仕掛けもある手品でね」

「教えてくれよ。こちとら、治せんのは自分デメエの身体だけなんぞでなア」

「やだよ、企業秘密なんだ。教えるわけないでしょうに」

「カーツ、ケチくさいヤツだ。お返しにバシツと散らしてやるぜ！」

二刀の両方が赤熱する。空気摩擦を用いているのだろうが、一振りだけで成し遂げるあたり剣速の凄まじさをうかがわせる。この程度なら序の口なのだろうか。惜しげもなく見せつけてくる。

ぶつかり合うたびに火の粉が散るようになる。

放たれる熱気のせいで陽炎さえ生じる有様だった。

「……なに、これ」

水を差したのはフレデリカが周囲の変化に気づいた時だった。

いつの間にか戦場を覆うのは、深い霧。離れたところにいるサイファーとジョンの姿がようやく見えるくらいに濃い霧が、気づかぬうちに立ち込めている。

「急に霧が立ち込めてきたな」

「そうじゃない。これ、霧じゃない」

「なにを言ってるんだい？　これは、どう見ても……」

「全部、暗示情報でできています！」

あらゆるものを見通してきた黄金の双眸は突如立ち込めた切りにも遺憾なく、その力を発揮した。霧に見せかけた超常の力で編まれた暗示領域を見事に見抜いたのである。おそらくは霧中のことを第三者が窺い知るすべなど一切ないのであろう。

気づけば、ワイアットの姿はない。この霧で分断されてしまったのか。

変化は刃を交える二人も気づいていた。

「霧が出てきたな」

「雇い主のお膳立てかなア？　邪魔が入らないようにするための」

「おっと結構な雇い主がいるんだな」

「やられた墓穴掘つちまった。手かがり与えちまったなア」

「この際、全部あらかたゲロつてみたらどうだ？」

「冥土の土産にくれてやるには、アンタはちよつと強すぎらア」

サイファーはどういうわけか、野太刀を納刀し、居合の構えをとる。

二刀は両方とも赤熱している。回転するような動きでジョンは一気に肉薄する。

「じゃあ、絞り出すか」

赤く焼ける刃は二つともサイファーに触れることはなかった。その代わりにジョンの腹部に鉄拳が叩き込まれた。それだけなら彼にとつては大したことはないのだが、拳だけに留まるはずがない。

腹部に突き刺さったのは七〇口径もの巨弾だ。

「弾丸の爆発、なかなか効いたぜ。お返ししてやる」

居合抜きの一閃は、肉を、骨を断つことはなかった。そのかわり弾丸の雷管を弾いていく。

ジョンがアーカム45の弾倉で起こした時よりも大きな爆発が起こる。体をくの字に折ったまま、3メートル近くも吹っ飛んだ。

「そうだ、そうだ、そう来なくっちゃあ」

たった一步踏み込んだだけなのにもかかわらず、吹っ飛んで開いた距離をあつという間にサイファーは詰める。居合抜きからのさらなる連撃を見舞うべく、上段からの唐竹割り一刀が振り下ろされようとしていた。

「見え見えなんだよオ！」

それでもジョンは動く。動くのだ。

荒唐無稽としか言えない弾丸の炸裂を食らい、腹を半壊させていたとしても。

前蹴りの速さはもはや異常だ。手負いの身体で放とうものなら、傷口は開き切るはずだ。事実、風穴を開けられた腹からは瀑布のごとく鮮血が噴き出した。

しかし、サイファアの体勢は崩れたどころか、いまだに形を残している建物の瓦礫に叩き付けられたほどだ。

「最後の二撃、決めてやんぜオラア！」

回転しながら飛んだのは赤く焼ける二刀。高速回転は刀身に新鮮な酸素を供給し、一時的に刃を燃焼状態にさせる。見事に二つともサイファアの両掌を刺し貫き、叩き付けた瓦礫に縫い付ける。

それだけに止まるはずもない。あろうことか腹に空いた穴に手を突っ込むや、何かを引きずり出したのだ。血と肉片にまみれてはいるが、口径八ケージはあろうソード・オフした上下二連散弾銃だった。一足飛びに身動きの取れぬサイファアに接近し、喉元に銃口を突き付けた。

「腹の中に銃隠してるとは思わなかったらどお？」

引き金は無慈悲に引かれた。首から上を隠すほどのおびただしい硝煙が、一時の間だけサイファアの顔を隠してしまう。

「サイファアーさん！」

悲痛な叫びは霧中に吸い込まれる。

銃声だけがいやに響いていた時だった。

「最後の一撃、つて言っておいて二回も攻撃ってどういうことだ？」

「あら？」

サイファアーは変わらずそこにいた。散弾を受けたはずなのに、喉元には傷一つない。代わりにあるのは黒く染まったのっぺりとした闇だけ。

「お返した」

灰色のロング・コートは一部だけ黒く染まっている。そこはまるで筒をせり出すように変形させ、ジョンを標準していた。銃声はなく、ジョンは吹っ飛んだ。そこを逃すわけではない。両掌に刺さった二刀をいつの間引き抜いたのか、両手で握り込んでくるりと一回転して逆手持ちの状態になると、一切の躊躇いなく両目に突き立てた。

「う、ががあッ！」

「目をやられるのは、さすがに堪えるか」

両目に刺さった二刀は頭蓋を貫通して、地面にまで深々と刺さっている。脳漿と血の混ざりものがどんだん広がっていくが、ジョンの悶え苦しむ勢いというものは変わる気配を一切見せない。七転八倒、という言葉がびたり解きそうだ。本当に転げまわって

れば。現実には頭を太刀を二本も刺して、固定されているような状態だが。

それほどの所業をやっておいてなお、サイファーは手を緩める気はさらさらなかった。

愛用の規格外に巨大なりボルバー、その銃口を悶えるジョンを見下ろすように向ける。

銃口が吠えて、跳ね上がる。

一度、二度、三度——そして二十四回目を終えたときには、赤黒いシミだけがその場に残っていた。肉片と血痕だけを残してジョンは消失したようなものだった。やり過ぎと言えばやり過ぎだし、過激と言えば過激だ。しかし、ジョンが見せた傷さえ生まなほどの再生能力に支えられた不死性を鑑みれば、多少はオーバー・キルなくらいがちようどいいのかもしれない。

赤熱していた二振りの日本刀は元の鋼の輝きを取り戻していたが、その名刀というにふさわしい円弧を描く刀身の形状美は見る影もない。刃は溶けて、ほとんど潰れてしまっている。熱して使うものではないのだから当たり前と言えば当たり前だ。

「サイファーさん……」

死戦をようやく終え、元の姿を取り戻したサイファーのもとに歩み寄ろうとした時だった。

一瞬で天地が逆転した。身体の手をひっくり返され、胃のあたりが一気に沈んでいくような、そんな奇怪な感覚に襲われる。視界の回転が収まって、逆さまのサイファーを見て状況をようやく把握した。

——何かが、私を逆さづりにしている。

そう思った時には後ろを向かされていた。

目が合った。

そう、目が合ったのだ。

霧は五メートル先も見えないほど濃くなって、首をひねって後ろを見てもサイファーの姿さえ認識できない。その確信があるというのに、空中に浮かぶ三つ目はいやにはつきりと見えるのだ。赤く、紅く、そう赫く輝く三つ目は。

唸り声が夢中に響き渡る。

明らかに生き物の声ではない。柔軟な声帯を以て出されたような声ではなく、硬い金属を擦れ合わせたような耳障りな音。威嚇とも、警戒ともとれるような響きだった。

「フレデリカー！」

魔銃の咆哮が負けじと轟いた。今まで銃口を向けたものを等しく爆砕してきた巨弾は、この正体不明の存在にも威力を見せつける——それははずだった。

——があん。

思わず目を見開いた。黄金に染まった、その双眸を。

間の抜ける呆気ない音を立てて、巨弾は弾かれた。

「ええいー！」

ヘンリエツタもスローイング・ダガーを投擲した。それは飛翔の途中で燃え上がり、装甲を融溶貫通させる徹甲弾と化した。

しかし、それが効果を發揮したのかはわからない。おそらくはサイファアと同じ結果になったはずだが、立ち込める霧がナイフの行方さえ眩ましてしまう。

——駆動系は良好です。

——武装系を起動します。

凄まじい連射音が轟く。大口徑火砲を毎分一〇〇〇発を超えるペースで連射しているらしい。

ヘンリエツタは回避に徹したが、サイファアは『Howler In The Moon』に別の弾丸を装填していた。ホーレス特性の徹甲弾だ。わずか直径数ミリの金属ダーツだが、凄まじい運動エネルギーによって超音速で飛翔する。

フレデリカを捕まえて、逆さ吊りにしていた何かが発射したような音を立てた。凄まじいエネルギーを一矢に引き受けたダーツは、着弾の衝撃でもはや爆発と化していたのだ。これには堪らず、フレデリカを捕らえていた何かは彼女を開放した。

「ええい、クソツタレ！」

落下するフレデリカを受け止め、サイファーは滑り込んだ。

——どきっ！

フレデリカを受け止めたと同時に、急速に霧は晴れていった。

「なんなんだ、あれは……」

そう言った時だった。

「へっへっへっへっへっ」

楽しげな、下卑た笑い声。

ジョン・ドウが、そこにいた。跡形もなく破壊されたはずの彼が、肉体を完全修復して健在でいる。ただし、服だけは修復できていないのは、もはや宿命のようなものらしい。全裸だった。

「なるほど、そういうことだったかア。アンタも同じこと考えてんのかア？」

「まあね。その前に服着たらどうだ」

「跡形もなく吹っ飛ばしてくれた本人が、どの口を叩いてやる」

「恨むぐらいなら、とつとと帰るこつた。今なら見逃してやる」

明確なまでの挑発。ジョンの性格を考えたら、激昂して向かってきそうだが以外にも踵を返す選択をした。

「そオだな、武器もねえことだ。今日は帰るよ。またリベンジ・マッチをさせてもらおうぜエ？」

そのままジョンはどこかへとジャンプして、行ってしまった。

どこからかワイアットの声がする。自分たちを探しているのか。

「そういうば、さ」

言い出しづらいような口調でサイファーが口を開く。いまだに受け止めてくれた時の体勢、そのままだ。

「あんな大胆なヤツ、いつ買ったの？」

「え……………ああっ！」

ここでフレデリカは気づいた。気づいてしまった。

逆さ吊りにされたとき、着衣の様子まで気を配れてなかった。押さえもされてないスカートは、きつと……………。

「いや——ッ！ もう、もう、最低です！ 忘れて、忘れてください！ 忘れろ!!」

「ガーターに合わせたのはいいけどさ、もうちよつと抑え目でも……」

「……………とりあえず、リッツ・ロンドンに戻ろうか」



「信じられん、な」

リッツ・ロンドンに戻ってから、しばらくして——およそ二〇時を過ぎたとき——メイズが訪ねてきた。

ジョン・ドウとの交戦。

暗情報で構成された魔霧。

そして現れた謎の巨大な存在。

事の仔細に至るまで、洗いざらい話した。

「僕も信じたくはない。ただ、それがお前さんの持ち込んできた依頼の連中がやったことだとしたら、一介のマフィアになんぞできることじゃない」

「確実に内乱を起こせるほどの存在——この国の中枢に入り込んでいる人間かもしれない」

「なにを企んでいるのか……：そういえば僕らが乗り込んだ会館にあったカルトはどこに行った？」

「それが……………消えたんだ」

「なんだと？」

「消えたんだ。会が存在していたということを示す公文書も届け出も、戦闘要員から一般会員まできれいに消えた。あの会について知る者さえ、すべていなくなつた」

「何もかも振り出しに戻つた、というわけか」

「そういうことになる」

そう言つてメイザースは紅茶を一口すすする。

「サイファー、正直言つると今回のことはお前の助けを借りたくはなかつた」

「だらうな。今も嫌々話してゐるって感じだ」

「だが一人では今回の件は手に余るのも事実だ。下手に意地を張つて、事態を深刻にするようなことはしたくない」

「それは僕も同感だ」

ここで二人の視線は一度交錯した。

両者ともに剣呑な光を瞳に宿して、一触即発の空気を場に漂わせ始める。

「お前は、まだ」

「ん？」

「彼女のことを、引きずっているのか？ だから、手を貸すのか？」

「……いいや、この国を、アーカムを、まだ壊したくないから。だから手を貸したんだ。タダではないけどね」

「ならいい、いいんだ」

そう言つてメイザースは帰つていった。

今後の方針についてどうするか、考えをまとめる前に一服しようと思ひ立ち、葉巻の吸い口を切つて火をつけたとき二人目の来客がノックを響かせる。

扉の前の気配、ノックの大きさから誰なのかは予想がついた。

「いいぞ、入れ」

「……お邪魔します」

「そこまでかしくまる、こゝと………」

思わず目を剥いてしまった。

薄手の、白い少しだけレース飾りのあるネグリジエのフレデリカが、おずおずとドアの隙間から顔をのぞかせている。シルクと思わしき生地、薄さは、包まれた女体の艶っぽさをいやでも想起させる。あけすけなほどに男を誘う高級娼婦のランジェリーより、よほど扇情的と言えた。とくに胸の豊満なライン、そしてわずかに透ける下着のラインは。

——なに動揺してんだ、青臭い子供でもあるまいし。

悪魔の誘惑をはねのける聖者、というには大げさだが心情的には極めて近い気分だ。しかし、相手が悪魔とは違って無垢の無自覚的誘惑なのが夕チが悪い点と言えた。

それでも葉巻を一吸いして、喉まで紫煙を満たせばそれも消えた。

ふう、と煙は奇妙な図形を描いて、空調機構にかき消された。

「具合、どうですか？」

「なんだ、そんなことか。見てのとおりピンピンしてる」

「無理はして、いませんよね？」

——相変わらず勘のいい娘だ。

隠し事なんてできやしないな、と自嘲するしかない。それももしかすると黄金の双眸の権能か。別に騒ぎ立ったり休むほどではないが、ジョンに与えられたダメージが癒え切っていないのを見透かされたのか。

「実を言うと、明日は休んでいたい気分だ」

「やっぱり回復していなかったんですね」

「別に騒ぐほどのことでも、休むほどのことでもないけどね。あくまでも気分さ」

「……お節介でしたか？」

入室してからずつと、ドアのそばでびくびくとした様子のフレデリカを傍らに招く。

二人掛けのソファは満杯になった。サイファーで一人分と少し、残りはフレデリカ

が。

「別に心配してくれるなら、それはそれでいいんだ」

「でも男の人はそういうお節介は嫌がるんじゃない……」

「そりゃそうだ。男ってモンはいつだってカッコつけたい生き物なんだ。それは僕だって例外じゃないし、フレデリカみたいに綺麗で可愛い女の子の前じゃなおさらだよ」

「ふざけないでください！ もう！」

「だから言い出しにくいんだ。痛いとか、辛いとか、悲しいとか。全部ひっくるめて押し殺して、何にもないようにふるまわないとカッコ悪すぎてな。だから、そっちから気づいてくれるのはありがたいんだ」

ぼん、と優しく頭の上に手を乗せて。

フレデリカは少し複雑そうではあった。思い切り顔に出ているのだから。

「撫でられて喜ぶほど、子供じゃないんですよ」

「そりゃ悪かった」

「だったら手をよけてください」

「やだよ」

このまま、あと五分くらい撫で続けてやろうかと思ったところで思わず手を放した。むくれた顔と目が合ったと思った時には、フレデリカの纖手はぎりりと手の甲を抓り上

げていたのだから。

「わるい、わるかった」

「ならいいんです。あんまり調子に乗らないでくださいね」

「善処しよう」

「それでいいです。善処してくれるなら」

手の甲の痛みを紛らわせようと葉巻を吸う。

煙草とは比べ物にならない、楽しみ方さえ違う煙が満ちていく——ジョン・ドウに与えられ、身体に未だわだかまつているような感覚のあるダメージも萎えていくようだった。

明日、起きているころには九割とはいかずとも八割くらい回復してくれば御の字だ。七割でも講堂には困らないが、戦闘は厳しいかもしれないが。

「で、一体何の用で来た。こんな夜遅くに男の部屋を訪ねるなんぞ、変な勘繰りの一つや二つはあるんだぞ。僕だからいいもの」

「え、サイファーさんはすぐにでも手を出すんじゃないか……？」

「そうか、フレデリカの中の僕は相当なスケコマシらしいな。心外だぞ。こう見えても純情派なんだよ」

「でも娼館に行つてたことはありませんたよね？」

「あ、あれは……そもそも、そんなこと聞くために来たんじゃないだろ？ 話を振ったのはたしかに僕だけだな、ここまで脱線するとは思わなかったわ。ちよつとばかり、お前さんをからかつてやろうと思っただけなのによ。それで男は定期的に溜まったモン出しとかないと、悶々として上の空なんだ。わかったか？」

「ごめんなさい、よくわかりました。それと、やつぱり私をからかうつもりだったんですね。善処するって言ったのに」

——善処する、だからね。しないとは言ってない。

この眩きは胸中に呑み込んでおいた。言ってしまったら、確実に温厚なフレデリカも怒り出すに違いないから。

「——今回の仕事、どうですか？」

ここで声のトーンが一気変わった。打って変わって真剣そのものだった。

「前の事件でサイファーさんは敵の体内に取り込まれて、今日はかなりのダメージをもらって。どんどん、あなたが痛め付けられているのに、私は見ることしかできなくて……」

気にするな、という言葉はあまりにもありきたりで、あまりにもフレデリカの自責に拍車をかける。

「危険も顧みずに僕を取り込んだヤツに立ち向かったのは誰だっけ？ 僕についていこ

うと努力している娘はどこのどいつだ？ そんな僕の目の前にいる健気な頑張り屋さんが自分で『見ているだけ』なんて言っちゃあいけないね」

「でも……ッ！ 私は、あの人を目の前にして何もできなかったんです。何が起こっているのか、それを理解するのに精一杯で、引き金なんて一回も引けないままで……あなたがピンチになっていたのは、わかっていたの、に……」

薄手のネグリジエに一滴、二滴と涙が落ちる。

自責からの涙は押し殺し難く、あつという間に堰を切ったのだ。

それを指で拭ってやりながら、なるたけ目線を同じに合わせる。相当な猫背になってしまいが、身長差も大きければ、座高差も相応にあるのだ。

「アレについていこうなんて考えるな。『この世に留まり続ける、最後の幻想たれ』なんて呪いの掛けられた化け物相手なんて、フレデリカにはあまりにも早すぎる。できることをやってくれればいい。例えば、いまみたいに僕の話し相手になるとか」

「……それって、慰めているつもりですか？」

言葉とは裏腹に笑いが混じっていた。泣き笑いだ。

「あー、ちよつとは考えたつもりだったんだが。ちよつとクサかったか？」

「ちよつと、じゃないです。かなり、でした」

「こりゃ手厳しい」

「それじゃ、私にできること。いま考えたので、実践してみてもいいですか？」
いつもの調子を取り戻したらしい。

世紀の大作戦を思いついた参謀のような雰囲気を漂わせた。マッサージの一つでもしてくれるのか、と思っていたところ、それはいろんな意味で裏切られた。

「どうぞー」

足を綺麗にそろえ、ソファアに腰かけたまま太ももをポンポンと叩いてみせる。

——これは、アレか？

——確かに男は喜ぶだろうが、まさかなあ。

——でも、それ以外に考えられんよな。

「あの………：膝枕なんですけど？」

「やっぱりそうだったか」

「え、何の話ですか？」

「なんでもない、こつちの話」

促されるまま、頭を乗せてみれば至福の感触が襲い掛かってきた。羽毛の枕なんて比べるまでもない、独特の柔らかさと人肌の温もりが心地よい。薄手のシルクと思しきネグリジェの生地は、生肌の温もりをチラリズムに則ったかのように程よく伝えてくる。

膝枕など、女を知らない男たちの願望が作り上げた幻想かと思っていたが、ハマる男

がいるのもうなずけた。

「誰の入れ知恵だよ」

「キャサリンさんですよ。下層から帰るときに『男が疲れていたら、やってあげなさい』って言われたので」

——言われたので、じゃねえよ。

——なんで、こういう時だけ羞恥心は欠片もないんだらうね？

そんなことを思った時、第二の衝撃が後頭部から頭を太ももと挟むように伝わってきた。

「又ツ!？」

「あ、なにかありましたか」

「……いい、いいや。なんでもない、よ」

——現在進行形で挟まれていくけどね。

かねてから大きいと思っていた胸で揺れるたわわ。フレデリカが会話に応じようと前傾姿勢をとったことで、サイファーは太ももと胸で頭を挟まれることとなる。

何とか平靜を保っているが、内心はかなり動揺している。いつも当たったり押し付けられたりということはあった。しかし、今回は挟まれている。挟まれているのだ。男としては、かなり至福だ。

だが、ここで欲情の反応一つでもやろうものなら、きつと三カ月は口をきいてくれないだろう。そういう方面には初心うぶなことは、サイファーとて重々承知しているくらいの事実だ。

だが男としては、かなり。そう、かなり至福だ。極楽だ。桃源郷すら垣間見える。

高級娼婦という商売臭さにまみれた技とは違う、日常に隣接しているが故に気まぐれに降ってくるのを待つほかない奇跡の瞬間。サイファーのとつた選択はただ一つ。

平静を装いながら、この瞬間を味わいぬく！

そう決め込んだ時だった。

「フレデリカ、明日の予定が決まってないとは言っても、早めに寝ないと肌に悪い、ぞ

……」

ハシリエッタ
闖入者のエントリーだ。

いまいち状況が理解できていないのか、サイファーとフレデリカの顔を交互に見るだけだった。おそらく動揺しているのだ、かなり。

サイファーとて内心はかなりひやひやしている。あらぬ誤解が生まれそうだ。眉間にナイフが飛んでくる可能性は十分にある。

「そ、その……」

サイファーを指さしながら、言葉を絞り出した。

「挟んじやつてるぞ、胸で。その、大きなので」

——いや、待て。

——よりよって、言うことがそれか!?

ヘンリエッタは予想以上に動揺しているどころか、きつと混乱している。

フレデリカが嫌々やっているのではない、ということが容易に読み取れることが逆に拍車をかけているのだろうか。

「うわ、ごめんなさい！ 苦しくなかつたですか!？」

——いやいや、待て待て、お前さんもか

思わずサイファーは視線で問う。

——フレデリカって、もしかして天然入ってんのか？

ヘンリエッタの返答は視線で行われた。

——ああ。

図らずも、初めてサイファーとヘンリエッタは目で会話することとなった。

H o l i d a y 硝煙臭いフアツション・シヨーク

揺れる車内。

聞き覚えのない男たちの声。

視覚を目隠しされたうえで、なにかベルトのようなものまで巻かれて封じられている。

目は生命線であった。今まで鉄火場を乗り越えてきた権能の数々は黄金の双眸が根源であった。耳には線をされて声もやつと聞こえるくらいだ。それでも監視と警戒で銃口が向けられているのは察することができた。殺気を感じ取れたのは死線を搔い潜ったことで、第六感が発達したことに他ならないからか。

——どうして、こんなことになったんだっけ。

記憶をたどる。どういわけか鈍痛が燻る頭で。

そうリッツ・ロンドンをヘンリエッタと一緒に出たときまで——。



「二人でお出かけというのも、ずいぶんと久しぶりな気がするね」

「ごめんなさい、ちよつとくらいは余裕を空けてあげたかったですけど」

「なにしろフレデリカはサイファーにゾッコンのようだから、大学の親友だってないがしろにしちゃうんだな」

「そ、そんなことありませんよ!」

両手をわちやわちやと振って否定する様子は、本気で十代にしか見えない童顔もあつてぴつたりだ。しかし、ヘンリエッタに言われた通り、サイファーにずっとべつたりだったような気がしないでもない。

功夫の手解きや、射撃の自主練習など一般の婦女子から程遠い生活をしてきた。きつと同年代の「普通」の女子は休日には友人を連れて買い物に行ったり、声をかけてくれた男性とデートに出かける。簡素な道着を着て拳を合わせたり、髪に硝煙のにおいが染みつくまで引き金を引いたりはしない。

そんな灰色の日々をしばらく送っていたから、普通のことかしたくなくなった。

銃把も握らない、功夫の構えも取らない。

——例えば。

お料理をする——とは言っても自宅にいる限りはいつも作っているのだが。

そして、友人と買い物に出かける。

昨日のこともあつてなのかサイファアは、今日一日の間だけ回復のために休むこととした。だからフレデリカとヘンリエッタは何をしようか迷つていた。仕事に関してはほとんど振り出しに戻つたようなものだから、サイファアは新たな情報を集めるように方々に連絡をしていたらしい。

しかし、情報が来なければ何もできない。勝手知つたるアーカムならまだしも、価値観さえ違ふと言われるロンドン市内だ。聞き込みの一つさえままならない可能性もある。

「今日は遊んで来い」

サイファアがお小遣い——今日一日分には、あまりにも多い——をくれたうえで背中を押してくれた。

こうして二人はロンドン市内に繰り出すこととなつた。ブティックをはしごしてもお小遣いには、まだまだ余裕がありそうだ。

「これとか似合うんじゃないか？」

「ヘンリエッタ、私の仕事着がそういうデザインなの知ってますよね？　もしかして

……」

「うん、確信犯だよ」

「もう！　だったらヘンリエッタもこういうのを着てみたらどうですか？　これだった

ら控えめですし、普段からでも着ていただけますよ」

「あの、私がスカート穿かないのを知ったうえで言ってるのかい？」

「ええ、私も確信犯です」

お互いに薦める衣服を押し付けたまま、膠着することおよそ一分。店員が『あのお客様……』と声をかけてきた時、二人はようやく我に返った。

「それじゃあ、一緒に試着しましょう」

「いいね、それ」

そして試着室に入り、五分後。

「どう、かい？」

フレデリカはとつくに試着を終えた。ゴシック調の黒いロング・ジャケットと膝上丈のスカートに、オーバー・ニーの黒ストッキングのセットだ。鏡を見てみれば、新しい仕事着のようだ。コートにブラウスにストッキングの構成は同じだが、ガーターはないし、色の構成に圧倒的に黒が多い。フリル飾りのついたブラウスさえ、灰色だった。

見目は悪くないし、それなり的高级品なので着心地も良かった。だから、堂々と出てこれた。

対してヘンリエッタは試着室のカーテンから、ひよこっ、と顔を出しているだけだ。『どう、かい？』などと言っていたが顔だけ出しているだけでは、感想なんて言えるわけ

もない。

それ以前にすごく赤面している。なんだかいつもの凛々しく頼りになるヘンリエッタとは思えなかった。なんか目も泳いでいるし。こう『きゅくく』となる何かがある。この弱みを晒したような姿を前に、フレデリカは理解した。

——人をからかいたくなる気持ち、わかったような気がします。

理解はできた。だが実行はしないし、からかい文句というべきものも出てこない。やってしまったら、それは同じ穴の貉のようで、なんか嫌だ。自分でやられて嫌な気分なのだから、親友にやるなんてもつての外だ。

——でも、なんか、こう。

——弄りたくなっちゃうんですね。

湧き上がってくる欲求を押しとどめながら、優しく語り掛けるように努めながら口を開く。

「あの、出てくれないと感想の一つも言えませんし、笑ったりしませんから」「笑わないでくれよ? ……………切実に、笑わないでくれよ?」

二回も繰り返して言ったのは念押しか。

ゆつくりとヘンリエッタは試着室から出てきた。フレデリカが選んだのはいたって普通の白ブラウスと、タータン・チェックのベストにロング・スカートだ。やや少女的

なのは否めないが、派手すぎず露出も抑え目だ。

それでもヘンリエッタにとつては耐え難いものがあつたらしい。膝下まであるロング・スカートにもかかわらず、めくれ上がらないように抑えている始末だ。

「あの、そこまで鉄壁に押さえなくても……ここはお店の中ですよ？」

「スースーして落ち着かないんだよッ！ やっぱりスカートは落ち着かない！」

あまりのうろたえぶりに、もはやアレルギーではないかと疑いが湧いてきた。大学時代もこうして買い物に出かけ、当然のようにブティックや服飾店にも行つた。その都度、フレデリカはスカートを薦めてみたが頑として拒否された。試着という名の着せ替え人形にされるのはフレデリカのほうだ。

それでも我が身のように喜ぶ様を見て、ちよつとしたファッション・ショーもした。確かに——あの時は楽しかった。

そして今は「ヘンリエッタにスカートを穿かせる」という願望を叶えられて。楽しい、楽しんでる、楽しんでるのだ。自分は、今、まさに。

「や、やっぱりダメだ………着替えるッ！」

——あ、ダメだこれ。

フレデリカの内なる悪魔が囁いた。その甘言に忠実になつて、店員を呼びつける。

「すみません、このまま会計できますか？」

「ふ、フレデリカ?! ほ、ほほ本気なのかいッ?!」
 「出来るんですか? じゃあ、それでお願ひします」

店員も乗つてくれたらしい。器用に値札だけ取り外して、着ていた服は丁寧に畳んで紙袋に仕舞つてくれる。サービスもいいし、ノリもいい。それに——背後で羞恥に震えるヘンリエッタを見て、ようやくフレデリカはサイファーたちの味わう醍醐味を知つたらしい。

——これが愉悦なんですな。

人からかう愉しみ、悦びを親友で悟つてしまつたのは心が痛む。でも念願の目的は果たすことができたし、いつもの凜々しさなどどこかへ行つてしまつた、そんなしおらしいヘンリエッタを見れて満足だつた。買い物だつて悪くないものであつたわけで。

「さ、次はご飯にしましょうか」

「うう……覚えてろ、おぼえてるんだな」

なんか声が涙声になり始めた。さすがにマズかつたか、やり過ぎたか。

「ご、ごめんなさい。あとで何か埋め合わせでも……」

ヘンリエッタに歩み寄ろうとして、店の入り口——つまりは通りに——背を向けた。向けてしまつたのだ。それに気づけたのは親友が目を見開いたのと、殺気が背中を叩いたから。

掃射は爆弾の炸裂に等しかった。おそらく機関銃の挺数は少なく見積もっても五挺は優にあるはずだ。それも短機関銃という拳銃弾を使う個人携行のものではない、何かに据え付けて使うような重機関銃だ。ブティックに撃ち込まれた銃弾は千を超えたはずだ。とつさに伏せることの叶ったフレデリカとヘンリエッタ以外は、飛来する弾丸に引き裂かれて無残なボロ切れ同然となった。

フレデリカは護身用の拳銃を抜いた。いつもの二挺ではない、無改造のアーカム45を内腿のホルスターからスカートをまくり上げて。

ブティックのウィンドウからは六台もの大型ガーニーがずらりと並んで、ヴィッカーズ水冷式重機関銃の銃口を二人に向けている。

それらに向けてフレデリカは発砲した。驚異的継戦力を誇る水冷式重機関銃群に対して拳銃による発砲など蟻螂の斧だ。だが、それで十分だ。ガーニーは車体をいくら装甲で覆ったとしても、窓ガラスであれば破りようはある。もとよりアーカム45は傑作拳銃M1911の純アーカム製クローン故に、そこらの拳銃とは比べ物にならない威力を示す。

現に威嚇でも窓ガラスに撃ち込まれれば、弾け飛ぶように砕け散る。ドアに着弾すれば車体は揺れる。

その隙に、ヘンリエッタとフレデリカはブティックの裏口へと回る。

その途中でノリの良かった店員が倒れているのが目に入る。はみ出した眼と目が合った。

——ひどい、こんなの。

ぎりりと歯噛みしつつも、足は休めない。後ろで物々しい音が聞こえてくる。

従業員の詰め所を抜け、ロッカー・ルームを通り、裏口のドアノブに手をかけた。

わずかに空いた隙間から、ヘンリエッタが身を躍らせる。その手に握るのは小さくも鋭い白刃。人を殺めるために研ぎ澄まされた一振りのナイフ。

待ち伏せしていた男を一撃で刺し貫いた。横隔膜に一撃だ。一言も発することなく、麗人の手によって死したのだ。

フレデリカも飛び出した。裏口は狭い路地につながっていた。大通りのほうから来た増援に拳銃弾を雨霰と撃ち込む。替えの弾倉を込めながら、増援が来たほうとは別の方向に走る。

大通りは大騒ぎだった。

ブティックの機関銃掃射の銃声は一带に響き渡っていた証拠だ。

逃げ惑う人々の記憶には昨日の騒ぎが思い返されている、等しく。故に狂乱は予想以上にひどかった。女子供を轢いてでもガーニーで逃げる者さえいた。

その中に殺気を放つ者がいる。濃厚なものを、二人に叩き付けている。

「散らばって！」

トンプソン短機関銃の銃口を認めたとき、フレデリカは叫んだ。同時にアーカム45を発砲する。頬を銃弾が横切った。

逃げ惑う日々とが照準を妨害する。構わず発砲するなんて凶行はできない。先ほどは運よく車線上に誰もいなかっただけに。そんな葛藤も関係ないと言わんばかりに、敵は短機関銃を掃射する。巻き添えを食った一般人の肢体を踏みつけ、じわりと距離を詰めてくる。

おまけに——ヘンリエッタの見立ててくれたゴシック調の一式を着たままだったのがマズかった。フリル飾りに気取った黒基調は雑踏の中、恐慌状態に陥った中でも嫌に目立った。敵にとっては、とにかく見つけやすいことこの上ない。

「死ねえ！」

ブローニングM1902——アーカムでの違法コピー品で何度も見たことのある銃だ。M1911の原型となった名銃を構えた男が突如細い路地から飛び出してきた。常人なら覚悟を決めるはずだ、死への——常人であれば。フレデリカは違う。常人なんて枠に収まりきらない超人から、生き抜く術を教わった。そして——おそらくは彼女として普通ではないのだ。

「遅すぎます！」

拳銃を握らぬ左腕が跳ね上がり、銃口を上向かせた。男の懐がガラ空きになり、地震に銃口を向けられていない状況から瞬時に懐へと接近。腹に三発、崩れ落ちたところに眉間に一発。最後に拳銃を奪い取る。

アーカム45に再装填を終えると、M1902を左手に構える。

二挺拳銃——実用性皆無のスタイルだが、これが本領発揮できる。

そして幸運は重なった。逃げ惑う一般人はいなくなつた。ここにはすでに誰もいない。フレデリカと彼らを除けば。

二挺拳銃の射撃は得物が変わつたとしても、その精確さに差が出るわけがなかつた。あらかたの弾倉を撃ち尽くすころには、かなりの死体が出来上がる。

二挺の弾倉を排出した時だつた。

——どぐつ。

後頭部に衝撃。回る視界。脱力する。

——殴られた。

そう理解しても、もはや何もできまい。目の前に落ちた二挺はホールド・オープンし、何も殺めることはできない。それも誰かの足で遠くに転がされていった。

でも、それでも。

手を伸ばそうとしたところを。

今度は複数。一斉に固い何かで殴られた。覚えてるのは、それだけ。



——そうだった。

頭に残る鈍痛はそのためだったか。あれだけ殴られたというのに無事でいられるのは、もはや常人の範疇をついに超えてしまった証拠だろう。

——ヘンリエッタは無事かな。

別れた親友のことを思いながら、自分が運ばれているのを感じていた。椅子に座らされて手首を縛られた。

——大脳部の修復は完了。

——拘束状態からの、迅速な脱出を推奨。

双眸が伝える無機質な声が、ようやく萎えてきた鈍痛に響く。

——できたら、もう、やっています。

目隠しが剥ぎ取られた。視界が三重になって見えている。顔面に水をぶっかけられて、ようやくまともな視界が返ってきた。

「おい、テメエらこんなお嬢ちゃんを二回、それも二回目は四人がかりで一斉に殴ったんだってな。大の男が何やってんだ」

目の前にいた男は近くに控えていた部下と思しき男たちに、一発ずつ鉄拳を食らわせていった。鼻血が飛沫となって、齒まで飛んでいる。相当な力があるに違いない。

フレデリカの目の前に置いてあった椅子に座って、ようやく男の全貌が明らかになる。

ベージュのフェルト・ハットにトレンチ・コート、ワイン・レッドのスリー・ピースで決めたスタイルは確実に堅気の間人ではないと一目で察せられる。それも貫禄というものがかなり違う。歳は六〇を過ぎてはいるはずだ。にもかかわらず半分以上年下の血気盛んな部下たちを、拳の一発で動けなくさせるのは凄まじい何かがある。

「さて、お嬢ちゃん。見苦しいものを見せたな」

浮かべる笑顔は孫を目の前にした老翁のものだ。しかし、その目はどこまでも研ぎ澄まされて、冷たい輝きを有している。フレデリカもたくさん見てきた一級の悪党がする目、人として大事な何かを捨てた目だ。

「ここに呼んだのは他でもない。サイファー・アンダーソンをここに呼び出せ」

「なぜ……？」

「ま、いきなり言っても理解できんわな。俺たちはアルバニアン・マフィアだ。本拠地は

キングスクロスだが、ここはロンドン郊外にある支部だ。俺は支部長をやっている。キングスクロスの本部から指令が来てな、お宅のデカイ男がやってくれたことにご立腹なんだ。メタルエリア鋼鉄区画と言えは分かるか？」

心当たりはあった。自分もそこにいたのだから。

「機関騎士まで投入したというのに、全員返り討ちだ！ 全員だぞ!? 補欠の連中をアーカムで雇うのにも金が要る。それが一発でパアだ！ なのに本部はアーカム参入をせつついてくる！ なら邪魔者の首を本部に持っていくしかない。それで納得してもらおう」

「私も、いましたよ………騎士を二体も潰しましたよ」

「くそつたれ！ このアバズレ女！」

思い切り殴られた。歯が飛ばなかつたのが不思議なくらいだ。それくらい力強い拳で、その上怒りで加速されている。男の手に血が滲んでいるのが、その強さの証拠と言えた。

支部長というべきなのか、彼は完全に凶暴さを露わにした。

コートと上着を部下に預け、西洋剃刀を振り回し出す。

「こいつで二度と見られない顔にしてやる！ その前に犯す！Fuck 犯してやる！Fuck You 代わる

代わるで前の穴と後ろの穴が擦り切れて繋がるまで、犯し抜いてやる！ その後で顔の

皮を一センチずつ、こいつで剥いでやるのさ。皮が全部なくなるまでな！ その前に、
だ」

鼻にいいパンチが来た。

男のものじゃない。たぶん、部下が殴ったのだ。

「部下に一発ずつ殴らせてやる。仲間を殺されて、気が立っている。気の早い奴は股間にテントを立てているがね」

また次の男が現れた。シャツの袖をまくって、盛り上がった上腕二頭筋を見せている。力強さをアピールすることで拳の強さを強調し、より恐怖を煽ろうとしている魂胆のようだ。

びし、と指さして今から殴ることを予告。腕を振りかぶった。

自由になるには首から上だけ。傾けたとしても、拳を避けることは叶わない。

だが、それで十分。十分すぎる。準備だって、整っている。

——どちっ。

肉の潰れる音。男は固まった。

やり過ぎだ、と冷やかす声があちこちから響く。ぱたたと血まで滴る始末だ。

拳の頭から、折れた骨が皮膚を突き出して覗いているのを見るまでは。

額で拳を受けることで、逆に打った側を砕くという防御をフレデリカは土壇場で実行

したのだ。

「Fuck You
殺せ！」

砕かれた拳の痛みに苦悶しながらも、男は声の限り叫んだ。だが、もう遅い。

足は拘束されていない。手さえ自由にできれば、逆転の可能性はぐんと高くなる。複数回殴られながらも手を縛るなわの結び目を少しづつ解いていき、今ここで解き放つた。

猫のごときしなやかな跳躍からの膝蹴りは男の鼻つ柱に命中した。崩れ落ちていく男の身体を引き寄せると、腰のあたりを素早くまさぐった。

——あつた！

ベルトに挟み込む形で一挺の拳銃と弾倉があつた。抜いてみるとコルト社製のM1905だ。四五口径の高いマン・ストツピング・パワーは非常に頼りになる。

周りで控えていた男たちは全部で六人。弾倉の分を合わせれば十分に対処できる人数だ。

叩き付けられる殺気を冷静に読み取りながら、その濃さで行動の速さを判別し、自分の位置と彼らの動きから弾道を予測する。行動の早い男たちは真つ先に銃を向けてくるから優先して対処し、予測される弾道から安全地帯を導き出せる。

交錯は一瞬。

放たれた銃声は六回。フレデリカが撃った分は四回だけ。

割り出した安全地帯への迅速な移動は、ほぼ反射で発砲した男たちに対して同士討ちという結果をもたらす。半面、フレデリカは落ち着きながらも迅速に照準を済ませ、連射と言つていい速さで四度発砲する。同士討ちは二人の命を奪っていたのだ。

あえて、自分をここに連れてくるよう命じた支部長は生かしておいた。

殴りかかろうとする拳に向かつて、一発だけ撃ち込んだ。血飛沫に交じつて、白百合のごとき美貌を叩くものがあつた。つまみ上げてみれば、それは支部長の指先だった。拳は無残にも一発の銃弾で、呆気なさささを感じるほどに弾け飛んでいる。

苦悶の絶叫を上げて転がりまわっているのを、フレデリカは容赦なくつま先で脇を蹴り上げた。

息が詰まって、全身が硬直した瞬間に、背後へ回つて一瞬のうちに締め上げる。決まってしまうれば脱出はほとんど不可能と言つていい。もがけばもがくだけ、脳への酸素供給は滞り、酸欠への往復路なき道を走り抜けるだけ。さらにこめかみに銃口を突き付ければ、完全に拘束は成り立つこととなる。

「出口はどこですか？ 外へ行く出口です」

「ぐえ……ここは地下だ。階段を……まずは、上がるんだ」

拘束を維持したまま、フレデリカは歩みを始める。男を半ば引き摺っているようなも

のなのに、その足取りに覚束なさは欠片もない。

自分の内で何かが燃え上がって、力に変わっているのを感じるのだ。

——敵性存在、総数は二十四人。

——戦闘による排除を推奨。

双眸からのメッセージは言われるまでもないことだ。とつくに戦闘が避けられないことなど、脱出を決めたときから覚悟している。

——元から、そのつもりですから。

階段を上がって地上一階へと出れば、構成員が大挙してやってきた。装備は主に散弾銃だ。狭い室内において拡散する散弾の破壊力は筆舌に尽くしがたい。それも対人用の十二ケージから、大型獣用の四ケージまでバラエティに富んでいる。

「やめろ！ やめろ、撃つんじゃねえ！」

しかし、フレデリカへの発砲は支部長への発砲と同義だ。拘束して、首を絞めた状態で肉の盾としているのだから。奪った拳銃だけでこの場を切り抜けるには、これ以外に方法は思いつかなかった。

「俺を殺す気か、バカ野郎！」

「ですが……」

「なんだ！」

「キングスクロス本部もサイファー・アンダーソンの拘束を大至急やれ、と」
「うるせえ！ 俺はまだ死にたくな……」

言い争いを聞く気はない。

容赦なく引き金を引いた。四五口径の力強い反動も三八口径の弱装のように感じられてはおかげで、無駄だ魔はほとんどなかった。

片腕だけで器用にリロードして銃口を向け直せば、構成員たちはいつせいに交代を始める。

人質のことを考慮に入れているうちに、次々と殺されてしまうと判断したのだ。人質ごと殺す度胸など、巻き込まれる者の立場を考えれば真つ先に排除される。

フレデリカの銃口だけが一方的に咆哮した。

このまま突破できる。そう思ってしまった。外への出口が、すぐそこにあつたのだから。

「うぐっ！」

背中を何かで殴りつけられる。

身体の空気をすべて押し出されそうになる。一瞬だが呼吸さえ封じられるほどの一撃。支部長の拘束は無力化された。現に支部長はようやく解放された喉を使って、不足気味だった酸素を吸いこもうと必死になっている。横目でフレデリカを見る顔は、憤怒

に染まり切っている。酸欠で赤ら顔なのが拍車をかけてもいた。

もう一撃食らって完全に倒れ込んでしまう。やったのは禿頭の筋肉ダルマだ。二の腕にいたっては子供の頭くらいは優にある。その手に握られているのはブラック・ジャックだが、歩くたびにジャラジャラと耳障りな金属音を立てている。おそらくは重金屬の礫でもいれているに違いない。

「よくもやってくれたな、ええおい？ 何人やられた？」

「十二人です」

「そーか、おいお嬢ちゃん、こんなにぶつ殺してくれちゃタダで済ませるなんて無理だな。まずは両手両足に一発ずつ撃ち込ませてもらうぜ。その後で全員で輪姦まわしてやる。涙も出ねえくらいやってやる！」

フレデリカを二度も殴りつけた禿頭は、支部長にコルトSAAを手渡した。鷹なのか、驚なのか、猛禽類を象ったエングレーブを入れているあたり、おそらくは愛用の銃なのだろう。

潰された手とは反対の手で器用にガン・スピンさせながら、フレデリカをいかにひどい目に遭わせるかの算段を立てているのだろう。その下卑た笑みが雄弁に物語っている。

万事休すか。

覚悟を決めようとした時だった。

——ピンポーン。

電気式呼び鈴チャイムの音が間抜けに響いた。

「なんだなんだ？」

「デリバリーが来たみたいですよ」

「さっさと追い返せ……いや、デリバリーの兄ちゃんに混ざってもらうのもアリかもな」
「それは魅力的だが、今はお断りしておくよ」

聞き覚えのある声、いつも聞いている声、そして——いつも自分を助けてくれる彼の声。

何かが出口を吹っ飛ばした。粉塵が爆発的に舞い上がって、視界を覆い尽くす。

ようやく晴れてきたところで、その姿を見ることが叶う。灰色のロング・コートを身に纏い、目深にしつかりと被ったテングロン・ハットのつばから睨み付けるように輝く銀灰色の瞳。なびく橙に近い茶髪も、ガンマンを気取ったジーンズとシャツプスの組み合わせも、全部いつも見ているものだ。

「とりあえず鉛玉が一ダース、お前さんたちの命もおまけしてやる」

「サイファーさん……！」

「悪い、遅くなった」

言い終わると同時に『Howler In The Moon』が轟く。七〇口径も規格外の巨弾は人体など余裕で爆散せしめる。それは拳銃という括りすら超えて、もはや個人携行の火砲と言つていい。

アルバニアン・マフィアの構成員にその暴威はいかなく発揮されることとなる。構成員総数は二十四人。支部長を含めて二十五人。

フレデリカが倒したのは十二人。

サイファーも十二人。

支部長だけを残して、ロンドンの支部はもぬけの空となった。

「休む暇もありやしねえな」

懐に巨銃を仕舞い込むとつかつかとフレデリカのもとに来た。

「何もされてないか？」

「けっこう……殴られています」

貞操の危機は免れた。だが——いくら丈夫になったと言つても元は市井に生きる町娘の身だ。口の中で血の味がするのは唇が切れているからであり、鏡を見ていないから何とも言えないが痣の一つや二つは確実にある。身体だって、しばらくは消えない痕が残るはずだ。なにしろ筋肉ダルマに二回も殴られている。

その元凶も力強さを感じさせた風貌を、一切の原型を残すことなく壁にこびりつく肉

片に變じていた。

「そうか、わかつたよ」

取り出したのは黄金に輝く長銃身のアーカム45。一丁だけを右手に握り、素早く二連射する。逃げようと、恐怖でもつれる足を奮闘してでも前に出そうとした支部長が転がるように倒れ込んだ。両膝を撃ち抜かれたのだ。

「よくもウチの従業員に手を出してくれたな——つて、こんな月並みなセリフはいらないかな?」

「へ、へへっ……何してやがる。殺すなら、殺しやいだろ」

「その前に、バックについてるヤツを教えてもらおうか?」

「そ、そんなのキングスクロスの……もごっ!」

アーカム45の銃口をサイファーは躊躇うことなく、支部長の口に突っ込んだ。

「嘘をつくなよ?」

フレデリカでさえ耳を疑いそうになった。

部下は確かに『キングスクロスの本部がサイファーの捕縛を命じている』ことを支部長に伝えていたはずだ。急いでいることも。

嘘であるわけがない。マフィアは完全なる縦社会だから、上の命令を絶対としてい

命令をでっちあげようものなら、裏社会からも追放の憂き目に遭う。

「悪いがキングスクロスの本部とは、デリンジャーが話をつけてくれた。僕とフレデリカが暴れた件も、いろいろと手回しの後に手打ちになった。個人的な事情ではらわたが煮えくり返っているヤツはいるかもしれないが、それにロンドンの支部を動かすなんて大げさすぎると思わねえか？ 本当のことを言え、誰がバックについてる？」

ここでサイファアは銃口を突っ込んだ時に、わざと倒した撃鉄をゆっくりと起こす。これで引き金は軽くなった。扱いに不慣れなものが握れば、身じろぎ一つで暴発しかねない。

支部長のこめかみに一筋の汗が流れた。

「……喋りそうにもないな」

アーカム45を引き抜くや、銃把で思い切り殴りつけた。完全に意識を手放し、ぐったりとした様子の支部長を足で転がす。生け捕りということなのか。

「サイファアさん、その人は？ それとヘンリエツタは？」

「あとでメイザースに引き渡す。ヤツのほうが情報を引き出すのがうまい。ヘンリエツタは無事だ、外で待機してもらってる」

「よかった……」

「ひどく心配してた。早く安心させてやれ」

胸をなでおろしたのち、ヘンリエッタのもとへと駆け出したのであった。

Dream（真実は可憐な唇より紡がれる）

——浮かんでいく。ふわふわ。

——沈んでいく。ずんずん。

目が開かない。何も聞こえない。なにも——感じない。

どこにいるかもわからない感覚だ。たぶん、現実ではないことはわかっているけれども、場所だけはどうしても判別しかねた。

——夢に似ている。

たしかに、この現実感の異様な薄さは夢を見ているときと同じだ。この五感のすべてが機能せず、ただ記憶の整理で生じる光景を見るだけ。しかし、夢を見ているという自覚があるということは明晰夢ということなのか。

急に感覚が戻ってきた。触感だけが戻って、失われていた平衡感覚がよみがえる。まるで濁流の中に放り込まれたように、上下左右にかき回されている。

それが急に収まったかと思つた時、投げ出されるように急加速した。

「うわっ！」

落とされたのは絨毯の上。毛足の長い、豪華なもの。

煌びやかなシャンデリアの光は柔らかかにして眩い。どう見ても最高級品だと言ってよかった。

周りを見回してみると、お姫様の部屋という言葉がしっくりくる場所だ。

「あ……」

人が、いた。当たり前だと言えばそれまでだが、間抜けな声を出してしまったのはそこではない。雰囲気明らかに違うのだ。この部屋にふさわしい、人の上に立つべき存在であると。その身を飾るドレスも結び上げた髪も、すべてが霞んで見えるほどの衝撃。^{インパクト}

きつと一生かけても、これほど間近でお目にかかれる機会などないはずだ。

「す、すみません。今出ていきます……」

あわてて奥のほうにある扉に行こうとしたのがいけなかった。転びそうになった先には、あの彼女がいる。

ぶつかる、と思つたが衝撃はない。すり抜けたのだ。それどころか目で彼女を折つた先にあつた鏡に、フレデリカの姿は映っていない。

この場が明らかにおかしいことに、フレデリカはようやく気付く。

^{トキ}音声映画の一場面のように、自分はこの場を見るだけの傍観者。そうとしか思えなかつた。

ならば、彼女は何者なのか。そもそも、なぜこの光景を見ているのか。

その疑問はたった一言で吹き飛んだ。

『サイファー』

声をかけたその先を、思わず見てしまう。なぜ、一目見ただけでもわかるほどの高貴な彼女の口から、サイファーの名が出るのか。視線の先にいたのは、間違いなく彼だ。サイファー・アンダーソンがいる。今の彼と比べてみても明らかに違う。どこか厭世的でシニカルに笑う姿と違って、ソファーに座り込む彼にはまだ現世を生きるための気力があるように見える。

ただ、それも終わりを迎えようとしていた。

ここがサイファーにとっての転換の瞬間だったのかも知れない。これが夢やまやかしてではなく、本当の過去的一幕であればの話ではあるが。ただ、自分が過去の光景を見ているという確かな自覚はあった。おそらくは、この光景も黄金の双眸が持つ権能の一つかもしれない。

『やはりダメなのか。後生だぞ』

『それでも、あなたを道連れにするわけにはいかないの』

『契約を結べば、お互いに一蓮托生。だから、僕はここまで来たんだ』

『女王と共にあり、女王と共に死ぬ。それが女王陛下バスタスの魔犬カウイ。けれど、私は契約を結べる

だけの力がなかった。そこにあなたがやってきてくれた』

彼女はサイファアの右手を両手でそっと包み込む。

慈しみを込めた眼差しと。謝罪の念を込めた表情。

サイファアの顔はいまだに暗い。

『ようやく生き過ぎた人生に終止符を打てる、シャーロットと共に生きて役に立てて死ぬるなら本望だった。それも叶わないとはな。こんな化け物を野放しにしておいたら、大英帝国を真つ二つにするかもな』

『ありえないわ、そんなことは。あなたは私を愛しているから、だから私を悲しませることほしくない』

信じがたい思いでいっぱいだった。

あのシニカルな笑いの根底にあるものが、生を手放したいという願望からくるものだったとは。きつと見た目通りの年齢ではないというのはなんとなくわかっていたし、おそらくは普通の人間より死にくいのだと。でも、死を望むほどに生き過ぎていたとは。

だからこそ、最高の形で人生に終止符を打とうとしたのだ。

二人の会話内容から察する限り『契約』を結べば、彼女の死はサイファアの死となるのだ。そのかたちを彼が望んだ理由は一つ。

愛してしまつたから。

手の届かぬ彼女を愛してしまつたから。叶うことない想いを秘め、サイファーはせめて添い遂げようとしたのだ。彼女の役に立って逝こうと。

その一縷の望みさえ断ち切られても、サイファーに怒りが無いのは想い故か。自分の身勝手な感情で、愛する者の笑顔を曇らせたくない。彼女が愛する大英帝国を打ち砕いてまで望みを突き通さないのも、きつとそのためなのだ。

『さあ、そろそろ時間よ』

『ああ、行つてくる……女王陛下ユア・マジェステイ』

『ええ、私は夫のもとへいかなくては、ね』

涙が頬を伝つて、落ちる。絨毯にはシミ一つできない。

ああ、なんと運命は残酷か。

愛した人は別の男の伴侶で。その仲を引き裂いて攫うことも、せめて添い遂げることさえ叶わない。望む最後さえ迎えられず、また生き過ぎた人生を続けさせられる。それほどに終わりを乞う理由は――。

――置いてかれるのが、嫌なんだ。

――何回も、そういう目に遭つたら。

――きつと生きることだつて、嫌になつてしまう。

親しい友人が先に逝く悲しみを、フレデリカは想像さえできなかつた。自分だけが変わらぬまま、周りだけが老いさらばえて、死んでいく。真綿で首を締めるような時という名の毒の、確実性と絶対性に抗う術があるというのか。それをサイファーは何度味わつたのか。恋人、友人、親、家族とその数はきつと計り知れない。

待ち構える孤独に最後を乞うたとしても、不思議ではない。

もし、彼のそばにいて、添い遂げられるだけの資格と能力があるのなら。

——せめて、私が。

そんな浅ましい思いが芽生えるのであつた。



「おう、お目覚めか？」

メイザースから連絡を受けて指定の場所に移動する車内で、前日の疲れもあつたのかフレデリカはすうすうと寝息を立て始めた。しかし、途中からうなされだしたうえに、寝ながら涙を流すという状態に陥つた。

さすがに何かあつたのかと思つたが、起こすのも悪い気がしてゆっくり運転するといふ結論に、サイファーは至つたのであつた。

「寝ながら泣き出すなんて、器用なこった」

「すみません……」

「気にするな。寝てることも、泣いた理由も詮索しないでやる。言いたくなったら言え。ヘンリエッタだっているんだ」

隣にいたヘンリエッタも声をかけてきた。二人は後部座席で隣同士にしておいた。

「私だつて、力になる」

「ありがとうございませす」

ヘンリエッタはそう言ったものの、サイファアは望み薄だなど思っていた。言つてくれるのには時間がかかるだろう。恥ずかしがり屋なのか、抱え込む性質なのかはわからない。せいぜい怖い夢を見たという程度であればいいな、と思うことにした。

こういう繊細な心の機微というものは、同性に任せておけばいい。今まで自覚し訂正を勇気づけられたことがあったか、と自分に問うてみれば『ない』と速攻で返答できるのだから。

あその後、アルバニアン・マフィアの支部長はメイザースにきちんと引き渡した。おそらくは洗いざらい吐かされたはずだ。しかし、心当たりは方々から恨みを買いまくつているせいでありすぎてわからない。

少し前のホーランド博士の事件で『メタル・エリア鋼鉄区画』で一戦交えたのが原因だろうと、おお

よその見当をつけてはいるのだが。しかし、それ以外はありすぎる心当たりの内の一つなのでわからないのだが。

「さて、鬼が出るか蛇が出るか」

そろそろ目的地か、と思つてガーニーを停めた。いたのはメイザースではないが、政府機関の人間と思わしきスーツの男だ。おそらくは王室関係者か、身のこなしから近衛兵だと推測できる。

「お待ちしておりました」

「メイザースはどこだ？」

「そこへは、我々が送り届けます」

車体の長いリムジン型のガーニーのドアは、手も触れてないのに開いた。わずかな蒸気音から運転席のスイッチで、蒸気圧式開閉機構が作動したのだろう。こんな洒落た装備を備えたガーニーを迎えに使うとは、思つていた以上のVIP待遇ということか。

三人そろつて車内に入った。天井の低さなど関係ないように、バーテンダーがカクテルを作つてくれている。だが飲むという気は全然しなかった。

「なんで、わざわざ別のガーニーを用意したんでしょうか？」

「あの性悪魔術師のことだ。僕に当てつけの一つでもあるんだろうよ」

「……どうしてメイザースさんと、そこまで仲が悪いんですか？」

「僕は嫌ってないんだが、あちらは相当嫌ってる。というより恨みとか憎しみのほうが正しいかなあ。細かいところは漢の事情というやつだ」

「仲直りもできそうにないですね」

「二人ともその気がないのだろうよ」

「ヘンリエッタ、それは言い過ぎじゃ……」

「いいんだ。間違つてはいないことだから」

ヘンリエッタの言う通りだ。メイザースの頑固さは付き合いの長さからわかっている。だから彼の誤解を解こうとすると、かなりの精神的労力を費やすことはわかり切っている。あちらのイヤミを聞き流すか、嫌がついているポーズでも取っておけば勝手に留飲を下してくれるだろう。

それでも踏み込んではいけない領域はわきまえてくれるはずだ。と思っていたが、それは勝手な認識だった。見えてきた洋館の屋根の造形を一目見た途端、封じていたと思つていた思い出がフラッシュ・バックする。

——サイファー。

声を、思い出した。

最も早く忘れる人の思い出は、声だという。それを未だにありありと思い出せるということは——。

「まだ、みつともなく引き摺つちまってるのか……らしくねえ」

「どうか、したんですか？」

「顔が青いぞ」

何かにつけて気を遣うフレデリカはともかく、ヘンリエッタまで加わるとは珍しい。親しいもの以外には割と淡泊なのに。

顔に出るのも無理はなかつたが、まさか顔が青くなつていたとは。もはや苦い思い出を通り越してトラウマと化しているともいうのか。心が強いという自惚れはないが、弱いという認識はしていなかった。だが、これでは精神を患つた人間のようだった。

まだ自分は弱い。力で飾って、強く見せているだけの、裸の王様だ。銃を覚えて、剣を極め、力と付き合つても、心の奥底に巢食つた弱さは拭え切れていない。生き過ぎた時を幾星霜重ねたとて、今まであつた人間たちの強さに肩を並べられるわけがない。

戦慄の日々に身を置くことすら厭わず、事務所の間戸を叩いたヘンリエッタ。

力と向き合うことを選び、そのためなら幾多もの死線をくぐる覚悟を決めたフレデリカ。

それに比べて——『臭いものに蓋』の理論で封じた思い出を想起されるだけで、顔を青ざめさせている始末だ。化け物だ、怪物だ、フリックスと忌み嫌われた自分が思い出一つでここまで打ちのめされている。

——くそつたれ、近年稀に見る最高の嫌味だぜ。

本当なら口を突いて出たはずなのに、出てこない。それだけ気力も気概も萎えているということか。

「お三方、到着です」

「……………ああ」

見慣れた正門に懐かしさを覚えながらも、足取りは鈍重そのもと言っている。

庭園中央の噴水も、蔓薔薇アルパティンの花畑も、かつて見た光景と全く変わっていない。まさかメイザースがサイファーのために、ここまで再現させたというのか。ああ、もうまったくもって最高の嫌味だ。

「気分はどうかね、サイファー？」

「最悪だよ、メイザース」

「それは重畳だよ」

スリー・ピースにインバネス・コート、さらに片眼鏡モノクルまでかけているとなつては、もはや気障で胡散臭ささえ感じてしまう。

ここはロンドンの郊外にある洋館だ。本来であれば王族・貴族のみが立ち入れる場所だが、住まうものがないのをいいことに集合場所にしてしまったらしい。

「懐かしいだろう？」

「ああ、懐かしすぎて、思い出したくないものも今ののように思い出せる」

「サイファアーさん、ここって一体……？」

「古巣だよ」

ぼかした返答をしておくのが無難だ。真実を言ったところで、受け入れる以前の問題だ。おそらく理解が追いつくまい。常識を外れた超常のレベルの問題なのだ。

玄関をくぐって、エントランス・ホールで真つ先に入るのは肖像画だ。

二メートルを超す巨躯のサイファアーよりもさらに大きいそれは、貴婦人の姿を描いた肖像画だった。その顔を忘れることは、サイファアーにはできない。これから先も自分を苛むのだ、負い目として。

ただフレデリカの反応が異様だったのは気になった。顔は青ざめて、目の焦点が合っていない。何かあり得ないものを見たように、うろたえている。彼女との面識は確かにない、と言い切れるが百パーセント確実ということはあり得ない。おそらくはフレデリカ自身もサイファアーも予見しえない、何かが起こったとみるべきか。

「ここもまるで変わっていない」

「そうだろうか？ あれから誰も住まないまま、維持だけがされていたようなものだ。こうして臨時の集合場所や会議場、それかサロンに使われるくらいだ」

「いつそ取り壊してくれればいいのに」

「建前を言うな。忍びなく感じるの、お前のほうだろう」

「それは否定できんな」

案内されたのは地下だ。ここも残っていたとなれば、きつと用途も変わってはいないはずだ。

椅子に縛り付けられた支部長がいる。昨日のフレデリカと立場が逆転しているようで、非常に皮肉が効いていて笑える光景だ。

「気分はどうだい？」

「……………何も喋らんからな」

この地下は取調室という体裁を整えただけの拷問部屋だ。サイファーたちの背後には血鎧の浮いた拷問器具の数々が、久しぶりの役目を待ちわびている。

ならば存分に使ってやろうではないか。

「メイザース、換気機構はまだ健在か？」

「もちろんだ。使うと思つて用意しておいた」

「ありがと…………フレデリカは出てろ。見せるもんじゃないんでな」

「…………わかりました」

部屋に支部長と二人きりになって、扉が閉まったのを確認する。

道具箱から釘を出した。太さは多少太いくらいだが、長さは一〇センチ近いもので表

面には幾何学模様めいた溝が彫られている。肉に食い込み、苛むための。

椅子から支部長を開放すると、あらかじめ近くに寄せておいたドラム缶に抱き着かせるようにして縛り付ける。だが、拘束はまだ不十分だ。

——だから釘を。

——手のひらに、先をあてがって。

——叩き込む。

獣の絶叫が上がったことに眉を顰めることさえせず、今度は手首のあたりにもう一本打ち込む。それを反対の手でも行つて、足は裸足にさせてから甲と足首に左右二本ずつ打ち込んだ。その頃には激痛のあまり、白目を剥いて、何もかも垂れ流しになつて気絶していた。

ブリキのバケツ一杯になつた水をぶっかけて、意識を無理やりにも覚まさせる。唸り声を上げて目覚めたことから、痛みによるショック死は免れたらしい。ただ、その点は間違いなく不運であつたと言えるはずだ。

「さて、言いたくなつたら、いつでも言つていいからな」

煌々と赫く灼けた石炭をドラム缶の中に落とす。

また一つ、また一つ。じゅう、と肉の焼けるきな臭さが広がる。

悲鳴を上げながら洗いざらい吐き出した時には、地下にはいつぱいに人の焼け焦げる

異臭で満ちていた。



メイザースさんと二人きりはとても気まずく感じてしまう。

サイファアーさんはここに来た時から、様子が変だった。たぶん、移動中の車内で見た夢のようなもの、それで見えた光景にきつと関係している。

そう確信できたのは、ある部屋に通されたから。

「……は……!?!」

既視感。私の頭の中を満たして、凄まじい衝撃を与えてくる。

見覚えがある。ある、というよりは、ありすぎていた。ここに来る前に見た光景だ。あの夢で見た部屋が、現実となって目の前に存在している。

あの肖像画もそう。描かれていたのはサイファアーさんと一緒にいた、あの女性で。

ここはあまりにも、ぴたりと合い過ぎている。示し合わせたように。

「見覚えでもあったかね?」

「……いえ、なんでもありません」

「隠し立ては、無用だ」

キラリ、と。片眼鏡モノクルが光ったような気がした。

見透かされている、と確信した。

「その眼に見えぬものはない。もつと言うと『見たいものは、ほとんど見れる』ということだ」

「何が、言いたいんですか？」

「サイファーと肖像画の彼女を、過去の光景で見たな？」

言うしかない。追及を躲せる自信はないから。

「たぶん、過去なんだと思います」

「サイコメトリーの一種だろうな。この建物に染みついた過去の風景に、君の眼が反応して見せたのだろう」

メイザースさんの言うことが本当なら、まだ私は力を使いこなせていないということだ。見ようとも思っていないのに、見せられてしまったのだから。

「その中に俺の知りたい真実がある………女王陛下バスクの魔犬ヴィルという言葉はサイファーは君に話したか？」

首を横に振った。聞いたことのない単語だったから。

永久幻想遺物フエンダスマゴリア、という言葉なら聞いたことがある。でも、それが何なのかは教えてもらっていないけれど。

「なら、そこから説明する必要がある——簡単に言えば、女王に仕える犬だ。有事の際には大英帝国の最大戦力として力を振るう、化け物フレイクスなのだ。そして女王と共にあり、女王と共に死ぬ。そういう存在だ」

「……でもサイファーさんは生きている」

「察しがいいな。肖像画はサイファーがかつて仕えていたシャーロット王妃を描いたもの……完成したのは独立戦争終戦から一年が経ったころだ」

感じていた予感はずいぶん変わった。

きつと見た目通りの年齢ではないと、うすうす感じてはいたけれど。でも独立戦争と言えば、もう百年も前のこと。あの光景のセリフから推測すると、もつと長い年月を生きていたと思う……終焉おわりを望むほど。

おそらくサイファーさんの感覚は人間そのものだと思う。自分を嘲って言う『化け物』の感覚なら長い時間を生きることには抵抗はないはず。でも死を望んでしまっているのは、人間の感覚を——心を持つているから。何が彼をそこまで追い込んだのかはわからないけど、たぶん多くの人たちと知り合って、そして時とともに永遠の別れをしてきたから。

「女王陛下バスクカヴィルの魔犬は死をもつて、その勤めを完遂する。護国の刃が巡り巡って、大英帝国に向くことのないようになる。故に王妃となるものには契約を結ぶための巫女としての

才覚が必要なのだ。だが、サイファーは生きている。その力を以て、契約を打ち砕いたのだ。務めを果たさなかった、その一点が許せんのだ。君は何を見た？ シャーロット王妃とサイファーに何があつた？」

二人の確執、その理由がわかつた。

メイザースさんは勤勉で、頑固で、務めを果たしてないと思つているサイファーさんを許せないだけで。

サイファーさんも誤解を解こうという気はないのかもしれない。もしかしたらシャーロット王妃のために、口をつぐんでいるのかもしれない。

「……他言無用を、約束できませんか？」

「淑女との約束だ。しかと守らせてもらう」

私は一連のすべてを語り出す。

最初は疑つていたような様子だけど、すべての歯車がかみ合いましたときにはシヨックを受けたようだった。

自分の信じていた真実と、あまりに違う優しすぎる真実。

互いに大切だから、こうなつてしまった。

きつと出会う方が違えば——私はどうなつていたかは分からないけれど、サイファーさんはつかの間の間の蜜月を過ごせていたと思う。

そして、ようやく終わった。

「そういうからくりだったのか……」

「からくりというほどでもないと思いますけど」

「サイファーは望んで女王陛下の魔犬のフリをしていたのだろうな。シャーロット王妃はある一点を除けば最高の逸材だった上に、本人も国王と想い合っていた……巫女の素質がないことを除けばな。話を覚えよう——サイファーが誰かを助けるときの理由を知っているか？ お前もそのはずだろう？」

気にはなる。

私も彼に助けられたから。あの時に出会ってなかったら、きっとここにはいないと思う。

ヘンリエッタが頼み込んだから助けに来てくれた、というのもあるかもしれないけど。

「誰かが苦しんでいるのを、あの男は見過ごせんのだ。魔犬なくして女王にあらず、というほど仕えさせたものの質で女王の待遇はほとんど決まると言っている。シャーロット王妃はサイファーに力を示させて、評価を逆転させたよ。その頃から、二人の利害は決まっていたのだろうな」

「王妃の座を与える代わりに、終わりを望んだ……」

「それでも、この国に予先を向けんのは忠義からか……なかなか義理堅い男だったのだな」

うん、サイファーさんは大事な約束は守ってくれる。たとえ守る相手に置いて行かれたとしても、その人を想って守り続けている。

彼はやはり人間だ。身体は永年を生きる化け物かもしれないけれど、その精神は、心は間違いなく人間だ。誰かのために何かをできるのは、人間にしかできないことだから。

「そうだな……私から一つだけ、頼みごとをしよう」

「なんででしょうか？」

あまり難しいものじゃなければいいけど。

そう思つて、いたら。

「あの男の……サイファーのそばにいてやってくれ」

「それって……」

思わず頬が熱くなる。

男女で一緒にいるなんて、それはきつと友人以上の関係になつてしまうから。

そんなことは、できない。その一線を超えるビジョンなんて、想像すらままならないから。

「勘違いするな。関係性は問わん」

「でも、私じゃ……」

「生きていられる間だけで良い。東の間でも構わん。しばしの間、孤独というものを忘れさせてやってくれ」

首をすぐにでも縦に振るべきだと思った。

でも、私だって人並みに生きて死ぬかもしれない。この眼には、まだまだ何かありそうだけど。けれど、新たな出会いを与えてしまったら、身を裂くほどの新たな別れを生むかもしれない。

両親のことは思い出したくもないけど、育ててくれたおじいちゃんやんが亡くなった時は、埋めようのない喪失感に苛まれた。大切な人との別れは、それだけ苦しい。長く生きていれば、比例して増える。人ならざる時間を生きれば、きつと耐えられないはずだ。とどめを刺してしまうようで、私はとても怖く思えた。

「難しいだろうな。すぐにとは、言わん」

「メイザースさんも、同じだけ生きていますか？」

「私は魔術師だ。かつてこの世界にあふれていた神秘と幻想に触れ、それを体内に受け入れることを繰り返し返してきた。それが私の教えられた魔術の基礎だからな。自分が年を取らぬまま、大魔術師と称されたときは達成感と喪失感が一緒にやってきた。魔道を

修めた喜びと人をやめた喪失がな。やはり周りだけが置いて死んでいくのは、いまでもなれん。だから、サイファアの味わった苦しみは理解できる。おまけに、あの男は狭く深く人間関係を築くから、苦しみも一入ひとしほだろうよ」

「だったら、私が一緒にいても……」

「だが、人と出会い、親睦を深めるのは、お互いに何かを変えていくものだ。と自負している。良いものにして、悪いものにして、必ず変化はあるものだ。これはあくまでも予感だが、サイファアにとって君との出会いは、確実にプラスに働くと思うのだ。もつと自信を持ちたまえ」

「……出来る、かな」

自信を持って、と言われたけれど。

サイファアさんとの付き合い方を、もう一度見直さないといけないかな。そう思った時だった。

「終わったぞ」

「……手間取ったか？」

「うちのフレデリカに手を出してくれたから、追加のお話をしたのさ」

「うちのフレデリカ」とはな」

目配せを飛ばしてきた。

ちよつとずつ私はサイファーさんにとつて大切なものになりつつあるようだ。

たぶん二月前だったら、こんな言い方はしていなかったと思う。

「楽しいお話の邪魔だったかな」

「いいやサイファー、とても有意義な時間を過ごせたよ……バックにいたのはなんだ？」

「ジョン・ドウだ。マフィア一つ焚き付けるなんて、相当気に入られちまったらしい」

「モテるんだな」

「よせよ。男は趣味じゃない」

バン、と乾いた銃声が庭園のほうから響く。

サイファーさんとメイザースさんの反応はとても速くて、私が動いた時には二人はもう一階を駆け抜けて玄関の扉を跳ね開けていた。

この状況で襲ってくるのは、一人だけ。

私の知る中では、もっともサイファーさんを追いつめた人。新大陸最強と称された、あの人が。

庭園に着いた時には、もう。

「ここまでやってくるとは、僕も想われているらしい」

「じゃあ、俺様の想いをもっと感じさせてやるよ」

二人はすでに刃をぶつけ合っていた。

ここで決着がつく。その根拠のない予感が、余計に不安を煽る。

Hugく蛮勇二人、死闘はここに決すく

蛮勇二人は鑊迫り合いのまま、にらみ合う。

野太刀と双太刀は火花さえ散らすほどの勢いで擦れ合う。その担い手双方が常軌を逸した膂力を以て振るっているのを、雄弁に物語っている。

しかし、身体能力——特に筋力の差はジョンのほうに軍配が上がっている。

故にサイファーは押され出した。技術などという概念を嘲笑うような、とにかく豪放で一直線な力で押すのだ。

だがされるがままの男ではなかった。一直線に向かってくるなら、受け流すのみ。方法だけが技術ではないのだ。どの瞬間が受け流せるか、というタイミングをとるのも技術だ。相手の力を利用するためには——意識の隙間につけ込むのだ。

例えば——相手を押すことしか考えていないとき。

サイファーはごく自然に力を抜いて、ジョンの身体を後方へと受け流しながら柄頭で一撃する。地面に沈み込みながら、一気に滑っていく。その距離は五メートルを優に超えた。大地を抉る、というブレーキがありながらこの距離まで滑ったのは、それだけジョンの力は桁外れということだ。

「ハハツ、やつぱアンタ最高だわ。ああ、これ何回目だっけなア、言ったのはよオ」
「知るかよ。何回も言った覚えがあるのは、それだけお前さんのボキャブラリーが貧弱ってこった」

「傷つくなア、それは」

「どのみち死にたくなるくらい、身体のほうがも傷つけてやるよ」

言うが早い、いつの間にか納刀しておいた状態からサイファーは抜刀を放つ。ジョンとの距離を鑑みれば、確実に当たらない距離だ。銃の出番と言える五メートルもの距離を、長いとはいえ五尺——正確には五尺四寸三分^{およそ一六八・九センチ}——もの野太刀では空を切るだけだ。

だが——ジョンの身体には斬線が走る。抜刀の軌跡が生んだ延長線上にある左肩から右わき腹にかけてを一閃した。そこから一気にいくつもの斬線が走る。空間切創による遠隔斬撃であり空間ごと斬る絶対斬撃だ。それも一つに終わらず、ジョンを取り囲むように輝線が走る。斬撃はひとつではなかったのだ。

連続発生した空間概念丸ごとの斬撃を食らっては、いくらジョンもその身を幾重にも斬り刻まれ、身体のパーツ一つも原型を残さずに血肉の塊となってわだかまる。

——普通なら、死だ。

——これだけ刻まれても復活するなど、ありえない。

——もし、復活するとしたら……………。

うずたかく積まれただけの血肉が、力強く鼓動を打ったように感じられた時だ。

流動する鮮血が渦を巻くや、肉片を巻き込んで一気に立ち上がった。赤い鮮血の竜巻は三メートル近くも伸びあがり、やがて二メートルに満たない高さまで落ち着いた。まるでマントのごとく向こう側を悟らせない。ただ、何が起こつてゐるのか想像はつく。

——ばしゃん。

終わりは呆気なく。

登場は鮮烈に。復活を彩るため。

「俺様、大・復・活！」

「ハッ、そうなると思っていた」

——復活を遂げたのだとしたら、それはこの世ならざる存在だ。

抜刀したままの野太刀を今度は正眼の構えに移す。それも腕を引く形の。中段を狙う突きの姿勢だ。おそらくは極東の剣術に詳しいものが見れば、平突き of 構えだと悟るだろう。しかし、先ほどジョンは幾重にも刻まれたというのに、衣服さえ元通りにして復活した。そこに平突きの一撃など蠅螂の斧でしかない。

対するジョンは自然体だ。構えをとっているサイファアのほうが、弱く見えるほどに堂々としている。この男の戦闘はもはや獣だ。その闘争本能は状況に応じて、一番理想

の体勢を導き出す。

疾風怒濤——そうとしか形容できないサイファアの踏み込みは、たった数歩でジョンとの距離を瞬く間に詰める。正中線上の急所——眉間、鳩尾、股間——を無慈悲に貫き通す。

ただ、最初の眉間への一突きが決まった時点で、ジョンの太刀は振り上げられている。鳩尾への一撃が決まった時には両方とも振りあがっていた。そして最後の1撃が薄皮を裂いた時だ。

「痛エんだよッー」

ジョンの二刀は大嵐となった。文字通りの意味で。

単純な振り下ろし一つが大気をうならせ、巨大な真空空間を生み出す。失われた空気を埋めようとする動きが猛風を生んだのだ。無論、それだけに留まらず衝撃波さえもが生み出され、猛風で指向性を帯びながら前方へ一直線に飛翔する。

斬撃と烈風に衝撃波。この三つを同時に受ければ、いくらサイファアといえど深手は免れない。誰もが窮地に陥った、と悟った時だ。

「ンあ?」

サイファアの姿はなかった。あるのは宙を舞う灰色のロング・コートと同じ色のテンガロン・ハット。

次の瞬間、ジョンは血塊を吐いた。右横にいつの間にか立っていたサイファーの手が、その脇腹に突き刺さっているのだ。

「やられてばかりと思わないでくれ」

「コートと帽子で、変わり身をやるとはなア……」

「切つても突いても効きそうにないんでな。こうさせてもらおう」

手を引き抜いた刹那に野太刀を一閃。切つても突いても殺せないというのに。

だが——斬撃だけで終わることはなかった。ジョンの内から爆ぜる青白い爆発炎は、魔銃『Howler In The Moon』のマズル・フラッシュと同一のものだ。体内に弾丸を突き刺して埋め込み、一閃を持って雷管を発火させる。

ぼつ、というぐぐもった音と裏腹に、庭園の一角は鮮血と肉片に染まった。

埋め込んだ弾丸は六発。その一斉炸裂はジョンの上半身と下半身が皮一枚と脊椎の神経だけで繋がっているという、常人であれば即死確定の深手をもたらした。だが——彼にとつて深手は深手ではない。その程度では死の臭いすら感じることはない。

「あー痛つてえ……むしろ許せるぞオイ！」

「そのまま帰つてくれるとありがたいんだけど」

「ンなわけねエだろ、この一発は絶対に返すぜ」

一二刀を×の字にして背負った鞆に納めると、ジョンは奇怪な銃を出した。拳銃にして

はやたらと大きく、円筒弾倉を備えたものだ。それを両手に二挺だ。

「ブローニング自動小銃を片手サイズギリギリにまで詰めてみた」

「お前バカだろ」

「ちなみにアーカムの市場で買ってきた、アーカム生まれのコピー品だぜ」

「ちくしょうめ！」

頑丈そうな白磁の生垣、その物陰めがけてサイファアは飛び込んだ。遅れて弾丸が地面と生け垣を叩く。

生け垣は粉碎され、粒子状になって舞う。砂煙も、また。二種類の煙が両者の姿を隠していく。

アーカム製の銃器はイギリス本土をはじめとする外界で出回っている物とは一線を画する。数多くの植民地を持ち、他国を大きく突き放す蒸気機関技術を有するイギリスの繁栄を支えるのは特異なる超機関アークロジュー『アーカム』の妖技術だ。

あらゆる新技術と表に出ない妖技術のつぼがアーカムなのだ。

——下層製じやなきやいいが。

下層にいたっては中層より上に行かないよう、ジョン・デリンジャーが頑張ってくれている。中層までの製造品であれば食らっても平気なほうだ。ただかなりの防御加工を施したロング・コートがないのが手痛い。カッコつけての身代わり戦術なんてやらな

ければよかった。

両手に握った二挺のソード・オフしたブローニング自動小銃が、ついに暴力性を完全に解き放つ。凄まじい連射を行う片手サイズにまで切り詰めたBARは暴れ馬と化したはずだが、ジョンは反動を片手で悠々と抑え込んでいる。蔓薔薇の庭は千々に弾け飛んだ。

「逃げ回ってばかりかア!？」

「じゃあ、ちよつと待ってくれんのか？」

「ンなもんお断りだ」

「だろうな!」

その言葉を皮切りにサイファアは跳んだ。着地と同時に走り出す。

ジョンがそこを逃すわけがない。弾丸の猛射は容赦なく嵐となって襲い掛かる。ほとんど転がるようにして、巨体は逃げ回る。

「なアんだよアンタア! 逃げ回ってばっかかよオ!」

落胆の意を込めながらジョンは叫ぶ。

それにサイファアは拾い上げたものを掲げた。

灰色のロング・コートとテングロン・ハットだった。

「ちよつと待ってくれたら、こんな拾い方をしなくて済んだのにな」

いそいと羽織つて、そして被る。

「ああ、ちなみに先ほどの僕とはまるで違うよ。このコートと帽子を着た僕は相当強いと自分でも思ってる。正直、気分の問題なだけどさ。でも、そういうのって大事だと思うんだよ」

「なアンなんだよそれはッ！」

猛射が再開された。心なしか連射も強まっている気がしないでもない。

サイファーは巨銃を抜いた。庭園を駆け抜けながら、照準を合わせようと試みるも五発も立て続けに食らう。全部、腹に食らった。その衝撃に危うく体を丸めそうになる。そうなったら、その隙を絶対にジョンは逃がさないと決まっていた。腹筋に食い込んで、あつてなく落ちた弾丸を一瞥すると引き金にかけた指に力を籠める。

チチ、と音を立てて撃鉄が起き上がっていく。

——暴れられているのも、今の内だけ。

連射は三〇秒も続かなかった。円筒弾倉に入っていた弾丸は百発より多くはないだろう。

弾切れを起こした二挺を投げ捨てた瞬間に、引き金を引き切った。

弾丸はジョンの鳩尾に命中した。青白い炎が突き抜け、どす黒い煙と人体の焦げるきな臭さが広がっていく。鼻と口から黒煙を噴き上げながら、ジョンはのけぞった。業火

と液化化した重金属の奔流を弾頭から放つホーレス特製の魔弾は、不死身と言つていい肉体であつても相当堪えるものだったらしい。

「があ……ッ、お、っ」

二度目の銃声——というよりは砲火——が上がり、青白い火線は一メートルも伸びた。それも同じ魔弾だ。引き金を引く手をサイファーは止めない。

着弾の度に青白い爆炎が体内を駆け巡り、のけ反つては蹲つたりする様は奇妙な踊りにさえ見える。

そして二十四発目を撃つた時には、ジョンの身体は炭化しているも同然だった。生肌の柔らかさは欠片も感じられず、焦げて乾き切った炭の感触だけが残っている。巨弾を六発やつと収められそうな輪胴シリンダーから、二十四発に及ぶ七〇口径の巨大な空薬莖を排莖する。銃撃——というよりは砲撃が正しい——を終えた薬莖は赤熱して白煙を噴いている。

「砕け散れッ！」

この男にしては珍しく裂帛の気合とともに放った回し蹴りは、人型をした炭を粉々に粉碎した。姿勢を戻しつつ、身を翻しつつの再装填も忘れない。

ついにジョン・ドウは倒れたか。この不死身の荒事屋は。

いや、砕け散つた炭は半液化した。液体とも個体とも言えない、タールめいたぶよぶ

よが一点に集って隆起する。一瞬にして二メートルを行かない高さ——一八七センチ——にまで伸びあがると、真闇を押し固めたような人型に人肌の色と温もりが取り戻されていく。

ぴつちりとした黒いレザーのパンク・ジャケットも元通りだ。

身元不明死体 ジョン・ドウは、二度目の死を拒絶するというのか。

「そう来ると、思っていたが、ねッ！」

顔面への一発が復活したてのジョンに叩き込まれる。

さらに休む間も与えずの足刀がこめかみに打ち込まれる。ぐらりと体勢が揺らいだところにダメ押しと言わんばかりの蹴り上げが入る。ジョンの身体は垂直に打ち上げられた。

そして締めくくりに身を引いて大きく力を溜めてからの一撃が、ジョンの胸——ちょうど心臓の真上——に叩き込まれた。拳は胸骨を粉碎して、手首のあたりまでめり込んだ。咯血の飛沫がかかる前に、その身体が吹っ飛んだ。

「げ、がっ……はあ、あ……ひ、ひどいな。内臓と肋骨が、ストレート一発でほとんど潰れた」

「僕が思うに、いくら不死身でも痛いのはイヤなようだな」

「あんだだっ、そうだろオが」

「……痛みの方に死があるなら、僕は両手広げて受け入れられるよ」

「へ、へへっ……そうかア、あんたもそうなのか。俺様と同じだア」

「でも、最近はその思うこともなくなつたがね」

静かに、鞘鳴りの一つも立てずに鯉口を切る。

抜かれた長大な刃は光を宿さぬ漆黒に染まつている。サイファー・アンダーソンの権能によつて染められたのだ。森羅万象を打ち砕くことを許された、その絶大なる権能を緩く円弧を描く刃は孕んでいるのだ。それがジョン・ドウの身に宿る不死身を砕くのは、ほとんど賭けに等しいのだが。

ただ、この男にはとても似合わないときえ言える静かで流麗な所作は、様になるだけの鍛錬に支えられていると悟らせるほどの迫真さだ。身体から発せられる殺気はジョンのみならず、二人の戦いを見ていることしかできないフレデリカとヘンリエッタ、それにメイザースにさえ一陣の風が吹いたと錯覚させるほど濃密だ。

それに対してジョンは——狂相の笑みを以て返す。両手に双刃を構え直して、突貫の姿勢をとつた。

「すげエな、本気の殺気が伝わってくるぜ」

「ふうん……本気、ねえ」

平突き——サイファーも突貫で応じるといふのか。

化け物二匹のぶつかり合いは、さらなる高みに手をかけつつあった。この先にあるのは、おそらく超常の領域。かの悲劇作家シェイクスピアの引用——『この天地の狭間には、人間の思い及ばぬことがいくらでもある』——がしつくりくる。

地面を蹴った瞬間は同一。

ただサイファーは刃を、あろうことか引いた。鞘に納めたのだ。

ジョンは戦闘放棄ともいえる行為に、何の反応もない。ただ狂ったような笑みを維持したまま、双刃を容赦せずにサイファーに突き立てた。

刃と黒血が背中から突き出た。

「さっきのが『本気』の殺気だと思っっているようじゃあ……まだまだってやつだ」

刃を突き立てられたまま、サイファーの手がジョンの顔を掴む。

「握りつぶす気か？ そんなのは無駄だぜ」

「いいや、そのつもりだ——顔じゃないけどね」

「なん——」

言葉は断ち切られた。

叩き付けられたのは衝撃波としか言えない。全身の毛が逆立つほどの何かが、自分の身体を駆け巡っているとジョンはありありと感じさせられた。骨格が、細胞一つ単位が、悲鳴を上げている。その機能を放棄するほど。

ジョンの身を襲った「何か」は周囲にも影響を及ぼした。蔓薔薇を育てるための肥沃な土壌は、サイファーを中心にして急速に枯れていった。そして、土壌の恩恵を受けていた蔓薔薇にいたっては原形さえとどめず液化していく。原因が茎や蔓、美しい花弁を構成する植物細胞が一つ残らず破裂したが故の結果だと誰がわかったであろうか。

「——潰してやる」

その言葉が最後だ。

サイファーの手に持ち上げられる形になっていたジョンは、身体を一度だけ痙攣させるとピクリとも動かなくなつた。手を放すと同時に、糸の切れた操り人形めいて崩れ落ちた。その眼は虚ろで、鼻水も涎も垂れ流しだ。

「久々に、本気で殺気をぶつけてやったが……ちよつと効き過ぎたな」

不死身の男を再起不能にし、土を枯らして、植物を液化させた元凶が『殺気』だと誰が信じられようか。

物理的にその身を滅ぼせぬなら、精神を握りつぶす。しかし、これほど単純にして破壊的なことはないだろう。ただの殺気一つが物理的影響を持つなど、超常の産物ではない。まさしく化け物としか言いようがないだろう。

「やり過ぎだ、サイファー」

「……やっぱりっ」

「君の美しく、可憐で、有能な従業員二人が一秒もたずに気絶した。後始末はしておく」

「助かる」

「今日は思い出の場所で休むことだな。お前もかなり消耗しているだろう。最後に刺されたのが、おそらく一番聞いているな」

サイファアの外套には傷一つない。だが遅しい胸板には、ジョンから受けた双刃の刺し傷がまだ残っている。普通なら肉体のほうが再生するのが早いのだが、こういう例はサイファアには初めてのことだ。新大陸最強の異名を支えるのは、その不死身の身体だけではないということか。

「そのまま動くなよ」

メイザースの指が傷の上を叩く。ただ、それだけで白煙を上げながら塞がっていく。

「あまり動かんようにな。無理矢理、肉と血管を繋いだ。明日には馴染んでいるはずだが」

「どういう風の吹き回しだ？　僕が傷を負っても、治してくれたことなんて今までなかったぞ」

「私の口からは言わん。フレデリカ嬢から箝口令を敷かれていてな」

「何かしたのか？　場合によっちゃあ……」

「むしろ逆だ。それに傷を治さなかったのは、さっきのが精一杯というものもある。治療は苦手でな」

そして、ふとジョンのいるほうに目を向けてみると――。

「逃げられたな」

「這いずり回ってでも逃げたのか、引きずられたのか……」

ジョンのいた場所には足跡はない。何かを引き摺ったようにも、這いずったようにも見える痕があるだけだ。死に物狂いで這って逃げたのか、何者かが二人に悟られないほど静かに迅速に回収したのか。

「失態だな」

「ああ、失態だ」

メイザースのぼやきに、サイファーが続く。

蔓薔薇の園に、むなしい風が吹いた。



——目覚める。

時計を見て、愕然とした。あの時からかなりの時間が過ぎていく。日はすでに沈んで、夜の帳が最も盛る時だった。

サイファーがジョンの顔を掴んだあたりから、一切の記憶がない。もう少し正確に言えば、あの衝撃を叩きつけられる瞬間までは覚えている。それから頭頂からつま先まで、自分の生を根こそぎ否定するような衝撃が駆け巡ったのだ。

状況はどうなったのか。

それだけが気になって、ほとんど跳ねるように起き上がった。

人の気配がひどく薄い。

おそらく建物の大きさに反して、いる人間の少なさから来ている。たぶん一人しかない。それが誰なのかも、大腿察しがついていた。ほとんど確信に近いほどに。

「サイファーさん……」

「お、目覚めたか」

「ヘンリエッタは……?」

起き上がった時、自分はベッドに寝せられていたがヘンリエッタの姿はなかった。サイファーのいる部屋に行くまでの間、ほかの部屋を見て回ったが誰もいなかった。

「メイザースと一緒に出かけよ」

「大丈夫、なんですか？」

「僕と一緒にマシだろう？」

「それもそうですね」

「ひどいな、冗談のつもりで言ったんだが」

「私も冗談です」

「上段に冗談で返されたか、一本取られたな」

サイファーはすでに一杯やっているようだ。グラスに注がれた透明の液体は、おそろく好物のスピタス・リキュールだ。いつも通りの原液まんまをロックで。

「フレデリカもどうだ？」

スピリタスの瓶の横に白ワインのものまである。数少ないフレデリカが嗜める酒だ。

「少しだけ、いただきます」

夕食を食べてないが、誘いは無碍にできない。

ただ、チーズやフィッシュ・アンド・チップスを初めとする大量のつまみがあったので、これらが代わりになるのだろう。健康的にはよろしくないが、たまにはこうやって羽目を外すのもいい。外し過ぎさえしなければ。

白ワインを一口。ぶどうの生み出すくど過ぎない甘みの中で、アルコールの熱さが心地よい。

ほう、と一息。酒に強くないのは変わっていない。たぶん、一杯飲み干すにも一苦勞する。

「赤くなるには、まだ早いんじゃないか？」

頬はすでに熱を持ってしまっている。アルコールが入ると、すぐにこうなる。

「私、そこまで強くないんですよ」

「好きなように飲めばいいさ」

チーズを一つ食べてから、グラスのスピリタスを飲み干す。

グラスを置いた音がきっかけになった。

「フレデリカ、お前さん何を見た？」

「……………」

「メイザースが珍しく僕の傷を治してくれた。何かあったのか、と聞いてみたら『フレデリカに口止めされている』ということだな」

「それ、は…………」

言い淀んでしまう。あの過去はサイファーにとつて知られたくないものだろうから。

メイザースに冷たく接されても言わなかったのだから。というよりメイザースに対して怒りたい。他言無用だと言っておいたのに。

「怒ってるわけじゃない。その眼は見たくもないものだって、見せてしまうものだからな」

観念するしかない。

このまま黙っていても、いずれ押し切られるのがオチだ。

メイザースに話したのと同じ内容を、サイファーにも語った。途中で頭を抱えていたのが気になったが。

「マジかよ……」

「ほんとうに、すみません。メイザースさんに話してしまつて……」

「いや、きつとそうすると思つた。見ちまつた以上は、な」

「嫌だつたんです。あそこまですれ違つてギクシヤクしてる、あなたとメイザースさんを見たくなかつたから……」

「まつたく、そこまでする義理もないだろうに」

サイファーの言う通りだ。寝食共にして、不自由のない生活をさせてもらつている。その代わりに家事全般を務めて、仕事も手伝つている。でも二人の確執に介入するほどの義理はない。これは完全に自分のわがままだ。

「拒絶しないんだな？ きつと薄々人間じゃないと思つていたんだろうが、これで確信に変わったんだが？」

「その通りです。予感はしてましたけど、でも今までの態度とか優しさとかは人の温かさがありましたから」

「……………お前さん、普通に真顔で小つ恥ずかしいこと平気で言うよね」
「そんなことないと思いますけど」

「僕は照れる、からかつてごまかす……………でも『優しい』か。こんな僕には最も縁遠い言葉だと思っていたがね」

優しい、というとサイファーはいつも怒る。というよりは照れ隠しだろう。今まではそう思っていたが、その根本にあるものは違ったものだ。

化け物、として扱われてきたが故の荒んだ心。持つべきものではないプライド。そうして作られていったサイファー・アンダーソンという名の『化け物』としての柱が揺るがされることへの危惧からだ。暴力の権化、傍若無人、傲岸不遜の存在だった。

でも今と初めて会った時を比べてみれば、違いはある。きっとサイファー本人は気づいていないだろうが、少しづつ優しきを知って温和になりつつある。丸くなった、というよりは器が大きくなったような気がしないでもない。暴力的な意味で手が早いのは変わっていないが。

「その……………今でも『最期』にしたい、という想いはあるんですか？」

「……………最近は、そうは思わなくなつた。理由は教えないけど」

「意地悪ですよ、そういうの。そんな人はフィツシュ・アンド・チップスの皮が歯に挟まって、なかなか取れなくてもどかしい気持ちになればいいんです」

「なんか地味にきついな。というか酔ってる？ 酔ってるの？」

「一杯目で、酔うわけじゃないですよ……」

「思った以上にキてるな、こりや。水でも飲め」

「二杯目が欲しいです」

「あげませ——って自分でつぎやがった。二日酔いになっても知らんぞ」

「たまには飲みたい気分になるんです」

飲みたい気分、とは言ったが本音を言うならサイファーが飲んでいたから飲みたくなった。彼と同じ酒宴の時間を共有したかったのだ。メイザースから言われた言葉に従っているわけではないが、一人で飲んでいるよりは誰かと同じ時間を過ごすほうが楽しいはずだ。

サイファーも拒絶の意を見せているわけではないし、むしろ彼のほうから誘ってくれた。

「いいですね、こういう時間」

「この仕事が終わったら、ヘンリエッタも一緒に誘ってどこかで飲むか」

「フランクさんも誘いましょう」

「いつそあいつの店でやるのもいいな」

「グッド・アイディアですね——あつ！」

ふらつときた。

思つた以上にアルコールが回っている。

とん、とサイファーにしなだれかかるといふような形になつてしまった。

「す、すいません。いま離れま——」

身を引こうとして——できなかつた。大きな手が肩を掴んで、引き寄せる。縛り付けるように、縫い付けるように、離さないための大きな力で。

そのまま抱きしめられた。まるで母親にすぎない子供のよう、必死で、切実な抱擁だった。

「さ、サイファーさん……!?!」

「悪い、もうすこしだけ、このまま」

戸惑いはしたが——拒絶しようとは思わない。きつと、ここで受け入れねば、彼は壊れてしまうだろうから。サイファーという男は強い化け物であり、弱い人間でもあるのだろう。

いま、この瞬間に弱さが噴き出てしまったのだ。化け物として気を張つて、長い時を生きていた中で積み重なってきた弱さが。

「……このまま、好きなだけ抱きしめていいですから」

「悪いな、本当に」

そつとサイファアの大きな背に手を回す。心なしか震えているような気がした。



わずかな光源で最低限の視界を確保した中、暗闇の中で動く人影。

そこは地上ではない。日も差し込まぬほどに深い地の底。崩落防止に鉄筋とモルタルで補強した地下トンネルだ。縦横無尽に血管めいて張り巡らされ、その中心はある場所へと繋がっている。今は語られるべきではないが。

立ち上がることを忘れた男——ジョン・ドウを取り囲む黒服たち。

その中で異彩を放つのは二人。近衛隊の制服を着こんだ初老の男。その傍らにもう一人。彼だけは明らかに回りと何かが違うように思えた。まるで、この地下深くにいるべきではない、もつと物理的にも立場的にも高みにいるべき存在としか思えない。

指一つとして動かせず、自由になるのは眼球だけ。この状況でもジョン・ドウは笑みも作れぬというのに、瞳の狂気だけは消えないままだ。染みついているとでもいうのか。

「やはり生き残った女王陛下パースカヴィルの魔犬グイは侮れないな。新大陸最強を呼ぶために、アルバニア・マフィアに大量の鼻薬を嗅がせたのに」

「とはいえ、我々だけではあえなく返り討ちにあうのも事実。サイファア・アンダーソンに対抗できるのは、この老骨とカトリックの殲滅騎士ジュエノサイダーくらいなもの。加えてマクレガー・メイザースまでいるとなれば、やつらの布陣は鉄壁というほかありませんなあ……この老いた身に巡る血潮が滾るのも、事実ですが」

「どうして、こうも苦しいほうに行くのかな。黙っていれば、この大英帝国は今以上の幸せに包まれるというのに。僕はこの国が好きだ。僕の今を生んでくれた、この国が大好きなんだ。僕を支えてくれた人尾をはぐくんだ、この大英帝国を愛している。だから、この幸せをほかのみんなと分かち合いたい——と思うのは月並みだよ。だから、僕と全く同じものを感じれるようにしてあげるんだ」

そのとき、彼の眼は何を見ているのか——何かを見つめていたのか。

展望の明るい未来か。それとも未来への不安か。それとも、理想の未来か。

老人は知っている。彼の凄まじい危うさを、そこから生じる支えられずにはいられないという一点から恐ろしく発展した、一種のカリスマ性を。危ういが故に人を引き付ける、という魔性なのだ。

一度でも、その深淵を覗き込もうものなら——引きずり込まれないという強い決意も

太古の化石と化す。老人もその一人だ。捉えられてしまった、愚か者の一人にすぎない。

——ああ、恐るべし。

瞑目して、胸中で呟いた。

「さて、君は正直言つて期待外れだったよ。わざわざ大金を払つてまで新大陸から呼んだのに、無様に潰されてしまうなんて。扱ひも難しいようだし、殺すこともできない——だからこうしようと思うんだ」

蒸気圧の大出力で駆動する混合器ミキサーに視線を向けた。

「ちよつと上等なコンクリートが混ぜられてる。君をその穴に入れて、これで密封する。邪魔されないようにするには、これが一番だよね」

彼はジョンの目の前まで顔を寄せる。

いまだ眼球しか自由にならない、そう思われた。周りの黒服も、老人でさえも。

ブツ、と飛沫が飛んだ。ジョンはつばを吐いたのだ。

「ケツ、一矢報いて……やつたぜ」

やつと絞り出した言葉はそれ一つだけ。

黒服の手によって、ジョンはあらかじめ掘られていた穴の底に投げ落とされた。回転を止めた混合器からは、速乾性のコンクリートがジョンを固めるために流し込まれてい

く。

これまでか、としか言えない状況でジョンはただ一つ。

——なあ、サイファー・アンダーソン。

——俺様をぶっ倒したんなら。

——こいつらも、ちゃんと止めてくれよなア。

そして、穴はコンクリートで満たされた。

Weapon～兵器王のお誘い～

小鳥のさえずりで目を覚ます、というさわやかでお決まりの目覚めとなった。

「……………んオ」

昨日は少し飲みすぎたかもしれない。空けたスピリタス・リキュールの瓶は十五本くらいだった。フレデリカに抱き着いて、縋ってしまった己を悔いるように何本も飲んでしまった。ちよつと記憶があやふやなところがある。

ともかくサイファアは起き上がるうとして——左脇腹のあたりから感じる例えようのない柔らかさに固まった。すう、という寝息が余計に拍車をかける。

——どうか予想が外れてますように。

——どうか別の部屋で寝てますように。

——どうか、フレデリカじゃありませんように。

ゆつくりと、首を回す。長い睫毛、物憂げに閉じられたような瞼、白皙の美貌。寝息に合わせてわずかに揺れる黄金をそのまま紡いだような金髪は、寝汗で額に張り付いている。その顔のあどけなさいたいと幼気さは、いまだ十代半ばの少女と言つても通じる。

フレデリカ・エインズワースがそこにいた。それも上下の下着にレースの白いフル・

スリッパだけを着て。たわわとか、どたぶんとか、そういう表現が似合う胸を支える下着のラインが浮き出ている。妙になまめかしい。なんで、男のベッドでこんな格好で寝ている。

昨日の記憶を必死になって思い出した。そういう記憶がないことから、たぶんやつてはいない。たぶん、一緒に寝ただけだ。だんだんと思いついてきた。

——飲みすぎだろ、歩いてねえぞ。

——だいじょうぶ、です。

——とりあえず、もう一杯水飲んで。

——もう、ここで寝ますう……

——おいおいバカバカ男の前で脱ぐなドアホ！

思い出した。

あのまま酔っぱらって寝たフレデリカを開放しながら、さらに追加で飲んだのだ。女を開放しながらヤケ酒同然に飲みまくるなんて、男の風上にも置けない。それも十代の少女にしか見えない娘とくればなおさら。アーカムの繁華街にたむろするポン引きとか、オカマ連中のほうがまだマシなように思える。

「しかし、なんで胸を押し付ける勢いでひつついて寝るんだろうなあ……？」

実の両親は全く分からない上に、引き取ってくれた義理の両親からも冷遇されて、よ

うやく祖父に引き取られてから愛情の温かみを知ったようなものだ。母性や不正のうな、大きな存在からの愛情をはじめとする諸々に飢えているのか。あるいは単に人肌恋しいのか。

しかし服越しても十分に検査が必要なくらいの凶器となっている爆乳を押し付けられては、あまりにもよろしくない。色々とあつて男の宿命と言える朝の生理現象が起こることは割と少ないとは言え、この未だ男盛りの生気溢れる肉体はいろんな意味で健だ。無論、そつちのほうも。

もし、それが起こってしまったら。

もし、その時にフレデリカが起きたら。

もし、第三者がやってきたら。

サイファアのすべてを終わらせる事態に発展するのは想像するに難しくない。とくにフレデリカはうぶな性質だから、きつと一週間くらい口をきいてくれない。

ひとまず深呼吸。ある一点に集まりつつある血を全身にまんべんなく散らせる。ちよつとした「こつ」の為せる技だ。

「ふうん……ふえ？」

間抜けな声を上げたフレデリカと目が合った。銀灰色と黄金色の双眸が見つめ合う。

「あの……（うぶ）めんなさい」

「まあ、うまい酒は飲み過ぎちまうわな」

「お邪魔、でしたか？ 勝手に一緒のベッドで寝てしまつて……」

「そのあたりは気にするな。あのまま一人で寝せておくのも、ちよつと心配だつたし」
僕も役得だつたからね、という眩きは呑み込んだ。

「それよりも服を着たらどうだ？」

頬に朱が差した。今の状況にようやく気付いたらしい。

スリップの肩ひもの間、襟から覗く谷間に目が行つてしまう。寝汗に濡れた生肌は柔らかなさを想起せずにいられない胸の芸術的なラインを輝かせている。良い匂いしそう、なんて変態的なことを考えたのは内緒だ。

「あの、着替えたいので、あつちを向いていただけると……」

そこでフレデリカは固まつた。胸のあたりまで掛け布団を持ち上げて、気恥ずかしそうにした表情のまま眼だけ驚愕に染まっている。そのまま固まっているのだから、どこか滑稽に思える。

視線の先は部屋のドア。そういえば昨夜から鍵をかけてなかつたような気がする。

振り向いて——サイファーも固まつた。

「お、おう」

一七〇センチを超える長身に、茶色のボブカットとパンツ・スタイルのファッション

が映える麗人。ヘンリエッタ・ウエントワースが同じく固まった状態で立ち尽くしている。ドアノブに手をかけたままの姿勢から、部屋に入つてすぐに石と化したに違いない。

震える唇で、やや怒りを込めて、口を開く。

「これは……どういうことだい？」

事情を知らないものが見れば、明らかに誤解する場面だ。

男女が二人、同じ部屋にいて。そして一人は下着同然の姿でベッドの中にいる。

部屋の臭いに情交の残り香がないのに気づけば、もしかしたらそういうことはなかったのかも。と思うことはできるかもしれないが、どうもヘンリエッタは頭に血が上っているらしい。視覚情報を何とか認識して、そこから何が起こったのかを分析するだけで精一杯らしい。

「あ、そのヘンリエッタ！ これは私がちよつと飲みすぎちゃっただけで——あたまがいたいです」

「頭が痛くなるまでナニを飲ませたんだい!？」

詰め寄つて、胸倉を掴み上げるまで。わずか三秒しかかかってない。早業だ。

「しろ……」

「言うなバカ！」

今度はビンタが飛んできた。それも、とても強烈なヤツが。確実にサイファアの頬にもみじ型の赤い痕が残るはずだ。それにしても『しろ』と言っただけでビンタするほどの代物を連想したということか。なかなか耳年増のようだ。

「飲み過ぎたって、あのお酒ですよ！ 白ワインなんです！」

「だいたいフレデリカもほいほい男の部屋でお酒なんて飲んじやダメだろう!? 危機感をもう少し持ったらどうなんだい!？」

「サイファアさんはそんなスケコマシな人ではありませんよ！」

——なんだろう心がいたい。

口論の内容一つ一つがグサグサ刺さってくる。しかし下手なことを言って、火に油を注ぐのものはばかられる。こういう時に男はどうあっても黙るより道はない。とても世知辛いが。

一人で飲んでいればよかったか、と後悔しても今の現状は変わらない。それに吹き出ってしまった弱みもなかったことにはできないのだから。あの時、フレデリカが倒れ込んでこなかったら、縋るように抱きしめないで済んだかどうか。いささか自信がない。

しばらく酒はよそう、と決めた。

「あまりこういうことはなしにしてくれないか？ 私の心臓がもたないよ！」

「心配するな、ヘンリエッタ。しばらく禁酒する機会ができたからな！」

「禁煙もしてみたらどうでしょうか？」

「それはヤダ」

葉巻だけはどうかあってもやめられる気がしない。紫煙の香りもなしに生きていくなんて、長い人生を生きる上で考えられないことだ。身体に悪いと言ってもヤニでどうこうなる身体ではないし、自分にとって欠かせない精神安定要素の一つだ。葉巻がこの世から消えたときに備えて、代わりの吸う煙草を五つまで銘柄を絞っているくらいだ。

折り畳みのポケット・ナイフで吸い口を切り、長軸マツチで丹念に火をつけて口内に紫煙を取り込む。

煙草の葉だけが醸す独特の味わいを思いきり楽しむ。背伸びして子供が吸いたくなくなるのも無理はないが、こういう嗜みは大人だけのものだ。精神的にも、経済的にも充実した大人だけが許されている。

「お酒はやめても、煙草は頑固なくらいやめないなんて子供っぽい人ですよね」
グサツとくるどころか斬り捨てられた気分だ。

だがこればかりはやめられない。紫煙を吸い込めば、人生の中で一生付きまとわれる羽目になる。幸いなことに一般人のように高級コール・ガールの皮をかぶった真綿で首を絞めに来る死神ではなく、サイファーにとってはただの煙い天使だ。

「数少ない楽しみだ。それまで奪わせないでくれ」

「まあ、そこまで私も踏み込む気はないけど……さ、私の部屋で着替えようか」
「すみません、お邪魔しました」

最後にペこりとお辞儀をしていったフレデリカを最後に、扉は無常に閉まった。

昨日はみんなで飲もうといつて、今日は酒を控えようと思うとはずいぶんと移り気な生き方だ、と自嘲しそうになる。いつもそうだ。とくに趣味嗜好や戦い方にかかわらない限りこんな感じだ。人としては、無残で非情で残酷なほど長きを生きてきたせいかな、生きる気力が萎えているということか。

人として生きるには、気力がある。

化け物として生きるなら、暴力だけでいい。

最近はどうだろうか。フレデリカと会った日から、ちよつとずつ何かが変わっているような気がする。

丸くなったような気はしない。だったら攫ってきた支部長をドラム缶に釘づけにして焼き殺さないし、ジョン・ドウにも無様に負けていたかもしれない。

初めて会った時とはとにかく無力だったのに、いまとなつては並んで戦場を行けるまで成長したフレデリカ。今までの一夜の共としか見ていなかった女たちと違う、理知的なように見えて感情的で殊勝な彼女に触発されているのだろう。濁流の起きた大河のように自分の中身は激しく移り変わって、新たなかたちへ変わろうとしているのかもしれない。

ない。

気の迷いも、気持ちの移ろいも、湧き出てきやすくなる。電話のベルが鳴った。

——だから。

——フレデリカを手元に置いておきたい。

——ずっと繋ぎ止めておきたい。

フロントからのメッセージの内容も、半分くらいしか入ってこない。

——そう願うのも、気の迷いだ。

久しぶりに聞いた声で我に戻る。



出かけることとなった。いまだに有力な情報はつかめていない。ジョン・ドウのバツクにいるものはわからないし、目的も同じだった。今日はサイファアの個人的な知り合いと会うだけだが、フレデリカは鏡台の前でにらめっこする羽目になった。

メイク、というフォーマルなことをするくらいに立場ある人間らしい。まさか女王陛下下ではあるまいか、と思うかけたが流石に馬鹿馬鹿し過ぎる。そうそう女王陛下に謁見できてたまるか。

服は仕事着のスペアにした。そこまで畏まらなくてもいい相手らしい。政府高官だろうか。

「あまり肌に塗らなくてもいいんじゃないかい？」

「化粧つ気がないのも変だと思えますけど」

「元がいいんだから、ほんの少しそえるような感じで良いのさ。あとはしつこくない香りの香水を一吹きするだけで、ぱあつと華やかになるよ。髪はいつも通りにまとめればいいさ」

「そういうものなんでしょうか？」

「そういうものだよ。フレデリカの素材がいいのは私も認めるけど、それも活かさないと話にならない。淑女たるもの、おしやれには気を遣わないとね」

「……変なやつかみが増えそうで怖いんですけど」

「そういう人間には私に対応するよ。人間以外なら、サイファーの出番だけだ」

おしやれには、あまり興味はない。工場の既製品を着て、髪が邪魔になるならまとめ程度で。自分が同性にあまり好かれないという自覚はあるが、友人は欲しかったから目立たないように地味でいることを心掛けていた。それでもすべて徒労に終わっていたが、ヘンリエッタと巡り合えたことは宝物だった。

だから、こうして二人だけで過ごす時間は楽しい。

心が安らいで、温まる優しい時間だから。一時間一分一秒も無駄にはしたくない。話すこと、聞くこと、相槌を打つこと、楽しむこと。ヘンリエッタと繰り広げるすべてを、あますことなく堪能する。

「私だって、自分で対処できますから」

「何だかんだ腰が引けているじゃないか。よほどの鉄火場じゃない限り、引き金にかける指は重いままだろう?」

「あんまり、やたらめつたらに抜くものじゃないと思いますよ」

「いつでも抜けるようにしておけ、ということだよ」

おそろく今日は銃を抜くことはないはずだ。

人に会いに行くだけだから荒事なんてあるわけがない。しかし、今まで平穩無事に済んだ試しがないから、少しだけ不安になる。思わずブラウスの上を走るホルスターの紐を、いつもよりタイトに締めてしまう。

「準備は済んだか?」

ノックに重なる形の声。身長割には高めのハスキー・ボイス。

サイファー・アンダーソンの声だ。入ってこないのは気遣いからか。

「もうちよつとで終わります」

「あと十分で済ませてくれよ」

「五分で充分だよ」

余裕がある、とはいえ時間を指定したということは急ぎなのか。

ルーム・スリッパから編み上げブーツの紐を素早く締めた。

最後に姿見の前で一回転。コートとスカートの裾が翻った。黒い薔薇の花びらが、散ったように見える。

ヘンリエッタの準備も終わったようだ。いつものブラウスとパンツ・スタイルに、茶色のベスト。かなりの軽装なのにありえない量のスローイング・ダガーを隠していたりするのだから地味に怖い。

髪はいつも通りリボンでハーフ・アップでまとめた。黄金から一本ずつ紡いだ金髪に、青空を写し取ったリボンはよく映える。少女的ロリータなファッションと言われれば首を縦に振るしかないが。

「お待たせしました」

「お、ばつちりめかしこんできてるな」

「それで会う相手は誰なんだい?」

「話を急ぎ過ぎるなよ、ヘンリエッタ。何事も結論を急ぎ過ぎると、肝心な何かを見落とすもんだ」

「……サブライズを仕掛けたいだけだろう」

「それを言ったらおしまいだろうが」

むっつりとした様子だ。やっぱりサプライズを仕掛けようとしていたのか。

一度は『女王陛下はないだろう』と思ったが、頭の片隅にでも保留しておいたほうがいいかもしれない。おそらく大英帝国において重鎮とされる人間だとは思うが。

「ま、着いてからのお楽しみでこと」

いたずらを思いついたような笑みを見て確信した。

やっぱりサプライズを考えていたらしい。

サイファーがリッツ・ロンドンに電話して用意してくれた蒸気四輪ガールニに乗り込んで、揺られること十分以上。まだ目的地が見えてこない。車体長の長いリムジン・タイプだから車内空間は相当に広い。座席なんてソファーめいて広いから、思いもいの場所に座つても大丈夫だ。

フレデリカはサイファーの向かいに座ってしまった。となり一人分くらい間隔をあけてヘンリエッタが座っている。その隙間が妙に気まずい。ボブ・カットの親友はその心中に複雑な思いを抱いているのか。もしかして、いまだに今朝のことを疑っているのか。酒は怖い、しばらく控えよう。

「……………本当にサイファーとは、何もないんだね？」

耳打ち。いつの間に感覚を詰めたのか。

「なにもありませんから。ヘンリエッタが想像しているようなことなんて。ちよつと飲みすぎちやつただけです」

返答も小声だ。サイファーに聞かれたくなかつたから。もしかしたら聞かれているかもしれないけれど。

「記憶がないなんてことは？」

「しつこいです………ヘンリエッタはメイザースさんとなんで出かけていたんですか？ それも夜中ですよ？」

「う、痛いところを突かれた」

「言いたくないならおあいこです」

「……そうだね。秘密にしておきたいわけだから」

「だから飲み過ぎただけなんです」

そうは言ったが、本当は飲み過ぎただけで終わっていない。

あの縫りつくような抱擁のことは言っていない。言えるわけがない。

ヘンリエッタの誤解を加速させるのはもちろんのこと、サイファーにも悪いような気がした。きつと彼の見せた数少ない弱さだろうから。だからフレデリカは閉口するこ
とにした。彼の名誉のために。

ガーニーはゆつくりと停止した。慣性を極限まで殺したプロの運転がなせる技だ。

超一流にして王室御用達のホテルは、運転手のグレードまで段違いだ。

着いたのは見るからに高級そうなレストランだ。事前予約もなしに行くことなんて出来そうにないくらい。フル・コースなんて頼んだら、目が飛び出るだけの料金になりそうだ。お金に不自由どころか、ホイホイ贅沢できる今の生活でもあまり行きたくはない店だ。もともとの庶民感覚が抜けてないのもあるが。

サイファーは躊躇いなく店内への扉を開けた。

「予約が入っているはずだが」

「アンダーソン様と二名様ですね。ご予約の件は存じております」

「で、どこの個室にいるんだ？」

「あちらの個室でお待ちです、ご案内いたします」

受付がちらと目配せすると、若い男の店員が「どうぞ」と案内をした。

プライベート性を重視しているのか、普通のレストランとかなり勝手が違う。個室の数がかなり多めで、一般的なオープンな席は少なめだ。料理に舌鼓を打ちながら、会談や商談を行うのが主旨の店なのだろう。

そういえば朝食は食べていなかった。リッツ・ロンドンに戻らず、あの豪邸で一夜を過ごしたのだから。食事なんて用意されているはずがない。きゆう、とおなか空腹で疼く

「こちらです。ごゆっくりどうぞ」

「ありがとうございます、とっておきな」

案内してくれたボーイのポケットにチップをねじり込んだ。こういう礼儀をサイファーは欠かさないが、その金額はかなり多いはずだ。なにしろポケットから紙幣の輪郭が浮き出るほど厚いのだから。

「やあやあ、よく来てくれたな。仕事の合間だというのに」

「お前が新作を作ったと聞けば、キャンセルしてでも行くよ」

「それは嬉しいなあ！ ささ、そこのお嬢さん方もかけてくれ」

個室は割と広めだ。十人くらい座れる長テーブルの上座に、一人の壮年男性が座っている。髪にはかなり白髪が混じっているが、まだまだ現役と言っていていくらいエネルギーシユな印象を与える。

フレデリカもヘンリエッタも初対面ではあったが——顔を知らないわけではなかった。軍事にかかわる人間であれば知らないものはいないはずだし、何度か新聞の一面を飾ったことさえある。海軍における新概念の兵器『航空母艦』の開発をきっかけに、新型の超弩級戦艦、水上蒸気艦戦、陸戦機動要塞に至るまで設計・開発を行った天才技術者。

——兵器王の名を関した海軍卿。

フレデリカは座るのも忘れて、おずおずと聞いた。

「失礼ですが……………ジョン・アーバスノット・フィッシャー第一海軍卿では？」

「おや、私のことを知っていたのかね？ 君のような美しいお嬢さんに覚えていただけているとは光栄だ」

「サイファーさん、海軍卿と知り合いなんて聞いてませんよ!？」

「だからサプライズにちようどいいって言ったろ。とりあえず突っ立ってねえで座ればいいだろ」

「まさかの海軍卿とはね…………」

「誰が呼んだが『兵器王』なんて異名もあるがね」

全員が着席するとフィッシャーは両手を鳴らす。それを合図に料理が運ばれてきた。まだ朝ということもあって、軽めのもが多い。それでも一流レストランなのかオムレツの出来具合一つ見ても、叶いそうにないというのがフレデリカの感想だ。

料理は得意だが、それでも一般人の中で上位に入るだけ。プロには決してかなうことはない。一品ずつ食べてみたが、見立てはやはり間違つてなかつたらしい。海軍卿が目の前にいるというのに、一心に食べたくなるほどおいしい。

「メイザースから聞いた。複雑な事情を抱えていたらしいな」

「あの野郎、言いふらしてんのか」

「君と親しいものには、確実に言っているだろうね。この国では」

「じゃあ、お前さんしかいない。あとメイザースくらい」

「現在の女王陛下は？」

「それに言及するのはやめとけ。スキヤンダルだ」

「そうだな……食事を終えたら、私の新作をお披露目しよう」

それからサイファアとフィツシャーも食事を始めた。

全員が旺盛な食欲を見せた。食事のおいしさもあるが、これから先は食っておかねばならない。そういう予感が根底にあるのだ。年若いヘンリエッタとフレデリカ、体軀から人並み以上に食べるサイファア、海軍卿にして大英帝国の軍事を支えるフィツシャーも同じくらい食べた。テーブルを埋め尽くしていた料理は、皿だけを残す結果となる。

受付の支払いはフィツシャーの出した小切手で行われた。チラツと見た金額の0が明らかに飲食で消える数を大きく超えていて、思わずびっくり返りそうになる。

迎えはフィツシャーの用意したガーニーだ。リッツ・ロンドンのものとは違う、走行性能と防御性能を重視した軍用のものだ。乗り心地は比べるまでもなく悪そうだが、ここは仕方がない。

「最新型の蒸気四輪か」

「ああ、陸軍からの評価は良い。陸軍からは」

「つまり軍人以外には不評というわけか」

「風情のないデザイン、箱に閉じ込められたようだ。そんな文句の雨霰だ」

フィツシャーは嘆いているようだが、フレデリカは割と妥当な評価だと感じている。装甲に必要な機関部をコンパクトにしたのか置き方を考えたのか、ボンネットの長さを抑えている。これで車体長を大きく減らして小回りをよくしたのだろう。

ただ車体すべてが装甲板張りで武骨な印象を与えるのは確かだ。これからマフィアやギャングのアジトに殴り込みに行くという時には、この上なくぴつたりであろうが。

「それで新作はどういうコンセプトで作った？」

「全局面対応型機動要塞だな」

「好きだよな、機動要塞」

——機動要塞。

ジョン・アーバスノット・フィツシャーが開発した新たな兵器概念。

文字通りの動く要塞というべき代物で、大出力機関によって生み出した圧縮蒸気を噴射することで移動を可能とした。圧縮蒸気による浮遊という都合上、平地でしか運用が利かないという点はある。それでも平均して数百メートル単位の要塞が迫る様は戦場において有効に働き、加えて機関騎士を数百体、歩兵五〇〇名を余裕で運搬し、大量の火炮で一帯を焼け野原に変える。

機動要塞と対地攻撃機の組み合わせはもはや無敵に等しく、大英帝国の強さを支える一端となっているのだ。

「議会はよく予算を出す気になるよな」

「英国人は紳士でありながら、ロマンを理解できるだけのセンスもあるのだよ」

「このガーニーは不評だったのにな」

「だから新作で名誉挽回だ」

二回目の移動で着いたのは『英国高度技術研究開発局』だ。この施設に大英帝国を支える技術が集い、新たな技術が生まれていくのだ。最高責任者を務めるのはフィッシュャーだ。

「新作は地下の製造所で最終チェックが行われている最中だ。案内しよう」

地下へと通じる巨大なエレベーターに乗った。階数表示がものすごい速さで変わっていることから、相当地下深くで建造されているらしい。

重厚な音を立てて、エレベーターが停止した。

扉が開かれたときフレデリカは息をのみ、ヘンリエッタは口元を手で覆い、サイファーは口笛を吹いた。

少なく見積もっても長さ八〇〇メートル、高さ九〇メートル、幅三〇〇メートル及び広大な地下空間が広がっていた。複数のピストンとカムによるアクチュエーター・アー

ムの先に工作機械の取り付けられた作業機器が、熟練工たちの手によってひっきりなしに活躍している。そこまでして建造されているのは——巨大な船だ。海を行く船ではなく、空を飛ぶための飛行船だ。船体は長さ五〇〇メートル、高さ五〇メートル、主翼の端から端まで二五〇メートルはある。しかし内部からガスで膨らませるのではなく、完全に装甲板で総体を作り上げており、片方でも八〇メートル近い主翼に巨大な圧縮蒸気の噴射口を備え付けている。

左右には口径一〇〇ミリ近い砲を備え、まだまだ武装を搭載できそうさだ。

「どうさだ？　これが私の最新型航空機動要塞『フューリアス』だ。船体は五三〇メートル、重量は六四〇〇〇トンに達するが理論上は時速二〇〇キロメートルでの飛行が可能だ。武装は今のところ左舷・右舷合わせて四〇門の一〇〇ミリ砲に三八センチ三連装砲と対空火砲だけが、いずれは圧縮蒸気砲や五トン爆弾も装備する予定だ」

「それだけじゃなさそうさだ。僕と同じだけサブライズ大好きなお前のことだから、もう一つくらい隠しているものがあるんだらう？」

「これだけでも腰を抜かしそうです……」

「類は友を呼ぶというか、似た者同士というか」

フレデリカはフューリアスを見ているだけでクラクラしそうになる。それはヘンリエッタも同じようなものらしい。

ここでフレデリカは一つ気になったことを、フィッツシャーにぶつけてみた。

「出来上がったら、どうやってここから出すんですか？」

「……………実は考えていない」

「ぬッ!？」

「えっ!？」

「はあ!？」

「———というのは冗談で、実は天井が開くようになってる」

茶目つ気たつぷりにウインクまでした。

「…………フィッツシャー、まさかこの建造所から作ったのか？」

「当たり前だろう。天井を開けてそこから飛行させるんだから、そうするのが普通だろ

う?、らしくもない質問だな、サイファー」

「……………よく議会は予算を出したな」

「同感です」

「さて、あれがもう一つの新作だ。名は『メルカバ』という」

指さした先には鋼で出来た何かが、逆関節の足で立っている。大きさは高さ二〇メートルは下らないはずだ。確認できる武装は骸骨じみた頭部の左右にある三銃身回転式機関砲と脚部の膝に搭載された砲身の短い自動式榴弾砲だ。

「メルカバ……………神の戦車か」

「そうだ。神の戦車は無限軌道を使わない、二本の足で戦場を闊歩する。すでに歩行性能は問題ない領域だ。これを量産し、フューリアスに搭載して空挺部隊として運用することが決定した」

「荒唐無稽極まるアイディアも形になるとめざましいものがあるな」

「三日後にはお披露目の式典を行う。招待しよう」

「ありがとうよ」

そのとき若い女がフィッシャーのもとに駆け寄ってきた。服装からして内勤なのは間違いないが、こんな製造所にいるべき人間ではない。

「すみません、海軍卿が招かれた客に用があるという電話がありました」

「……………僕にか？」

「近くのカフェで待っている、とだけ伝えるようにとのことでした」

「わかった、行こう」

「気をつけるよ、サイファー。私もお前も敵は多いのだからな」

「いらぬ心配だ。さ、二人とも行くぞ。鬼が出るか蛇が出るか、楽しみだなあ」

エレベーターは地表への道を戻り始める。

Crack 狂える者は呼び出して待つ

フューリアスとメルカバの衝撃も冷めやらぬまま、三人は施設を後にする。

近くのカフェにいるという話だったが、そこまで足を運ばずとも空気の変質でわかる。肌が粟立って、腹の底から冷えるほどの圧力が場を満たしている。

ゆえに人気はない。誰もカフェの前を早足で通り過ぎていく。

空気を肌で感じているのもある。しかし、理由はもう一つ。

「いきなり呼び出して済まない。君がこの大英帝国の土を踏んだと聞いて、いてもたってもいられなくなつて」

「……………」

漆黒のカソック・コートの男も確かに異様だが、問題はその隣だ。

中世の騎士鎧がそこに立っていた。フル・フェイスの兜まできちんと身に付けている。磨かれ抜いた銀に光る鎧は、見た目こそ眩く輝く。だが無言を貫き、微動だにしないのが不気味だ。

ズン、と重苦しい足音に交じって蒸気音が鎧から響く。

機関騎士だろうか、というのがフレデリカの第一印象だった。ただ大きさは幾分か小

さい。機関騎士は三メートルを優に超すが、こちらは二メートル強というぐらいか。サイファーとそんなに変わらない。

「サイファー……」

そのとき鎧はぐぐもった、重厚な声を出した。人間の声帯では間違ひなく出せないと思われるような声。歯車を擦れ合わせて、なんとか男の声に仕立てたようなものだった。ズン、ズン、と揺れるほどの足音が鳴るたびにサイファーと鎧の距離は縮まっていく。空気の凄まじい唸りをフレデリカは確かに聞いた。

野太刀の刃と騎士槍の矛先がぶつかり合った。

弧を描く刃はすでに一筋の光も吸い尽くす黒に染まっている。コンマ一秒もない時間、『力』を展開したというのか。

対する鎧の武器も異様だ。中世に使われたと思しき巨大な騎士槍だが、獲物を抉り取るかのようなスパイクが並び、周囲の景色が歪むほどの高速回転をして絶えず火花を散らしている。唸るような音ではなく耳障りな高音を立てている

刃渡り五尺以上もの野太刀と三メートル近い騎士槍のぶつかり合いが白昼堂々と行われている。

どこかで悲鳴が上がったと思えば、それを皮切りにあちこちで叫び声がかかります。

「ずいぶんな歓迎だな、アルトリウス」

「待ちかねたぞ、待ちかねたぞ。今日こそ引導を渡してもらうぞ化物。震えることも怯えることもなく、路傍の石ころのように滅してやる。誰の記憶にも一片として残さん、一片として」

「独立戦争からの仲で久しぶりの再会を楽しむ余裕もないのか？」

「必要ない、必要ない。お前との仲など、たった一突きで一切合切片つけてやる」

「相変わらずだな。早い男は嫌われるぜ」

サイファアの口調はあくまでも軽い。だが鎧の言葉は怨嗟と憎悪をかき集めたようだった。

ぐきん、と轟音がした。ぶつかり合い、火花を散らす野太刀と機関槍の真下に引き裂くような深い亀裂が入る。二人の足元も異様なまで陥没している。

やはりこの二人は人間ではない。サイファアはもちろんとして、このアルトリウスと呼ばれた鎧の男もほとんど同格と言っている。

「――両者、矛を収めて」

場になすと通る声が響き渡った。耳障りがとても心地いい、涼やかな声だ。

肩にかかる程度の透けてしまいうようなほどの薄い金髪が視界に入った。視界は顔に向けられない。そもそも向けられなかった。

その顔はあまりに美し過ぎる。世の苦しみに心痛めるような物憂げな碧眼、すうと

通った鼻梁は美男子つぷりに拍車をかけ、己のものを寄せたくなるほどのラインを描く唇は微笑を浮かべていた。輝くほどの、眩く感じるほどの絶世の美丈夫がそこにいた。恐るべきは美貌の力か。今まで一人もいかなかったカフェの周りに、花の蜜を求めた蝶や蜂のように人が集まり始める。その目は老若男女問わず虚ろだ。もはや思考能力はないに等しいはずだ。サイファーもアルトリウスも武器を下して、彼のほうを見ていた。

顔を見せただけでこの場を制してのけた、この美男子は何者なのか。

それも気にならないくらいに美しさだが、それ以上に腹の底からくる悪寒をフレデリカは感じている。何かが違うのだ。根本的な部分、生物的なもの、人間的なもの、それらがまとめて一線を画している気がする。きつと悪魔だ。これほどに美しく、そして嫌悪をもたらすのは悪魔以外に他ならない。

「エドワード様、あまりご尊顔を見せられるのは」

「そうだねダイオニシアス。あまり騒ぎになっても困る」

長衣の軍服を纏った見るからに壮健な老人が後から来た。エドワードと呼んだこの美男子の顔は見慣れているらしく、鋼色の双眸は鋭い輝きを一切失わない。

「剣魔ダイオニシアス・ガラルド……凄まじいビッグ・ネームだ。よく東インド会社から戻ってこれたな。何か面白いことでもあるのかねえ？」

「五月蠅い。化け物が言葉を手繰るな」
やかまし

騎士槍は持ち上がって、サイファアの首筋に突き付けられる。

「言葉の一つや二つ、どうってことないだろうが」

漆黒に染まり抜いた野太刀もアルトリウスの鎧の機微あたりに突き付けられた。

「はいはい、矛は収めて」

その声色、いまだに微笑みをたたえたままの美貌は瞬く間に得物を下させた。はたから見れば、どこか滑稽にも思える光景だが、サイファアはもちろん彼に勝るとも劣らないアルトリウスは一級の戦士。その闘争心を瞬く間に鎮火しているのだとすれば、並大抵のことではない。

ただ代わりに視線で火花を散らし始めた。メイザース以上の確執というよりも、根本的に合わないというものだろう。水と油だ。サイファアとメイザースは、アーカムの水とテムズ川の水だ。水と水同市であれば混ぜ合わせられる。だが油と水はどうあっても交わり合うことはない。お互いに弾き合うのだ。だから顔を合わせるだけでぶつかり合うのだ。

「ジャッキー・フィッシャーの招待を受けてはいないのかな？ 見せられたはずだよ、あの二つの兵器を」

「アレは近々、インドのレジスタンスとの戦いの投入される。エドワード様は運用に適

うかどうかを見定め、私はその護衛としてここにいる」

「劍魔を呼び寄せる時点で普通じゃないが……あの兵器も普通じゃない。まっとうなことなんか一つもない状況なんだから、色々と超えちゃいけないものを超えた連中が来てもおかしくはないか」

「ジョン・ドウ、のような」

「職務にまじめなこと」

大仰に肩をすくめたサイファアの目が「ずいぶんとお耳が早いことで」と訴えているのが、フレデリカでもわかった。きつと誰でもわかるはず、と思うくらい雄弁に。

「でも、そんなこともなくなるはずだよ」

エドワードのその言葉だけがいやに脳裏にこびりつく。蓄音機で記録して、何度でも聞きたくなるような涼やかな声だというのに。底冷えしそうな何かと共に塗りたくられた。きつと忘れられない、忘れることができない。

それを最後にエドワードとダイオニシアスが去っていく。同時に周りを取り囲むようにいた意識なき人々がバタバタと卒倒していく。理解を超えた数々の事柄に、すでに失神状態にあったのだ。二人が去ったことをきっかけに、糸が切れたらすべきか。

「我々もおいとましよう。アルトリウス、来い」

「……………次は我が名を遂行する」

アルトリウスもカソック・コートもカフェから去っていった。

「だからロンドンには来たくないんだよ。アイツがいるからさあ」

「えーと、アイツというのは……」

「鎧のほう。アルトリウス・キャツスルダイン。英国カトリック正教会の化け物専用の切り札にして、いまだに現存する機関騎士の最初期の存在だ。通称『殲滅騎士』と言われたりしてる……ヤツが作られたのは独立戦争の時だ。脳まで機関に置き換えてまで化物を狩り続ける、大英帝国屈指の大馬鹿野郎さ。もうヤツ自身のものは残っちゃいない。数億もの歯車が織り成す人格模倣演算で生み出された思考・精神・人格が完全にやつそのものなのか、その証明は『悪魔の証明』になっちまった」

「じゃあ、あの人は……」

「『アルトリウス』なのか、それとも『アルトリウスの形をした何か』なのか。どちらにせよ、僕まで滅そうと思ってるのは間違いない。一度は背中を預けたこともあったのにな」

「忘れてしまったんでしょね……そのことは歯車の群れに書き込まれなかった」

「やりづらい相手だな……かつての戦友だぞ」

「敵に回れば、過去も因縁も関係なくみんな同じだ。向かってくるなら、殺すまでだ」

いつもの不敵な笑みに凶暴なものが混じる、と思いきや前面に押し出された。犬歯も

剥き出しになるほどの狂犬じみた笑みだ。きつと目が合えば喉笛を食い破られる未来しか見えない。

戦いというものをサイファーは心から楽しんでる、好んでる。戦闘狂というほどではないが、目の前に強者がいれば内心は闘争心に疼いているはずだ。すこしでも戦いの臭いを感じれば、首を突っ込まずにはいられない。不敵な笑みで隠し、理性と矜持で押さえつけても、根っこから争いを欲するのだ。

ゆえに、たとえばつての戦友であつても自らの敵であれば、狂者であれば、戦つて心の底から楽しむ。

サイファーも負けず劣らずなのかもしれない。

「あのエドワードつて人、一体何者なんでしょうか？」

「美しい、以上に得体のしれない男だね」

「僕も知らない男だが………インドの大反乱でレジスタンス連中をぶった切りまくつた劍魔がついてくるほどなんだから、相当に地位はあるんだろうが」

「でも……あの人は怖いです。どこかズレてはいけないものが、致命的にズレているような気がして」

「私も同感だ。今まで狂つた人間は色々と見てきたけど、あれは一括りに『狂つてる』とか『ズレている』という言葉で、片づけられないような気がする」

「大した分析だな——とにかく、あの男は警戒しておくか。フィッシャーにもお披露目の時は用心しろと言っておかないとな」

懸念が取り越し苦労であることを願う。

だがエドワードのインパクトは気のせいで済ませたくはない。アレには確実に何かある、という根拠のない確信があるのだ。令嬢のごとく蝶よ花よと褒め称えられ、謀の一つも似合いそうにない。なのに無視することなど、忘れることなどできない。

リッツ・ロンドンとあの洋館、どちらに戻るべきかと思案した時だった。

「わかるか?」

「囲まれますね」

「どこのどいつだろう」

バン、と叩き付けるほどの殺気に取り囲まれている。

どこかで装填ボルトを引く音がした。ボルト・アクション方式のライフルなら弾幕の程度は知れるが、セミ・オート方式ないしフル・オートなら目も当てられない。得物も装備もあるが、アーカムでもない街中で一戦繰り広げるのはなるべく避けたい。

「いつでも抜けるようにしとけ」

三人で死角を作らないように円陣を組むように身構える。

それと同時にサイファアのブーツの先に銃撃が炸裂する。

「構えろッ！」

閑静だったロンドンの住宅街に黒影が躍り出た。詰襟のロング・コートを着た男たちが、明らかに人間では為しえない挙動で向かってきている。肉を捨て、鋼鉄の身体を得た機関兵士^{スチーム・ソルジャー}だった。見たこともない自動小銃と思わしきものを携えた者が六人、片手半剣を構えた者が四人だ。

フレデリカが二挺を抜いた時には、サイファアの手には鞘に収まった野太刀が握られ、ヘンリエッタはグルカ・ナイフとダガーを構えていた。三人一斉に動き出す。サイファアとヘンリエッタは機関兵士と刃をぶつけ始めたが、フレデリカは一目散に身を隠す。

自動小銃を構えた機関兵士のフル・オート射撃は苛烈だ。口径は三〇—〇六だろう。外観はかなり先進的に見え、ブローニング自動小銃からの曲銃床のスタイルではなく、ピストル・グリップと直銃床の組み合わせだ。それでも反動はかなり強そうに見える。住宅街というだけあって遮蔽物はある意味では豊富だ。選ばないと流れ弾の犠牲者が出るが。

銃身を完全に固定する構造の『One In All』を構えた。外観はM1911にしか見えないが、内部機構は完全に別物だ。掃射を再開しようとする機関兵士に銃弾をお見舞いする。45口径強装弾は音速を軽く超えて、次々と鋼鉄の身体を食い破らん

と撃ち込まれる。

徐々にのけ反って、後退していく様は奇妙な踊りのようだった。『One In A
 11』のフル・オートはダスト・カバーに沿うスタビライザーと、重量のあるスパイク
 付きコンペンセイターによって殺されている。

素早い弾倉交換と感覚で弾数を数えているのは、ドラム・マガジン 円筒弾倉を携行していないだけで、
 連射をなるべく途切れさせないように弾倉を近くに置き、初弾を込める手間を省くため
 に薬室に一発だけ残した状態で再装填する。

ただ問題としては『One In A11』の弾倉が心もとないという点だ。この調
 子で撃ち続けていれば、コートの裏、コルセット、スカート、太ももに巻いたポーチに
 隠した分まで使い切るのは遠くはない。割とすぐだ。

だが『All In One』ではいささか威力不足なのが否めない。9ミリの拳銃
 弾で装甲を貫けるかどうかと問われれば、分の悪い賭けだとしか答えようがない。

残りの弾倉は五つ。これで凌ぎ切らねばならない。理由付けて『Song For
 Fog』を持ってくればよかったと本気で後悔している。あの銃なら連中を真っ二つに
 できるというのに。それでも自動小銃を携えた機関兵士を二人始末できたのは僥倖だ。

そして——45口径強装弾が三人目の眼窩から侵入し、脳髓を粉碎して後頭部から抜
 けていった。残りは三人だ。

それと同時に今まで一発も撃つてない残りの三人が駆け出した。持っている銃は倒した三人と同じもののように見えたが、ところどころが違う。全体的に小ぶりで、口径は大きく銃身は薄い。そして弾倉は円筒弾倉だ。

一斉にフレデリカのほうに向けた銃口からバラ弾がぶちまけられる。九発の〇〇バック・ショットは石畳の地面を粉碎し、破片はもうもうと立ち込めて視界をふさぐ。

「散弾銃……それも半自動式セミオートツ！」

半自動式の散弾銃というものは長年研究されていた。新大陸で発足したレミントン社が草案のようなものを作り上げたのを最後に、豊富な弾種を自在に作動させる機関部の考案に行き詰った。弾種に幅があるおかげで確実な作動を狙えるガス圧作動方式では、ガス量のまちまちな散弾で充分に機関部を回転させられないのである。

反動利用方式も反動をしつかりと受け止める機構の制作に難航中だ。

その背景を考えると自動小銃と変わらない外観で、しかも弾倉式を実現しているのは銃器技術者たちの悪戦苦闘ぶりを嘲笑っているようだが、そのからくりは直銃床の後ろ側にあった。腰に取り付けた長さ二〇センチ、直径五センチのタンクから延びるチューブが、銃床の後ろに取り付けられている。

「圧縮蒸気を送り込んで、ポンプ・アクションの代わりにさせるわけですか。作動の良さも納得です」

皮肉が混じっているのは外部動力による確実な作動性を揶揄してか。仮に不発があつても無理やり薬莖は排出できるし、圧縮蒸気が途絶えない限り作動不良はほとんどない。

この状況に対し、フレデリカは二挺に一つずつフル装填の弾倉を叩き込む。撃つて途中で買えたから、初弾はすでに薬室の中だ。

「——行きます」

今まで身を隠すのに使っていた煉瓦造りの花壇から身を躍らせた。

地面を水平に飛びながら、二挺をフル・オートで撃ちまくる。

すでにフレデリカの世界はゆっくりと回っている。撃鉄が弾丸の尻を叩く瞬間も、スライドの前後もよく見える。無論、飛んでいく弾丸が狙った位置へ飛んでいくのも。

わき腹を地面に撃つ形で着地し、素早く身を隠す。大きなガーニーにほとんど前転するようだった。

まだフレデリカは体勢を立て直せていない。散弾を何発か食らったのだ。ゴシツク調のコートが防弾でなければ、もつとひどいことになっていたはずだ。衝撃による内へのダメージに脂汗を流す。そこを機関兵士は逃すわけもなく、次の弾丸を撃とうとして——できなかつた。

圧縮蒸気を収めたタンクとそこから延びるチューブはすでに用を為していない。化

学素材の伸縮自在な供給チューブは、フレデリカの放った弾丸によって食い破られ、圧縮蒸気を漏らしてしまっていた。

——問題ない、いける。

確信を持ち、深呼吸一つで態勢を整えると機関兵士の死体から自動小銃を奪う。

そのまま転がりつつ撃ちまくった。三〇—〇六スプリング・フィールド弾と思しき弾丸の反動は、肩付けした銃床を中心にきつい衝撃を伝えていく。だが撃てないわけではない。ズシリとくる七キ口超もの小銃の重量は、反動抑制に一役買っていたのであった。

そのまま足元を薙ぐように掃射。蒸気圧駆動のパワー・ピストンと天然の筋肉繊維に交じって、金属部品も粉碎されて弾け飛んだ。倒れ込んだ連中の目へ向けて『One In A—』を発砲する。すべて眼球を撃ち抜き、頭蓋をかき回して脳漿と共に後頭部から抜ける。

「ヘンリエッタとサイファーさんは……」

視線を向けた瞬間にサイファーの一閃が機関兵士を一刀のもとに両断した。その鉄と肉の混ざった断面は血に塗れているが、瞬く間に血の滴が落ちていくことから滑らかさが伺える。輝きにいたっては金属部などはや鏡だ。技量の高さを示している。

ヘンリエッタもグルカ・ナイフを一振りし、上半身と下半身に切り分けた。さらに断

面からずれる前に首にも一閃し、無表情を保ったままの首が宙を舞った。

残る一人にサイファーは超巨大リボルバー『Howler In The Moon』をぶつ放し、ヘンリエッタは眉間へスローイング・ダガーを投げ、フレデリカは自動小銃をフル・オートで撃ちまくる。

機関兵士の身体は木っ端みじんになり、ダガーに刻まれた火炎のルーンにより灰すら残さず燃え尽きた。70口径もの巨弾を撃ち込まれた時点で身体は半壊し、そこに追い打ちをかけるように30口径もの大口徑ライフル弾の連射を食らい、止めに魔術の火炎で燃やされたのだ。耐えられるわけがない。

「機関兵士を鉄砲玉に使うとは、ヤツら相当に僕らにおかんむりなのか……」

「それとも警戒しているがために消そうとしている」

「死人に口なしなら、手ありませんから」

「もう少しだけ、骨のある奴ならよかったな」

そうばやいた時だ。

住宅街が揺れた。石畳の床に五メートル近い大きな亀裂が走った瞬間、サイファーとヘンリエッタがいるほうは隆起し、フレデリカのいる地面は沈降した。そのまま斜めに傾いていく大地にバランスを崩し、あつけないほどフレデリカの身は奈落の底へと落ちていく。

ただ——最後にサイファーと目が合ったような気がした。



亀裂に吸い込まれるように転がっていくフレデリカの姿を認めたサイファーは、総身の全力を以て駆け出した。だが問屋は卸さない。

どこかに待機していたのか長剣を携えた機関騎士が躍り出た。

「邪魔だボケエー！」

三メートルを優に超える半機の騎士が振るう長剣を抜刀すらせず、鉄拵えの鞘でいなして弾く。

技術など欠片しかない一撃は、簡単に誘導されて刀身を地面に深々と突き刺す羽目になる。だが空いた腕のギミックを作動させ、多用途旋条榴弾砲を展開した。爆音とともに放たれたのはバツク・シヨツト弾だ。口径五〇ミリもの砲身から五ミリもの大粒の弾丸を三〇発近くもばら撒くのだ。

「だあから、邪魔すんなッ！」

抜刀一閃。さらに高速による連続の振り抜きは空気の渦を作り上げ、散弾をことごとく吹き散らして叩き落す。

だが——その時には。

フレデリカの姿は奈落の闇に消えていった。

亀裂の端でびたりと足を止めた。抜いた野太刀も納めた。機関騎士は命令を遂行すべく、地面に食い込んだ長剣を引き抜いた。

ゆつくりとサイファアは騎士たちのほうを見る。地面を蹴ると同時に翻ったコートは、すでに漆黒に染まり切っていた。

コートも野太刀も漆黒に染まっている。

それだけに留まらず、溢れ出る「力」は渦を巻いた。生身では近づくことすらままならないほどの力場を形成し、その暴威を以て恐怖と支配を上書きする。彼は暴君であった、そして霸王でもあった。世をかき回して、打ち壊す存在。

機関騎士のたった一つの生身たる大脳は悲鳴を上げた。しかし逃亡は許されない。戦闘補助のために搭載された小型の階差機関は肉体の操作権を剥奪し、あらかじめパンチ・カードでプリセットされた戦闘プログラムを実行する。足の底に装備された球体車輪を展開し、圧縮蒸気を噴射するスラストアでの加速。そこから最高速による長剣での接近戦を組み立てた。

だが騎士が動くことはない。距離を全く詰めないまま放たれた抜刀術の一閃を、階差機関は認識できなかった。サイファアと騎士の距離は五メートル弱だが、その距離を飛

び越えて幾重にも重なった輝線が重厚な鎧の装甲に走る。あおむけに倒れた瞬間、三メートルもの巨軀は数百に及ぶ破片に分断されてバラバラになった。

その異常事態をもう一方の騎士が認識した時にはサイファーは距離を詰めるや、その肩に野太刀を持たぬ左手を乗せる。指先を乗せる程度の軽いものであったが、コンマ一秒もかからずに騎士は縦に圧壊した。

ふうう、と狂犬じみた息遣い一つして納刀した。ロング・コートはいつもの灰色に戻っている。

だが落ち着いたようには見えない。その銀灰色の瞳にはいまだぎらついた輝きが宿ったままだ。

「あーキレそう」

「……こういう時こそ、冷静になるべきだと思っただけだ」

「んなのわかってる、わかりきっている。だからこそ、だ」

あくまでも冷静だ、と言いつつ聞かせなければ自分が怒りに狂うのは確実な自信がサイファーにはあった。そんな自身なんて欲しくもない。

ただ根拠はないが生きているような気がした。

それだけを信じるほかない。

「これ、どうやって起こしたと思う？」

「私には想像もつかないね」

サイファーが指さしたのはロンドンの住宅街を左右に割った亀裂。自然現象でしか為しえないものなのに、どこか人為的なものを感じたのだ。いや人ならざる、それ以上の存在かもしれない。でなければ、これだけのことを起こせるわけがない。

二人をよそに周りに人が集まり出した。

深々と空いた幅に対して深さが異様にある亀裂を覗き込む野次馬が次々とやってくるのだ。

無論、転落の危険性を考えて警察が動き出した。幅も深さも相当だが長さ自体はあまりないので、亀裂は簡単に立ち入り禁止のロープで仕切られた。

手早く野次馬を追い払う警察の中に見知った顔がいた。

「よう、ワイアット。お勤めご苦労様」

「サイファーにヘンリエッタ……フレデリカ嬢は？」

「あそこ」

親指で亀裂を指した。

悪党と間違えそうなくらい凶悪な顔が、これでもかとかと口を開けて間抜け面を晒している。

「……なんてことだッ」

「まあ、生きているとは思いがね」

「ついに頭がおかしくなったか？」

「あいつに戦う術を仕込んだのは誰だと思ってる。僕がわざわざ生き残るノウハウを
一から手解きしてやったんだ。そう簡単に死ぬタマじやない」

サイファアの顔には、いつもの不敵な笑みが浮かんでいた。



「流石にここまではやらなくても良かったかな」

大英帝国を一望する蒸気時計ピック・ベンより、彼は大地に裂け目が生まれた瞬間を
見届けていた。

いざという時には部下の老人よりも、はるかに頼れる昔の恩師に協力を仰いだのは良
いが、あそこまでやられては如何ともしがたい。あまりやり過ぎて、こつちに不利益が
来るのは避けたい。とくにビッグ・ベンの地下だけは何としても守らねばならぬものが
彼にはあるのだ。

「でも……サイファアじゃないのが残念だった。あの子は最後まで残しておこうと思っ
たのに」

言葉の響きにも、表情にも、悲痛なものが混じっている。だが、そのすべてが薄っぺらい。迫真さというべきか、芯がないというべきか。心がこもっていないように感じられる。

きつとヘンリエッタでもサイファアでも、言葉の内容は変わってもそれだけは変わらないはずだ。

心を痛めたとしても、目的の達成に歓喜したとしても、あくまで表面的な感情の発露に過ぎない。それだけで終わりになるのだろう。

まるでこの世に生きている感覚が薄いのだ。何もかもに表面的な関心を抱いているように見せかけているだけで、実際は何の関心も寄せていないように見える。彼の目はビック・ベンより確かに大英帝国を一望している——物理的にはそう見えるだけ。その心中は、精神は、何を見ているのか。

——この世界と、彼の世界は本当に同一なのか？

その問いは悪魔の証明だ。彼の見る世界を見ることが叶わない限り、推測の領域を脱することはできない。だがいかなる手段をもってしても『他人が世界をどう見ているか』などわかるはずもないのだ。

——あえて方法を上げるのだとすれば。

「さあ、もうすぐだよ。みんな幸せになれるんだ。老いも、若きも、男も、女も。分け隔

てなく幸福を与えてあげるよ。そのために——みんなが僕にならないとね」

ただ一つの方法は彼自身になること、イコールの存在になることだけ。

そして彼になってしまった時点で現実の世界との照らし合わせは叶わない。故に彼の狂気は立証できない。だから恐ろしい。完全なる理論を以て、根拠を突き付けて、狂気を知らせることができない。

いくら他人が『狂っている』といつても主観的で、感覚的だ。きつと彼には届かない。だから彼は止まらない。止まるはずがないのだ。

止められるとすれば、サイファー・アンダーソンだけ。

F a i l l 地下と地上に蠢くもの

——落ちていく。

深い亀裂の中を落ちているというのに、命の危機というものが異様な薄いように感じられた。

だからこそ、冷静さを失わないで済む。自分も知らないうちに命を懸けることに、何の恐怖もためらいもなくなった。フレデリカはため息をつきそうになったが、今は生き残ることが優先事項だ。

十メートルほど下に直径にして三メートルはあろう横穴を見つけると、その反対方向に向けて二挺を撃ちまくる。反動で穴へと近づいていくが、まだ距離は足りない。仕方なく自動小銃のほうも弾倉一つ分撃ちまくる。それでようやく横穴に滑り込むことができた。

「もう、こんなのは二度としたくありません……」

ここのため息一つ。

弾切れの自動小銃を捨てようとして——横穴の端に引っかかっている物を見つけた。自分が屠った機関兵士の死体だ。全身に弾痕が見受けられるが、それよりも目を引くの

はポーチに納められた自動小銃の弾倉だ。ブローニング自動小銃と同じ箱型の二〇連発だ。

死体はやつと引つかかっているようなものだから、奈落の底に落ちないように注意深く弾倉を失敬していく。最後の一つを抜き取ったところで――。

「あ――」

と間抜けな声を上げた。編み上げブーツのつま先が触れてしまった。

呆気なく何の抵抗もなく死体は奈落に吸い込まれていった。耳を澄ませてもそこに当たった音がしないのを察して、弾かれるように穴の淵から遠ざかった。この横穴に滑り込めていなかったら――と考えて冷や汗が滴る。

「うん、考えないようにしよう」

空の弾倉は捨てて、新たな弾倉を込めて装填ボルトを引いた。スムーズに薬室へと初弾が叩き込まれ、発砲の瞬間を待ち構えるばかりとなる。やはりこのくらいのライフルが一番ちよいどいい、というのがフレデリカの感想だ。裏を返せばそれだけの装備を開発、または所有できるほどに敵は大きいということの表れでもあった。

機関部には自動小銃の名称が刻印されている。

――『Advanced Rifle Model "Predator"』

もしかすると開発途中の次世代小銃かもしれない。ブローニング自動小銃はどちら

かと言えば機関銃よりの性格だから、コンパクトにして小銃並みに抑えようという試みの産物かもしれない。もつとも機関兵士に供給されていたあたりからして、人間以上の身体能力がないとまともに扱うことは叶わないのだろうが。

全長にして九〇〇ミリ足らずなおかげで、地面を掘り抜いた穴の中でも取り回しがきく。

だが穴の中は真つ暗だ。明かりなど期待できるわけもないから、必然的に視覚以外の四感を使うことが求められる——と思った矢先に鮮明な視界が取り戻された。

「……便利な目。自分の目なんですけれど」

一片の光も届かぬ領域すら、己の瞳は見通してのける。

おそらくは見えないものなど、この黄金の双眸にはないはずだ。見ようと思えば、たぶんなんでも見えるはずなのだ。光も刺さぬ暗闇をそのまま見通すことも——その中で蠢く何かを見ることも容易い。

——てけり・り。

——てけり・り・り。

暗闇にほんの少し濃緑色を混ぜた軟体生物が洞窟を闊歩している——正確にはゲル状の腹板で這っているのだが。

牛ほどもある奇怪なその名をフレデリカは知っている。

「シヨゴス……」

おそらくは一番初めに見た化け物だ。その身は現世の物理法則をことごとく拒絶し、彼らの理を触れた者に押し付けるのだ。その末路は浸食による肉体の崩壊だ。

だが今は戦う術は充分にある。戦意を高ぶらせれば二挺に青白い稲妻が走る。物理法則による破壊を受け付けぬのなら、別の方法でアプローチするまで——たとえば彼らの世の理を以て撃つ。

外法の雷を帯びた弾丸は装薬の爆発に押され、青白い軌跡を残しつつ飛翔する。着弾した瞬間、コール・タールのごとき粘液上の身体の上で小さな爆発を起こす。手榴弾と比べれば規模は三分の一にも満たないはずだ。だがエネルギーの質は段違いだ。爆発はほんの少し漏れただけに過ぎない。

事実、シヨゴスの身体にエネルギーのほとんどが注ぎ込まれた。螺旋状に粘液上の身体がかき混ぜられ、忌まわしき外法の細胞一つ一つまで焼き尽くされた。弾頭に詰め込まれた「力」の炸裂はシヨゴスを屠るのに十分な威力を持っている。

だがシヨゴスもこれで終わるわけがない。弾頭が炸裂した瞬間に、いくつかの分裂体を産み落としたのだ。大ききこそ人間の子供と同じか、それより小さいくらいだが能力はほとんど同じだ。

——てけり・り・り！

冒流的なその声に攻撃の意思を混ぜ、分裂体たちは一斉に粘液を吐きかけた。その身体も過剰なまでの殺傷能力があるものの、攻撃用の粘液にいたってはそれ以上だ。見よ、粘液が着弾した瞬間から洞窟の外壁は瞬時に分解され、砂山となってわだかまっている。

フレデリカに被弾は許されない。ホーレス謹製のゴシック調のコートがかなりの防御能力を持っていることは、何度も性能を確かめるだけの機会に恵まれたおかげで充分に知悉している。ただ、それはこの世界における物理法則に則った防弾性能のみで、外法の理によるものに関してはいあまり期待しないほうがいいはずだ。

いまだ銃身に「力」を展開し、次々と分裂体に銃弾を撃ち込んで四散させていく。

「あつ——」

だが気づいた時には遅かった。

ほとんど黒と言つていい濃緑色の粘液が右肩に命中した。クロのゴシック・コートが白煙を噴いたが、その下のブラウスまで灼けることはない。ホーレスの腕に感謝した。

これだけの防御力があるなら多少の無茶が利く。顔や手と言つた露出している部分に食らわねば、いくらでもやりようがある。二挺を射撃ではなく、格闘の構えで保持。洞窟の地面を蹴った。

殺到する殺人粘液を身を翻して避ける。

クロス・ファイアで同時に二匹を撃ち抜いた。

分裂体が一齐に触腕を伸ばし、粘液をまき散らしながら鞭のごとくフレデリカを叩き落とそうと迫る。

その全てに銃弾で迎え撃った。弾丸を少しでも節約するために、自分に当たるものだけ撃ち落とすのだ。

弾け飛ぶ分裂体の飛沫一つも浴びず、着地した時にはシヨゴスも分裂体も死に絶えていた。

「まだいるのかな……」

立ち上がりつつ、二挺から『Predator』に持ち替えると地上への道を探すべく歩みを進める。

シヨゴスなんて怪物がうろついている可能性を捨てきれない現状、フレデリカの五感はいつも以上に研ぎ澄まされた。特に黄金の双眸による視覚にいたっては——もはや気配すら「視える」のだ。何か動くもの、生きるものがあることを、うつすらとした白い霞となって視界に映し出されている。

一步を踏みしめるたびに、どこかが濃くなって、どこかが薄くなる。濃淡が気配の主との距離を示しているらしい。

手に握る『Predator』の引き金に指をかけた。いつでも撃てるようにするための準備だ。鉢合わせなんて状況がいつ起こるかわからないのだから、備えておくに越したことはない。

幸いにも「視る」術はあるのだから、十分に警戒しておけば避けられるはずだ。

それから二〇分は歩いただろうか。極度の緊張で疲労を感じることも忘れかけている。

「(ハ)は……」

思わず目を剥いた。ロンドンの地下にこんなものがあつたのか、という驚愕に脳内を埋め尽くされて。

地面から天井まで二〇メートルは優にあるはずだ。確かに自分はそれだけの距離を落ちていったという自覚がフレデリカにはあつた。だがそれを差し引いたとしても、この巨大な空洞は異常としか言えないが、それに拍車をかけるものはその内壁にあつた。

びっしりと隙間なく描かれている古代文字にフレデリカは見覚えがあつた。考古学は先行していなかったものの、興味はあつたから大学の図書館で結構な知識を得ている。

「この文字……南極横断山脈の古代遺跡にあつたものに似てる」

南極横断山脈——一八八一年にミスカトニック大学の率いる南極調査蒸気船が標高

三万四千フィートに達する巨大山脈を発見、その二年後に再調査を行い登頂。その過程で古代遺跡を発見したものの、内部に巢食っていたシヨゴスから命からがら逃げるという事態となり、調査員一名が発狂という惨事となった。

ただ調査員の残した資料は古代文字のサンプルや「具体的」な内容を省いたものであれば、大学生徒用に公開されることとなった。二度と遺跡に足を踏み入れるべからず、という戒めと共に。公開されている分はすべての資料から見れば二〇分の一にも満たないはずだが、古代文字のたった一つでも体調や精神の不調を訴える生徒が続出した。幸いにもフレデリカはそういうことはなかったものの、いわくつきの資料を好んでみようとは思わない。しかしいわくつきだからこそ、内容は覚えていた。

「アーカムなら、あつてもおかしくないけど……」

アーカムは異常と普通がひっくり返った街だ。普通なら怒らないようなことも、平気で日常的一幕と同じくらい当然に起こる。突如として奇怪な幾何学的巨石群が出現し、翌日には消え去る。昨日はあったはずの地下洞窟が、一時間もしないうちに溶けるようになくなる。そういう超常現象が頻発する。

だが、ここはロンドンだ。人がやつと住めるほど神秘や怪奇、幻想の濃いアーカムとは違う。かつては多くの怪奇に都市伝説が囁かれたが、それも昔のことだ。この蒸気の煙が立ち込め、その内に近代化の波によって様変わりした街並みに回帰に怪物は不似合

いだ。

だから、こんな異常の産物が存在することなど、とても信じがたいことだった。

「じっくり調べたいなあ……」

きつとミスカトニツクの考古学教授を招けば、きつと発狂したようになる。そんな自信があつた。

だがこの広大な空間を、敵が活用しないわけがない。おそらくは休憩所として使っているのだろう。軍払い下げの野営セットのいすやテーブル、まだ温もりを残すポットがある。まだ、ここを去つて間もない証拠だ。事実、フレデリカの視界には遠ざかつていく気配のもや、それと足音が聞こえていた。

だが、先ほど来た道から追う気配をもやとして、黄金の双眸はフレデリカの視界に映し出す。だが白いもやではなく、赤々と染まっている。敵意の色だ。気づいているのか、疑っているのか。

後者であつてほしい、というのがフレデリカの希望だった。もし気づかれていたら、通信機器で増援が来る可能性がある。

広大な洞窟の空間は、休憩所として活用されていたせいか、身を隠せる場所には困らない。それにこれまた不可解な図形の刻まれた巨岩が、そこかしこにある。巨岩の一つに身を隠した。周りに複数の足跡を残して、混乱させる準備もしてある。

ついに足跡の主が入ってきた。

野戦服を着た二人組だ。装備は見たこともない銃——おそらくは短機関銃とボーチャード・ピストルだ。おそらくは弾薬共通化のために両方とも七・六五ミリ拳銃弾で統一しているのだろう。

「足跡はここでもわからなくなってるな」

「歩き回って攪乱したな。どう見る、お前は？」

「出ていったか、隠れているか——どちらにせよファイフティ・ファイフティだ」

「ここを見回ってから先に進もう。それが最善策じゃないか」

「それで……侵入者は男か、女か？」

問うた男の顔は劣情に染まっている。ボーチャード・ピストルを握る右手はそのままに、左手で両刃のダガー・ナイフを抜いていた。

「女と見れば、すぐに斬り刻みながら犯す癖はやめたらどうだ」

「女がああに出すよがり声を聞くのは、すべての男だけが楽しめる権利だと思わんか？」

「すべてとは限らないさ、ゲイはどうなんだよ？」

「レズと乳練り合ってる」

拳銃とナイフを握りしめたまま、男は四足歩行に化けた。まるで四本足の昆虫という

表現がびたりとくる。

鼻をすすすんと利かせ、双眸を真ん丸に見開いて足跡を見つめている。

「女——だな」

「なんでわかる」

「わずかに残る女モノの香水に——足跡の沈み具合だ。体重が男にしては軽すぎる、おそらくは——」

堪忍袋の緒がぶった切られた。

フレデリカは巨石の影から身を躍らせ、Predatorの引き金を絞り抜いた。

三〇——〇六という大口径ライフル弾の破壊力は生身の人間には十分すぎる——今しがた脳漿と血液と肉片をぶちまけ、頭部の上半分を吹っ飛ばした短機関銃の男にとつては。

だが、もう一人は違う。弾丸に食い破られたのは野戦服のみ。千切れた穴から覗くのは温かな人肌ではなく、恐ろしく冷たい鋼鉄の輝きだ。身体を機関に置き換えた——機関兵士であったのだ。動力部から供給される蒸気圧でピストンと歯車で構築された人工筋肉は、もはや化生の類としか思えぬ剛力を発揮するはずだ。

「やはり女だったか。殺された相棒は今ので十九人目になる。仇はとらせてもらうぞ」
「女性をそういう目で見る人が、仇討ちなんて似合わないですよ」

「踏む、では本音でいこう。あなたを存分になぶらせてもらおう——これでいいのだろう？」

「そうですね——本音丸出しで、とてもお似合反吐が出ますいです」

「では美しさに敬服して、全部使わせてもらおう」

野戦服の前を男は開ける。おびただしいほどのダガー・ナイフが保持されていた。おそらく数は20本を優に超えるはずだ。

「いつもは一人に一本使う。ナイフを持っているなら、使わねばなるまい」
「変態じみてますよ、あなた」

かさばる自動小銃は地面に置いた。スリングで背負つてもよかつたが、これから動き回らねばならないことを考えると、少しでも身軽にしておきたかつた。そのまま二挺に持ち替える。

男が地面を蹴った。

拳銃は牽制で本命はナイフによる一撃だ。戦術的にも、男の性格からしても。弾丸の威力よりも、人工筋肉による一撃のほうが速く、そして重い。

弾丸が頬を掠める。ヤケドと擦り傷のひりつく痛みは、無理やりにも押し殺した。ナイフの刃先に円錐雲が生まれたのを、フレデリカは見逃さなかつた。

即座に銃身で横から逸らす。速いものほど、横からの影響に弱い。

即座に反対の手に握る銃を撃つ。拳銃に当たった。銃身は四つに裂けて、丸まって壊れた。発射は不可能だと、銃把も握ったことがない子供でも分かる状態だ。

拳銃を素早く捨て、鋼鉄の五指は即座に腹に巻き付けた大量の鞆シムスからナイフを抜いた。

その瞬間にフレデリカの銃は、男の眉間に照準を済ませている。だが照門から照星までが描くライン上にあつた男の姿は、撃鉄が落とされた瞬間に消え失せた。

スウェイ・バックで退いたのは、黄金の双眸が、左腰から右肺上葉にかけて斬られるというビジョンを幻視させたせいだ。

さもなくば、コートとブラウスだけではなく、骨や筋肉に臓器までまとめて斬られたはずだ。

「今のを避けるか」

「目が、いいので」

「なるほど。この身体になつてから、ずつと齒ごたえもやりがいも感じにくい戦いばかりだったが、ここに着て斬り刻みがいのある相手に会えるなんて幸運だ」

生身のままの真つ赤な舌を、両刃に這わせて舌なめずりする。

この男は異常なだけではない。今まで生きてきただけの技術を持つ、まごうことなき狩人だと確信した。

それでも銃把を握る腕はあくまでも、適度に弛緩させてソフトのまま。緊張するほうが、よほど状況を悪化させる。常にいつもの調子を崩さないこと。サイファーから教えられたことの一つだ。

再度、両者はぶつかり合った。

ナイフの刃と銃身が火花を散らすほどぶつかり合い、弾丸は男の身体を食い裂かんと何度も撃たれた。

それでも決着には程遠い。フレデリカはサイファーに仕込まれた技術と転生の肉体を以て、男は今まで積み上げてきた技術と経験を以て、ほぼ互角の状況に持ち込んでいた。

ゆえに事態は展開を見せない。激しいだけの膠着状態だから、長くは続かないはずだ。どちらかが体力の限界を迎えるまで続くだろう。

その瞬間は——すぐにでもやってきた。

「あつ——」

フレデリカがナイフに競り負けた。後ろへ倒れ込む形でバランスを崩す。

そこを男が狙わないわけがない。さらに力を乗せて押し倒し、腰の上へと馬乗りのような状態になる。ナイフはすでに逆手に握られていた。滅多刺しにかかるのは想像に難しくない。

金属と金属の激突音、そして火花が散る。

「んっ……ぐう」

「しづといな……ッ」

寸でのところでナイフの刃を銃身で受け止めた。しかし、馬乗りになれているという絶体絶命の状況をどう乗り切るか。そのプランをフレデリカは練れずにいた。

この男は機関兵士だ。下手に銃弾をぶち込んで倒せる相手ではない。起死回生の一撃も防がれてしまえば、その時点で自分の死が決定するのだから。

——ここだ。

マガジン・リリース・ボタンを押し込んで、弾倉を排出する。同時に総身の力を爆発させて、一気に押し返しにかかる。

ここで力関係は一時的に逆転した。『All In One』の弾倉をフレデリカはM1911型の『One In All』のスパイク付きコンペンセイターの先で、男の生身のままの喉へと弾倉を突き刺す。そして『All In One』の銃口も添えた。薬室にはまだ一発だけ入っている。

最後に男の顔が青ざめたのを見逃さない。

——もう手遅れです。

引き金を絞り抜いた。

顔に鮮血と肉片の混ざりものがかかる。

少し離れたところに舌を突き出した男の首が落ちた。二発の銃弾と弾倉の暴発は、男の首を完全に吹っ飛ばしたのだ。

もはや重いだけの首から下の身体を、押しのとくとくとフレデリカは『Predator』を拾い上げる。

近くで銃声を聞きつけた者がいたのか、視界に入る気配のもやは次々と白から赤へと変わっていく。

「……生き残って、帰るんです！」

自動小銃を抱えて、フレデリカは走り出した。



——苛立っている。

というのがヘンリエッタがサイファーに抱いた今の印象だ。

フレデリカを救い出せなかった自分に苛立っているのだろう。この男は乱暴に言ってしまう。『何でもできてしまう』男だ。いや、家事は壊滅的なのだが。

やってみれば、たいていのことを難なくやってしまうのがサイファー・アンダーソン

という男だ。だから、人以上に挫折を感じたことがなく、それを味わった時の悔いも大きい。

おそらく、あの地割れを引き起こした手下人が目の前にいれば、一切の迷いも躊躇いもなく切つて捨てるはずだ。それほどの鬼気というべきものを、おそらくは無意識化で垂れ流しにしている。

——ジョン・ドウという男を、血に伏せただけはあるね。

対する自分も静かな怒りの炎が絶えずに燃えているのを自覚していた。

生きているはず、という根拠もない確信がある。サイファーも同じものを感じているはずだ。

弔い合戦にはならないだろう。だが許しはしない。

ホテルの部屋の電話がベルを響かせる。

『アンダーソン様、お電話が入っております』

「ん、繋げ」

電話は五分にも満たなかった。ただ目に見えてサイファーの眉間にどんどんしわが寄っていく。よほどの相手からかかってきたのだろうか。最終的に受話器は叩き付けられる勢いで切られた。壊れてないといいが。

「アルバニアンからの電話だ。キングスクロスに来いときた」

「罨だろうね」

「僕はそうは思わん。今から行く。命が惜しいなら、残っていても構わん」

「それはごめんだね。フレデリカに絡むことなんだろう?」

「電話じや離せないくらいの情報教えてくれるらしい」

サイファーはガーニーをぶつ飛ばした。市街地を出してはいけなような速度で、キングスクロスへとまっしぐらだ。

サスペンションが断裂しそうな勢いで止まった。

煉瓦造りのビルが指定された場所なのか——と思つたらサイファーは裏口へと回り込んでいく。ようやく追いついた時には、あの長大な野太刀をその手に握っていた。

裏口の扉を固めていた黒服の用心棒が二人立っていたのだろうが、一人は肩を野太刀で扉に縫い止められ、もう一人は片手で首を締め上げられたまま高々と持ち上げられている。

「へ、ぐ……え」

ぎりり、と力を込めると男は締め落とされた。

そのまま串刺しにしたほうにドアを開けさせた。野太刀は刺したままだから、相当やりづらいと思うが、否応なしにやらされてしまったているあたりサイファーの無言の脅しが効いているらしい。というより腹に刺さつてないだけ、まだマシなほうだと思う。

裏口は地下へと通じていた。

サイファーは男を急かしているようだ。早く案内しろと、肩に突き刺した野太刀の刃を捻る。苦痛に男泣きしながらも、死にたくない一心で男は案内の役割を果たしているらしい。少しでも逆らえば背中からばっさり両断されるのが目に見えているのだろう。道中も悲鳴を上げたりするたび、傷口を刀身を捻って広げられたり、指の骨を折られたりしている。見ているだけで、痛くもないどこかに耐えがたい痛みを感じるほどだった。

ついに目的地への案内を男は果たす。そこは応接室にして少々広い場所だが、テーブルと三人掛けが一つと一人掛けが二つの、計三つのソファがある。

しかし、部屋の入り口から見てぐるりと前方一八〇度にわたって二〇を超える短機関銃の銃口に、サイファーとヘンリエッタは出迎えられた。

「虫の居所が悪いらしい。まあ、用心棒一人くらいひどい目に遭おうが問題ない」
「部下にずいぶん扱いだな」

「ここまで侵入を許してしまった部下に、気遣いがあると思うかね？」

ソファーに腰かける老獺に笑うスリー・ピースの男こそ、今のアルバニアン・マフィアを牛耳るトップだ。

名は知らなかった。まさか出会うなんて、呼び出されるなんて思い及ばない。

「新人の件で大変なことになっているらしいと聞いた」

「僕の件はいいのか？」

「メンツというものは大事だ。それ以上に——ファミリーの仲間のことでも大事だ。使える子分であればな」

「いい判断じゃないか？」

一瞬だけ浮かべた不敵な笑みも、すぐになくなった。

——銃声が響いた。

トップの手にはレミントン・ニューアーミーが握られている。いまだ銃口から白煙を噴いている。

サイファアの巨軀が少しだけのけ反った。

「一発だけ眉間にぶち込ませろ」

そのセリフを言い終わった瞬間、眉間からへしゃげた四四口径弾が転がり落ちた。

「満足か？」

まるで大したことのないような、そんな物言いだ。眉間に銃弾を撃ち込まれた人間の放つセリフではない。そもそも人間なのか、それさえも定かではない。ただサイファー・アンダーソンという男は、銃弾では殺せない。

「やはり手を引いて正解だったな、まさか本物の化け物だったとは。こいつらに一斉に

ぶち込ませても、殺せる気がしねえな」

「やってみればいいだろ、そこにいるヘンリエッタなら殺せるかもしれんぞ」

「いいや、遠慮しておこう。軒並み、そのご自慢のジャパニーズ・ブレードで叩き落されそうだ」

「それじゃあ……本題に入ろうか」

その言葉と同時に長大な緩やかに円弧を描く野太刀は、鯉口まで鞘に納められた。

話を聞く、という姿勢を一応は見せた。座れ、と一人掛けの皮張りソファーに促される。

「噂の新人は地下の亀裂に落ちていったそうだな？」

「ああ、こんな稼業にかかわらせるには惜しいくらいなの、凄まじくイイ女で、凄まじく才能のある女だ」

「二か月前からロンドンの地下に妙なものができてきた。もしかしたらそこにいるかもしれない」

「妙なもの？」

「案内させる」

おい、と言って呼びつけたのは先ほどまで案内させていた男だ。また彼の世話になるのか、という率直な感想が口を突いて出そうになる。ヘンリエッタは黙って呑み込ん

だ。サイファーなら言っていたかもしれない。

「またコイツの案内か？」

言いやがった。

「どいつもこいつも尻込みしちまってんだ。化け物の案内なんざしたかない、とな」
「ま、仕方ないかな」

白羽の矢を射られた男は泣きそうな顔をしていたが、一睨みされると黙って先導した。たぶん半分くらいやけくそではないだろうか。

「このビルを中心に、俺たちはサツに嗅ぎ付けられるとマズい活動をするための地下空間を築いている。拡張工事はかなりの頻度で行われるんだが、つい最近の工事で気になるものを掘り当てちまった」

案内された先は分厚い鉄扉だ。おそらくロンドン最大の銀行ぐらいでしか採用しないような、蒸気機関の力を以てしてようやく開けられるほどの。現に扉の蝶番に蒸気供給用の太い配管がある。案内の男がレバーを倒すと腹の底まで響く機関の駆動音と裏腹に、鉄扉は極めてゆっくりと開いていく。まるで地獄への門が開くように。

鉄扉の向こうは地下通路だった。モルタルでの補強もされていない、ただ地下を掘り抜いただけの無造作な造りだ。

「何人か若いのに銃を持たせていかせたが……一人として帰ってこなかった」

「……………これはデカイぜ。ロンドン中に張り巡らされている」
「わかるのか？」

「風の流れだね。ビッグ・ベンまで確実に届いている」

「もしかしたら、いる可能性はあるかもしれないね」

「ヘンリエッタ、構えとけ」

サイファアの言葉を考える暇もなく——それはやってきた。

——てけり・り！

——てけり・り・り！

暗緑色の粘液状生命体はその身体をピロードのように翻して、自分たちに迫りくる。

ヘンリエッタはとっさに案内の男とトップを遮るように立った。下手に前に出てこられては困る。

その時にはもうサイファアの手は、野太刀の柄を握り込んでいた。

抜き放たれた刃は波紋の映える鈍色ではなく、すべての光を吸い尽くさんばかりの漆黒に染まり切っていて。

ほぼ粘液状の身体に一閃が刻まれた。

今にも全員をまとめて呑み込もうとした、天幕のごとき身体が痙攣したのをヘンリエッタは確かに見た。人間で例えてみれば、きつと頭頂から股間まで断ち割られたに等

しいはずだ。

粘液状のシヨゴスは完全に液体に成り果て、床に広がった。かと思えば誰も害するこ
となく、塵と変わって消え去っていく。

幻想を斬り殺した一刀から、残骸の粘液を払い、鞘鳴り一つも立てずに納刀した。
その所作はまさしく極東の剣士——サムライの身のこなした。

「シヨゴスに殺られるようなタマじやないと思うが……急いだほうがよさそうだ」
「待っていてくれ、フレデリカ……ッ！」

慄くつま先を押し殺しながら、ヘンリエッタは努めて冷静に歩みを進める。

——てけり・り。

もうしないはずの声を、背後から聞いた。

E s c a p e 　這い上がる不死身の男

銃声が連続して鳴り響く。洞窟内部を共鳴管のように使い、破壊の咆哮を無機質に響かせる。おかげでどこから銃声がかかるのかもわからないが、幸いにしてフレデリカの視覚は他の四感の代用すら適うものらしい。

洞窟はひどく入り組んでいる。迷路のようにして部外者を迷わせるために、あえてそういう構造をとったというのか。

『Predator』を抱えてフレデリカは洞窟の内部を縦横無尽にかけていく。出合頭に会った相手には鉛弾をお届けして。

必死になって出口を求めるのだ。生き残るために、帰るために。

そのための覚悟ならもう決めた。屍山血河を築いても。鮮血を以て喉を潤し、死肉で飢えを凌いでも。

銃口がまたマズル・フラッシュを吐き、数人の兵士の肉体を食い破る。血だまりに沈む死体から、拳銃を奪う。コルトM1908自動拳銃だ。弱装の三八口径だが愛用の二挺は絶賛弾丸節約中だ。

それを両手に二挺、いつものスタイルに変わる。

戦略性など欠片もないようなスタイルだが、これが一番しつくりとくるのだ。『Pr e d a t o r』はスリング・ベルトでたすきにかけて背負う。

気配の動きが慎重になったように感じられた。

視界に移る白いもや——黄金の双眸が視界に移す気配の動きがゆつくりになっている。

人知を超えた瞳の力に恐れが半分ありがたみ半分という心境だ。役に立つことこの上ないことは確かだ。

おそらくは追いついてるのではなく、慎重に探し出す方向に変更したのか。この静けさであれば諦めたのかと思って、のこのこと出てくるのを狙うこともできる。単純ではあるが確実性の高い路線だろう。やみくもにやるよりは、こうして計画性を立てるほうが有効であろう。

多勢に無勢。ゆつくりと包囲網を形成しつつある敵に対し、フレデリカはどう立ち向かうのか。

「突破するしかないかな……」

慎重に、極めて慎重に洞窟内を進む。

足音はなるべく殺す。自分以外の足音には嫌でも気づく。

ぎ、ぎ、ぎ。

土を踏みしめ、砂をかき分ける音が二重奏を為す。二人一組ツー・マン・セルでの行動だ。一人が前方と右を交互に警戒し、それを背中合わせにして全方位をカバーする。それも死角ができないようにタイミングを絶妙にずらしてある。

彼らの教鞭をとつたものは、想像するも恐ろしいほど手練れだと確信させる。

武装は拳銃とナイフのみ。小銃はスリングで背負っているだけだ。その拳銃もブローニングM1910だ。フレデリカの Colt と同じ弱装の三八口径だ。

——イーヴンかな。

胸中で静かに呟いて——飛び出した。

最速で一人の首に照準を合わせる。軽い発砲音でも洞窟内では嫌でも反響する。

その前に首を押さえて、血の泡を吹いた死体が一人分出来上がる。弾丸は柔らかな首をたやすく撃ち抜き、頸動脈からの出血は機関に流れ込んで真紅の泡へと変わったのだ。

二人目が気づいて、銃口をこちらへと向ける。

両手の二挺がそろって咆哮する。一発の弾丸は喉仏に、もう一発はM1910の銃口へと向かい——銃身を蹂躪し抜いて破壊する。奇跡の神業を成し遂げたにもかかわらず、フレデリカの心は凪いだ海のように静かだ。下手な鋼のような精神的にも、肉体的にも油断と隙を生む。

スライドも吹っ飛び、三つに裂けて見る影もない銃身。発砲不能の拳銃を呆けたように見つめ、喉をやられて声も出せない男に止めの一発が眉間に撃ち込まれた。

こちらに集まってくる気配にフレデリカは黙って、屠った男たちが背負っていた小銃を拾う。

「マンリッツヒャーM1895……ボルト・アクションも練習しておいてよかった」

二挺と大口径狙撃銃のみではなく、現地調達の武器も扱えるようにフレデリカはあらゆる銃を練習していた。ボーチャード・ピストルからウエブリー&フォスベリーのオートマチック・リボルバー、リー・エンフィールドにマンリッツヒャーM1895にブローニング自動小銃からM2空冷式重機関銃まで。射撃は好きだったし、練習したいといえど武器と予定と練習場所をサイファアは整えてくれた。誰のものかわからない上に引き取り手のない死体を挽肉にするのは心が痛んだが。

ストレート・プル方式のボルト・アクションは排莖にボルトを回す必要がない。ただ前後するだけで排莖塗装店をこなす性質上、連射速度は一線を画する。それに基本がボルト・アクションだから動く部品がほとんど存在せず、銃身も固定されているので精度も良好だ。部品点数の多さだけが玉に瑕だが、これは利便性に伴う払うべき代償の一つだろう。

照準器の調整はする暇がない。だから弾着を見て調整をかける必要がある。それが

できるだけの超常の視覚をフレデリカは持っているのだから。

拳銃とは比べ物にならない銃声が響き渡る。ボルト・ハンドルを引けば排莖されたのは、303 Britishの薬莖だ。イギリス国内で手に入れやすい実包を使えるように、非正規の改修を施したというのか。

とはいえライフル弾はライフル弾だ。三八口径の弱装拳銃弾とは一線を画する威力を有しているのだ。拳銃はあくまでも接近戦用の緊急火器であり、戦場の主流はいつだって小銃と機関銃だ。

二〇〇メートル先にいた兵士の胸部を三〇口径の銃弾が抜けた。地面にどうと倒れ込んだのを確認する。

第二射も命中した。肩への着弾は絶命には至らない。だからボルト・ハンドルを引いて新たな弾丸を薬室に送り、眉間に撃ち込んでとどめとする。

いまやフレデリカの黄金の双眸は射手と観測手を左右の瞳で行っていた。照準器の延長線上にある右目が狙いを定め、左目が弾着を見届けるのだ。

そのまま弾倉内の残りの弾丸をすべて撃ち切り、屠ったもう一人の兵士が背負っていた同じマンリツヒャーM1895に手を伸ばす。

二発ほど撃ったあたりで敵影はいなくなつた。

今度は反対方向に銃口を向けた。こちらからは、まだ敵が来ていない。

小銃を投げ捨て、コルトに持ち替えた。

二挺を持ったまま駆け出した。おそらく位置はバレてしまっているから、ここから先は隠密行動など無意味であろう。現にフレデリカの視界には集結しつつある気配のもやが映っている。

洞窟を駆け抜けていく途中で前方に光を見つける。何かあるのか、それとも出口なのか。後者の可能性はかなり低そうだが。

そして光の見えた地点で——思わず足を止めてしまう。

広大、あまりにも広すぎるすり鉢状の空間が広がっていた。直径にして五〇〇メートルは下るまい。ここまでの規模になると崩落を恐れたのか、天井には鉄筋やモルタルによる健気な補強工事の痕が見受けられる。すり鉢状にくぼんだ地面も多大な労力のもとに掘り抜いたのか、複数の歩行のための階層とそれを繋ぐスロープを設けている。だがそれはあくまでも規模の大きさを示す付属品でしかない。

中央にそれは鎮座していた。

中央でそれは稼働していた。

中央でそれは計算していた。

おそらく、この大英帝国が世界を掌握したこの世界で、この玉虫色の光を放つものは一つしかない。そして大英帝国の繁栄を大きく進めた動力機関。

——巨大な解析機関に接続された、巨大な数式機関だ。

数学王と呼ばれた大碩学『ダフィット・N・ヒルベルト』が生み出した、構造原理論のすべてが不明のまったく新しい動力機関。それは同規模の蒸気機関と比べても、いっそ残酷なほどの差を生み出すほどの大出力を持っている。製造には緑鉱石と赫鉱石が必要というだけ。

ここまで巨大なものは英国政府が管理するべきだ。都市一つ分のインフラ設備を余裕で稼働できる。

そんなものを解析機関に接続して、何を計算させているのか。これほどの大出力を以て紡がれた数式であれば——いつかは現実を侵食する。歯車とカムは絶えず稼働し続けているが、パンチ・カードも数式カードも出力しない。だが、おそらくはこの空間に計算の結果は現れているはずだ。

「空気が……違う」

鳥肌が立つほどの異様な空気の元凶がこの二つの大機関にあることは間違いない。

ここには長居したくない。自分がまるで別物に変えられていくという気持ち悪さがある。どうしてこういう気分になるのか。まさか二つの大機関はそのため稼働しているというのか。

「壊さなきゃ……ッ！」

これはあつてはならないもの。

これは動いてはならないもの。

その想いだけで突き動かされるように、フレデリカは機関を破壊しうるだけの武器を探し始めた。崩落のことも考えて爆発物はあまりないようだが、この洞窟は拡張工事を絶えず行っているのだろう。安定化されたダイナマイトと液体ニトログリセリンが多くはないが残っていた。

これらを効率的に仕掛けるしかない。とはいえ爆破解体の知識なんて欠片もない。機関を支える重要な基礎構造を破壊すれば、自重でべしやんこになってくれるだろうか。と一度は思ったものの、適切な爆薬量がわからない。少なくともダメだし、多すぎると洞窟全体の崩落に繋がる。

——どうしようかな。

そして、ふと大機関を見上げてみると整備用の梯子が天井まで伸びている。その向こうには鉄製のハッチまで。

「地上まで続いている？ 確かめてみる価値はあるでしょうか」

嫌悪感をこらえて梯子に足をかけた。

一段一段昇るたびに二つの大機関、その巨大さがいやでもわかる。

こんなものがロンドンの地下で稼働していて、異様な空気を醸し出している。

メイザースは内乱一步手前とまで言っていたが、完全に内乱のテロだ。数式機関を暴走させるだけでロンドンに壊滅的な打撃を与えることも不可能ではない。事態は思ったより深刻だとフレデリカは確信する。ならば早く脱出して、仲間たちに伝えねばならない。

そして天井のハッチを開けようと、手をかけたところで——急に視界の端に白いもやが赤に変わろうとしていた。それは敵意の色。分厚いハッチがバネ仕掛けでも施されていたように跳ね上がって、そこから伸びてきた鋼鉄クロムの腕につかまれる。

引つ張り込まれると思つた瞬間には、すでに腹と顔に一発ずつもらつていた。

「ん、ぐっ……ッ！」

こみ上げるものを必死に呑み戻そうとして、叶わず吐き散らす。

唇を切つたのか、下あごに血の滴る感覚を感じる。

——スチーム・ツルジャ
機関兵士。

外見を取り繕うための人工皮膚を被せていない、何もかもが鋼鉄で出来た人間がそこにいた。戦うために、より効率よく殺すために、強さのために、生身を捨てた狂気の兵士がそこにいる。

ここに落ちる前にも襲い掛かってきたのだ。ここに現れてもおかしくはない。

スリング・ベルトで背負つていた『Predator』を撃つたのは、ほとんど苦し

紛れの行動だ。

いまだに機関兵士から貰った拳のダメージは癒えることなく、現在進行形で腹と口からフレデリカを苛んでいる。

放たれた弾丸を鋼鉄の腕で難なく薙ぎ払って防ぎ、わずか数歩の内に距離を詰めた。解体作業用の鉄球で殴られた、としか思えない衝撃と共にぶつ飛ばされた。トー・キックは容赦なく鳩尾にめり込んで、中のものを逆流させた。

胃酸の苦みを喉と口いっぱいを感じ、盛大にえづき散らす。十メートル近く吹っ飛ばされ、その半分くらい地面を滑っている。ブレーキとなつたのは乱雑にコンクリートを流し込んだだけの地面。均しもされていない、凹凸の地形がせき止めたのだ。

「はあ、っ……は、あ……当たって、えッ！」

弾丸を節約しておいた『One In All』を抜いた。機関兵士であっても有効な威力を持つ、この銃は今抜くべきだ。近接戦闘用のスパイクがついたコンペンセイターのスリットから、青みを帯びたマズル・フラッシュが噴出する。

この弾丸だけは薙ぎ払えなかった。鋼鉄の五指がスパークを散らせながら、生身と感覚以外はたいして変わらない精密な動きを達成する歯車をはじめとする部品を吹き飛ばす。シヨゴスに撃つたものと同じ「力」を込めた弾丸だ。ホーレス謹製の銃でなければ「力」を帯びた弾丸が、銃身内を通り抜けることに耐えることができない。

——まだ、撃つ。

——まだ、撃ち込む。

引き金を素早く二回引く。青白いスパークを伴った爆発と同時に、機関兵士の数百キロを超す重厚な体が浮き上がる。

遠く離れた二人の距離——その間をつなぐ銀条一筋をフレデリカは見逃した。

がくん、と膝からフレデリカは崩れ落ちた。

その引き金となったのは一本のナイフ。刃渡り十センチにようやく達するかという程度のもの。それが根元まで深々と刺さっている。

銃火に晒されながらも機関兵士は苦し紛れの手投げナイフを放ったのだ。見事にフレデリカの意表を突き、攻撃をやめさせる一打となる。

——引き金、引かなきゃ。

——銃を、上げないと。

——でも、力が入らない。

ゆつくりと二次利用用に歩みを進め、迫りくる機関兵士の姿に恐怖を覚える。

場を切り抜ける知恵の一つも浮かばぬほど、思考さえ呆気なく塗りつぶされて。

「ひ……いや」

ちように尖るように切られた鉄パイプを拾い上げ、それをフレデリカに突き立てよう

と機関兵士は迫る。その思考は完全に命を奪うこと一色に染められていた。見目麗しい少女と見紛う女を、死の少し前にその肢体を存分に嬲り尽す。そういう下卑た思考も浮かばぬほどに。

だが最後の瞬間に歩みが止まる。
コンクリートの地面に亀裂が入る。



左手に握りしめた納刀したままの野太刀。

いつでも鯉口を切れるように、親指を鏢にそえている。『Howler In The Moon』をぶつ放せば、ここは呆気なく崩落しそうだ、とサイファーは思う。

だから終始この愛刀に頼り切ることになるはずだ。

夜目は利くほうだ。ヘンリエッタも割と危なげなく歩いているから、明かりの類を持ち歩く必要はなさそうだ。こんなところで明かりを持ち歩こうものなら、大声で自分の居場所を言っているようなものだ。シヨゴスが出現した以上、下手に身を危険にさらすような真似は避けたい。

無事であるだろうか、という心配よりも敵への怒りに満ち溢れていた。地割れという

名の自然現象としか思えないものなのに、サイファーは敵が仕組んだものという根拠などない確信があった。というより勘だ。しかし館には随分と助けられている。

だから勘に従うとまではいかないが、耳くらいは傾ける。

友人のようなものだと思えばいい。

「探すのは手間になりそうだ」

「自分の感覚を信じる。僕はいつもそうしてる」

「じゃあ私は女の感を信じるでしょう」

そして一瞬だけ視線を交わす。

「僕の勘は正面から来ると告げてるんだが」

「私の勘は背後からだと言っている」

——挟撃！

瞬時に抜刀の構えをとって、振り返った。その脇をヘンリエッタが駆け抜けていく。

野太刀は西洋長剣とぶつかり合った。刃渡り一四〇センチ以上は優にある分厚い刃を構成する素材に、サイファーは眉をしかめた。

——イリジアス鋼か。

それは星々の海を渡り、この星へと落ちた貴金属。イリジウムと同等の性質を有しておきながら、質量は半分程度しかないイリジアスと呼ばれる元素をベースにした高強度

鋼だ。この鋼に限らずイリジアスの入ったものは、幻想生物に対して有効な威力を示す。

刃とすれば肉や骨を裂き、弾頭に加工すれば脳漿と内臓をぶちまけさせる。

とはいえ一キログラムで高級蒸気自動車を余裕で買えるだけの価値があるから、そこまでして手に入れたいのは幻想生物を屠つて名を上げたい愚か者かキチガイだ。そうは思いつつもサイファー自身もヘンリエッタにイリジアス鋼製の武器でも買ってやろうかと言ったことがある。お断りされたが。

——アレで斬られると、ちよつとだけマズいな。

それでも野太刀の柄を握る手はあくまでそのまま。

下手に力は込めない。それでは筋力勝負になつてしまふ。勝とうと思えば勝てるが。下方からすくい上げるようにして振り払う。のけ反るように相手がバランスを崩したのを、見逃すわけもなく横薙ぎの一閃が走り抜ける——そのはずだった。

優美な弧を描く長大な刃に、がっちり短剣にあるいくつもの牙が食い込んでいる。

「ソード・ブレイカーか。珍しいものを使う」

櫛のような刃を持った短剣は長剣とは逆の手に握られていた。ソード・ブレイカーの一般的な使い方だ。聞き手と逆の手に持ち、敵の武器を破壊する守りの盾のようにして使うのだ。時には攻勢にも転じる変幻自在性さえ存在する玄人向けの趣もある。

だが——野太刀の刃は折れるどころか、ヒビ一つはいらぬ上に歪みすらしない。「だけど、獲物を折りにいったのは間違いか」

幾重にも重ねられた鋼は肉を斬り、骨を断ち割って、臓腑を引き裂いても決して揺らがない。サイファアの愛刀は刀身こそ長すぎるが、極東の秘奥を持つて打ち鍛えられた紛れもない名刀だ。

ソード・ブレイカーで折れるわけがないのだ。

だからこそ、相手は瞬時に思考を切り替えたのだろう。

長剣の一撃が襲い掛かる。

火花が散るほどにぶつかり合ったのは——鉄拵えの鞘だ。こういう時に緊急の盾として役立つてくれる。

そこに足払いを叩き込む。合気の要領で放ったそれは、意識の隙間を突いて体勢を一瞬で崩させる。野太刀を握る手を捻れば、長大な弧を描く刃はソード・ブレイカーから解放される。

平突きが心臓の真上から吸い込まれるように、そして確実に相手へ死を届けることを果たす。

死の瞬間に見開かれた目から生気が消えるまで、サイファアはずっと目を合わせていた。

「まったくイリジアス鋼製の武器を使ってくるとは、誰が入れ知恵したんだか」

フレデリカのほうにもイリジアス鋼製の武器を持ったものが向かっているのだろう。おそらくは自分と同じようにイリジアス鋼による傷はマズいはずだ。

これは急いだほうがいい、と確信してヘンリエッタを急かそうと思った時だ。

——銃声。

——絶叫。

——怒号。

暗闇の彼方から聞こえてきたものに、サイファーは珍しく背筋の凍る思いだった。

——フレデリカに何かあったのか？

——何らかの“力”を覚醒させたか、それとも暴走か。

——どっちにせよ、ロクなことじゃないな。

機関銃の掃射音まで聞こえてきた。聞こえてくる悲鳴に耳をすませば、すべて男のものだ。フレデリカのものと思われるような女の声は一切ない。

「ヘンリエッタ、覚悟決めろ。ここから先は化け物の領域だぜ」

「今さらなことを言うじゃないか。どういう風の吹き回しなんだい？」

「悲鳴が男のものばかりだ」

「……フレデリカは、一体何なんだい？」

「この世に留まり続ける、最後の幻想たれ」なんて呪われた運命を背負わされているかもしれないのさ。僕や、ジョン・ドウという男と同じように」

「なんで、フレデリカがそんなことに……」

「同感だ。僕ももつとろくでなしが、そうなるべきだと思うんだよ」

——少なくともフレデリカには酷すぎるよ。

当たってほしくはない予測が、固まり始めた予感。

せめて杞憂であつてくれ。いらぬ心配であつてほしい。

サイファーもヘンリエッタも、そう思うのだ。



鋼鉄の五指はついにフレデリカのブラウス、その襟をつかみ——そして止まった。

何かが機関兵士の動きを止めている。無表情な鉄仮面の顔に、驚愕が浮かんだように見えた。

均しもされていない凸凹だらけのコンクリートの地面から、人の手が生えて足をがちり掴んでいるのだ。蜘蛛の巣のように生じたコンクリートのひび割れは、まるで地の底にある地獄への門を思わせる。

掴む力が強まると、鋼鉄の骨格からはつきりわかるほどの軋みが聞こえてくる。

ほぼ一瞬で機関兵士は下半身まで埋まった。鋼鉄の五指は掴んでいたブラウスの襟を滑り、今や何も掴めぬまま宙を舞うだけだ。

ついに全身が引つ張り込まれた。悲鳴が聞こえたような気がする。

亀裂からじわりと血とオイルの混ざりものがあふれ出してくる。

「な、こ……う？」

このコンクリートで固めた場所には、中に何かがいたということ。それが姿を現して自分に迫っていた機関兵士を引きずりこんだ。

わかるのは、これだけだった。

「見つけたぞー！」

誰かが梯子を上ってここまで来たらしい。

ブローニング自動小銃を携えた兵士の姿を認めると、近くに落ちていた『One In n A 11』を手繰り寄せた。

照準を合わせようとするが、やはりダメージは深い。視界はぼやける上に、銃口は上下左右に揺れて狙うこともままならない。

銃口をこちらに向けたまま兵士はついにコンクリートの地面までやってきた。

何かが地面から襲い掛かる。

それは一瞬して股間から突入して、頭頂から抜けた。

斜めに切られた鉄の管は、その鋭さを存分に發揮して串刺しという偉業を成し遂げた。

それを支えたのは——おそらくは地中にいるものの馬鹿げた膂力。およそ武器といふにはあまりに急ごしらえの鉄パイプが、特級の凶器と化すほどの。

そして——地中のそいつはついに出てきた。

分厚いコンクリートに固められていても、その身に宿る狂気は再起の瞬間を今かと待ち変えていたのだ。

アツシユ・ブロンドをさつと逆立てて、アメジストの瞳を三白眼に変える。口元にはサメを思わせるほどに深い狂気的笑みを浮かべて。

「あつはあ……」

狂相の笑みのまま後に続いてきた男たちを見据える。

「で、出てきやがった……」

「撃て！ 撃ち殺せ！」

弾丸が肉体を食い破るが、傷つくのはパンキツシユな上下ともに黒のジャケットだけ。その下にある、しなやかに鍛えられ抜いた肉体には傷一つない。弾丸が貫通したそば

から再生しているだけだが、その速さは幻想生物すら余裕で超えるはずだろう。

彼は地を蹴った。瞬き一つの間に距離を詰めている。

右腕の一振りで首がもぎ取られる。空いたもう一方の手で佩いていたサーベルを抜くと、もう一人を一刀両断した。そいつからもサーベルを奪い取って二刀流となる。

「ア？ お前はサイファアのトコにいた……」

「……ジョン・ドウ」

「ハハッ、覚えててくれたのか。いやア、嬉しいねエ」

それは幾度に渡ってサイファアと火花をロンドンで散らした男だ。

一難去つてまた一難、というべきか。

フレデリカはなすすべもなく、この男によつて戦闘不能に陥らされたことがある。手負いの今の状況を鑑みれば、逃げることにすら叶わないだろう。

後ずさるうとして——襟首をつかまれた。

「オイ、逃げることねエだろがよオ！ そんなに怖いってか、アア!？」

「……普通に怖いです」

「あんまり俺様を怒らせんなよオ、首イ引っこ抜いちまうかもしれねえからなア。それよりサイファア・アンダーソンはどこだ？ 早くリベンジ・マッチに挑みたいんだが？」

「わ、私はここに迷い込んでしまったようなもので……」

「どっかから落ちてきたのかよ？ 俺の雇い主はこの洞窟広げまくってるから、どっか地盤がもろくなってもおかしくはねえが……」

「地割れに巻き込まれたんですけど、何とか横穴に飛び込んで」

「へへっ、ハハハッ、アッハッハッハッハッハッ！ そりゃ傑作だぜ。ああ、死ななくてよかつたなあ。この清楚系デカチチが失われるなんて、人類の損失だア」

むにゅん、とたわわな胸をジョンは思い切り鷲掴みにした。

一瞬で頬が熱くなると同時に、理性が怒りでぶっ飛んだ。

「変態ー！」

B A N G ! B A N G !!

フレデリカの『One In All』が二度も火を噴いて——弾丸はジョンの股間に命中した。

蹴られるだけで大抵の男を悶絶させる急所に、弾丸をぶち込まれるなど実に想像したくもない悪夢だ。事実、ジョンの脳は激痛に焼き尽された。鮮血を吹き出し続ける股間を押さえながら、奇声を上げて跳ねまわっている点からもその痛みがよくわかる。

「ア、ア、——ッ!! な、あばあばば、ふ、ふざけんじゃ、ねえぞオラア！ 人の息子に一発ぶち込みやがってエ！」

「当然の報いですよ！ 淑女レディの胸を触って、ただで済むと思ってるんですか!？」

「ピンタがいいところだろオ!?　そもそも銃ぶつ放してる時点で淑女名乗れると思つてんのかよオ!」

「うるさい!　今度触つたら、弾倉の弾丸全部ぶち込みますからね!」

と言いつわつた瞬間にジョンの身体はズタズタになった。

短機関銃と自動小銃の一斉掃射をぶち込まれたのだ。

「がああああ、クソツタレ!　治るつて言つてもぶち込まれたら痛エンだからなあ!」

サーベルを両手に構えると、一瞬のうちに銃火器ごと斬り刻んでしまう。

そのまま下へと向かう梯子を飛び降りると、階下に集つていた兵士へと突貫する。

地獄絵図が広がった。

野獣に蹂躪されるか弱き人々、という表現がよく似合う様だった。ジョン・ドウの刀は野獣の牙だ。得物を引き裂いて食らうためにあり、それを容赦なく兵士たちに振るう。

反撃の銃火を受けても尚、突貫は止まらない。止まるわけがないのだ。

この野獣ジョン・ドウの相手ができるとしたら、それは怪物サイファーだけだ。

階下に死体のほうが多くなってきてから、フレデリカはゆつくりと梯子を下りて行つた。途中、解析機関のど真ん中に椅子のようなものがあったのを見つける。気にはなるが、今は脱出することが鮮血だ。それよりも下に行けば行くほど、血と臓物と刺繍の入

り混じり抜いた臭いに眉をしかめてしまう。

ジョン・ドウは自分とフレデリカ以外の動くものすべて敵だ、と言わんばかりに暴れまわっている。

「もうあの人だけでいいんじゃないでしょうか？」

その疑問に答える者は、誰もいない。

Tag～刃鎖で紡げ、奇妙な二人～

ジョン・ドウの進撃は怖いほどだった。

さんざん暴れまわった後をゆっくり着いてくるだけでいいくらいに。足の踏み場などないくらい死体だらけで、血の気が失せた生固い肉を踏んでしまうのが気になるが。

どうもジョンは途中でサーベルを乗り換えている。けっこう離れた場所からついてきてるフレデリカにも届くほど剣風が強い。それほど剣速が速すぎるせいで、刃は空気に摩擦で赤熱する。大量生産のサーベルなど数人斬っただけで使い物にならなくなるのだ。

時折、二挺拳銃に切り替えてはアクロバティックに飛び回りながら撃ちまくっている。狙いがつけにくそうだが、むしろ外れる弾のほうが少ない。フレデリカには持ちえない武器——経験というものの恩恵であろう。

もはや死体量産機だ。目についたものすべてに死を振りまく、血に塗れた野獣だ。

スライドがホールド・オープンしたコルトM1908に新たな弾倉をジョンは込める。

「おーい、デカチチ。弾丸寄せ弾丸。もう弾倉がないぜ」

「ちゃんと名前でも呼んでください！」

「えー、だつて俺様テメエの名前知らねえしよオ」

そういえば名乗つてはいなかった。名乗ることになると、欠片も思つていなかった。渋々口を開いた。コルトの弾倉を渡しておくのも忘れない。

「……フレデリカ。フレデリカ・エインズワースです」

「へー……覚えて、チチデリカだな」

眉間に一発撃ち込んだ。

こいつは人の話を聞いていなかったのか、という言いたくなる。そもそもチチデリカなんてうまいこと言つたつもりか。

眉間を押さえながらぴよんぴよん飛び回るジョンに、思いつきり長い溜息を吐く。フレデリカの予想通りにジョン・ドウという男は、どうやらサイファー以上に苦手なタイプの男らしい。完全に自分の欲望というものを隠す気が感じられない。

サイファーも同じようなものだが、フレデリカの中ではマシなほうに入る。五十歩百歩、ということわざを引き合いに出されると沈黙するしかないが。

「オイ！ だから痛エつて言つてんだろ!？」

「胸だのチチだの、そういうことを言つた報いです」

「そんなのデカイモンぶら下げてる義務みたいなモンだろオ？」

「……最低です。変態です」

ジョンと二言三言話すだけでも、精神こころをすりおろしている気分になる。

しかし苦手なタイプの男と言えど、この状況では誰よりも頼もしい。複数回にわたってサイファーと渡り合ったのだから、その実力は信用できる。なぜ自分と行動を共にしてくれるのか、という一点だけがフレデリカの中で引っかかっているが。

「どオした？　なんか聞きたそうな顔だな」

「……私を襲わないんですか？　サイファーさんの関係者ですよ」

「勘違いすんな。俺様が興味あるのはアイツ——サイファー・アンダーソンだけだ。お前なんか胸以外に興味はない。ここで戦うメリットもないし、楽しみがいもなさそうだからな。あと個人的に女とは戦いたくない。アンタみたいな胸のデカいイイ女は特にな。別の意味でなら襲いたいけどな」

「……………」

無言で後ずさった。性的な意味で食われたり襲われたりなんて、まっぴらごめんだ。

あまり関わらないでおこう、と固く誓った。二挺の薬室に初弾が入っているかも確認する。

「おっと、新手が来たなア」

足音がいくつもする。

たぶん人数にして四人くらいだ。新手にしては妙に少ない気もする。

この数式機関と解析機関が稼働し続ける広場なら、銃弾を凌げる遮蔽物に困ることはないはずだ。ただ籠城し続けるのも、ジリ貧を招く。

そんな懸念や考えなど関係ないと言わんばかりに、ジョンはずんずんと足音のほうへと進んでいく。

「ギアで、リベンジ・マッチの準備運動といこうか？」

サーベル二本を構え、狂相の笑みを浮かべる。

ジョンが駆け出すと同時に銃声が幾重にも重なって響き渡る。その元凶は即席で地面に据え付けたヴィツカース水冷式重機関銃だ。それが二挺も据え付けられている。

弾丸は嵐となって絶え間なく吐き出され続ける。常人にとつては身を隠すほかない暴威を、ジョンはたった二本のサーベルを振り回して弾丸を叩き落とす。そのまま機銃手に向かって突撃をかける。途中で弾丸が炸裂しても、たたらを踏むことさえしない。

機銃手のそばで装弾手を務めていた二人組が立ち上がる。拳銃を抜いた。

その前にジョンの一刀が顔の上半分を斬り飛ばした。返す刀で機銃手の首も刎ねる。

拳銃が火を噴いた。機銃手も近くに置いておいた短機関銃を手繰り寄せると、フル・オートで引き金を絞り切る。この不死身の化け物をどうにかしたい、という一心からくる行動だった。

それも白刃が四度も閃いた瞬間にびたりと止む。

技術など欠片もない膂力だけの一閃。それだけでも生身の人間を切り分けるのには十分すぎた。肉屋が豚や牛を解体するように、ジョンは四度の剣戟を以て二人を解体した。首は皮一枚で繋がってる状態で、股間から顎のあたりまで一閃されている。腹圧で中・の・もの・が・せり・上・が・つ・て、ついに噴出した。

鮮血の壁画、なんと凄惨。

臓物の浮彫、なんと残酷。

元凶の狂人、なんと凶悪。

これだけの惨状の真ん中で、ジョンはヴィッカーズ水冷式重機関銃を指さしながら――
―笑うのだ。

「見ろよ、こんなモンまで引っぱり出してきやがった。一人に対してやり過ぎじゃねえかア？」

「……………そうですね」

自分はどちらに同意したのか。

ジョンの言葉か、それともこの惨状か。

今さらやり過ぎだと言えるはずもない。フレデリカも同じだけのことをした。二刀と二挺と得物の違いはあるとはいえ、ここに来るまでに数多の兵士を始末した。

——今さら否定できないから。

自分も手を汚してしまっている。だから否定などしない。

本音——恐ろしい、怖い、汚い。

生命を奪うことの恐ろしさを、その泥沼の深さを、もう一度改めて思い知った。だから、あの時自分は何もかもを吐き散らした。本能的に理解してきたのかもしれない。

だから——改めて覚悟する。

銃声一発。もう使い慣れてしまった二挺の重み、反動、銃火の明滅。

壁面に脳漿がぶちまけられる。

「油断大敵、ですよ」

ジョンの背後にいた兵士が頭の上半分を消失して、膝から崩れ落ちていく。

『All In One』の銃口と銃身の放熱ジャケットからは、色濃い硝煙が立ち上っている。使い慣れた二挺のうちの一つ。ベースとなったマウザーC96の重さは、フル・オート全自動射撃時には反動制御の助けをしてくれる。しかし、一発だけでも近距離から中距離なら抜群の精度を見せる。

奇襲を仕掛けようとする兵士の脳天を撃ち抜くなんて、わけもないことだ。

「いらねえお世話だぜ」

「治ると言っても痛いんでしょっ？」

「清楚系かと思わせておいて毒舌かア。揚げ足取りやがってエ。魔性の女だ、傾国の美少女だア」

「褒めても、あなたには何もあげませんから」

ただ辛辣に、つんとむくれて返す。何かにつけて胸に悶してつつかかってくる男には、これで充分だ。大きくなりたいと望んだわけでもない。あんまり真つ平らなものもいただけないが。まあヘンリエッタは別として。

「なアんだよ、キスの一つでも期待していたんだがなア」

「……ここから出してくれたら、考えてあげます」

「やるとは言わねえのかア……ま、いいかア」

サーベル二振りを携えたまま、のっしのっしと歩き出した。

愛用の二挺、その片割れを両手に握りしめて歩き出す。まだ両手に一挺ずつをやるには、まだキツイものがある。あの機関兵士から貰ったダメージはいまだにわだかまっているのだ。

ジョンがあらかたの兵士を倒してしまったのか、洞窟内は静けさを取り戻す。

ぎ、ぎ、ぎ。

二人分のブーツが土を踏みしめ、砂をかき分ける。足音は規則正しく、少し駆け足だった。

暫しの沈黙。あるのは洞窟を流れる風の音だけ。

ジョンは流れてくる風のもとに向けて歩いていっているらしい。地下に流れ込んでくる風に、何か怪しいものを感じた。が、火のない所に煙は立たない。新たな脅威の臭いを感じ取りながらも、黙って歩くことにする。

その沈黙にも耐えきれなくなった。

「なんで、サイファーさんを狙うんですか？」

「仕事」

「引き受けた理由です」

「ア？ サイファーはお前のコレだったのかア？」

サムズ・アツプ。

示すものは一つしかない。

「……違います！」

過去最高の大声が出た。洞窟が揺れたんじゃないか、と一瞬だけ思ってしまった。パラ、と肩に落ちた土の感触を気のせいだと信じたい。

「……はぐらかさないでください」

「まじめでお堅いことで……俺様の身体のことぐらいはわかるよなア？」

ジョン・ドウは不死身だ。月並みな表現ではあるが、これが一番しつくりとくる。指

で摘まめるだけの肉片も残さぬほど刻まれても、黒焦げにされてから砕かれても、瞬き一つの間にも元通りだ。おまけにサイファーすら超えるほどの怪力ときている。

この男もサイファーと同じ怪物なのか。どういう存在かは不明だが、おそらくは人間の及ばぬ権能を有しているに違いない。

首を縦に振った。

「おかげでなかなか死ねやしねエ。弾丸食らったって、ぶった切られたって、死ぬほど痛いだけで死ねやしない……………いいかア、覚えておけ。漫然とした日常なんざ、死んでんのと一緒だ。人間てモンは色んなモンを比べないと価値がわからねえからな、生きることの大事さも死と比べないとわからねえのさ。俺様みたいな身体してると、余計に比べづらくってたまらねえ。あの男なら、極上の死を味合わせてくれると確信したんだよオ」

「……………サイファーさんは、何度か死にたいと思ったことがあるそうです。あなたは、どうなんですか？」

「死ねないから諦めたよ。それよりも目まぐるしく変わる新大陸の事情は、俺様を常に飽きさせないでくれる。一度でいいからマンハッタンのブロード・ウェイに行くべきだ。トーキーにミュージカルまで選り取り見取りだア」

「この世界を楽しんでいるんですね」

「当たり前だア、せつかくある命、せつかくある世界なんだから楽しまねえとな。悲観的に行くよりも樂觀的に行く主義なんだ」

「サイファーさんと戦ったのは、楽しかったですか?」

そこでジョンは沈黙した。

悪いことを聞いてしまったか、と思わず口元に手を当てる。

ううむむ、と唸り込んでから、およそ三分。

「——半分かねエ」

「半分?」

「今まで会ったことないくらい強い強敵だったが、あんな殺気ぶつ放してくるとは思わなかった。自分を根こそぎ殺されてる気分だったよ。二度と味わいたくないくらい、濃厚な『死』だったよ。とつても魅力的な男だね」

「……………まさか男色」

「もう一度言ってみろ! 俺様は野郎のカマだけは掘らねえんだ! わかったかア!? つたく心臓に悪いこと言いやがる…………」

口が滑った。過去最高に滑った。

ジョンはかなりお怒りのようで、そこいらに唾を吐きかけている。

「え、と……………ごめんなさい」

「野郎のカマを掘りたいやつなんか、甲高い声をして額の後退したヤツに決まってる！
紅茶に睡眠薬を持ってプチ犯すのさ！俺様はそんなじゃない！わかったか!？」
「はい、わかりました」

進んでいくほど風の流れは強まっていく一方だ。

地上が近いのか、と抱いた期待ははかなく消えた。

おそらく地上から大気を取り入れるためのファンが、今まで目印にしていた風を生んでいたにすぎなかったのだ。地下という場所の関係上、空気の確保は急務なのだ。

「地上への出口じゃないのか……」

「残念です」

「さて、どうしようかなア………オツ？」

ジョンの視線の先には分厚い鉄扉があった。真鍮のプレートには『Arsenal』と刻み込まれている。漏れ出る火薬と鉄と油の臭いから、間違いなく武器庫であると推測できる。

何のためらいもなくジョンは鉄扉をこじ開けた。というより門の鉄棒も掛け金も二重三重に巻かれた鎖も、まとめて怪力に任せて破壊したと言ったほうが正しい。二度と正常な開閉など望めなくなった鉄扉が、凄まじい音を立てて蝶番から外れて倒れた。舞い上がる風と砂ぼこりに思わずスカートを押さえた。

「ワア〜オ、選り取り見取りじゃ〜ん」

拳銃から自動小銃、複人数で運用するレベルの重機関銃。それだけに留まらず民間企業で研究開発途中とされている個人携行自動式榴弾砲まである始末だ。弾薬も所狭しと並べられ、刀剣類に至るまで置いてある。

「まずは両方とも四五口径フォーファイフインチにして、刀まであんじゃん！ ヌツ、こりやあ大陸の倭刀つてやつか！ 二振りもあるウ！ こりや両方ともいただきだなア」

ジョンは大量の武器弾薬を目の前にして、飛び回る勢いで浮かれている。

だがフレデリカの興味は武器庫の一番奥にある壁だ。妙な何かを感じ取って、軽く叩いてみる。よくわからないので爪先で蹴ってみる。

「どオしたア？ その壁が気になんのかア？」

「妙な感じがするんです……根拠はないですけど」

「どれ、物は試しだろオ？」

思い切りジョンは壁を蹴つ飛ばした。それも飛び後ろ回し蹴りだ。

壁は粉碎された。爆発物でも使ったように。武器庫全体が揺らぎ、天井から土ぼこりが降ってくる。

「隠し部屋、かア？」

「……なにか嫌な予感がします」

「奇遇だな、俺様もだア」

壁の先には別の部屋があつた。おそらくブロックを積んで、モルタルを使って塗り固めただけの壁でふさいでいたのだ。そこまでして、隠しておきたいものがあるというところか。

ここでもジョンが先行した。正直言つて物凄い姿だ。左右の太ももにホルスターに納めたM1911、背中に交差するように倭刀を鞘に納め、ベルトにある左右のハーネスにソード・オフしたウインチェスターM1912をぶら下げ、止めに両手にルイス軽機関銃を持っている始末だ。

黒いレザーのパンキツシユな上下も相まって、かなり危ない。間違いなく危ない人間ではあるのだが。

部屋の中央で刺々しい鎖がとぐろを巻き、三メートル近い高さにまで至っている。それも蛇がとぐろを巻くように上に行くにつれて小さくなるのではなく、底辺も天辺もすべて同じ太さなのだ。まるで柱だ。棘の鎖で編まれた柱である。

その周囲には——数多くの人骨がある。古いものも新しいものも、共通しているのは一つとして全体を残している者が存在しない。まるで鋭い爪を持った猛獣に引き裂かれたようにバラバラだ。臭うはずのない血臭を嗅いだ。

「あの柱……ヤバいぜエ」

「……埃が積もつてない」

「聡いなア。人骨は埃まみれなのに、柱だけがきれいだア。元凶はアレにあるぜ」
ジョンは踵を返そうとした。用はないとの判断だろう。

だがフレデリカは吸い込まれるように柱に近づいていく。

「おいデカチチー！」

わざと怒るような言葉をチョイスした呼びかけが、聞こえたような気がした。
業を煮やしたジョンが襟首をつかんで止めようと、こつちに来るのがわかる。

その前に柱に触れた。

——きつと私のためにあるんだ。

ただそれだけを思って、手のひらに鋼鉄の棘が刺さるのも構わずに押し付ける。

柱は一瞬で膨らんだ。十重二十重に重ねられた鎖は、展開したままフレデリカを一瞬で取り囲む。

ジョンが歯噛みしつつ、ルイス軽機関銃を撃ちまくっている。弾丸はすべて切り落とされ、展開した刃鎖の群れには何の影響もない。

白骨はおそらく自分と同じように柱に触れた人間のものだろう。彼らは“資格”を持つていないがゆえに、刃鎖の群れに取り囲まれてズタズタに切り裂かれた。

だがフレデリカには資格があつた。

この刃を手繰るための資格が。

刃鎖は急激に収束していく。フレデリカの右手へ、棒状に変わっていく。ただ先端には湾曲して伸びる刃がある。

これは大鎌だ。メインとなる大きな刃と、その反対側に小さな刃を備え、さらに長柄の先端に槍の穂先まである。

刃鎖は束ねられ、一つの大鎌に変わったのだ。死神が携える死者の魂を刈り取るための、非常に大きなものだ。絵の長さだけでも一五〇センチを超え、刃渡りは一二〇センチに迫るはずだ。実戦で扱うことなど欠片も考えていないような大きさと形状だが、どういうわけかこの大鎌を自在に操れる自負がフレデリカには存在した。

「よいしょ、っと」

軽く一回転。

サイファーが野太刀を振っているのを見て、あんなに長いものを自在に振り回せるのかといつも不思議に思っていた。だが出自がまともではない大鎌とはいえイメージ通りに振り回せている。

——これは、きつと。

——私のために、あるんだと思う。

自惚れで言っているのではない、根拠のない確信だ。

横に一振り、回すように縦へ三振り、X字を描くように回し続け、思い切り振り下ろした。切っ先は滑らかなほど地面に吸い込まれていき、引き抜く時も何の抵抗も存在しなかった。

「試し切りは済んだかア？」

「多少は。実戦はまだわかりませんが」

「危なっかしいところはねエから、ザコ共を相手すんならちようどいいはずだア。あとはきちんとぶった切れるかどうかが問題だなア。銃で殺すのと、刃物で殺すのはだいぶ違う。ダイレクトに手に伝わるぜエ。相手が死ぬ瞬間というモンがよオ。ま、せいぜい潰れるンじゃねえぞオ」

ケケケ、と笑いながらジョンは進んでいった。

大振りな鎌の柄を握りしめながら、後を着いていく。

自分はサイファーやヘンリエッタのように人を斬れるだろうか、という妙な不安だけが胸中でわだかまっている。



一刀両断。

その表現がびたりとくる一閃は、機関兵士の頭頂から股間までを綺麗に断ち割った。断面は鏡のように万物を移し、縁は触れただけで指が落ちそうだ。

くるり、と一刀が翻って血を払い、納刀された。

鋼鉄の骨格と外殻、生身の臓物をまとめて真つ二つにした腕前は紛れもなく極東で育まれた正統剣術の一端であろう。それを振るったのは身の丈二メートルを超える偉丈夫である。無論、極東の人間ではない。振るった一刀もまぎれもない日本刀ではあるが、刃渡り五尺四寸三分に及ぶ野太刀である。

サイファー・アンダーソン。その剣腕は地下深くでも翳ることを知らない。

「敵さん、だいたいなくなつたな」

「というより、死体のほうが多いようだね。フレデリカが倒したような傷ではないけど」「刀傷だからな。それにしても美しくない傷だ」

「美しくない?」

訝し気にヘンリエッタが聞き返してきた。サイファーの言葉は相当に危険な匂いを孕んでいる。笑いながら人を殺せるような殺人鬼なら、きつとそういうに違いない。ただ声音に冗談の類は一切なく、真剣そのものであった。

転がった死体一つ一つを見分し、その中でも完全に切断されている死体の断面に注視している。

「素人より多少はマシ、くらいの腕前で力任せにぶった切ったな。断面がえらく汚い。僕を見習えって話だ」

「……そのようだね」

「使った刃物は敵さん方のサーベルだろうよ。死体の転がり方から見るに、やった相手は二刀流だ」

「それって、まさか…………」

「——ジョン・ドウ、ここにいるかもしれない」

「フレデリカが危ない！」

そう言つて駆け出そうとしていたヘンリエッタは襟首をつかまれて、出鼻をくじかれる。

「あつちのほうに気がなるな。何かデカイ機関の作動音が聞こえる」

「……確かに」

歩を進めるにつれて転がる死体の数はどんどん増えていき、その密度も比例的に増していく。

開けた広場は死体で埋め尽くされていた。五体満足である者がほとんどいない。どこかしらを切断されていたり、ひどいものは四等分にされている。野獣が群れを成して、その爪牙を持って食い荒らしたようにしか見えなかった。

「ごくり、とヘンリエツタは生唾を飲んだ。こみ上げてくるものを、押し戻すために。「なんだ、この機関は……?」

サイファアの興味は場の惨状ではなかった。

すり鉢状に掘り下げられ、採掘場もかくやという光景に様変わりした場所で駆動し続ける二つの大規模機関。

数式機関と解析機関。

接続された二つは一時も休むことなく駆動し続ける。

「パンチ・カードも数式カードも出してないあたり、こいつはロクでもないことに使ってる証拠だ。ぶつ壊しちまうに限る」

地下に来て初めて抜いた愛用の巨銃——『Howler In The Moon』を数式機関に照準した。動力を失えば、解析機関は演算を止めるしかない。

引き金に指をかけて——凄まじい爆音が連続で響き渡る。

「ア、ア、ッ！ くそつたれ！」

重厚な鎧騎士が本来であれば兵器搭載用の重機関砲を、横つ面からバラまきまくっている。機関兵士よりも装甲や出力に重点を置いて、より人間という範囲を逸脱した兵器

——機関騎士であった。

大出力を誇る躯体内部の機関からチューブを伸ばし、それを重機関砲に繋いでいるの

は新設計の機関砲草案の一つだ。外部動力を用いることで無理矢理確実な発射と排莖を実現するというもの。弾詰まりや不発弾は圧搾蒸気の圧力が生む給弾機構の力強い作動によつてはじき出され、口径二五ミリもの重機関砲弾はベルト・リンクが続く限り発射され続ける。

「もらつていきな——特製の炸裂弾だぜ」

連発される重機関砲の咆哮をかき消すような、只人では保持も叶わない巨銃の雄叫びがこだまする。ホーレス謹製の炸裂弾は、軟鋼で出来た弾頭の内に炸薬を仕込んだだけのもの。たったこれだけではあるが着弾の瞬間に、弾頭は装甲へと密着し、そのタイミングで炸薬による爆発が起こる。装甲内部は剥離飛散して内部にダメージを与える。これもホーレス曰く『数世代先の砲弾理論を転用した』ということだ。

サイファーにとつてはよく効く弾丸程度の認識だが。

その虎の子の弾丸も騎士の左胸に着弾しただけで、重要な内部機構にダメージは及ばなかつたらしい。証拠に機関砲の掃射はいまだに止まる気配が感じられない。

「(ハハ)は三十六計を決めるしかないか」

着込んだ灰色のロング・コートの性能を考えれば、機関砲弾くらいなら貫通しないはずだ。だが防弾装備なんて一つも持っていないヘンリエッタのことを考えれば、踏みとどまつて応戦するのは躊躇われる。第一に目標はフレデリカの搜索だ。

「こつちだー」

機関騎士の足元にぶち込めば、炸薬によって三メートルに迫る騎士を覆い隠すだけの土煙が上がる。その隙にヘンリエッタは駆け出した。

だがサイファーは一緒ではない。だが留まっているわけでもない。

——鯉口を切る音がいやに響く。

「やあ」

あくまでよく見知った知己に挨拶するような声。

騎士が振り返った瞬間、銀閃一条。

頭頂から股間まで断ち切った。背後からの一閃は振り返る前に振り下ろされていた。

振り返ったことが引き金になったとは、真つ二つになった脳髓で理解できたかどうか。

「追っかけられると、困るんでね」

オイルと鮮血の混ぜ物を払い、鏝鳴りを小気味よく立てて納刀した。

そのままヘンリエッタを追う。ものの数秒もしないうちに追いついた。

「ブーツの足跡がある。明らかに違うもの——フレデリカのものかね」

「逃げながら足跡に注視していたか。でかしたぞ」

足跡は暗闇の奥までずっと続いている。

歩いて追うのは少しだけ骨が折れそうだ。これはサイファーの基準だから、ヘンリ

エツタにとつては『少し』ではなく『かなり』になる。

だから少しだけ常人にはできないズルをする。灰色のロング・コートが漆黒に染まり、赫いひび割れができるように眼が浮かぶ。およそものを見るという機能からかけ離れているように見えるが、これでも立派な眼球だ。のつぺりとしているがサイファーは新たな視覚を有している。

目を増やした理由はただ一つ。

——コートの眼球は一斉に地面を注視した。

足跡を追いながら走るため。それも全力疾走。

ひよいとヘンリエツタを担ぎ上げた。

「軽いな、それに細い」

「私だつて女さ。醜く肥え太るような無様はしないよ」

「もつと食え。近頃の英国淑女は細すぎる」

ふふ、とヘンリエツタは微笑んだ。上品というよりは、下世話な意図が見て取れる笑いを

「自分のが入らないから？」

「うるせえ！」

一喝しながら地面を蹴った。

下手な安物でオンボロの蒸気自動車ガよりは速度がある自負がある。その一方でコー
トに浮かび上がる亀裂めいた赫い眼は、不気味にきよろきよろと動き回ってフレデリカ
の痕跡を探る。

視覚が増える感覚は増えた本人にしかわからない。

サイファーはとにかく、〃視えるからいい〃ということ貫いてきた。これくらい
ざつくばらんほうがちようどいい。

その過程で気になるものを見つけた。見つけてしまった。

フレデリカの足跡、その先を行く大きな足跡に。二メートルを超す自分ほど大きくは
ないが、立派な成人男性のそれだ。深さからして体重は百キロを超すことはないが、そ
れでも十分に重いことを示す深さだ。

「フレデリカのヤツと誰かが一緒にいる。連れていかれてるのか、それとも着いて行っ
てるのかはわからん」

「前者だと思ふな、私は」

「僕も同感。見ず知らずのやつに着いて行くほど無警戒ではないだろうし、こんな穴倉
に顔見知りがあるものかよ」

「けど、個人的な見解を言わせてもらうなら、もし顔見知りに会っちゃったらホイホイ着
いて行っちゃやうと思ふね。倭の娘ニは見ず知らずの人間にはとにかくハードルが高いけ

ど、顔見知りで恩義の一つでも感じてしまったら行動を共にしてもおかしくない。例えば窮地を救ってもらったとか。この孤軍奮闘を強いられる穴倉ではなおさらさ」

「こりや危機管理を一から教え込む必要があるな」

「それは私がやろう。いくら不用心に部屋に入ってきたとしても、一緒にお酒を楽しんで、そのうえで同衾する獣けだものが教えるのはベッドの上でのハウ・ツーだろう？」

「滅給だこんちくしょう！」

「ひゃあ!」

速度を上げて悲鳴を上げさせてやった。

意外にもかわいらしい悲鳴が上がった、としたり顔だ。

こういうことをしたのも、最悪の状況からくる諸々の感情をごまかしたいがためか。無意識の内に鯉口を切っていた。いつでも居合を放てるように。

二人分の足音がする。一人はひどく重装備だ。銃火器のぶつかり合う音がする。

もう一人は女だ。たぶんフレデリカだ、という根拠など欠片もない確信がある。

重装備のほうがちさらに気づくと同時に、サイファーは走りにブレーキをかけてヘンリエツタを下ろす。

双刃と野太刀が激突した。火花の明滅が洞窟を照らす。

重装備の男にサイファーは見覚えがある。あつて当然だ、先日まで殺し合っていた男

なのだから。

「生きていたのか——ジョン・ドウ」

「俺様も会えて嬉しいぜエ——サイファー・アンダーソン」

怪物二人——今ここに邂逅した。

状況はいささかジョンに不利だ。手にした二本のサーベルは刀身の真ん中あたりまで、野太刀の刃が食い込んでいるのだから。その気になればサイファーはサーベルごとジョンを斬り捨てることもできるはずだ。しかし、それで死なない男であるのは熟知しているし、一步踏み込めないのはジョンの背後にいる存在が原因だ。

「その鎌は買ってもらったのか？ この死なない男に」

「拾い物です」

「ふうん……こいつに助けてもらったのか？」

「……………はい」

やっぱり危機管理とか警戒心とか、そういうのを徹底的に教え込む必要がある。たぶん、格闘や射撃の技術以上に必須だ。いくら助けてもらったとは言え、先日まで敵だった男にホイホイ行っている。今までの育ちの事情が悪く影響しているのだろうか。

頭が痛くなってきた。

ここまで自分に着いて来てくれたのも、やはりはじめて会った日に命とか色々なもの

を救ったからか。

「ま、ここでやり合うのはやめようぜエ？　ここから出るのが先決じゃねえかア？」

「そりや同感だ」

「おまけに俺様はあちらさんと手を切られちまった。仕返しをダース単位でやってやんなきゃ、気が済まねえんだ」

「自業自得、因果応報、身から出た錆、自分で蒔いた種。心当たりの一つでもあるだろう？」

「そんな言葉、俺様の辞書にはないんだ」

「うわつ、なんて自分勝手な辞書なんだ」

「その言葉もねえよ」

「僕もそうだから、これ以上突っ込むのはナシにしようか」

野太刀と双刃は離れた。

刃の欠けたサーベルを捨てると、背中から倭刀を抜いた。もしかするとサーベルはあらかじめ使い捨ててる気だったのだろう。その相手がたまたまサイファーだっただけだ。

「足引つ張るなよ」

「こつちのセリフだ、デカブツ」

フレデリカとヘンリエッタは確信した。

——最強最悪にして皆殺し不可避の共同戦線だ、と。

Reach 内緒の話は中華麵を嗜んで

——野太刀が切り裂く。

——双刃が叩き切る。

先頭をサイファーとジョンの二人が先行してくれるおかげで、ヘンリエッタとフレデリカはほとんど戦わずに済んでいる。

手に入れた刃鎖で構成された大鎌は使う機会を完全に見失うくらいに。

出会いがしらの敵にも瞬時に対応している。意識のスイッチを切り替える速度が段違いだ。フレデリカが敵の姿を認識した瞬間には、すでに迎撃態勢を整えている。反応速度の差ではなく、日頃の心構えの違いだ、常に戦いを意識するスタンスなのだ。

「歯ぐたえねえなア」

「お前のお眼鏡にかなうような相手が、そうそういてたまるか」

「じゃあアンタが慰めてくれよオ。なア頼むぜ頼むぜエ？」

「マスかいてろ」

野太刀の血を掃^{はら}って納刀した。

ジョンはいまだに倭刀を抜き身のままだ。おそらく得物が銃だったら、ずっと引き金

に指をかけているだろう。いつでも相手を殺すための心構え——その表れとしか言うほかあるまい。ここまできると狂気的であるが。

サイファーも同じようなものだった。鞘に収まった野太刀の鏢に親指を押し当てているのは、すぐにでも鯉口を切れる準備だろう。有事の際には神速の抜刀術からの二の太刀、三の太刀と連携で斬り込んでいくはずだ。

「外への道はわかりますか？」

「お前さんを救出して、もと来た道に戻るつもりだった。けど追手のいらん世話で道がめちやくちやだ。はつきり言えば、わからん」

「空気の流れから地表を直指そうとしても、デカイ換気扇にぶつかつたからなア。探す当てはあんのかア？」

「勘だよ」

「嘘だろ」

「ヘンリエツタ、勘を侮つてはダメだ。人より険しい場所に行くのなら、勘に頼るしかない。すべてを聞き入れなくていい。友人のアドバイスを聞くような感じがいいんだ」

その言葉にジョンは狂相の笑みを浮かべている。

ある一方を指さした。そこは少し離れたY字に分かれた道だ。

ジョンは右を指している。

「俺様の勤はあそこに行けと言ってるぜ？」

「奇遇だね。僕もあそこがクサイ」

「私もなんか怪しいと感じるな」

ジョン・ドウ、サイファー・アンダーソン、ヘンリエッタ・ウエントワース。この三人すべてが珍しく意見があっている。

フレデリカも同感であった。言いようのない不安による胸騒ぎを、その道から感じている。脱出は先決であるが、見過ごせないものがそこにはある。

「私も……行くべきだと思います」

「全員の意見が合ったな。用心して進もう。何が出てくるかわからんからな。ジョン、お前はケツを固めてろ」

「お嬢様二人を挟んでお守りつてわけかア。いいぜ」

左手の倭刀を納刀し、散弾銃に持ち替えた。ポンプ・アクション式だがコッキングの時は、フォア・エンドを握りしめて上下に振ってやれば片手で装填できる。

自分も何か小回りの利く武器に持ち替えたほうがいいだろう、と思い拳銃を抜こうとしたが、いかんせん大鎌をどうするかに躓いた。両手で持つておかないと取り回しに困るうえに、誰かに持つてもらったこともできない。重さをあまり感じないのが唯一の救いだ。

どうしよう、と思った瞬間に大鎌は一瞬にして刃鎖に早変わりするや、コルセットのあたりで一週し、背中側で縦二〇センチ横四〇センチの直方体に落ち着いた。ほんの一秒もかかっていない。

近くのヘンリエッタは眼前で狙撃弾を受けたような顔をして驚いている。

「なにを……したんだい？」

「わ、わかんないですよッ！ かさばるな、と思ったたらこうなっちゃって……」

「持ち主に応えることができるくらいのお利口さんか……羨ましいね」

だが持ち運びには困らなくなった。

両手に二挺を構え、周囲を警戒しながら進んでいく。

遠くで何らかの音が響いている。穴倉の中だから距離感を掴めない。

引き金に指はまだ掛けない。

音の正体がおぼろげにわかってきた。

工具の音だ。溶接の火花が散る音もする。

そのかわり、人の気配が少ないように思えた。

ついにたどり着いた。二つの機関が稼働していた空間に負けず劣らずの広さだ。ただ、ここは完全なる半球状だ。すり鉢状に窪んでないせいで、上下の広さは半分ほどに感じる。それでも天井は三〇メートルを優に超える。

薄明りの中、たまに散る火花が照らす姿にサイファーは絶句する。

「おいおい……こいつは最悪だ。フィツシャアの心臓が止まるぜ」

鋼鉄の巨軀が逆関節式の脚で立っている。その周りには足場が組まれ、おそらく解析機関で作業内容を書き込まれた工作機器が、忙しなく動き回って作業に励んでいる。

重厚な巨人というにはあまりに不格好で、人の形からかけ離れた巨大なものにジョン以外の三人は見覚えがあった。

「メルカバ……」

「こんなものを地下に、運び込んだのか……」

全高二〇メートル近い試作巨大兵器をいかにして奪い、そして運び込んだのか。神の戦車、の名を冠した兵器は稼働の時を今か今かと待ち構えているように思える。

出撃する際はどうかやって出すのか、といろんな問題はあがるが最も気になるのはただ一つ。

——なぜメルカバがここにあるのか。

ジョン・アールバースノット・フィツシャアが作り上げた新型兵器が、なぜここにあるのか。兵器王の最新作、その模倣であるのか奪ってきたものなのか、まるで見当がつかない。

「……所々違う。武装が多すぎるし、パーツも増えてやがる」

「だとしたら別のメルカバでしょうか？」

「あんなものがもう一台あるなんて、冗談じゃないったら」

「俺様はあつちのほうに気になるがなア」

メルカバの隣で建造されているのは玉虫色に輝くもやを放つ、大人一人分くらいの球体だ。マット・シルバーの防錆処理が施されている。

明らかに数式機関だ。未知の鉱物を持つて生み出される、原理不明のエネルギー機関。稼働を示す玉虫色のもやを放っているということは、建造自体は終わっているのだろう。あとは試験稼働を行い、望むだけの出力が出ているかを調べている。

現に数式機関は計測機器に接続され、針は振り切れる寸前まで行っている。

その近くに計測者がいた。三〇代くらいの白衣を着こんだ男で、そんなにガタイの大きいほうではなかった。むしろ小柄と言ったほうがいいだろう。一七〇センチにようやく届くか届かないか、という瀬戸際なのだから。

サイファーが一步を踏み出す前に、アクロバットでありながら完全なる無音でジョン・ドウが肉薄した。

その狂相の笑みと目が合った瞬間に、男はコルトの三八口径を抜こうとした。耳障りな音がした。生固い根菜類を握りつぶしたような音。

——実際は肉と骨、それと鋼鉄であるが。

遅れて響いた破裂音。

恐るべきことにジョンは銃把ごと男の手を握りつぶしたのだ。サイファーよりもはるかにすさまじい怪力の餌食になった手は、砕けた骨が皮膚を突き破つてずたずたになつてしまふ。衝撃で銃把内の実包も暴発した。男の手の名残は煤けた骨と、そこら下がった肉片だけだ。

無論、ジョンも爆発を食らつたが見る見るうちに手は元の姿を取り戻す。常識外れと言つていい再生能力の賜物だ。

「ジョン、やめとけ。それ以上はそいつを殺しちまう」

そう言いつつも手には工業用バーナーがある。ボンベは背中に背負っている。

痛みに悶え抜き、転がりまわる男を押さえつけてサイファーは穏やかな声で問う。あくまでも理性的で体軀に見合わぬ割と高めの声だから、男は少しずつ落ち着きを取り戻していく。

「この穴倉を作るように言った、お前さんたちのボスは誰だ？ 言つたら手の血を止めてやる」

「ほ、本当か？ 治してくれるのか!？」

わずかでありながら、圧倒的な違いにサイファーは笑みを浮かべた。男はうつぶせになるように抑えられているから、サイファーの顔もバーナーも全く見えない。男は圧倒

的な痛みと異常な状況に正常な判断力を失っているから、相手の言葉にも自分の言葉にも全くの疑いを抱かない。

「ここは元からあったものを利用しただけだ。別に掘り抜いてはいない」

「んじやあテメエのボスだ。いったい誰なんだ？」

「エンドワード、そう呼ばれていた。思い出したくもないほど……美しい男だ」

「やつぱりな……」

「君の質問には答えた。だ、だから早く治してくれ。私はただの技術者だ。もともとは兵器王の下にいたが……このメルカバはお披露目だけに終わらせていいものじゃない。防衛の強化だけに終わらせてもいけない。あれは攻めるためにある兵器だ。抑止力のために作る兵器など税金の無駄だ。やはり兵器は殺し、滅することに存在意義がある。メルカバとフューリアスの設計図の写しを見せたら、彼は子供のように喜んでいたよ」

「フィツシャーを裏切ったのか？」

「あ、ああ。抑止力だけの兵器を作るだけの男だからな」

「そうか、じゃあ血を止めてやる。ジョン、押さえろ」

ジョンは無言で吹き飛んだほうの手を肘の近くあたりで、踏んづけて押さえる。

バーナーの引き金を引くと酸素と化学系可燃ガスの混合気体によって、噴射口から青白い炎が噴き出す。

その熱波が醜く引き裂けた傷口に近づこうとしたとき、男は己の運命を悟つて暴れ出す。だが怪力のジョンによつて鼻つ柱を踏んづけられては、抵抗もままならない。

人の焼ける臭いが一瞬であたりを包んだ。

バーナーが当たつた時間はそれほど多くはない。一分強といふところか。

それでも高温の炎によつて傷口は焼け爛れるどころか炭化してゐる有様だ。男は白目を剥いて、泡を吹いている。意識は何処へ行つたのか。

噴射口の残り火で葉巻を吹かす。サイファーは口いっぱい紫煙を吸い込んだ。

「フレデリカ、近くに灯油かガソリンの入つた缶があつたはずだ。持つてこい」

「……はい」

「持つて来たらヘンリエッタに渡せ。そんでヤツにぶっかける」

サイファーが何をしようとしているのか、フレデリカはすでに察している。ヘンリエッタも同じであつた。

ガソリンと書かれた缶を持つてくると、ヘンリエッタに手渡した。

男の近くで封を切り、中身の半分くらいを身体にまんべんなくヘンリエッタはかけた。あまり激しく注ぐと危険だから、注意深さが必要になる。それでも三〇秒とかかつてない。

「ご苦労。最後に起こしてやれ」

ヘンリエッタは近くにあった鉄パイプで腰骨を叩いて喝を入れる。

「やあ、お目覚めか？」

「な、治すと言ったじゃないか……」

「なに勘違いしてんだ。血を止めてやる、僕はそういつたんだぜ。お前さん『兵器は殺し、滅することに存在意義がある』と言ったな」

「過激だと言つて、私を殺すのか」

「いいや、頭が下がるほど同意するよ。僕もどちらかというところ、けっこう過激な人間だね」

「そんなデカイナリなんだから、物騒なのは当たり前だろう。そんな長いコートまで着てさ」

ヘンリエッタの横槍を一睨み。そっぽ向いて黙つたのはささやかな抵抗か。

「でもフィッシャーを裏切つたのは話が別だ。死ね」

「や、やめ……!」

無慈悲にあつさり、サイファーは葉巻をガソリンまみれの男に放る。

爆発的なまでの炎に男は呑み込まれた。悲鳴と絶叫を背後から聞きながら、一行はここを後にしようとした。

それを鋼鉄が遮った。ある意味では小さなメルカバと言える逆関節での二足歩行を

行うのは、足を伸ばしても四メートルに届くかというくらいの戦闘機械——蒸気駆動鎧スチーム・アーマーである。生身の人間が乗り込んで使う歩行兵器という案は新大陸との独立戦争時には、すでに草案としてあつたとされる。十九世紀の中頃にそれはついに実用化を果たした。

何層にも重ねられ、特殊な化学透明フィルムを張られた操縦席のガラスは五〇口径重機関銃弾までなら日々だけで済ませるし、それ以外の装甲であれば手榴弾の爆発だつて平気でいられる。機関腕スチーム・アームに接続された片方二門の三〇口径機関銃と一門の一〇〇ミリ自動榴弾砲の火力は歩兵とは一線を画する。

それが三体。普通なら武器を捨ててホールド・アップするのが定石だろう。だが彼らは違う。

「フレデリカとヘンリエッタで一体、僕とジョンで一体ずつな」

「人使いが荒いな」

「まあ幸いにもここは広い。動き回つたつて大丈夫だろオ？」

「いつも通り……うん、やれる」

ジョンが先手を切つた。こちらを向く銃口の脅威などお構いなしの、不死性に与えられた豪胆さは突貫で生きる。

蒸気駆動鎧も黙っているわけではなかった。その鈍重そうな見た目とは裏腹に、充分にスピードを乗せた一撃を軽やかなバック・ステップで避けたのだ。

左右合わせて四門の機関銃が炸裂する。

おびただしい量の三〇—〇六スプリングフィールド弾の葉莖が小気味よく落ちていく。

一体がサイファアのほうを向いて機関腕を向ける。榴弾砲から口径一〇〇ミリもの弾丸が発射される。

「そんな一人だけで楽しもうとするな」

ジョンに負けず劣らず、凶暴な笑みを浮かべたサイファアは野太刀の鯉口を切る。

銀条一閃——刃は迅雷となつて走る。

榴弾は真つ二つになる。上下に分かれた弾丸はサイファアの後方に飛んでいき、むなしく爆発することなく落ちた。神速の抜刀術は信管に作動させる暇すら与えぬというのか。

その神速が勢いを失わぬうちに続く二撃目が右脚を捕らえる。

蒸気圧と油圧の二つのピストンで構成された歩行脚は、歩行の要となる人工筋肉のものであるピストンを断たれた。薄茶のオイルと真つ白な蒸気が噴射しつつ、歩行脚は自重を支えきれなくなる。

ついに倒れ込んだ蒸気駆動鎧、その操縦手はガラス越しに見た！

——自分を狙う巨銃の銃口を。

——自分を見つめるサイファアの瞳を！

銃口が跳ねる。雷鳴と聞き違う砲声が響く。

発射された弾丸は銃口を抜けるや三つに分かれ、中から細長いダーツを撃ち出す。ホーレス謹製の徹甲弾はよほど水平に撃ち込まぬ限りは、装甲が分厚くない限りほぼ確実に貫徹する。

矢弾は操縦手に弾頭のエネルギーを思う存分に叩き込んだ。操縦席のガラスは真紅に染まる。矢弾の射入孔から漏れた鮮血が、外部に奇怪な図を描く。

「お先に一人」

「あつ、抜け駆けしやがってエー！」

倭刀を両手に構える二刀流をとった。

身体を機銃が貫通してもお構いなした。そのままジョンはもう一体に駆けてゆく。

左足を回るように駆け抜けながら、二刀をやたらめつたらに振りまくった。サイファアの野太刀に比べれば半分程度の刃渡りしかないから、幾度に分けて斬り刻む必要がある。それも技術の欠片もない力任せだが、ジョンの怪力が切断を可能にする。

「ハツハツハ！ メイン・ドイツシュといこうじゃねえかア？」

狂相の笑みが深まった。

犬歯も前歯も、歯という歯を剥き出しにした笑いだ。

蒸気駆動鎧は膝から折れる形で歩行能力を失った。倒れ込まなかったのが、せめてもの幸いだろう。

——それも死期を少しだけ長引かせるだけだが。

歩行脚から漏れたオイルと蒸気の混ざりものが立ち込める中からジョンは跳躍した。操縦席のガラスに倭刀が突き立てられた。だが刃はあと一步のところまで及ばない。

操縦手は自衛火器として与えられている拳銃を抜こうとした。ブローニングM1910だ。とにかく引つかかる部分が存在しないから、素早く抜き撃ちができる。

その前にジョンが腰のハーネスに付けた散弾銃に手を伸ばすほうが早かった。倭刀を突き刺したヒビを銃口で突き割る。

十二ケージのOOバック・シヨットは操縦席にぶち撒けられた。ここでジョンは己のものではない血を浴びる。顔とアツシュ・ブロンドを汚す鮮血を手で塗りたくりながら、恍惚と歓喜の声を漏らす。

「ああ……もう気が狂うほど気持ちいいぜ」

もう一体の機銃がジョンを狙おうとしていた。

それを操縦席へと飛ばすスローイング・ダガーが遮った。炎熱を纏ったそれは、当たった瞬間に爆炎を広げる。

ヘンリエッタお得意のルーン文字を刻んだ魔術ナイフだ。

しかし、これはただの目くらまし。

本命は別にいる。

「大丈夫……飛べる。飛べるんだ」

刃鎖の塊は一瞬にして大鎌へと変わる。

これは試し切りも兼ねている。

地面を蹴つて、フレデリカは宙を舞った。ゴシツク調のコートとスカートが翻った。揃いの黒であつた。

飛び上がったって操縦席に刃を突き立てようとした。あまりにも大ぶりの動きであることはフレデリカも自覚している。蒸気駆動鎧は歩行脚のパワーで、軽やかにバック・ステップで躲す。

——届かない。

——だつたら、伸ばす。

返す大鎌を縦に一閃。柄から垂直に伸びる禍々しささえ感じる刃は蠢いた。柄から真つすぐに伸び、歪にねじくれ抜いた巨大な刃へと変わる。その長さ実に六メートルを超える。

刃鎖はただ蠢いているのではなかつた。小刻みに震えて耳障りな高音を奏でて、獲物を切り裂く瞬間を待ち変えているのだ。

大刃一振。

刃は触れるだけ。高速振動を行う奇怪なる刃は重厚な装甲を薄紙のように裂いた。

二つに分かれた機体がどうと倒れた瞬間、軽快な口笛が耳に届く。

「その鎌、なかなか便利じゃねえか」

「私もまだ慣れてないんですけど……」

「……………オエイ！ アレ見ろアレエ！」

ジョンの視線の先には天井に一閃が刻まれている。さきほどフレデリカが一撃を放った後だ。

——薄紫色の夕日が隙間から差し込んでいる。

おそらく地上に相当近い位置だったのだ。六メートルにも及ぶ巨大振動刃の一閃は地表を走ったに違いない。

「——サイファーさん！」

「わかってる」

輪胴内の徹甲弾をすべて排出し、代わりに込めたのは徹甲爆裂弾。得物の体内に潜り

込んでから爆発する代物だ。これはホーレスが自ら手掛けたものの中でも特に強力なものであった。本人から『使うのは化け物相手にしておけ。人間に使うような代物ではないから』と忠告されていたのだから。

それを一発だけ込めて、輪胴を振って戻す。
銃声と共に、地上への道が開く。



熱いシャワーを浴びて生き返った気分になる。

あのあと炸裂弾で開けた穴から脱出し、リッツ・ロンドンに何とか帰還した。途中の公衆電話で何度かサイファーが連絡を入れていたのは、メイザースへの連絡をはじめとする諸々の手配であろう。

ジョンはいつの間にかどこかに消えていた。ホント傍迷惑なヤツだ、とサイファーは愚痴っていた。

リッツ・ロンドンに辿り着いた時も従業員がなるべく目立たない裏口から通してくれ、たし、食事はルーム・サービスになった。

ただ食事よりも先に体を洗いたかった。髪に染みついた血と土の臭いを落としたかった。

何度も何度も洗いで濯いだ自前の金髪。浴びた返り血のことも、被った土ぼこりのことも気にせず歩いていった。だから排水溝へまっしぐらの水が濁っていたのに身震い

した。

——出ることだけ、ずっと考えてたんだ。

一意専心。ただひたむきに。

地上に出ることだけを考えていた。

そこまでひたむきになる理由がぴんと来なかった。もやっと存在はしているのだけど、はつきりとした形ではないような感覚だ。とにかくもどかしいことは確かだ。

「もう上がる……」

ネグリジェになるにはまだ早い。食事も終わっていないのだから。

だから「平穏な日常」での普段着にしてるブラウスと紺色の膝丈スカート、そして愛用の編み上げブーツを履く。

シャワー・ルームから出れば見慣れた巨躯が、椅子に腰かけて葉巻を吹かしている。

灰色のロング・コートを羽織っているということとは出かける気なのだろうか。

その瞬間、胸に衝撃が来た。

「だーれだーア?」

下からすくい上げるように自分の胸を鷲掴みにしてくるのは、たぶん一人だけだ。サ
イファーが『ア、ア、ーツ!』と絶叫していたことなど、まったく眼中になかった。こ
の不埒者の色情狂をぶちのめすことだけに集中する。

体を瞬時に翻して、揉みしだきにかかる寸前の手を振り払う。その勢いを乗せて体重を乗せて踏み込み、鳩尾に捻りを加えて正拳をぶち込む。狙い通りに身体をくの字に折った。

それでも助平心は失ってなかつたのかもかもしれない。

とどめの一撃を放とうと足を高々と上げた。それはスカートが役目を果たさなくなるに等しい。

こちらを見ようとする瞬間。

——見るな！

首筋にかかと落としを見舞う。不埒者は一瞬で床を舐める羽目になった。

後頭部を踏んづけてぐりぐりしてやる。

「それでなんでジョンさんがここに？」

「理由はわからん。いきなり窓を開けてやってきた。外壁をよじ登ってきたんだな」

「ヤモリかなにかでしょうか？」

「ヤモリのほうがまだ可愛げがあるよ」

「ヘンリエッタの言う通りですね……そこに『Song For Fog』があつたと思
うんですけど」

かさばるからと置いていった大口徑小銃なら少しは効くだろうか、と思いながら体重

をもっと掛ける。

「申し訳ないけど、リッツ・ロンドンを貫通しかねないのでダメだ。これならいいんじゃないかな？」

手渡してくれた小ぶりのダガー・ナイフを容赦なく延髄にぶつ刺した。脳からの神経命令が普通なら途絶えて窒息死するが、ジョン・ドウだけは別なのだろう。いまだに後頭部を踏まれて床を舐めながら悶えている。

「あああああ……ちよつと痛過ぎんよ、お前らさア……」

「痛いのは生きてる証拠だよ。いったい何の用で来た？」

さすがに足は離れた。踏んづけ続けるのも楽じゃないのだ。

「今日のこと雇い主に報告したのかア？」

「質問で返してくるとはな。ま、言つてはみたけど人数動員するにも準備がいるらしい。二日くらいで終わるとは言っていたがね」

「そっかあ……アンタら、夜中は腹減らねえかア？」

「脈絡のない質問はよせよ。第一、こっちは夕食もまだなんだ」

「私なんて、朝食だけなんですよ」

あの穴倉に落ちてから、飲まず食わずだった。健啖家である自覚がある身にしては、道中で腹の一つもならなかったのが不思議だ。いや、鳴つても気付いてなかっただけか

もしれないが。

「中華街にさア、うまい中華麵の店あんだけど……今から行かねえか？」

ジョンがただ食事の誘いをしているわけではない、というのを目を見れば分かった。なにか話したいことがあるのだ、と雄弁に物語っている。そのアメジストそっくりの輝きを宿す瞳が。

「おう考えてやるよ………車を一台手配してくれ。おおまかな行先は中華街だ」

と言葉とは裏腹に中華街行きが決定した。

リッツ・ロンドンの対応は迅速で完璧だ。それにある程度の融通も利かせてくれる。ジョン・ドウの存在にも追及することはなかった。ただ耳打ちひとつだけ。ジョンの不敵な笑みが一瞬で崩れた上に、顔を面白いくらいに青ざめさせていたが。

ざまあみろ、と内心でほくそ笑んだのは内緒だ。

黒塗りのリムジン・タイプの蒸気四輪車（ガ）（ム）は変わっていく街並みを走り抜けていく。

中華街はロンドンからかけ離れた異世界と言っている。

ちやうど香港のあたりはこんな光景が広がっているのだろう。ガス灯の代わりに家々に張り巡らされた行灯が夜闇を照らし、道行く人々にアジア系の人間がはつきりわかるほどに増えている。建築様式も中華特有の紋様などが目立つものに変わり、〃におい〃も明らかに変わってきた。

「よし、このあたりから歩いて行こうや。デカチチは中華街初めてだろオ？」

「フレデリカです」

「僕もいつぶりだろうかね、中華街は。どっちかと言えば日本のほうが馴染み深くてな」
「日本も中華街も私とフレデリカには縁がないな。本音を言うと、少しだけワクワクしている」

「サイファアーさん、今度は日本のことも教えてくれますか？」

「そのうち連れてつてやるよ……長い船旅になるけどな」

「……………うへえ」

ガーニーから降りた瞬間、胃のあたりがきゆうツツと締め付けられる感覚を覚える。

きゆるきゆる、と空腹にギヴ・アップした音が響いた。

「わ、忘れて、聞かないで！」

「ん、そうだな」

「良い匂いにするね。さすがは中華街というべきかな？」

「シヨンベンしてエ」

「そこまで知らないフリをしなくても……」

そこからはジョンの案内で中華街を歩む。

ついさつきまで殺伐とした穴倉にいたというのに、ここでは完全に日常に戻ってきた

ような感覚がある。こうやって他愛のない会話をしながらシヨツピングをしたり、外食をしたりする。

銃把を握ることを否定するわけではないが、それだけでは擦り切れてしまうのも事実だ。バランスをとらなくてはならない。正も負も、聖も魔も、陽も陰も、何もかも同じようにあるのがちようどいいのだ。

「おっ、ここだよ。ここが美味いんだ」

「隠れた名店、というわけか」

路地裏の少し奥にその店はあった。

店の外観は少し薄汚れているが、店内は清掃が行き届いている。二階建ての店舗には上下ともに明かりが煌々と灯り、一階は客で埋め尽くされている。

「満員だな。ひそひそ話には向きそうにない」

「安心しろ、二回の個室に予約を入れといてあるからなア」

「どっちみち連れ来る気、満々だったじゃねえか」

「……………私、お腹が空きました!」

たぶん換気扇から流れてくる匂いに限界だった。

あまりに空腹で痛みさえ感じてきた。

「おっ、行こうか」

ジョンの案内で予約席に座る。

「とりあえず当店自慢と銘打ったアレを頼むぜエ」

「わかったよー」

気さくな黒髪の娘はぱたぱたと言ってしまう。

二〇分ほどした頃か。良い匂いが漂ってくる。

「おまたせいたしましたー」

少々片言の英語と共に持ってきたのは、四つの丼どんぶりだ。

中華麺がそこにあつた。醤油ベースのスープに浮かぶ油は煌めき、熱々の湯気が立っている。四枚も添えられたチャーシュー、メンマにネギと具材はシンプルであつた。中華料理は初めてなフレデリカとヘンリエッタにとってはハードルは低めであろう。

「んじゃあ、食えよ食えよ」

とは言われたものの食べ方がわからない。それに箸の存在は知っていても持ち方を知らない。

箸に関しては見よう見まねだ。サイファーが難なく扱っていたのには驚いたが、日本に行ったことがあると言っていたのを思い出した。ならば使い方を知っていて当然だろう。

次の瞬間、箸で麺をすくうと一気に啜り上げた。熱くないんだろうか。

「ああ、やつぱうめえなア！」

「わりと日本系中華麵の味だな」

「イギリス人向けの改良したと言うが……日本に行つて食べ比べてみるか」

ヘンリエッタはなんとか悪戦苦闘の末に慎重に面を口に少しずつ運んでいる。それでも目を見開いて味わっている様子から、相当に美味しいものであるらしい。

「フレデリカ、すすつて食つたほうが麵にスープが絡んでうまい」

「や、やつてみます」

なんとか麵をすくい、持ち上げた。ふうふう、と息を吹きかけて冷ます。意を決して啜り上げた。

味覚の暴力が走り抜けた。

——なんだこれ、すごくおいしい。

もう箸が止まらなかつた。

「スープは鳥系の出汁かな……この厚切りのお肉はどうやつて作つてるんだろう。口の中でホロリと溶けて……スープの油もしつこくないし、ネギが清涼剤になっているのかな……スープをからませて一気にすすつて……うん、おいしい！」

「お気に召したみたいだね……」

「——材料は手に入るかな？」

「おい作る気かよ!？」

「まずお肉の研究からかな……」

「ダメだ聞いちやいない。んじやあアンタに本題を話そうか」

「ここでジョンはここに連れてきた本当の要件を切り出す。

「ロンドンで『幸福な社会を求める会』のビルで暴れただろオ？」

「ああ、会員がほとんど雲隠れしちまってな。行方がつかめていないんだが……」

「俺様はその新しい支部を知ってる」

「へえ……つまりアレもエドワードってヤツの手下というわけか。カルト洗脳で資産を差し出させ、自分の身ですら差し出させるといいうわけか」

「実際はただのクーデター軍だがなア……とここでさア、その支部を明日潰しに行かねえかア？」

サイファーも考えていることは同じだった。

「ああ……いいじゃねえか、それ」

そう言うってスープまで飲み干すのであった。

Attack 空振りに終わらない

——どうしてこうなったんだっけ。

中華麺に舌鼓を打っていた自分をぶん殴りたかった。ジョンをぶちのめした罰が当たったのか。

いまフレデリカはガーニーの助手席に押し込められている。サイファアの所有している大型のもので、六人くらい平気で乗れる。とはいえ後部座席はほとんど物置状態だ。後ろにヘンリエッタとサイファアが並んで窮屈そうにしている。ハンドルを握っているのは——ジョン・ドウであった。

あのあと中華街から帰って五時間の仮眠を終えると、瞬く間に荒事への準備が始まったのだ。目を白黒させて戸惑った。中華麺をたくさんおかわりしている内に、その裏で荒事の準備を押し進めていたとは。

就寝する前にサイファアが手配したのか、起床した瞬間に武器・弾薬で満杯の木箱とご対面する羽目になった。ガーニーに乗り込むまでもにも色々あったのだが。

それらは厳選され半分が返され、必要なものだけが最後尾に詰められた。たぶん銃弾の一発でも撃ち込まれたら、このガーニーは確実に爆発炎上するだろう。ダイナマイト

まで積んでいるのだから。

「道はこつちで合ってるのか?」

「ただいま近道を全力疾走中だ。良いガーニーはやっぱりいいねえ。加速が全然違う」

ハンドルを握ってアクセルペダ踏みのまま、重武装のジョンはケラケラと笑って答える。その武装内訳はモンドラゴン自動小銃にウィンチェスターM1912ポンプ・アクション散弾銃、そしてアーカム45二挺であった。さらに最後尾の物置には穴倉で手に入れた二振りの倭刀が鎮座している。

まだ明け方のロンドンを大型蒸気四輪車がタイヤを盛大に横滑りさせながら、無鉄砲なまでのハンドル操作と奇跡的な幸運か、一度も事故は起こっていない。だが常にハラさせられるのはジョン以外の三人なのだ。

「も、もう少しゆっくり走りませんか?」

「チンタラ走っていたら気づかれるだろオ!?!」

「猛スピードで走っているほうが気づかれるんじゃないかな……?」

「こんなんで新しい支部を潰せるのかねえ。敵さんは大勢いると思うんだが」

「バカ野郎! 俺様は勝つぞ! 勝つんだよ!」

そしてガーニーは大きなビルを目の前にした。モルタルと鉄筋で作られた無機質で殺風景なものだ。ただ、極限まで無駄を排した近代的な印象も与えるのだが。どちらに

せよ伏魔殿にはおあつらえ向きと言えそうだが。

ジョンはブレーキを一切かけなかった。アクセルから足を離すことすらしない。

器用にハンドルを握ったまま両手にアーカム45を持った。45 Long Colt を長さを変えずに自動拳銃用のリムレス実包に変えた45 Automatic Long Pistol 弾を使うM1911の模倣品だ。その関係で強度を上げる必要があったのか、もとの銃より一回りも大きい。なのにジョンは器用にハンドルを握りながら二挺を握りしめている。

「ああムネデリカちゃん、シートベルトは外しておけよ。突つ込むらな」

「……………えつ、それは」

「いいか？ 俺様は突つ込むって言うてるんだ。突つ込むって言うてるんだよ！」

「ああ、もう！」

言われるがままシートベルトを外した。両手に二挺を構えなおす。

サイファーもジョンが何をしようとしているのかを察する。眉間を押さえながら後ろから大口径散弾銃を引つ張り出す。その口径——驚くべきことに八ケージだ。大型の猛獣でも引き裂けるほどの威力がある。ヨーロッパからはるかに南の大陸調査の際、寧猛なネコ科の猛獣や暑い皮膚を持つ像やサイを相手取るために作られたものだ。それをサイファーは表では言えないルートで手に入れていた。

フロント・ガラスに銃口を向ける。ジョンとフレデリカは顔を背けた。

発砲した瞬間、ガラスは跡形もなくなつた。散弾はそれだけに留まらず、玄関のガラスにさえ食い込んだ。透明なガラスに蜘蛛の巣めいたヒビが入り、一瞬で真っ白になる。

「これで満足かい？」

「あー最高だよオ！」

ビルの前は騒然となつた。あわててバリケードを設置し始めたり、ブローニング機関銃を銃座とするなど対策を行っている。だが準備を終える前に爆轟がすべてを断ち切つた。点火済みのダイナマイトを投げたのはヘンリエッタであつた。窓を開けて放つたというアウェイにもかかわらず見事に集団の真ん中へ投げ込んで見せたのだ。

「やるじゃねえかア！ 掴まつてろよオ!!」

ガーニーは入り口の柱に激突し、急停止した。

シートベルトを締めてなかつたフレデリカとジョンは投げ出された。だが、それこそが狙いであつた。入り口の扉はダイナマイトで吹っ飛んでいたから、あとは慣性によつてエントランス・ホールに放り出される。

背中合わせになるように二人は二挺拳銃を構えた状態で宙を舞っている。

——承認要請を確認。

——基底時間から上位時間へとシフトします。

フレデリカの視界は明瞭になり、何もかもが遅延する。舞うガラスの破片も、コンクリートの破片も、エントランス・ホールに大挙していた構成員の驚いた顔も、何もかもがゆつくりとした動きになっていた。

そのままフル・オートで撃ちまくる。とは言え毎分一〇〇〇発の連射も単射に等しいほどだ。スライドが後退し、起きたままになるはずの撃鉄が倒れる瞬間まではつきりとわかる。

それでタイミングを読んで照準を合わせれば、発砲と同時に血煙が舞うことになる。

——百発百中の拳銃によるフル・オート射撃。

この凄まじい不可能同然の神業はフレデリカの手によって遂げられた。

ジョンはかなり外してしまっていた。無理もない話だが、それでも十人以上は仕留めていたらしい。

撃ちかけられた銃火は思っていた以上に少ない。遮蔽物は死なない肉の壁がある。自分よりも二〇センチくらい背が高いおかげで流れ弾も飛んでこない。

「でッ！・ドュグふふッ！」

奇怪な声と奇妙な動きは立て続けに撃ち込まれた機関銃の弾丸が原因だろう。

瞬く間にジョンの身体はハチの巣になった。鮮血と肉片が飛び散り、奇怪な地図を大

理石の床に描く。

それでも倒れることはない。おそらくは脳天を吹っ飛ばされようとも。

見よ、射入孔は瞬く間に塞がっていき、弾丸は絞り出されるように抜け出ていく。アーカム45を仕舞い込むと、背中からモンドラゴン自動小銃を構える。メキシコがイスのシグ社に発注して製作したものが、発注側のキャンセルにより採用を見送られた不遇の自動小銃だ。

すでに相当数がアーカムに流れ、技術だけは一級品の技術者によって模倣品が作られている。サイファーが持っていたのは純正のシグ社製をホールレスによって改造させたものだ。銃床がサム・ホール・タイプである時点でもはや原形は留めていない。狙撃用にスコープが取り付けられている。

「お返しだアー」

ボルト・アクシオン方式とは一線を画する連射で次々と構成員に弾丸を送り届ける。スコープの零点補正は一五〇メートル前後で行われていたが、そんなことなど構いなしの命中率だ。おそらく最初の一発で十字線クロスヘアのズレを体幹で覚え、あとは勘で照準を修正しているのだろう。常識外れの射撃術としか言いようがない。

モンドラゴン自動小銃の銃声に交じって『Howler In The Moon』の砲声が聞こえてきた。

肉片と血煙を生じさせながら上半身が吹っ飛んだ。

「何やってんだ、僕の方も残しておいてくれよ」

左手で納刀したままの野太刀を担ぐように持ち、規格外の巨銃を軽々と右手一本で構えたサイファーがいた。二メートルを超える巨軀に長大な野太刀と規格外の巨銃はよく合う。銃口から立ち上る硝煙を吹き消しもせず、二階のほうへと照準する。

マンリツヒャーM1895を構えていた構成員が柵ごと粉碎された。血に染まった大理石が降ってくる。

「こっちだー！」

「機関銃を持ってこいー！」

また二〇人以上もの大所帯が雪崩込もうとしている。

そこに火のついたダイナマイトが三つも投げ込まれた。

建物全体が激しく揺れた。崩れ出さなかったのは、もはや奇跡的と言うほかない。

「やり過ぎたかな？」

「ン、一番やり過ぎてると思うぞ」

「派手にやるじゃねえかア！」

大きな包みを背負いながらダイナマイトを三本も投げたのはヘンリエッタだった。

つかつかとフレデリカに近寄ると、包みを手渡した。

「ほら、忘れものだ」

「……本当はちゃんと持って降りるつもりだったんですけど」

「その頭のネジがグラスゴーまで行った男に台無しにされたというわけか」

包みを縛る黒革のベルトを外すと、出てきたのは『Song For Fog』であった。サイファーの持つ『Howler In The Moon』と同じ七〇口径もの巨弾を使う大口徑狙撃銃だが、その姿は以前とはかなり違う。

ホーレスから受け取った時のことを思い出す。



「どんでもないじゃや馬だった」

息も絶え絶えのホーレスが絞り出すように言った。

しわの刻まれた顔は血の気に乏しく、異様に巨大な右腕の義肢は傷ついて黒煙を噴いている。全身に刻まれた痛々しい傷跡は正体不明の凶器をよりわからなくさせる。

カウンターの前に置かれているのは巨大な銃。フレデリカのために作られた稀代の魔銃であった。

「あの鎌は……?」

帰って来てからサイファーに言われて鎌と『Song For Fog』をホールレスに預けたのだ。

何か考えがあつてのことなのか、と訝しんだが要は改造してもらつたらしい。というよりは合体というべきか。

「あの鎌と『Song For Fog』は一つになった。改造には手間取つたが、私にかかればどうということはない。少々、鎌の石にひどく暴れられたよ。旧き神、人界を黄金の眼で見つめる神。夢見るままに待ち続ける狂つた神と同じ姿をした、人類の味方である神性。その力は私の権能と相性が悪い」

「黄金の眼、ですか？」

「君の眼とは無縁だ。その眼は『彼方なるもの』に直結している。君に自覚はないだろうが、出来ぬことなど存在しない全能の力にさえ昇華する」

「……………え？」

思わず近くの鏡を見つめた。黄金の双眸は鏡の中でも変わらぬ色合いであつた。この眼にそれだけの力があるということが、ホールレスの冗談としか思えない。普通ではないということとは、今までの出来事から知っているのだが。

瞳の奥で玉虫色の光が煌めいたような気がした。

思わず顔を鏡に寄せようとする。その前にホールレスの手によって引き離された。

「それ以上はやめておけ」

「目の奥で……なにか……」

「その輝きの源は今の君では直視できん。狂いたくないのであれば、見ることはやめておくことだ。あれこそが『彼方なるもの』であり『全にして一、一にして全』の存在だ。彼のものは脊椎動物でありながら無脊椎動物で、有機物でもあり無機物でもある。気体でも、液体でも、固体でも、現実物質でもあり、エーテル体でもある。この天地の狭間にある森羅万象を観測によって書き換える。遙か彼方の高みから、この基底三次元上における変化を生み出す存在なのだ。この世に起こり得るすべての変化の源であり、その全てを幻にしかねない」

「そんな……」

「恐れることはない。その玉虫色の輝きは君の道を切り開く光明となり得るだろう。いまはそのじゃじゃ馬を扱うことを第一目標にすればいい」

フレデリカは新しく生まれ変わった『Song For Fog』を手取る。

反動抑制用のマズル・ブレーキは円筒形状のものに改められ、銃身はより強度のあるものに変えられている。改造店の中で一番目を引くのは銃床だ。薄い板金を重ね合わせた実用性など皆無なものだ。これでは発射の反動を受けて、射手の肩へもろに食い込むだろう。

銃把を握って肩付けする構えをとっていたが、今度は銃身を握り込んだ。まるで
ポール・ウエボン
 長柄武器でも構えるかのよう。

銃床が蠢いたかと思えば、瞬く間に凶悪な大鎌の刃が展開された。

マズル・ブレーキは石突の代わりを果たすように円筒形状に改められたのだ。

長大な銃身を柄の代わりに扱っているわけだから、バランスとしてはぐつと刃のある
 ほうに寄っているはずだ。それをわずかにしか感じないのは、やはりホーレスの人智を
 超えた妖技術の賜物か。

「感想はどうかね？」

「とても……いい感じですよ」

「鎌も銃も君のためにあるだろう。見合った使い手になりたまえ」



「しっかし、親玉が出てくるかと思っただが、当てが外れたかなア？」

「なんだ、親玉を引きずり出す気だったのか」

「あの穴倉で俺様たちはさんざん暴れまわったよなア？ あそこが本拠地だしたら、
 いつまでも長居するわけにはいかねえだろオ？」

「ま、一理あるな」

「誰も出てくるような気配はないけどね」

エントランスホールでひどく暴れまわった割に、建物の中は異様な静けさに包まれて
いる。また増援が出てきてもおかしくないが、人の気配すら欠片も感じられない。

「どうやら別ルートから逃がそうとしている可能性があるな」

「俺もそう思ったところだ。また地下から逃げるんかねエ？」

「それはワン・パターンだと思っただけ……」

次の瞬間、建物全体がけたたましく揺れた。

全員が屋上のほうを見上げる。天窓までは吹き抜けで取り囲むようにそれぞれの階
層が成り立っている。

無機質なこのビル唯一の飾り気と言える天窓は一瞬で真っ白にひび割れた。

振ってくる鋭いガラスの雨など気にせず、ジョンは吹き抜けを三角跳びの要領で飛ん
でいく。サイファーもヘンリエッタとフレデリカをひよいと担ぎ上げると、同じように
飛び上がっていく。

「邪魔だア！」

一発の銃弾が天窓を吹っ飛ばす。元からヒビが入っていたのだから、砕け散るのは当
然であった。

四人はほぼ同時に屋上に辿り着く。

巨大な機影が出迎えた。水平に伸びる主翼は端から端まで二〇メートル以上、頭から尾翼までは一五メートルほど。特徴的なのは主翼の左右に鎮座する圧縮蒸気噴射口だ。ここから高出力の機関で生成された圧縮蒸気を噴射して飛翔するわけだが、油圧式の間接機構によつて噴射口は自在に角度を変えられることができる。無論、地面と垂直なるように向けておけば、その場で速やかに離陸が可能だ。

二〇世紀初頭の今において唯一の垂直離着陸汎用戦闘機の名をサイファアは呟いた。「ブレードオルカまで持つてんのか……」

風防ガラスは陽光による幻惑防止の化学処理によつて外側からは煤けているように見える。おかげで操縦手も乗り込んでいる人員の姿も見えはしない。

サイファアとフレデリカは銃を構えた。並大抵の装甲であれば余裕で粉碎する七〇口径もの巨弾だ。飛行の要となる圧縮蒸気噴射口に撃ち込めば、ブレードオルカの巨体は呆気なく地に落ちる——そのはずであった。

けたたましいほどの砲声が連続して聞こえてくるやビル全体を揺るがした。もう一機のブレードオルカがコック・ピット下の武装である三〇ミリ機関砲を掃射しながら接近してきたのだ。個人携行の小銃や据え付けの大口径機関銃など比べ物にならない機関砲は、ビルの重要な柱や鉄筋に至るまで撃ち抜いていく。

「うわあー！」

「ぬわわっ」

大きな揺れが一つ、それと同時にビルはゆっくりと傾き始める。

ブレードオルカはサイファアたち四人を見下ろすように滞空し、人間など跡形もなく粉砕する三〇ミリ機関砲でじつくりと睨み付けている。

このままでは倒壊に巻き込まれて終わりだ。だが下手に動けば三〇ミリ機関砲の餌食になる。

「ヘンリエッタ、フレデリカを連れて飛び降りれるか？」

「いきなり無茶を言うなあ……でも、やろうと思えば」

「五秒間だけ掃射を遮ってやる。ヘンリエッタ、どうにかしろ」

「俺様はどうするんだよオ？」

「オフエンス、これだけで充分だよな？」

「へっ、やってやるさア」

フレデリカが何か言おうとしたが、ヘンリエッタによって一瞬のうちに抱えあげられた。

そのまま傾いているせいで急斜面になりつつあるビルの壁面に、ブーツの踵を擦り付けながら滑り下りていく。

ブレードオルカも黙つてはいない。機関砲がうなりを上げたが、迫りくる弾雨は幾たびも振られる神速の剣閃によつてすべてが叩き落される。とはいえ三〇口径七・六二ミリや五〇口径一二・七ミリとはわけが違う。三〇ミリという破格の機関砲弾は弾き続けるのも容易ではない。ゆつくりとだがサイファーは着実に後ろへと追い詰められている。倒壊し始めているビルの上という、足場の悪条件も原因か。

「なめてくれるな。これでも『実力行使請負業』の看板掲げてんだ」

コック・ピットでこちらを睥睨しながら啞う操縦手に、いつもの不敵な笑みを見せつける。こんなもので自分を殺せると思うな、と言わんばかりに。

野太刀は刃を黒く染め上げる。一切の光を吸い込む漆黒に身を変えた刃は、サイファーの権能を帯びている。あるゆる一切を、森羅万象を打ち砕く破壊の力を。

操縦手は叩き付けられた殺気に危機を覚えたのか、一気に機体を上昇させる。油圧式の圧縮蒸気噴射口の可動機構が、急激な動作に悲鳴を上げつつある。その真下を漆黒の剣閃が飛んだ。距離など任意で、進行上の一切を切断する空間切創だ。

近くのレンガで装飾された煙突が斜めにずれた。

操縦手は冷や汗を流しただろう。今度機関砲ではない、別の武装の引き金を引く。

左右の主翼に据え付けられた一二〇ミリ榴弾砲が火を噴いた。

屋上は爆炎に包まれる。それはフレデリカとヘンリエッタからも見えた。すでに地

上に降りているというのに。

「サイファアーンさん!？」

「容赦なしだな……」

ヘンリエツタはグルカナ이프を抜いた。これだけのことを仕掛けてくるなら、こちらにも増援を差し向けてくるだろう。フレデリカも『Song For Fog』から『All In One』と『One In All』の二挺に持ち替えた。使い慣れたカスタム・ガンは自分の手と同化したように扱える。

現にこちらに叩き付けられる複数の殺気を感じる。

「ふう、ヤバかった」

背後からの声に腰を抜かしそうになる。

「サイファアーンさん!?! 大丈夫だったんですか?」

「ん、こいつを盾代わりにして飛び降りた」

手にした灰色のロング・コートにはわずかに煤がついている。あれで一二〇ミリ榴弾砲の直撃ないし爆風を防いだというのか。破れも傷も存在せず、きちんと着用者の身を守る。超常の産物としか言うほかない。

「頑丈だねえ」

「僕の“力”を混ぜてあるから、多少はな?」

つになった。鮮血と臓物が奇怪な絵画を描く。

ヘンリエッタは奇妙な軌道でスローイング・ダガーを放つ。上空へと放られたダガーはまるで豪雨のように降り注ぐ。それも一本一本に火炎のルーン刻印がしてあったから、一瞬でダガーが刺さったものは火だるまになった。物理法則によらぬ魔導の火炎はいかに転がりまわっても消えることを知らない。

フレデリカは『Song For Fog』の大鎌を地面に突き立てた。大鎌の刃は機関部のほうにあるから、銃把を掴むには少し前に進む必要がある。そのまま弾丸を撃つたとしても石突のほうから発射されるだけだ。だが装填されているのは空砲だ。大鎌の刃は得物を目の前にして舌なめずりでもするように蠢いている。

発砲と同時に大鎌は刃鎖に変わり、大蛇の用に石畳を粉碎しながら突き進む。軌道上にいた増援が荒々しく刻まれていく。刃鎖を素早く手繰り寄せて大鎌に戻すと、くるりと身を反転させて石突——すなわち銃口を向けた。大鎌の刃は地面に突き立てて固定する。

重厚な装甲を施したトラック型の蒸気^ガ四輪車^ニが猛スピードでやってきた。

「徹甲焼夷弾——いきます」

石突の役割を果たすマズル・ブレーキから青白い砲火が噴き出した。

弾丸はボンネットを貫いただけではなく、エンジン部分すら粉々に粉碎したはずだ。

ガーニーは爆発炎上し、一瞬で炎に包まれる。生きているものなど誰もいない——そう思った時だ。

「がああああああ!!!」

雄叫びと共にガーニーの運転手が火だるまになりながら躍り出た。同時に背後ですさまじい爆発音がした。熱風が背中を舐める。

しかし、一步目を踏み出す前に眉間に倭刀が突き立てられた。というよりは凄まじい速さで放られたというべきか。フレデリカたちの後ろからジョンが口を三日月に歪めてやってきたのだ。完全に倒壊したビルの上ではブレードオルカが炎上している。墜落の末に爆発炎上したのだろう。それに張り付いていたジョンも無事ではなかった。

パンキッシュなレザー・ジャケットは上下ともに穴だらけだ。それに左足の脛と右足の太もも、左腕前腕と右腕の二の腕にいたっては骨まで露出している。すでに再生を開始しているのだが。

「逃げられちゃったなア……」

「死ぬ思いまでして、おめおめと逃がしました。あーもう、むしろ許せてくるぞ」

「ですけど、あのブレードオルカはビック・ベンのほうに飛んでいきませんでしたか？」

「ビック・ベン？ あの蒸気時計スチームクロックか」

「……私たちはどこから穴倉に出たっけな？」

ヘンリエッタの言葉にサイファーは何かに気づいたようだ。フレデリカも同じらしい。

乗ってきたガーニーはビルの倒壊に巻き込まれて使えない。街を流すガーニー・タクシーを拾うとリッツ・ロンドンにまで帰る。

部屋に戻って地図を広げた。ロンドンの詳しい縮尺で描かれた非常に大きなものだ。フレデリカはペンを用意した。

「あの穴倉で僕たちはここから出た」

地図の一点に丸を描く。

「どういう道順で行ったか……わかるか？」

「俺様に任せろオ。方向感覚は下手なコンパスよりも正確だぜエ」

ジョンは何のためらいもなく記憶を頼りに道順をたどっていく。地図の上でどんどん伸びていく線を見て、自分たちが相当の距離を歩んでいたことをフレデリカは改めて実感する。脱出できたことはかなり奇跡的なことではないだろうか。あの穴倉は火だるまにした研究員曰く元から存在したものらしいが。

「あの解析機関と数式機関のあったあたりで止めろ」

「んう……？ あア、そういうことかア」

ジョンのペンは加速した。サイファーは何らかの予測が立っているのだろう。ジョ

ンもそれを察したらしい。

フレデリカもヘンリエッタもピンと来なかったが、ペンがある一点で止まり丸を描いた瞬間に揃って『あっ』と声を漏らす。

「ビッグ・ベン……奴らの本拠地はビッグ・ベンだったのか？」

「あの数式機関と解析機関がビッグ・ベンに繋がっているということかい？」

「そんなことをして、一体なんになるというのでしようか……」

「エドワードの野郎はまともな奴じゃなかったア。そんなヤツの考えることなんぞ、マトモじゃないって相場が決まっているんだよ」

フレデリカのみならず全員の脳裏にエドワードの美貌が浮かんだはずだ。というよりは焼き付けられたと言ったほうが正しい。人ならざる美貌に、魔と言つていい性を内包して、目にしたものは老若男女問わずにとりことなる。

アレの考えていることなど思い及ばぬ。思案することすら身震いがする。生理的に受け付けないほどの、底知れぬ不気味さが思い出すだけで責め苛んでいく。

「僕だ、サイファー・アンダーソンだ。フィッシャーを出してくれ」

サイファーはいつの間にか電話をかけていた。

『いきなり連絡をよこして、何の用なんだ？』

「あのフューリアスとメルカバのお披露目はどこでやる気だ？」

『おお、来る気になったのか!? いやあ、ありがたいなあ。ビッグ・ベンの時計台をバツクにメルカバを広場に飛び降りさせるという形でお披露目を行おうと思っっているんだ。きつとご来賓は腰を抜かすぞ。何せ、いつかは我が大英帝国から独立を企もうとしている新大陸企業連のトップたちを軒並み……………』

「待った! ……………いま、ビック・ベンと言ったか?」

『そのつもりだ。すでに会場の設営に予約は完璧だが…………マズいことでもあったか?』
「技術者が一人、作業所から逃げ出してないか?」

電話越しのフィッシャーが息を呑んだ。

『…………なぜそれを知っている?』

「このロンドンの地下にデカイ空洞が入り組んでいるのは?」

『アレの存在も知っているのか!』

「昨日までその穴倉の中だな。問題はそこを僕らが追ってる件の敵さんが本拠地として使い、さらに逃げ出した技術者を雇って独自にメルカバを完成させている。完全に武装した戦闘用のものをな」

『なんとということだ…………』

「今さら中止にすると言っても不可能だろうな」

『どうする? 何か案はないか?』

「後手後手の対応になりそうだが、何とかしてみよう。いかんせん、敵さんの思惑がまる
でわからん。あのエドワードなにがしというキラキラした美男子が何考えてるかさっ
ぱりわからん。中身は糞溜めそうだが」

『待て、エドワードだと?』

フィッツシャーの声には明らかに、思い当たるフシがあると雄弁に物語っている。

『あの綺麗な子のことなら忘れらん。魔性の美貌だ。ウチの愚息もお世話になった家庭
教師が漏らしていたが、帝王学や経済には一切興味を示さずメスマルや精神医学、神秘
思想に傾倒していたらしい。そのあと碩学が新たに家庭教師に着いたらしいが……』

「ありがとう。メイザースにも連絡しておく」

『警備にはアルトリウスも着いている。気をつけろよ』

「うへえ、最悪だな。ありがとうよ」

そう言つて電話を切った。

「さて、お披露目の日が正念場になりそうだ。覚悟はいいか?」

無論、全員が頷いた。

諸々の手配をするべく、サイファーは再度電話のダイヤルを回す。

Smokin（銃弾と共に駆け抜けて）

楽隊のパレードが始まる。これは前座のようなものであった。

メイザースが率いる突入調査隊が空洞に入ったところには、そこはすでもぬけの殻であつたらしい。穴倉からいくつものアジトに繋がっており、そこから機材を初めとする様々なるものを素早く持ち出したのではないかという推測であつた。

またサイファアの推測通り、ビッグ・ベンの時計塔の地下に数式機関と解析機関があり、さらに時計塔が神のアジトであるのは間違いない。メイザースの見解であつた。

お披露目式典の中止ないし延期は招待した近隣諸国の印象、および思い切つた行動をとられる恐れがある。対症療法的だが何か起こつた時に来賓の避難・護衛体制を整え、戦闘員を始末しながら、首魁の捕縛及び殺害という方針になつた。

「今のところは大丈夫か」

ビッグ・ベンから離れた高階層の建物の屋上でサイファアは双眼鏡を覗き込んでいた。サイファアだけではなくヘンリエッタもそうなのだが。

フレデリカはマンリツヒャーM1895の狙撃用カスタムを構えて、ビッグ・ベンのあたりを警戒している。少しでもおかしな動きがあれば、高精度高速重量弾としてホー

レス直々の改造をされた三〇—〇六スプリングフィールド弾が眉間を撃ち抜くだろう。銃が『Song For Fog』でないのは、ビッグ・ベンへの被害とお披露目への影響を懸念してのことだ。銃声だけでもカットすべく、下方向に張り出した消音器が取り付けられている。

腰には折りたたまれた——というよりは丸まっているという表現が正しい——状態の『Song For Fog』があった。あの穴倉で見つけた大鎌と一体化されてから、驚くほど持ち運びに優れるようになった。銃身はほとんど機関部に収納され、明らかに物理法則を凌駕した変形を行って対物狙撃銃の形態に変わる。作り手も素材も超常の存在と産物故か。

「まったく俺様を使い走りにするんじゃねえよオ」

「僕の社員じゃないだろう」

「ま、それを言われれば黙るしかねえなア」

ジョンは分厚いバゲットを使ったサンドイッチと飲み物を人数分買ってきた。完全に見張りの態勢を整えている。食料まで買い込んでいるのだから。

「でつかいわりに胸ナシの姉ちゃんは紅茶だったなア」

「ありがとう、かるく凍結地獄^{コキユイトス}まで落ちろ」

「ムネデリカちゃんも紅茶で良かったなア？」

返答は無言。マンリッヒヤーの銃口がジョンの下顎に突き付けられ、弾丸が顔面を断ち割るように貫通した。銃声がないおかげでいきなりたたらを踏んだようにしか見えない。それでも紅茶をきちんと手渡したのはさすがというべきか。

「あー痛つてエ……はい、コーヒーだア。無糖ミルクなしで良かったな」

「あつたまきた……僕はカフェオレを買つて来いつて言つたよな？ まつたく真逆のモノが出てきてんじやねえか！」

怒りと同時に心臓に黒塗りのボウイ・ナイフを突き刺すことも忘れない。

銃弾をぶち込まれようが、心臓を刺されようがすべては不死身故に問題なしだ。体のいいサンド・バックである。

「俺様のほうがさア……もう頭にくるぜ。俺様ならナニやつてもいいとか思つてだろオ？」

「え、違うんですか？」

スコープからフレデリカは一切目を離さずに聞き返す。

「ちよつと俺様に対して辛辣すぎだろオ!? 容赦の一つもねえのかよオ！」

「あると思つているのかい？」

「悲しいなア……」

わざとらしく『よよよ』と悲しむふりをしながら、サンドイッチにかじりつく。

フレデリカは時折スコープから目を離し、腹と喉の渴きをいやしていく。ヘンリエッタは双眼鏡から一切手を離さない。

サイファーは監視するのをやめ、ただその時を待ち続ける。

「いました!」

——戦いの始まりとなる、その瞬間を。

「どこにいる?」

「ビッグ・ベンの時計塔、東側に武装した機関兵士が四体です」

「あーフィツシャー、聞こえるか? 警備の中に機関兵士はいなかった、ということではないんだな?」

『ああ、こちらにいるのは全て生身の人間だ。 〃機関兵士など一体もない〃』

「よし——フレデリカ、いけるか?」

フレデリカは引き金に指をかける。狙撃用にカスタムしたことで引き金の軽さはフェザー・タッチだ。少しでも力を込めれば、特製の狙撃用弾丸が発射される。

距離にしておよそ九〇〇メートル以上。スコープの零点補正ゼロポイントは済んでいるが、それでもこれだけの距離に及ぶ長距離狙撃は難易度が高い。訓練を積んだ軍人であっても、もう少し距離を詰めた場所にポジションするはずだ。

だがフレデリカは黄金の双眸に決意をみなぎらせた。意志の光が瞳に満ちる。空色

のリボンでハーフ・アップに結われた髪を揺らす風さえ、きつと意に介してはいないはずだ。

「いけます」

「——やれ」

気の抜けたわずかに空気の漏れるような音——偏った厚みしか確保できなかった分、長さをとった消音器によって押し殺された銃声だ。着弾も確認せず、そのままコツキング・ハンドルを引く。さらに第二弾を撃つ。続けて排莖からの第三弾。三回目のコツキング・ハンドル操作による排莖を終えた瞬間には、スコープ越しに脳天を撃ち抜かれる機関兵士の様子が見えている。

「やりました」

「すごいな、カウントするみたいに一瞬で三人が吹っ飛んだぞ」

「褒めるのは後だ。そろそろ動かないと、連中が虫みたいにわらわらと出てくるぞ」

サイファーの左手には納刀したままの野太刀がある。いつでも抜刀を放てる構えだ。

あろうことか建物の屋上から平気で飛び降りた。地上に着地した瞬間に水柱でも立つように、砕けた石畳が枚お上がる。蜘蛛の巣めいた亀裂が直径三メートル近くにわたって刻まれている。着地の衝撃が筆舌に尽くしがたいものだ、如実に物語っていた。

それでも何ら変わった様子を見せず、サイファーは地上に駐車しておいたアーカム下層の重工業会社『アインヘリアル』社の大型蒸気自動二輪車『スレイプニル』にまたがった。デリンジャーに言つて運ばせたのだ。安全性の面から実用化されなかつたが、秩序なき命知らず共が集うアーカムでは蒸気自動二輪車はそれなりの需要がある。野太刀は背負い紐を使つて背負い太刀の状態だ。柄はサイファーの左肩にある。

「さて、お楽しみ時間だな」

アクセルを思いきり捻り込む。蒸気機関の生んだ動力はシャフトによつて後輪に伝えられる。一時的に後輪は空転したが、そのままつがなくなき一氣に加速する。

道行く蒸気自動四輪車や馬車をすいすい追い抜いていき、ビッグ・ベンへの道をひたすら進む。

「明らかに警備じゃないのがあるな」

道行く人々の中には構えた拳銃を隠そうともしない男たちが見え隠れしている。

金メッキされたアーカム45を抜いた。七・五インチもの長銃身にロング・スライドと二輪車上で扱うには、いささか長すぎるが二メートルを超すサイファーの巨軀ではびつたりに見える。

男たちは一斉に道路上に躍り出た。

四五口径から二二口径までのバラエティに富む弾丸がサイファーに向かって発射さ

れる。

それをスレイプニルを巧みに蛇行させて射線から逃れると、一気に前輪を支点に急反転する。

「何人が眠ってもらうぜ」

過装薬オーバーロードの45ALP弾が凄まじい連射で放たれる。テイルト・バレル式ショート・リコイル方式の限界に迫るほどの連射だが、勢いのすさまじさに反して外した弾は案外少ない。

首や眉間に弾丸を食らって鮮血をまき散らしながら男たちは次々と果てる。

「それにしても、どこからこれだけの戦闘員を調達してくるのかね？ ま、僕の知るところじゃないが」

そのとき震える手でサイファーに狙いをつけようとした男がいた。首に一発食らっており、明らかに致命傷だがサイファーは見向きもしない。

脳天が吹っ飛んだ。男は引き金を引くことが叶わなかったのである。

「ナイスだよ、フレデリカ」

見えるようにサムズ・アップしながらスレイプニルを走らせる。きつとスコップ越しに背中を見せて親指を立てるサイファーの姿がフレデリカの視界に映っているはずだ。

二輪車にしては異様に太いタイヤのおかげで安定感は凄まじいものがある。曲がる

時は車体を傾けるのに苦勞するが、その分直線ではどれだけ飛ばしてもふらつくことはない。コーナリングの時は恵まれた臂力と怪我知らずなワケありの五体で無理矢理曲がるだけだ。

「おつ、これまた大挙してやってきたな」

後ろを振り返ると黒影が道路を疾走する。おそらくは片手半剣を携えた機関兵士であろう。人と鋼の機関の合わせものは大型の蒸気四輪車に迫るだけの速度を叩き出す。人型にしては数百キロと重量があるが、それに反して動力機関の馬力が膨大であることからできることだ。

おそらく切り詰めた半自動式小銃か短機関銃でも持っているのか、背後から銃弾が飛んでくる。そのうち二、三発は背中に命中するが、この程度であれば気にすることもない。羽織っているロング・コートから伝わってきた衝撃の強さから、使われている銃弾は強装弾の三八口径だろう。超音速弾だがこの程度でどうこうなるようなものではない。コートも、自分も。

だが先ほどのように前輪を支点にしてのターンが通用する相手ではない。その瞬間に天高く跳躍して、一瞬のうちに視界の外へと消えてしまう。牽制として後ろ手にアーカム45を構えて撃ってるが、命中している様子は感じられない。

「ジリ貧かねえ」

サイファーはあろうことかハンドルから両手を離す。時速は百キロ超だから自殺行為としか思えないが、蒸気二輪の挙動はいたつて落ち着いている。

そのまま背負い紐を思いきり引き、肩から競り出た野太刀の柄を右手で握り込む。そのまま腕と肩の動きを使つて、五尺四寸三分もの——およそ一六八・九センチ——緩やかに弧を描く実戦性と芸術性の見事な和を体现する刃が鞘から現れた。

路面にあることか野太刀の刃を叩き付ける。普通なら刃毀れどころか刀身が折れてもおかしくはない。だが刃の美しさも鋭さも一切損なわれることなく、叩き付けた反動でサイファーと蒸気二輪は宙へ浮かび上がる。また手放しの状態になり、空いた左手で規格外の巨大リボルバー『Howler In The Moon』を撃つ。輪胴に入っているのは空砲だ。

激烈な反動によつて宙を飛んだサイファーと蒸気二輪車は前後を反転させる。

着地に合わせてアクセル・スロットルを捻り込んだ。

常識外れの反転を目の当たりにして、機関兵士たちの間に動揺が駆け抜ける。

その隙をサイファーは見逃さない。

巨大な車体が間を駆け抜けたときには、ほとんどの機関兵士が上半身と下半身を泣き別れさせる。

「これで終わりつとー！」

最後の一人を通り過ぎる前に後輪を支点にして反転する。前輪は機関兵士の頭上まで持ち上がった。そのまま重量を生かしてのしかかれば、鋼鉄の軋みと共に頸椎が粉碎される。頑強な鋼鉄の骨格も五〇〇キロ以上の重量に押し掛かれれば無事ではない。

車体の下でもがき苦しむ機関兵士の延髄を一閃し、苦悶から解放してやる。

「時間食ったな……急ぐか」

アクセル・スロットルを思いきり捻れば、壊れそうなほどの唸りを動力機関が上げる。ビッグ・ベンの時計塔へと向けてスレイプニルは疾走していく。

◆◆◆◆◆

「油断大敵ですよ」

ボルト・ハンドルを引いて薬室から薬莖を弾き飛ばした。

スコープから見えるサイファーは親指を立てていた。なかなかのナイス・アシストであつたらしい。ちよつとだけけむず痒いような、そんな気持ちになる。彼に褒められると、胸中で何かが跳ねるような、そんな感覚を覚える。

マンリツヒャーのボルト・ハンドルを思いきり引き、そこから新たな弾丸を込めていく。

暗躍する構成員を的確に仕留めるために。

同時にこつちに攻め込まれた場合に、と用意しておいた自動火器を手繰り寄せる。M V社製自動小銃M4エクスターミネーターだ。アーカム統治局保安課に無理を言っただけで持ったこさせたのだ。サイファアの力はこういうところにもまで及ぶ。今さらだが背筋が凍りそうだ。

しかし全長九五〇ミリ、重量六キロに及ぶ先進的凶器の重みはありがたい。三〇口径のライフル弾とポンプ・アクション散弾銃の合わせ技は、イギリス本土の銃火器では決して為しえないものだ。生死があまりにも近すぎるアーカムだからこそ、銃ひとつで二種類の弾種を撃ちわけられるM4のような銃火器の需要がある。その大手が中層から下を客層とするM V社である。

「フレデリカ、こつち何人か向かってきてる」

「俺様が行こう。どのみち、ビッグ・ベンには行くつもりなんでなア。可愛い女の子同士、仲良くやってくれやア」

ジョンもやはりサイファアと同じように飛び降りた。

おそらく敵が乗っているであろうガーニーの天井に降り立った。衝撃で異様なほど陥没したルーフに、ためらうことなく二刀を突き立てた。運転手を失ったガーニーは滑り出し、四回転も横転した。ジョンも巻き込まれたが、何もなかったように起き上がる。最初は右足を引きずっていたが、すぐに普通の歩き方に戻る。常軌を逸したレベルの

再生能力は足の骨折程度など一分とかからずに治してしまうのだろう。

横転した車体から這い出して来る構成員をフレデリカは撃ち抜いていく。余計な苦しみを味わうことがないよう、すべて一発で脳幹を撃ち抜いて即死させている。せめてもの慈悲だ。狙撃の腕が確かでなければ、この一種の優しさともいえるべき射撃は為しえない。強くなければ、優しさを与えることはできないということか。

ジョンはあろうことか横転したガーニーを難なく起こすと、そのまま停止した動力機関に火を入れた。

気管支炎めいた駆動音を立ててガーニーは走り去っていく……マフラーから吐き出されるのは黒煙であったが。

「いつの間にか侵入されたみたいだ。たくさん登ってくる」

「ヘンリエッタ、銃は持ってますか」

いつもはスローイング・ダガーを火器代わりに使うが、今はブローニングM1910を持っていた。ナイフを大量に持ち歩くよりは、三八口径を七発収めた弾倉をたくさん持つておくほうが効率的だ。彼女の性格からしてナイフも同じ数だけ持つていそうだが。

「隣のビルに移りましょう」

「いいね、それ。私が先行しよう」

今は誰も使っていない廃ビルの窓ガラスを発砲して割る。

ヘンリエッタは身体のかなやかさを十全に生かして飛んだ。距離にして三メートル足らず。

フレデリカも二種類の小銃を携えて飛んだ。重力を感じさせない飛び方であった。

ちょうどフレデリカが着地した時に、短機関銃と散弾銃を携えた黒服の構成員がやってきた。トンプソン短機関銃とウインチェスターM1912であった。

フレデリカとヘンリエッタは先手を打った。

M4エクスターミネイターとM1910が次々と銃火を放つ。

一発も撃たぬ間に男たちは銃弾に食い破られた。鮮血は煙のごとく噴き、高層階の風は生臭い匂いに染まる。

「このまま一階まで下りましょう」

「その途中でもう一度別のビルに飛び移らないといけないかも。また下から大挙して押し寄せてくるよ」

バン、とM4エクスターミネイターの機関部を叩く。

十代の少女そのものと言つていいあどけなさを色濃く残しながらも、まぎれもない女の花香を漂わせるほど美しい顔立ち。神がその美貌を作り上げるまで十日も腐心したであろうかんばんせに、不釣り合いなほど殺気を漂わせる。

長年もの間、戦慄を極める戦場で暮らしてきた兵士にも劣らないものを。

——まったく、いつの間にもここまで育っちゃったんだか。

——これは大変そうだな、色々。

親友の憂いにフレデリカは気づくわけがなかった。ごくごく当たり前であるかのようには、さらりと言う。

「出会ったそばから、片づけていきましよう」

「……賛成だ」

ブローニングM1910自動拳銃の銃把を握り込む。反対の手には三本のスローイング・ダガーを握りしめ。

二人そろって階段を駆け下りていく。だが踊り場では立ち止まって敵影を確認しているから、足の速さに反してさほど階を降りてはいない。手すりの代わりにモルタルで作って塗装しただけの壁のようなものがあるため、屈んで慎重に顔を出せばすぐ見つかる事態にはならないだろう。

ようやく三階に辿り着くころ、敵の姿を確認すべく顔を出そうとした時だった。

フレデリカの眼前を一発の銃弾が通り過ぎる。

「大丈夫かい!？」

「あ、危なかったあ……」

報復と言わんばかりにM4エクスターミネーターの銃把を兼ねたサム・ホール・ストックから、ヒート・ガードに備え付けた十二ケージ口径ポンプ・アクション式散弾銃の引き金に指をかける。引き金の重さで安全装置の代わりをしているという唯一の欠点を散弾銃ユニットは有しているが、銃床をしっかりと肩付けし、左手で銃をしっかりと保持すれば八・五キロものトリガー・プルは引き切れないわけではない。

散弾でコルトM1911二挺拳銃の黒服が吹っ飛んだ。

小銃に取り付ける関係上、銃身は必然的に短いから散弾はよくばらせる。

後ろで控えていた男たちも鉛の雨霰を食らって絶叫する。

怯んだ瞬間をヘンリエッタが発砲して仕留めた。

さらにスローイング・ダガーも投擲した。深々と刺さった瞬間に男たちの身体は炎上した。刃の峰に刻まれていた火炎の意を含むルーンの効力である。煤けた黒炭になるまで一分もかからなかった。

「急ぎましょう」

「ああ、新手が来る前にね」

ようやく地上階に出るとキャンバス・カバーで覆われた何かがあった。ヘンリエッタは迷うことなく風で飛ばぬように固定する麻紐をほどき、カバーを剥ぎ取る。

中型の蒸気二輪車が姿を現した。アインヘリアル社製中型蒸気四輪車『ブリュンヒル

ド』だ。スレイプニルのように巨大なエンジンは積んでいないが、流線型の軽量車体に十分な馬力の蒸気機関を搭載している。すべてにおいてバランスが取れたスペックを誇るせいで、下層に近くなるにつれてブリュンヒルドが通りを疾走している場面に出くわす頻度が高くなる。そんな逸話まである。

ヘンリエッタは迷うことなくシートに跨った。

「ほら、後ろに乗って」

「う、運転できるんですか？」

「二輪だけ、多少はね？ ささ、早く早く」

タンDEMにはいささか小さい座席に身長に跨った。スカートをうまくまとめないと、走行の風圧で捲れ上がってしまう。その間に頭にヘルメットを被せられた。

四苦八苦の末に何とか抑え込んだと思う。走り出してみないとわからないが。

「大丈夫ですよ、走って」

「じゃあ飛ばすよ」

前輪を持ち上げながらブリュンヒルドはカッ飛んだ。

バランスのとれた走行性能を有する車体は風を切った。顔に叩き付ける風圧が強いが、そういうわけか両目は普通に開けられる。ヘンリエッタは風防用のゴーグルと薄い合金のヘルメットを身に付けているというのに。

この眼はすでに超常のものとな化しているからか。

後ろからガーニーのエンジン音が追ってきた。箱乗りするように短機関銃を構えた男たちが、こちらに複数の銃口を向けている。一台につき三人——後部座席左右の窓に一人ずつ、サン・ルーフから一人——の編成が四台も追ってくるのだ。

しかもサン・ルーフに据え付けられているのはベルト給弾式の機関銃だ。アレで狙われればハチの巢になるしかない。

「ヘンリエッター！ なるべくジグザグに走ってください！」

「合点だよ！」

ブリュンヒルドはジグザグな軌道を描き始めた。

振り落とされないように右手で掴まりながら、左手でサム・ホール・ストックを肩付けして引き金を引く。

片手でフル・サイズのライフル弾を撃つのは少々無謀と言えた。短機関銃の感覚で撃つたのがいけなかったのか、暴れる銃口によって弾丸は思い切りバラけた。ガーニーのフロント・ガラスに一発当たっただけだ。

「これはいらぬかな」

迷うことなくM4エクスターミネーターは投げ捨てた。

愛用の二挺拳銃の内、マウザーC96をベースにした『All In One』を構

えた。ブリュンヒルドの後ろには二挺用の円筒弾倉ドラムマガジンが挿入孔に叩き込まれるのを待っているかのように、分厚い革のパウチに入っているのだ。『All In One』用の円筒弾倉を掴むと、もともと装填されていた箱型弾倉はコートの内側のポーチに仕舞い、大火力の円筒弾倉を挿入孔に叩き込んだ。

M4エクスターミネーターを撃つた時と同じような姿勢で発砲した。

放熱用ジャケットと分厚いの銃身のおかげか銃口は割とおとなしい。フレデリカ自身は扱いに習熟しているのも理由の一つであろう。

弾丸はガーニーのタイヤを食い裂いた。黒いゴム製のタイヤは小気味よい音を立てて爆ぜ、大型の車体は速度とエンジンの馬力に負けて横転した。

男たちが展開した銃火の嵐は凄まじい勢いだ。一発も命中していないのはヘンリエッタの運転技術が高い証拠か。大きく蛇行したかと思えば、小刻みに右へ左へ車体が流れる。

今度は円筒弾倉の中身を撃ち切る勢いで引き金を引いた。

M4エクスターミネーターの連射でフロント・ガラスをやられたガーニーが餌食となる。ひびが入っていたガラスは完全に粉碎され、運転手の頭をした半分だけ残して粉碎するだけにとどまらず。座席すら撃ち抜いて箱乗りで短機関銃を撃っていた男たちすら手にかけた。

運転手が生命すら放棄したせいでガーニーは揺れ、さらに弾丸まで食らってせいで男二人は呆気なく落ちた。

後続のガーニーはブレーキなど一切かけず、そのまま無慈悲に轢き潰していく。

「うわっ……」

思わず嫌悪の声が漏れた。

まるで練り物を絞るように中身が口から出てきたのだから、当然と言えば当然だ。ヘンリエッタもバック・ミラー越しにその光景を見ているはずだ。ゴーグルで隠れているせいでわかりづらいが、眉間にしわを寄せているのが何よりの証拠だ。

その時間も奪うように残る二台がスピードを上げた。間にブリュンヒルドを挟むような形で。

挟み撃ちにしようという魂胆らしい。押しつぶすも、ハチの巣にするのも裁量次第だ。

猛スピードで動く二輪車にタンDEMしているため、片手はヘンリエッタの腰に掴まらねばならない。両手が空いていれば、とつくに二挺拳銃で二台同時に車輪をバーストさせている。

だが素早くガーニーを無力化する手立てはない。

敵はとつくに短機関銃の銃口をこちらに向け、すでに引き金に指をかけている。トン

プソン短機関銃だ。しっかりと肩付けできる機関銃だから、フル・オートで撃つても外すことはあまりないだろう。

「困ったな……」

おそらく片方のガーニーのタイヤを撃ち抜いている間に銃弾の嵐によつてハチの巢にされる。

動き続ける中の膠着状態、という奇妙なシチュエーション。そろそろビッグ・ベンの時計塔が近くなつてきた時、状況を打ち破る光明となる存在が前方一〇〇メートルのあたり立っていた。

そいつは銃を抜いた。コルトS A Aだが銃身が恐ろしく長い。軽く見積もっても十インチ以上は優にある。

それを仰ぎ撃ちの構えでガーニーに向けた。ちょうど二人が乗るブリュンヒルドの左側にいるガーニーに狙いをつけている。

彼とフレデリカの視線が交錯した。

フレデリカは右側のガーニーに狙いをつける。

二人の発砲は完全に同時であった。フレデリカは『A l l I n O n e』をフル・オートにしたまま、銃本体を横に倒して反動で薙ぎ払うように撃つ。ガーニーの左の前輪は完全に破壊された。鋼鉄のホイールが？き出しになったことで、石畳の地面によ

る激しい摩擦で火花を上げ、終いには横転した。

男のS A Aも仰ぎ撃ちで左右の前輪をバーストさせた。均等に三発ずつ撃ち込んだからか、一瞬でホイールが剥き出しになったことで強烈な減速がかかる。スピードが乗っていたこともあつて、その勢いそのまま後輪が持ち上がってルーフから落ちる形で回転した。

「念のために」

フレデリカは動力となる蒸気機関のボイラーへの燃料タンクに一発撃ち込んだ。もとから衝撃で多少の燃料漏れがあつたのか、弾丸が炸裂した瞬間に爆発炎上した。誰も生き残ることはないだろう。

S A Aの射手の前でブリュンヒルドを一度停めた。

彼はよく知る人物であつた。並みの犯罪者など一瞬で疎ませるほどの強面だが、その内には苛烈なまでの正義を秘めた強者。

「ワイアットさん」

「いい腕をしているな、フレデリカ嬢」

「この警備にあたっているのかい？」

「その通り。途中で要人たちの避難に変わってしまったが。いきなり機関兵士がやってきたものだから、お披露目は中止になったよ。アーカムから仲間を呼んでおいて正解

だったな」

顎でしゃくつた先には立ち上がったまま動かぬメルカバの姿、そして銃撃戦を繰り広げる多数の人間が見える。

逆関節の脚で先ほどまで動いていたのだろうか。アレほど巨大なものが動くとは到底信じられないが、髑髏を模した頭部が開いたままだ。あそこが操縦席だとしたら、操縦手はもう逃げたのだろう。だとすると、先ほどまで動いていたのだろう。歩兵などたやすく踏みつぶす巨体が戦場を闊歩する様など、その驚愕は計り知れないはずだ。さらにフューリアスまで見せつけられては——大英帝国に挑もうなどという無謀など根底から叩き潰されるはずだ。

「サイファーはもうビッグ・ベンに行つちまつてる。遅れて壊れかけのガーニーも続いたが……」

「きつとジョン・ドウだ」

「な……」

「安心してください。もう敵ではありませんから」

「味方かどうかは怪しいけどね。裏切つた雇い主への意趣返しのためなんだろうけど」

「ひとまず気をつけてくれ。それと剣魔ダイオニシアスと来賓のエドワードの二人がいない。見かけたら知らせてくれ」

ワイアットはそれだけ伝えるとガーニーに乗り込んで行ってしまった。

ブリュンヒルドは急加速してビッグ・ベンの時計塔へとひた走る。

おそらく整備員用の通用口であろう扉が丸ごと吹っ飛んでいる。中に入れば刻まれた構成員の死体がいくつも転がっている。ほとんどが機関兵士なので、鮮血に混じって鋼鉄とオイルの臭いが漂っている。もしかするとジョンも合流して二人で暴れまわったかもしれない。

すん、とフレデリカは何かを嗅ぎ取った。

目よりも先に鼻が反応するとは珍しいことだ。同時に胸騒ぎがする。居ても立っても居られず、フレデリカは駆け出した。

二階は大きく開けているが、時計を駆動させるための歯車はひっきりなしに回転している。その中で六メートル四方の空間だけが闘技場コロシアムのように開けている。

いや、実際に闘技場なのだ。

すでに二人の男が刃を交えているのだから。両者ともに灰色の外套に身を包んでいるが、身体の大きさは違う。片方は二メートルを超す巨躯でダスター・コートのようなデザインだ。さらに同じ色のテンガロン・ハットに白いシャップスマでつけているのだから最早ガンマンだ。右手に握る野太刀がかるうじて剣士であると主張している。サイファー・アンダーソンその人であった。

対するのは長衣の軍服姿の老人だ。だが、その身体は苛烈なまで訓練で鍛えられ、速度を損なわぬために膨れ上がるのではなく引き絞られた刃のごとき肉体であった。鋼色の双眸と白髪交じりの頭、発せられる鬼気は今まで対峙した人間・化物でも並ぶものがないとフレデリカは感じた。ダイオニシアス・ガラルドが両手で正眼に構えるのは巨大な大剣であった。片刃の刀身の長さは一七〇センチに迫るだろうが、目を引くのは柄から刀身の半ほどにまで達する圧搾蒸気噴射機構だ。

重なる高温の蒸気を噴射したせいか刀身すら白煙を上げている有様であった。

だがそんなことはフレデリカの眼中にない。注目するのは、ただ一点。

黄金の双眸を見開いて視線を向けるのは——サイファアの足元だ。

——常人であれば致死量の血だまりが広がっている。

右肩から左脇腹にかけて一閃された傷から、いまま鮮血が滴り落ちている。コートの下のシャツはすでに真っ赤に染まっている。相当消耗しているのか吐く息は荒く、今にも片膝を着いて崩れかねない。

「サイファア、さん……」

理解の及ばぬ状況に、絶望に、叫びださないのが不思議だった。

S l a s h ～貴公子の薄氷は溶けかけて～

時は少し遡る。

サイファーはアクセル・スロットルを思いきり捻ってスレイプニルを加速させる。

途中で会ったワイアットにフレデリカとヘンリエッタの手助けを、見かけたらやつてほしいと言いつつ含めておいて。ジョンもおそらくは自分の後を着いてくるだろうが、アレは自分で何とかできるだけの力がある。

「正面から堂々と行くのも悪くなさそうだけど……」

そう言いつつもスレイプニルとサイファーは時計塔の裏口を探し求めている。

周辺をぐるぐると猛スピードで回ること、およそ三分とかからない。見張りもない裏口の扉に向けて、大型蒸気圧式二輪車もろとも突っ込んだ。

前輪が一体の機関兵士の顔を潰したのを確認、即座に基礎の鉄筋に掴まった。二メートルを超す巨躯のおかげで、諸手を上げて少し腰を浮かせれば容易いことだった。

操縦手を失った二輪車は壁に激突するまで止まらなかつた。止まってへしやげた鉄くずは二輪車だけの分にとどまらず、肉と鋼の合わせ物が混じっている。

背負い太刀にしていた野太刀を左手で握る。抜刀術の構えだ。

ぶら下がった体勢から地面に下りたときには、すでに十体以上の機関兵士に取り囲まれている。

「こんなにも大勢そろってご苦労さん。ま、挨拶もそこそこに、だ」

サイファーは野太刀を抜き放った。刃渡り五尺四寸三分もの長大な刃も、彼の巨軀を前にしては少々長めな程度としか思えない。

正眼に構えた刃が機関兵士たちを竦ませる。

とうに生身を捨て、銃弾すら物ともしなくなつた彼らは恐怖を覚えているのだ。次の瞬間には自分の身体が真つ二つにきれいに割られている様を幻視させられる。全員が一步だけ後退る。

「どうした？ 来ないのか？」

挑発の言葉はウインクとともに放たれた。

一人が無謀にも挑みに行く。

その手に携える片手半剣バスタード・ソードの切っ先が触れるか触れないか。気づかぬうちに一分分退いていたサイファーの一刀は、すでに振り抜かれていた。刃の描いた軌道はちょうど機関兵士の腰を一閃している。

機関兵士の身体は一瞬でずれた。血とオイルの混合液をまき散らしながら、何が起こつたのかも理解できぬまま崩れ落ちる。神速の一閃がそれを可能としたのだ。

二メートルを超すサイファアの巨軀は一気に加速する。

次の獲物に狙いを定め、腰だめに構えたまま突き進む。

突撃を阻まんと機関兵士たちは一斉に散弾銃を発砲した。腰の蒸気圧タンクから供給される圧力で半自動で撃てる。圧倒的な量の弾幕は回避行動を強制させる。それは相手が常人であるという前提であればの話だが。

野太刀の刃が漆黒に染まる。おそらくはサイファアの鬼気に反応した結果であろう。

大嵐のごとき激烈な鬼気と共に、野太刀は刃先も霞まんばかりに振り抜かれて濃密な刃圏を作り出す。散弾のほとんどが斬り落とされた。わずかに残った散弾も剣風によつて殺傷能力を失う。もつともサイファアのロング・コートを貫くにはあまりにも無力だが。

「歯ごたえないなあ」

目の前の一帯を難なく斬り捨てると、血とオイルの混合物を振り払う。

人食い鮫を思わせる凶悪な笑みを浮かべ、野太刀を正眼に構えなおす。

「そんなんじゃ虫も殺せねえぞ?」

首を少しかしげてウインクまですれば、挑発としてはこの上ないものとなる。

一斉に片手半剣を携えて躍りかかる。表情など作ることができないせい、瞳には憤怒の炎を赤々と燃やす。関節を構成する生身と機械ピストンの合わせ技を最大限に発

揮し、常識外れの速度を持った戦闘機動を可能とするのだ。

「そんなんじや僕には届かないんだよ」

先頭を切っていた一人を難なく斬り捨てた。制御を失った体は壁に激突、衝撃でただの染みに成り果てる。

返す刀を踏み込みと同時に振るえば二人纏めて倒れ込む。普通の刃渡りでは為しえない、野太刀であるからこそできる一閃であった。

背後より迫ってきた片手半剣による一突きを身を旋回させて回避。灰色のロング・コートが翻り、奇襲を仕損じた機関兵士の視界を潰す。そこを逃さずにサイファーは回し蹴りを顔面に叩き込む。割れるような音は眼球代わりの光学機器が砕けた音か。

瞬く間に、わずか数度の打ち合いで四人が戦闘不能に追いやられた。一人は存命だが視界を潰されて、修理されない限りは戦えないだろう。

「な、僕には届かないと言ったろう？」

残った機関兵士が全員後退る。

絶対的な差を認識させられて。

自分たちに残された道は二つ。おとなしく食われるだけか、せめて一太刀でもいれることか。その逡巡を内蔵された解析機関が感知、脳の未使用領域に書き込まれた戦闘機動プログラムを開放させる。

機関兵士の眼から意志の光は失われた。

ただ目の前の目標を徹底的に排除する、それだけの戦闘機械になり下がったのだ。

故にサイファーは淡々と相手をする。相手の虚を突き、連携する、そんな理想的な戦い方を忠実に実行しているのだ。正道をド直球にいつているのだから、経験溢れる優れた戦士であれば余裕で裏をかくことができるのだ。独立戦争からの戦士たるサイファーであれば容易いことだ。

打ち合い一つないまま機関兵士は切り捨てられていく。

わずか数分とかからぬうちに全滅してしまった。

「まったく……機械相手はこれだから嫌なんだ。いくら高度に組まれた戦闘機動も、慣れていくうちにパターンが見えてくる。歯ごたえないんだよなあ」

鏗鳴り一つ、小気味よく立てて納刀した。

派手に殴り込んでいるのだから、ゆっくり納刀してやる必要はない。

ずかずかと上階に踏み込んだ。

柱に整備用の機材で込み入っていた一階と違って、二階は異様なほど開けている。

白熱電球のうすぼんやりとした照明だけが光源だった。室内でガス灯は使えないから、当たり前だが。

「——ッ！」

背後からの気配に迎撃の一閃を見舞う。

激しく火花が散った。刃と刃のぶつかり合い。

その相手はひどく巨大な大剣であった。おそらく二〇メートルを超える鯨をも解体できそうな、分厚い対人戦を想定としていない巨大な剣だ。

その担い手は——驚くことに老人だ。

白髪の間違った頭髪は後ろへと流して撫で付け、険しい眼光を放つ鋼色の瞳と目が合った。灰色の軍服めいた長衣が翻る。ダイオニシアス・ガラルド——劍魔とまで称された大英帝国屈指の老剣士であった。

「やっぱり、あの綺麗すぎる坊主が絡んでいたというわけか」

「そうだ」

「足止めということかい？」

「そうだ——同時に私自身の望みを果たすため」

「そんな年で叶えたいことがあるというのかい？」

おそらくはすでに六〇を超えているだろう。もう引退を考えてもいい頃合いだ。みつともなく前線にいても、部隊の足を引っ張るだけ。静かに、ゆっくりと人生の終わりを迎えるのだろう。

それでも、なお老人の鋼の瞳には強い意志の炎が燃えている。

だからサイファーは察した。彼の求めるものを。

「生粋の戦士ゆえに——戦いの中で死にたいということか」

「老いさらばえて、仲間も、家族も忘れ去って、呆けて死んでいくなど御免だ——私を斬れ。人生最後の剣をかけて、お前と戦おう。勝とうが、負けようが、私の望みは果たされる。だがせめて、願い叶うなら——格上のものに斬られたい」

「戦闘狂だよ、お前。狂ってるぜ」

「どの口が言う」

「んじゃ……もう、言葉はいらないか」

体の急速な脱力でサイファーの巨軀は、一瞬で地面に迫ろうとする。その速さを踏み込みで縮地へと変える。

ダイオニシアスとの距離はおよそ三メートルほど。自分の得物のリーチを考えれば、それほど踏み込む必要はない。首筋に向けての一閃を放つ。ほんの小手調べだ。

振り上げた大剣で弾かれた。

老いた身体とは裏腹に、その膂力は凄まじいほど強い。

思わずたたらを踏んだ。全力を出し切って最期としたい。その思いが先ほどの一撃に込められている。

応えねばならぬ。

この老剣士の願いに。

「本気で行くぜ？」

「そうだ、それでいい」

互いに得物を正眼に構える。

剣を持ったのであれば、ほとんどの者が最初にやる構えだ。基本中の基本。中段だからこそ、取れる選択肢は幅広い。突くも、上段からぶつた切るのも、下段からすくい上げるように真つ二つにするのも、どれでもとれる。

ほとんど同時に動いた。

刃と刃がぶつかり合つて、火花と衝撃波を生んだ。双方のコートの裾が舞い上がつてなびく。

「頑丈だな、その刀。普通の日本刀であれば、刃を毀こぼすどころか折れても不思議ではない」

「ワケありだな——お前さんの剣はイリジアス鋼製かい？」

「この日のために用意したのだ」

「僕を斬る気満々じゃねえか」

「この剣に斬られるわけにはいかなかった。」

ほとんどの現代兵器を防ぐ自負がある自分の身体を、ただの人間が傷つけるために必

要な唯一のもの。劍魔と呼ばれた老人が長年にわたる実戦経験に基づき、驚異的な大劍を振り回す。

サイファアのこめかみに冷や汗が一滴浮いて、そのまま頬まで流れていく。

——アレで斬られたら、ただじゃ済まないだろうな。

——素人が百人集まって、イリジアス鋼製のナイフで武装しているほうが良心的だよ。

武に通じているからこそ、老人の脅威は正しく推測できる。極東で剣に目覚め、独立戦争を駆け抜け、世界中をさまよった。様々な強者とも出会った。この老人はその中でも五本の指に入る。そう断言できる。

それでも野太刀を握る手は適度に脱力して、普段のサイファアのように不敵に構えている。

——行くぜ。

瞬時に一歩引いてから、一瞬で平突きของ構えに移行する。

そこから全身のバネを最大限に使っての加速、放たれるのは最速の突き。

人間の神経反応速度など余裕で上回る。切っ先が放つ閃きを見たときには、すでに刃は心臓を貫くのみだから。

だから何の手ごたえも返ってこないのを感じた瞬間、もう一度サイファアは退いた。

彼のいた位置を狙った兜割は空を切ったのを見て、久しぶりの純粋な剣での殺し合いに昂つていく。

「今のを避けたか」

「僕も同じセリフを言いたいよ」

老人の剣はただの剣ではない。ダイオニシアス・ガラルドを剣魔にまで押し上げた超常の一振りだ。

——エンジン・キャリバー
機関大剣。

原理は簡単。高圧の圧搾蒸気の噴射機構を剣に取り付け、噴射の圧力で剣速を爆発的に引き上げるといふもの。

だが生まれたのは剣の皮を被った何か。常人の手では構えることもできず、身体に鋼鉄の機関を組み込んだものしか扱えない代物と化した。

しかし、何事にも例外は存在した。ダイオニシアス・ガラルドは生身でこれを扱ったのだ。

この一振りで二〇年もの間、数多の戦場を勝ち抜いてきた。剣魔の称号を得るのも無理はなかった。

「突きが来たからと言って蒸気噴射で回避し、そのまま上空へと飛んで兜割。噴射した蒸気は目くらましに使う。すばらしいコンビネーションだ。拍手喝采を送りたいね」

「これを凌ぎ切った者は、お前が初めてだ」

「そう買いかぶつてくれるなよ。結構、ギリギリのそこだったんだ」

サイファーは野太刀を上段に構える。もっとも攻撃的な構えをとったのは、苛烈な攻撃を叩き込むためか、はたまたプラフか。

ダイオニシアスは自分が最も信頼する構えをとる。流派を学んで身に付けたわけではない。戦場を生き抜く中で、この機関大剣の性能を最も活かす構えを。帯刀でもするように、柄は順手で握りしめ、右腰のほうに切っ先を上げるように持つ構えだ。

両者の視線は交錯した。

サイファーが動いた。

大上段からの一閃。気づかぬうちに奇声ともいえる裂帛の気合を放っていた。薩摩示現流を源流とする雲耀の一閃であった。

稲光に例えられる速さは、サイファーが振るえば比喩を脱する。白刃が閃いたのを見たときには、すでに標的の身体は真つ二つなのだから。

劍魔と称された老人もそうなるのか。

その結果はサイファーの巨軀がたたらを踏んだことで覆される。漂う蒸気の名残がせめて覆い隠そうとするように見えた。

右肩から左脇腹にかけて、サイファーは一閃された。

袈裟掛けに両断されなかつたのは、攻撃を中断して身を躲した僅かな差であつた。

「間一髪だつたな」

ダイオニシアスの言葉すら聞く余裕がない。

傷はかなりの深さだ。いまも血が湧き出るように溢れ、流れ出ている。口の中は鉄の味と臭いに満たされた。傷口からは今もどす黒いモヤのようなものが漂っている。イリジアス鋼製の一撃は再生機能に一時的なショックまで与え、機能不全に追い込んだのだ。

明滅する視界の中で倒れないように意識を保つ。それがサイファーにできるささやかな抵抗だつた。

ゆっくりと掲げられるように上段の構えをとる機関大剣を、荒い息を吐きながら見ることしかできない。

——くそつ。

——これ以上斬られたらヤバいな。

——なんで、こうも死にたくないと思つちまうんだらうな。

——もう生き過ぎてんだけど、さ。

二発の銃声が響き渡る。

機関大剣の峰に命中し、老人は思わすのけ反つた。

「ずいぶんと手酷くやられてるみたいだなア」

「誰かと思ったら、お前さんかよ」

「へっ、窮地を救ってもらってお礼の一つもなしかア？」

「大変助かりました、ありがとうございます……これでいいか？」

「だめ、やりなおし」

「あつたまきた……」

両手にアーカム45を携えたジョンは二挺をダイオニシアスに向けて、何度も発砲する。

全弾すべて機関大剣の巨大な刃に弾かれた。

「手エ、貸すかア？」

「いらん。先に行け」

「そつかア……死ぬんじゃねえぞ、俺様はまだリベンジすらしてねえんだ」

「さっさと行け」

ジョンは三階へと進もうとするが、眼前を機関大剣の一閃が遮った。

さすがにジョンもイリジアス鋼製の巨大な大剣で斬られたくはないらしい。自分と比べて再生機能に異様なほど特化しているとはいえ、修復には相当に時間がかかるものなのか。

「その剣で斬られたら痛そうだなア」

「ここから先、行けるとは思わないでくれ」

「いいや、階段だけが上に行く手段というわけじゃねエ」

あろうことかジョンは五体のバネをフルに使って、間近の窓へと体当たりをかまし、そのまま外壁を上って行ってしまった。

「行かせるか！」

噴射口での加速突貫を仕掛けようとしたダイオニシアスを、神速に迫らん一閃が遮っていく。

「まだやれるのかね」

「へっ、まだまだ元気いっぱいさ」

虚勢だった。抜刀術による居合の一閃を、たった一度放つただけで倒れ込んでしまっただ。そうだ。

後ろから足跡が聞こえてくる。

ぱたぱたと軽いのは女のものか。それが二人分聞こえてくる。

「サイファー、さん……」

目を見開いて、驚愕に染まった表情のフレデリカと目が合った。髪と同じ色の黄金の双眸は、瞳孔に至るまで開き切ってしまった。いまだ十代のあどけなさを残す顔

も、不釣り合いなほどの豊かさに富む身体も、震えている。

おそらく状況を理解できていないはずだ。今までケガらしいケガなどしていなかったが、今は瀕死と言つていいレベルの傷を負っている。取り込まれたときには、無理をしてまで助けに来たほどの殊勝さだ。次にとる行動はだいたい予測できた。

刃鎖の集合体である大鎌と一体化させられた『Song For Fog』が一瞬で展開した。くるりと巨大な刃を一回転させ、自分の背後に巨刃を突き刺す。石突として調整されたマズル・ブレーキと銃口はダイオニシアスを照準した。

全自動射撃に迫らんばかりの勢いで引き金を絞りまくる。

ダイオニシアスの反応は迅速だ。劍魔と恐れられた技量を以て、迫る七〇口径対物銃弾の嵐を叩き落す。

「いい腕だ。だが正道をいき過ぎている……それは命とりだ！」

射線から一瞬で老人は逃れた。圧搾蒸気噴射機構からの圧力で飛翔し、上空からの兜割でフレデリカを狙う。

銃口を持ち上げるには遅すぎた。スタビライザー代わりに刺した刃を抜くのも。思わず自分の腕で庇ってしまう。

ホーレス謹製のゴシック調のコートは凄まじい防御効果を持つが、劍魔と呼ばれた男の刃では蠟螂の斧だ。

鮮血がわずかに迸る。

玉虫色の煌めきが、炸裂した。

——生命防衛のため、自動防衛を発動します。

双眸が伝えた言葉が、いやなほど耳に残る。

「ぬおっ——！」

ダイオニシアスは眼前で手榴弾が炸裂した、と錯覚するほどの衝撃を食らった。

そこを逃さず、サイファーは抜刀からの一刀を振るう。

鏑迫り合いとなった瞬間、声の限り叫んだ。

「フレデリカ！ 先に行け！ ジョンと合流しろ！」

「でも……ッ！」

「気にするな。こっちは大丈夫だ」

「……………わかりました。ヘンリエッタ、行きましょう」

「死ななくてくれよ。あの子が悲しむからね」

あとからついてきたヘンリエッタと共にフレデリカは上階へと駆け上がっていく。

ダイオニシアスと二人きりになったのを確認して、口元に笑みを浮かべた。

——なりふり構っちゃられないか。

——あまり使いたくはないけど

——葬りたい、過去だからな。

老人を押しつけた後、ゆっくりとサイファーは抜刀の構えをとったのであった。

◆◆◆

——大丈夫かな。

フレデリカの胸中では不安で満たされている。

サイファーの傷は普通の人間であれば、完全に致命傷だ。出血量も、また同じ。

きつと彼が突き放さなければ、きつと残っていた。あの老人を倒すまで、一緒に戦っていたはずだ。

三階を超えて、今は五階へと向かっている。四階には誰もいなかったのだ。

そうなると屋上だろう。地下にはすでに大英帝国が捜査のメスを入れたのだから。

「彼のが心配かい?」

「……はい」

「無理もないはずさ。あれだけの傷を負ったことなんて、私は見たことなかったからね。きつと彼を知るほかの人間も、あそこまでケガをしたサイファーは見たことないんじゃないかな?」

「今は、信じて先を行くしかありません」

無理を押しして心配させるまいとしてか、それとも老人との決着に集中したいが故か。

どちらも十分にありうる可能性だからこそ、サイファアの判断を反故にするようなことはしたくない。

だから先を急ぐ。

六階まであと階段一つ分のところで足を止めた。

眩いほどの輝きが目に入ってきた。いや、これは人の形をした輝きだ。

そう形容できるほどの凄まじい美しさ。その中に光る言いようのない怪しさ。

フレデリカは黙って二挺の銃口を向けた。

目の前の美しき狂人に、エドワードに。

「もう逃げられませんよ」

「さ、追い詰められた主はどうするのかな？」

ヘンリエッタもスローイング・ダガーを構えた。

その気になれば、いつでも目の前の男を狩れる。銃で撃ち抜くもよし、ナイフを首に突き立てるもよし。すべては二人の采配次第なのだ。

だが——それでもエドワードは薄笑いを崩さない。その背後にあったのは、ビッグ・ベンの地下にあった数式機関と解析機関だ。ビッグ・ベンを貫くようにして、いつの間にか運び込んでいたのだろう。それもエドワードの微笑と同じく、変わることなく稼働し続ける。

「撃たないのかい？」

むしろ煽ってくる様だ。その声は何らかの伝声機器を使用しているのか、妙にエコーがかかっている。この距離で使う必要性など皆無はずだ。

——冷や汗でも流せ。

フレデリカは『Song For Fog』に持ち替えた。大口径対物狙撃銃の銃口がエドワードの眉間を照準する。引き金を絞れば、一瞬で上半身まで四散するだろう。迷うことなく引き金を絞り抜いた。

大鎌の石突として使えるよう円柱状にされたマズル・ブレイキから、盛大に発射炎が散った。

ハーフ・アツプにリボンで結った髪が水平になびくほどの衝撃波が来た。

へしゃげた弾頭が空中で止まっていた。

いや、二人とエドワードの間で細かく振動しているものがある。透明度の非常に高い素材で出来ているのか、この瞬間まで存在を認識できなかった。

「テクタイト素材ベースの強化ガラスだよ。大型の機動兵器の主砲でも持つてこない」と

「おう、持つてきてやったぜエ」

階下からやってきたのはアッシュ・ブロンドの男。間違いないジョン・ドウだった。

「仕込みしてそうだから、ちよつと死ぬまで借りてきた」

肩に担ぐように持っているのは六〇ポンド砲だ。現在の大英帝国がアーカムの技術なしに開発できる、最大威力のカノン砲だ。

とても人間一人が持てる重量ではないが、ジョンの怪力を前にしては問題ないのだろう。

「よし、じゃあぶち込んでやるぜエー！」

引き金に結びつけたワイヤーを引こうとするのを見て、二人とも速やかに伏せた。

瞬間、先ほどとは比べ物にならない衝撃が来た。

この威力ならエドワードどころか背後の二つの機関まで跡形もないはずだ。

砲弾の爆炎もバック・ブラストは二人に何の被害もたらさない。フレデリカの双眸が“力”を行使したとしか思えない。証拠にダイオニシアスを弾いた時と同じ言葉が、脳に直接伝えられたのだから。自動防御の範囲にヘンリエッタもいたのは、幸運なほど偶然だろう。

「おつ、意外と薄かったなア」

砕け散った強化ガラスを踏み砕きながら、六〇ポンド砲を惜しげもなく捨てる。

爆炎の名残も晴れぬ内に、ジョンはエドワードの死体探しに興じようとしていた。

「まさか木っ端みじんになったかア？ そいつは残念だ——」

その瞬間、ジョンの身体はハチの巣どころかバラバラになった。

壁を貫通しての機関砲による砲撃だ。口径は三〇ミリを下らない大口徑だ。

それでも——ジョンの身体は砲弾が通り抜けた瞬間から、千切れた筋肉繊維が繋がり、砕けた骨は一瞬で元の姿を取り戻す。眼球は水晶体まで虚空から生まれていき、掃射が終わると同時に変わらぬジョンの姿がそこにあつた。服はほとんどボロ布状態だった。

「へえ、面白そうなおモチヤじゃねえかア」

「……メルカバ」

機関砲の掃射で壁には大穴が開いてしまっている。そこから顔を覗かせるのは髑髏を模した独特な形状の頭部。間違いなくメルカバだ。それもお披露目されていたものではなく、あの地下で開発されていたものに違いなかった。

その頭上でエドワードは変わらぬ様子で微笑んでいる。

「やつぱり生きているか」

「まあな、俺様はハート以外は無敵の男だからよオ。俺様を殺しきるには、そのでつかいオモチヤの機関砲じゃ不十分ということだなア」

いまだに白煙を上げ続ける三〇ミリ機関砲を目の前にして煽る様は、対峙する貴公子の狂気に勝るとも劣らないものがある。

背中で交差させていた鞘から倭刀を二振り抜いた。

それは野獣の牙。得物に突き立てて、命を貪り尽すためにある。

今にも飛び出さんばかりに身を屈めるのを見て——エドワードはメルカバ頭部の機関砲をヘンリエッタとフレデリカがいるほうに向ける。

「ケツ、人質か。けつたクソ悪いなア」

「そう言わないでくれよ。僕も結構心苦しくてさ」

「ハッ、どの口が言いやがる。心にも思っていないこと抜かすんじやねえやア」

ジョンは左手の倭刀を投げ捨てた。右手の倭刀も放り捨てようとして——一刀は掻き消えた。

「あつ——」

エドワードがたたらを踏んだ。

ジョンの放った倭刀は左肩に深々と刺さり、完全に鏝まで通ってしまっている。

してやつたり、という笑みを浮かべたジョンが叫ぶ。

「立て！ この手合いは次に何するかわからねえからなア！」

のろのろと立ち上がった。

エドワードはいまだに刺さったままの倭刀を押さえながら、メルカバの頭上でうずくまっている。

絞り出すような嗚咽が混じった叫びが漏れ始める。

「ううツ……痛い、痛いじゃ、ないかあ……こんなに深く刺して、ここまでするっていうの、かい？ ひどい、なあ……ひどいじゃないか。みんなを、苦しみから解放してあげようと、いうのにさあ……どうして、ここまでできるんだよ……わからないなあ」

涙も鼻水も垂れ流し、それでも瞳に宿る光は狂気そのものと言っている。

左肩の痛みが狂気を表出化させたのか。

「薙ぎ払え……メルカバツ!!」

機関砲が火を噴いた。

よく見れば機関砲の銃身は三つ、蒸気圧の力で高速回転しながら三〇ミリ砲弾を吐き出し続ける。ガトリング式機関砲なのだ。これなら長時間の掃射にも耐え得るだろう。

ビッグ・ベンの六階が吹き抜けになろうとしていた。

それでも機関砲掃射は止まることを知らない。

やめさせたのはエドワードの美貌を一閃する一太刀。

目と鼻の間に朱線が走った瞬間、一気に鮮血が噴き出した。

「なっ、あ、がああああああああ!!! 僕の、顔がッ！ 先生が褒めてくれた、僕の顔がッ！ なんて、どうして……」

「その綺麗な目で、ちゃんとこっち見たらどうだ？ お坊ちやま」

機関砲掃射によつて粉塵が舞い上がる。放つた一閃はその全てを晴らした。

フレデリカの視界を遮るものはない。それに声だけでもわかつていた。聞きなれた、体格の割にハスキーな声。

その手には、変わらずに野太刀を携えている。

風が吹き込んで灰色のロング・コートと橙に近い茶髪をなびかせる。

サイファー・アンダーソン。

剣魔を倒してやってきたというのか。瀕死の傷を負つていながらも、ダイオニシアスを切り伏せたとしてもいうのか。だが彼はここに立っている。戦いを制して、生きることが許されたのだ。

「ほら、受け取れよ」

エドワードへと放つたのは、人の頭ほどもある何か——いや、実際に頭だ。

厳かに瞼を閉じ、一切の血色を失つたダイオニシアスの首であった。

「本人きつてのご要望だ。僕は勝つたぞ」

受け取つた首を見つめながら——狂える貴公子は呟いた。

「何を言つてるんだい？」

俯いた顔を上げたとき、誰もが目を疑つた。

サイファーが一閃した傷はもうなかった。ジョンが刺したはずの倭刀は消え失せて

いる。

金髪碧眼の貴公子は、もう存在しない。

エドワードの右目は黄金に染まっていた。

——警告。

——瞳同士の衝突を確認。

——生命防衛のため。

——位階を上昇させます。

双眸の眩きも、もはや聞こえなかった。

Weakening少女は無力なり、鋼鉄は獣たちを
追い詰め

ダイオニシアスは力任せに罅迫り合いから逃れる。

両者ともに足取りは危ない。サイファーは傷がもとで、ダイオニシアスにはわからなく
き込み始める。

口の端から黒血が漏れる。肺を病んでいるのだろう。

「この身体に残された時間は少ない。早く決着をつけようではないか」

「まったく年寄りが急いても寿命が縮むだけだぞ」

「なら、その前に君が私を斬ればいい」

「望むところだ」

納刀しての抜刀術の構え。

抜刀して構えた状態から振るう一閃と比べれば、抜刀術による居合抜きは剣速で確かに劣る。もともとは短刀で向かってくる相手を太刀で迎え撃つための技術だ。それでも構えをとったのは最も自分が信頼を置く技術故か。

自分が最も得意とする、最も使い続けた技術に、サイファーは己の命を賭けることを

選んだ。

ダイオニシアスの構えも同じ思想に基づいてか、帯刀するように右腰のあたりで機関大剣を構えている。

そのまま——両者ともに動かぬまま。

踏み出す機会を完全に喪失している。完全なる拮抗状態の中、破つたのは上階からの轟音であった。

サイファーが踏み出したのと、機関大剣が圧搾蒸気を噴いたのは同時であった。

ダイオニシアスの一線をサイファーの抜刀が迎撃した。

それでも機関大剣を取り落とさなかつたのは、劍魔と称される腕前がなせる技か。そのまま第二撃へと繋げたのも、苛烈なまでの修練が成せた業か。

抜刀の勢いを乗せた一閃が弾き返す。

刃がぶつかつたとは明らかに違う感触を、機関大剣は伝えてきた。

右手一本で返された刃は円弧の内側で振り払われている。すでに左手は柄の後端を握り込んでいる。

——峰打ちだと!?

——まさか!

危機を感じたときにはすでにダイオニシアスは袈裟掛けに、バツサリと切り捨てられ

た。

サイファーの左手だけによる逆手での振り抜きだった。

抜刀の一閃で仕留められぬ場合、即座に返した太刀で相手を討つ燕返しの技。ある意味、その発展形と言える技であった。抜刀で仕留められれば御の字。仮に外したとすれば峰打ちで打ち据えられ、さらに逆手に握られた一刀で斬り裂かれる。

日本刀が片刃であることの宿命——刃を返さねば相手を斬ることは叶わない。どんなに刃を返す工程を短縮しようと、動作が一つあるだけで生じる遅れを、あろうことか峰打ちを挟むことで高速化した邪道の魔剣というべき技であった。

「——成った、か」

「……………未完成、だったのか?」

「初めて使った時は上空に逃げられてな。櫂を削っただけの木刀で頭をカチ割られた。そいつは天下無双の名で呼ばれてる。一度だけ、プライドを捨てて弟子入りしたけど、強さに納得のいくキチガイじみた修行漬けの日々だったよ」

辟易するようにサイファーは天を仰ぐ。

納刀の鏗鳴りが一つ、決着のついた死闘の場に響き渡った。

同時にふうと一息。呼吸を整えて、滾る血潮を鎮めていく。

「——魔剣・燕返し。剣術は斬るためであれば、魔にも邪にも墮ちる」

「真理、だな」

「何か言い残すことは？」

「私の首を……持っていけ」

——こいつ、日本かぶれか？

訝しみながらも抜刀する。瀕死の老剣士を二つに分けるには、死闘を制して疲労した状態でも十分すぎる。その程度で刃の冴えは鈍らないし、自分を危うく殺しかけるほどの一閃の傷もようやく癒えてきた。

せめて苦しませぬよう一太刀で。

サイファアの灰色の双眸は、いつでも首を刎ねるだけの準備があると物語っている。

「エンドワード様は、狂っている……」

「知ってるよ。あの目を見りやわかる……何にも見てない目だ」

「そう、だ……現実の世界など、一度とて見ていない。ずっと自分の中にある、理想通りの世界を現実としている」

「普通ならすぐにでもズレに気づく。だがあんなにキレイな顔してれば、悪魔サタンだって涙を流して自分のすべてを引き換えにしてもお願いを聞いてくれる」

「だから……私の死を突き付けろ。止めるんだ。解析機関を大出力で稼働させ、ビッグ・ベンの鐘を使って特定の音波を流す。機関の計算によってもたらされた音は、脳に大き

な干渉を行い、細胞に刻まれた情報を漂白する。続く音は情報を書き込むのだ……エドワード様と同じ存在になるよう、同じ脳内情報を、な」

「イギリス全国民……いずれは世界中があがきと同じ存在になるといふことか——争いをなくす手段として多様性を失わせるのは人類滅亡を除外すれば、ただ一つの賢いやり方で、多くの人間が思想統制に心折られてさじを投げた。それを解析機関の計算で強制的に提供か。これなら世界を幸福に包むのも簡単だ。自分が一番喜ぶことをすればいい」

「頼む……あの方を、止めてくれ……私の言葉は、もう……」
「安心しろ、首と一緒に届けてやる」

ダイオニシアスは安らかに目を閉じた。すべてを託す覚悟を決めたのだろう。

サイファーの手から白刃が閃いた。

納刀から、何かを受け止めようように右手を差し出す。

その上に宙を舞った劍魔の首が落ちてきた。

覚悟を決めた老人の生首は、舌すらはみ出すことなく口は真一文字に結ばれている。双眸もまた、安らかに閉じられたままであった。

「さて、社会勉強といふか。お坊ちゃん？ ま、僕も人のことは言えんがね」

生首片手にのしのと歩き出す。普段ならもつと軽快に歩いているが、血を流しすぎ

たせいで身体が重く感じられる。その分、思考は普段より落ち着いていた。いつもより理性的な判断ができるかもしれない。鯉口を切るのが少し遅くなるだけかもしれないが。

だがゆっくり歩いてはいられない。上階の爆発音がずっと気掛かりだ。

ここまで響いてくるとは相当大きなものだから、フレデリカとヘンリエッタが無事であるだろうか。爆発の下手人がジョンだとしたら首を十回転はさせるかもしれない。最低でも。

——他人の心配か。

——まったく、らしくないな。

あの娘を心の片隅で、いつも気にかけている自分がいる。

一人の女に入れ込むのは、もはや自分には禁物だ。いかに逢瀬を重ね、蜜月を費やして、添い遂げるための誓いも、残酷に時が引き裂く。恋仲となった女は少くないし、そのほとんどが事実婚の状態だった。彼女らが老いて天命を全うしていくのを見るたび、変わらぬ自分の姿に辟易した。

それでも——人並みの感情が温もりを欲する。

遊びだけの関係では決して得ることのない、温もりを。

その度には、自分の心をいずれば引き裂いていく。

——我が一刀が、時の死神を斬れるのであれば。

——もう少しだけ、自分はまっとうに生きることができたらうか。

意味はない。すでに過去だ。

意味はない。出来もしないのだ。

意味はない。とつくに自分は堕ちている。

今を見るだけだ。未来に希望など、とつくに抱いていないのだ。

エドワードを斬って、殺して、終わらせる。

これで今回の仕事はカタがつく。

「おわっ！」

すぐ上の階から響いてきた機関砲の発射音に、弱っていたこともあつて危うく転びそうになる。

何とか踏みとどまれたのは僥倖だ。誰も見ていないとはいえ、無様に転ぶなどあつてはならないことだ。自分の中では。

居ても立ってもいられず駆け出した。上階への階段を一段一段と踏み込んでいくたびに、上からの粉塵交じりの煙はどんどん濃くなっていく。

上階は完全に吹き抜けと化している。外から内部を睥睨するのはメルカバの頭部だ。そのうえで立つ金髪の貴公子に一閃をくれてやる。倭刀が刺さっているのはジョンの

せいか。

喚き散らすエドワードを一瞥するとさらに野太刀を一振り、立ち込めていた煙は一瞬で吹き飛ばされる。フレデリカもヘンリエッタも無事だった。忌々しいことにジョンも五体満足だった。

「ほら、受け取れよ」

ダイオニシアスの首を放った。それでもなお、劍魔の目も口も厳かに閉じられたままだ。

その首を受け取ってもエドワードは微笑を崩さなかった。俯いても。天上の工芸家がやり直しを重ねた繊手からは、確かに生首が放つ死の冷たさが伝わっているというのに。

「本人きつてのご要望だ。僕は勝ったぞ」

それでも微笑みは崩さなかった。

俯いた顔を上げたとき、その眼は黄金に変化していた。

——フレデリカの目と同じものに。

「何を言ってるんだい？」

そのままダイオニシアスの首を落とす。メルカバの髑髏の意匠を持った頭部に沿って地面に落ちる。そうなるのが当たり前だ——だが常識の薄氷は呆気なく打ち砕かれ

た。

鋼鉄の頭部に波紋が生じた。生首は一瞬でメルカバの頭部に沈んでいく。停止していたままのメルカバに明らかに変化が現れた。各駆動部が激しく振動し、動力機関からは蒸気とも煙ともつかない白いモヤが広がっていく。

メルカバの逆関節式駆動脚の関節が伸びる。そのまま関節は直立二足歩行の形態をとる。胴体部分の関節もすつくと立ち、頭部横のパーツはゆっくりと展開するや五本の指をしつかりと持つ腕となった。

鋼鉄の巨人だ。

紛れもない鋼鉄の巨人が自分たちを見下ろしている。

ぼつかりと光学機器など入っていない頭部眼窩に、深紅の光が宿る。

「あれ、は……」

フレデリカには見覚えがあった。おそらくはここにいる全員が見たことがあるに違いない。

サイファアとジョンの最初の戦闘で、最後になって霧と共に現れた何か。

このメルカバがその正体なのか。

——駆動系、良好。

——動力系、良好。

——武装管制、異常なし。

——システム・マクスウエル、異常なし。

発声装置など存在しないはずなのに、確かに響く声。

メルカバの腕が何かを掴んだ。紛れもない剣だ。

腕部のアクチュエーターとなる蒸気圧ピストンが駆動音を立てながら、蒸気の煙を勢いよく排気する。剣は高々と振りかぶられた。

時計塔に一太刀が振り下ろされる。



——なに、あれ。

——どうなったの。

理解が及ばぬまま、ぐるぐるとフレデリカの思考は混乱を続ける。

すべてはエドワードの黄金に変じたあの眼を見てから——自分と同じものになった、あの眼だ。

「大丈夫か？」

サイファアーの声で我に返った。同時に自分が彼の肩に担がれているのも把握する。

ヘンリエッタに反対の肩に担がれていた。どうやら自分たちを両肩に抱えて、メルカバの一刀から逃れたようだ。

相当離れたところまで跳んだらしい。二〇メートルを優に超える高さまで変形したメルカバが小さく見えることから、五〇メートルは離れているだろう。今は二階建ての建物、その屋根の上にいる。

「あんな改造までしてあつたのか。完全に巨人だな」

サイファアの眩きはほとんど聞こえてこない。

見えない。

——いつも通りの視界しか見えないのだ。

ただ目の前の景色を黄金の双眸は映すだけだ。常人が見ているのと同じものを。

「……見えない」

「どういうことだ？」

「普通のものしか、見えないんです」

拙い語彙でうまく言い表せなかったが、サイファアは眉間にしわを寄せた。双眸が機能を停止した今でも、彼の眉間が歪んだ理由が自分の言葉を理解できなかつたことからくるものではない。感覚的にだが、素直に思える。

フレデリカの持つ超常的視覚をサイファアも何となく察しているのだろう。

ヘンリエッタへの目配せは迅速だった。

「本調子が戻るまでフレデリカのそばにいてやってくれ」

「そっちのほうが適任じゃないのか」

「お前さんにアレが相手できるか？」

「無理だ。さつきからジョンが何回も突撃してるのを、ハエでも払うように吹っ飛ばしているのを見たらね」

先ほどからメルカバに向けて突貫を重ねる黒い影がある。

ジョン・ドウは滾る野獣性に身を任せては、メルカバの手で払われて吹っ飛ばされるのを繰り返していた。ある意味滑稽と言えるかもしれないが、あの巨体でジョンの素早さに対応できているのは驚異的だ。

フレデリカは『Song For Fog』を引き寄せようと、その銃把を掴んで――目を見開いた。

――重い。

――今まで取り扱えていたはずが、持ち上げることすら耐えられないほどに重い。手をそつとサイファーが包み込んだ。

「アレは僕に任せておけ」

いつものように不敵な笑みを浮かべてはいるものの、いささか顔色がよろしくない。

あの老剣士から貰った一閃はサイファアの身体を未だに責め苛んでいるようだ。

だから無力となつてしまつた自分が、耐えがたいほどに不甲斐なくて許せなかつた。銃を持ち上げることも叶わぬくらい、見た目相応のただの女になつてしまつた自分。

メルカバがこちらを向いた。ジョンの様子はよく見えない。いつもなら見えているはずだ。

「うわつ、あいつ下半身が挽肉になつてやがる。機関砲を食らい過ぎたな」

黒塗りの表面処理をされた髑髏を模した意匠の頭部、そのこめかみのあたりが白煙を噴き始めた。

「機関砲掃射来るぞー」

ヘンリエッタの行動は迅速だった。

豹のごとき俊敏さでフレデリカと『Song For Fog』を抱えると一気に跳躍した。その距離は実に十メートルを超えたに違いない。

建物の屋根は一瞬で粉碎された。口径三〇ミリもの機関砲弾は並大抵の装甲を一瞬で潰してしまう。

掃射はサイファアを追いかけた。

屋根から屋根、高低差十メートル以上の差もなんのその。そう主張せんばかりに灰色のロング・コートの裾は翼となつて翻り、なおも追いつがる弾丸は鞘からの抜刀一閃で

斬り落とされる。

メルカバの頭部で銃火が炸裂する。サイファアの右手に保持された規格外の巨大リボルバー『Howler In The Moon』の砲撃に等しい銃撃だった。おそらく装填されているのはホールレス謹製の対装甲弾であろう。秒速七〇〇メートルまで加速した溶解重金属と数万度もの火炎を噴き込む代物だ。

それでもメルカバは揺らがない。

頭部装甲の表面に焦げ跡を付かせただけで、凹みなど一つたりとありはしない。

こうなつてくると通じるのは森羅万象を砕くサイファアの権能か、空間ごと相手を断ち切る空間切創くらいだ。それも野太刀を振るう僅かな隙に機関砲の連射を叩き込まれる。

「三十六計目を決めるしかないかな？」

諦念など欠片もないぼやき。逃げようなど微塵も考えていない。

怪力無双を誇る益荒男も一分と保持してられないほどの巨銃をコートの中に仕舞い込むと、空いた右手は野太刀の柄を握り込んだ。

メルカバの照準速度を上回る速さを以て、その頭上へとサイファアは跳んだ。

乾坤一擲の一太刀を見舞うためか、すべてを砕いて消し去る「力」は霧状の闇となつて噴き出した。とくに野太刀は風雅香る彫金も見事な黒塗りにされた鉄ごしらえの鞘

も、赤金の柄頭も見えないほどに霧となった闇に包まれている。

サイファアの抜刀にメルカバも剣を抜いた。刃渡りだけでも十メートル以上はある、巨人が振るうための代物をどこからともなく抜き放ったのだ。

それはしなりながらサイファアの一刃を迎え撃つ。

だが彼の一刃もまた、尋常のものではない。

抜刀の軌跡はメルカバの剣と同じだけ伸びた。

超常の刃同士、ぶつかり合った瞬間に周辺は打ち震えた。建物の外壁にはヒビが突っ走り、窓ガラスは粉碎された。周辺住民はすでに避難済みであったことが、不幸中の幸いというべきか。

「ええい、くそっ！　これで仕留めきれりや御の字だったんだが、なかなかそうはいかないということか。あの坊主はどこに行きやがった？」

メルカバの頭上に立っていたエドワードの姿はない。

倒壊しないのが不思議なくらいのビッグ・ベンの時計塔に、煌めくほどの貴公子がいた。

あれだけ撃たれた機関砲弾の嵐の中でも、ほとんど無傷だった解析機関と数式機関にゆつくりと歩を進めていく。

——マズいな。

近づかせるものか。仕舞い込んだ『Howler In The Moon』を再度抜き放つ。

七〇口径もの規格外に巨大なりボルバーが、威容に見合うだけの咆哮を上げた。青白い砲火はマズル・ブレーキのスリットに沿って十字をとる。一発だけに留まらず、続けて四発も放たれた。並みの人間であれば腕の関節すべてが粉碎されてもおかしくないが、サイファアの膂力と肉体強度は手負いであつても未だ常識の範囲外であつた。

「邪魔を……しないでくれッ！」

右手を一振りしただけで巨弾ははじけ飛んだ。

舌打ち一つ、サイファアは即座に思考を切り替えた。巨銃を仕舞い込み、野太刀の柄に手をかけた。

銀条一閃。

空間切創の一撃はエドワードを捉えることはなかったが幸か不幸か、その一歩先を無慈悲に切り裂いた。切断された床は支えを失つて真下へと落下する。無論、エドワードも巻き込まれることとなる。

「ナニやってんだ。俺様も仲間に入れてくれよオ」

吹っ飛ばされた下半身を再構築して。

寧猛極まりない笑みを浮かべてジョンは立っていた。

その手に倭刀を携え、もう一方の手は六〇ポンド砲を担ぎ上げている。

支柱と骨組みだけが残っているようなビッグ・ベンの六階からメルカバを見下ろす。

「よし、じゃあでつかいのぶち込んでやるぜエー！」

倭刀を握ったままの手で器用に発射装置に結んだワイヤーを引いた。

こちらは紛れもなくカノン砲だ。マズル・ブレーキは十字の砲火を噴き、腰部に強烈な砲弾の一撃を見舞う。

着弾と同時にメルカバは震えた。装甲が、関節が、武装が。軋み合って呻き声のように響き渡る。

「流石はカノン砲。威力が段違いだ。そしてお手軽ときている」

もし六〇ポンドほうが列を組み、一斉に砲撃したとなれば。この巨人のごとき戦車は打ち碎かれるはずだ。

サイファー、ジョン・ドウのような怪物的存在は必要ない。訓練を積んだ兵士が指揮官の号令で撃てばいい。ただそれだけで目の前の脅威はするりと片付くのみだから。

だが鋼鉄の巨人戦車がこれで終わるわけがない。

全身の関節が震えだして、耳障りな音を響かせる。

——システム・マクスウエル、出力全開。

——炎熱防御、展開開始。

——攻性凍結権能、出力最大。

発声機関などないはずなのに、金属の軋み同然の不気味な声が響く。

空気が渦巻いた。周辺の半径五〇メートルくらいは風をはつきりと感じるはずだ。

メルカバを中心に渦巻いて立ち上っていく上昇気流が原因だ。

莫大な熱量をメルカバは発している。下手な建物よりもはるかに巨大な鋼鉄の身体が赤熱している。

サイファアもジョンも頬が焦げる感触を感じていた。並みの人間であれば産毛は燃え上がり、息を吸えば気道熱傷で呼吸困難は確実だ。何の異変もないのは二人が超常の魔人たるが故か。

「何の小細工だよオ。もう一発ブチ込んでやるかア」

六〇ポンド砲の砲身をメルカバに向ける。

砲弾の再装填をいつの間にか済ませたのか、ジョンは完全に発射態勢を整えている。溢れる臂力に任せて砲全体を担ぎ、発射機構に結んだワイヤーを引いて撃つ。荒唐無稽の塊としか思えないが身長よりも大きい砲身は微動だにしない。

だが——その前に六〇ポンド砲が爆ぜる。ちょうど砲弾を装填されたであろう、機関部のあたりから盛大に火花を噴いて。

「熱で誘爆させたのか!？」

サイファーは素早く『Howler In The Moon』の輪胴から弾丸を捨てた。次の瞬間にすべてが一斉に爆ぜた。

火薬は禁物だ。

爆弾も禁物だ。

熱波の範囲内から灰色の外套に包まれた巨躯が逃れる。

ジョンも上半身が左側しかないが、何とか範囲内から逃れたらしい。

メルカバの周囲は熱波で陽炎となった。鋼鉄の巨躯は揺らぎ、大きくなったり、小さくなったり。その姿はまるで安定しない。

ついに発火点の低い物質は燃え上がった。メルカバは黒煙を纏い、その姿を一層わからなくさせる。

それとは逆に冷ややかな空気を帯びるものがある。

メルカバが手に握る剣は目に見えるほどの白いモヤを纏い始めた。低下する刀身の温度が大気中の窒素を液化させつつある兆候だった。

「熱と冷気の操作……いや温度ないし熱分子の操作と見るべきかな？」

「へエ、意外と博識なんだなア」

「ミソのいいヤツほど長い付き合いでね。おかげで科学には少しばかり明るい」

「羨ましいなア。俺様の周りは似た者同士だけ」

「そのほうがいい。話についていけないからな。そんな友人のほうが気が楽だぜ」

「おっそうだなア。んじゃ、アレをさっさとぶっ壊して、大切なダチと飲みに行くとしたらどうかア」

六〇ポンド砲を捨て、ジョンは二刀を構えなおす。左側はまだ表皮が治り切っていないが。

メルカバの頭部がこちらを向く。三〇ミリ口径機関砲がサイファーとジョンを照準する。それだけではなく脚部の榴弾砲も可動機構フレキシブルアームによって狙いをつけようとしている。

機関砲と榴弾砲が火を噴いた。

濃密な弾幕と爆炎が二人に降り注ぐ。立っていた屋根は波打ったように跳ね上がり、跡形もなく砕け散っていく。

「バカス力撃ち過ぎだ」

懐から規格外の巨銃『Howler In The Moon』が現れた。大きさも、重さも、火力も、すべてが銃という概念から大きく外れた破壊兵器の照準はメルカバの胸部を狙う。六発しか入りそうにない輪胴には、二十四発ものホーレス謹製の対装甲弾だ。

火線の長さは数メートルまで達した。

だが弾丸はメルカバに当たる前に爆ぜる。熱波に中^あてられ、弾頭に封入された炸薬が発火したのだ。

空薬莖も実包も排莖すると、新たに徹甲弾を装填した。カバーに包まれた直径数ミリのダーツが飛んでいくものだ。銃口付近でカバーは弾け、凄まじいエネルギーを引き受けたダーツはよほど水平に当たらない限り相手を貫通するのだ。

それでもメルカバの装甲、その表面で火花が散るだけだ。ダーツは食いこまずにぶつかっただけに終わった。尖形状のダーツも熱波によって形を崩壊させ、貫徹力を失ったのだ。

「銃はダメみたいだな。かと言って、近づいたらじわじわとローストされる。ジレンマだな」

「ここにじつくりローストされても平気な奴が一人いるんだがなア」

「おう、じゃあ逝ってこい」

容赦なくジョンのケツを蹴っ飛ばした。

ほぼ直線軌道を描いてジョンはメルカバの頭部めがけて飛んでいく。

「今度は俺様の番だア！」

二振りの倭刀は難なくメルカバの頭部に突き立てられた。

ジョンが誇るサイファー以上の膂力が為せる技だ。倭刀はよく鍛え上げられた名刀

なのか折れることなく、ジョンが求める務めを果たす。

突き刺した片方を引き抜くと、今度は別の場所を突き刺し始めた。滅多刺しだ。動力系が集中している個所に蹴れば良かったか、とサイファーは内心で後悔した。例えば胸部とか。頭部などいくら突き刺そうが、搭乗者がいない限り最早張りぼてのようなものだろう。

納刀した野太刀の鯉口を切る。

空間切創で一撃必殺だ。胸部には確実に動力用の数式機関が存在するはずだ。そこを破壊されてしまえば、この鋼鉄の巨人も停止するほかない。動力を失った機械は止まるしかないのだから。

幸いにもジョンのめった刺しでメルカバの注意はサイファーに注がれていない。

あとは野太刀を胸部に向けて一振り。一切の分別なくすべてを切り裂く空間切創の一撃は、猛威を振るうメルカバの熱波など意に介さない。軌道上にあるすべてを斬り捨てるだけだ。

「何をやる気だ？」

白いモヤを帯びた剣をメルカバは振り上げた。どう考えても届くわけがない。サイファーとの距離は三〇メートル近いのだから、一〇メートルを超える程度の刀身ではあまりにも足りない。

だがサイファーは本能的に危険を感じ取っていた。

少なくとも新大陸独立戦争があったときから戦場にいる。積み上げられた経験は計り知れない。無論、近代の戦闘理論では思い及ばぬ第六感も凄まじく研ぎ澄まされている。

その第六感が叫ぶのだ。

——逃げろ、と。

切った鯉口を納めて、その場から離れるべく跳躍した。

遅れてメルカバが剣を振るう。

冷気が大瀑布となって炸裂した。大気中の窒素を容赦なく液化させるほどの冷気が嵐となり、切っ先が向いたほうを駆け巡った。何もかもが容赦なく凍てつき、すべての熱分子は活動を停止した。

百メートル近くも飛んで避難したというのに、サイファーは頬に痛むほどの冷たさを感じた。もしかしたら凍傷になっているかもしれない。人間離れた時を生き、人間離れた強度を誇る自らの肉体が温度変化で傷を負いつつある。

間違いない。幻想の冷たさだ。人類の叡智、人理の内からかけ離れた外なる冷たさ。

——自分の命に手をかける、唯一のもの。

メルカバの一撃で前方二百メートル近くも氷漬けになった。冬の冷たさとは一線を

画する幻想の冷気が場を支配しつつあった。

「ジョン！ 無事か!？」

「死なないことが俺様の取り柄だア！ ハート以外は無敵の男だからよオ！」

心配したことが杞憂だった。ジョンの不死性は刃を交えたことは少なかれど、嫌というほど思い知らされている。

だから大丈夫だと——そう思った。

メルカバが首を振り上げた。

宙を舞うジョンをメルカバは平手で地面に叩き付けた。叩き潰されたハエよりも哀れなほど、その様は憐憫を掻き立てるようだ。

石畳を砕き、大地を踏みしめる鋼鉄の脚が持ち上がる。髑髏を模した頭部はジョンを見下ろして——正確には見下していた。

その次に行う行動はいやでも予想がついた。

サイファアのいるほうまで振動が来た。強烈な足踏みによるスタンブがジョンに炸裂した。止まることを知らず、メルカバは右脚でジョンを踏みつけ続けた。

ただでさえ暗い冬の空にさらなる陰りが加わりつつあった。

——フューリアス。

ジャツキー・フィツシャーがメルカバと共同運用するはずだった航空機動要塞が睥睨

する。

『まずは君からだよ、サイファー・アンダーソン』

空を覆う鉄塊から聞こえたのは、まぎれもないエドワードの声だ。

火砲群が一齐に彼を照準し始める。

Awaken ing～激化する戦い～

—ダメだ、これは。

—なにも理解できない。

—なにも抵抗できない。

—なにもかもが、止まった。

混乱する頭は痛みすら覚え始めていた。

ヘンリエッタの脇に抱えられて、戦いの場から逃げている。ただ一つだけわかってい
る事実だ。

コートの内、スカートの上に巻いたホルスターの二挺に手を伸ばす。そんな簡単な動
作、簡単なことなのに手が動かない。

身体中の細胞がすべて機能を放棄したように感じられた。

悪寒がする。震えが止まらない。

何かが、身体の何かが確実におかしい。身体の内と外がひっくり返って、何もかもが
変わっていくような感覚。気持ちが悪い。吐き気がする。

「ヘンリ、エッタ……」

「どうかしたのかい」

「ちよつと、だけ気分が……」

ちよつとだけ。

そう言ったのは、言葉通りの状態ではないから。

息が荒い。顔も青いはずだ。きつと冷や汗が大量に出ている。

自分でもわかるほどの明らかな体の不調を、親友に隠し通せるほど強くはない。今いる場所がビッグ・ベンから少し離れた迷路めいて入り組んだ路地の中だということがよくやくわかるくらいだから。

「無理をするな。とりあえず、どこかで休憩しよう」

「すいません……」

「一体どうしたんだい？　すごく具合が悪そうだけど」

「わからないんです。今まで出来ていたことが、急にワケが分からなくなつて。銃も撃つてそうになくて……」

自分に力をくれた黄金の双眸は、今や権能の一切を放棄しているに等しい状況だった。

あの瞬間だ。エドワードの自分と全く同じものになった眼を見た瞬間だ。双眸は完全に沈黙状態だ。戦う力の源となつてくれた双眸が機能停止した今、完全にフレデリカ

は無力化されたも同然だ。

口元を押さえながら覚束ない足取りでヘンリエッタに着いて行くのがやっとだ。

下手をすれば吐きそうさ。この不快感はしばらく治まることはないだろう。

震える手で『One In All』の銃把を握り、トグルを思いきり引いた。振るえる膂力も見えた目相応の少女並みだ。十分にメンテナンスしてガン・オイルをまぶしておいたはずなのに、トグルの作動がひどく渋いように感じられる。銃把は両手で握り込んだ。片手では一発撃つただけで落としてしまいそうだから。

ヘンリエッタの表情が険しいのは、おそらく囲まれているから。

きつと両眼が機能していたならば、視界一杯に可視化された気配が映っているに違いない。

ヘンリエッタの五指の間、挟み込んだスローイング・ダガーは四つ。両手だからダガーは八つになる。

「フレデリカ、後ろツ！」

振り向いて銃口を向けると、ヘンリエッタの右手が閃いたのは同時だった。

いつもより重く感じられる引き金のせいで、狙いが大きくぶれた。心臓を狙ったはずの弾丸は腹を撃ち抜いた。撃ち抜いたのは拳銃を構えた黒服。瞳の殺意は明らかに敵であると物語っている。見かけ相応の膂力を総動員し、反動でたたらを踏みかけたのを

押しとどめて第二射を放つ。

ヘンリエッタのナイフがその先を行く。スローイング・ダガーは首と太ももを捉えた。

「——ガッ!?!」

ダガーは頸動脈を超えて、気管まで達したのだろう。血の泡を吐きながら絶命する。だが一人倒したところで安心はできない。

入り組んだ路地の真つただ中だ。身を隠す場所はいくらでもある。

トンブソン短機関銃を構えた男が三人もきた。一斉掃射を受ければ挽肉になるしかない。

セレクトターをフルオートに切り替え、両足を肩幅まで開く。『All In One』を頂点に二等辺三角形を作るように銃を保持する。引き金を絞り込めば毎分一〇〇〇発を超える連射による火力が猛威を振るい、銃はフレデリカの手の中で存分に暴れまわった。

しかし男たちは叩き付けられた猛射の前に怯みだす。そもそも銃口を向けられて恐怖を覚えられないような人間など数少ない。それこそサイファーやジョン・ドウのような化物でない限り。

トンブソン短機関銃というありがたい武器の引き金に、指をかけることすら忘れて男

たちは逃げ出そうとする。そこに銀色の閃きが三本走る。

ダガーは見事に男たちの眉間や喉に突き刺さった。ひきつったような呻き一つが断末魔だった。

フレデリカは新たな弾倉を込めた。二〇発フル・ロードの弾倉がひどく重いように感じられた。

「とにかく移動しよう。走りながら撃てる?」

「……ちよつとだけ、待っていてください」

打ち倒した男たちの服の内を探るとブローニングM1910自動拳銃と弾倉四つが見つかつた。これなら今の状態でも走りながら撃てるか。弾倉をコートのポケットに突っ込み、銃把を握り込んだ。

「いつでも行けます」

「少しは調子が戻つたみたいだね」

路地裏を突っ切り、大通りへと出る。

すでに避難が済んでいるのか、人気は皆無だ。

それでも遠くから蒸気自動車（ガ）の走行音が聞こえてくる。速度と走破性に優れた馬力の大きい大型モデルだと、詳しくない者でもわかる。

音のしないほうに向かって走り出す。いつかは追い付かれるかもしれないが、戦闘は

なるべく避けておきたかった。

だが進行方向からも似たような走行音が聞こえてきた。大型のガーニーだ。車体の厚みは相当だから、おそらくは戦闘用に装甲化されているはずだ。ぬかるみすら走破できそうな巨大なタイヤに、突撃用の衝角すら備えた姿は異常とすら言える。

万事休すか——ガーニーは横を向きながら滑るように停止した。

「無事だったか」

おそらく百人を笑いながら手にかけて殺人鬼も、今までの罪を泣き喚きながら告白するほどの強面が現れた。アーカムから今回のお披露目式典の警備にあたっていたワイアットだった。

あまりにも長い銃身のSAAと背中にウインチェスターM1912散弾銃という出で立ちなのは、つい先ほどまで戦っていた証拠だろうか。

「追われているんだろう？ 早く乗れ」

「助かったよ。フレデリカが体調を急に崩してね」

「それはマズい状況だ」

青ざめたフレデリカの姿で、ワイアットは状況を瞬時に判断した。同時に自分がこの場に駆け付けたことを幸運に思ったはずだ。彼女たちを助けることができる。彼の内で燃え上がる正義の炎は、悪人を討つためにあるのではない。無力なる者を守るため

にある。力なき者を害する悪党を討つために、銃の腕を磨き上げてきたのだ。

ウインチェスターのフォア・エンドをコッキングさせる。初弾の込められる音は悪人にとって最も聞きたくないものだ。銃口から放たれる十二ケージ散弾の破壊力を知らない犯罪者はいない。自分たちも使い、そして撃ち込まれるために。

追手のガーニーが姿を見せた。

ワイアットの散弾銃が咆える。銃声はほとんど爆音に等しかった上に、銃口から噴いたのは硝煙ではなくほとんど火花だった。アーカム中層で時折現れる改造人間や幻想生物一步手前の存在を相手取るための、強力なマグナム強装弾であった。重金属性のダーツを一つにつき二〇本装填し、量を激増させた装薬の力を用いて秒速七五〇メートルで吹っ飛ばす悪魔の弾丸だ。

屈強に鍛えられたワイアットの身体がわずかに浮くほど、その反動は激烈だった。

無論、威力も比例して大きい。ガーニーのボンネットに撃ち込まれたダーツは、その貫徹性能をいかななく発揮して内燃機関のブロック部まで及んだ。

派手な爆炎を上げてガーニーは爆散した。

新たに現れたもう一台にも続けて撃ち込んだ。ボンネットの右半分と右前輪がまとめて吹き飛んだ。たまらず出てきた乗員を、SAAが歓迎した。規格外の長銃身は飛燕を断つ一刀が如く跳ね上がり、神速のファニング・ショット六連発が瞬く間に命を奪う。

彼も人間の身であればアーカムに住まう者であり、戦いに身を置く者。その実力の一端を垣間見せた瞬間であった。

「さっさと引き上げよう。新たな追手が来ないとも限らん」

「同感だね。ガーニーに小さくて火力のあるものはあるかい？」

「小さくはないが」

ルーフの上を親指でさす。おそらく現在において最強クラスであろう五〇口径重機関銃M2が装甲銃塔と一緒になっている。アーカム名物の重火力警邏車両だ。およそ都市の治安維持とは大きくかけ離れた火力は、アーカムの異常性の濃い犯罪者たちの畏怖を集める。重火力と重装甲を両立するための大出力機関の唸りを聞けば、イギリス本土からのおのぼりさんなど瞬く間に震えあがるはずだ。

ヘンリエッタはフレデリカを警邏車両の後部座席に押し込むと、自分は軽快に装甲銃塔へと駆け上がる。強力な短機関銃でもあれば御の字、と考えていたが銃塔搭載の重機関銃は予想の斜め上だった。

「準備万端！ いつでも出してくれ」

「しっかりつかまれ！」

爆音に等しい機関の駆動音、タイヤのゴムが路面にこびりつくほどの回転。運動神経やバランス感覚に自信はあったが、思わずふらつくほどの衝撃と共に発進した。

同時に通り過ぎた交差点から二台のガーニーが躍り出てきた。あちらも負けじと言わんばかりに大型で、ルーフに機関駆動方式の三〇口径ガトリング機関銃を載せている。毎分二〇〇〇発ものハイ・サイクルで人間など一瞬で挽肉にしてしまう。

M2にはすでに初弾が装填されていた。そのまま蹄状の発射レバーを押し込んだ。車載されていることに加えて、重銃身と高性能なマズル・ブレーキのおかげで連射は容易い。人を真つ二つにできる五〇口径重機関銃弾が毎分八〇〇発ものレートで続々と吐き出されていく。

一台が瞬く間に穴だらけになった。ボンネットに集中弾を食らい、一瞬で火を噴いて爆散する。

その間にもう一台がガトリングを撃ちかける。あわてて銃塔の装甲板に身を隠す。

凄まじい衝撃が来た。鉛玉の刃を使う挽肉製造機の魔手に装甲板は己を奮い立たせてくれている。いまもヘンリエッタの命を奪わんとする弾丸を、身体を張って食い止めている。

「ヘンリエッタ！ 応戦しろ！」

「無茶を言わないでおくれ」

伏せたまま銃塔を動かし、銃声だけを頼りに左右を合わせて、発射レバーを押し込んだ。そのまま銃口を上下に振るようしての盲撃ちにする。

それでもガトリングの掃射が終わってないのは、まだガーニーも射手も健在ということに他ならない。

そのとき下のほうから一発の銃声が出た。

フレデリカの一射だった。弾丸の発射ガスによる遊底の遅延機構を採用したホールレズ製製の『One In All』によるものだった。銃身を固定している関係上、精度は非常に高い。発射された45口径強装弾はガーニーのタイヤを撃ち抜いたらしい。そつと装甲板から顔を出せばバーストしたタイヤによって、ふらつくガーニーの姿が見えた。

そこを逃さずにM2の猛射を浴びせかける。およそ五〇発は撃ち込んだであろう。装甲も何もかも穴だらけになり、車体は見る影もなくなった。

「とりあえず片付けたかな」

「上出来だ。早いところ、ここを抜けちまおう。フレデリカ嬢が心配だからな」

「メイザースに診せれば、なんとかなるかもしれない」

「あの魔術師か。確かに一番確実ではある」

ガーニーは急加速する。アクセルを底まで踏み込んで、動力機関を最大稼働させる。頼もしい唸りと共にガーニーは戦域から遠ざかっていく。ヘンリエッタは車内へと身をひそめる。

早くしなければ――。

急がなければ――。

次の瞬間、左側からものすごい衝撃が来た。ガーニーは呆気なく横転した。

――こんなこと、前にもあつた気がする。

痛む頭を振り払いながら、のろのろとフレデリカは這い出した。

ガーニーは完全に天地を逆にして沈黙状態だ。ボンネットからは黒煙を噴いているし、タイヤのあたりから異臭を放つ液体が漏れ出している。

「うう……」

呻き声、聞き慣れた声――親友の声だ。

「ヘンリエッタ!?!」

すぐ近くにヘンリエッタが倒れていた。額を切ったのか、頬のあたりまで血を流している。頭を打った可能性がある以上、下手に動かすのは躊躇われた。

「ヘンリエッタ! 大丈夫ですか!?! ヘンリエッタ!!」

大声で名前を呼びかける。意識の有無だけでも確かめておきたかった。

「ふれ、で……りか?」

「はい、私のことわかりますか?」

「なんとか、ね」

急に影が差す。周りは急に灼熱と化した。思わず振り返った。

メルカバだ。髑髏を模した頭部、その虚ろな眼窩に宿る赤い光と目が合った。

頭部の機関砲がゆっくりと回りだした。口径三〇ミリ、ガトリング方式の破壊の権化が向けられているだけではなく、今すぐにも掃射を始めんばかりに稼働し始めている。

——逃げられない。

——逃げられたとしても。

——ヘンリエッタが、死ぬ。

絶望的だ。無力な自分に、圧倒的暴力が突き付けられている。

見捨てて逃げ出すか、無駄な抵抗をするか。そのどちらにしても血は免れない。

だが諦めたくなかった。

周りはすでに産毛が焦げ付くほどの灼熱に覆われ、唇がひび割れていく感覚を覚える。

それでも立ち上がる。せめて意志だけでも、前を向こうと、屈せずに立ち上がると決めた。

——黄金の双眸は、ついに応えた。

いたって無機質に、頭に直接響く声。

——更新完了。

——上位存在へと昇華処理完了。

——新たな世界へ、ようこそ。

総身に力がみなぎる。帰ってきた、そう確信した。瞳には輝く玉虫色の光が宿っている。

——おかえり。

そのまま——右手を前に突き出した。



「冗談だろ……」

一斉にこちらを向いた大口徑火砲の群れに、思わず頬がひきつった。

メルカバの頭部に搭載されている三〇ミリ機関砲とはわけが違う。口径一〇〇ミリともなれば大型の重装甲兵器すら粉々になる。こんなものを設置できるのは基地や要塞といった施設だが、あのフューリアスは飛行している。今もサイファアの頭上に浮かんでいる。空飛ぶ要塞というわけだ。

砲が一斉に火を噴く。もはや絨毯爆撃に等しかった。

圧倒的火力の塊に野太刀を抜き放って対応した。武骨ながらも、流麗な円弧を描く刃が鞘鳴りを立てる。

にわかにならんと一刀を掲げたかと思いきや、それをくるりと一転させて真下を向かせた。刃に漆黒に染まるどころか、どす黒い瘴気を噴き上げ始める。

「——ふんッ！」

裂帛の気合と同時に野太刀を突き刺した瞬間、何もかもが打ち震えた。サイファアを中心に生じた衝撃波ははるか上空まで達し、空間すら打ち震えさせる。砲弾はすべて信管を揺さぶられて誘爆した。

その爆炎を隠れ蓑にサイファアは跳んだ。

近くにあった、より背の高い建造物の壁を蹴ってフューリアスへとめがけていく。野太刀を漆黒に染めたまま一線を見舞う。数百メートル超の船体すら両断する勢いであつたが、刃が通り抜けた後には斬線の一つもありはしない。

「斬つたそばから現実改変で即修復か。笑えないな」

そのまま間髪入れずに野太刀を装甲に突き立てる。それを支えにサイファアはフューリアスに張り付いた。片手で『Howler In The Moon』を抜く。全長六〇〇ミリを超す巨銃を難なく構えると、引き金を容赦なく引いた。

空力特性を考慮した流線型の船体に火球が明滅する。ホーレス謹製の徹甲焼夷弾に

よるものだった。それでも効果なしと認識すると、シリンダー輪胴内の弾丸二十四発分を撃ち切り、新たな弾丸を取り出した。ある形に成型した炸薬による爆発で生んだ圧力で、音速の数十倍にまで達した液化化金属の奔流で装甲を貫通する代物だ。ホールズ特製のそれは数千度もの高熱すら付加されているらしく、少し前の下層での仕事で使つてからお気に入りとなつていた。

その弾丸に己の権能を染み込ませる。森羅万象を砕くことを許された絶対なる権能を。

二十四発を一瞬で装填し終え、容赦なく砲撃に等しい銃火を浴びせる。着弾の度にどす黒い火球が散り、フューリアスの装甲を食い破つていく。見るも無残な射入孔はなかなか塞がっていかない。

「多少は効果ありか。多少は念を入れてやった弾丸だ、すぐに直られても困るが……」
ジョンは大丈夫かね。アレに心配は無用な気もするけど」

いまだ熱波を噴き上げるメルカバに踏みつぶされたジョン・ドウ。いくら不死身と言えど踏みつぶされたうえで焼かれ続ければ、如何ともしがたいはずだ。熱による焼却が再生速度を上回れば、細胞全てを焼き尽くされて死ぬはずだ。

しかし、その程度で死ぬようなレベルでは新大陸最強の荒事屋などという称号などふさわしくない。

すぐにも復活するはずだ——そう思った矢先だ。

メルカバの巨体が浮き上がった。ちょうどジョンを踏み潰した脚から、上空へと打ち上げられる。それを成し遂げたのは蠢く肉色の触手だ。一瞬で周囲の建造物と同じ高さまで伸びあがり、メルカバを足元からすくい上げる。後頭部から転ぶ形でメルカバは倒れた。

サイファーはようやくジョンの姿を認めることができた——だが、あまりにも違い過ぎる。左半身がようやく人型を保っている有様で、残りはほとんど不定形と化した蠢く肉塊だった。

「ちよつとブチキレたぜエ……」

やっと人間の顔を保っている左半分に凄まじい獣の笑みを浮かべた。肉塊は一気に質量と体積を増価させ、一本の腕を形作る。それは、まさしく、正しく巨人の腕だった。巨人の手のひらは天を向き、五指はいつぱいに開かれる。手のひらを割り裂いて、迫り出してくるものがあつた。

血に塗れながら現れたのは骨だった。それも鋭く尖り、刃すら有した長刀であつた。腕は五メートル近く、長刀は実に十メートル近い。ゆっくりと一刀を振りかぶっている。

メルカバも応じた。どこからともなく大剣を握ると同じように振りかぶる。

鋼鉄と骨がぶつかり合った。衝撃は甚大。周辺の建物は揺れ、内側から爆破されたようにガラスが吹き飛んでいく。

「なるほど新大陸最強もうなずける」

サイファーはジョンの変化、その原因を見抜いていた。おそらくは地上の物理法則では為しえないレベルの細胞再生、または細胞分裂の異常促進による一種の暴走状態だ。本来であれば無秩序に増殖し、制御など利かないはずの現象に一定の方向性と制御を為しているのは経験の為せる技か。

少なくとも骨をあのように変形させるのは尋常ではない。おそらく筋肉、骨、神経のみならず自分の身体であれば意のままにできるはずだ。驚異的ではあるが、自分との戦いの中で使わなかったことが引つかかる。だが、それは今は捨て置くことにした。

「こっちは大丈夫だア！ そっちのデカブツを頼むぞオ！」

「言われなくとも！」

己の“力”を渦巻かせる。

己の“力”を膨れ上がらせる。

己の“力”を解き放つ。

すべてを砕かんとする己が“力”を鎧で押さえつける。巡らせて、機能を開放するための動力とする。

「拘束鎧——展開」

サイファアの巨軀を幾多の腕が包み込んでいく。黒い闇で構成された、森羅万象を砕くことを許された破壊の権化に包まれる。だが彼は消え去らない。毒をもつ生物が、己の毒で死ぬ道理がないように。

闇は膨れ上がって、球体上に変わる。はたから見ればヴェンタブラックの球体が、重力を無視して張り付いている光景が拝めるだろう。

球体がはじけ飛ぶ。おそらくロンドン中の誰もが背筋に悪寒を感じたに違いない。水面の波紋めいて広がった「力」の波動に中^あてられて。

実用性を一切排したような鋭角的衣装の重量鎧に包まれた。背中の巨大で鈍重な金属の翼が広がっていく。顔を覆う兜で赫く輝く三つの瞳が燃え上がる。

「行くぜ」

サイファアは飛んだ。翼を広げ、背部の噴射口からどす黒い炎を噴射する。速度、機動性ともにブレード・オルカを大きく凌駕する性能を見せつけながら、サイファアはメルカバの上空へと向かっていく。

汎用無線伴機——全機起動

拘束鎧の背部——ちょうど脊椎の真上に当たる部分が規則正しく屹立するや、サイファアの周囲を随伴するように飛行する。まるで柄だけの剣が飛んでいるよう——

や漆黒の刀身が生成された今、彼の周りを八つの大剣が浮遊していることになる。

メルカバの上空に陣取った瞬間、対空砲火の雨霰で洗礼を受ける。口径二〇ミリから三〇ミリまでの、およそ人間相手に使うにはバカげているほどの大口徑。食らえば欠片も残らず粉微塵となって吹き飛ぶであろう。

だが砲弾はヴェンタブラックの大剣が翻り、宙を舞って、迫る砲弾を斬り落とす。

「うおっと」

巨大な三連砲塔がゆっくりと回り、照準を定める。

三八センチ三連装砲が火を噴いた。同じ戦艦を沈めるための圧倒的火力が、サイファア個人に対して振るわれる。おそらくフューリアスの上部は海戦用の兵装で占められているのだろう。下部は対地用の機関砲で占められており、着水する前に機内へと格納されるのだろう。

「フィッシャーめ、なかなか良くできています」

すんでのところでバレル・ロール。おそらく砲弾は表面にイリジラス鋼のコーティングをされているはずだ。炸薬で死ぬような身ではないが、その莫大な運動エネルギーをイリジラス鋼に乗せられると一気に致命の一撃と化す。

「射撃兵装——撃ちかた始め」

周囲を飛びまわる汎用無線伴機の刃が消え失せたかと思うと、一斉にフューリアスの

ほうを向く。サイファアの脳と意思による命令によつて機能を開放。暗黒を先端に渦巻かせたかと思いきや、闇が一条の筋となつてフューリアスを貫いていく。

まるで型抜きでもしたように闇が通つた後は跡形もない。遅れて爆炎がそこから噴き上がっていく。

五〇〇メートルを超えるフューリアスの巨大な船体が揺らぐ。

さらなる射撃を重ねる。その度に船体は揺らぎ、墜落への運命を進みだす——ように思えた。爆炎を上げて装甲に穴が開こうとも、瞬時に損傷は復元され安定した飛行体制を取り戻す。

「砲撃せよ」

サイファアの射撃アーマメント・シューター兵装ではない、実弾による砲撃が飛んできた。

磨き抜かれ、眩く銀に輝く中世めいた騎士鎧は背中より圧縮蒸気を噴射して浮遊していた。胸部と腕部に内蔵された砲撃兵装を展開し、砲口からは色濃い砲煙が立ち上つている。その手の突撃槍は穂先に並ぶスパイクが高压蒸気の力で快音すら立てるほどの高速回転を行つていた。

アルトリウス・キャツスルダイン——殲滅騎士と呼ばれる己のすべてを鋼に置き換えてしまった男だった。頭脳代わりの歯車の集合体に記憶も意思も引き継がせただけの、単なる戦闘機械が顕現した。

兜の呼吸口から廃棄を盛大に吐き出すや、突撃槍を構えて突貫の姿勢をとる。

背中の噴射口から莫大な圧縮蒸気を噴射してアルトリウスは突撃する。ただ一振りの槍となって、ただ一発の弾丸と化して、突撃するのだ。

――炸裂。

――衝撃。

――激震。

幾度となく船体を揺るがされ、装甲を貫かれたとしてもフューリアスは揺るがない。いかなる力の影響か、この空中要塞艦は三次元上の変化で落ちることはないのだろう。もはや物理法則は通用しない。サイファアの黒き権能も、殲滅騎士の機関内蔵突撃槍も、この艦を落とすには頼りなさすぎる。

「どけ、アルトリウス」

「黙れ、世を砕くことしかできぬ^{フリークス}化物め！」

サイファアは構わず一刀を抜いた。漆黒の権能に染まり切った禍々しい野太刀は、鞘から解き放たれて牙をむいたように見える。

『さすが、それはマズいかな』

一刀に込められた力を危惧したのか、対空砲は一斉にサイファアのほうを照準した。一斉掃射によって弾幕はもはや壁となってサイファアへと迫る。

汎用無線伴機は再度刀身を形成した。高速回転しながら迫りくる弾丸を迎撃する。そのままサイファーはおよそ飛行に使うとは思えない翼を広げ、背部の噴射口を吹かし始める。

ついに主砲すら駆動した。人間台の標的に使うには、あまりにも合わない巨砲が照準を終える。

『拡散砲弾、装填！』

——砲撃！

三八センチ三連装砲が放ったのは拡散した放たれる無数の砲弾。その数は実に百を超えた。館内に組み込まれた碩学機関計算装置によつて設定された時限式信管によつて、ちやうどサイファーの周辺で一気に炸裂する。砲弾の内部にはイリジラス鋼製の小さな鉄球が一発につき1000近く仕込まれている。

対サイファー用装備として用意させておいたものだった。短い一生の中でもすべてをささげるほどに敬愛した師のアドバイスで用意させたものだった。戦艦用主砲から放たれる拡散砲弾など荒唐無稽と思つてはいたが、この艦相手に近接戦を挑んでくるような相手には役立つ。今、この瞬間のように。

間違いなく勝利を確信した。たとえサイファーではなく殲滅騎士であつても無事では済まないだけの規模だ。イリジラス鋼という対化物用の金属を用いなかったとして

も、ほとんど生物種は呆気なく死ぬのだ。全方位より迫る一万以上に及ぶ逃げ場など完全でない殺戮領域キリングゾーンに囚われて散るのだ。

——だから気づくことなかった。

——爆炎を真つ二つにして迫る。

——漆黒の剣戟が飛んできたことにも。

三八センチ三連装砲を一閃する。袈裟掛けというべきか、斜めに切られた砲塔は鏡のごとき断面を見せながらズレていく。少し遅れてから一気に大爆発した。

「あの程度でこの拘束鎧が砕けるかよ。一応は鎧だからな、イリジアス鋼対策だつて万全なのさ」

尖った籠手の指先で胸部装甲を弾く。甲高い音が鳴った。

サイファー・アンダーソンはまだ健在であった。鎧にも兜にも傷一つ存在しない。何もかもが揺らがぬまま、彼はそこに顕現するのだ。

抜き放ったままの一刀を霞の構えにして、フューリアスを見つめる。斬り捨てた砲塔は復活しない。サイファーの力が上回ったことを証明した瞬間だった。

「このくらい出力で行けるか。なら大規模兵装は使わなくても大丈夫だな。ジョンのほうは大丈夫かね」

地上に目を向ければジョンはさらに異形へと変化していた。再生能力の過剰促進に

よって身体が四分の三以上が原型を留めぬ蠢く肉塊と化していた。そのおぞましきは蕃神や幻想生物を超えるほど。波打つ表面がひときわ盛り上がると、突き破るように真つ赤な職種が飛び出てくるやメルカバをきつく縛り上げる。堅牢なる鋼鉄の装甲が悲鳴を上げるほどに締まった瞬間、触手の色は一気にどす黒く変わって硬質化した。

おそらく触手には血がべつとりと塗つてあつたに違いない。おそらく鉄分の含有度は常人と比べて比べ物にならないはずだ。酸素と急速に反応して表層の血液が硬化したことでメルカバは完全に拘束された。触手はその柔らかさに反して、ほとんどが筋肉で構成されている。ジョンの怪力と再生能力を考えれば千切られる可能性は低い。

巨大化させた腕に骨の長刀はない。だが腕は幾多にも枝分かかれし始め、先端からは鋭い骨の刃が生え出てくる。

メルカバにさらなる抵抗を許さんとはばかりに骨の牙は歩行脚に食い込み、その関節を壊しにかかる。綿密に設計された関節構造を、それを稼働させる動力を供給する蒸気管も、狂った不死身の男は容赦なく砕いていく。

メルカバはついに点灯した。さすがに倒れる重量までは支えきれなかったのか、あえて離れたのか定かではないがメルカバは触手の拘束から逃れた。

『——ッ！』

まだ動ける部分の関節が擦り合わされ、軋み合つて耳障りな音を立てる。温度変化を

意のままとする権能が機関からの動力で駆動する。熱波と冷気の複合がジョンを襲った。手始めに熱波が降りかかって細胞を残らず焼き尽くし、続く冷気が骨の髄まで凍り付かせる。

それでもジョンは止まらない。凍り付いた身体をひび割れさせながらも、じわじわと追い詰めていく。

だがメルカバは新たななる獲物を見つけたのだ。自由にならぬ歩行脚で這いずるように標的へと迫っていく。その狙いを定めると頭部の機関砲をめつたらに撃ちまくった。一台のガーニーが横転したのが見えた。這い出してきた影に見覚えがあった。

黄金をそのまま紡いだような金髪を空色のリボンで括り、黒を基調にしたコートとコルセット・スカート。その眩むほどの美貌を持つ少女としか思えない彼女の名を、サイファーは知っていた。彼女がどういう人間であることも、共に過ごした捨てがたいほどの時間から。

「……フレデリカ」

迫る危機に噴射口を吹かしていたのは無意識か。鋼の翼を広げて、サイファーは急行する。

Crush 力を以て淑女よ巨人を討て

機関砲がついに火を噴いた。

双眸に宿った玉虫色の光は虹彩の奥で煌めくだけに留まらず、さらに輝きを強めて現実を侵食していく。迫りくる破壊の砲弾に対し、フレデリカの権能が阻むべく干渉する。

目を疑う光景であつた。見えない壁が伸ばされた右手から広がって、砲弾を宙で止めているように見えた。砲弾はライフリングによつて与えられた回転運動を、阻まれてもなお続けているが先に進むことは一切ない。

手を下ろした瞬間、砲弾は一斉に力なく落ちた。双眸にはいまだに超常の権能を示す玉虫色の煌めきが宿っている。ホルスターから銃を抜いた。一挺だけではなく二挺両方を。ズシリとくる重さは感じなかつた。むしろ以前よりも軽くなつたように感じる。

手のひらから湧き上がる力が銃把を通して、銃身を経由して銃口まで達するのを感じる。弾倉内の弾丸も一発残らず満たされたはずだ。

メルカバの巨腕が持ち上がった。五指をいっばいに広げて、いまにも掴みかかつてきそうだった。

ぐつと膝を曲げて、腰を落としたのは跳躍のため。人間の脚力など、たかが知れている。迫るメルカバの手を飛んで避けることなどできるはずがない。

だが——フレデリカはできる。跳躍する。宙返りしながら身を翻し、高々と跳び上がる。その高度は実に五メートルにも達した。

「いきます」

そのままぐるぐると回るかと思つたフレデリカの身体はメルカバを見据える形でびたりと止まり、それに合わせて両手の二挺を構える。

二挺が火を噴いた。銃声というにはあまりにも大きい。腹の底から突き上げるような火薬の咆哮が響き渡り、銃口から躍り出た弾頭は装甲を食い破らんと迫る。たかが拳銃弾と言えど、さきほど異能を注がれた代物だ。おそらくは超常の理ことわりに則つて、その威力を示すことになる。

その証拠に着弾した途端、対衝撃構造を含む最新鋭の複合装甲の表面は水面のように波打つた。のどかで波一つない湖に、一石を投じたようだった。波紋が戻つた瞬間、装甲表面で強烈な衝撃波が炸裂した。着弾位置を中心に半径五〇センチ、深さ一〇センチもの凹みが生じる。

その衝撃を食らつて揺らぐずに立っていられるわけがなかった。メルカバは大きくのけ反るような形で、近くにあつたレンガとモルタル造りのビルに倒れ込んだ。

頭部の目に当たる部分が赫く輝く超常の光を持ち始めた。

周囲の温度が劇的に上がったかと思えば、周囲はキラキラと輝きを持ち始める。超常の力による温度操作は熱帯並みの温度の中にダイヤモンド・ダストを生じさせる異常環境を生み始めた。

重力を無視したようにフレデリカは横転したガーニーへと降り立った。

「ヘンリエッタ、ワイアットさん……目覚めて」

頭から流血するヘンリエッタ、時折呻くものの意識はないワイアット。二人の額に手をかざす。

黄金の双眸、その奥で玉虫色の超常の光が煌めいたのをフレデリカは感じていた。二人ともそろって軽く呻いて目を覚ました。ヘンリエッタの傷も血に濡れてはいるが塞がっている。清潔な布でぬぐい取れば、元の傷一つない額が現れるはずだ。

「立てますか？」

二人に手を差し出す。少し前までの自分なら逆に差し出される側だった。仮に手を握ったとしても、起こせるかどうか。

きつと二人とも浮き上がるような感覚を覚えたはずだ。気づいたら立たされていた、というほうが近いかもしれない。目覚めたばかりで、浮遊感と共に立たされる。そろって目を丸くしていた。

「ああ、なんとかね。しかし、不思議な気分だな」

「君の身に何があったのかはわからんが、それで俺たちの身が守られているのは事実だな」

「急いでここから離れないと、またメルカバが動き出すかもしれません」

「……もう動き出しているみたいだ」

肌が灼ける。唇が瑞々しさを失っていく。身体の外側は熱波にあてられて、急速に乾いていく。それとは裏腹に息を吸えば、冷徹と言わざるを得ない冷たさが気管を通して体内を凍てつかせていく。

物理的な温度変化でこうはなるまい。確実に幻想の、超常の力が介在した熱波と冷気の合わせ技だ。

ついさつき超常の力を昇華させたフレデリカなら耐えられるはずだ。乾いて、ヒビ割れつつあった唇も指で一撫ですれば元の瑞々しい色を取り戻す。

だがヘンリエッタとワイアットにとっては、堪らぬほどの脅威だ。ただ熱いだけであれば、冷たいだけであれば、耐えようもあるだろう。だが外は熱されて、内を凍らされる。超常的温度攻撃に只人の肉体は悲鳴を上げる。今にも膝から崩れ落ちそうなほど体力を奪われていく。メルカバは倒れた体を起こしつつある現状、すぐにでもここから離れるべきだろう。だが脚はあり得ないほど重く感じる。体力の消耗が甚大すぎた。

「早すぎる……」

足止め。

フレデリカの両手にある二挺、その銃口から権能を込められた弾丸がまた撃ち出される。四五口径と九ミリ弾はその軽さにあるまじき安定した水平弾道を描いて飛ぶ。炸裂すれば、メルカバの装甲は凹んで損傷する。そのはずだった。

呆気ないほど弾頭は装甲を貫くことも、凹ませることもなく、無残にへしゃげて落ちる。

「効かない!？」

しかし原因はすぐにわかった。メルカバの胸部にある動力源となる数式機関からのエネルギーが増しているのを、黄金の双眸は見事に解析して見せた。今も薄ぼんやりとした力のラインがメルカバの全身を、まるで血管か何かのように巡っているのがよくわかる。

まだ完全に起き上がってはいないものの、頭部だけこちらに向けて機関砲を掃射してきた。

“力”を左手にかき集めるようにイメージを結び、手を一気に薙ぎ払うようにして振るう。爆風とも斥力とも言えぬ衝撃波が三〇ミリ機関砲弾を蹴散らして、弾道を逸らさせていく。

びりりとした痺れを感じる。砲弾にも強まった超常の力が込められていた。その破壊力は腕に込めた「力」を食い破って、行使したフレデリカの手に反動としてぶつかった。今も打ち身に似た鈍痛が肩のあたりまで走る。

その痺れも振り払って『Song For Fog』を展開した。刃鎖が複雑に絡み合って、巨大な刃を形成する。

柄となつている銃身を握る手に力を込め、乾坤一擲の一閃。展開したばかりの刃は数百に及ぶ刃鎖へと戻り、メルカバの機体を斬り付けつつ縛り上げる。巨大な機体の動きを封じ込めていられるのは力の増した自分なのか、それとも『Song For Fog』と一体化させられた刃鎖の力であるかはわからない。

しかし、はつきりとわかることは一つだけ。ここで時間を稼がねば二人が死ぬ。

さらなる上の「力」に目覚めたとはいえ、メルカバを縛り続けるのは厳しい。『Song For Fog』だけではなく自分の身体もきしみ始めているのを嫌でも感じてしまう。

「ちよつと……おとなしくしてて、くれませんか？」

ぎりり、と奥歯を噛み締める。少しでも気を抜けば、きつと紙屑か何かのように振り回されるビジョンが浮かんでしまう。そうはさせまいと総身の力を以て踏ん張りを利かせるも、じわりじわりと引き摺られていく。

メルカバに漆黒の剣がいくつも突き刺さった。黒き破壊の権能で形作られた、混沌の権化ともいえる魔剣であった。それは物質の刃を持たぬ、純粹なる黒き権能で編まれた虚像の剣でもあった。

その近くに彼がいるのにフレデリカは気づいた。

すべてを壊しかねない絶大なる破壊の権能を抑え込むための鎧をまとい、サイファー・アンダーソンは赫く輝く三眼でメルカバを上空より睥睨していた。漆黒に染まった野太刀、その切っ先が向けられる。おそらくサイファーが一閃すれば距離などお構いなしに、メルカバの装甲は空間ごと纏めて切断される。

「悪い、遅くなったな」

「かなり危なかったですよ」

「その分、埋め合わせはしてやるとも」

直後に袈裟掛け一閃。装甲やフレームごとメルカバは切り裂かれたかに見えた。だがメルカバは依然と捨て漆黒の剣に縫い留められながらも、健在のままである。動力源となつている数式機関の力による現実干渉の仕業としか説明のしようがなかった。

数式機関は幻想の力を生産する。目の前で浮かぶ、先ほど自分を斬りつけた存在に対抗するために。生まれ出でた幻想は超常の力となり、現実を覆す。物理法則を凌駕した熱波と寒気の嵐が吹き荒れようとしていた。

「思った以上にやるな。コイツはヘンリエッタとワイアットには、ちよつとキツイものがある」

左手を一振りすると剣は瞬く間にサイファアの周辺に戻る。そのまま漆黒に染まった野太刀を一振りすると、超常の温度は風に吹き散らされる雲のように無力化される。

その瞬間を見逃さずにサイファアは身を翻す。羽ばたくには重すぎる鋼鉄の翼を広げ、背部の噴射口はどす黒い推進炎を盛大に放つ。一陣の風が吹き荒れたときには三人の姿はなかった。ヘンリエッタとワイアットを左手で掴み、フレデリカを右手の内に抱えて、サイファアはその場を離脱していたのだ。

「遅れてすまん。デカブツの相手に手間取った」

「死ぬかと思ったよ」

「俺たちとフレデリカ嬢の扱いに差を感じるのには気のせいかな？」

「気にするな。問題は懸念として挙がるから問題なのさ」

「その考えはダメだと思うんですけど……」

「そんなことより、あちらさんは完全に復活。空には巨大機動要塞の最新型。下手をすればロンドンが灰になりかねない」

「メイザースがいるとしても、防戦一方ではジリ貧だ。いるんだろう？　メイザース」
突然嵐のような風が吹いた。どこからともなく舞ってきたのは数多の紙だ。

いや、紙ではなかった。それは本のページだった。その内容を少しでも目にしようと試みるだけで、凄まじいほどの嫌悪感とこみ上げる吐き気を覚える。およそ現実の理を侵す冒瀆なる魔の知識をしたためた特級の魔導書であることに気づいたのはヘンリエッタだけであった。

ページの塊は柱状に変わり、弾け飛んだ。オールバックに撫で付けた金髪、長身瘦躯の杖を持った男。紛れもなくマクレガー・メイザースであった。

「女王陛下のお傍にいない方がいいのか？」

「そちらにもいる。私にぬかりはない」

「得意の分身か。魔術とは便利なもんだな」

「私には、お前の力のほうが便利に見えるがね」

「悪いが出力がデカすぎて、使うのもおっかなびつくりなんだ。コイツがないと息をすけるのも厳しいくらいなんだぞ?」

鎧の胸部装甲を指で弾く。金属と金属のぶつかり合う小気味いい音がした。その頑強さを示すような素振りとは裏腹に、関節部は今も現在進行形で軋むような音が続いている。

おそらくは抗っているのか。サイファー・アンダーソンの振るう外なる権能、森羅万象を砕く力が開放を望んでいることの表れだろう。際限なくあふれ出し、一切を漆黒に

染め上げて無に塗りつぶさんと暴れ狂っている。それを押さえつける鎧がいかなる碩学によって生み出されたのか。いずれにせよ人知を超えた超常の代物であることは明白であった。

「クソツタレ、あの機械人形固すぎるんだがア？」

ジョンが近くの建物に降り立った。跳躍を繰り返してか、あるいは一回で来たのかはわからないが、歩いてきたわけはなさそうだ。

「兵器王自ら設計した近年まれにみる大英帝国そのものと言っていい代物だ。簡単に壊せるわけないだろうよ」

「おまけに空には、それ以上と言っていい兵器が一隻。さて、どう戦う？」

サイファー、メイザース、ジョン・ドウ。おそらく世界で三本の指に入る超人たちがそろい踏みであった。いかにしてメルカバとフューリアスを相手取るか。その算段を立てているのだ。

「メルカバは私が叩こうと思います」

「大丈夫か？ その力、目覚めたばかりだろう」

「練習がてらに相手できる程度、には余裕がありますよ。信じてください」

フレデリカに連れ立ってヘンリエッタとワイアットも名乗り出る。

「なら親友の私が黙っているわけにはいかないな」

「お嬢さん二人に任せているのでは男が廃る」

メイザースが一步前に出た。

「あの超常の兵器に、只人二人では荷が重かろうよ。私の力を貸そう」

「お、魔術卿自ら出陣か」

「とはいえ分身だ。出せる力は限られるが、メルカバの熱波と冷氣ならどうにかできるだろう。そちらは二人だけで大丈夫か？」

「心配するな。実質もう一人いるようなものだ」

指さした先には上空でフューリアス相手に火線を張り、唸りを上げて穂先を回転させる機関突撃槍で突撃を変えるアルトリウスの姿がある。生身のすべてを捨てた鋼鉄の騎士は、思考パターンすべてをプリセットされた演算装置によって行動する。生身だった頃の彼と寸分たがわぬほどの精密さで。

おそらく自分以外の化け物を殲滅するか、教会からの命令がない限り彼は止まらないはずだ。

「巻き込まれないように気をつけるべきだな」

「おっと、お喋りはここまで。僕とジョンで空飛ぶデカブツを叩くことにしよう」

メルカバが近くの建物をもぎ取るのが見えた。カートゥーン向けのコミックや小説でも、あまり見ないような現実離れた光景に緊張が走る。サイファーは抱えていた三

人を素早く下ろし、代わりにジョンの襟首をつかんだ。「おい、テメエ」という抗議の声は聞かなかったことにする。

「さて、全員くれぐれも死なないように。では解散」

ぶん投げられた瓦礫は誰も潰すことはなかった。

サイファーは一直線に上空のフューリアスへと飛んでいった。



蒸気機関が駆動する。生み出されたパワーはシャフトを通じたのちにトランス・ミツシオンでタイヤに伝わる。三人がかりで無事だった蒸気自動車ガール自動車を起こし、メルカバへと向かうべく乗り込んだ。最新式の五速トランス・ミツシオンをさらに高速ギアへとぶち込むと、ワイアットはさらにアクセルを踏み込んだ。アーカムで広く流通するガーニール蒸気機関を改造した警察車両は五〇〇馬力を超える。

そのパワーを舗装路も悪路も構わず進む極太のタイヤに伝えるのだから、ガーニールはぐんぐんと進んでいく。

「装甲銃塔はどうなっている？」

「動かないな。駆動部分に変形して回らない」

「機関銃もダメみたいですね……銃身が曲がっています。機関部レシーバーも歪んで、トリガーのレバーもなくなっています」

「まったくダメだな。どのみち、あの化け物には役に立たんだろうが」

フレデリカは車内から装甲銃塔に出ると『Song For Fog』を展開。刃が銃床の形をとる射撃形態だ。膝立ちの姿勢を取って、銃口も視線もメルカバに向ける。

「二人とも、撃ちます」

「派手にやってくれ」

引き金に指をかけ、スコープを覗く。

「いきます」

引き金を引く。

薬室の弾丸に「力」はすでに込めた。飛翔した弾丸は玉虫色の軌跡を帯びていた。命中した瞬間、大口径カノン砲でも炸裂したような衝撃が一带を駆け抜ける。

もんどりうって転びそうになりながらも、メルカバは背面より圧縮蒸気を噴射して姿勢制御を行う。

間髪入れずの第二射が放たれる。今度はメルカバも倒れなかった。数式機関は出力をさらに上げて、フレデリカの攻撃に適応しつつあるのだ。

「どうもヤツは進化しているようだ。頼みの綱はフレデリカ嬢と魔術卿だが、あれの上

限がわからん以上、少々こちらが不利と言える」

「保安課はこれにどう対応するか、見解をぜひお聞きしたい気分だよ」

「サイファーに投げる」

「ああ、なんて最善の選択肢なんだ。涙が出てきそうだよ」

「もつと大きいのを試してみましよう」

『Song For Fog』の弾倉を抜き、さらに薬室の弾まで抜くと空砲を叩き込んだ。銃口に差し込んだのは直径一二〇ミリ、全長三〇〇ミリに及ぶ巨大小銃榴弾。ホールレス謹製のそれは『Flare The N' Kai』の名を持つ、内に焦熱の種を詰め込まれた破壊兵器であつた。

空砲の激発による圧力を受け、緩やかな放物線を描きながら円柱状の榴弾はメルカバの頭部に炸裂する。

派手な爆炎と衝撃波は付近の窓をことごとく粉碎し、メルカバの熱波を塗りつぶす勢いであたりを高熱が走り抜ける。

「近づけるのはここまでだな。ここからは分かれるべきだろう」

「なら私とフレデリカで近づこう」

「であれば、これを持っていけ」

メイザースが銀の鎖を渡す。その輝きが素材由来のものではないと、ここにいる誰も

が本能的に察した。魔術卿の名を冠する男が自ら力を込めた護符アミュレットであることは疑いようもない。

「君も魔道の力を使う者であれば、これの力を十分に生かせるだろう。メルカバの動力機関より、よつぽど有用なはずだ」

「魔術卿自ら呪いまじなを込めた護符アミュレットか……恥じない活躍を強いられる気分だね」

「そう気負うことはありませんよ。私だつて頑張りますから」

「なんとも嬉しいことを言ってくれるじゃないか」

親愛のハグがフレデリカを襲う。久しぶりのスキンシップだった。大学時代ではよくされた覚えがあつたが、宗津行と同時に別れてからは当たり前だがそういうこともなかった。

「ほんとうに優しいな君は。この柔らかい身体の半分は、きつと優しきで出来ているんだろうね」

「そんな変態みたいなこと言わないでください！ あとその言い方だと、まるで私が太つてみたいに聞こえるじゃないですか！」

「いや、太っているなんて一言も。お腹はなだらかだし、お尻も足も十分に締まっている。柔らかいと言っているのはね……」

「そ、そこは触らないでッ！ む、むむむ胸だけはダメですつてばー！」

「姦しくしている場合かね」

メイザースが諫めれば、フレデリカは直ちに解放された。大学時代では良くやられたことだ。胸まで手が及ぶことも多々ある。誰にも身体を許していないフレデリカの、ひとときわ目を引く胸乳の柔らかささと感触を手で味わって知っているのは、彼女の親友たるヘンリエッタ・ウエントワースのみだろう。

その度にフレデリカはヘンリエッタの胸に視線が行く。一七〇センチを超える女性にしては羨まれるほど高い身長に反して、その胸は大変に慎ましやかであった。確か東洋の諺に『隣の芝は青く見える』というものがあつた気がするが、ああいったスキンシップは自分の豊かな身体を羨んでのことか。事実、胸が大きい苦勞をこぼすたびに『……くっ』と呻いたり『ははは……』と力なく笑つたり。

なんとも対するような二人で、よく親友に慣れたものだどつくづく思つてしまう。学び舎で隣を歩く仲から、いまは背中を預けられる仲になつた。なら存分にメルカバにぶつけてやろうではないか。

「行きましょう、ヘンリエッタ」

「ああ、何か作戦はあるかい？」

聞かれて、フレデリカはもう一度メルカバを見据える。黄金の双眸はメルカバの情報をあらゆる観点から解析していく。兵器王フィッシャーですら予測がつかない領域ま

で達したメルカバのすべてを、一切の容赦を持ち合わせずに暴いていく。

——装甲は大口徑火砲の集中砲火を前提として設計。物理破壊は困難。

——数式機関の出力は最大出力。物理攻撃は完全無効。

——気体の破壊は幻想を以てしても困難と推測。

その結果はあまりにも絶望的。これに抗えるのは黒き破壊の権能を振りまくサイフアーだけか。強大なる幻想を振り回す不条理の塊にさえ、圧倒的に終焉の運命づけるあの男だけが。

だが、それでもフレデリカを止めるには足りない。足りなさすぎる。

両手に『All In One』と『One In All』の二挺を携えて、メルカバへと向ける。

「数式機関への動力供給をしているパイプをすべて壊すんです」

「数式機関を破壊するわけには……………いかないよね。何が起こるかわからない」

数式機関はいまだに原理不明の動力機関だ。アーカム由来の鉱石とダフィット・N・ヒルベルトの残した、重要な論理や原理を避けて書かれた製造書だけを頼りに作られている状態だ。かつては多くの老若男女を問わず様々な学者が解明に挑んだものの、そのほとんどが発狂ないし自殺という末路をたどっているいわくつきの動力機関だ。それでも、その有用性ゆえに今もなお使われているのだ。

そんなわからないことだらけの代物を破壊するのはリスクが大きい。ヘンリエッタの言った通り『何が起こるかわからない』のだから。

『フレデリカ嬢、ヘンリエッタ嬢。二人とも聞こえるか?』

「メイザースさん!? いったいどこから?」

「落ち着いて。ただの念話魔術だ。魔術卿メイザースなら、この程度お手の物さ」

『先ほどの話は把握させてもらった。素早く数式機関を無力化してくれば、後はこちらで停止処置を行える』

「それはありがたいことだ。動力供給を止めて、メルカバを止めたとしても数式機関が停止しているわけではないからね」

「今のメルカバは出力を最大まで上げている状態です。数式機関を切り離れたあと素早く停止処置をしないと、壊すのと同じくらいの大惨事になる可能性もあります」

『切り離すと同時に停止処置か。素早い連携を強いられるとは』

「即席のタッグだが、うまくやるしかないね。これは」

メルカバが頭部機関砲を照準する。三〇ミリというこの時代において最大口径と言える重機関砲弾が、照準の先にいる二人の女を粉碎せんと激発の瞬間を待ち構えている。

重機関砲が弾幕を張る。狙われれば最後、肉片の一つも残さないほど粉碎される。着

弾した石畳などは見る影もない、瓦礫の山に変わり果てていた。だがその中に肉片や鮮血は存在しない。

まるで逃した獲物を探すように、頭部を左右に振る。きよろきよろと見まわすようにどこか人間臭い所作だ。その機体の内に自立行動を行うための演算装置など、一切実装されていないというのに。

「ヘンリエッタ！ 合わせてッ！」

「はい、任されたッ！」

フレデリカとヘンリエッタは機関砲の発射と同時に左右へ分かかれ、建物を使って見事にメルカバの視界から逃れる。注意が完全に逸れた瞬間を狙って、建物を上って二挺での射撃を行うフレデリカと、脚部へ手投げナイフによる攻撃を敢行したヘンリエッタによる挟撃であった。

ヘンリエッタのナイフに刻まれたルーンが、メルカバの脚部関節を溶解させる。おそらくメイザースの護符が、その力を底上げしているのだろう。

間髪入れずに胸部へフレデリカの銃撃が叩き込まれる。"力"を帯びた弾丸は青白い稲妻を迸らせながら、着弾と同時にまばゆい光と共にスパークを炸裂させる。装甲板はたまたまはじけ飛んだ。

怯んだ気体の関節が擦れ合い、まるで悲鳴のように耳障りな音を立てた。

「見えました！ あれが数式機関です！」

ぼんやりと玉虫色の輝きを脈動するかのように揺らめかせる、鋼鉄の球体が姿を現した。動力供給を行うパイプ管は思ったより少ない。あれをすべて破壊した後、素早く数式機関を停止させる。共有されている作戦を、フレデリカもヘンリエッタも素早く反芻する。

『——ッ』

それはまるで咆哮だった。弱気捕食対象の反撃を食らい、尊厳を傷つけられた猛獣のようだった。紛れもなく、疑いようのない怒りの表れであった。関節を、装甲板を擦れ合わせて奏でた音は、まさしく怒りの表現であった。

両腕を地面に打ち下ろすさまはやり場のない怒りをぶつけているように見えて——
実際は凄まじい反撃の一手であった。

地面が文字通り波打った。直立二足歩行を行うためにメルカバの出力は、既存の機動兵器とは比べ物にならない。それを加味してもこの一撃は尋常ではなかった。周辺の建物は基礎工から粉碎され、あつという間に倒壊していく。

近くにいたヘンリエッタとフレデリカは宙を舞った。上空へと投げ出される中、メルカバへと向けて吹く猛風を頬で感じ取った。幻想から生まれた産物とは言え熱と冷気だ。応用すれば風の一つを生むことも不可能ではない。

吸い寄せられたのはフレデリカだけ。各個撃破——演算機関すら存在しないメルカバが下した決断であった。最も自分を倒し得る可能性が高い存在として、彼女をピック・アップしたのだ。

メルカバの大振りな巨拳は見事にフレデリカを捉えた。トン単位の鋼鉄が時速百数十キロという速さで叩き付けられたのだ。叩き潰された羽虫のようになる運命は避けられない。

だがフレデリカは違う。物理法則に縛られた矮小な領域から、高みの次元へと踏み越えたのだから。

紙屑のように宙を舞いながらも、その五体は損なわれない。肉片の一つも、血の一滴もないままレンガ造りの建物に激突する。

その刹那、レンガ造りの壁面は水面のように波打った。まるでフレデリカ自身が投げられた一石となったかの如く。

窓ガラスは外側へと弾け飛んだ。フレデリカはその真っ只中で着地したままだった。そこは壁だというのに、まるでここが地面だと言わんばかりだった。

見上げるような姿勢になって、黄金の双眸でメルカバを見据えた。二挺はその手になり。握るのは巨大な銃だ。七〇口径という破格の巨銃『Song For Fog』を携えて。

「ヘンリエッタ！」

「はい、まかされた！」

いかなる魔導を紡いだのか、ヘンリエッタの周辺に展開したスローイング・ダガーは投擲では為しえない機動でメルカバへ次々と殺到する。突き立った刹那に装甲板を變形させ、関節機構の動きを封じ込める。まるで溶けた鉄で固めたようだった。

露出した数式機関に照準を定めようとするフレデリカに、幻想の冷気が押し寄せる波のように迫る。

「そこまでだ」

ステッキで地面を一突き。それだけで澄み渡る青白い閃光が一带を染め上げた。魔術卿の振るった魔導の力はメルカバより放たれた冷気が孕む幻想をことごとく否定する。数式機関の生んだ幻想程度ではメイザースを傷つけるには及ばない。故に彼は魔術卿なのだ。大英帝国の要たる守り手の一人であった。

「アープ、狙いはわかっているな？」

「問題ない。当ててみせるとも」

高いビルの屋上でワイアットは土嚢を積んで狙撃態勢を整えていた。愛用の超長銃身のSAAに二脚を取り付け、土嚢に乗せての依託射撃であった。右手はがっちり銃把を握り込んだうえで引き金を引き切ったまま、左手の手のひらは倒れたままの撃鉄に

そえられていた。

その左手が霞む。迅雷、というべき神業の仰ぎ撃ちフアニング・ショットによつて弾丸はほとんど同時に撃たれたようなものだ。依託射撃による精度向上も合わせたそれはフアニング・スナイプでも言うべきだろう。

放たれた弾丸は六発。その全てにメイザースの魔術がこもっていた。撃ち込まれたのはメルカバの頭部機関砲と周辺のパイルと地面だ。込められた魔術が発動する。一面を凄まじい冷気が覆いつくした。メルカバが放っていたものとは比べ物にならない、大気中の水分のことごとくを凍てつかせる魔導の冷気であった。

「お膳立ては充分。一気に決めてくれ！」

ヘンリエッタの声にフレデリカは銃声で応える。メルカバの動きはもう止まったのだから、後は引き金を引くだけだ。円筒弾倉ドラム・マガジンに収められた二〇発もの七〇口径巨弾を撃ち尽くす勢いだった。

数式機関の周辺に撃ち込まれた巨弾は機関と機体を切り離しにかかる。修復させる間もない速さで執り行う。

着弾の度に揺れ、きしむ機体の音はまるで悲鳴のよう。最後の一発が撃ち込まれ、機関が転がり出た。

——ッ！

その声にならない機体の軋みは断末魔だったのか。

制御を失いかけた機関へメイザースがステッキを投じる。機関の中心に突き立った瞬間、激しい稲妻に似た光を放った後に完全沈黙した。

ヘンリエッタとメイザース、ワイアットによって固定されていた機体も雪崩れるように崩れ落ちる。

「……終わった、みたいですね」

「そのようだね。もうこんなデカブツは相手にしたくない」

地上に降り立ったフレデリカと、その場に崩れ落ちたヘンリエッタ。残るメイザースとワイアットにも安堵の空気が満ちてきた時だった。

メルカバの気体がゆっくりと持ち上がる。立ち上がるための動きではなかった。何か巨大な手によって吊り上げられているようで。

辺りを巨大な影が覆いつくそうとしていた。